

黙阿弥全集

第廿六巻

解説

明治十九年五月新富座で『夢物語盧生容畫』（渡邊華山と高野長英）が稿下上演された。その時長英の囚はれに就て聞き得た事柄を述べ、且つそれより變更すべき點を指示して、竹柴進三（後の竹柴其水）に宛てた手紙である。

昨夜金田參り長英の咄し出同人召捕の砌赤坂に居りくはしく存居り候長英青山百人町組屋舗の内に居り其砌小林藤二郎詮議を言つかり尋ね候へどもしれず赤坂の手先半七の工夫にて赤坂の劍術遣ひのばくち打吾市といふもの中構に成り居りいぜん長英と相牢にて世話になりしものこれをたのみ長英を見出し候はゞ構ひをゆるし明るい骸にしてやるといふ約束にて吾市が見出せしなり後構ひをゆるされはうびを貰ひしよし小林藤太郎は御金藏の賊と長英を召捕りし功により同心より吟味與力に出世せしとの事大詰ゆゑ堀越の顏出し度故幕際へ藤二郎にて出し左團次と掛合堀越幕をすると云ふ役に今日直し置被下明日內よゝいたし候都合に御座候

六日　　　　　　　　よし村

進三樣當用

右の內「金田」といふのは今の淺草仲見世の鳥屋金田の先代の主人金八さんのこと。「堀越」とあるのは九代目市川團十郎のこと、本姓を堀越と稱したからである。『夢物語』は本集第十九卷に收めてある。金田の金八さんのことに就ては拙著默阿彌詳傳に少しばかり書いておいた。作者がよし村と署名したのは、本姓を吉村と稱したからで、晩年河竹新七を讓つてからは、よし村と署名したのが可なりある。明治十九年であるから七十二歲の時のものである。

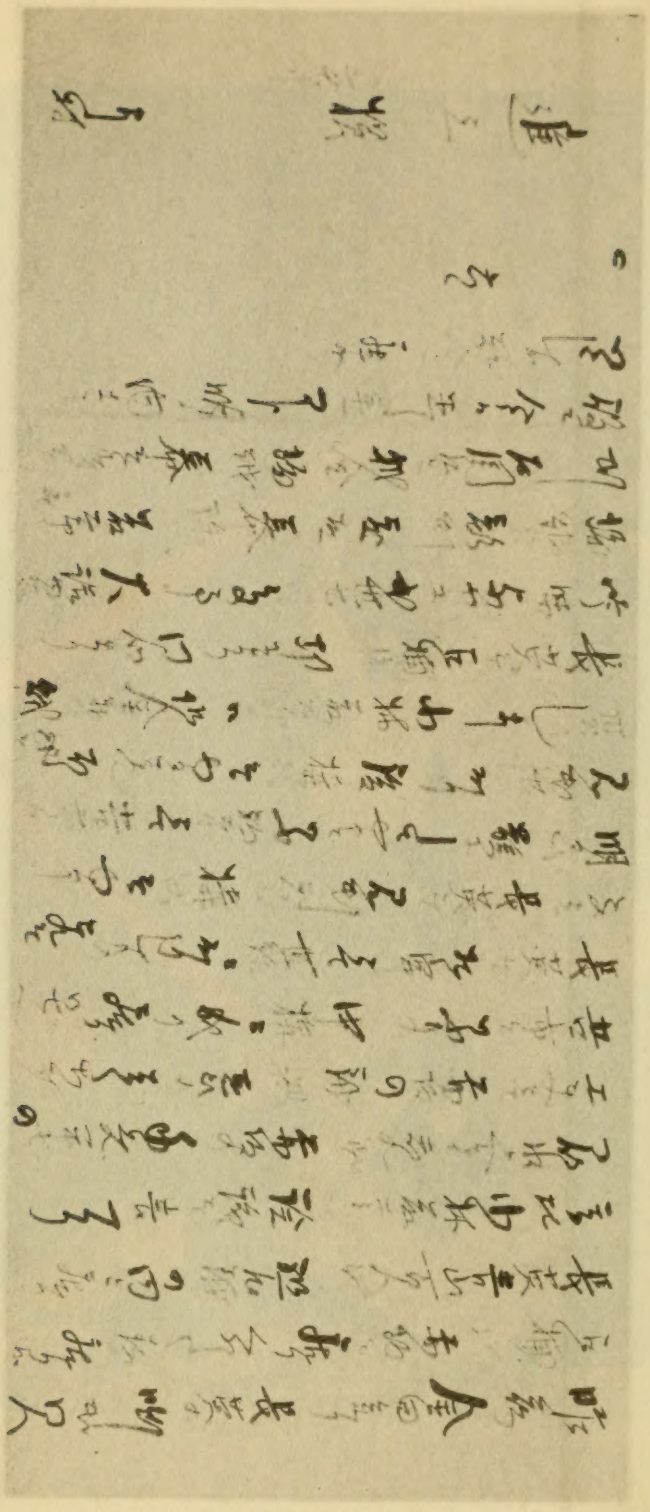
明治十九年五月新富座で『夢物語盧生容畫』（渡邊華山と高野長英）が稿下上演された。その時長英の因はれに就て聞き得た事柄を述べ、且しそれより變更すべき點を指示して、作者進三（後の作者其水）に說いた手紙である。

昨夜金田参り長英の噺し出同人召捕の儀赤坂に居りへはしく存居り候長英青山百人町組屋舗の內に居り其砌小林藤二郎蜜議を言しかり尋ね候へどもしれず赤坂の手先中七の工夫にて赤坂の隱術遣ひのおくた打吾市といふもの中藤に成り居りいせへ長英と相牢にて世話になりしものいたなたのゑ長英を見出し候はゞ補ひなのるし明るい幾にしてやるといふ約束にて吾市が見出せしなり後補ひなのるちればひびなを貫ひしてし小林藤太郎は御金藏の賊と長英を召捕りしにより同心より呼出し出世せしといふ事大詰の忘堀越の顔出し援故幕際へ藤二郎にて出し左團次と掛合堀越幕をするといふ役に今日直し置候下明日内よりいたし候都合に御座候

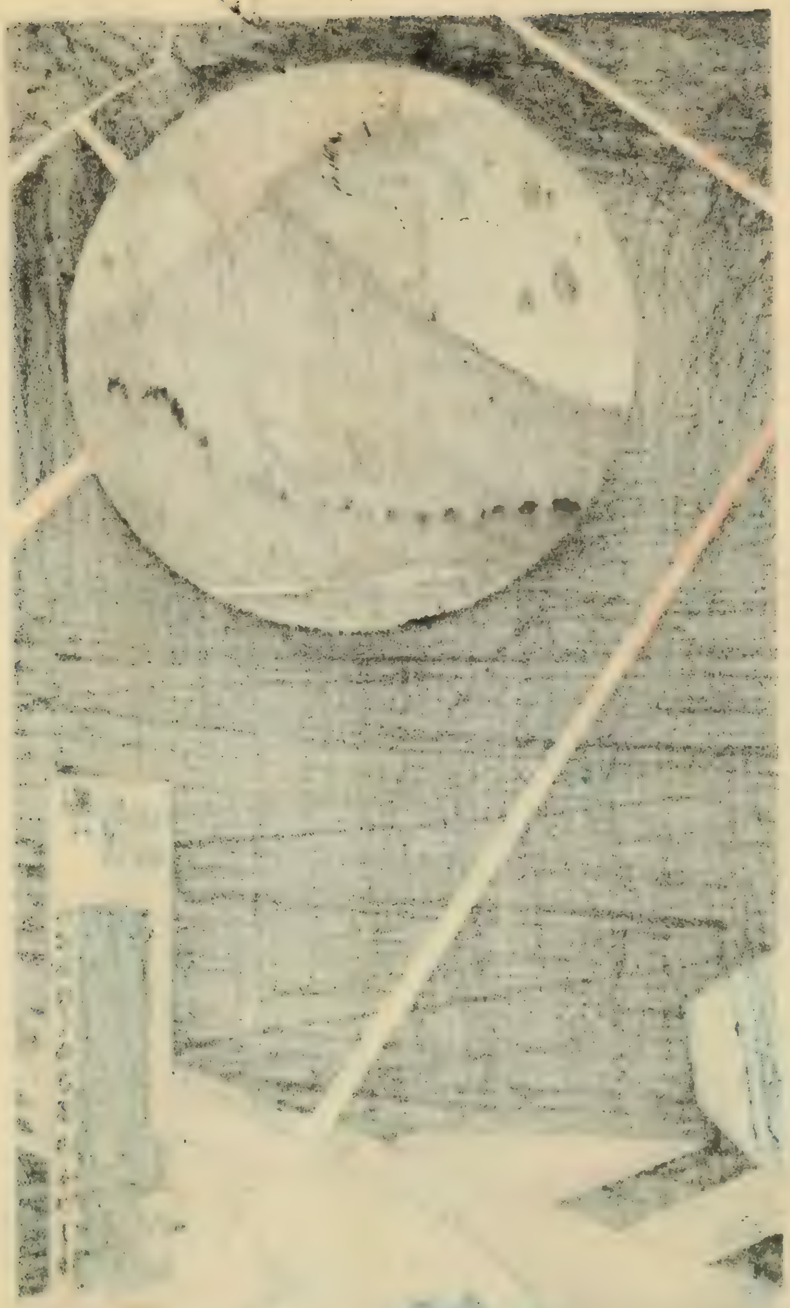
六日　　　　もし村

進三様當用

右の內「金田」といふのは今の淺草仲見世の鳥屋金田の先代の主人金八さんのこと。「堀越」とあるのは九代目市川團十郎のこと、本姓を堀越と稱したからである。『夢物語』は本集第十九卷に收めてある。金田の金八さんのことに就ては著者が河竹繁俊に少しばかり書いておいた。作者がもし村と署名したのは、本姓を吉村と稱したからで、晩年河竹新七を讓つてからは、もし村と署名したのが可なりある。明治十九年であるから七十二歳の時のものである。







河竹糸女補修
河竹繁俊校訂編纂

默阿彌全集

第廿六卷

東京 春陽堂刊行

默阿彌全集 第二十六卷目次

挿繪目次

五十三驛扇宿附

都を跡に連退のお袖宗三が戀情に妻のお咲は悋氣の角鬼の噂も鈴鹿越哀れ彌市をばつさりとやつた浪士に新五郎次郎も仕事のぐれ仲間巧む惡事の仕損じもお濱が意見利かぬ釘貫の糠雨も古寺に老婆お蔦の本體を仕止て手柄繁藏も妖魔の祟り報い來る變化おかやと松藏の曲る性根に言譯もおしづが自殺假の世の夢に三浦の小紫さめて本意なき權八も鷄日に惱む八藏を賴む助七助八の非力へ附入る返り討覗ふ二人は切捨ても脫れぬ罪に天の網かゝりやつながる八重梅をひざな子供の佐五平迄思はぬ難に相宿の玄蕃を懲らす正作の手練は外に荒人の神の祭のいさましくさいはひ時を江戸入りの榮え

故蹟温東海道旅

『五十三次』は明治二十年七月、作者七十二歳の時、中村座に稿下したものである。主役を演じた五世尾上菊五郎の祖父三世梅壽菊五郎の當り狂言と稱された、大南北作の五十三次の狂言を、殆ど創作的に改訂し、且つ獵人繁藏に關する件二幕を全く新規に添加したものであつた。『續々歌舞伎年代記』によると、五世菊五郎の「權八は今回新發明活歷風の田舍侍にて、例のとは勝手違ひに思はれたが、淨瑠璃のある夢の場になり、白く美しき權八となり見物を悅ばせたりき。怪猫はお家物だん／＼に名工夫が出で何れも大出來、例の油なめも今回は橫から寫され尤もらしくなりたり、狩人繁藏役申分なくこなされ、面白きこととなりし」となる。岡崎の猫は新古演劇十種の内と銘打たれたこともある。

　書きおろしの時の主なる役割は五世尾上菊五郎（平井權八、岡崎の老婆お蔦實は怪猫、獵人繁藏）、高砂屋中村福助（本庄の若黨八內事小泉八藏、庵原又五百原正作、繁藏女房おしづ）、坂東家橘（西川宗三郎、三浦屋四郎兵衞、本庄助七）、尾上松助（絹賣彌市、齋坊主雲鐵、乳貰ひおかや實は怪猫）、岩井松之助（八重梅、三浦屋の小紫）、片岡市藏（代官鄉太夫、久下玄蕃）、中村勘五郎（雇ひ女おくら）、市川新藏（本庄助八）、嵐璃幸（藝子お袖、八橋）、中村傳五郎（手代傳八、獵人松藏）、岩井粲松（乳貰ひの女お澤）、坂東秀調（宗三郎の女房お吹、八藏女房お作）、中村鶴藏（お袖繼母おつめ、平井の若黨佐五平、松藏女房おかん）、尾上榮之助（繁藏の娘おみち）等であつた。

　挿畫としたのは國政筆の錦繪と、五世菊五郎が怪猫に扮した舞臺寫眞である。尙繪番附の下繪は作者が畫いたもので、五十三次の全部ものである。

大正十五年十月初旬

校訂者



五十三驛扇宿附（岡崎の猫、白井權八、獵人繁藏）――七幕

序幕

京都祇園社の場

草津驛追分の場

返し

石部横田川の場

大津札之辻の場

土山鈴鹿峠の場

〔役名――平井權八、五百原正作、織物屋西川宗三郎、絹商人彌市、本庄の若黨八内、本庄助七、同助八、西川の番頭傳八、百姓五郎右衞門、代官手代仙藏實は隼次郎吉、中間友平實は猿猴三次、旅人七兵衞實は野狐市藏、同十右衞門實は梟九郎助。宗三郎女房お絹、藝子お袖、お袖の母お爪、茶屋女お仙、同お山、其他。〕

（京都祇園外構の場）――本舞臺一面の平舞臺、向ふ境内末社を見たる遠見、諸所に櫻の立木、前側丹塗りの玉垣、下手葭簀張りの掛茶屋、總て京都祇園外構の體、こゝに着流し尻端折りの若い者一、二西川といふ弓張提灯を持ち、立掛り居る、この見得鳥笛、大拍子にて幕明く。と井筒屋と記せし弓張

を持ちて若い者△、□出て來り、

一　いつも朝寐を仕つけて居るから、朝櫻はついに見ぬが、今朝は計らず花見をしました。

□　昨夜騷ぎ出したは八つ頃と思つたが、諸々方々をまご〱して歩いて居るうち、もう夜が明けるのぢや。

△　祇園さまは七ツから朝の祈禱を上げるゆゑ、もう七ツを廻つたと見える。

二　ゆうべ井筒屋さんへ尋ねに行つたが、あれは八つでもあつたかな。

△　こなた衆が來た頃は、遲い座敷から戻つて來て、白川夜船でござりました。

□　あれから家でも、お袖さんが居ないのに、氣が附きました。

△　心當りは丸山から四條通り先斗町と、殘るとこなく尋ねたが、

二　いつそ夜が明けたら、こなた衆と一緒になつて、船場へ行つて樣子を聞きませう。

一　何しろ、夜の明けるまで此の見世の床几を借り、朝櫻を見物しよう。

ト葭簀の内より床几を出して掛ける、花道よりお爪ごま鹽鬘、着流し雪駄にて出て、舞臺へ來り、

お爪　もし、そこにおいでのは、井筒屋の衆でござんすかえ。

□　さういふ聲は、お袖さんのお袋さんでござりまするか。

お爪　おゝ、よい所で逢ひました、まだ娘は知れぬかえ。
□　心當りは殘らず歩きましたが、此上は西川の二人の衆と三十石の、
一　船場へ行つて樣子を聞かうと、夜の明けるのを待つて居ります。
お爪　當にして居た娘に逃げられ、することなすこと後先になり、方々へ行つて面皮をかくのもみんな彼奴のお蔭ゆゑ、こんな癪にさはることはない。（ト上手より手代傳八弓張提灯を持ち出來り、）
傳八　おゝ、よい所でこなた衆に逢ひました。
一二　若旦那は知れましたか。
傳八　心當りは殘らず尋ねたが、一向に知れぬて。
お爪　もし、番頭さん、娘をどこへ遣りなすつた。（トお爪傳八へ詰め寄る。）
傳八　これはまた怪しからぬ、何でわしが娘御を。
お爪　それではこなたは知らぬかい、わしやあんまり腹が立つから、織屋の方を見る度に、理窟が言つてやりたいのぢや。
傳八　それはまた迷惑な、わしはまたこなたの處へ、理窟を言ひに行くところぢや。
お爪　そりやまたなぜに。

傳八　なぜといつて考へて見なさい、先づ三條の織屋仲間で堅いといはれた若旦那が、參會の時座敷へ出た藝子に馴染んだが始まりで、それから段々度重なり到頭かういふ騷ぎを仕出した、起りといふはこなたの娘御、それゆゑこつちから理窟を言ひたいのぢや。

お爪　いや、その理窟は聞かれませぬ。藝子がお客の座敷へ出て、ちやほやいふのはこりや生業、その上ならず若旦那の胤を去年の暮に產み、丸四月は座敷を引かせ、やう〳〵此春再勤して稼ぐやうになつた矢先きへ、さるお屋敷のお客樣が今度あれを引かせると、昨夜相談が纒まつて、いざとなると玉が居ず、夜る夜中血眼で尋ねて歩くもありやうは、娘を喰はうと思ふから、それを攫はれたら理窟を言ひます。

傳八　いや、その理窟は聞かれませぬ、座敷を引かせるお客があるかどうか、そんなことはわしは知らない、堅い若旦那が道樂者になつたも、みんなこなたの娘御からだ。

お爪　いや、大事な金箱を失つたも宗三さんといふ油蟲、わたしが慾の鼻柱を折られたからは、見世へ行つて此の始末を、附けねばならぬのだ。

傳八　さういふこなたの娘のお蔭で、わしまで迷惑して居ます。

お爪　その迷惑とはこつちで云ふこと、娘を一人なくしたは、こなたの主人から起つたことだ。

傳八　えゝ、若旦那を道樂者にしたは、こなたの娘ゆゑだ。

お爪　さあ、どうしておくんなさるのだ。

傳八　さあ、どうする。（ト兩人詰め寄る）。

□　さうお互ひに言ひ募らずと、まあ靜になさいまし。

一　番頭さんは堅い一途に、御主人の爲を思ひなさる。またお袋さんは金箱を失くしたから、腹立ちまぎれに、大きな聲をしなさるが、

△　何にしろ、夜中から斯うして心配して歩くも、二人を搜し出さうため。

三　どちらのせるといふでもなけれど、番頭さんと一緒になつて、こなたも搜すがいゝぢやないか。

お爪　成程言つて見ればそんなもの、それでは尋ねてから相談しませう。

傳八　若旦那も、歷然とした御家さんのある身分ゆゑ、居たならわしが扱つて、娘御は直に引渡して上げませう。

二　さうして是れから傳八さんは、どこを當てに搜しなさいます。

傳八　不斷若旦那が、江戸見物に行きたいとおつしやつたから、こりやァてつきりお袖さんと今朝早立ちで東海道と思ふから、是れから直に駕籠で行けば、水口あたりで逢ふつもりだ。

お爪　さういふことなら手に手を取り、もう今頃は二人して草津あたりで姥ケ餅、きなこ附けたりながめたり、道行めかして居るであらう、あの强情の餓鬼だからお前一人では心許ない、わしも一緒に行きませう。

傳八　こなたも娘の身の上を、案じて居るゆゑ尤もだが、もし鈴鹿までも延す時は春の日でも十七八里たとひ馬駕籠に乘り詰めでも、道で暮れるに違ひない、こなたは近所を捜すがよい。

お爪　近所は斯うして主人のところで、人を出して尋ねて居れば、一緒に連れて行つて下さい。

傳八　それでは時刻の延びぬうち、是れから直に出掛けるとしよう。

　ト　お爪巾着の錢を勘定して居る、花道より西川の若い者三走り出で、

三　大變が出來ました〳〵。

お爪　娘がどうかしましたかえ。

三　昨夜の騷ぎの其中で、御家さんが見えなくなりました。

傳八　なに、御家さんが見えなくなつた。

三　川筋へ手分して出入りのものが出ましたが、お里へ知れては大變と、奥で案じて居なさいます。

お爪　あゝ、娘が居たかと思つたら、御家さんのことでは詰らない。

一　いや、手前勝手な婆あさんだ。
傳八　御家さんも多分若旦那の、跡を尋ねておいでゞあらう。
二　もうすつぱり夜が明けたから、こつちは是れから船場へ行き、
□　客の樣子を、
四人　調べるとしよう。
傳八　それぢやあ是れから、（ト立上るを道具替りの知せ、）出掛けるとしよう。

ト此の模樣、烏笛、大拍子にて道具廻る。

（草津追分料理屋の場）――本舞臺三間常足の二重、眞中一間向ふ中庭の遠見、上下鼠壁料理の品を張出し、下手中敷居の棚、膳椀を載せ、下手一間生魚の臺を置き、是れより奧へ落間の出這入り、この下手板塀、馬繋ぎの杭、軒先に御茶漬と記せし掛看板、ずつと下手榜示杭、東海道草津宿、是れより仲仙道追分と記しあること、總て草津追分料理屋の體、爰に八藏商人好みのこしらへ、脚絆、草鞋、小風呂敷包みを置き、腰をかけ、下手に若い衆〇着流し前垂がけにて、燗德利に小丼をのせたる膳を出して居る、此の見得驛路入りの唄にて道具納まる。

○　大きにお待遠でござりました、只今お肴が出來ます。

八藏　晝が廻つて空腹だが、追分までこぎ付けようと、半道ほど無理をしました。

○　只今お中食のお客樣で大混雜でございましたが、やう／＼お歸りになつた所でござります。

八藏　いつも繁昌でようござります。

○　その替り困りますのは、雲助や駕籠のものが毎度見世先の喧嘩には、隨分難儀をいたしまする。

ト此内八藏酒を飲み居る、合方にて、上手より本庄助七、羽織大小脚絆草鞋菅笠を冠り、助八同じなりにて出で、下手へ行き過ぎるを八藏呼びとめて、

八藏　あゝもし、本庄の若旦那樣ではござりませぬか。（ト是れにて兩人立止り、）

助七
助八　おゝ、八藏ではないか。

八藏　はい、左樣でござります、お詞かけるも恐れ入りますが、先づ是れへお掛け下さりませ。

助七　久々にての面會ゆゑ、然らばそれへ掛けるといたさう。（ト兩人床几へ腰を掛ける。）

八藏　誠に其後は打絶えまして、申譯もござりませぬが、ちよつと御機嫌伺ひにも表向きでは上られぬ身の上ゆゑ、ついお尋ね申しませぬ。

助七　一旦暇を遣はす上は、假令旅中で面會なすとも、詞交すいはれなけれど、其罪を糺せば些細のこ

と、同家中の下部同士が口論なせしが起りにて、既に相手に疵を負はせ、父上の頑固に先方へ濟まぬとて、長の暇になりし其方。

助八　その後再三詫びなせど、出入りとても許さゞりしが、今は以前に替る身に、昔のことは水に流し袖摺り合ふも他生の縁、ましていはんや家來の八内。

八藏　すりや、お許し下さりますとな、有難うございます。何はさて伺ひ度きは大旦那様には、お替りもなく御いでゞござりまするか。

助七　御無事ならば斯くまでに、物憂き旅はいたさぬが、心を勞すも父の爲め。

八藏　それでは、若しや、大旦那様は。

助七　涙の種と、

兩人　なつたわえ。

八藏　すりや、おかくれになりましたとな。して、それ故の御旅行とは。

助七　八内聞いてくりやれ。（ト合方になり、）その方暇になりし跡、父上には御殿よりお下りの其途中、お屋敷内にて數多の犬が嚙合ひゐるを追散らさんと、打つたる時に急所に當り、其場で犬は絶命せしが、其の飼主は平井兵左衛門にて事情を述べて詫びをなし、其場はその儘濟みたれど、それ

が遺恨の種となり。

助八　彼れが忰平井權八、其の性よからぬ生れつきにて、かばかりのことを根に持ち年月窺ひ居つたることか、ある夜父を討果しその場より國遠なす、それゆゑ在所を尋ねんと思へど更に行方わからず、先づ江戸表へと志し、下る途中ではからずも此草津にてそちに逢ひしは、誠に盡せぬ、

兩人　緣であつた。

八藏　すりや、大旦那樣には平井の爲に、不慮の御最期なされましたか、嘸御無念にござりませう。

助七　して、其方には何れに居るのぢや。

八藏　お屋敷をお暇になり、是れぞと申す知邊もなく東海道をさまよふうち、金谷の宿の小泉と申す宿屋へ奉公に這入りましたが、遂に主人の意に叶ひ、その家の聟となりました、それに附けても御主人へ何卒お詫びをなさんものと、胸に忘るゝこともなく、送る月日も十三年、今日はからずも御免になりしは、夢のやうでござります。

助七　それぞ幸ひ、是れより下る道筋に、そちが宅へ立寄らん。

八藏　お詫びの叶ふ上からは、共々御助力いたしますれば、先づ私宅へ御逗留あつて、時節をお窺ひなされませ。

助八　その志しは忝いが東海道の順路を下らず、關を横切り伊勢路を尋ね、桑名より佐野廻りして名古屋をかけて參る故、その後そちが宅へ寄らん。

八藏　成程それも御尤も、斯うしてお目に掛る上は、是れよりお供いたしたけれど、約束をせし用事あれば、一旦この場はお別れ申し、御出でをお待ち申しまする。

助八　して、只今のそちの名は。

八藏　只今にては、小泉屋八藏と申して居ります。

助七　然らば後日に尋ね行き、必ず面會いたすであらう。

八藏　御承知でもござりませうが、道中筋のあぶれ者が、荷擔をせまいとも計られず。

助七　親切なる其の詞、泊りに着くとも枕を高く、

助八　寐たることなき二人が心底。

八藏　それを承はり、安心いたしました。

助七　八内無事を、

兩人　祈りくれよ。（ト唄になり、兩人花道へはひる。八藏跡を見送り、）

八藏　因州家では歷然とした本庄助太夫樣の若旦那が、何ぼ詮議の爲とはいへど、供をも連れず長の道

中、變ればかはる世の成行き、これから共々力を添へ、御恩返しは彼の事と。

ト向うへ思入れ、爰へ若い者煮肴の皿を盆へのせ持ち來り、

△　へい、お誂へ。(ト大きく言ふ。)

八藏　えゝ、びつくりした。

△　大きに遅くなりました、お肴は切身でござります。(トこれを聞き、)

八藏　目ざす矢先へ切身とは、時にとつての、(ト一口飲むを道具替りの知せ、)いゝ辻占だ。

トよろしく、此の模様驛路入りにて道具廻る。

(横田川船渡しの場)――本舞臺上手九尺蒲鉾形の草土手、眞中一間往來をあけ、向ふ近江の山を見たる夜るの遠見、裾通り荒川の書割り、上下松の立木、下手に横田川船渡しと記せし榜示杭、總て渡し場の體。水の音にて道具納まる。と向ふより、お絹丸髷、商人の女房のこしらへにて、山駕籠に乘り跡より以前の番頭傳八呼びながら出で、

傳八　おゝい〱、ちよつと待つて下さい。

お絹　どなたか知らぬが、駕籠屋さん、構はず遣つて下さい。

駕屋　へい〳〵、畏りました。（ト上手へ行かうとするを、傳八中を覗き、）
傳八　お〻お家さまだ、てつきりそれと思つたから、やう〳〵爰まで追駈けました、あなたは何處へお出でなさいます。
お絹　どこへわたしが行くものか、夫の跡を尋ねて行くのぢや、何でそなたは留めるのぢや。
傳八　さあ、お留め申すその譯は、私が申さずとも御承知でございませう。もし、駕籠屋さん、どこまで極めて來なすつた。
駕屋　へい、船場まで極めて參りました。
傳八　そんなら爰はもう船場、先づ兎も角もお待ちなされませ。
お絹　いや、わしは行くところまで行くのぢや。
傳八　さうでもあらうが、まあ下に。
お絹　それぢやというて。
傳八　はて、お出でなされませ。（ト無理にお絹を駕籠より引出す。）
お絹　これ傳八、わしやどうあつても旦那さまの跡追ひかけ、恨みを言はねば胸が濟まぬ、留めずと遣つて下されいの。

傳八　そりやあ御出でなさるもよいが、慥に東海道といふではなし、雲を當なる尋ねもの、この行先きは私にお任せなされて此の駕籠で、どうぞお歸り下さりませ。

お絹　いや歸りませぬ、一旦思ひ詰めたからは知れぬまでも追つて行き、もし悪者どものその爲に、此身を捨てなばそれまでにて、死んで恨みをあのお袖に、存分言はねば腹がいぬ。

傳八　さあ、それは御尤もでござりまするが、何であなたを遣られませう。おい、駕籠屋さん、暫く跡の立場で待つて居て下され。

駕屋　へいへい、畏りました。（ト駕籠屋下手へはひる。）

傳八　もし御家さま、あなたそれでは濟みますまい。若旦那が藝子狂ひは悪いには違ひなけれど、あなたは嫁の御身分ゆゑ、先づ御兩親へ御相談あつて、事をなさるがこれ順道、それを女の一途に迫り夜道をかけて街道をお出で遊ばすその道で、若し間違ひがある時は、御兩親やお里へ對して濟みませぬ。爰の道理を御承知下され、一先づお歸りなされませ。

お絹　いゝえ戻りませぬ、親に不孝も知りぬいて跡を慕うて來たからは、捨てゝ置いて下さんせ。

傳八　さあ、死んで恨みをおつしやるより、今私が追附いてお連れ申すその時は、生きて恨みが言はれます。それ故お待ちなされませ。

お絹　いえ〳〵、何でも恨みを言はうと思ひ、是れまで來た上からは、留めずと遣つて下されいの。
傳八　これ程お留め申しても、あなたはお歸りなされませぬか。
お絹　おゝ、行かいで何としませうぞ。
傳八　すりや、どうあつても。
お絹　えゝ、放しやいなう。
　ト振拂つて行かうとするを、傳八留める。花道より以前のお爪、木の枝を杖にして出來り、傳八を見て、
お爪　おゝ、傳八さんか。
傳八　や、お袖さんの。（ト思はず言はうとして口を押へる、お絹これを聞き、）
お絹　なに、お袖が。（トお爪の後姿を襟上とつて引戻す、傳八はお袖ではないといふ立廻りあつて、お絹お爪を見て人違ひと心附き、）えゝ、腹の立つ、（トお爪を突放し上手へはひる。）
傳八　こりや打捨ては置かれぬわえ。（ト逸散に上手へはひる。お爪あたりを見て、）
お爪　何だかさつぱり譯が分らぬ、お袖といつた聲がしたは何ぞ當りが附いたのか、何にしろ今朝ッから駕籠には乘れど草臥れて、一足も歩かれぬ、これから先きは樵か渡し場、船の出ぬうち早く行

き、傳八さんに追附かうか。（ト上手へはひる、水の音を打上げ、雨吟になる。）

〽夏近き木々の間の山々も、暮れて行く身の近江路や、霞もたつか河水の流れの末を厭ひ来て。

ト本釣鐘、花道より西川宗三郎、頰冠り、着流し草履、藝子お袖、餘所行きのこしらへにて出で、花道にて、

お袖　もし、まだ泊る所までは、餘程ござんすかえ。

宗三　石部に知邊の人があつて、人目がうるさく氣遣ひゆゑ、もう一宿と思つたが、暮れてはどうも歩きにくい。

お袖　どうやら心細うござんすわいな。

〽うつる心の水の面、うしろ見らるゝ思ひにて。（ト兩人舞臺へ來てお袖足の痛むこなし。）

駕籠には乘れど、乘り疲れて、わたしや大層草臥れました。

宗三　爰は河原へ出る所ゆゑ、夜に入つては人通りもないゆゑ、少し休息したがよい。

〽川邊に立つや葉柳の。（ト此内兩人あたりの捨石へ腰を掛ける。）

人目を厭ふ落人に、薄氣味わるき道なれど、夜に入つた方が安心だ。



お袖　あなたは安心なされるだらうが、わたしや心が安まりませぬ。
宗三　なに、心が安まらぬとは。
お袖　斯うして一緒に出たものゝ、あなたの心が變りはせぬかと、それが案じられまする。
宗三　それはおぬしの取越し苦勞、子まで儲けし二人が仲、現在女房のお絹を捨て、江戸へ行つて暮して見ようといふ心、何の變らう筈がない。それよりわしに愛想を盡かし、座敷を引かせて貰ふ武家の所へ、行く氣になりはせまいかと、それを心配して居るのぢや。
お袖　そりやあなたにも似合はない、親方さんの借錢から親に不孝と八瀬の里へ、里に遣りし子供まで捨てゝ逃げる氣になつたはもう内へ戻らぬ心、そんな氣まづい事を言つて、わたしを是れぎり見捨てなさんすと、死んで恨みを言ひますぞえ。
宗三　その詞を聞く上は、どこが何處まで連れて行き、必ず見捨てはせぬけれど、たゞ不斷から嫉妬深いお絹が今頃どうして居るか、定めし二人を恨んで居やう。
お袖　それもみんなわたし故、必ず見捨てゝ下さんすな。
宗三　おぬしは捨てぬが女房の、思ひは自然報い來て、一念迷つて來ぬとも言はれねば。
お袖　どうか間違ひでもなければよいが。

〽風にもまれて打つや枝波。

ト獨吟の上げ、よき時分、下手の後へ五郎右衛門、白髪鬘やつしなり、脚絆草鞋、抱子を懐へ入れ、小田原提灯を袖に隠して窺ひ居て、此時前へ出て、

五郎　もしお二人さん、よい所で逢ひましたな。

宗三　や、あなたは子供の里親どのか。

五郎　はい、八瀬の里の五郎右衛門でござります。

宗三　どうしてあなたは、此の處へ。

五郎　受取つて貰ふものがあつて、晝間からこの河原で、二人の來るのを待つて居ました。

宗三　なに、受取つてくれいとは。

五郎　外でもござらぬ、此坊を。（ト懐中より抱子を出す。）

宗三　そりやまた、どういふ譯あつて。（ト合方になり、五郎右衛門松の枝へ提灯をかけ）

五郎　去年の暮からこの子をば、娘が里に預かつたが、寄越した月ぎり里扶持を、催促しても百も寄越さず、この子は人情で可愛さうだが、あんまり親が分らぬゆゑ、戻しに行けど誰も居ず、様子を聞けば二人して東海道を下り江戸見物に行くと聞き、人を踏附けにした仕方と、業がにえてなら

ねえから、乳貰ひしながら立場々々で様子を聞いて渡し場へ、先きへ駈抜け待つて居たのだ。さ、
無駄な錢があつても里扶持に寄越さずば、今爰でこの子を受取つてくんなさい。

ト懷中より抱子を出し、お袖に渡さうとする。

お袖　そりや受取りもしようけれど、何をいふにも今爰では。

五郎　いや〳〵、水呑百姓の身分では、さう〳〵たゞは育てられぬ。

お袖　それぢやといふて。（ト押返す、五郎右衞門無理に渡す。赤子笛。お袖乳を飲ませる。）

宗三　合點の行かぬは其の詞、遣らぬどころか里扶持を、前の月の分までお袋に渡して置いたが、どう
いふことで屆かぬか。

お袖　そんならもしや、かゝさんが。

五郎　おゝ、こりやさうであらう、慾の深いあのお袋、それぢやあ途中でごまかされたか。

宗三　屆かぬとあれば是非がない、どうか道にて才覺すれば、今まで通りに養育して下され。

五郎　これ、馬鹿を言はつせえ、江戸へ駈落するものが何で道から金を送らう。こなた衆二人が居ぬ時
は見當のない里の口、一日も世話は出來ませぬ。

お袖　そりや尤もでござんすが、上りかゝりし此乳では所詮これには飲み足らぬゆゑ、どうぞ暫くのそ

のうちを。

五郎　滞りの里扶持に、前後二日の諸入用、損をしても眞平だ。

宗三　さうであらうが今暫く。（トすがるを五郎右衛門振拂ひ。）

五郎　いや、そつちよりこつちが困る、どりや木賃宿へでも泊るとしようか。

ト合方水の音、五郎右衛門提灯をさげ花道へはひる、赤子笛。

宗三　到頭おいて行かれたが、そなたの乳では足りぬゆゑ、こんな困つたことはない。

お袖　こりや、どうしたらよからうな。

トばた〳〵になり、花道より手代太七、汗を拭きながら出る、闇黒ゆゑ兩人に突當りびつくりする、爰へ下手よりお爪出る。

太七　旦那さまでござりましたか。

宗三　えゝ。（トお爪すかし見て、）

お爪　女の影は、もしや娘か。

ト覗き込むを宗三郎隔てゝ上手へ行く、この時ドロ〳〵になり、後へ人魂を引いて取る。

お袖　あれ、人魂が。

宗三　あこれ。（ト押へるを木の頭。）南無阿彌陀佛々々。

ト宗三郎はお袖を介抱して居る、お袖は腰のぬけたる體、ドロ〳〵にて、

ひやうし幕

（大津札の辻茶店の場）——本舞臺四間常足の三重、眞中暖簾口、上下板羽目、軒先きより前へ出して一面葭簀の日除け、屋體の下手一間落間、この正面繩簾、この前石の竈、銅壺へ茶釜をかけ、下手屋根附きの高札場、東海道大津宿と記せし榜示杭、二重の前に床几二三脚並べ、總て大津札の辻茶店の體、上手の床几に山村仙藏、野牛纏、ぶつさき、大小、脚絆、草鞋、代官手代のこしらへ、友平紺看板一本差し、柿の脚絆、草鞋代官の供、下手の床几に七兵衞、十右衞門糸立を引つかけたる旅人にて腰を掛け、茶屋女二人立掛り、馬士唄にて幕明く。

お仙　皆さん、大層お早うござりました。

お仙　今朝ほどは、どれからお立ちでござりました。

仙藏　昨夜は三井寺下の植木屋へ止宿いたし、今朝はゆる〳〵立つて參つた。

友平　この札の辻の立場は、のぼり下りの旅人は大抵寄ります。

七兵　おい姉さん、酒はあるかね。
十右　これさ、朝ツから酒を飲んで、道中をどうする氣か。
七兵　はて、下戸と違つて飲む口では、朝はちよつとその日の延喜と霧拂ひに御神酒を上げるわ、こりや、惡魔拂ひといふものぢや。
十右　惡魔拂ひもないものだ。昨日の朝京を立つて僅か三里のこの丁場を二日がゝり、もう〳〵酒はやめて貰ひませう。
お仙　お生憎でござりますが、手前ではお酒は賣りませぬ。
七兵　酒はないとか、いや、話せぬ家だ。
ト馬士唄になり、花道より絹屋彌平、半合羽一本ざし、脚絆、草鞋、菅笠、太七同じなり、供にて小包みを割掛けになし、花道にて、
彌市　坂本の松屋で大きに手間を取つたので、今朝の早立ちを無駄にした。
太七　それでも京から三里の道、働いた方でござります。
彌市　定例の札の辻へ、ちよつと寄つて行かずばなるまい。
太七　左樣さ、素通りもなりますまい。（ト兩人舞臺へ來る。）

お仙　これはお早うございました。昨夜は當宿へお泊りでございましたか。
太七　今朝京都から早立ちで、坂本に用事があつて、それで遲くなりました。

　　ト此うち彌市眞中の床几へ行き、仙藏へ思入あつて、

彌市　眞平御免下さりませ。
仙藏　お下りでござるかな。
彌市　へい、東へ參る者でござります。
七兵　旦那は東はどちらでござります。
彌市　上州の前橋でござります。
十右　それでは京都へ賣込みでござりまするな。
彌市　はい、少しばかり絹を送りますものでござります。
七兵　當節中は道中筋が大分物騷だと申しますから、私共なども二人連で心遣ひでなりません。
十右　そちらの旦那は東の方へ、お下りと見受けましたが、もし江戸へいらつしやるなら、御一緒にお供が願ひたうござりまする。
仙藏　如何にも江戸の代官屋敷へ戻るものゆゑ、賴むとあるなら同道いたして遣はさん。

七兵　實は私共兩人は、少々旅の貯へを所持いたして居りますが、どうやら街道筋が物騷と聞き、薄氣味惡くお連れを待つて居りました。

十右　御武家樣と御一緒に、お供をいたせば大丈夫、御迷惑でもお願ひ申します。

友平　主家來二人ぎりでは、わしが用を足す間は主人が淋しい、お連れが出來て幸ひといふもの。

　　トこれを聞き、太七思入あつて、

太七　もしあなたも、江戸まで御一緒に、お供を願つてはどうでござります。

彌市　そりや、大金でも持つて居たら、其心配もあらうけれど、わしなどは其の苦勞はないて。

太七　さうでもあらうが、御武家と御一緒なら、懷中物の用心に。

彌市　いや、却つてお邪魔にならうから、そんなことは願はれぬ。

十右　旅は道づれ、一人も多い方が賑やかゆゑ、ついでに旦那へお願ひ申し、御一緒にお出でなされませ。

彌市　有難うはござりますが、戻りは松坂に用事もあり、またそれから名古屋へも廻りますから、殘念ながらお斷り申します。

友市　勸める譯ではなけれど旦那もお話し好きのことゆゑ、お廻りなら關の地藏まで一緒に行かつしや

れ。

彌市　へい、有難うござりまする。（ト心遣ひのこなしあつて、ふと思ひ出したる體にて、）これ〳〵太七、その包みの内に、松坂の註文書は這入つて居たかの。

太七　いえ、私はまだ受取りませぬ。

彌市　さあ、しまうた、それでは奥へ置いて來たか、あれがなくては註文に差支へる、御苦勞でも坂本まで取りに行つて貰ひたい。

太七　それは粗相いたしました、一走り行つて參りますから、お先へお出でなされませ。

彌市　いや、爰の見世に待つて居るから、其荷を置いて行つて來てくれ。

太七　左樣なら、直ぐ行つて參ります。（ト馬士唄にて太七早足に花道へはひる。）

仙藏　休息したら、同道いたさうかな。

七兵　どうぞ一緒にお願ひ申します。（ト是れにて友平、七兵衛茶代を置き、）

十右　それではお客樣、御一緒にお出でなされませぬか。

彌市　有難うはござりますが。どうぞお先きへ。（ト是れにて皆々立上る。）

女中　お靜かにいらつしやいまし。

仙藏　大きに世話になりました。

ト仙藏先きに皆々上手へはひる。この唄にて下手より市松、千太若衆かづら脚袢、繩の帶をしめ柄杓を持ち、伊勢參りにて出來り、

市松　伊勢參りの小僧でござります。

千太　どうぞ一文やつておくんなさい。

彌市　二人とも江戸の詞だが、この大津で伊勢參りは、ちと方角が違ふではないか。

千太　實はもう參つてしまひ、遊んで居たら京へ歸る人が荷物を持たしてやるから、見物に行くがいゝと追分まで來たが、

市松　もういゝから歸れと言はれ、どうすることも出來ないので、こゝらを貰つて歩いて居ます。

彌市　そりやあ何にしろ困るであらう。どれ、手の内を遣りませう。

千太　もう旅は飽きたから、江戸へ歸りたうござりますが、連れて行つておくんなさい。

市松　千太は京橋の生れ、おいらは築地の生れだから、家へ歸ると禮をします。

彌市　連れて行つて遣りたいが、わしも方々廻る生業、どうも一緒には行かれない。さあ、是れをやるから、何ぞ喰うてよい客の供でもして、早く江戸へ歸るがいゝ。

千太　やあ二百だね、こいつア有難へ、立場へ行つて寶引をやらう、大きに有難う。

ト行きかけるを市松留めて、

市松　おい〳〵、おいらに割つてくんねえな。

千太　誰が割をやるものか、おれ一人で取るのだ。

市松　江戸を出る時、二ツ山の約束で來たぢやあねえか。

千太　そんな約束は旅ぢやあ止めだ。（ト千太行きにかゝるを市松捉へ、摑み合の立廻りあつて、）市松の馬鹿野郎め。（ト逸散に下手へはひる、市松泣いて居る。）

彌市　見掛けに似合はぬ今の小僧は、油斷もすきもなりやあしねえ。

お仙　ほんにこの子は、いつもおとなしいが、今のはなか〳〵いけません。

彌市　これ〳〵、泣くな〳〵、その替り男が來るまで、この荷を持たして連れて行くから、おれが供をするがいゝ。

市松　有難うござります。

彌市　もし姉さん、供の者が來たら跡から來いと、さう言つて下さい。茶代は爰へ置きますよ。

お仙　何度有難うござります。（ト市松荷物を持ち、）

彌市　それでは行かうか、これは大きに。（ト立上るを道具替りの知せ）お世話になりました。

ト馬士唄にてこの道具廻る。

（鈴鹿山辻堂の場）――本舞臺上寄りに一間藁葺の辻堂、前側狐格子の二枚扉、出庇、左右の横手下見、欄間に延命地藏尊と記せし額、其外古びたる乳の願掛けの繪馬を澤山かけ、よきところに石の因果車、向う山々の遠見、裾通り低き岩組の張物、上下藪疊み、松の立木、下手一間、筵にて圍ひし出茶屋、總て鈴鹿山辻堂の體、山おろしにて道具納まる。と爰に焚火あり、合方になり、花道より以前の彌市兩肌脱ぎ、襦袢にて汗をふきながら出る、跡より市松鉢卷にて割掛を持ち出て、花道にて、

彌市　向うに見えるは、何のあかりだらう。

市松　大方雲助の焚火でござりませう。

彌市　人は見えぬやうだな。

市松　無暗に焚き附けて、それぎり行つてしまひます。

彌市　それぢやあ安心だ、あそこへ行つて休まう。（ト舞臺へ來て、）嘸おぬし、草臥れたらう。

市松　何だか、足が棒のやうになりました。

彌市　その替り立前はよくしてやるから、我慢して峠を越してくれ。

市松　これから下りは木が茂つて闇いから、氣を附けてお出でなせえ。

彌市　時々通るから知つて居る、大津の立場で代官手代と連れになつた二人連れは、慥なやうだが油斷せず、跡になり先になり、やう〳〵まいて爰まで來たが、夜が更けても今夜のうちに、坂の下まで下つて置けば、あすの旅が安心だ。

ト草鞋をはき直し居る、此時上手の藪を押分け、以前の仙藏友平、以前のなりにて出來り、

仙藏　いや其の安心は相成らぬ、街道筋の物騒に、身共もやはり僞つて、此の峠まで駈拔け參つた。

ト彌市びつくりして、

彌市　そんならあなたも、やつぱり爰へ。（ト此の時下手藪より七兵衞、十右衞門以前の旅人にて出で、）

七兵　旦那のお供を願ひ、この峠へは掛りましたが、

十右　今夜おそくも坂下まで、一緒に行けとおつしやりますから、

友市　こなたも同道、

兩人　しなさるがよい。（ト是れにて彌市さてはといふ思入あつて、）

彌市　そんならもしや、今のことを。

仙藏　夜露にしめる笹の葉の藪の小陰で聞いて居たが、水口泊りと僞つて、坂の下まで行越すには、定めて金を所持なさん。
友市　それを旦那が道中で間違ひなどのなきやうに、預かつてやるとおつしやるから。
七兵　もつたる金を、
三人　預けなさい。（ト これを聞き彌市びつくりして、）
彌市　實意にからんだ其お詞、有難うはござりまするが、それは大きなお目違ひ、金錢などは持つて居りませぬ。
仙藏　何の所持せぬことがあらう。それを見込んで大津から、四人連れにて、附けて來たのだ。
皆々
彌市　そんならもしや、こなた衆は。
仙藏　おゝ、紋切形の、
皆々　盜人だ。
彌市　えゝゝゝゝ。（ト凄き合方、仙藏刀を拔き舞臺へ突立て、）
仙藏　大津の宿の札の辻で、網を張つて居る所へ、うつかり罹つた椋鳥め、踏倒しても百兩はかたぢけ

ねえと目を附けて送り狼宿々を、代官手代とごまかして附けて來た此のおれは、鈴鹿の奥で隼次郎と異名を取つたごまの蠅の一疋だ。

友市 そのまた供と化込んだ紺看板に柿の脚絆、智慧は三本足らねえが惡事にかけちやあ手長猿、水の月さへ取らうといふ慾に目のねえ耳木菟に、劣つた生れの狼もの猿猴次郎といふ者さ。

七兵 その獸の仲間内で巾着切で世を送る、豐川參りの旅人と、化けたはほんの斷出しに、まだ鳥居數は越えねえが、おさき狐の使はしめ、喰ひ附いたらどこまでも、放れッこのねえ野狐市藏。

十右 その道連れの田舍道者と、化けたも猿に緣のある足りねえ智慧で引ッ掻き出し、仕事をしようと峠まで虻ぢやあねえがたかつて來て、藪で疾から見張つて居た、そこは綽名の梟九郎介。

仙藏 一疋ならず四疋まで、見込んだ鈴鹿のこの山中、金喰ふといふ啼聲の、この熊鷹に見込まれたからは、羽がひを縮めて出してしまへ。（ト四人彌市を取卷き、きつとなる。）

彌市 大方斯ういふ事だらうと、供の男も待たずして坂の下まで行く氣であつたが、かく見込まれては運の盡き、よろしうございます、爰にある持合せの金は殘らず上げますから、命は助けて下さりませ。

仙藏 金せへ取りやあ百にもならねえ、手めえの命に用はねえ、さあ早く出してしまへ。

ト是れにて彌市首にかけた財布を出して、

彌市　少々でござりますが、是れが路用でござりまする。（ト仙藏受取つて見て彌市の前へ投り出し、）

仙藏　是れッぱかりの端た金は、何の足しになるものか。

七兵　さつき立場で供の奴が、懷中物と言つた時、言ひ紛らしたを聞いて居たぞ。

仙藏　面倒だ、引ッ剝いでしまへ。

三人　合點だ。（ト彌市の懷へ手を掛ける、市松あわてゝ藪の內へ逃げ込む、）

彌市　あもし〳〵、そりやあ御無體と申すもの、もう外にはござりませぬ。

仙藏　えゝ、隱しやあがると叩きしめても、金を取るぞ。（ト刀を差しつける、）

彌市　あもし〳〵、差上げます〳〵、命ばかりはお助けなされて下さりませ。（ト彌市金を出す振りして四人の隙を窺ひ、）この間にさうだ。（ト逃げようとする。）

仙藏　うぬ逃げようとて、

三人　逃がすものか。

ト木魚入りの合方にて、四人彌市を追つかける。此時花道より權八、若衆鬘好みのこしらへにて、袴をはき草鞋にて出て、花道にて彌市に突當る、彌市は權八にすがり附き、

彌市　どうぞお助け下さりませ。
權八　さては賊に出逢ひしか。
彌市　へえ、この者でござります。
權八　すりや、此奴等の仕業よな。
仙藏　えゝ、三ぴんめも一緒に片附けろ。
三人　合點だ。（ト切つてかゝるをちよつと立廻つて舞臺へ來り、）
權八　街道筋は物騒と聞いてわざ〳〵夜道をかけ、狼藉者を懲らさんと、來かゝる峠に此の有樣、扨はわいらは盗賊よな。
仙藏　えゝ、こつちの仕事の邪魔をする、まだ生若え旅侍、懲らせるものなら懲らして見ろ。
ト山おろし、合方にて、仙藏友平は刀、七兵衞十右衞門は木の枝にて打つて掛る、權八これを相手に立廻りあつて、トヾ友平の刀を捥ぎ取り、皆々を峰打ちに打つ、これにて四人恐れて下手へ逃げてはひろ。彌市はッと思入あつて、
彌市　お陰さまで命が助かり、ありがたうござります。
權八　取るに足らざる彼等が振舞、にツくき奴等ぢやわえ。

彌市　少々ばかりの持合せを、渡して詫びをいたしましたが、まだ有るだらうと疑つて、既に手籠めにされるところを、あなた樣のお出でにて、實に地獄で佛でござりました。

權八　どこも怪我はいたさぬか。

彌市　仕合せと、どこも怪我はいたしませぬ。

權八　それは何より重疊ぢや。（ト彌市落ちたる財布を拾ひ）

彌市　大慾は無慾とやらで、渡した財布まで捨てゝ參りました。（ト懐へ入れ）左樣なれば私は夜道を急ぎまするゆゑ、これにてお別れ申しますが、只今の御恩は決して忘れはいたしませぬ。

ト荷を持ち上手へ行きかける。

權八　こりや〱ちよつと待ちやれ。

彌市　へい、何ぞ御用でござりますか。

權八　ちと其方に頼みがある、何と聞いてはくれまいか。

彌市　して、私へお頼みとは。

權八　實は手前も浮浪の身の上、この街道を下るのに路用の金に差支へ、斯く夜道をいたす仕儀、聊か用立て貰ひたいのぢや。

彌市　何御用かと存じましたら、左樣な事でございましたか、實は手前も助かりました御禮はいたす心得なれど、餘り失禮と存じまして差控へて居りましたが、さうおつしやつて下されば却つてよろしうございます。（ト紙入より二分出して紙に包み、）失禮ながら、お禮の印でございます。

權八　あこれ〳〵、謂れなくして其の金子、禮に受ける譯はない。

彌市　いえ〳〵、ほんのお禮の印、どうぞお納め下さりませ。

權八　はて、故なき金子は受取らぬと申すに。

彌市　して、用立てくれとおつしやりますは。

權八　命の禮が貰ひたいのぢや。

彌市　さあ、それ故にこの金子を。

權八　だまれ、こりやよッく聞けよ、二百疋にて人命が買へるとそちは存じ居るか。

彌市　えゝ。

權八　見受けしところ然るべき商人體、上方筋より戻り道、二百兩や三百兩は肌に附けしと思つて居るそこを見込んで申すのぢや。

彌市　じて、何程用達てろとおつしやりますな。

權八　先づ百兩申し受けたい。

彌市　えゝ、百兩用立てろ。（ト扨はといふ思入にて、）四人と一人に手出しもならず、弱身を見せたを附込んで、强請がましい命の禮、大きな事を言ひかけても、年中旅を廻つて居る膽の太い上州者、二分で惡くば止しにしなさい。（ト脇差の目釘をしめしきつとなる。）

權八　すりや、受けたる恩をあだにして。

彌市　あだにはせぬが、太々しいから。

權八　こりやもう、いつそ。

彌市　何を。

ト彌市拔いて權八に切つてかゝる、權八身を躱し、ちよつと立廻つて拔きうちに彌市を切倒す。是れにて彌市たぢ〳〵としてばつたり倒れる。權八につたり思入、

權八　雉子も鳴かずば打たれまいに、益なき殺生いたしたわえ。（ト刀を拭ひ鞘へ納める。）彼等が覘ひし所持の金子、むゝ。

ト彌市の懷中より胴卷を出し、死骸を後の藪の中へ隱し、焚火を消し上手へ行きかける。此時辻堂の扉を明け庵原正作、五十日鬘、達附、大小、武者修行のこしらへにて、

正作　あいや、御浪士、暫く待たれよ。

權八　待てとは、手前でござるよな。

正作　如何にも。（ト衒入りの合方、正作前へ出る、此時焚火燃え上る、權八思入あつて、）

權八　して、また拙者を呼びとめたは。

正作　餘り見事なお手の内、感心いたして呼び留めました。

權八　すりや、先刻よりの樣子をば。

正作　この辻堂に一宿なし、夜を明かさんと存ぜし折柄、耳かしましき物音に、思はず始終を承つた。

權八　御承知とあれば別段に、申し上げぬが無禮せしゆゑ、止むを得ずして打捨てました。

正作　そのお手並を拜見なし、折入つて其許へ、賴み入れ度き儀がござる。

權八　して、お賴みと仰せらるゝは。（ト合方。）

正作　そのお賴みとは外ならず、拙者は西國の武士なるが、劍道修行のその爲に諸國を遍歷いたす折から、諸所にて立合ひいたせども、恐らく貴殿に續く者なし、何卒この場で拙者めと御手合せ下さるやうお聞濟みを願ひたし。（ト是れにて權八切捨てようといふ思入。）

權八　拙者が拙なき手並をば、左樣に仰せあるは、何とも以て恐縮いたす、如何にも立合ひ申すべし。

正作　それは千萬忝し、幸ひ焚火をよすがとなし。

權八　木太刀あらねば眞劍にて、

正作　一命賭けての、

權八　この場の立合。

兩人　いざ〳〵〳〵。（ト双方刀を拔き、位取りの立廻りよろしくあつて、正作飛び退き、）

正作　暫く。恐れ入つたるお手の内、先づお刀をお納め下され。

權八　承知いたした。（ト鞘へ納める。）

正作　かゝる手利きの其許と立合ひしは拙者が仕合せ、御姓名を伺ふ前方、我が姓名を申し上げん。それがしことは備前岡山の浪士、庵原正作と申すもの、して、其許の御姓名は。

權八　拙者は因州鳥取の浪士、平井權八と申すもの。

正作　鳥取家にて平井とは、若しや貴殿の御親父は、兵左衞門殿とは申されぬか。

權八　いかにも父は兵左衞門、如何いたして其許には、我が父の名を御承知よな。

正作　身共が父は正左衞門とて、先年有馬の湯治場にて、隣り座敷の徒然に互ひに御懇意結びしが、その御子息にてござつたか。

權八　その儀は父より承はりしが、すりや貴殿が庵原氏の御子息か。
正作　知らぬことゝて計らずも、東海道の鈴鹿にて、
權八　人通りなき山上に、問へば答ふる山彦の、
正作　緣につながる葛蔓、道踏みわけて眞劔の、
權八　刃音鋭き立合も、名乘らば互ひの親々が、
正作　知る人なりしは、盡きせぬ奇緣。
權八　不思議な出逢ひで、
兩人　ござつたな。（ト兩人打解けし思入。）
正作　して、其許には、是れより何れへ。
權八　手前はこれより東海道を、江戸表へ下る道中。
正作　拙者は美濃路を遍歴なし、何れ跡より江戸表へ。
權八　然らば此場はこの儘に、
正作　お別れ申して、また再び、
權八　御緣もあらばその時は、

正作　ゆるりと江戸で、
兩人　お目に掛らん。（ト此時本釣鐘を打込み、焚火燃えあがる、兩人あたりを見廻し、）
權八　麓に聞ゆる山寺の、鐘を知るべにゆる〳〵と、
正作　闇路を辿るもまた一興。
權八　左樣ござらば庵原氏。
正作　平井氏。
權八　どりや、坂の下へ。（ト刀を落し差しにするを、木の頭、）下るでござらう。
ト兩人引張りよろしく、山おろし、合方にて、

ひやうし　幕

二幕目

坂の下　龍掛村杉林の場
龜　山　城下口榎下の場
四日市　鹽濱一軒家の場

【役名】――平井權八、旅籠屋八藏、本庄助七、盜賊桑名屋新五郎、代官鹿倉郷太夫、手下隼次郎吉、

助七弟助八、手下猿猴三次、同野狐市蔵、同梟九郎助、絹賣の供太七、若黨佐五平。權八許嫁八重梅
新五郎女房お濱、伊勢參りの千太等。」
(東海道坂の下の場)――本舞臺一面の平舞臺、後筆捨山を見たる遠見、上下杉の根株大分にあり、下の方道祖神の塚などよろしく、總て東海道坂の下の體。爰に百姓○△□◎の四人鋤鍬を持ち、根株へ腰を掛け煙草を呑み居る、此の見得山おろし、馬士唄にて幕明く。

○　扨皆の衆、此の街道で近年は、旅人に怪我のないといふのが、所の者の自慢であつたが、又物騒になりました。

△　丸助どのゝいふ通り、昔は鬼が住んだといふ、此の勢州の鈴鹿山も、泰平の世のお陰には無難で越されるやうになり。

□　山家住居のものは、猪、狼よりは、もろどのが怖いといつて、雨漏りを恐れて居たも、又此の頃では、

◎　追剝ぎが出て、夜に入つては鈴鹿の山は越されぬと、街道筋の噂が立ち、なげかはしいと思ふうち、

○　昨夜鈴鹿で旅人が、切殺されたといふ事で、

△　今日は檢視の宿調べのと、この宿内まで大騷ぎ。

□　兎角世間に事なかれで、

◎　今に大方在方へも、

○　嚴しい觸が、

四人　廻るであらう。

ト右鳴物きつぱりとなり、花道より鄕太夫、更けたる代官のこしらへ、背割羽織、野袴、大小、草履にて、紺看板の中間二人附添ひ、跡より前幕の太七着流し、旅なりにて出て、皆々舞臺へ來る、百姓四人この體を見て、

○　旦那さまには、御檢分のお役目、

△　御苦勞さまで、

四人　ござりまする。（ト辭儀をなす、鄕太夫立留り、）

鄕太　問屋場よりの訴へにより、死骸を檢分に參つたが、支配内の百姓どもがこれに居りしは丁度幸ひ、問ひ尋ねたき事あれば、暫時休息いたして參らう。

ト上手の根株へ腰をかける、これにて太七中間二人よろしく控へる。

○ お尋ねの儀とおつしやいますは、

△ 何の御川で、

鄕太 只今鈴鹿峠へ立越え、死骸の疵口檢分せしが、斜にすつぱり切り下げあるは、なか〳〵勝れし手並の狼藉、切殺されし當人に召仕はれしあれなる下人の申し立てを聞く所、主人は上州前橋にて彌市と申す絹商人、京都に於て得意先きより二百兩の金子を受取り、所持して居りしと申すからは、物取りの業に相違なし、怪しきものが村内へ立廻りしといふ噂などを、聞きし事でもあらざるか、それを問ひたく思ふのぢや。

四人 ござりまする。(ト合方きつぱりとなり。)

○ 怪しい者が村内へ、はひつた事でも聞きますれば、

△ 旦那さまのお屋敷へ、早速お訴へ申しまする。

□ 切られた樣子をあなたから、承はるも今が始めて。

◎ やれ〳〵、それではお前さんが、切られたお人のお供さんか。

太七 主人が大事な註文書を坂本の松屋へ忘れ、それを取りにわしは取つて返して、忘れ物のある所を搜せどそれも分らず、二時ばかりおくれまして跡から道を急げども、到頭主人に追附かず、日が

暮れて越える鈴鹿山で、死骸の樣子を見てびつくり、はや縡切れて居りましたので、殺したものの手掛りなく殘念な事でござりまする。

鄕太　鈴鹿山に事ある時は、土山宿と當宿にて篤と詮議をせねばならぬが、して又昨日途中より道連れにでもなりし者に、怪しい事でもありはせぬか。

太七　道連れとてはござりませぬが、大津の立場へ休みし時、お代官の下役とか申すお方に供が一人、商人體の旅人が二人、以上四人の人達が道中筋は物騷ゆゑ、六人連れで行かうなど〻、頻りに勸めて居りましたが、只今申す其の立場から取つて返し、主人に別れてござりますから、跡の樣子は存じません。

□　お代官の下役など〻道中筋でいふ奴は、なか〳〵油斷はなりません。

○　斜にすつぱり切り下げた、手利の樣子は何でも侍、浪人者に違ひない。

△　どれ〳〵、わしらも村へ歸り、怪しい事でも聞き出したら。

◎　早速旦那のお屋敷へ、お知らせ申すでござりませう。

鄕太　お〻、四人へしかと申し渡した。まだ此外に旅中の樣子、問ひ紏したき儀もあれば、太七とやらは身が屋敷へ同道いたして參ろがよい。

太七　お供いたすでござりませう。
□　わしらも道まで、
四人　御一緒に。（ト皆々立ち上る、此時郷太夫下手の杉林の蔭を見て）
太七　誰やら、あれに。
皆々　や。
郷太　いや、身共に附いて參れ〱。
ト右の鳴物にて此の人數上手へはひる、跡時の鐘になり、下手の杉林の蔭より、前幕の助七、助八出て、思入あつて、
助七　兄上、今の話しの樣子、あなたもお聞きなされしか。
助八　鈴鹿山にて見受けたる死骸の樣子を聞く所、只一刀に切り下げしは、勝れし手並みと今の話し。
助七　親人さまを權八が、討ちし手並もたゞ一刀。
助八　其の殺害の同一なるは、もしや路用の金子に迫り、旅中にさまよひ權八が、切り取りせしにはあらざるか。
助七　それに相違のなき時は、此の近邊に身を忍び、隱れ居らんも計られず。

助八　そちも左樣と心附かば、是れより兩人手分けなし、此の界隈を尋ね見ん。
助七　して又、只今お別れ申し、再び出逢ふ其先は、
助八　それぞ昨日大津にて、計らず逢ひし八内が、今は金谷に旅籠屋を、いたして居ると聞く上は。
助七　彼れを便つて吉左右を、
助八　かしこで互ひに、
兩人　待合さん。（トきつとなる、此の時鳴物きつぱりとなり、下手より前幕の八藏、足早に出來り兩人を見て、）
八藏　おゝお二人さま、是れにおいでなされましたか。
助七　思ひがけない、そちや八内。
助八　如何いたして此の所へ。
八藏　昨日大津でお二人さまより、承はりし敵の權八、只今關の地藏前にて、慥に見受けてござります
ゆゑ、お知らせ申しに途中より、引返しましてござります。
ト是れを聞き、兩人悅ばしきこなしにて、
助七　よくぞ早速知らせてくれしぞ、して權八は一人なるか。
助八　道連れにてもなかりしか。

八藏　見え隱れに窺ひましたが、只一人でござります。
助七　それぞ討取るよき手番ひ、
助八　片時も早く跡追つかけ、
助七　いでや追附き、
兩人　勝負をなさん。（トきつとなる、此の時上手より以前の鄕太夫先きに、太七百姓四人中間二人出來り、）
鄕太　それ、取逃すな。
皆々　はッ。（ト助七助八を取卷き、）
太七　御代官より調べの筋あり、
□　遣ることならぬ、
皆々　待たつしやい。（トきつとなる。）
助七　如何なる調べか存ぜねども、われ〳〵共は差當り、火急の用事のござるもの。
助八　跡にて委細を承はれば、道を開いて、
兩人　通しめされい。
鄕太　いや、如何なる火急の用事ありとも、詮議を遂げぬ其うちは、通すことは罷りならぬ。

助七　して又それは如何なる譯、どういふ仔細でござりまする。

鄕太　仔細は夜前鈴鹿山にて旅人を殺害なせし者、侍なりと見込みが附き、詮議を遂ぐる我が役目、調べ相濟むそれまでは、帶刀なす者一人も通すことは罷りならぬ。（ト此内助七助八心の急く思入にて）

助七　そりやはや昨夜山越えをいたせし者なら、其御詮議を受けるも是非なき事ながら、われ〳〵共は水口泊り、今朝鈴鹿を越えたるもの。

助八　不正な者にござらねば、何卒疑念のお晴らしあつて、爰をお通し、

兩人　下されい。

鄕太　いや、其の言譯相立たぬ。水口泊りとあるならば、その旅籠屋へ問ひ合せ、其上ならでは通されぬ。

ト八藏も氣の揉めるこなしにて、

八藏　あゝこれ、一時延びれば三里のおくれ、此の暇入りをするうちに、取り逃がしては水の泡。

助七　何を隱さん我れ〳〵は、見のがし難き者あつて、跡より追つかけ參るもの。

助八　一時片時も暇取つては、本意を失ふ大事の際、何卒貴殿のお目鏡にて、

助七　此場をお通し、

兩人 下されい。
太七 さう言つて此所を、のがれたがるは猶怪しい。
□ 何と言はうと旦那さま、
○ めつたにお通し、
皆々 なされますな。
八藏 えゝさりとては入らぬ口出し、こりやどうしたらよからうぞ。（ト氣を揉むこなし、助八思入あつて）
助八 八藏そちは一足先きへ參り、取り逃さぬやうにいたしくれよ。
八藏 それではお先きへ參りまして、取り逃さぬやういたしませう。
助七 あいや、彼れめは八内が手並みに合ふべき者でない、なまじ手出しはよくない事ぢや。
八藏 いえ、見え隱れに跡を附け、落着く先きを突き留めまして、お知らせ申すでござりますれば、其儀はお案じなされまするな。
助七 然らばよしなに、
兩人 計らひくりやれ。
八藏 心得ましてござりまする。こりやもう一里も。（ト息込み、）遲れはせぬか。（ト逸散に上手へはひる。）

郷太　さ、遲刻せぬうち少しも早く、是れより役所へ參られよ。

助八　さ、參る事は參りますれど、

助七　みす／＼知れたる敵をば、

助八　此儘逃がすか。

助七　こりや。（ト抑へるを道具替りの知せ、）さ、御同伴いたすでござらう。

ト此模樣、時の太鼓にて道具廻る。

（龜山驛の場）――本舞臺一面常足の二重八枚飾り、後龜山の城を見たる遠見、上下植込みの張物、眞中に榎の大樹、この裾通り流れの土手板、下手に東海道龜山驛と記せし榜示杭あり、爰に八重梅屋敷娘、旅なりにて、兩掛けの荷物へ腰をかけ、下手に佐五平更けたる若黨なりにて控へ、此の見得山おろし合方にて道具留る。

佐五　もしお孃さま、馴れぬ御道中をなされまするは、嘸御難儀でござりませうが、お慕ひ遊ばす若旦那にお逢ひなさるをお樂しみに御辛抱をなされませ。お草臥れなら駕籠を雇ひ、お乘せ申すでござりませう。

八重　峠を駕籠で越えたれば、まだ草臥れはせぬけれど、何れを當と定めなき權八さまの御行方に、いつ逢はれるといふ事の樂しみとてもなき身ゆゑ、心細うてならぬわいなう。
佐五　いえ昨日も石部の立場で、若旦那に似たお武家が、休んだ話しを承はれば、何でも東へお下りに相違はないと存じます。此の親仁めが身に引受け、きつとお逢はせ申しますれば、必ずきな〳〵思召さず、お跡を追つかけ江戸表で、お逢ひなさるをお樂しみに、御道中をなされませ。
八重　とはいへ東の江戸とやらは、花の都も及びなき繁華な所と聞くからは、若しもあなたのお心が、移りし時ははる〴〵と、お慕ひ申す甲斐もなき、田舍育ちの嫌はれもの。
佐五　はて、其樣な不實意な若旦那ではござりませねば、お慕ひなさるあなたさまの、心を不便と思召し、やがて目出たう御夫婦になられまするに違ひはない。
八重　改めいふには及ばねど、幼き折にあなたとは親と親とが許嫁。
佐五　お國を隔てし山科より、平井のお家へ御養女に、お出でなされし八重梅さま。
八重　まだ其頃は花の香も寒さにすぼまる室の梅。
佐五　堅き蕾も、ほころびる、春の時節に逢ひながら、
八重　初音を待ちしつまの鳥の、

佐五　お行方聞くも白梅とは、

八重　ても味氣ない。

兩人　世の中ぢやなあ。

　　　卜よろしく思入、此時驛路入りの唄になり、花道より前幕の權八出來り、花道にて跡を見返り、こなしあつて、

權八　芒の穗にもおぢるといふ落人の身も同樣なる、敵持つ身に旅中にて人を害せし科あれば、道なき山へ分け入りて、街道筋の危ふき關も越えたれば、最早向うが龜山領、幸ひあれなる大樹の下に休らうて居る者あれば、煙草の火なと借りるといたさう。

　　　卜右の唄にて舞臺へ來る、佐五平權八を見て、

佐五　や、若旦那さまぢやござりませぬか。（卜前へ出る權八びつくりして、）

權八　そちは佐五平、どうして是れに。（卜八重梅嬉しきこなしにて側へ寄り、）

八重　權八さま、よう御無事で居て下さりました。（卜取縋ることよろしく、權八合點の行かぬこなしにて、）

權八　八重梅どのも同道にて、これに居りしは如何なる譯、もしも身共が國許を立退く跡にて何事か凶變にてもあつたるか。何とも以て心許ない、早く樣子を聞かせてくりやれ。

ト是れより誂への合方となり、

佐五　いえお跡には何事も替りしことはござりませねど、どうお若いとは申しながら、御短慮なことをなされまして、親旦那さまやお孃さまに御苦勞お掛けなされまするとは、跡先き見ずでござりまする。

八重　父上の御慈悲にて世間は實家の里方へ歸りし體にあるほどに、佐五平連れて東路へ忰の跡を慕ひ行き、他國で一生添ひ遂げよと、お情餘るお詞に、心細くもはる〴〵と下りましたる此の道中、折よくお目に掛りましたは、盡きぬ御縁と思召し、どうぞ共々東路へ、お連れなされて下さりませ。

ト是れを聞き權八思入あつて、

權八　不所存者のそれがしを慕ふそなたの心といひ、父のお情忝ないが知つての通り助太夫を、討つて立退く上からは敵持つ身の日陰もの、一人ですら東路へ下るに心置かるれば、足手纏ひなそなたを連れ、どうも江戸へは參られぬ、爰の所をよく辨へ國へ歸つて親どもへ孝行盡しくれるやう、それが一つの賴みなるぞ。

八重　いえ父上へ不孝ゆゑ、あなたに逢はれぬ身を悔み、焦れ死にをいたすまでもお國に居る氣でござ

りましたが、そちが居つては權八に未練があつて國許へ立歸るまいものでもない、跡を慕うて行く方が忰の爲との御意見に隨ひましてお國へは、歸らぬ覺悟で出ましたゆゑ、どうぞ不便と思召し、御迷惑でも御一緒にお連れなされて下さりませ。

權八　すりや父上にはそれ程に、此の身を思つて下されしか、身の短慮より親を捨て立退く不孝をお案じにて、おかばひ下さる御仁愛、死しても忘却いたしませぬ。（トほろりとして向うを伏し拜む。）

佐五　そこへお心附く程なあつぱれ利發なお生れにて、何で短慮なお心にて敵持つ身におなりなされ、親旦那さまにお歎きを、お掛けなさるゝ事かと思へば、それがお恨みでござりますわえ。

トよろしく泣く。

八重　どうぞそれゆゑ私を、一緒にお連れ下さりませ。

權八　いやどうあつても一緒には、そなたを連れて行き難し。

八重　それではやつぱり私に、愛想がお盡きなされしゆゑ、あなたはおいやでござりまするか。

權八　いや、さういふ譯ではなけれども、敵を持ちし其上に、又もや昨夜。

八重　えゝ。

權八　いやさ、言ふに言はれぬ譯あつて、助太夫を討ち立退くからは、足手纒ひは連れがたい。

八重 ても、お情ない事ぢやなあ。（トわつと泣く、佐五平思入あつて、）

佐五 いや、是れは若旦那があなたを連れては、行かれぬとおつしやりまするも御尤も、お察し通り本庄どのゝ御子息二人もお跡を追つかけ、親の敵が討ちたいと此程上へお暇願ひ、お國を發足なされました。

權八 さう聞く上は猶以てそなたを連れて道中を、いたす譯には相成らぬ、然し愛想が盡きたといふ譯でなければ江戸表へ、無難に着きし其上では、何處へなり身を落着け、そちと一緒にならうから此佐五平の介抱受け、別れ〳〵に江戸へ行き、又の時節を待つがよい。

八重 それでは江戸へ參りまして、時節を待つでござりませうが、せめて今宵は御一緒にお泊りなされて下さりませ。

權八 さあそれが相成る位なら、一緒に連れ立ち參らうが、何を申すも日蔭者、敵持つ身に尋常の本街道は行かれぬわえ。

八重 いえ、どのやうな難所でも、少しも厭ひはござりませぬ。

佐五 はてそれにては若旦那が、却つてお困りなされますれば、又の時節をお樂しみに、是れにてお別れなされませ。

八重　あれそちまでが同じやうに、すげない事を言やるのか、わしやどうあつても今宵一夜は、あなたと一緒に泊るわいなう。
權八　えゝさりとては聞き分けない、左樣な未練なことを言へば、もう夫婦ではござらぬぞ。
八重　いえ〳〵何とおつしやつても、親と親とが許しました、夫婦に違ひござりませぬ。
權八　さゝ左程思はゞ我が詞を、背かず江戸で待つがよい。
八重　それでもどうも、此の儘では。
權八　やあ、武士の娘でありながら、未練な事は言はぬものぢや。（トきつといふ。）
八重　それでは未練を、申しますまい。（ト喰ひしばつて泣く。佐五平この體を見て、）
佐五　さゝ、か程にお慕ひなされまするお心不便と思召さば、どうかあなたもお體を、お大事になされまして、江戸へお着きになりし上では、お孃さまと御夫婦になつてあげて下さりませ。それが今から拙者めの一つの願ひでござりまする。
權八　それは身共も心得居る、街道筋にて此やうに、話して居るのも遠慮勝ち、然らば是れで別れゝば佐五平跡を賴んだぞ。
八重　それではいよ〳〵此儘に、お別れ申さにやなりませぬか。

權八　そちも道中大事にいたせ。

八重　せめて道まで御一緒に。

權八　はて、連れ立つては悪いと申すに。（トきつと言つて愁ひを隠すこなし。）

佐五　左様なれば若旦那さま、随分道中御大切に。

權八　そちも道中大事にいたせ。

ト山おろし、合方きつぱりとなり、權八上手へはひる。跡を見送り八重梅こなしあつて、

八重　あれもうあなたの後影が、見えなくなつてしまつたわいなあ。

トよろしく泣き伏す、此時馬士唄になり、花道より以前の八藏先きに、助七助八足早に出來り、花道にて、

八藏　先刻關の地藏前にて、慥に見受けし平井權八、暫時の後れに見失ひ、爰やかしこと尋ぬるうち、お二人さまにもお跡より、お出でになりしは思ひの外、お早く調べが濟みし御樣子。

助七　不意の調べに當惑なし心附かずに居つたるが、昨夜の泊りを旅日記へ悉しく記し置いたるを取り出し見せしに疑ひ晴れ、直ぐ跡より追ッ附きしが、當の敵の權八を見はぐりしとは殘念千萬。

助八　然し僅かな遅れゆゑ、假令一旦見はぐるとも、よも一宿とは後れまじ、心たゆまず追つかけん。

八藏　それがよろしうござりまする。さゝお二人さま、お急ぎなされませ。

ト右の唄にて三人舞臺へ來る、八重梅はこれを知らず泣伏し居る、佐五平此體を見てびつくりなし、顔を背ける、助八目早く見附け、

助八　やゝ、そちは平井の佐五平親仁。

助七　なに、佐五平が居りしとな。（ト是れにて佐五平是非なく前へ出て、）

佐五　思ひがけないお二人さま、何れへお出でなされまする。

八藏　おゝ、絶えて久しき出逢ひゆゑ、見忘れ居たが、こんたは佐五平。

助七　見れば養女の八重梅まで、これに一緒に居るからは、

助八　扨は主人の權八と、やはり一緒に相違なし。（ト是れを聞き、佐五平思入あつて、）

佐五　いえわれ／＼はたゞ二人、お孃さまのお供をして、此の道中をいたしまする。

八藏　いえ／＼、さうは抜けさせぬ。今方闕の地藏前にて、慥に見受けし權八どの、それに家來の佐五平と八重梅どのが爰に居るは、一緒の連れに相違ない。

助七　察する所足弱ゆゑ、道におくれて此所に休らひ居りしと覺えたり。

助八　のがれぬ所とあきらめて、有體に申せばよし、未練に隱さば憎き主從。

八藏　いはゞ敵の片割れゆゑ、こりや此儘にはなりますまい。
助七　生けては置かれぬ。
助七　覺悟なせ。（ト兩人刀の柄へ手をかけ、きつと思入、これにて八重梅前へ出で、）
八重　まあ〳〵お待ち下さりませ。（ト合方きつぱりとなり、）そりやもう敵の由縁ゆゑ、權八どのと一緒であらうと思召すのも御尤も、是非ない事ではござりますれど、一緒にさへござりますれば何しにお隱し申しませう。又この旅をいたしまするも、權八どのとは幼きより許嫁でござりますれど添はれぬ譯になりしゆゑ尼になります望みにて、鎌倉とやらへ下りまする、今も今とて便りない此身を悔み佐五平と涙に暮れて居りました。それを御疑念がかゝりますなら、夫と定めし權八の代りに此身をお二人で、お殺しなされて下さりませ。假令命を捨てましても、夫の命に代りますれば身の本望でござりまする。（トよろしくこなし、）
佐五　えゝめつさうなお孃さま、あなたにお命捨てさせては此の親仁めが濟みませぬ、いか程譯を申してもお疑ひが晴れませずば、主人の代りに拙者めを、お殺しなされて下さりませ。
助七　おゝよい覺悟だ、その儀ならば望みに任せ、兩人とも討つて捨てねば相成らぬ。
助八　敵の末は根を斷つて、葉を枯らせよとの本文に、ならつて見事に討ち取りくれん。

助七　然らばそちに任せる間、底意の程を、いやさ、極意の程を見せてくりやれ。

八重　さあ〳〵、早う殺してくりや。

ト前へ出でぢつとこなし、佐五平此體を見てじゆつなきこなし、八藏支度をして前へ出で、

八藏　あつぱれ覺悟、どれ切味を試しくれん。

ト刀を拔き拂ひ嫉刃を合はせる、八重梅は目を閉ぢ、首を差延べ覺悟の思入、八藏後へ廻りエイと聲をかける、八重梅これに臆せずぢつとして居る、八藏此體を見て、思入あつて刀を鞘へ納め、

こりや全く知らぬ樣子、命を取るには及ばぬわい。

助八　知らぬとあれば是非ないこと、少しも早く權八の、行方をお尋ねなされませ。

助七　いかにもそちの申す如く、疑ひ晴れし上からは、女を討つても益なきこと。

助八　餘事にかゝつて又候や、思はぬ時刻を費やしました。

八藏　片時も早くお二人さま、道をお急ぎなされませ。

助七　然らば八藏。

八藏　お二人さま。

助七　最早夕暮間近くなつた。

ト山おろし合方にて、三人上手へはひる。佐五平始終こなし、此時前へ出で、

佐五 お出來しなされたお孃さま、よくもお命差出して、欺きおほせなされました。

八重 夫の爲に此命捨てるは本意と思ひしゆゑ、死ぬと覺悟を極めしが、却つてあちらの疑ひ晴れ、難をのがれし身の仕合せ。

佐五 これが所謂死地に入り、一生を保つ謀計。

八重 身を捨てゝこそ浮む瀬の、あるといふは此事か。

佐五 かやうな難がござりますゆゑ、あなたを連れて御道中は、出來ぬとおつしやる若旦那。

八重 どうぞ道中恙なう、江戸へお下りなさるゝやう。

佐五 神を念じてお跡から、

八重 いそぐも同じ驛路に、

佐五 またの逢ふ瀬を、

八重 樂しむ初旅、

佐五 日の暮れぬうち此の宿で、お早くお泊りなされませ。

八重 危い事であつたわいなう。

ト身ぶるひをする。此のもやう山おろし、時の鐘にて道具廻る。

（四日市の裏手一軒家の場）――本舞臺一面の平舞臺、上手折廻し反故張り障子屋體、正面上の方一間の押入、續いて一間の障子の出這入り、下の方鼠の破れ壁、これへ投網など釣してあり、下手畫心に竹簀戸の門口、此の左右粗朶の垣根、この外上に貝殼を乘せし葺下しの下家、ずつと下の方川の片遠見、總て四日市の裏手一軒家の體、よき所へ居爐裏を切りこの傍にお濱結び髪の世話女房、やつしなりにて粗朶を焚き附け居る、門口の外に序幕の千太やつしなりにて箒を持ち、表を掃除して居る。此の見得浪の音、唄にて道具留る。

千太　錢を出さずに泊めて貰ふにやあ、よつほど體に骨が折れるが、外と違つてこつちの家は、ごろ附いて居いゝ家だ。（ト掃除をしてしまつて内へはひり、）姉御、掃除はしまひましたが、何ぞ使ひはありませんか。

お濱　お酒を買つて置かなかつたから、日の暮れぬうち宿へ行つて、二升ばかり提げて來ておくれ。

千太　あい〳〵承知しました。樽がまだ明かずに居るなら、酒屋で借りて來ませうか。

お濱　いゝえ臺所に明けてあるから、あれへつがせて來るがいゝ。

千太　あい〳〵。（ト正面の障子のうちへはひる。）

お濱　同じ抜參りの小僧でも、江戸で育つた伊勢參りは、氣が利いて居て使ひいゝが、其替りにはすれツからしで、めつたに白い歯は見せられない。（ト千太奥より二升樽を提げて出で、）

千太　姉御、都合が惡けりやあ酒屋で借りて來ませうか。

お濱　借りて來るにやあ及ばない、八百あるからこれを遣つて、一番いゝのを買つて來な。

ト錢を出して遣る、千太取つて、

千太　八百出しやあ上客だ、極く飛びきりをつがせて來ます。（ト花道へ行き立ち留り、）四百の酒を八百出して、二升買ふのは馬鹿けるから、百落したと酒屋を籠め、二升つがせて殘つた錢で歸りに餅でも買つて喰はう。（ト右の唄にて花道へはひる、此うちお濱は納戸口より行燈を出して燈し、）

お濱　廣い世界に世渡りの、稼業も多くある中に漁師といふは表向、道に背いた稼ぎゆゑ、天の罰にて網の目にかゝると知らぬ夫の惡心、あさましいとは思へど、きかぬ異見に是非もなく、連添つては居るものゝ、夜の目も寢られぬ憂き苦勞、せめて夫の罪ほろぼしお伊勢樣への申譯に、旅にさまよふ伊勢參りや路頭に迷ふ物貰ひに、施行をしては遣るものゝ、それも世間へ面ぶせ、あゝ困つたものではあるわいなあ。

ト濱唄、浪の音きつぱりとなり、花道より以前の權八出來り、花道にて舞臺を見て、

權八　桑名を越ゆるそれまでは、所詮宿へは泊れねば、道に迷ひし體に見せ、向うに見える一軒家、あれへ便つて一夜の宿、どうか賴みを聞けばよいが。（ト右の唄にて舞臺へ來り、門口より內を窺ひ、）あいや御免下されい。此家を見かけ折入つて御無心あつて參りし者、お聞き濟み下さりませうや。

ト門口を明ける、お濱こちらへ出て權八を見て、

お濱　見ればお若いお武家さま、して御無心とおつしやるは、どのやうなお賴みか、まあおつしやつて御覽じませ。

權八　手前ことは中國邊より伊勢參宮に下りしもの、まだ初旅でござるゆゑ、兎角道中不案內にて道踏み迷ひ足を痛め、本街道へ出ませうにも、日暮に及びほとんと當惑、お見掛け申して一泊の宿りを御無心申したいが、何とお聞き濟み下さりませうや。

お濱　それは定めて御難儀と、お察し申して居りますが、御覽の通りの此の茅屋、旅人などを止めるやうな夜の物とてござりませねば、其お賴みは聞かれません。

權八　いや〳〵、蒲團や食事などは、決してお構ひ下さるな、元より旅籠をなさるべきお宅でないと見かけまして、御無心申す儀でござれば、納屋か木小屋の隅へなりと置いてさへ下されば、それに

て一夜の夜を明かし、足の痛みを養生いたし、明朝未明に立ちます心得、是非とも御無心申したい。

ト是れにてお濱思入あつて、

お濱　それ程にお頼みゆゑ、夫が正しい漁師なら。

權八　えゝ。

お濱　いえ、夫が旅籠の生業なら、お泊め申すでございませうが、何をいふにも川端の一軒屋ゆゑ人一人泊める譯にはなりません。

權八　それでは旅籠をなさらぬゆゑ、御承引はなりませぬとな。

お濱　どうぞ是れから十四五町、向うへお出でなさいますと、四日市といふ宿のある本街道へ出ますから、それへ便つて旅籠屋へ宿をおとりなさいまし。

權八　十四五町は扨おいて、五町の道を歩きますにも、甚だ難儀いたし居れば、相成るべくはどうかこちらへ。

お濱　いえ、お氣の毒でございまするが、お斷りを申します。

トきつぱりといふ、此時上手障子屋體より新五郎、好みの鬘褞袍三尺にて出來り、

新五　いや、それ程お困りなら、家へ泊めてあげるがいゝ。
お濱　えゝもし、それでは若い者が歸つた時に不都合ゆゑ。
新五　はて子分の奴等が歸らうとも、みんなごろ寢の連中だ、なに構ふことがあるものか。
　　トよろしく住ふ、權八悦ばしきこなしにて、態と跛を引きながら内へはひり。
權八　それでは御承知下さるかな。
新五　見なさる通りの茅家で、たゞ雨露を凌ぐばかり、着て寢るものもござらぬが、不自由を承知で泊るなら、一晩ぐらゐは泊めてあげます。
權八　それは千萬忝い、今も御内儀へお頼み申して居つた通り、不案内なる道踏み迷ひ、足は痛める日は暮れる、途方にくれし旅の者、木部屋の隅へ只一夜、置いてさへ下さりますれば、それにて拙者が助かります。
お濱　それでは餘りお氣の毒ゆゑお斷り申しましたが、泊めて上げろと内の人が申しますればお武家さま、今御洗足を取りますから、足をお洗ひなさいまし。
權八　いえ草鞋喰ひを厭ひまして、草履をはいて居りますれば、足はとんと汚れませぬ。
新五　それぢやあ洗足の世話なしだ、さあ〳〵必ず遠慮をせずと、ずつとこつちへ通らつしやい。

權八　そのお詞を承はり、やう／＼安心いたしました。（トよろしく住ふ。）

お濱　足が痛みなさるなら、お樂にお出しなされませ。

權八　いやわれ／＼は胡坐より、坐りまするが勝手でござる。

新五　成程お武家は胡坐をかくと、却つて困るといふ事だ。（ト是れより替つた合方になり、）聞けばこなたは中國邊の、お人とやらいふことだが、中國はどの邊だね。

權八　但州の豐岡にて、僅かな扶持を穢しまする部屋住ものでござりますが、心願あつて暇を願ひ伊勢參宮に參りし所、馴れぬ旅ゆゑ道ふみ迷ひ、先刻途中で承はれば、餘程の損をいたせし由、して此邊は、何と申す所の地名でござりますな。

新五　爰は漁場の海へ近い鹽濱村といふ所で、四日市の裏手だが、伊勢へ行くなら近道が、幾らも是れまであつたのに、とんだ廻りをしたものだ。

權八　いやもう不案内と申すものは、いたし方のないものでござる。

お濱　何はなくとも夕飯を一膳あげたうござんすから、暫く待つて下さりませ。

權八　いえ／＼それは入らぬ御配慮、先刻途中で十分に支度をいたして參つたれば、食事はほしくござりませぬ。

新五　いや遠慮には及ばぬから、飯前なら喰つて寢なさい。
權八　いえ御遠慮はいたしませぬ、相成るべくは食事より、足を痛めて居りますれば、何れの隅でも厭ひませぬ、休息したうござりまする。
お濱　それではどうか御勝手に、むさくるしくとも一間にて、足をお休めなさいまし。
權八　どうか御亭主、失禮は御容赦なされて下されい。
新五　さあ〳〵、わしに構はずと、早く行つて寢さつしやい。
お濱　寢所の出來る間、手水にお出でなさらぬか。
權八　さうして厠はいづれでござる。
新五　これお濱、敎へてあげろ。
ト合方きつぱりとなす、お濱案内して權八上手障子屋體の内へはひる、新五郎跡を見送り思入あつて、
お濱　かうお出でなさいまし。
新五　身裝は立派でねえけれど、ちよつと睨んだ懐に路用の金もまんざらに、端た金ぢやあねえ樣子、あゝいふ鳥を見のがすたア、かゝあのどぢにも困つたものだ。

ト煙草を呑み居る、潑唄きつぱりとなり、花道より以前の千太、樽を提げ出來り、直に門をはひり、

千太 親方、酒を買つて來ました。

新五 買つて來たなアいゝけれど、幾らの酒を買つて來た。

千太 姉御が八百渡したから、一番いゝのが二升あります。

新五 大方手前のことだから、幾らか足駄をはいたらうな。

千太 何でそんな事をするもんか。

新五 しねえことがあるものか、口の端を見やあがれ。（ト是れにて千太びつくりして、）

千太 それぢや餡が附いて居たか。（ト口の端を撫でる。）

新五 いくら酒を買つて來たか、有體に言つてしまへ。

千太 錢は百くすねたけれど、途中で落したとごまかして、酒はやつぱり四百のを二升つがして來ましたから、親方堪忍して下さい。

新五 二升の酒を八百出して、買つて來る奴でねえ事ァ、おれがちやんと見拔いて居るから、惡い酒でも買つて來たかと、鎌をかけて聞いてやつたら、直に本音を吹きやあがつた。

千太 それぢやあ言はずに居りやあよかつた。

新五　餅を買つた殘りの錢を、みんな爰へ出してしまへ。
千太　百だけ買つて喰つたから、もう一文もありません。
新五　ねえ事があるものか、三尺の間にくるんである。（ト千太びつくりして三尺帶を押へ）
千太　こいつもとう〳〵見出されたか。（ト錢を出して新五郎に渡す。）
新五　手前なんぞにおれの目を、めつたに拔かれてたまるものか。
千太　こいつァ一番生馬の、
新五　何だと、
千太　こいつはけんのん。（ト千太奥へ逃げてはひる。）
新五　なりは小さな奴だが惡い事にやあ拔目のねえ、おれの目まで拔くといふは、當時の小僧はなかなか油斷がなりやしねえ。（ト爰へ上手より以前のお濱出で來り、）
お濱　もし新五郎どの、何でお前はあのお武家を、今夜内へ泊めなすつた。
新五　何で內へ泊めるものか、足を病めて困るといふから、後生の爲に泊めたのだ。
お濱　いえ〳〵さうぢやござんすまい、寢息を考へ、あの路用を。
新五　あこれ。（ト押へ、上手の屋體を覗く、お濱思入あつて）

お濱　えゝ、お前はなあ〳〵。（ト合方になり、）それがいやさに泊めるのを斷つて居たわたしの心配、お伊勢樣へ參るといふお武家を殺し、その路用を盗んで罰が當らぬと思つて居るのは大きな不覺、そりやもう凡夫盛んには神祟らぬといふけれど、いつかは廻る惡の報い、果ては見る目もあさましい仕置をうけて木の空へ、首を晒すが本望か、惡い人でも連れ添へば退くに退かれぬ夫と思ひ幾度となくわたしの異見、お前は聞いてはくれぬのかいなあ。

ト思入にていふ、此うち新五郎奥へ氣兼れのこなしあつて、

新五　これさ、そんなに案じるな。おれも手前の異見に附き、惡事は止める氣で居るが、手下の奴等があるからは、止めるといつても止めさせねえ、所がどうか纏まつた大きな仕事があつたなら、足を洗つて手前を連れ、高飛びをして堅氣になり、罪滅ぼしをする氣だから、今夜の所は邪魔をせず、手前は見ぬ顏して居やれ、

お濱　いいえ、見ぬ顏をして居ては、お前の爲にならぬゆゑ。

新五　はて、それだから血塗れの、荒い療治は止めにするから、まあ一ぺいつけて來い。

お濱　そんならきつと止めなさんすか。

新五　いゝから、靜かにしろといふに。

お濱　ても、覺束ないものぢやなあ。

ト案じるこなしにて、件の樽を持つて奥へはひる。此時濱唄きつばりとなり、花道より前幕の次郎吉先きに市藏、三次、九郎助連れ立ち出來り、舞臺門口より内を窺ひ、

四人　頭、今歸つた。（ト内へはひる。）

新五　あゝこれ、客があるから靜かにしろ。

トよろしく思入、四人はこれを聞きこなしあつて、下手に住ひ。

次郎　客があるたア留守の間に、いゝ鳥でも掛りやしたか。

新五　塒に迷つて宵の口、舞ひ込んで來た椋鳥を、籠へそつくり入れてあるが、羽がひの下にやあざつと踏んで鳩の玉子にお立ちはねえから、逃がさぬやうに靜かにしろ。

次郎　そいつア間夫な仕事だが、それに引替へこちとらは昨日大津でがん附けた上州邊の絹商人、安く踏んでも一人前五十兩にやあなる仕事と、鈴鹿山まで追ひ込んで、首尾よく行つたと思ひの外、邪魔にはひつた侍が滅法腕の利いた奴で、いやといふ程四人とも刀の峰で引つぱたかれ、犬骨折つて高手小手に縛られねえのがめつけものだ。

新五　そいつァ馬鹿なめに逢つたが、さうして其侍は、どんな樣子の奴だつた。

市藏　こつちも夜目ではつきりと、面に覺えはねえけれど、
三次　何でも十九か二十ぐれえな、なりの大きな若い侍。
九郎　詞の樣子は中國の生れの奴に違えねえ。（トこれを聞き新五郎思入あつて、）
新五　それぢやあ着物は黒羽二重に、丸に非の字の紋所を、大きく附けて居やあしねえか。
四人　どうしてそれを知つて居なさる。
新五　その侍なら今言つた、宵に泊つた椋鳥だ。
次郎　それぢやあ彼奴がこつちの家へ、塒に迷つて舞ひ込んだか。
市藏　彼奴が奥へ來てゐると、聞いてもおらァぞつとする。
三次　まあ何にしろ寢て居るか、そつと樣子が見てえものだ。
新五　草臥れたかして大鼾きで、一間の隅に寢て居るから、障子の穴から覗いて見ろ。
次郎　どれ、鹽鮪とやらかさう。（ト上手へ行き障子の穴から内を覗く、）
市藏　どうだ兄貴、
三人　寢て居るか。（ト次郎吉こちらへ歸り、）
次郎　大鼾きで寢て居るから、何を言つても知れやあしねえ。

新五　それぢやあ昨日手前達が睨つた金は、彼奴が横取りしたに違えはねえ。
次郎　そりやあ頭のいふ通り、こちとち四人が逃げた跡でその絹賣りを切殺し、うめえ仕事をした樣子。
新五　さういふ事なら手を下さず、濡手で泡の工風がある。（ト次郎吉に囁く。）
次郎　それぢやあ、あの痺れ藥で。
新五　あこれ、靜かにしろ。」（ト新五郎立上り上手の押入の内より藥包みを取出し、）お濱の奴に言附けると、又兎やかうと面倒だ、次郎手前が仕込んで來い。
次郎　そりやあ造作もねえ事だが、酒が買つてありますか。
新五　二升買つて臺所で、かゝあが支度をして居るから、知れねえやうに仕込んで來い。
次郎　そいつア丁度幸ひだ。（ト藥包を持ち立掛る。此時奥より以前の千太出かゝり居て、）
千太　其の大役はこの千太が、うまく遣つて見せませう。
市藏　えゝ、聞かずともいゝ事を。
三次　手めえなんぞが出しやばつて。
九郎　滿足なことが出來るものか。
千太　恥あるものを使ふときは、必ず大功を顯はすとは、唐の識者の言ひ傳へ、さつき酒屋の使ひでし

くじり、お拂箱があぶないから、功名手柄を顯はす氣だ。

新五　此小びつちよはいけねえ替り、不斷機轉が利いて居るから、遣つてのけるに違えはねえ。

次郎　そんならきつと、

四人　遣つてのけるか。

千太　先づ段取りの仕方を話すが、燗徳利を二本出して仕込んであるのとないのをこしらへ、親方始めみんなには仕込んでないので酌をして、彼奴一人には仕込んだのを、知れないやうに飮ませるのが早いちよつけの働きだ。

次郎　さういふ手品を知つて居りやあ、どうか甘く遣れさうだ。

新五　それぢやあ手前に任せるから、やんやと甘く遣つて見せろ。

千太　先づ臺所で姉御の目を、くらませるのが前藝だ。

新五　そんなら奴に、今の包みを。

次郎　遣り損なふときかねえぞ。（ト件の包みを千太に渡す。）

千太　東西、太夫身ごしらへの間、今一囃子は御容赦下さい。

ト正面の障子の内へはひる。跡にみな〳〵思入あつて、

新五　かう極つたら當人を、爰へ起して來ざあなるめえ。（ト新五郎上手の屋體へはひる。）

次郎　何でも爰へ起きて來たら、みんなでおひやつて遣るがいゝ。

市藏　ごまを摺るのは、ごまの灰にお手前ものも同樣だ。

三次　油斷をさせて得手物を、彼奴に飲ませてしまふまでは。

九郎　仕方がねえから下手に出て、旦那ごかしにしにやあならねえ。

ト合方きつぱりとなり、上手より以前の權八、新五郎出來り、

新五　丁度内の若い者が、只今歸つて參りましたから、逢つて遣つて下さいまし。

ト權八下手を見てよろしく住ひ。

權八　先刻から見受けし所、網などがあれに見ゆるは漁師のお宅と思はれますが、さては濱から子分の衆が、歸つておいでゞござるのか。

新五　いえ、其漁も此節は暇でさつぱりござりませんから、鼻を揃へて若い者が、みんな遊んで居りまする。

權八　子分の衆とござるなら、お近附きになりませう。

新五　これ〳〵みんな爰へ出て、一昨日のお詫びをするがいゝ。

権八　なに、詫びをいたすとは。（ト合點の行かぬ思入、手下四人前へ出て。）
次郎　お侍さま、昨夜は大きに失禮を、
四人　いたしましてござりまする。（ト辭儀をなす、權八よく〳〵見て、）
權八　やゝ、鈴鹿で出逢ひし四人の者、扨は此家はこなた衆の。
新五　面目次第もござりませんが、漁師が暇な所から小皿博奕が病み附きで、果ては命を投げ出す、投げ丁半の旅稼ぎ、乘るか反るかで旅人を脅して引ッ剝ぐ惡玉も、あなたに逢つちやあ胴中を引ッさらはれた昨夜の骨灰、さうとも知らず宵の間にお泊め申した樣子を聞き、今こいつらが恐れをなし、尻尾を卷いて逃げるといふのを引留めまして私から、昨夜のお詫びをして遣るから、此後旦那にお手向ひを、するなと申して呵り附け、御迷惑でもお睡氣を覺させましてござりまする。
次郎　へい〳〵、どうぞ旦那さま。
市藏　昨夜の事はあれぎりに、
三次　水に流して下さるやう、
九郎　一同お詫びを、
四人　申し上げます。（ト權八思入あつて、）

權八　いやさう言はれると此方でも、詫びをせねばならぬといふは、峰打ちながら散々に、打擲をいたした人々、嘸身内も痛まうが、あれは時の張りあひなれば、どうぞ容赦をして下さい。

次郎　どういたしまして、あの節に峰打ちなればこそよけれ。

市藏　もし刃の方でござりましたら、四人は大根千六本。

三次　汁の實よりも賽の目の、ぶつ／＼切りになる處。

九郎　からい命を拾ひましたも、あなたのお慈悲でござりまする。

新五　たゞ何事も今晩のお宿をいたした私に、お免じなすつて御勘辨を、下さるならば一同に、

次郎　有難い事で、

皆々　ござりまする。

權八　言はるゝ通り一泊の恩ある主人の詞といひ、元よりこつちに遺恨はない、昨夜の事はあれぎりに、水に流すでござらうから、さあ／＼お手を上げて下さい。

次郎　それでやう／＼一同に、

市藏　安心いたして、

四人　ござりまする。

新五　扨早速に旦那さまが、お詫びを御承知下されば、こんな目出たい事はない、せめての事にお寢酒を一獻上げたく思ひますれば、どうかお過し下さいまし。

權八　いや〳〵身共は性來下戸ゆゑ酒は好もしからず、それは無用にして下さい。

新五　まあよろしうござりまする。これ〳〵お濱、酒がついたら有合もので出してくれ。

ト呼ぶ・合方替つて、奥より以前のお濱廣蓋へ鹽燒の肴を載せ、跡より千太燗徳利を二本持つて出來り、お濱酒道具をよろしく並べ、

お濱　ほんの濱邊の有合もの、お口にとても合ひますまいが、一つお上り下さいまし。

權八　これは見事な鯛の濱燒、この持成では氣の毒千萬。

新五　どれ亭主役にお燗を見て、旦那へ一獻差上げよう。

ト大ぶりの猪口を取りあげ千太へ目配せする、心得てこれは毒ではないといふ仕方をして酌をする。

新五郎よろしく飲んで、

さあ旦那さま、お一つお上り下さいまし。（ト差す、權八猪口を引受け、）

權八　折角のお持成ゆゑ、然らば内端についで下さい。（ト千太以前の燗徳利を持ち見て、）

千太　親方燗が熱くはないか。

新五　なに丁度いゝ。(ト言ひかけて心附き、)おゝさうだ、熱いとも〳〵沸燗で口へしみた。

千太　あんまり熱いのは毒だから、下戸の方にはこつちがいゝ。(ト別の徳利の酒をつぐ、)

權八　おッと〳〵、是れはしたり、餘りなみ〳〵ついでくれたが、誰ぞ助けて下さらぬか。

新五　いえ此邊で賣る酒は、半分は水が交れば、一杯位あがつても、醉ふ氣遣ひはござりませぬ。

權八　どうか是れだけ飲めればよいが。(ト迷惑さうにぐつと飲む、千太これを見屆け、)

千太　しめた。(ト思はず言つて口を押へる、お濱これに心附かず、肴を小皿へ取り分け、)

お濱　所詮お口に合ひますまいが、お箸をお附け下さいまし。

權八　これは別段忝けない。(ト盃洗にて猪口をすゝぐ眞似をして、)然らばこれは御亭主へ、返杯といたします。

新五　いえお願ひでござりますが、どうかあなたのお流れを、子分の者へ順杯に、いたゞかして下さいまし。

權八　それでは順はそちらにて、よろしく廻して下されい。(ト猪口を差出す。)

新五　これ〳〵次郎吉、手前から順に、みんなに飲ましてくれ。

次郎　ならう事なら、外の猪口で。

新五　えへん〳〵。(トまぎらす。)
次郎　いえなに、順に廻すも面倒だから、銘々茶碗で熱燗を、きゆうと一杯遣りたいものだ。
市藏　こいつア兄貴、いゝお捌き。
三次　旦那へ對しては、失禮だが、
九郎　猪口は茶碗で、酒は熱燗。
次郎　さあ〳〵奴に、
四人　ついだ〳〵。
ト銘々有合ふ茶碗を取つて出す、千太以前の德利にてよろしく酌をする、手下四人捨ゼリフにて酒を飲み、新五郎權八の樣子を見遣り、
新五　御客人、もう一杯上らつしやらぬか。
權八　いや只今の一獻にて、大分酩酊いたしたやうぢや。
新五　こりやあさうだらう、僅か猪口に一杯でも、こいつア利かにやあならねえ筈だ。
權八　えゝ。
新五　そろ〳〵本音を吹かにやあなるめえ。

お濱　そんならお前は、お客さんへ。
新五　手足の利かぬ痺れ藥を。
お濱　えゝゝゝ。
新五　おゝ四人の者の話しを聞き、所詮たゞぢやあ剝げねえから一服盛つて引ツ剝ぐのだ。
次郎　さうとも知らずうか〳〵と、手盛を喰つたる椋鳥め。
市藏　鈴鹿の遺恨だ。
四人　覺悟しろ。（ト是れにて權八扨はといふ思入にて、刀を引附けきつとなり、）
權八　やあ假令手盛りを喰ふとても、汝等如きにをめ〳〵と所持の金子を渡さうや、ならば手柄に取つて見よ。
新五　えゝぐづ〳〵言はず、身ぐるみ脱いでしまへ。（ト立ち上らうとして體の痺れるこなしにてどうとなり、）
やゝ、どうやら、體の痺れるのは、仕込んだ酒が違やあしねえか。
次郎　さういやあ、今の間に、おれも手足が痺れて來た。
市藏　こりや奴めが間違へて、
三次　仕込んだ酒をあべこべに、

九郎　飲ましやあがつたに違えはねえ。（ト皆々體の利かぬこなし、千太此の體を見てびつくりして）
千太　仕込まぬ方の徳利を、先きへ藥罐へ入れたのだが、どうして燗が間違つたか。
お濱　通り過ぎてはわるいと思ひ、わたしがお燗をつけ替へたを、知らぬといふも天の罰。
新五　そんならそれで、
皆々　やあ〱〱。
千太　涎が垂れちやあもう駄目だ、額へごみでも附けなさい。
新五　うぬ、どうするか。（ト立たうとしてどうとなる。）
千太　こいつアたまらぬ。（ト下手へ逃げてはひる。權八此の體を見てにつたり笑ひ、）
權八　しびれ藥といふものを、道中筋でごまの灰が用ふる話しは聞いて居たが、見るは始めていゝ慰み、とんだ達磨のまぢ〱と壁を睨んだ腰拔けも、詫びた心の無一心、巧みがあるとは知らずして今夜の禮に一包み、置いて行かうと思ひしも、腐つた性根と悟つてはたゞの一兩二兩でも、もう施しては行かれねえ、見りやあ見る程馬鹿な面だ。
ト件の百兩を懷中する、お濱前へ出て、此の時下座のドン〱、竹法螺の音になる、皆々びつくりして、

新五　何だか大分、

五人　騷がしい。

權八　俄に打ち立つあの太鼓は、人を集める合圖の樣子。

お濱　早く樣子を聞きたいものぢや。

ト早き合方ばたばたになり、花道より褞袍三尺なりにて手下走り出て、舞臺門口へ來り、

手下　頭内にか、大變だ、早くみんなで逃げなせえ。

新五　何だみんなに、

五人　逃げろとは。

手下　代官所からの觸れ渡しで、此の鹽濱の八方を取卷く樣子はこつちの家へ、づきが廻るに違ひはねえから、早く逃げにやあ喰ひ込む、おらも是れからふけにやあならねえ。（ト言捨て下手へはひる。）

新五　逃げろといつても、此の體

次郎　こいつァ難儀な、

五人　惡いはめだ。（ト皆々立たうとしては體の利かぬこなしよろしく、）

お濱　どうぞあなたも今の内、お逃げなされて下さりませ。

權八　おゝ、我も惡事の疵持つ足、調べに逢はぬ其うちに。

お濱　裏手へ出れば川傳ひ、濱邊の方へ行かれます。

權八　お內儀、いかい世話であつた。

ト正面障子の內へはひる。此の時花道より捕手大勢出來り、門口にて內を窺ひ、

捕手　それ踏ん込め。（ト皆々內へはひり、よろしく取卷き。）地頭のお下知だ。

皆々　神妙にしろ。

新五　こりやもう嫁に、

五人　いつた晚だ。（ト皆々繩に掛る。）

お濱　ても情ない。（ト取縋るを新五郞、）

新五　えゝ、もう斯うなつたら、（ト突き放すを木の頭。）どうなるものかえ。

ト新五郞繩附の儘立上る。此の模樣よろしく、浪の音、早い合方にて、

ひやうし　幕

三幕目

西尾在一里塚の場
岡崎無量寺の場

〔役名――野崎の後家お蔦實は妖猫、西川宗三郎、獵人吉田の繁蔵、武術者五百原正作、所化雲鐵。在所嬶あおくら、百姓大勢、祇園町の藝子お袖等。〕

（岡崎在西尾道の場）――本舞臺向う一面在體、麥畑夜るの遠見上下山の張物、諸所に松の立木、總て三州岡崎在西尾道の體、爰に○△□◎の百姓四人、簑笠にて吉良外十ケ村と記せし高張提灯、竹槍を持ち、竹法螺を持ち太鼓を叩き立掛り居る、この見得在郷唄にて幕明く。

○　皆の衆御苦勞でござるの、晝の內は田をうつて、夜に入ると每晩々々斯うして變化を退治に出るが、まだ日が暮れたばかりだから、よもや出ては來ますめえ。

△　ところがその日暮が惡いのぢや、子供達が表へ出て赤子の守りをして居る所を、同じ友達の子供になつて來て、いつか攫つて行くさうぢや。

□　斯うして每晩騷いで步くも、猫ぢや〳〵といふことだが、まだ何處の村でも突留めねば、猫だか何だか分らぬて。

◎　秋葉の山が近いから、もしや天狗の仕業かも知れぬが、たゞこちとらは騷ぐばかりで、一向埒が

明かぬゆゑ、

○ 今度村中相談して、矢矧の畑右衛門どのゝ甥で、吉田の火打坂に居る、獵人の繁藏といふ鐵砲打を頼んださうだ。

△ そりやあ今方西尾へ行つた、鐵砲をかついだ小造りの男だ、今鐵砲打では三州切つて此の近國にない腕前だといふから、うまく遣つてくれるだらう。

□ 何でも目指すは西尾近邊、その鐵砲に當てられるか、またこちとらが突留めるか、手柄は仕勝といふものだ。

◎ 何にしろ肝腎の、正體を突留めたいものだ。

ト竹法螺を吹く、合方にて、花道より雲鐵坊主鬘、鼠法衣の着附、草履下駄にて一升徳利を風呂敷に包み出て來り、舞臺へ來て、

雲鐵 これは皆の衆、今宵も出掛けさつしやつたかな。

△ 雲鐵さまも御修行でござるか。

雲鐵 今戻りがけぢやから、ちよつと煮賣屋へ寄つて行くのぢや。

○ それでは、またお神酒が上りますな。

雲鐵　面目ないが年を取ると、これが命の洗濯ぢやて。
○　あんまりさうでもござりますまい。（ト竹法螺の音する。）
□　あゝ、西の方で始まつたな。それではこつちも勢を揃へ。
△　くね際から山を一廻り廻つて來べい。
◎　また今夜の辨當は、お寺を借りて遣はうから、
○　夜中に大勢押掛けて、酒を御馳走しますぞや。
雲鐵　それが愚僧の役德ぢや。
□　そんなら後に、
四人　行きますぞや。（ト百姓わや〳〵言つて下手へはひる。）
雲鐵　あんなに大勢で押して歩いて、何で化物が出るものか。いや、是れが譬にいふ言葉多きは品少しぢやなあ。

ト唄になり、上手よりおくら結び髮、窶しなり、洗濯屋㒵にて、油差しを持ち出て來り。

くら　おゝ雲鐵さん、お前何處へお出でだえ。
雲鐵　今日は岡崎の傳馬町に、七年の逮夜があつて、回向を賴まれて行つて來たのぢや。

くら　世の中は廣いものだね、お前のやうな生臭坊主にお經を賴む人があるとは、嘸佛樣も浮ばれるだらう。

雲鐵　わしは生臭にしたところが、上げるお經が有難いから、それで佛は浮ばれるといふものぢや。そのお布施でこの通り、仕込みをして來たから、今夜は寺へ泊つてはどうぢや。

くら　それは何より御馳走だが、實はわたしも日の暮方歸らうとしたが、油が切れて居たから今買ひに行くところ、是れを持つて寺へ行くと、家へ歸るはおつくうゆゑ、それを目當に泊らうわいな。

雲鐵　若しこの酒で足らぬ時は、吉良の衆が夜廻りをして夜中になると中食に寺へ來るから、その時はその酒をはぢく積りぢや。

くら　さういふお齋の口があつては、當もない家へ歸つてぼんやり一人で寐ても居られぬ。どうでしまりはして來たから、今夜はお寺でたらふく飲み、極樂往生するとしよう。

雲鐵　ついでにお布施を書入れて、わしにもこなたの阿彌陀佛の光りで、極樂往生させてはくれぬか。

くら　馬鹿なことをお言ひでないよ、なんぼわたしが一人身で幾らお布施がほしいといつて、御出家では罪になります。

雲鐵　何の罪になるものか、住持も居ないあの古寺、氣兼するのは老母のみ、そんな心配せぬがよい。

くら　お布施はほしいがお前では、酒の相手より外は出來ないね。
雲鐵　はゝあ、それではわしの說法では。
くら　まあ、油を買つて來てから、とつくりと相談しようわいなあ。（ト唄になり、おくら花道へはひる。）
雲鐵　あの洗濯屋のおくらめを、お布施で口說き落さうと折々は當つて見るが、見掛けは尻が早さうぢやが、よく〳〵わしが氣に入らぬか。今にどうか此酒でうまく說き附けて、無理往生をさせたいものぢや。
ト唄になり、雲鐵上手へはひる。花道より宗三郎旅なり一本差し、お袖抱子を背負ひ、兩人草臥れたろこなしにて出て、花道にて、
宗三　さぞ草臥れたことであらう。もうちつと行つたら泊れよう、我慢して步いてくりやれ。
お袖　斯ういふことなら西尾とやらで、いつそ泊ればようござんした。
宗三　何にしろ、日は暮れかゝるに、泊る所の定まらぬ、こんな心細いことはない。
ト此うち兩人舞臺へ來る、赤子笛になり、
お袖　久しく飮ませずに置いたから、ひもじくなつたでござりませう。
宗三　まあ、爰へおろすがよい。（ト宗三郎抱子をおろし捨石へ腰を掛け、乳を飮ませることなどあつて、）

お袖　里に遣つて置くうちに、上りかゝつた乳房ゆゑ、思ふやうに出ぬと見え、この泣くことわいな。
宗三　是れにつけても里親の、八瀬の親仁もそでないものぢや。生憎と燈火はなし曇つて居るゆゑ、四邊も見えず、こんな困つたことはない。（ト當惑の思入、花道よりおくら油差しを持つて出來り、）
くら　おゝ、泣出しさうな空になつて來た。おゝ泣出すといへば赤子の泣聲、もし往來のお方でござんすか。
宗三　はい、旅の者でござりますが、宿に困つて當惑いたします。此の近邊に宿屋はござりませぬか。
くら　それはまあお氣の毒な、宿屋どころか此邊は、人家も少ない横道だが、いつたい何處へお出でゞござります。
宗三　西尾に知るべがござりまして、今日晝前に岡崎から尋ねて參ると、その家は斷絕して跡方なし、それゆゑ誠に差支へます。
くら　それは嘸お困りだらうが、爰は西尾の直ぐ在だが、さうして尋ねるそのお方は何とお言ひなさいます。
宗三　以前は西尾の鄕士にて、野崎主膳と申しますのが、懇意なものでござります。
くら　その野崎さまなれば、今お袋さまがお殘りにて、この先きの無量寺といふお寺にお出でゞござい

ます。

宗三　えゝ、そんなら老母が居りますとか。

くら　御住持が道樂をして、金目な物は賣つてしまひ、亂脈にした所から今は無住の荒寺で、そこへ火の番同樣に、留守居をしておいでゞござりますよ。

お袖　それはどの邊でござんすか。お尋ね申して、早う泊めて貰ひたうござんす。

くら　私はそのお寺の洗濯などを、始終賴まれて行つて居るから、一緒に連れて行つて上げよう。

宗三　さういふことなら兩人を、どうぞお連れ下さりませ。

お袖　もし、此子をばおぶせて下さいまし。(ト宗三郎手傳ひお袖に子を背負はせ、捨ぜりフよろしく、)

くら　お支度がよくば、行きませうか。

宗三　どうぞ御案内下さりませ。(ト唄になり、おくら先に兩人上手へ行き東の花道へ掛る、赤子笛になり、)

くら　おゝ、大層お泣きのやうだが、お腹でも痛みはせぬか。(ト背中を見て、)おや、おぶひ紐で、手を挾んでおいでだ。おゝ可愛さうに〳〵、直して上げませう。

お袖　これは、憚りでござります。

トおくら捨ぜりフにて、油差しを宗三郎に渡し、抱子をお袖の肩の上へ上げようとして、直しても落

ちろゆゑ、

くら　えゝ、意氣地のない、いや、幾ら上げてもさがつてならぬ、いつそわたしが背負つて上げよう。（ト兩肌をぬぎ、）さあ、此中へお入れなさい。

お袖　ぢかに肌へ入れましては。

くら　子持の時は、遣つたものだね。（ト肌に背負ふ、是にて赤子笛止む。）それ御覽、もう默つた。

宗三　成程これは不思議でござりますな。

トおくら油差しを持ち、東の花道より大あゆびを廻り、宗三郎お袖足を引きながら花道へかゝる、此うち知らせなしに此の道具廻る。

（無量寺の場）――本舞臺三間中足の二重、藁葺本庇竹の本緣、正面一間の中敷居の位牌棚此下雲母形の張壁上手一間杉戸の出這入り、下手一間中窓、上手折り廻し本堂へ行く本緣、舞臺下手に横石の沓脫ぎ、ずつと下手在體の片遠見を見せ、二重よき所に居爐裏を置き、總て法光寺村古寺の模樣、在鄕唄にて道具納まる。と此の內花道の三人舞臺へ來り、

くら　さあ、このお寺がお尋ねなさる、お袋さんの當時の住居でござります。

お袖　大層淋しうござんすなあ。

くら　構はずそちらへお上りなさんせ。

宗三　眞平御免下さりませ。（ト兩人二重へ上り下手へ住ふ。此内おくら抱子をぐつとおろすゆゑ、）

お袖　あゝもし、あぶなうござりまする。

くら　あなた、手のない所の子は、みんな斯うでござりまする。よく寐んねだ、さあお抱きなさい。

お袖　成程あなたは、馴れておいでなさいます。

くら　在方はまだ寒い、今焚火をして上げませう。

ト居爐裏へ粗朶をくべる。靜かな合方になり、奧より野崎の後家おつた白髪鬘、好みのこしらへにて出來り、

つた　おくらどの、戻られたかな。

くら　雲鐵さまがお留守ゆゑ、嘸お待遠でござりましたらう。

つた　驛へお齋に行くといつて、晝のうち出掛けられしが今以て戻らぬ。おゝ、お客人がござるかな。

くら　今このお二人は西尾へお出でゞ、あなたをお尋ねなさるお方でござりますゆゑ、今お連れ申しました。（ト此うち宗三郎前へ出で、）

宗三　ばゞ様、暫くお目にかゝりませぬ。
つた　目が疎いのでよく分らぬが、さう言はるゝは、どなたであつたか。
宗三　私は三條の織物師、西川宗三郎でござりまする。
つた　おゝ宗三どのか、やれ〳〵、それは〳〵久々でござつたの。
宗三　その後は絶えて御無沙汰なし、やはり西尾にお出でなされることゝお尋ね申したる所、お行方しかと分りかね途方に暮れしその所へ、このお方にお目に掛り、思ひ掛けなく御機嫌伺ひ、こんな目出度いことはござりませぬ。
つた　よう尋ねて下された。そなたも達者で重疊々々、してお連れの女中はな。
宗三　これは私の妻に子供でござりまする。
お袖　不束ものでござりますれど、お心安う願ひまする。
つた　それは結構なことぢや、はる〳〵遠き都からよう尋ねて下された、さうして何處へ行かつしやる。

ト宗三郎當惑のこなしにて、

宗三　さあ、ちと商用を兼ねまして、一度江戸へ參りまして事をなさうと、親子三人下りまする道中ゆゑ、ちよつとお尋ね申しました。

つた　それはよう心掛けて尋ねて下された、まだ禮さへも言はぬうち、絶えて久しきこなた衆へ、胸も塞がる涙の種。（ト言ひかけるを、）

宗三　して、ぱゞ樣には何故あつて、御逼塞なされました。

つた　おゝ合點の行かぬは尤も、二人の衆まあ聞いて下されいの。（ト合方になり、）元この婆は當所の鄕士、野崎が家の娘なりしが、幼少より西尾家へ奉公に上りし所、御上の御意に叶ひ、老女まで勤め上げ、やう〳〵お暇たまはりて野崎の家の家督となり、夫を迎へ送るうち、月には雲の障りにて、年も立たぬに夫主膳は果敢なき露の雫となり、濕る涙の乾く間もあらぬに又も引續き、母もみまかりたまひしゆゑ跡に殘るはわし一人、苦勞の絶える間とてもなく、積る白髮の頂に替り行く世の左前、次第に痩せる身代に所持の田地も他へ渡し、終には家も斷絶なし、はや此上は亡き人の菩提を弔ふにしかじと思ひ、此の無量寺の無住を幸ひ、いとも懇意なる村人の世話にて來たる死所、かく不仕合せな身の上を、推量して下されいの。（ト老女愁ひの思入にていふ。）

宗三　國を隔てし重縁にお便りなきは御無事なりと、打過ぎましてござりますが、思ひも寄らぬ御物語り、驚き入りました。道理こそ面やつれ、いかい御苦勞なされましたな。

つた　愚癡は佛の爲ならず、もう〳〵言ふまい〳〵。こなた衆も何年振りやら幼き時に逢うたぎり、都

の話も承はりたい、ゆる／＼逗留したがよい。

くら　それがよろしうござります。此邊は驛と違ひ氣の張るものは少しもなく、それに此お寺には雜物がござります。おや、わたしとしたことが雜物ではない什物がござりますが、金にならない代物ゆゑ、先の住持が曲げずに置いた西尾さまの御奉納物、その昔都から拜領なされた十二單衣に蒔繪のお化粧道具、それなと拜見なされませ。

宗三　それは珍らしさうな品々、明日拜見いたしたうござります。

くら　それにまた御逗留なら、淨瑠璃寺の淨瑠璃姫の足跡や、八橋村へもお連れ申しまする。

トこの時赤子笛になる、おつた思入あつて、

達者さうな孫が泣きごゑ、どれ／＼ちよつと見せて下され。（ト此うちお袖乳を飲ませながらおつたの側へ寄る、おつた抱子をのぞき込み、）おゝ、よく太つてよい子ぢや、この太りでは喰べたいやうであるわいの。

くら　今泣いたと思つたら、もう笑つておいでなさいます。

つた　まあ、何にせい旅の疲れを、ゆる／＼休息させたがよい。

宗三　左樣なれば、今宵は當寺へ、

お袖　御厄介になりまする。

つた　おゝ、遠慮なう休息しや、おくらどの案内しや。

くら　さ、斯うお出でなさいまし。

ト合方になり、おくら附いて下手へはひる。此の合方にて花道より、以前の雲鐵先きに序幕の正作、武者修行のなりにて出來り、花道にて、

雲鐵　最早向うに見えるが、寺でござりまする。

正作　それは千萬忝ない。（ト兩人舞臺へ來り、）

雲鐵　只今戻りましてござりまする。

つた　おゝ、雲鐵どの、大分遲うござつたの。

雲鐵　お客人を連れて戻りました。さあ、こちらへござらつしやい。

正作　然らば御免下され。（ト雲鐵二重の褄より上る、正作草鞋の紐を解き二重下手へ通る。）

雲鐵　只今驛より戻りがけ、踏迷うたる御武家がござつて、御難儀の御樣子ゆゑ、案内して參りましたが、一宿おさせ下さりませ。

正作　額田郡に知邊ござつて參りし所、道に迷ひてとかうするうち、夜に入つてほとんど當惑いたす所

へ、御坊來られ御助け下され、計らず當寺へ參りしそれがし、何卒今宵一宿の儀お聞濟み下さりませ。

つた　承はれば嘸かし御難儀ならん、斯かるいぶせき山家の荒寺、御不自由さへお厭ひなくば、御遠慮なうお泊りなされい。

正作　すりや、お聞濟み下さるとか、それは千萬忝けない。

つた　どこというて荒れて居れど、納戸の次の小座敷が少しはましであらうから、よく掃除をして上げたがよい。

雲鐵　左樣ならちよつと掃除をして參りませう。（ト雲鐵上手屋體へはひる。おつた居爐裏に粗朶をくべ、）

つた　春の末とは申しながら、里には遠き一軒家、夜に入つてはお寒うござれば、居爐裏の側へお寄りなされい。

正作　いやもう、ことに寄りなば野に臥り一夜を明さん所存なりしが、今宵は樂々枕に着きまする。

つた　して、何れより何れへの御通行でござりますな。

正作　爰ぞと定むる所なく、西國筋より都へ登り、それより江戸へ參るもの。

つた　見受けしところ武士道の、御修行の御樣子でござりまする。

正作　お察しの通り劒道を、修行の爲め諸國を經歴仕るが、いづくの果てへ參りましても、當時は德川将軍の御威光あらはれ武德を慕ひ、分けて當國三河領は人氣こぞつて實意なるは、流石神君の御在國、恐れ入つたることでござる。(ト是れを聞き、おつた思入あつて、)

つた　いや、それは判官贔屓とやら、なに、德川家に實意がござらう。

正作　むゝ、何故あつて老母には。

つた　わしは德川に、恨みがあるゆゑ。

正作　何と言はるゝ。(ト誂への合方になり、)

つた　過ぎし元和の夏御陣、忘れもせぬ五月五日德川内府のその爲に大阪城の落ちたる折、しかも北のお櫓にて大君樣御親子が御自殺ありし其折に、あのお櫓に居り合せ憂き目を見たるわらはゆゑ、今に恨むは德川家康、暴戾な振舞忘れはせぬ。

正作　こは以ての外なる老母が詞、大阪城を攻落せしは萬民の爲め國の爲め、既に豐太閤御在世の折、家康ならで一天下を治むる者外にあらじと、御遺言をなされしゆゑ、慶長度關ケ原の砌り石田に與せし大谷上杉皆滅亡したれども、大君樣のお側をば去らぬ大野道犬等が企てにて、信州の眞田を軍師と頼み、再び天下を動搖なせしも、道に背きし企てゆゑ、終に合戰に利なくして、落城し

たるは當然なり。

つた　いゝや、道に缺けたとは言ひ難し、石田、大谷、道犬等はそりや德川へは叛逆なれど、秀吉公の御恩を忘れず、德川天下を攻滅し豐臣天下を再起せん、いはゞ古主へ大忠臣、誠の武士のなすところ。

正作　すりや、それ程までに御老母には、大阪方の爲を思ふか。

つた　敵の本國西尾在に住居なすのも、いつか一度、この三河領を惱まして、(ト思入あつて氣を替へ、)いやなに、三河領に住ふのも、やはり時世で是非がござらぬ。

ト此の内正作始終おつたに目を附け居て

正作　一徹なる老母が心底、仰せの通り秀吉殿へはあつぱれ忠臣、其場にあらばさこそ思はれん。して、御身は當年何歳にならるゝな。

つた　婆は最早六十路になりまする。

正作　なに六十にならるゝとか。(ト指を折り算へる事あつて、)大阪落城いたせしは早や百年も相經つが。

つた　え。

正作　二十餘年も產れぬ先きを、はて、記憶のよい事ぢやな。

つた　いや、それは父より聞きしこと、わしが知つたやうに言ひしは、申し違ひでござるわいの。

正作　すりや、御親父よりお聞きありしか。（ト扨はといふこなし、上手屋體より雲鐵出て來り、）

雲鐵　お掃除が出來ましてござりまする、御休息なされませい。

正作　それは千萬忝ない。然らば御老母、失禮御免。

つた　御ゆるりと御休息なされませ。

雲鐵　さあ、斯うお出でなされませ。（ト合方にて雲鐵案内して上手屋體へはひる。おつた見送りて、）

つた　わしが心を引かう爲か、關西の合戰に言ひ募りし武者修行、丁度その折城内の干飯の櫓に居たゆゑ、つい浮々と物語りしが、薄々樣子を悟りしか、兎まれ角まれ此寺へさまよひ來れば此先きは行きどころのなき冥土の旅、一人ならず三人四人、今宵は獲物が。（トぢろりと上手を見やり、）澤山あるわえ。（ト合方になり、正面の御簾のうちへはひる。下手後より宗三郎お袖出で、）

お袖　もし、わたしやいつたいお寺は好まぬに、わけて何だか氣味の惡い、物凄いあの座敷、外へ泊りかへて下さりませ。

宗三　そりや知らぬ寺なら兎も角も、素性知れたる老母の住居、何も案じることはない。

お袖　それぢやというて、何處ともなし、身の毛がよだつてなりませぬ。

宗三　氣味が惡くば赤を預けし、女中の所で話すがよい。

お袖　あのお方も御出家と、御酒を飲んでおいでゆゑ、却つてお邪魔になりませう。

宗三　はて、今宵一晩辛抱しやいなう。（ト合方になり、上手屋體より正作出て來り、）

正作　御客人にはまだお休みなさらぬか。

宗三　あなたも今宵この寺へ、お泊りでござりまするか。

正作　道に迷ひて當寺へ來り、一泊乞ひし者でござるが、袖振り合ふも他生の緣、夜すがらお話しを承まはりに參つてござる。

宗三　それは恐入りました、何やら物淋しい所をば、あなたがお出で下されて、心丈夫になりました。

正作　して、こなた衆はお下りでござるかな。

宗三　都より江戸表へ下るものでござりまする。

正作　手前も是れより江戸表へ、修行に下るものでござる。

お袖　ならうことなら御一緒に、お連れなされて下さりませ。

正作　諸國修行の身の上ゆゑ、御同道は出來ませぬが、先づ今晩は手前が座敷で。

宗三　左樣ござらば、お寢間へ參り、旅中のお話し何やかや。

正作　夜と共にいたすで、

兩人　ござりませう。

ト合方にて三人上手へ行掛ける、これと一緒に知せなしに道具廻る。

（無量寺本堂の場）――本舞臺四間高二重、藁屋根本緣附、正面一間須彌壇、本尊、この下蓮を描きし模樣、上手二間破れ簾、下手一間雲母形の張壁、上手一間後へ下げて同じく藁屋根の附屋體、反故張り塗骨障子、下手の棲三段の登り口、是れより以前の常足の屋體へ下りる心、平舞臺に根つ子の踏臺、上手崩れたる練塀の見切り、下手山の張物、よき所に誂への手水鉢、下草の土手板、この道具總體雨じみ附いてあり、總て前の續き本堂の體、右合方にて道具納まる。とこの内三人本緣を通り、上手障子屋體へはひる、御簾の内よりおつた出で、

つた　今宵泊りし武者修行は、なか〳〵思案の深きもの、うつかり油斷はならぬわえ。あゝ今の間に大層曇つた、風で晴れたる星影もまた雨雲が覆ひしか、どうで今宵は降りと見える。子供等はどこへ行きしか、早う戻つて來ればよいに。（ト思入、下手よりおくら抱子をかゝへ出て來り）

くら　もう段々と夜が更けますれば、行燈を取替へませうか。

つた　御燈明では暗いゆゑ、どうぞさうして下されや。
くら　おつかさんの手助けに、さつきから抱いて居ると、いゝ心持に寢附きました、ちよつとお取り下さりませ。
つた　さあ爰へ寄越しやいなう。（トおつた抱子を取る。）
くら　今夜もまた雨でござりませうな。
つた　降ると諸所の雨漏りで居所にも困るわいの。それはさうとこなたなども、洗濯物が乾かいで嘸困るであらうの。
くら　悪い時に糊を附けましたので、ほんに困りきりまする。（ト此内おくら下手より行燈を出す。）
つた　若い者はまめ〳〵しい、老の身では羨しいぞえ。おゝ、とんと忘れて居たが、今宵は油がなかつたが、買うて來て下されたか。
くら　先程買ひに行きましたら、生憎水油が切れましたから、魚油を買つて參りました。
つた　なに、魚の油を買うて來たとか、それは一入、いや、一筋では暗いゆゑ、燈心を澤山入れて油を一杯ついで置いて下され。
くら　はい、畏りました。（ト捨ゼリフにて行燈へ明りを附け、油をつぐこと宜しくあつてよき所へ直す。）

つた　何でも油が一杯なうては、暗うてなりませぬ、しかしお前ばかり遣うて、何ぼ若いといひながら嘸草臥れたことであらう。おゝ、若いといへば、こなたは幾歳になられるの。

くら　はい、私は二十七になります。

つた　なに、二十七では、子の年ぢやな。

くら　はい、左樣でござります。

つた　あの子の年、てもよい年の產れぢやな。

くら　いえもう、年ばかり取りましてもいけません。（ト行燈を提げ、）爰らへ置きませうか。

つた　そこへ置いたら、奥も爰も兩方明るうござらう。

ト此時風の音になり、下手より指金の猫、鼠を啣へ出て、おくらの側へ寄る。

くら　あれえ、何か出ました。

つた　えゝ、びつくりするわいの、何が出たのぢや。（ト猫を見て、）おくらどのとしたことが、何も怖いものではない、是れはわしが飼猫ぢや。おゝ、鼠を取つて來たのぢや、斑よ爰へ來い／＼。

くら　おゝ、猫でござりましたか、私はびつくりいたしました。（トまた指金の猫蛇を啣へ出る。）あれえ、また何か出ました。

つた　えゝ仰山な、此子がおびえるわいなう。
くら　それでもあなた行燈の側へ、また何か出ましたから。
つた　なに、行燈の側へ。（ト蛇を啣へし猫を見て、）これもわしが猫ぢやわいなう、えゝ、どんな奴、長蟲を啣へて來居つた。
くら　えゝ、蛇を啣へて、えゝゝゝゝ。
つた　おくらどの、大儀ながら其の長蟲を捨てゝ下され。
くら　えゝ、どうしてまあ、此の蛇が私に捨てられますものか。
つた　何の氣味の惡いことがあらう。どれ、わしが捨てゝ遣りませう。
らく　あれ、およしなさいましよ、手で、おゝ氣味の惡い。
トこの内おつた蛇を取りあげろ、是れにて蛇手へからみ附く、
つた　わしが手へ搦みをつて。（ト打附ける、是れにて蛇ぐつたりする、）死んでしまうたわいなう。
ト摘んで投ろ、是れにて蛇は生きかへり、下手へ逃げこむ。
くら　あれ、何で死ぬどころでござりませう。あれ〳〵、緣の下へ這入りました。
つた　この子はわしが下へ寢かすから、奧に搔卷がある、ちよつと持つて來て下され。

くら　はい〱、畏りました。(トおくら御簾の内へはひる。赤子笛になる、)

つた　おゝ泣きやるな〱、婆がよいもの見せませう。そちに見せて遣りたいは盆踊り、年々盆にこの寺へ娘子供が大勢來て、面白う踊るわいなう、その盂蘭盆の踊りといふは、娘子供が手を揃へ、

〽そなたは誰が子誰が娘。(と此内猫に手拭を冠せろことあつて、是れより下座へ取りて、)

〽丹波のや〱、しつぺい太郎に沙汰するな、ぶちもまだらも拍子を揃へて、さつさとやりんさつさとやりん。

ト此の文句のうち、二疋の猫指金にて踊ること、おつたは手眞似して、抱子に此體を見せる、よき程におくら出て、此の體を見て、

くら　あゝ猫が。(ト大きく言ふ、猫は奥へはひる。)

つた　何でまあそのやうに、さしてもないことを驚くのぢや。

くら　どうして驚かずに居られませう、現在二疋の猫が立つて。

つた　えゝめつさうな、何でそのやうな事があるものか、そりや、こなたの見違ひぢやわいの。

くら　左樣でござりましたか。それに奥を尋ねましたが、搔卷は見えません。

つた　おゝ奥にはなかつたかいの、年寄りといふものは、物覺えが悪うてならぬ。

ト上手屋體よりお袖こは〳〵出て、

お袖　お陰様で大きに樂になりました、一杯飲ましてやりませう。

つた　今方大分泣きましたから、一杯飲まして遣つて下され。（トお袖に抱子を渡す。）

くら　さあ、あなたも晝のお疲れあれば、早くお休みなされませ。

お袖　いえ、まだみんな起きて居ります る。

つた　はて、遠慮しやらずに寢たがよい。

お袖　左樣なればお詞に隨ひ、眞平御免下さりませ。（ト抱子を抱き上手屋體へはひる。）

くら　今宵はお泊り客が多いので、賑かでようござります る。

つた　おくらどのも、泊るであらうの。

くら　泊る段ではござりませぬ、まだ飲み始めたばかりゆゑ、いえ、夜るになつては山道ゆゑ、どうぞお泊めなすつて下さい。

つた　然し、着て寢る物とても貯へのない此古寺、何ぞこなたにかける物が。（ト言ひつゝ佛檀の打敷を持ち來り）さ、これなと掛けて風ふせぎ、わしに構はず寢たがよい。おゝ、枕があるまい、何ぞ見て遣りませう。（ト位牌棚の位牌の臺を持ち來り）さあ〳〵、これがよい、是れを貸して遣りませ

う。

くら　えゝ、氣味の惡い、こりや、位牌ぢやござりませぬか。

つた　何の氣味の惡いことがあらう、さあ、それを枕にして早う寢や。

トおくら臺所の酒に心の殘るこなしにて、

くら　すつぱり醉が、いえ、宵から曇つて居るせゐか、今夜はわけて陰氣な晩、物凄うござりますな。

ト此うち捨ゼリフにて件の打敷をかける、風の音、本釣鐘を打込み、

つた　人家放れし山寺ゆゑ、物凄うはあるけれど、何も怖いことはない、南無阿彌陀佛々々々々々。（ト四邊へ聞き耳を立て、）谺にひゞくあの鐘が、こなたの耳に聞えるかいの。

くら　はい、どこの鐘やらさつきから、哀れな鐘が聞えまする。

つた　あはれな筈ぢや、あの鐘はありや未來の鐘ぢやわいの。

くら　えゝ、氣味の惡い。（ト打敷をすつぼり冠り寢ること、）

つた　これはしたり、そのやうに怖がることがあるものぞ、ありや、極樂の鐘の音、あの鐘を聞くものは後生がよいといふわいの、あの鐘が聞ゆるからはこなたは後生がよいと見える、あのやうな殊勝な鐘は又と外にあるまいの。まだ鐘の音が聞ゆるか、もう聞えぬか。これあの鐘が聞ゆるかい

なう、や、や、（ト搖り起すことあつて、）もうこなたは寢たかいの、はて、若い者といふものは寢附きの早いものぢやなあ。（ト替つた合方、薄く風の音、行燈の方をきつと見やり、）常に變つて今宵はまた、魚の油とあるからは、珍味にまさる此身の醍醐、今宵ぞ油を。

ト誂への合方になり、おつた四邊を窺ひ行燈の側へ寄り顏を入れる、此形猫にうつる、舌を出し油を甜めることよろしくあつて、よき時分おくらそつと顏を上げ、此の體を見てびつくりなし、はつと飛退き逃げようとする、おつた裾を押へて、

これ〳〵、こなたは何ぞ見やつたか。

くら　いえ〳〵、何も私は、

つた　いや〳〵、何か見たであらう、殊にそなたは常々からわしが望みの子年の產れ、命は貰うた覺悟しや、さあ、念佛なりと申しやいなう。

くら　どうぞ助けて下さりませ。

トおくら遁げ出すをおつたつか〳〵と行き襟上を捉へる、おくら振切りおつたと向ひ合ひきつと睨むこれにておくら縮む、爰へ嚙附きしこなしにて飛附く、おくら苦しみながら仰向けに倒れる。おつたは中腰になり、下手へ手を突ききつとなる、この時顏は猫の模樣よろしく、おくらはよろ〳〵逃げる

をおつた毛のはえたる手にて打倒す、是れにて鼠の思入にて、おつた飛附き、襟元を啣へよろしくあつて、正面の簾の內へ引込む、跡在鄕唄になり、花道より幕明きの○、△の百姓兩人、竹槍を持ち出て來り、花道にて、

○ 獵人の繁藏どのを村境で見失つたが、夜半の辨當は無量寺で遣ふ積りゆゑ、先きへ來て居るかも知れぬ。

△ 太郞兵衞が諸白を五升提げて來る積りだが、定めし寺で雲鐵どのが、首を延ばして待つて居よう。

○ 今夜も今までまご附いたが、所詮代物には出逢ふまい。

△ 何にしろ、寺へ行つて、繁藏どのゝ來るを待つべい。（ト兩人舞臺へ來り、）雲鐵どの〳〵、村の者は誰も來ませんか。

兩人 雲鐵どの〳〵。

ト二重を見る、この時御簾の內よりおつた口のあたりを血に染めし顏を出す、百姓兩人びつくりして下手へ逃げ込む、おつたそろ〳〵出て上手手水鉢にて顏を洗ふこと、合方になり、下手より宗三郞、抱子をいぶり附けながら出る。赤子笛。

宗三　おゝ泣くなく。（ト上手を見やり、）子供が泣くので、おやかましうござりませうな。

トこれにておつた凄き顔にて振り向くゆゑ、宗三郎びつくりする、おつた元の顔になり、

つた　おゝ誰かと思うたら、宗三どのか。

宗三　ばゞ様、もう何時でござりませうな。

つた　亥の刻過ぎでござるわいの。

宗三　心の迷ひか知らねども、慥に今のは、

つた　えゝ、何ぞこなたは見やつたか。

宗三　いえ、別に何も。

つた　見やせなんだか。

宗三　はい。

つた　それでわしも。

宗三　えゝ。

つた　どりや、まどろみませうか。（ト合方、時の鐘にて老女御簾の内へはひる。宗三郎ほつとなし、）

宗三　はて心得ぬ今の有樣、慥に老母に違ひないが、たゞ事ならぬ此場の樣子、今の姿は。（ト赤子笛にな

ゐ。）また泣くか。誰がよく〳〵。（トいぶり附ける、爰へお袖出で、）

お袖　枕に着けど睡られず、うと〳〵しては夢を見るので、魘されてゐるをお武家さまが見兼ねてわたしを起して下され、びつしより汗になりました所へ聞える赤子の泣聲、乳を飲ませに參りました。

宗三　寢られぬは尤もぢや、わしでさへ氣味が惡く、お武家さまがお出でなくば、少しも爰には居られぬわえ。

お袖　たつた今お前さまが、今宵一夜辛抱せいといふ口の乾かぬうち、氣味が惡いと言はしやんすは、何ぞ怖しいことでもあつてか。

宗三　いや、あつたとも〳〵、いやなに、あつたら所詮居られぬが、まあ何事もなくてよい。

ト爰へ下手より雲鐵醉ひたるこなしにて出來り、

雲鐵　あゝいゝ心持に醉つた、宵に約束して置いたから、おくらどのと飲み明かさうと待てど暮らせど行つたきり、愚僧一人でやつたせゐか滅法界に醉つてしまつた。おゝ、そこに居るのはおくらどのか。おゝ、是れはお客人だな。見ればお若い二人連れ、人家離れしこの寺へ泊つたは、言はずと知れた意氣筋でござらうな。

宗三　いえ、私共は當寺の老母に、少しの由縁ござりまして、今宵尋ねて參りましたが。

お袖　乳呑が居るので泣きますから、嘸おやかましうござりませう。（ト此うち雲鐵お袖を見て、）

雲鐵　はて、このお女中は見たやうぢやが。

お袖　え。

雲鐵　おゝ、思ひ出した、慥にこなたは祇園町の、藝子さんでござつたなう。

お袖　いゝえ、わたしは。

雲鐵　いや、何も隱すことはない、わしも法衣は着て居るが、この三州の西尾在のこの古寺へ流れ込み燻づてゐますもの、是れでも元は知恩院で所化を勤めたこの雲鐵、別に惡事はしませぬが、暇になつた其元は祇園町の藝子から、然しそれとは事の違ふ、子まであるこなた衆二人、てつきり都を落人と目串をつけたは苦勞人、決して心配ござらぬから、ゆつくり逗留さつしやるがよい。

お袖　そんならあなたは京都にお出でのお方でござりましたか、其お身の上を承はり、やう〳〵安心いたしました。

雲鐵　そこで逗留しなされいだが、まあ、是れはすゝめられぬて。

宗三　そりや、またどういふ譯でござりまする。（ト合方になり、）

雲鐵　こなた衆は老母の身寄りでわざ〱尋ねてお出でだが、この近郷の人々は晝はともあれ夜に入つては、この古寺へはたゞの一人來ぬといふ譯は外でもござらぬが、この頃夜な〱變化が出て近村の赤子を取喰ふといふ噂が立ち、そこで其變化の居所は先づこの邊といふ評判で、この西尾は一揆同樣竹槍太鼓で夜番をするが、浮世を捨てた老母や借りで出られぬわしらはよけれど、血氣盛んの若い者や、子供をつれてはどつとせぬ故、まづ危きに近寄らず、逗留はよさつしやれ。

宗三　それでは今朝方矢矧にて、噂を聞きしに相違なく、今のが慥に。

雲鐵　え。

宗三　あゝ、氣味の惡いことぢやなあ。

お袖　もし、どうしたらようござんせう。

宗三　今宵は何でもお武家の所で、夜通し寢ずに、氣をしつかりと持たねばならぬ。

雲鐵　いや、陰氣な話しで酒の醉ひが覺めてしまつた、約束をした村の衆はまだ見えぬか、早く爰へ廻つて來て般若湯に有り附きたいものぢや。（ト向うへ思入、ドロ〱になり、雲鐵身顫ひをなし、向うに人の居るこなしにて、）おゝ、皆の衆御苦勞々々。今そこへ行つて受けまする。（トつか〱と花道へ行きうろ〱しながら、腕組をして舞臺へ來り、上手へ行く、）おゝ、そこにござつたか、なに諸白ぢや

結構、どれ、御造作になりませうかな。（ト上手へ行きうろ〳〵して又腕組をなし、）どこへ行つたのぢや、おゝ、さうじらしては困る。煮染には及ばぬに。（トつか〳〵と下手へ行く、誰も居ぬといふこなしにてうろ〳〵する、宗三郎氣持の惡きこなしにて、）

宗三　もし〳〵、何處にも誰も居ませぬが。

雲鐵　なに、手を借りないでも大事ない、愚僧一人でそろ〳〵運びまする。（ト行かうとするを止めて、）

宗三　そなたはどうなされた、こりや、常尋ではござりませぬ。

雲鐵　あこれ〳〵、勝手へ持つて行くには及ばぬ。今おくらどのを爰へ寄越す。

宗三　えゝ、そなたはどうなされた。（ト肩をひどく打つ、是れにて心附き、）

雲鐵　おゝ、お客人どうなされた。

宗三　どうなされた所か、人も居ぬのにうろ〳〵と。

お袖　ほんに氣味の惡いお方ぢやな。（トまたドロ〳〵になり、）

雲鐵　えゝ、何もさうじらさないでもよいではないか。（ト花道へ行くを宗三郎押へて、）

宗三　またも狂うて。

雲鐵　えゝ、放さぬかい。

ト振切つてつか／＼と行く、この時、大ドロ／＼になり、雲鐵連理引きにて引き戻され舞臺へ來る、宗三郎お袖は平舞臺へ下りて、この體を見て打伏せになる、雲鐵は襟上を取られし形になり、

あゝ苦しや／＼助けて下され／＼、今口走りしは愚僧が惡かつた、助けて下され／＼。

トドロ／＼にて雲鐵我が手で襟を拂ふこと、眞中にてくる／＼廻る、この時二重御簾の内より毛の生えた長い手出で、雲鐵の襟上を取る、これにて雲鐵苦しみながら御簾の中へ引込まれる、宗三郎お袖そつと顏を上げて、此體を見て抱子を放し氣絶する、又ドロ／＼になり、長い手出で抱子を引く、是れにて赤子笛、ばた／＼にて、上手より正作出で來り兩人を見て、

正作　こりや、最前の二人の衆、氣を失うてか。（ト兩人を介抱して活を入れ、）こりや旅人、心を慥にいたされよ。

宗三　やゝ、そんなら二人はこの場にて。

お袖　氣を失ひましたか。

正作　容易ならざる今宵の動搖、油斷をいたす場合にあらず、して、小兒は如何いたされしぞ。

お袖　やゝ、今まで抱きしあかの居らぬは。

兩人　えゝゝゝゝ。

正作　扨こそ怪しい簾の内、いで、正體を。（ト正作思入あつて、宗三郎に小刀を渡し兩人きつとなる、此時ドロ／＼になり、正作二重へ上れぬ思入。）さては變化の仕業ならん。

宗三　これお袖、心を慥に我が子の行方。まづこの庭より奥へ廻り、寢間の隅々尋ねて參れ。

お袖　あい、合點でござんす。（ト上手へはひる、此時花道より以前の百姓先に跡より大勢竹槍鋤鍬を持出て、）

○　變化は慥にこの古寺、

へ　村中殘らず、

皆々　退治に來ました。

正作　それ、油斷いたすな。

皆々　合點ぢや。（ト正作宗三郎眞中皆々上下に別れてきつと見得、大ドロ／＼にて御簾の内に大猫うつる。）

正作　なに、是れしきに。

ト正作宗三郎御簾を引取る、これにて一面にばらりと落ちる。内に老女十二單衣のこしらへにて住ひ傍に鐵漿道具をおき鏡臺に向ひ、鮑貝にておはぐろを附居る、兩人見て、

扨こそ汝は變怪よな、いで、正體を、

兩人　顯はしくれん。

つた　やあ、おろかや兩人、汝等ごときに暗々となど本性を顯はさうや、早々この場を退散せよ。

正作　やあ、假令その身の業通にて姿を包み隱すとも、身共が所持なす不動の名刀、梵字の威德と手練を以て、きつと正體顯はしくれん。

宗三　わが子の敵、憎き妖怪。

正作　不動の劍で討取らうや。

つた　さあそれは、

正作　本性明すか、

つた　さあ、

三人　さあ〳〵〳〵。

正作　きり〳〵本性、

兩人　顯はしをらう。（ト是れにて老女、劍に恐れるこなしあつて、）

つた　ちえゝ殘念や、口惜しや、劍に彫りし梵字の威德と汝が手練に敵し難く、今ぞ本性語り聞けん。

兩人　何と。（ト誂への合方になり、）

つた　我は大和の國金峰山の奥に產れ、數千年の功を經て父諸共に攝津の國、大阪城の北の櫓に年久し

く住ひしが、落城の折わが父は焔の中に身を焦し、この身は辛く遁れしが恨みに思ふ徳川の本國三河に飛行なし、西尾の家の老女にて二尾と言ひしを咬殺し、姿を替へて國中を悩まさんと思ひしも、望みの叶はね上からは、見よ／＼此場で汝等にも、修羅の苦患を見せてくれん。

正作　小癪な一言、ものどもそれ。

皆々　合點だ。

ト正作宗三郎左右より切つてかゝる、おつたちよつと立廻る、百姓皆々竹槍を差附ける、是れにて大ドロ／＼になり、皆々たぢ／＼として跡へ下がる、老女正面へ逃げてはひる。跡追駈け行かうとする此時下手張壁を破り、内より吹替の猫出でちよつと立廻りあつて、よき程に本鐵砲の音して、吹替上手へばつたり倒れる、この内花道より二役の獵人繁藏好みのこしらへ鐵砲を掻込み走り出で花道へ留り、

繁藏　慥に手ごたへ。（トこれにて百姓皆々花道を見て、）

皆々　おゝ、繁藏どんか。（トこの内繁藏つか／＼と舞臺へ來る、正作見て、）

正作　さては汝が砲術にて。

宗三　わが子の敵を討つてくれしか。

繁藏　是れにて三河に障りなく。

正作　威勢輝く徳川の、
宗三　その御武徳も顯はれて、
○　村中一統、
皆々　安堵しました。
繁藏　皆の衆。（ト鐵砲を下へ置くを木の頭、）どんなもんだえ。
皆々　えらいもんぢや〳〵。
ト皆々引張りの見得、賑かな鳴物にてよろしく、
ひやうし　幕

四幕目

（吉田）狩人繁藏内の場
（二川）松明峠谷間の場

〔役名――獵人吉田三軒家の繁藏、乳貰おかや實は猫化の精、獵人根ッ子の松藏、同人女房おかん、同猪の藏、同人女房おきば、同鹿六、同人女房おつの、庄屋杢右衞門。繁藏女房お靜、乳貰女お澤、繁藏娘お辰、同おみち等。〕

（獵人繁藏内の場）——本舞臺常足の二重四枚飾り、向う上手一間押入戸棚、續いて一間反故張りの障子の出這入り、下手鼠壁これへ鐵砲を掛け、この前に大居爐裏自在竹に鑵子かけてあり、下手あとへ下げて九尺の下家、土間の隅に土竈下流し手桶などを置く、向う繩簾の出這入り、臺所の境四ツ目垣にて見切り、上の方あとへ下げて玉椿の生垣、山の張物にて見切り、下の方同じく生垣、總て火打坂獵人繁藏内の體。爰に姉娘お辰、草束ね、田舍娘のこしらへにて抱子を抱き居る、妹おみち、机に向ひ手習をして居る。下手にお澤在鄕女房のこしらへ、抱子を抱き乳貰ひに來て居る、この見得在鄕唄にて幕明く。

お澤　おみちさんはよくお出來だのに、まだ手習ひをなさいますか。

お道　大概こゝらでは名頭から國盡しでしまひますが、わたしや手習が大好きゆゑ、お文章の文を習つて居ります。

お辰　わたしと違つて手筋がよく、清書をする度毎にお師匠さまのお直しを、受けたことがござんせぬ。

お澤　お辰さんのおつかさんや、わたしなどの子供の時は、田畑の仕事を早くするゆゑ、いゝ、いろはもろくろく出來ませぬ。

お辰　今ではみんな小さい時から、お師匠さんへ上りますゆゑ、何處の村でも子供には手の書けぬものはありますまい。
お道　今日お淸書を書かうと思つたが、遲うなつたから明日にしませう。
お辰　もうしまつたがよいわいの。
お道　あい、片附けておきませう。
お澤　お辰さん、おつかさんは畑へでも行きなさんしたか。
お辰　いゑ〳〵、さうではござんせぬ、今夜らはおとつさんが岡崎からお歸りゆゑ、何はなくともあつたかい御飯を炊いて上げませうと、今仕掛をして居なさいます。
お道　おとつさんがお歸りだつたら、吉田の町の小間物屋で、筆を買つて貰ひませう。
お澤　大方歸りにお土産を、しつかり買つてござんせう。（ト赤子笛になり、）おゝ泣くな〳〵、今にいつぱいお貰ひ申してやりますぞ。
ト在鄕唄になり、花道より庄屋杢右衞門羽織着流し、重箱を風呂敷に包み出で、門口へ來て、
杢右　お靜どん、内にかな。
お辰　これは庄屋の旦那さま、ようお出でなされました、かゝさんは裏に居りますから、ちよつと呼ん

で參りませう。」
お澤　まあ、こちらへおはひりなされませ。
李右　誰かと思へばお澤どん、乳を貰ひにござつたか。
お澤　與太郎さんのお餘りを、お貰ひ申しまする。
李右　お靜どのはよい乳で、與太一人では飲み切れねば、たんと貰うて飲ませるがよい。
お辰　おみちや、かゝさんを呼んで來や。
お道　あい／＼。（トこの時奥にて、）
お靜　來るには及ばぬ、今行くわいなあ。（ト奥よりお靜やつしなり世話女房にて手拭にて手をふきながら、出來り、）これは旦那さま。繁藏が留守中ゆゑ、つい御無沙汰をいたしました、御免なされて下さりませ。
李右　いや、亭主の留守は大切に内を守るが女房の役、決して何とも思はぬから、わしが所へ來るには及ばぬ。
お靜　有難うござりました、もう繁藏も今晩か明日は戻るでござりませう。
李右　委しい話しを聞かなんだが、獵人仲間で一二と言はるゝ、勝れた腕に選ばれて、今度頼まれてご

ざつたのは、どんな獸を擊つのぢやな。

お靜　親類から頼まれまして今度岡崎へ參りましたは、此間から在方で赤子が度々見えなくなり、不思議なことゝ手分けして段々と穿鑿したら、法光寺村の古寺に年經る猫が住んで居て、それが取るといふ噂に、擊留めますれば人助けになりますゆゑ、頼まれて參りましてござりまする。

杢右　繁藏どのゝ腕前では、必ず猫を擊留めて、大手柄をして歸られませう。

お澤　御同然に子のある身では話しに聞いてもぞつとします、さういふ猫は少しも早く、擊つてしまふのが世界の爲め、よい功德になりませう。

お辰　旦那さま、坊さまは大層お太りなされました、ちよつと御覽なされませ。

ト抱子を見せる。杢右衞門嬉しきこなし。

杢右　これといふのもお靜どのが、たんと乳が出るからだ。それにつけて與太郞の今日は誕生ゆゑ、身祝ひに赤の飯を炊いたから、態々持つて來ましたぞや。（ト風呂敷を解き重箱を出す。）

お靜　御丁寧に何から何まで、有難うござりまする。

杢右　これからちよつと脇へ廻れば、重はその儘に置いて下され。

お靜　それではお重は此儘に、お借り申して置きませう。

李右 後に産神の八幡さまへ、與太郎を連れて行きたいから、着替を着せて置いて下され。
お靜 畏りましてござりまする。
李右 これは少しばかりだが、里親どのへ今日の祝儀だ。（ト金包の金を遣る。）
お靜 重ね〲の頂戴物、お禮の申さうやうがござりませぬ、八幡さまへお出での折は、お泣きなさると惡いゆゑ、お抱き申して參りませう。
李右 繁藏どのが内ならば、こなたに行つて貰はうけれど、女房が抱いて行つたとて、ちつとのうち故泣きもせまい、泣いたら直ぐ歸りがけに、こちらへ置いて歸ります。
お靜 生憎留守でお供が出來ず、お氣の毒でござりまする。
李右 何の氣の毒なことがあるものか、稼業づくで行つた旅、手柄をすれば賃錢も、餘計に貰ふであらう、悅びこそすれ此わしが、何で惡う思はうぞ。
お靜 さうおつしやつて下さいますれば、まことに有難うござりまする。
お澤 ほんに我が子か何ぞのやうに村のものを可愛がる、お情深い庄屋さまは外の村にはありませぬ。
李右 芝居でしても家主庄屋は、惡く言はれるものを、さう褒められては汗が出るわえ。
ト言ひながら立上る。

お澤　もうお歸りでござりまするか。
杢右　また出直して、後に來ます。
お靜　お待ち申して居ります。
杢右　どれ、隣り村へ廻つて行かうか。（ト在郷唄になり、杢右衛門下手へはひる。赤子笛になる。）
お辰　かゝさん、與太が泣きますから、一杯飲まして下さいまし。
お靜　さつきから餘程の間、嘸飲みたうなつたであらう。どれ、飲まして遣りませう。
　　ト抱子に乳を飲ませる。
お辰　晩に居爐裏で焚きまする、粗朶が少しになりましたから、山へ行つて杉林の枯木を拾つて來ませうか。
お靜　今頼まうと思つた所、大儀ながら拾つて來てくりや。
お辰　ゆうべは強い風なれば、たんと落ちて居りませう。（ト下手の小屋より草刈籠を出す。）
お道　姉さん、わたしも一緒に行かう。
お辰　おゝ、一緒に行つて拾つてくりやれ。
お道　かゝさん、わたしも行きますよ。

お靜　行くのはよいが、悪戯をして、姉さんに世話をやかせまいぞ。

お道　あい〳〵。(ト お辰草刈籠をかつぎ、)

お辰　それでは伯母さん、お話しなさい。

お澤　有難うござります。

お辰　かゝさん行つて參りまする。

ト在鄉唄になり、お辰おみち花道へはひる、此うちお靜は抱子を蒲團の上へ寢かし、

お靜　大きにお待遠でござりました、やう〳〵與太が寢ましたから、此間に一杯上げませう。

お澤　どうぞお願ひ申しまする。(ト此うちお靜抱子に乳を飲ませる。) 繁藏さんは今夜あたり、お歸りなさると聞きましたが、お便りでもござりましたか。

お靜　今朝岡崎から早使ひの手紙が家へ屆きましたが、今夜かあした歸りますと、中に書いてござりまする。

お澤　僅のうちでも夫の留守は、心配なものでござりますから、嘸お嬉しうござりませう。

お靜　早う歸つて貰ひたいは、お前も知つて居なさんす獵人仲間の松藏どのが、留守を附込み每日來てわたしを捉へて兎や角と、いやらしいことを言ひますゆゑ、其度每に言はぬやう恥をかゝせて遣

りましたが、性懲りもなく來ますから、繁藏どのゝ歸りをば、待ちに待つて居ります。

お澤　顔にも恥ぢずあのやうなあつかましいものはござんせぬ、今度參りましたらば、ちよつと知らせて下さんせ、あの松藏の女房は、燒餅やきでござりますから、お前の亭主はかう／＼と、知らせて遣つたら松藏を、どんなにこづくか知れませぬ。（ト此時赤子啼。）

お靜　えゝもう少し目を覺さず、寢てくれゝばよいことを。

お澤　どれ／＼、わたしが抱き上げて、お守りをいたして上げませう。（トお澤子をだましながら表を見て烏笛にて下手にて烏舞ふ。）それ／＼、おんもに烏がたんと啼いて居ります。

お靜　ほんに旅烏でも參りましたか、耳やかましうござります。（ト抱子を見て、）もう堪能なされたか乳首をお放しなされました。

お澤　左樣なれば、與太さんとお取替へにいたしませう。（ト抱子を取替へ、）大層飲んだと見えまして、もうすや／＼寢ましたわいなあ。

お靜　お寢になつたら少しも早う、お家へお連れなされませ。

お澤　有難うござります、左樣なら又明日。

お靜　いつでもよいから、御遠慮なく。

お澤　是非お願ひ申しまする。

ト合方にて抱子を抱き下手へはひる。お靜子を下へ寢かし、以前の重箱を見て、

お靜　庄屋さまから御丁寧に、御膳の物からお肴まで、お重に澤山詰めてある上、御誕生の御祝儀とてこのお金まで下すつたは、後に着せるこの子の着物が、質にでもはひつて居るかと思召してのお心附、何とお禮を申さうか、ても有難いことぢやなあ。

ト思入、米山甚句になり、花道より松藏、着流し三尺帶袖なし半纒、獵人にて二升樽を提げ、猪の藏、鹿六手網達附獵人にて出來り、

松藏　まだ飯めえのせるか、僅かな酒に大層醉つた。

猪藏　然し、繁藏の留守を附込み、石地藏だと評判の、

鹿六　堅い女房を口說くには、酒氣がなくては言はれめえ。

松藏　それゆゑ實は片足あげ、ちよつと一杯飲んで來たのだ。

猪藏　まだ二人とも飲み足らねえから、

鹿六　早く樽をば開きてえ。

松藏　今飲ませるから、待つて居ろ。（ト舞臺へ來て、）お靜さん、繁藏はまだ歸らねえか。

ト言ひつゝ内へはひる。

お靜　おゝ松藏さんでござんすか、今夜は遲くも歸りますと、今朝手紙が參りました。

松藏　そりやあ、おめえの氣休めに手紙を持たして寄越したのだ。今朝はおろか明日明後日、四日や五日ぢやあ歸るめえ。

お靜　四日や五日で歸らぬとは。

松藏　おめえにいふのも氣の毒だが、唄にも謳ふ岡崎女郎衆にはまり込み、夜る晝なしの居續けに家へ歸る氣のねえのは、先きの女郎衆が豪氣に惚れ、年季を入れて呼通すと身揚りをしてこつてりと、持ちかけられてはどんなものでも、夢中になるのは、そこが譬の思案の外だ。

猪藏　それを知らずに家に居て、今日は歸るか明日は歸るかと、明暮待つてるおめえが氣の毒だ。

鹿六　さう惚れられては夢中になり、おめえを捨てるに違ひない、爰らが女の見切り時だ。

松藏　そんな不實な亭主なら、しまひは女郎を女房に持ち、おめえを捨てるに違えねえ、捨てられぬうちこつちから牛を馬に乘替る、心があるなら眞實なおれが直に女房にして、伊勢參宮から大和巡り京大阪の芝居見物、榮耀榮華も大層だが、身分相應言ふなり次第心任せにさせるから、おれが女房になる氣はないか。

猪藏　女郎にはまつて歸らねえ、亭主をうか〳〵待つて居るとは、こんな馬鹿げたことはねえ。

鹿六　義理を思ふは昔のこと、不實者だと思つたら、早く捨てるが當世だ。

松藏　あんまり時代なせりふだが、色よい返事をしてくんねえ。（トお靜の手を取るを振拂ひ）

お靜　またじやら〳〵と常談ばかり、隣り知らずの一軒家でも、譬にもいふ壁に耳、誰が聞くまいものでもない、よい加減にして下さんせ。

猪藏　こりや親分、おめえが惡い、常から堅いお靜さん、たゞぢやあ返事が仕にくからう。

鹿六　こゝらが酒の取持つ所だ、早く樽の口を明けて、一杯飲んでの上にしねえ。

松藏　何のかのと名を附けて、飲みたがる奴だなあ。（ト猪の藏以前の重箱を見て）

猪藏　見れば、爰に重箱の、肴があるは丁度幸ひ、

鹿六　是れを肴にぐる〳〵廻し、早く茶碗ではじめよう。

ト猪の藏重箱を持出す、鹿六片口を出してこれへ酒をあける。

お靜　その重箱は庄屋さまから、此子が今日の誕生で下さいました膳部のもの、今夜は歸る繁藏へその儘見せねばならぬわいなあ。

猪藏　まだ〳〵そんなことをいふか、何時歸つて來るか知れぬに、此まゝ置けば腐つてしまふわ。

鹿六　腐らねえうち早く始めて、醉つた上でお靜さんを口說き落すとしなさんせ。

松藏　それぢやあ、おれから始めよう。（卜茶碗を取上げる、鹿六片口で酌をする。）

猪藏　こつちはこつちで始めよう。

鹿六　咽喉がぐび〳〵してならねえ。（卜兩人も有合ふ茶碗で酒を飮む、松藏飮んでお靜にさし、）

松藏　さあお靜さん、これを固めに松藏が、女房になつてくんねえな。

お靜　假にも女房にするなどゝ、世間の聞えも惡うござんす、必ず言うて下さんすな、わたしも立派な亭主もあれば、お前もお上さんがありますではござんせぬか。

松藏　女房はあるがあの女は、知つての通り河豚の面、二目と見られぬその上に、寢像が惡くふんぞり返り、口からぶく〳〵あぶくを出して、くだらぬ寢言を言はれる時は、三年の戀も覺め果てる、おめえがうんと言ひさへすれば、直ぐに彼奴は叩き出し、居所に困るか身でも投げるか、首でもくゝれば勿怪の幸ひ、早くさうして片附けてえものだ。

卜此以前下手より、松藏の女房おかん、窶しなり、おきば、おつの同じく獵人の女房にて、摺子木棕櫚箒、大杓子など持ち出來り、囁き合ひ、門口に窺ひ居て、おかん腹の立つ思入、

かん　これ河豚の面とは誰のことだ、ふざけたことを言ひなさんすな。

ト三人内へはひろ、松藏びつくりして、

松藏　やあ、思ひがけない女房おかん。

猪藏　附いて來たのは、二人の嚊ァ。

鹿六　とんだ所へうせをつたな。

きば　とんだ所もねえものだ、松藏さんをだしに遣ひ、

つの　亭主の留守に此家へ、共々しけ込む助平野郎。

かん　二目と見られぬその上に、あぶくを吹いて寢言をいふとは、そりや誰のことをいふのだ。

松藏　さあそれは。

かん　うぬが碌な面でもあるか。十二神樂の外道の面からお捻り錢の釣りを取る人間遠い大天窓、どこの國にか褌の長さがなけりやあ十分に、頰冠りの出來ねえでこ助野郎、それでも出雲で結ばれた縁と思つて亭主と崇め、連添つてやりやあいゝかと思つて、河豚面とはよく言つた、また爰の家の裾ツぱりも人の亭主を引摺り込んで、錢の出ねえ酒を飮むとは、面に似合はぬ太え阿魔だ。

お靜　何でわたしが、其やうな事をしませうぞ。

かん　するも仕ねえもあるものか、現在人の亭主を引込み、酒を飮んで居るぢやあねえか。

きば　口でまざ〳〵いふよりは、うはなり打ちの加勢に來たのだ。
つの　再び爰へ來られねえやうに、痛い目見せて遣んなせえ。
かん　獵人の女房だから、助鐵砲に出てくんねえ。
兩人　合點だ。（ト立上る。）
松藏　これ〳〵何をそんなに騒ぐのだ、これから情人にならうといふ、大事の矢先きへごたつかれちや
　ア、色も出來なくなる。
猪藏　おかんさんは兎も角も、手めえ達が彌次馬に、立ち騒ぐには及ばねえ。
鹿六　遊び先へ踏ん込まれ、女房にぐづ〳〵言はれては、あんまり亭主が意氣地がねえ。
きば　意氣地のねえを今知つたか、女房が髪結や按摩をして、喰して置けば女房さまだ。
つの　夜るの御用をたさせるから、亭主と崇めて置くものゝ、飯炊き野郎と思つて居るのだ。
猪藏　言はして置けばいゝかと思つて、
鹿六　うぬ、どうするか見やあがれ。
かん　えゝ面倒な、すべたからうはなり打ちに叩きなぐれ。
きば
つの　合點だ。

ト鳴物になり、女房三人打つてかゝる、これを男三人捨ゼリフにて留める、皆々こつちやの立廻り、お靜は抱子を抱き上げ逃げる。トゞ男三人獲物を引つたくり、女房を打ちのめす、よろしくあつて皆々花道へはひる。お靜跡を見送り、

お靜　いかに山家の產れとて、亭主も亭主女房も女房、猥らなことでもあつたやうに、世間の聞えも憚らず、大聲あげて罵り合ひ、ほんに呆れたものぢやな。（トこの時抱子泣く、）おゝ、泣くな／＼。

ト是れより床の淨瑠璃になり、

〽晴れやらぬ空も卯月の雨勝ちに、晝さへ暗き木下闇、子ゆゑに迷ふ賤の女が、軒を目當てに門へ來て、

ト時の鐘にて花道より、おかや實は妖猫、結髮やつしなり、草履にて抱子を抱き出來り、門口にて、

かや　はい、御免なされて下さりませ。

お靜　どちらからお出でなされました。

かや　私は隣村で、かすかな暮しをいたしまする、水呑百姓でござりまするが、ちと折入つてこちら様へお願ひがござりまして、上りましてござりまする。

お靜　折角のお頼みなれど、私方も御覽の如く貧しい暮しをいたしますれば、お氣の毒だが御合力はお

斷り申します。

かや　いえ〳〵、お願ひと申しまするは無心合力ではござりませぬ、私は隣村で小作をいたす作兵衛と申す百姓の女房でござりますが、かすかの暮しの其中へ、厄介者の此子が出來、欝金木綿の產着さへ買ふことならぬ貧しい身の上、それに兎や角氣を揉むせゐか、さつぱり乳の出ませぬので、御覽の如く痩せ衰へ誠に不便でなりませぬ、折惡しう村內に乳のある家がなく、諸所を歩いて一杯づゝ乳をお貰ひ申しますが、或る御方がおつしやるには、こちら樣はお慈悲深く御親切なお方ゆゑ、お願ひ申したことなれば、一杯ぐらゐは下さらう、早く行つてお願ひ申せとおつしやるお詞を力に出ましてござりまする。是れを不便と思召しどうぞ一杯お乳をばお振舞ひ下さりませ。

〽淚ながらに母親が、賴むを不便と女房が、抱き居るわが子を下へ置き。

トおかや思入にていふ、お靜抱子を寢かし、

お靜　それは〳〵、嘸お困り、幸ひ此子が寢ましたれば、此間に一杯あげませう。

かや　それでは一杯下さりますか、有難うござりまする。然し汚ない形ゆゑお氣の毒でござりまする。

お靜　その御遠慮には及びませぬ、さあ〳〵、お出しなされませ。

かや　左樣なれば憚りながら、どうぞお願ひ申しまする。

お静　〳〵いだす子供を抱きとりて、顔しげ〳〵と打ち見やり。
目許なら口許なら、よいお子でござりまする、乳が少ないそのせゐか、大層痩せてゞござりますな。

がや　乳があつたら太らうと思ふに甲斐なく、日々に痩せ衰へるを見る悲しさ、いかなることで此様な所へ宿つて来たことかと、泣き立てられる度毎に共に涙に暮れまする。

お静　御尤もでござりまする、その悲しさは子を持つたものでなければ分かりませぬ、お前さんのお心を推量いたして居りまする。

かや　よいお方にお目にかゝり、澤山お乳を下さりまして、子供ばかりか私共まで命が助かります。有難うござりまする。

〳〵折から寝かせし幼子が、蚤にせゝられ泣き出せば。(ト赤子笛になり、)

お静　蚤にせゝられ目が覺めたか、もう少し此お子に乳を飲まして上げたいに。

かや　そんなら私がお抱き申して、お守りをいたしませうわいなあ。

〳〵言ひつゝそつと抱き上げれば、子は母親の手を知りて、泣くを叩いていぶり附け。
おゝ、今にお乳を上げますからおとなしくなされませ、少しおねむと見えまする。どれ〳〵、お

寢かし申しませう。ねん〳〵ころ〳〵寢んねこせ、ねんねの守りはどこへ行た、山を越えて里に行つた。

〽里の土産に何貰うた、でん〳〵太鼓に笙の笛。

ト おかや門口にて、子をだまし居ろ、風の音になり、

〽謳ふ聲さへかれ〴〵に、木影は靄に朦朧と、姿は見えずなりにけり。

ト 薄ドロ〳〵になり、おかや物凄きこなしにて、其儘下手へ消える。

〽かゝる所へ岡崎より、息せき歸る繁藏が、おくれし旅に妻や子が、嘸待ちわびし事ならんと、心せはしく門へ來て、

ト 花道より繁藏、糸立に包みし鐵砲をかつぎ出來り、門口へ來て、

繁藏　お靜、今歸つた。

〽いふに女房は振返り。（ト 繁藏ほこりを拂ふ、お靜抱子を下へ置き、）

お靜　おゝ、こちの人お歸りなさんしたか。

繁藏　あつちこつちで引留められ、二三日歸りが遲くなつた。

〽言ひつゝ緣へ腰かくれば、妻は手早くすゝぎを取り草鞋の紐もとく〳〵と、足を洗うて座

に附けば、（ト文句の通りよろしくあつて、）

お靜　嘸お草臥れでござりましたらう、さうして大層遲うござりましたな。

繁藏　伯父に二三日引留められ、歸りがおそくなつた故、そちや娘が待つてゞあらうと、無理な道を歩いたので、大きに今日は草臥れた。

お靜　さうしてお前の賴まれた、仕事はどうでござんした。

繁藏　仔細はゆつくり話さうが、首尾よく猫を擊留めて大手柄をしたゆゑに、伯父御を始め岡崎の所の衆に引留められ、思ひの外に遲くなつた。見れば娘が見えぬが、使ひにでも行つたのか。

お靜　晩に焚く焚木がないので、おみちを連れて山へ焚木を拾ひに行きましたが、もう今に歸りませう二三日跡から二人とも、待ちに待つて居りましたから、嘸ぞ悅ぶでござりませう。

ト繁藏寢かせし子供を見て、

繁藏　與太郎は、そこに居るか。

お靜　與太郎は人に抱かれて、表に遊んで居りまする。

繁藏　さうして此子は何處の子だ。

お靜　これは乳を貰ひに來た、其人の子でござりまする。どれ、呼んで來て與太郎が、太つた所を見せ

ませう。

〽言ひつゝ門へ立ち出て、

もし、乳を貰ひにお出でのお方、その子を連れて來て下さんせ、もし乳を貰ひに來たお方。

〽見渡す限り人影の、見えねば不審と氣もせかれ。

門に居ると思うたに、何處へ連れて行かれたか。

繁藏　なに與太郎が見えぬとか。

お靜　何處にも影が見えませぬ。

繁藏　して、抱いてゐたその人は、何處の何といふ人だ。

お靜　隣村の百姓で作兵衛とかいふ人の女房、乳を貰ひに來ましたゆゑ、一杯飮まして居るうちに、與太が泣くのでその女が、表で欺して居りましたが、影の見えぬは、はてな。

繁藏　よくそんな手で捨子をする、邪險なものが世にあるが、こつちの子をば連れて行くとは、どうも合點の行かぬことだ。

〽腕組なして繁藏が、四邊を見れば最前の酒や肴に目を附けて。

これお靜、おれが留守に誰が來て、家で酒を飮んだのだ。

お靜　これは最前庄屋さまから、あの與太郎が誕生とて、このお肴を下さつたゆゑ、お前が歸りなさんしたら上げようと思つた所へ、松藏どのが酒を提げて、友達の仲間の衆を連れて來て、肴のあるは丁度幸ひ爰で一杯飲みたいと、わたしが留めるも聞き入れず、酒を飲んで行きました。

繁藏　獵人仲間で人のいやがる、心よからぬ根ッ子の松藏、假令何と言はうとも、亭主の留守に仲間の者に、酒を飲ますは手めえが惡い、なぜ斷つて歸さぬのだ。

お靜　それはわたしも幾度となく詞を盡して斷りましたが、女子ばかりと侮つて手籠に貰うた肴を出し樽を開いて三人で酒を飲んでわたしを捉へ、言ひたいがいのことを言ひ、腹が立つてなりませぬ。

繁藏　人の噂に松藏は、おぬしに惚れて居るとやら、それゆゑおれが留守を附込み、さりとは憎い奴だなあ。

〽操正しき女房も、留守にもしやと疑ひを、生ぜし折柄松藏の、女房おかんが斷來り。

トばた／＼にて、花道より以前のおかん出來り、

かん　繁藏どの、歸られたか。

繁藏　あわたゞしいおかんどの、何ぞ急なことでもあつてか。

かん　お前に早く告げようと、急いで來たは外でもない、知らぬは亭主ばかりなりと、お前は何にも知

るまいが、岡崎へ行つた留守中にわたしの亭主の松藏を内へ引込み酒を飲み、ふざけたことをしなさるから、さつきわたしが踏ん込んで、恥をかゝせて遣つたれど、恥かしいとも思はずにいけしやあ〳〵として居るから、お前が歸つて來なすつたら早く話して聞かせようと、さつきから待つて居たのだ。

お靜　あれまあ、おかんさんとしたことが、跡方もなき僞りごと、何でわたしが松藏どのを。

かん　亭主の前の言譯に、しらばツくれたことを言つても、其言譯の立たないのは、現在爰に取り散らした酒と肴が何より證據。

お靜　あれまた、そんなことを。

繁藏　そんなことを言はれるのも、みんな手めえが惡いから、何にも言はず默つて居ろ。

お靜　それぢやといふて。

繁藏　これ、口數きかずとすつこんで居ろ。

〽せき立つお靜を止むれば、おかんは猶も大聲あげ。

かん　お前の顏へ泥を塗つたふんばり女郎も同樣な、男を引込むお靜どの、きつと仕置をしなさんせ。

〽わざと世間へ聞えるやう、門からおかんが聲高に、毒を流して歸り行く。

〽跡に繁藏吐息をつき。

トおかんよろしく花道へはひる。

繁藏　七人の子はなすとも女に肌は許すなと、昔からの譬の通り、よもやおぬしに限つてはそんなことはあるまいと思つて居たはおれが誤り、貧乏暮しをして居れど、世間へ不義理をせぬゆゑに、今日まで人に後指をさゝれたことのない繁藏、よくも世間へ顏向のならぬことをしやあがつたな。

お靜　松藏どのと道ならぬ不義でもわたしが仕たやうに、疑はしやんすは無理ならねど、おかんどのは兎も角もわたしが不義をするやうな、みだらな心のないことは、お前も知つてござんせうに、ても情ないことぢやなあ。

繁藏　みだらなことがあるまいと、思ふゆゑに留守を預け、旅仕事に行つたまゝ歸つて見れば此しだら亭主の留守に男を引入れ、何で家で酒を飲んだ、みだらなことがないと言つても、言譯は立たないぞ。

お靜　それはわたしが誤りなれど、幾ら留めてもきかぬゆゑで

繁藏　留めてきかずば理不盡ゆゑ、お居にでも言ひ附けて庄屋さまをお招き申し、なぜ追拂つて貰はぬのだ。

お靜　はゝあ。（ト泣き入る。）

繁藏　まだそればかりか、見ず知らず何處のものだか知れぬ者に、庄屋さまから預かつた大事の息子を渡してやり、其儘行方の知れぬのは、正しく其子と取替へて連れて行つたに相違ない。それも大方松藏と、打解けて酒を飲んで居て、心附かずに居たのであらう。

お靜　いえ〳〵、さうではござんせぬ、言譯がましうござりますが、いつも與太が泣く時は乳貰ひに來たその人が、守りをしてくれますゆゑ、うつかり其氣で馴染のない知らぬ人に與太郎の、守りをさせたはわたしが誤り、身の言譯がござりませぬ。

繁藏　たゞ言譯がないとばかりで、それで言譯が立たうと思ふか、これが我が子であるならば約束事とあきらめれど、よもやおぬしも忘れはせまい、三年跡にお袋が死んだその折都合が惡く、どうしようかと思つた所、お慈悲深い庄屋樣が、取り片附から配り物一切始末をして下され、親にもまさる大恩うけたお禮に、乳がなくてお困りゆゑ我が方へ里同樣預かつた、たつた一人の大事の息子、何處の者やら居所も知れぬ女に守りをさせ、それぎり行方が知れませぬと、どの面下げて言はれうぞ。

お靜　お前にさう言はれると返す詞がござんせぬ、みんなわたしが誤りゆゑ、どうしたらよからうな。

〽先非を悔みおろ〱と、お靜は淚に暮れるのみ、繁藏は氣をいらち。

繁藏　これといふのもおれが留守に、松藏などを引入れて、家で酒を飲むからだ。

お靜　何でわたしが飲みませう。

繁藏　飲まぬものが何でまた、酒肴が散らしてあるのだ。

お靜　さあそれは。

繁藏　邪魔になるゆゑ與太郎を、知らぬ者に渡してやつたか。

お靜　さあそれは。

繁藏　みだらなことをせぬといふ、きつぱりとした證據があるか。

お靜　さあ。

繁藏　大恩のある庄屋さまへ、何と言譯する積りだ。

お靜　さあ。

繁藏　夫の顏を汚すといひ、お庄屋さまへお歎きかけるもおのれ故、どうして腹をいてくれう。

〽齒がみをなして繁藏が、襟上取つて引倒し、身の悔しさに續け打ち、お靜は何と言譯もなきの淚に伏し沈む、〽歎きの中へ山路より、馳來る妹が息を切り。

ト お靜をさん〴〵に打つ、花道より以前の妹娘おみち走り出來り、

お道　かゝさん、山から姉さんが、今谷へ落ちたわいの。

お靜　えゝ、お辰が谷へ落ちたとか。

繁藏　さうして何處から落ちたのだ。

お道　やあ、とゝさんお歸りか、早く行つて下さいまし。

繁藏　おゝ、直ぐに行くが、所はどこだ。

お道　庚申塚の松の木の側から、枯木を取るとて落ちたのぢやわいの。

繁藏　おゝ、よく早く知らして來た、直に行つて助けてやらう。

〽身拵へして立出れば。（ト繁藏山刀を差し門口へ出る。）

お道　わたしも一緒に行きませう。（トすがるを、）

繁藏　そちは家に待つて居よ。

〽縋るわが子を突きのけて、心も空に繁藏は山路をさして、

ト山おろしにて繁藏花道へはひる。

〽跡にお靜はやゝ暫し、物をも言はず居たりしが、やう〳〵に泣く目を拭ひ。

お靜　女子の操はいふに及ばず教への道を堅く守り、惡い心を持たねどもいかなる前世の報いやら、松藏ゆゑに覺えのない、この身に不義の汚名を受け、繁藏どのへ潔白の言譯ならぬ其上に、庄屋どのから預かりし大事の〳〵あの子をば、見知らぬ者に守りをさせ失うたとは言はれぬ譯、さつきお出での其時に今日は忰の誕生ゆゑ、土地の鎭守の產神へ連れて行くから後方に、迎へに來るとおつしやつたが、今にもお出でなされたら此の言譯のしやうがない。

〽重なる難儀にとつおいつ、子を抱き行きし乳貰ひが、若しや歸つて來はせぬかと、門へ立出で見廻せど、人影見えぬたそがれの、雲足早き雨風に髮も心も打ち亂れ、途方に暮れし折柄に、かけ出る古猫が幼子くはへ逃げ行けば、側なる娘が驚きて。

ト此うちお靜門口へ出て四邊へ思入、ドロ〳〵になり、上手の藪の蔭より大きな三毛猫出で、抱子を啣へ藪の中へはひる。おみち見てびつくりし、

お道　かゝさん、爰に居た子を、猫が啣へて行つたわいの。

お靜　なに、猫があの子をば、えゝゝゝ。

〽はつとばかりに打ち驚き。

どこへ啣へて行きをつたか、今にもさつきの乳貰ひが、與太を連れて來たならば、これも言譯な

らぬ仕儀。
お道　もしかゝさん。
お靜　こりやまあ、どうせう、どうせうぞいなあ。
〽こりや何とせうどうせうと、狂氣の如く起ち居つ、かつぱと伏して泣き沈む。
あゝ情ない此身の因果、その上またもあの子をば猫にさらはれ取られし上は、こりやもういつそ言譯に、死ぬより外に思案はない。
お道　かゝさん、お前死ぬのかえ。
お靜　おゝ、死なねばならぬ此場の仕儀、わしが死んだ其跡で、とゝさんが歸らしやんしたら、此の入譯を言うてたも。
お道　お前が死ぬなら、わたしも一緒に死にたいわいな。
お靜　あこれ、何でそなたが死にやるのぢや。
お道　あい、今お前が死なしやんしたら、またとゝさんがかゝさんを、餘所から貰ふ其時は、姉さんは大きいけれど。
〽わたしは年もまだ行かず、後に來たかゝさんに打ち叩かるゝが悲しいゆゑ。

お前と一緒に死にたいわいなあ。
お靜　おゝ、道理ぢや〳〵、それ程までに思ふなら、母と一緒に死んでたも。
お道　あい、嬉しうござります。
〽死ぬを悦ぶ心根を、不便と母は引寄せて。
お靜　よう言うてたもつた、嬉しいぞや、姉のお辰は谷へ落ち生死の程も分らねど、とても命は助かるまい。そなたとわたしが死ぬなれば、親子三人手を取つて冥土の旅へ行かうわいの。
〽可愛のものやと抱きしめ、わつとばかりに泣き居たる。
この事を繁藏どのへ書き殘して置きたけれど、田舍育ちに幼き時から田畑のことのみせし故に、いろはも書けぬ不自由ゆゑ、せめて子供は人並に習はせ置きしも今の幸ひ、どうぞそなたが書いてたも。
お道　あい、そんならわしが書きませう。
お靜　生憎紙も有合さねば、幸ひそなたの清書双紙、白い所があつたであらう、机の儘に持つて來や。
お道　あい〳〵。
〽あいと言ひつゝ立寄つて、手習机取り出し、〽親子の緣も薄墨の、硯に筆の命毛さへ、

今日を限りに自殺なす、清き心の清書や、殘る白紙を幸ひと。

トおみち手習机を出し、墨をすることあつて、

お靜　女子の文はどう書くやら、恥しながら知らぬゆゑ、有りの儘に書いてたも。

かゝさん、何と書きますえ。

お道　あい〳〵。

お靜　かき置きのこと。

お道　かき置きのこと。（ト双紙へ書くこと。）

お靜　松藏どのゆゑ覺えもない夫に不義の疑ひうけ、その言譯のならぬ上、大恩のある庄屋樣の大事の

お子を失ひ申譯なきゆゑに、娘おみちと諸共に自害いたして死にますゆゑ、これにてお許し下さ

れたく候。

お道　かゝさん、跡は何と書きまする。

お靜　もうそれでよい程に、跡は女子の文のやうに書いてたも。

お道　そんなら文の止りのやうに、あら〳〵かしく。

お靜　お庄屋樣、繁藏どの。下へしづと書きや。

お道　あい、かゝさん是れでようござりますか。

〽見すれば母は手に取り上げ。

お靜　おゝ、よう書いてたもつた、親は書かねど此やうに立派に書ける此の娘、成人したらあつぱれ出世もしやうもの、蕾のまゝに散らすとは、思へば不便なことぢやな。

〽またさめ〴〵と泣き沈む。

いつまで言つても愚癡は盡きぬ、妨げなきうち。

お道　先きへ殺して下さりませ。

お靜　おゝ。

〽子に勵まされ是非なくも、突かんとなせど恩愛の、絆に引かれためらひしが。

お道　とゝさんの歸らぬうち、ちつとも早く。

お靜　心を鬼に持たねばならぬ。

〽胸許取つて顏そむけ、非業の最期ぞ。

ト　お靜おみちの胸許を突かうとして突きかねる思入よろしくあつて、トヾ思入あつてきつと突く。こゝの見得、山おろし、本釣鐘にてこの道具廻る。

（松明峠谷間の場）――本舞臺一面の平舞臺、眞中より上の方九尺程の岩組、爰に庚申塚、榎の大木藤葛からみ、此うしろ岩組、眞中より下の方向ふ谷間夜るの遠見、下手岩山の張物にて見切り、總て三州松明峠谷間の體、爰に以前のお辰、そばに草籠を置き、諸所破れたる着附にて氣絶して居る、この見得床の三重、山おろしにて道具留る。

〽次第なり、爰は三河に名も高き、松明峠の谷底にて、岩に堰かるゝ水音も、谺に響き物凄く、日も早や西へ入相の、鐘に哀れをますお辰、木々のあはひにおちこちの、息も絶え入る折柄に、子ゆゑの道もいそ〱と、心も空にたどり來て。

ト此うち上手より、繁藏出で下を見て、

繁藏　こりやお辰、どこに居る、こりやお辰やァい。

〽呼べど答へも山彦の、谺の外にあらざれば。

こりやお辰、それでは爰ではないか知らん。

〽四邊うろ〱見おろして。（ト岩組の木の枝へつかまり、下を見おろしお辰を見て、）

や、そこに居るのは、お辰でないか。

〽心あせれど數丈の谷、如何はせんと見廻せば、榎にからむ藤かつら、是れ幸ひと卷戻し、

蔓に縋りて岨道より、下りる重みに蔓切れて、どつさり落ちて。

ト文句の通りよろしくあつて、下りて膝を打つこと、

あいたゝゝゝゝ。や、こりや娘が、えゝゝゝゝ。

トびつくりして立上り、足の痛みにどうとなり、後の流れへ行き手拭に水を浸し、持ち來りて、お辰の口へしぼり込む。

娘やアい〳〵。

〽いふ聲通じて息吹き返し。

こりや、氣が附いたか、しつかりしろ〳〵。

お辰　あい。

〽いふ聲さへもやう〳〵に、胸を押へて。

もう大丈夫でござります。

繁藏　あ、よかつた〳〵、早く爰へ下りようとおれまで膝をひどく打つた、さうして何處も怪我はせぬか。

お辰　少し身體を打ちましたが、疵はどこもござんせぬ。

繁藏　それは何よりよかつたなあ。

お辰　わたしが谷へ落ちたのが、どうして家へ知れました。

繁藏　丁度おれが岡崎より歸つた所へ妹の、おみちが知らせにびつくりして、直ぐに爰へ飛んで來たのだ。

お辰　嘸かゝさんが家に居て、わたしを案じて居なさんせう。

繁藏　案じて居るか悅んで居るか、あれの心は知れぬわえ。

〽いふをお辰は聞き咎め、

お辰　えゝ、心が知れぬと言はしやんすは。

繁藏　おれが留守を幸ひに、獵人仲間の松藏を家へ引入れ酒を飮み、みだらなことをしたと見え、大恩ある庄屋さまから里に取つた與太郎を、見ず知らずの乳貰ひに守りを賴んで置いた所、どこへ行つたか行方知れず、大事の子をば失うて、何ともかとも庄屋さまへ此言譯の仕樣がない、斯ういふことを仕でかす奴ゆゑ、あれが心は知れねえわえ。

お辰　それは誠でござりまするか。

繁藏　さあ、餘りのことの悔しさに襟上取つて引倒し、散々に打ちするゑた所へおみちが知らせて來たの

で、憎い女房をその儘に、可愛いそちを尋ねに來たのだ。
〽父の詞を誠と思ひ、お辰は我が家の方に向ひ。

お辰 これかゝさん、何でお前はそのやうな、道ならぬことをしなさんした。
〽女今川庭訓にも、女子は一人の夫を守り、操を立つるが貞女の道、それにお前は男を引入れお酒を飲むとは何事ぞ。
わたしが家に居たならば其様な事はあるまいに、庄屋さまへの言譯に嘸やお困りなさんせう。
〽親の心を察しやり、縋り歎けば繁藏が。

繁藏 斯ういふ利口な子に引替へ、ふしだらな事をするといふのも、一字一點字が書けず物の道理が分らぬからだ、是れに附けても少しも早くそちを連れて歸り度いが、爰らに道はないことか。
〽四邊を見れは數丈の巖、便りあらねば途を失ひ、
見上ぐるやうな此岩で、所詮のぼることは出來ず、晝なら是れから谷川の流れに附いて行きもせうが、夜道に手めえを連れては行かれず。

お辰 それでは家へ歸られず、爰で野宿をしますのか。

繁藏 行くことならねば是非なくも、こりや夜明けを待たねばならぬ、どうしたらよからうな。

〽いかゞはせんと起ちつ居つ、氣を揉みあせる折も折、雲間を出る月影を、便りに庄屋が馸け來り〳〵

ト此うち繁藏よろしく思入あつて、此時下手向うへ庄屋出る、灯入りの月を出す。

李右　そこに居るのは、繁藏どんか。

繁藏　さうおつしやるは。

お辰　お庄屋さま。

李右　さて、大變が出來ました。

繁藏　なに、大變とおつしやるは。

李右　そなたの女房お靜どのが、妹娘を刺殺し自分も咽喉を突いて死んだぞ。

繁藏　えゝ。

〽聞くにびつくり親子とも、思はずどうと下に居て。

李右　すりや、女房はおみちを殺し、自分も一緒に死にましたか。

李右　女の狹い心から、一途に迫つて死んだことか。見るも無慘な二人の有樣。

繁藏　して、それはどういふ譯で。

李右　仔細はそばにあつた書置、清書双紙の白いところに、書いてあるから讀んで見なされ。
〽清書双紙を投げ込んで、（ト件の双紙に石を添へて手拭で結び下へ投げて、）
わしは是れから代官所へ、検視願ひの書面を書くから、谷を廻つて早くござれや。
〽言ひ捨て庄屋はとつかはと、道を急いで歸り行く。
ト庄屋よろしく後へはひろ、始終山おろし、
繁藏　〽跡に二人は茫然と、清書双紙を取り上げて。（ト件の双紙を取つて、）
今書置だとおつしやつたが、あれはいろはも書けぬ譯だが。
お辰　これは妹が書いた書置。
繁藏　どれ〳〵、おれが讀んで見よう。書置の事、夫の留守には猶更に人にかけ言いはれぬやう、大事に家を守りしに松藏どの故覺えない、夫に不義の疑ひ受け、その言譯のならぬ上、大恩のある庄屋さまの大事なお子を失ひて申譯あらざるゆゑ、娘みちと諸共に自害いたして死にますから、是れにて御許し下さるべく候、庄屋様、繁藏どの。しづ。
〽聲もうるみて繁藏が、涙ながらに讀終り。
さつきおれが疑ひし不義の言譯、二つには、庄屋さまより預かりし大事の御子を失ひし、申譯に

自害なしたか。

お辰　何にも知らぬおみちをば、なぜかゝさんには殺さんした。

繁藏　これは女の一途に迫り、發狂したと思はるゝ、不便な事をさせたなあ。

〽あたら命を捨てさせしと、後悔なして忍び泣き、〽折から響く筒音に。

トこの留り本鐵砲の音して、

お辰　えゝ、びつくりした今の音は。

繁藏　誰か猪でも撃つたのだらう。

〽折から告ぐる遠寺の鐘、夜風に運ぶ雨雲に、月はかくれてほの暗く。

ト本釣鐘、山おろし、月をかくす。

今更いふも愚癡ながら、操正しき女房を疑つたはおれが誤り、遂には狹い心から女房娘が非業な最期、その死骸を見たいにも屏風を建てし岩山に、翅なければ上られず、いかゞな譯でこのやうに、おれに難儀が重なるか。

〽歎息なせば泣き居たる、娘お辰が顔を上げ、（ト繁藏ぢつと思入。お辰側へ寄り、）

お辰　とゝさん、お前それを知らぬかえ。



繁藏　なに、知らぬかとは。
お辰　お前が撃つた猫の恨み。
繁藏　何と。
〽折から落す山風に、髪も亂れて形相變り、さも恨めしげに打見やり。
お辰　庄屋の息子を奪ひしも、女房娘が自殺なせしも、我が通力のなせしこと、見よ〳〵汝等四人共取殺すからさう思へ。
繁藏　さては撃ちたる猫の一念、娘お辰に乘りうつりしか。
お辰　わが恨みをば、思ひ知れ。
〽繁藏目がけて飛びかゝる、姿はさながら猫に似て、通力自在に飛び附き〳〵、變化の業通あしらひ兼ね、用意に差したる山刀、脅しに拔いて切拂へば。
ト誂への鳴物になり、お辰猫の思入にて繁藏へ飛附く、繁藏山刀を拔いて、脅しに切拂ふ立廻りよろしくあつて、
〽爪とぎ立てゝ飛び附くにぞ、是れまでなりと繁藏が、たゞ一刀に切下れば、あつとばかりに倒るゝ娘、果敢なく息は絕えにける。

や、脅しに拔いた刀にて娘お辰を切殺せしが、やゝゝゝ。
〽刀投げ捨て駈寄りて、抱き起せど事切れて、餘りのことに茫然と暫し呆れて居たりしが、
ト刀を捨てお辰を抱き起し見て、あきれし思入にて手を放す、お辰ばつたり倒れる。
今日一日に女房はじめ、二人の娘が非業の最期、かゝる憂き目を今見るも三州西尾で擊留めし猫の祟りであつたるか。
〽折しも吹き來る一陣の、風に木の葉もひら〳〵と、目先に殘る妖猫の、拔けつ潛りつ切拂ふ。
ト此うち繁藏へ猫飛びかゝるといふ思入にて切拂ふ、ト山刀を我が咽喉へ突き立て、
〽妖魔の祟りぞ。
ト繁藏よろしく苦しみ倒れる。山おろし三重にて、　幕

五幕目

嶋田驛旅籠屋の場
大井川松並木の場

淨瑠璃　逢ひたさ見たさは　比翼紋愛井の字　（淸元連中）
夢に三浦屋

〔役名――平井權八、小泉屋八藏實は若黨八內、本庄助七、同助八、醫者藪垣竹齋、若い者喜助、按摩めく市、八藏女房お秋、三浦屋抱へ小紫、新造小菊、同小鶴、豆幇間里八、禿ゆかり、八藏悴友松宿屋下女お春、同お夏、捕手役人等。〕

（金谷宿旅籠屋の場）――本舞臺四間の屋體、上手三尺常足の二重揚緣附、下手一間落間、折廻し板羽目、二重向う小泉屋といふ暖簾口、上手一間間平戶の押入戶棚、下手板羽目、跡講中の札を掛け、上手千本格子の附屋體、この前に手桶を積みし用水桶、下の方路地口、黑塀、日覆より戶袋に「御泊小泉屋」と記せし漆喰塗りの戶袋、眞中格子の書割、總て金谷宿旅籠屋の體、爰に喜助宿屋の若い者にて、樂書のある行燈を掃除して居る、下女お春、お夏煙草盆を拭いて居る、下手に按摩めく市、下駄がけにて腰をかけ居る體、馬士唄にて幕明く。

喜助　めく市さん、此頃は忙しいかえ。

めく　今年は春から引續き、伊勢參宮が多いので、近年になく私共は長いおあしを取りました。

喜助　それぢやあ今に檢校か、勾當にでもなられるだらう。

めく　勾當どころか放蕩になり、每晚宿場へ泊り込んで、却つて借金が出來ました。

お春　目くらのくせに女郎などを、買はないでもいゝぢやあないか。

めく　日くらだつて同じ人間、女郎も買ひたうござります。
お夏　おや〳〵、同じ人間かえ、お化の方かと思つたよ。
喜助　お化などゝ言はれちやあ、こいつァ默つて居られねえの。
めく　そんな憎まれ口をお聞きなさると、お上さんに言ッ附けますよ。
お春　何も按摩のお前達に、
お夏　言ッ附けられることはないよ。
めく　なに、無いことがあるものか、此間も上州の商人衆へ二百宛で賣つたものがあるだらう。
お春　何を商人衆へ賣りましたえ。
めく　それ、熊の皮の巾着を。
お春　それは外の宿屋のこと、こつちの家は皆堅藏ばかり、そんなことはしませんよ。
お夏　餘計なことを言ひなさると、是れから二階へ呼ばないよ。
めく　そいつア、あやま針の療治だ。
喜助　いかに錢が出ねえと言つて、貸本の表紙裏と旅籠屋の行燈ぐらゐ、樂書をするものはねえ。
お春　それは昨夜お泊りの江戸の衆に違ひない、壁にも書いてありますよ。

お夏　三方とも細々と、よく書いてありますね。

めく　もし、江戸の衆と聞くと懐しいが、どんなことが書いてあります。

喜助　先づ正面に書いてあるのが、江戸新吉原江戸町一丁目三浦屋内小紫、そのまた右に書いてあるのが「逢ひたさ見たさは飛立つばかり、籠の鳥かや恨めしや」左りの方に書いてあるのが「清元延壽太夫、清元梅吉」と書いてあるのだ。

めく　おゝ、その三浦屋の小紫といふのは、當時名高い花魁だ。

お春　はるかに遠き江戸の吉原。

お夏　どうしてそれを知つておいでだ。

めく　去年の暮まで江戸に居て、よく吉原へはひりましたから、名高い花魁は知つて居ります。また逢ひたさ見たさといふ文句は、八重梅といふ小唄で、これも吉原で流行ります。

喜助　さうして、清元延壽太夫といふのは。

めく　これも今江戸で流行の太夫、獨吟などで遣る時は實に聞きごとでござります。

お春　その清元の淨瑠璃が、聞きたいものでござんすな。

めく　後に私が獨吟でお聞かせ申しませう。

お春　お前の聲でやられたら、糠味噌がかはるから。

お夏　それはお預けにいたしませう。

めく　そんなことを言ひなさると、お上さんへ言ッつけることがあるよ。

喜助　これ、餘計なことを言はねえで、療治の口でも搜しなせえ。

めく　どれ、お二階を廻つて來よう。

トめく市奧へはひる。唄になり、花道より藪垣竹齋羽織着流し一本差し雪踏にて、跡より八藏女房お秋、宿屋の女房のこしらへ、駒下駄にて出る、同じく悴友松、若衆鬘着流しにて出で、花道にて、

お秋　もし、そこへお出でなさいますは、藪垣さまではござりませぬか。

竹齋　おゝ、是れは小泉屋の御内儀、御子息をお連れなされ、何處へお出でなされました。

お秋　今日は先代の祥月ゆゑ、悴を連れて菩提所へ參りました。

竹齋　それは御奇特なことでござる。

お秋　あなたはどちらへお出でゞござります。

竹齋　愚老は病用で宿內を廻れば、お宅へ參る所でござる。

お秋　左樣なら御一緒に。

友松　お供いたして參りませう。（ト右の鳴物にて舞臺へ來り、）
喜助　これは藪垣先生、入らッしやいまし。
竹齋　今日は雨かと思ひましたが、いゝお天氣になりました。
喜助　先づお上りなされませ。
下女　お上さん、お早うござりました。
お秋　もう忙しい時分ゆゑ、お墓參りをしたきりで、急いで歸つて來たよ。
お春　それでは友ちやんはいけませんね。
友松　今日は何にも買はずにしまつた。
お秋　先生奥へいらつしやいまし。
竹齋　最早薄暑の時候ゆゑ少々汗が出ましたから、爰で風を入れて參らう。（ト下女お夏茶を持つて來て出す。）いや、忙しいのに構はつしやるな。
お秋　先生へ伺ひますが、やどの鳥目は急に直りませんものでござりませうか。
竹齋　外ならぬ御當家ゆゑ、勘考の上配劑いたすが、どういたしても十日位かゝらねば治しますまい。まだ鳥目になられてから、四五日位でござるな。

お秋　先月の末に京都まで參りましてございますが、その歸り道から少々づゝ、夜分になるとぼんやりと見えぬさうでござりましたが、此の二三日は暮れ六ッの鐘を合圖に見えなくなり、手引がなければ、手水場へも參ることが出來ませぬ。
竹齋　何ぞ途中で心配をさつしやれたかな。
お秋　ほんに何やら道中で、心配なことがござりましたと申すことでござります。
竹齋　元來逆上より起るゆゑ、その心配が元でござる、また〳〵加減をいたさうから、三五日詰めて上るがよい。
お秋　何分よろしう願ひます。
竹齋　どれ、ちよつとお見舞いたして參らう。
友松　私が御案内いたしませう。（ト合方になり、友松案内して藪垣奥へはひる。）
喜助　もしお上さん、藪垣さんの藥より八ッ目鰻を汁にして、二三日おあがりなされたら、直に鳥目は直りませうに。
お秋　それはほんの素人療治、お醫者に乏しい田舍なら八ッ目鰻もよからうが、病はお醫者でなければいけぬ、何でも餅は餅屋ぢやわいな。

お夏　よくお呪禁やお水などを飲む人がござりますが、煩つたらばお藥を飲むのが一番でござりまする。

お秋　さうしてわたしの留守のうち、お泊り客はなかつたかえ。

喜助　大若衆のお武家樣が、お泊りなされてゞござりまする。

お秋　なに、大若衆のお武家樣が、そのお客へ御挨拶に旦那はお出でなされたか。

喜助　暮れると鳥目で見えぬから、帳合をして置くと、まだ御挨拶にお出でなされませぬ。

お秋　それではわたしが旦那の代りに、して、お座敷は二階の何處だえ。

お春　表の一番でござります。

お夏　御案内いたしませう。

お秋　大若衆のお武家樣とは、丁度似合の。

喜助　え。

お秋　いや、帳合も。（ト氣を替へて立つを道具替りの知せ。）調べておかう。

ト此模樣宿場騷ぎにて、この道具廻る。

（小紫部屋の場）――本舞臺一面の平舞臺、向う上手一間の床の間、續いて一間の地袋戸棚、この下に茶道具を置き、上手一間塗骨障子屋體、下の方中二階の淨瑠璃臺、下板羽目、伊豫簾を掛けあり、舞臺眞中に鏡臺を直し、傍に眞鍮の金盥、うがひ茶碗水指しなど置き、總て江戸吉原三浦屋、小紫部屋の體よろしく、流行唄にて道具留る。と風の音、指金の蝶舞ふ、よき程に伊豫簾を卷きあげろ、淸元連中居並び、直に淨瑠璃になる。

〽淺草の鐘の音遠き朝北風、田の面は近く雨を呼び、蛙の聲の鄙めきて、夕べ賑はふ不夜城の、廓の景色裏表。

ト合方になり、上手より小菊小鶴の新造部屋着のこしらへにて出來り、鏡臺へ鏡をかける、上手屋體より權八、着流し好みの着附にて出る、跡より小紫部屋着のこしらへにて出て來り、

權八　今朝は早く歸らうと、思ひの外につい寢忘れ、明るくなつては歸りにくゝ、餘儀なく今日は逗留いたした。

小紫　たとひお歸りなさるといつても、今日はお歸し申しませぬ。

小菊　それに幸ひ今しがたから、雨が降つて參りました、お天道さまからお許しの居續け日和でござりまする。

小紫　今日も明日も明後日も、そのまた明日のあさつてまで、居續けをなさんせいな。

權八　花魁が手取りゆゑ、新造禿に至るまで歸さぬやうにいたすは感心、これが手管と申すのぢやな。

小紫　手練手管は昔から、遊里の習ひと申しますが、いやなお客は咒禁して、歸しますとも留めはしませぬ。

權八　などゝ申すが、手だてゞあらうな。

小紫　またそんな事を言はしやんすか。（ト抓る。）

權八　あいたゝゝ。

小菊　もし花魁、あなたのお髮が見ツともない程大層亂れましたから、撫附けてお上げなさいまし。

權八　子供の折から寢像が惡く、一晩寢ると亂れてならぬ。

小菊　いえ、さうばかりでもござりますまい。

權八　何でもよいから、ちよつと亂れを。

小紫　どれ、撫附けて上げませう。

〽まだ風寒く重ね着の、袷の初の御見より、深くも思ひ掛け香の、薫ゆかしき小紫、けふ居續けの權八が、みだれし髮をかき上ぐる、櫛の雫も濡れの端。

ト小紫櫛をとり、權八の鬢を撫附けること、

權八　恥かしながら吉原へゆうべ初めて參りしゆゑ、見る物事が珍らしく、わけて小菊が踊りの手振り面白く覺えたが、今一度踊つて見せぬか。

小菊　それはお安いことなれど、餘り拙ない踊りゆゑ。

權八　國への土産にいたしたいから、辭退いたさず見せてくりやれ。

小紫　お國へ土産とおつしやれば、少しも早う。

小菊　そんなら爰で。

權八　さあ〱、所望だ〱。（ト是れにて小菊手拭を持ち前へ出、端唄もやうになる。）

〽呉竹の根岸の窓に鶯も、老といはるゝ夏の來て、木々の若葉に軒くらく、簾かゝげて雪と見る、卯の花垣や時鳥、あれ憎らしい影見せず、忍ケ岡を越えて行く。

ト小菊振りあつて納まる。

よウ〱面白かつた〱、手前は今もいふ通り中國筋より此江戸へ初めて參りし田舍者、どうして遊ぶものなるか、廓の勝手知らざるが、小紫が親切に恥をかゝずに忝ない。

小紫　何もかも御存じで、其樣なことをおつしやるのは、お客の手練手管でござんす。

權八　何の手練手管であらう、實に初めて參つたのぢや。

小紫　さうおつしやるが此間中、お見掛け申しました。

權八　それは何時頃いづれにて。

小紫　日は忘れしが、十日程過ぐれど今に忘れぬは。（ト是れよりくどきになる）

〽櫻も末に青葉勝ち、遲れて咲きし一本の、花の薫りの一入に、見返りて見る仲の町、〽その夜は月もすみ町の、角でいづれの花魁か、連立つて行く深い仲、〽それを廓へ初めてといふは遊女に勝りたる、手練手管ぢやないかいな。

ト小紫權八を枷に振りあつて、權八前へ出で、

〽それは大方人違ひ、國を出しは跡の月、旅の烏の江戸馴れず、三浦が許へ塒をば取りしは雨のふるさとへ、家づとにする話草。

小紫　あれまたあんな嘘いうて、わたしや誠と思ひませぬ。

權八　まだ人を疑うて、それはさうと昨夜呼んだ豆幇間里八といふは、まだ出て參らぬか。

小鶴　さつきお部屋へ來て居ましたよ。

里八　へい、疾より參つて居りまする。（ト後より豆幇間里八羽織着流しにて出る。）

權八　おゝ里八、來て居つたか。
里八　少し旦那へ内々で、申し上げる事があつて、
權八　なに、内々でとは。
里八　あなたを敵と附けねらふ、侍がござりまする。
權八　え、おれを敵と、
小紫　ねらふといふは、誰でござんす。
里八　咋夜お出での太夫さまが、君は山谷の三日月さまで、宵にちらりと花魁がお顏を見せたそれぎりゆゑ、あなたを戀の敵だと腹を立てゝござりまする。
權八　すりや、小紫が客であつたか。
小紫　大層びつくりなさいましたな。
權八　さあ、びつくりしたは疵持つ足に。
小紫　え。
權八　いやさ、明日は天氣にしたいものだ。
里八　いえ〳〵、明日も降りまする。

權八　そりやまたどうして。
里八　照る〳〵坊主同樣に、ふり〳〵坊主をこしらへて、昨夜祈りし德に依り。
〽それふるやれ降るふるものは、神樂の神子が鈴をふる、行列奴が槍をふる、富士の道者が鈴をふる、それふるやれふる子供等が、五十三次宿附をふり出す賽の書双六。
ト此內里八禿を相手に振りあつて納まる。
權八　や、面白い〳〵、流石は廓に育ちしとて、人を反らさぬ扱ひは、實に感心いたすわえ。
里八　さつき小鶴が申す通り、今朝降り出したこの雨は、結ぶの神でござりませう。
小紫　わたしはちよつと松屋のお客へ、顏を出して來る間、おいやであらうがお床にて。
權八　またそんなひぞりを言ふか。
里八　雨音きいてしつぽりと、
小鶴　早うおしげり、
三人　なさんせいなあ。
〽いふをばしほに手を取りて、又寢の床のとこよ花、やがて浮名も橘の、人目忍んで入りにける。

ト權八立上り、皆々介抱して上手屋體へはひる。

小紫　ちよつと顏を出して來る間、お前達は次の間で氣を附けて上げて下さんせ。

里八　そんなら花魁、松屋のお客へ。

小紫　これが苦界といふのぢやわいな。

〽花物いはぬ胸のうち、晴れぬ思ひに出でゝ行く。（ト小紫思入あつて奥へはひる。）

禿　お煙草盆を上げようかえ。

小菊　おゝ、よう氣が附いた、お茶の道具もお枕許へ。

禿　どれ、上げようわいな。（ト禿は煙草盆を持ち、小菊は煎茶道具を屛風の內へ入れる。）

小菊　さあ、是れからは次の間で、

禿　よい事をして、

二人　遊ばうわいな。

〽さあ／＼是れから鳥さしか、お茶坊主をして遊ばうと、仲のよい子が打連れて、行くよと見えしが一睡の、旅の宿りの夢にして、風に破れて。

ト小菊先きに小鶴、里八、禿下手へはひる。ドロ／＼になり、指金の蝶舞つて消える。是れにて清元

を消す、道具居所替りになる。

（旅籠屋二階の場）――本舞臺平舞臺、向う跡先三尺の茶壁、眞中小形の襖上の方障子屋體、下の方中窓、上下板羽目、火の用心と記せし掛行燈、總て旅籠屋二階の體、爰に以前の屛風を上手へ疊みこむと、平舞臺の眞中に權八裏向にて、掻卷をかけて寢て居る、是れを按摩めく市足を揉んで居る體、ドロ〳〵にて道具納まる。と、ドロ〳〵打上げ合方になり、

めく　お客さまにはお休みなすつたやうだが、默つて歸らうか。いや〳〵、そんな事をすると見世へ惡い、いつそ起してお聞き申さう。もしお客さま、もつと揉みませうか、もしお客さま〳〵。

ト搖り起す、權八心附き、

權八　ついうか〳〵と、いゝ心持ちに寢たわえ。

めく　大分お草臥れと見えまして、大層鼾をおかきなさいました。

權八　その筈ぢや、今江戸の夢をあり〳〵と見た。

めく　江戸の夢とは、何の夢でござります。

權八　療治をしながらそちの話の江戸の吉原の夢を見たが、なか〳〵な全盛にてそちより聞きし小紫が

實意を盡せし扱ひに田舍育ちの身共などは、前後忘却いたす程嬉しき夢を結んだと、思ふはやつぱり正夢で、はッと思ひし其汗も、目が覺めたらば寐汗であつた。

めく　いや、お惣氣たつぷりに承はつて、何か頂戴と申す所だが、夢ではどうも仕方がござりません。（ト揉み仕舞ひ、）へい、よろしうござります。

權八　見ぬ吉原の廓のさまを夢に見たるもそちが蔭ぢや、療治代は多分に遣はさうぞよ。

めく　それは恐入ります。（ト權八財布より錢を出し、）

權八　さ、療治代を遣はすぞ。

めく　これは澤山に有難うござります、また御逗留になりますなら、吉原の續き話しをいたしませう。左樣なれば、またお願ひ申し上げます。

ト合方になり、按摩は下手へはひる。爰へ下手より、小泉屋八藏羽織着流しにて出來り、

八藏　へい、私は小泉屋八藏でござりますが、今日はようこそお泊り下さいました。

權八　其方は此家の主人か。

八藏　へい、左樣にござります。

權八　今宵は世話になりますぞ。

八藏　先刻はお茶代を下さいまして、有難う存じまする。して、今日は何れよりお立ちでございましたな。
權八　見附宿から今朝立つたが、少し途中の都合に依り、早泊りにいたしたのぢや。
八藏　いえ、お泊りはお早い方がお德用でございまする。奧道者の衆などが大勢風呂へ這入りますと、湯をだいなしにいたしますから、今のうちお這入りなされますと、誠に綺麗でございます、
ト此うち權八、八藏の顏を見て、
權八　主人は何處かで見たやうだが、出生は當地かな。
八藏　いえ、中國でございまする。
權八　中國はいづれなるぞ。
八藏　因州鳥取にございまする。
權八　え、して、町人か百姓かな。
八藏　武家奉公をいたしましてございまする。
權八　むゝ、武家奉公をいたせしとな。
八藏　お客さまも手前と同じ、因州鳥取でございまするな。

權八　どうしてそれを。
八藏　まだ御幼年の時分ゆゑ、お見忘れなされましたらうが、手前は本庄助太夫の若黨八内でござります。
權八　おゝ、さつぱり見忘れたが、八内であつたるか。（ト權八惡い所へ泊りしといふ思入）
八藏　拜へますれば十三年跡、同藩の若黨と口論の末疵を負はせ、主人の勘氣を蒙むつて國を追放いたされしゆゑ、是非なく旅路をさまよふうち、緣あつて宿引に當家へ奉公いたすうち、先主人の目鏡に叶ひ、養子となりて只今では、當家の主人にござりまする。
權八　それは仕合せなことであつた、定めて主人本庄方へ過去りし詫びをなし、出入をいたすことであらうな。
八藏　再三お詫びをいたしましたが、何分にもお聞き入れなく、今に出入りはいたしませぬ。
權八　本庄殿の二人の子息が、江戸へ參ると承はつたが、其方へ參りしか。
八藏　えゝ、何川あつての御出立か、一向に存じませせぬ。
權八　むう、その方は存ぜぬとか。
八藏　私方へあなた樣が、今宵お泊りなされしは。（ト氣を替へ、）不思議な御緣でござりまする、先づ雨

二日手前方に御逗留なされまして、見る所もなき土地なれども、少しは名所古跡もあれば、御案内いたしませう。

權八　それは千萬忝ない、我れも急がぬ旅なれば、詞に隨ひ兩三日、當家に逗留いたさうから、名所古跡の案内頼む。

八藏　畏りましてござりまする。

權八　定めて見世が忙しからう、爰構はずと參つたがよい。

八藏　左樣なればまた後程、御機嫌を伺ひまする。

ト八藏辭儀をなし、下手へ來り思入あつて、障子のうちへはひろ、跡見送り、

權八　世を忍ぶ身に、名高き旅籠屋にては人目あるゆゑ、駕籠舁どもの勸めにより計らず此家へ泊りしが、敵とねらふ本庄に以前勤めし八内が主人とは知らざりし、今裏問ひし詞のうち濁りのあるは兄弟を知らぬといへど正しく僞り、匿ひあるに相違なし、仕儀によつたら今宵を過さず、果し狀を附置いて、先づ血祭りに本庄兄弟、島田の河原へ連出して返り討に。（ト思入あつて、道具替りの知せ。）いたしてくれん。

ト矢立を出して、持紙へ認めること。時の鐘、合方にて此道具廻ろ。

（旅籠屋居間の場）――本舞臺平舞臺、上手一間上間平戸の戸棚、下帳場簞笥をはめ込み、此脇けんどんの襖、眞中一間小形の襖出這入り、下手一間茶壁、これへ帳面を掛け諸國狀差しと記せし狀差しを掛け上の方折廻し障子屋體、下の方火の用心の行燈、板羽目、廊下の心、總て旅籠屋居間の體、上手に本庄助七、羽織着流し一本差し、刀を傍に置き、下手に八藏お秋住ひ、合方にて道具納まる。

八藏　助七さまお悅びなされませ、尋ぬる敵權八が手前方へ計らずも今宵泊りましてござりまする。

助七　なに、權八が泊りしとか、それは思はぬ幸ひなり、して、一人か連れでもあるか。

八藏　たつた一人でござりまする。

助七　して、二階か、下に居るか。

お秋　庭を見おろす、二階の小座敷にござりまする。

八藏　最早籠中の鳥同然、御安心なされませ。

助七　宿も多きに其方の宅へ泊るは天の與へ、その小座敷へ案内いたせ、名乘り合して勝負をなさん。

トきつとなる。

八藏　お急ぎなさるは無理ならねど、先づ〳〵お待ちなされませ。

助七　待てとは何ゆゑ。

八藏　折惡しく御舍弟の助八さまが、先刻より敵を尋ねに御他出なされましたれば、お歸りあるまで暫しの御猶豫なされませ。

助七　假令助八留守にもせよ、當の敵の在所が知れ、何とて猶豫いたさんや。

八藏　ではござりませうが、只今あなた御一人で敵を首尾よく討ちたまはゞ、御本望ではござりませうが、助八さまがお後にて其御殘念は如何ばかり、御兄弟お二人にて敵をお討ちなされずば、亡き旦那さまへ御孝道が立ちますまい。

お秋　只今夫がお留め申すも、あなたのお爲を思ふゆゑ、日暮といつても僅かなれば、助八さまがお歸りを、お待ちなされて下さりませ。

八藏　未熟な業ではござりますが、以前お家に居つた時分棒を學びし事あれば、及ばずながら私も御恩を受けしお主の敵、お助太刀をいたします。

お秋　助八さまのお歸りまでお待ちなされて、

兩人　下さりませ。

助七　如何にもそちが言ふ通り、今それがしが討取らば、跡にて弟助八が嘸や本意なきことならん、

異見に附きて歸るまで、暫時猶豫いたすであらう。
八藏　すりや、お聞き屆け下さりまするか。
助七　如何にも承知いたせしぞ。
兩人　えゝ、有難うござりまする。（トばた〳〵になり、花道より友松走り出で）
友松　とゝさん、若旦那をお連れ申した。
八藏　おゝ、出來した、よくお連れ申した。
助七　して、助八は如何いたした。
友松　只今お出でなされました、私は一足先きへ駈け拔けて參りました。
ト花道より助八足早に出て來る。
助七　おゝ助八、待兼ねた〳〵。
助八　只今途中で友松より承はつて心も空、宙を飛んで歸りました。
助七　弟悅べ、計らず今日權八が、知らずに當家へ泊りしは、正に父上のお導き。
助八　して〳〵、何れに居りまするな。
お秋　奥二階の小座敷に、たゞ一人で居りまする。

助八　さう聞く上は、是より直ぐに。（トせき込む。）

八藏　途中をお急ぎなされたせゐか、さう息切れがいたしては、勝負の邪魔になりまする。

お秋　先づ水をお上りなされませ。（トお秋茶碗へ水を汲み出す。）

八藏　忰はそつと二階へ參り、客の樣子を見て參れ。

友松　はッ。（ト下手へはひる。）

八藏　急いては事を仕損じます。ゆつくりお支度をなされませ。（ト友松走り出來り）

友松　おとつさん、大變だ〳〵。

八藏　なに、大變とは。

友松　今おつしやつたお客人は、二階には見えませぬ。

助七　扨は敵は、

助八　逃げ失せしか。

八藏　すりや、二階より屋根傳ひに、裏手の塀を乘越えて逃げ失せたに相違なし。

助七　さてはわれ〳〵兄弟が、覗ふと知つて逃げ失せしか。

助八　殘念なことをいたしましたな。

お秋　今一度私が見廻つて參りませう。（ト　お秋下手へはひる。）
助七　今更いつて返らねど、最前弟助八が歸るを待たで、我のみで敵を討たば、此の殘念はあるまいに、はて、口惜しきことなるぞ。
八藏　これと申すも私が御兄弟御一緒に敵をお討たせ申したく、あなたをお止め申したのが今となつては身の誤り、申譯がござりませぬ。
助八　今日他出いたさずば、日頃の本望遂すべきに、我居らざるので猶豫なし、敵にやみ〳〵逃げられしは、未だ時運の來らぬか。
助七　然し遠くは、まだ行くまじ。
助八　跡追駈けて、
兩人　さうだ。（ト　兩人息込む、下手よりお秋手紙を持ち出で、）
お秋　今小座敷を搜しましたら、棚の上に斯樣な手紙がござりました。
助七　本庄助七助八殿、平井權八。（ト　開封して、）今宵戌の刻の鐘を合圖に、金谷宿の松原に於て敵討の勝負いたすべし、其刻限に出張下さるべく候。すりや、當宿の松原にて、
助八　五ツの鐘を合圖と定め、

八藏　双方かしこへ赴きて、
助七　名乘り合うて勝負をなすとか。
助八　然らば是れより支度なし、
助七　並木へ參つて、
兩人　待合さん。
八藏　及ばずながら御供なし、御助太刀を仕らん。（ト此時本釣鐘を打込む、八藏びつくりして、）やゝ、今打つ鐘は。
お秋　最早暮六ツ。
八藏　あゝ、此程よりの烏目の煩ひ、
お秋　それではお供が出來ますまい。
八藏　えゝ、今一時早ければ、お二人さまの助太刀して、御恩報じをしようもの、時刻の遲れで出來ざるか。
助七　志しは忝けないが、賴みに思ひし其方が、烏目とあれば是非もなし。
助八　決して供には及ばぬぞ。

八藏　目は見えずとも御供なし、聲を知るべに覺えの棒で、盲打ちに權八が妨げするでござりませう。
お秋　最前より餘程の間、
八藏　夜短かなれば少しも早う。
お秋　御用意よくば、
助七　出張なさん。
八藏　必ず共に御油斷あるな。
お秋　病といへどお供の出來ぬは、
八藏　はて、殘念なことだな。
助七　然らば八內。
八藏　お二人さま。
助七　おゝ。（ト花道へ行き、きつとなる。双方見合つて、木の頭）さうだ。
ト兩人花道へはひる。八藏は鳥目のこなし、早き合方にて、
ト浪の音にてつなぎ、道具出來次第に引返す。

ひやうし　幕

（大井川の場）＝本舞臺向う奥深に大井川の夜ろの遠見、上下蘆原諸所に蓮臺を積み重ねあり、灯入りの月をおろし浪の音にて幕明く。とばた〳〵になり、花道より助七、助八凜々しきなりにて出來り

助七　幸ひ今宵は清光に、月の冴えしは天の與へ。

助八　大河の水に光り映り、晝にも劣らぬ此ありさま。

助七　勝負をなすには、

助八　最屈竟。（ト兩人舞臺へ來て、）

助七　未だ權八は來らぬ樣子。

助八　これにて暫し待合さん。（ト兩人捨石へ腰を掛け、）

助七　幸ひ四邊に人もなし、誰に憚ることなければ篤とこれにてしめし合さん、父の讐ゆゑ一命賭けて討取る氣ではあるけれど、劍道勝れし平井權八。

助八　兄弟二人の瘦腕では、なか〳〵容易なことにあらず。

助七　賴みに思ひし八藏が、鳥目に助太刀ならぬ上は、

助八　たゞ兄弟二人のみ、信ずる神の加護を受け、

助七　首尾よく本望、
兩人　遂げたいものだ。
助七　何にもせよ權八が、未だ是れへ參らぬは、
助八　果し狀を附けながら卑怯未練に、
兩人　逃げ失せしか。（ト此時上手蘆原の蔭にて）
權八　いや、卑怯未練に逃げはいたさぬ、外に憚ることありて、最前より藪蔭に隱れ忍んで待ち受けたり。
助七　よくぞ是れにて待たれしぞ、いでや此の場で名乘り合ひ、尋常の、
兩人　勝負せよ。
權八　その勝負を決せんと、疾より是れへ參りしそれがし、如何にも敵と名乘り合ひ只今立合ひ申さんが、我が討たるゝかまた兩人を、返り討に我が討つか、勝負は時の運次第、その前方に我が申し置くことあり。
助七　なに、われ〳〵へ其方が、申し置くとは。
權八　犬の喧嘩を元として、助太夫殿を討つたるは、則ち主君の爲なるぞ。

助七　なに、御主君の、

兩人　お爲とは。（ト合方替つて、）

權八　奸智を以て立身せし國家老の篠原勘解由、かねてお家を橫領なさんと逆意を企つ荷擔人は御身の父の助太夫、屢々我に勸むれど昔が今に叛逆の榮えし例あらざれば、謀叛は思ひ止まれよと異見なせるを聞き入れず、止むを得ずして討つて捨てしは、逆意の根ざしを斷たんが爲め、證據はその折同盟の人數を記せし連判狀。（ト袱紗包みの一卷を出し、）これを以て江戸家老の杉原殿へ訴へんと國遠なせし此の權八、さはいへ御身達兄弟の父を討ちたる敵ゆゑ、我を覘ふは尤もなり、此場に於て勝負をなさん。（ト思入にていふ、兩人合點の行かぬこなし、）

助七　左程の巧みが我が父にありし事やら存ぜねど、われ〳〵兄弟兩人には父の敵平井權八。

助八　善にもせよ惡にもせよ、子として汝は見脫されぬ。

權八　江戸家老の杉原氏へ、此の連判を屆くるまでは、私ならぬ大事の體、不便ながらも立合へば兩人共に返り討ちだぞ。

助七　やあ、小癪なるその廣言、

助八　見事敵を討つて見せん。（ト三人前へ出で、）

權八　いざ、
兩人　いざ、
三人　いざ〳〵〳〵。

ト鳴物になり、よろしくあつて危ふくなる立廻りあつて、兄弟とも一刀づゝ切られる。

助八　やゝ、こりや兄上を、
助七　弟、汝も、
助八　無念や手をば負ひました。（ト兩人打つてかゝる。）
權八　不便ながらも。（トまた立廻つて兩人下にどうと居る、權八刀を振り上げるを、道具替りの知せ）返り討ちだぞ。（トきつとなる、此見得ドン〳〵にて、道具廻る。）

（召捕りの場）――本舞臺丸物の松並木・上下藪疊、うしろ大井川を遠く見たる遠見、道具納まると旅人、駕籠舁の仕出し出てはひる、これより本雨になり、權八濡れて出來り、

權八　本庄兄弟兩人を返り討にせし上は、最早敵と覘ふ者なし、是れより河原を遡り、間道傳ひに赴かん。（ト舞臺へ掛る、ドン〳〵所々にて竹法螺を吹く、）俄に法螺や太鼓を打つは、此の權八を召捕

らんと、正しく人數を集むる合圖、向うは大河に容易に渡ることならず。（ト上手へ行く、又向うにてドン／＼、跡へ歸り、）斯く前後を圍まれては、最早脱るゝ道はなし、捕虜となるか殘念な。

ト無念のこなし、上手より捕手八人出で、

役人　人殺しの大罪人、尋常に、

八人　繩に掛れ。

ト九人十手にて打つてかゝる、面白き立廻りあつて、トヾ鋏り袖搦みにて引伏せ權八に繩をかける、此時烏笛夜明けにて後の月を隱す、花道より以前の八藏目の見ゆる思入にて出來り、

八藏　主人の敵覺悟。（ト掛るを、）

役人　やあ大罪人に手向ひなさば、汝も共に繩打つぞ。

權八　助太夫はいふに及ばず、助七助八兩人を返り討にしたからは、主人の敵に相違ないが、討つことならぬ天下の囚人。

八藏　すりや、此儘手出しもならぬか、口惜しい。

權八　無念で、（トせゝら笑ふを、木の頭。）あらうがな。

ト笑ふ、八藏無念のこなし。捕手は權八を引立てる。日の出になり、馬士唄にてよろしく、

六幕目

（府中）本陣望月宅の場
同庭先詮議の場

〔役名〕――五百原正作、若い者太七。權八許嫁八重梅、織屋宗三郎、若黨佐五平、お袖の養母お爪、同心高根仁右衞門、手代傳八、同心倉澤丹藏、若い者太七。權八許嫁八重梅、藝子お袖等。〕

（府中本陣見世先の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面黑塗りの冠木門、此柱へ本陣望月治左衞門といふ掛札、左右板塀、內より見越しの松、ずつと上の方に瓦葺二階屋の小口を見せ、二階の白壁に御泊宿望月と記しあり、ずつと下の方町家の片遠見、總て駿府傳馬町の體、よき所に床几を出し、太七の手代、着流し前垂掛けにて腰をかけ、下手に○△の雲助二人、立懸り此見得馬士唄にて幕明く。

△　今日こつちの家へかつぎ込んだ、網乘物の囚人は中國邊の浪人で、平井權八といふ若衆ださうだ。

○　此間大井川で敵と覗ふ侍を、返討ちにした大した腕前、まだ其外に惡事があつて、召捕られたといふことだが、

△　どういふ次第か其話しを、

○ こなたに委しく聞きたいものだ。

太七 わしも今方お手先き衆から又聞きに聞きましたが、因州鳥取の浪人で同家中の重役を遺恨があつて討つて立ち退き、其の討たれた重役の二人の悴が敵と覘ひ、大井川で出逢つたのを、返討ちにしたとのこと、外に悪事のあるといふのは、此の春わしの元主人が鈴鹿山で切殺され、二百両といふ金を取られた事を江戸表へ訴へてある其賊が、平井權八に違ひないと先頃江戸へ差立ての、新五郎といふ盗賊が申立てゝあつたので、忽ち今度召捕られ、江戸へ引かれて行くのださうだ。

△ それぢやあ此春鈴鹿山で、絹商人を殺したのは、その權八の仕業だとか。

○ もしもそれと極つたら、こなたも元の主人の敵、江戸へ名乘つて出ざアなるまい。

太七 其引合がいやだから、今の主人に口留をして、知らない顔をして居るのも、敵と名乘つて出たところで又返討ちにならうも知れず、まだ囚人が白状したといふ譯でもなし、悪事が極れば御公儀の仕置をうけて死ぬ權八、それで敵は討つたも同然。

△ 引合などに附かうより、成程それはいゝあきらめ、

○ 何にしろこなたの家も、今夜一晩は心配だらう。

太七 御用宿ゆゑ相客はならぬといつて言ひ渡され、馴染の客を外の宿へ案内をして送るので、斯うし

て見張つて居ねばならぬ。
△　こつちも今夜は手先きの衆が、此の宿内を見廻るから、
○　慰み事は止めにして、酒でも飲んで早く寢よう。
太七　今も表へお手先き衆が宿を廻りに出掛けたから、其用心が肝腎だ。
△　そんなら若い衆、
○　また明日逢はう。（ト雲助二人下手へはひる。）
太七　斯ういふ晩には意地を惡く、馴染の客が來るものだ、本陣はこれがいやだ。
ト替つた合方になり、花道より二幕目の八重梅、佐五平の若黨附添ひ出來り花道にて、
佐五　もしお孃さま、向うに見えますあの門が、只今宿で承はつた本陣でござります。
八重　盜賊とやらの疑ひで權八さまには繩目に逢ひ、江戸へ差立てになるとの事、それも大方本庄の兄弟衆まで討たれしゆゑ、元の家來の八内が無き名を附けて訴へ出て、召捕らせたのであらうわいなう。
佐五　何にいたせ若旦那に、對面願ひを申し入れ、お目に掛つて御樣子を、承はるでござりませう。
八重　どうしてよいやら勝手は知れず、どうぞそなたがよいやうに、言ひ入れてくりやいなう。

佐五　私とてもかやうな事は、一向に心得ませぬが、權八さまの身寄りの者ぢやと、願つて見るでござりませう。（ト右の合方にて兩人舞臺へ來る、太七この體を見て、）

太七　もしあなた方は常宿へお泊りではござりませぬか、手前方は今晩は御用宿でござりますれば、お泊りならば私が差宿をしてあげませう。

佐五　いや、われ〳〵は此先きの、駿河屋といふ旅籠屋へ今方宿を取つた者、ちとお願ひの筋があつて此の本陣へ參りました。

太七　お見掛け申せばお女中連れで、願ひの筋でお出でとは、何の御用でござります。

佐五　何をお隱し申しませう、これにござるお孃さまは今日こちらの本陣へお泊りになつたと聞く、平井權八といふお方の身寄りのものでござりますれば、お役人さまへお願ひ申して、一目なりとも御對面がなされたいとの達てのお頼み、どうぞ御苦勞さまながら願つて上げて下さりませ。

太七　それは困つたお頼みだ、これが只の泊り客なら取次いでもあげませうが、其權八といふ人は大切な囚人ゆゑ、相客さへもならぬといつて、お役人から嚴しい言附け、そこへ身寄りの者だからと願つたところが無駄だらう。

佐五　そりやもう、聞けば盜賊の疑ひとやらで江戸表へ、差立ての囚人ゆゑ嚴しい掟もござりませう

が、そこをこなたのお計らひで一目なりともお孃さまに、逢はせて上げて下さるやう、お見掛け申してわしが願ひ、成るか成らぬかお役人さまへ、伺うて見ては下さらぬか。

八重　近頃御無理なお頼みにて、御迷惑ではござりませうが、どうぞ情と思召して、取次いで見て下さりませ。（ トこれにて太七思入あつて、）

太七　いやそれ程言はつしやるなら、無下に斷るわけにもなるまい、成るか成らぬかは知れぬけれど、取次いで見て進ぜませう。

佐五　そんなら聞いて下さるとか、やれ〳〵それは有難い。

八重　よろしうお願ひ申しまする。

太七　暫くこれに待つてござれ。（ト正面門の内へはひる。）

佐五　渡る世間に鬼はないと、今のお人が早速に取次をしてくれるやうでは、こりやお願ひが叶ひませうぞや。

八重　ほんに是れが案じるより、産むが安いといふのぢやわいなう。

佐五　お願ひ叶うて若旦那に、お逢ひなされたらお孃さま、次第をお聞きなされまして、どうか無實の疑ひが晴れますやうにして上げるが肝要でござりまする。

八重　幼い時から一つに居て、權八さまの御氣質はわたしがよう知つて居れど、短慮で人はあやめるとも盜賊などをなさるやうな、そんなお方ぢやないわいなう。

佐五　それは親仁も御幼少からお附き申して存じて居れど、譬にもいふ貧の盜み、永の間の御道中に路用に盡きて、もしひよつと。

八重　あこれ、そなたまでが疑うて、氣になる事は言はぬがよい。

佐五　まあ何にせい爰に居て、返事をお待ちなされませ。

八重　早う返事が。（ト床几へ腰をかけるを道具替りの知せ、）

（本陣御用座敷の場）＝本舞臺五間通し中足の二重、瓦庇本緣附左右白壁、正面上の方九尺の床の間、續いて三尺地袋違ひ棚、此の下手二間白地の張壁、ずつと下手九尺次の間の心にて折廻しの敷居、此内板敷、正面白壁緣端の眞中に一間程の沓脱の石、二重の上下建仁寺垣、その外石燈籠、庭木のあしらひよろしく、總て本陣御用座敷土藏造りの體、二重の左右に燭臺を照らし、上手に仁右衛門同心野半纏、ぶつさき羽織の侍にて、座蒲團の上に住ひ、前に茶煙草盆出してあり、下手次の間よき所に誂への網乘物を置き、此左右に下役二人野半纏紐附股引のこしらへにて控へ、平舞臺下手に以前

の太七控へ居る、此の見得合方にて道具留る。

仁右　して對面を願ふと申すは、如何やうな女なるぞ。

太七　年の頃は十七八、人柄のよいお屋敷風にて、何でもはる〴〵國許から出て參つたといふ樣子で、家來と見える親仁が一人附添つて居りまするが、娘の器量は當世風、それは〳〵美しいぼつちやり顏でござりまする。

仁右　如何なる次第で囚人に對面が願ひたいか、是れへ呼び入れ調べて見ん。早々庭へ案内いたせ。

太七　それは有難うござりまする。（ト下手へはひろ。仁右衞門思入あつて、）

仁右　それ、次の間を建切りおきやれ。

下役二人　はツ。（ト下手折廻しの障子を建切る、爰へ下手より太七先きに、以前の八重梅、佐五平出來り、）

太七　只今申し上げましたる囚人に身寄りのもの、召連れましてござりまする。

仁右　おゝ左樣か、用事があらば呼ぶ程に、そちは次に控へて居やれ。

太七　はツ。（ト下手へはひろ、仁右衞門前へ出て、八重梅をよく〳〵見て、）

仁右　何さまこれは美しい、いやさ何も恥かしいことはない、如何なる次第で囚人の盜賊權八に、對面を願ひ出でしか、有體にそれにて次第を申し上げよ。（ト是れより合方きつぱりとなり、）

八人　私ことは因州の鳥取家の藩中にて、平井庄左衛門と申すものゝ養女、八重梅と申しまするもの。

佐五　父拙者めは譜代の家來、佐五平と申す老耄親仁。

八重　お見知りおかれ、

兩人　下さりませ。

仁右　然らば兩人國許にて、今般の儀を聞き及び、如何なる次第で權八がお召捕りになりしか、事の次第を尋ねんと、はる〴〵と發足なしたのか。

八重　いえ此度のお召捕りを承はつて國許より參りし譯ではござりませぬ。夫權八國許にて積る遺恨がござりまして、本庄助太夫と申しまする同家中の御重役を、武士の意氣地で討果し立ち退きましてござりまするを、慕ひましての旅の空、江戸表にて巡り逢ひ一緒になりたう思ふうち、大井川にて權八が敵と覘ふ兩人を返討にいたせしを、遺恨に思ふ者あつて、身に覺えなき盜賊の汚名を負はせお召捕りに相成るやうに計らひしと、存じますゆゑ其由を、お訴へに出でましたのでござりまする。

佐五　主人權八は幼年より傍に附添ひ拙者めが守役いたしてござりまするが、短慮で人はあやめませうとも、なか〳〵以て盜賊を働くやうな悪心は起さぬ氣質と存じまするゆゑ、如何なる罪の次第な

るか當人へ對面を願うて樣子を承はらば、虛實の程も知れませうかと、押して願ひし主從二人何卒主人權八にお逢はせなされて下さるやう、偏にお願ひ申し上げまする。

仁右　扨は養女と申すゆゑ、妹なるかと存ぜしが、あの權八の妻であつたか。

八重　お恥かしうござりますが幼き折より親共が、許嫁をいたしました、二世の女夫にござりまする。

ト是れにて仁右衞門忌々しいといふこなしあつて、

仁右　この世の別れにたゞ一目、上の慈悲にて逢はせてくれと願ひ出しならまだしもながら、癡情に迷ひ權八を無實の科であらうなどゝとは、上を侮る憎き囈言、逢はせる事は罷りならぬ。

佐五　いえそれでもあながちにお上を疑ひ、無實だと申す譯ではござりませぬ、御當人に逢ひまして問ひ糺したく存じまして。

仁右　やあ默らう、こやつ、上に於てはきつとした證人あつて召捕る盜賊、緣者の證據身贔屓にて申し立つるを取り上げんや、汝等とても江戸表へ引立て連れ行く奴なれど、目こぼしなして許してくれん、きり〳〵其處を立ち去り居らう。

八重　すりやわが夫に只一目、逢ひますことは叶ひませぬか。

佐五　只今申したわれ〳〵の詞が御意に障りましたら、お詫びをいたすでござりますれば、どうぞお慈

八重　悲を以ちまして。

八重　權八どのに只一目、

佐五　お逢はせなされて、

兩人　下さりませ。

仁右　やあ二言目には夫だのわが夫などゝ、舌ッたるい其の言草から氣に喰はぬ、くどく申すと許さぬぞ。

八重　そんならどうでも權八どのに、

佐五　御對面は叶ひませぬか。

八重　こりや、どうしたらよからうぞいなあ。（ト本意なきこなし、仁右衞門下手へ向ひ、）

仁右　若い者いづれに居る、早く此奴を追ひ出せ。（ト呼ぶ、下手より以前の太七出で、）

太七　さあ／＼川が濟みましたら、長居は恐れ立たつしやい。

八重　いえ、まだ川は濟みませぬ。

佐五　どうぞ對面いたすやう、こなたも願つて下さりませ。

太七　それでは爰へお召しになつても、逢はせることは叶ひませぬか。

仁右　元より重き囚人に逢はせる事は相成らぬが、詮議の筋もあらうかと、是れへ呼び入れ調べたのぢや、きり〳〵外へ立ち去り居らう。

八重　それではどうでも此儘に、

佐五　立ち去りませねばなりませぬか。

仁右　やあ早く表へ追ひ出さぬか。

太七　さあ〳〵、早くござれ〳〵。（ト無理にせり立て、太七二人を連れて下手へはひる。）

仁右　强惡無道の權八めを、癡情に迷ひ慕ひ居るとは、はて苦々しい事ではある。

ト此の時時の太鼓になり、花道より丹藏の同心、野半纏紐附き股引、上帶三尺にて十手を差し先きに立ち、跡より三幕目の宗三郎、お袖、腰繩にかゝり手先き二人引ッ立て出て、直ぐ舞臺へ來り、

手先二人　えゝ下に居らう。（トきつといふ、宗三郎お袖下手下に居る。）

丹藏　はッ、詮議の手蔓になる奴を、計らず召捕り參つてござる。

仁右　詮議の手蔓と申すのは、そりや耳よりなことなるぞ、してそやつ等は何者ぢやな。

丹藏　一人は京都三條にて、織物渡世をせしといふ宗三郎と申す奴、又一人は祇園町にて藝子をいたして居つたと申す袖とやらいふ商賣上り、正しく盜賊權八の手先きを働く同類と、目串が附いてご

ざるゆゑ、直ぐ繩打つて引ッ立てました。

仁右　して父如何なる所より、同類なる事相知れしな。

丹藏　只今宿の松原にて人足どもが酒手をねだりかけ、駈落者に相違ないと言ひ掛け居るは何事と、立入りまして調べし所、此奴の所持なす金子といふは、盗賊權八が所持なせし金子と同じ極印金、同類なる事知れしゆゑ、篤と調べをなさんと存じ、直ぐ繩打つて召捕りました。

仁右　して其の金子は、何れにござる。

丹藏　取上げまして斯くの通り。（ト紙に包みし小判を十枚程出して、仁右衛門に渡すをよく〳〵改め、）

仁右　誠にこれぞ權八が所持して居りし封金の小判と同じ極印金、扨はそやつも同類なりしか。

丹藏　さあ道中で貰つたなどゝ、胡亂なことを申しても、お取上げにはならねえから、有體に言つてしまへ。（ト是れにて宗三郎顏を上げて、）

宗三　お役人さまへ申し上げまする、只今途中の松原にて有體に申しましたが、是れなる女子を連れまして東へ下る旅中にて、路用の金子を遣ひ果し、死ぬより外に仕樣はないと桑名を出ました間の宿にて、身を投げようとする所へ通りかゝりしお侍が、二人を抱き留め樣子を尋ね、それは如何にも氣の毒ゆゑ金で命が助かるなら、これを路用に遣はす間、死ぬのは止めにするがよいと、

三十兩といふ金を二人へ惠んでくれました。それが此度お召捕りの權八とやらいふものゝ、所持して居りし極印の同じ金子と申す事を、承はるも始めてにて、驚き入つてござりまする。

仁右　いや其言譯相立たぬ、三十兩と申す金子を通り掛りの侍より貰ひしなどゝは、不審の第一、人を害して盜賊を働く奴が見ず知らずの女を連れし靑二才に惠みをいたす謂れはない、察する所權八めの手先きを働き道中にて、盜みをなしてその金を分け取りせしに相違ない。丹藏そやつは生つちらけて、蟲も殺さぬ樣子に見せなか〳〵性根の圖太い奴、引ッぱたいて吟味をさつしやい。

丹藏　さあ野郎有體に申し上げぬか、死太く陳じて言はぬ時は痛え思ひをしにやあならねえ。さあ言はねえか是れでもか、是れでも白狀いたさぬか。（ト十手にて打据ゑる事よろしく、お袖見兼ねて、）

お袖　あゝもし、どうぞお疑ひをお晴らしなされて下さりませ。全く其折お侍に貰ひましたに違ひはない、三十兩といふお金を惠んでお貰ひ申しましたは、命の御恩ある方ゆゑ、せめての事にお名前を聞いて置きたく尋ねましたが、仔細あつて世を忍べば、名乘る時節の來ぬうちは、名は名乘れぬとおつしやりました。

仁右　やあ、そやつまでつべこべと取り留りのなき申し立て、引ッぱたいて吟味さつしやい。

丹藏　さあ女、われも白狀してしまへ、言はにやあ斯うして言はせて見せる。

ト双方を十手にて打据ゑる。此時下手の障子の内より下役の◎一人出來り、

◎　はツ、その御詮議は御無用と、駕籠の内より囚人の申し立てにござりまする。

仁右　何を彼れめが申し立てしぞ。

◎　あれなる二人へ旅中にて三十兩の金を惠み、命を助け遣はしたに相違はないとの申し立て、其儀に於ては此程より陳じて居つた賊の罪、鈴鹿山にて絹賣を殺害なして二百兩、奪ひ取りしは權八と白狀いたしてござりまする。

宗三　そんならあの夜のお侍は、噂に聞きし盜賊の權八どのであつたるか。

お袖　あゝいふお慈悲のある方が、人を殺して盜賊をなされませうとは知らなんだ。

丹藏　味な事より強賊めが、おのれと白狀いたせしは、よい手番でござりました。

ト　これにて仁右衞門思入あつて、

仁右　いや權八めの強盜は元より知れし事なれど、此奴等二人を助けんと白狀なしても其手は喰はぬ。鈴鹿に於て絹賣りを殺せし節におのれらも、手傳ひせしに相違ない。

宗三　それでは金子の出所を、白狀する者あつても、

お袖　このお疑ひは晴れませぬか。

仁右　おゝ今日まで權八めが斯かる惡事を働きながら白狀なさぬ所を見れば、おのれらとても其通り、惡事を包むに相違ない、手ぬるくせずと吟味をしやれ。

丹藏　言はるゝ通りこやつらも、一筋繩では行かぬ奴、しめ上げて白狀させてくれん。

宗三　えゝさりとてはお情ない、惡事の覺えはござりませぬ。

丹藏　やあ、覺えないとは死太い奴めが。

ト又打据ゑる、此の時下手より三幕目の正作、やはり武術修行のなりにて出來り、

正作　あいや其の詮議無益なり、暫くお待ち下さりませう。

ト聲をかけ出て下手へ控へる、宗三郎お袖この體を見て、

宗三　あなたは此程岡崎にて、

お袖　お目にかゝりしお武家さま。

正作　合宿をしたその節に、金子の話しも聞いて居れば、手前が潔白立てゝ遣はす。

仁右　證據あつて此方にて調べる詮議を無益とは合點の行かぬその詞。して、お手前は何人なるぞ。

正作　拙者は武術修行の爲西國筋より江戸表へ、罷り下る浮浪人五百原正作と申すもの、これなる二人を同類とお疑ひにて御詮議あるは、無益と申す其次第、拙者つぶさに申し述べん。

丹藏　それは如何なる譯あつてか。

仁右　事の次第を、

兩人　承はらう。（ト是れより替つた合方になり、）

正作　今般計らず大井川にてお捕へになる平井權八、江戸表へお差立てと旅中に於て承はり、跡を慕ひて當宿まで只今立越え權八の、罪科の次第を糺さんと此の詮議の一部始終物陰にて窺ひしが、全くそれなる兩人が同類にてなき事は、それがし先頃鈴鹿山にて其夜の次第を見聞なし、よツく存じて罷りある、絹賣彌市と申すもの賊に出逢ひて難儀の折柄、權八どのが通りかゝり、其賊どもを追ひ散らし、其身も路用に乏しきゆゑ無心を言ひしが元となり、命の恩ある平井氏へ絹賣彌市が悪口せし恩知らずなる振舞に、血氣の餘り怺へ兼ね只一刀に切り捨てしは天晴なる手の内と、それがし小蔭を立ち出て、名乘れば深き由縁の者、後日に又の再會を約して別れし事あれば、それなる二人が同類にあらざる事はよく知つたり、まだ此上に御疑念あらば、囚人權八これへ呼び出し、篤とお糺し下されい。

仁右　いや囚人權八是れへ呼び出し、詮議をいたすまでもない、眼前金子を所持なす兩人、拷問いたさにや相成らぬ。

正作　いやそれにては兩人の未だ疑ひ晴れざる御樣子、繩目を解いて此儘にお許しあるか但し又、飽くまで御疑念晴れぬとあれば、如何なる證據で兩人を御詮議あるか承はりたし。

丹藏　おゝ證據は強盜權八が所持なす金子と同一なる、極印金を遣ひしがのがれぬ所の賊の同類。

正作　いやそれも眼前權八より、貰ひしことが相分かれば、御詮議あるには及ばぬこと。

仁右　それぞ手下を助けん爲、のがれぬ罪の權八が虛言を吐きしに相違ない。

正作　いや虛言とは其意を得ず、拷問うけても白狀をいたさぬ程の豪氣なれど、惠みし金子が讐となり無實の疑ひ氣の毒ゆゑ、おのれと白狀いたせしを、御賢察なき御詮議では邪正の捌き覺束なし。

丹藏　やあ浪人者の分際で、重き役目のわれ〳〵へ、無禮の雜言奇怪至極。

仁右　義を結びしとあるからは、おのれものがれぬ同類ならん、取調べねば相成らぬ。

トきつといふ、これにて正作につこり笑ひ、

正作　浪人なれども義勇の武士、御法を守り亂暴はいたさぬ誓ひにござれども、權威を笠に非道なる調べを召さるとござるなら、此方とても義に依つて、これなる二人が無實の難救はん爲に出しからは、隨分相手になり申さん。權八とても其如く天下の法に網の目をのがるゝ事叶はねば、蟄して窮命いたし居れど、不法な調べと知るときは繩引ツ切りてほだを破り、暴れ出すまいとも申さ

れぬ、左ある時にはお役目の、越度となつて痛い腹。
仁右　やあ。(トぎつくりこなし、)
正作　そこを思はゞ此儘に、二人をお助け下さるか。
仁右　さあ、それは。
正作　但し飽くまで御疑念あるか。
仁右　さあ、
正作　さあ、
兩人　さあ〳〵〳〵。
正作　篤と御思案なされてよからう。(トきつといふ、これにて仁右衞門丹藏薄氣味惡きこなしにて、)
仁右　いかにも囚人權八が、白狀なせし上からは、二人の者に構ひない。
宗三　すりや此儘に私共を、お許しなされて下さりますとか。
丹藏　繩を許して遣らうから、お禮を申して早く立て。(ト宗三郎お袖の繩を解く。)
宗三　これと申すもお侍さま、あなたのお蔭と申すもの。
お袖　お禮は詞に盡されませぬ。

宗三　ちえゝ有難う、
兩人　存じまする。
丹藏　えゝそつちへ禮には及ばぬわえ。
正作　障りのなきうち二人には、早く表へ立たつしやれ。
宗三　これにてお別れ、
兩人　申しまする。（ト唄になり、兩人體の痛むこなしにて下手へはひる、正作思入あつて）
正作　盜賊などは働かねど、鈴鹿山にて試合をなし手練に感じ再會の、契約なせしそれがしゆゑ、同類なりとの御疑念あらば、江戸表まで各々と同道なして參らうや。
仁右　あいや、それには及ばぬ事ぢや。
正作　然らば手前に御疑念ないか。
丹藏　おゝ、疑念はないから立たつしやい。
正作　此世の別れ權八に一目逢ひたきものなれど、御法の表許すまじ、是れと申すも思慮なき掛りが。
（ト兩人へこなしあつて）はて、情を知らぬ。（ト敵役兩人へ思入）
仁右　やゝ。

正作　やがて江戸にて面會なさん。（トよろしく思入あつて下手へはひる。跡に仁右衛門丹藏思入あつて、）

丹藏　體は少しく小兵なれど、小手の利いたるあの浪人、江戸へ下るとあるからは、道中油斷は相成らぬ。

仁右　かやうな奴は旅中にて、狼藉なさんも計られず。丹藏近う。（ト丹藏へ囁く。）

丹藏　すりや明日より、道を替へ。

仁右　あこれ。（ト押へるを道具替りの知せ、）竊に〱。

ト皆々下手の障子のうちへ憚るこなし、合方にて此の道具廻る。

（元の入口の場）――本舞臺元の入口の道具、爰に以前の宗三郎お袖床几に腰を掛け居る、太七の手代立ち掛り、合方にて道具留る。

太七　遠慮はいらぬ二人の衆、ゆつくり休んで行かつしやれ。

宗三　段々との御心添へ、有難うござりまする。

お袖　お陰さまで體の痛みも、怺へようなりました。

太七　それではやつぱりあの囚人が、主人を殺した奴であつたか。

宗三　なに、あなたの御主人とおつしやるは、如何なるお人でござりまする。

太七　わしは上州前橋の絹賣彌市といふ人に元は使はれた手代であつたが、先頃主人が鈴鹿山で人手に掛つてあへない最期、それからわしも暇を取り、產れ故鄕の此地へ歸り旅籠屋奉公して居ますが、いはゞ故主の敵の囚人、侍ならば願つて出て敵討でもする所を口を噤んで默つて居るのも、お上で敵は取つてくれゝば、無事を計つて居ますのだ。

お袖　あんな優しいお侍が、何でそんな人殺しをなされしことか怖しや。

宗三　人は見掛けに寄らぬとは、此事でがなござりませう。

太七　わしの故主も不斷からあたじけない人ゆゑに、金を惜しんで命をば失うた事と見えまする。どれ又奧で呼ぶであらう、そんなら二人の衆大事にさつしやい。

兩人　有難うござりまする。（ト太七門の内へはひる。宗三郎跡を見送り思入あつて、）

宗三　既のこと盜賊の同類ならんと疑ひ受け、繩目に逢うて引かるゝところ、思ひ掛けなく岡崎にてお目にかゝりしお武家さまが詮議の場所へお出でになり、二人をおかばひ下されしゆゑ無難にのがれし有難さ、心緩めばさい前の打たれた跡が痛み出し、此家の主人の情にて手當をしては下されたれど、こりやゆつくりと醫者にかゝり、養生せねば治るまい。

お袖　わたしもさつきあのやうに酷く打たれた身内の痛み、こりや打身にでもなりはせぬかと案じられてなりませぬ。
宗三　それゆゑ早く宿へ行き療治が受け度く思へども、富田で貰ひし其金の路用も殘らず取り上げられ何をするにも手振編笠。
お袖　一つよければ又一つと、宿へ着くにも路用はなし、仕様もやうもないからは、こりやもういつそあの時に、死ぬる命を生き延はり今日までながらへ居たと思ひ、
宗三　そなたと二人淵川へ、身を投げ死ぬより外はない。
お袖　二人が中のいとし子も、非業に死んで力なく、うきを駿河の驛路も、
宗三　命の綱と頼みたる路用の金の疑ひを、うけて苛責の縛り繩。
お袖　それも誰ゆゑわたしといふ、よしないものがあるゆゑに、知らぬ旅路の御艱難、
宗三　そりやそなたとて同じこと、わしゆゑ義理ある母親を捨て斯うした旅の空。
お袖　迷ふといふは眞實を、明かさぬ前の逃げ詞。
宗三　どうした緣かそなたとは、
お袖　死んでも離れがたなさに、

宗三　番ひの鴛鴦の思ひ羽も、

お袖　翼かはして川水へ、

宗三　沈んで浮名を、

お袖　流さうわいなあ。

ト兩人上の方へ行きにかゝる、此時下手より傳八の手代とお爪序幕の繼母、いづれも旅なりにて出て此の樣子を下手に窺ひ居て、

傳八　あもし旦那さま、それにおいでゞござりまするか。

宗三　や、そなたは傳八。

お袖　お前はかゝさん。（ト逃げにかゝるを、お爪傳八あわてゝ留めて）

お爪　どつこい大事な金箱を、めつたに逃がしてなるものか、西川さんの御親類が、相談の上そなたをば內へ入れると極つたゆゑ、もう逃げ隱れをするに及ばぬ。

傳八　又旦那さまはお家さんの御悋氣深いにお恐れなされ、あの御身代のお店を捨てゝ、逃げるお氣におなりなすつたも、御親類方の御異見でお家さんにもお氣が折れ、お爲を思つた悋氣から取り逆上たをお悔みにて、旦那さまさへ元々へお歸りならばお袖どのを、內へ入れてもよろしいとお話

し調ひ二人して、お跡を尋ねて參つたからは。

お爪　もう逃げ隠れをなされまして、御苦勞なさるには及ばぬこと、都へお歸りなされまして、どうぞ娘をお妾にお持ちなすつて下さいまし。

宗三　扨は死靈の祟りかと、思ひしことも氣の迷ひ、お絹も無事で居つたるか。

お袖　とはいへ此末お家さんに、お憎しみをば受けましては。

傳八　はて、いざこざの出來ぬやう、御親類にて今度の取り極め。

お爪　どうぞ旦那もお家さんを、大事にして下さりませ。

宗三　此お袖さへ内へ入れゝば、あれにも安心させてやります。

お袖　かゝさんお前も是れからは、無理を言はずに下さりませ。

傳八　はて、その無理も言はせぬやう、泊り／＼の旅籠屋で、

お爪　異見をされて成程と、後生願ひになりました。

宗三　思へばこちらも色情ゆゑ、

お袖　艱難したは皆戒め、

お爪　わたしも慾で金箱を、

傳八　既に失ふところをば、
宗三　拾ふ命に、
お袖　あやふい身の上、
お爪　それも戀路と、
傳八　慾の間違ひ。
宗三　實に色慾は、（ト皆々顔見合せるを木の頭、）愼しむべきぢやな。（ト此の模様よろしく、）

ひやうし　幕

七幕目大詰

箱根塔之澤溫泉の場

〔役名――五百原正作、久下玄蕃、若黨佐五平、溫泉の悴喜之助、久下の門弟、若い者大勢。權八許嫁八重梅、溫泉の女房お清、其他。〕

（箱根塔の澤湯治場の場）――本舞臺四間通し中足の二重、藁葺の庇、上下折廻しの本緣、二重の上手後へ下げて、同じく緣續きの屋體、前面障子建切りあり、同じく下の方手摺附き渡殿の橋、此後一面箱根の山中を見たる切出しの遠見、二重の眞中には沓脱の石、正面上の方一間の床の間、續いて一間

地袋違ひ棚、下の方二間墨繪の山水の襖、此前へ浴衣をかける衣桁などを置き、床の間好みの掛物、時候の活花碁盤などあること、總て箱根塔の澤湯治場の體、爰に四人何れも劍學者の門弟、浴衣なりにて座蒲團へ住ひ、前に酒肴の道具を取り散し、一、二の下女酌をして酒を飲んで居る、此の模様騷唄にて幕明く。

○ これ〳〵女共、酒や肴を澤山に、どん〳〵持つて來居らぬか。

△ 如何に當所は小田原から、持つて上ると申しても、餘り埒が明かぬ事だ。

□ その上ならず女共が、さつぱり是れへ參り居らず。

◎ われ〳〵共を馬鹿にいたし、輕卒にいたし居るのか。

一 いえ、左樣ではござりませぬが、お客さまが立て込みまして、

二 ついお粗末をいたしますれば、どうぞ御勘辨下さいまし。

○ いや、近年は湯治場流行で、未だ薄暑の節なるに、

△ 今から客が立て込むとは、大暑の節は爪も立つまい。

一 只今お燗のあついのを、直き持つて參りますれば、

二 暫くお待ち下さりませ。

□　又手間取つては相成らぬぞ。
一二　畏りました。
◎　えゝ畏らずと、立つて行け。
一二　ても、いけすかない。
◎　何ぢやと。
一　いえ、直き行つて、
兩人　參りまする。（ト兩人奥へはひる。）
○　如何に祝儀を遣らぬと申して、あのやうな無人相な女どもゝないものだ。
△　いやと頭を竪にふる、相模女のくせとして、ぴんしやんと跳ね廻り。
□　われ〳〵のやうな好男子を、嫌つて頼みに應ぜぬとは、
◎　女冥利を知らぬ奴等、何で祝儀が遣られるものか。
ト爰へ下手の橋を渡り、玄蕃好みの鬘、浴衣なりにて手拭を持ち出來り、
玄蕃　何を愚癡を言はれるのぢや。
○　これは先生。

四人　さゝ、こちらへ〳〵。（ト玄番手拭を後の衣桁へ掛けよろしく住ひ、）

玄番　今日にて二周りほど長逗留をいたしたゆゑ、各には湯治場も最早飽きたと言はるゝか。

○　いえなか〳〵左樣な次第でなし、實は此家の女共が、餘り輕卒にいたし居るゆゑ。

△　女冥利を知らぬ奴と、愚癡を申して居つたるところ、

□　大先生のお耳に入り、

◎　何共恐れ入りまする。

玄番　いや彼等如きの扱ひが、惡いと申してお悔みあるな、手前は又隣り座敷の娘に執心いたし居れど、戀の掛橋がござらぬので、實は心を焦して居るぢやて。

○　扨は疾より先生にも、あの美婦に御執心とか。

△　誰の心も違はぬものにて、われ〳〵一統彼れには執心。

□　丁度只今あの美婦は、風呂へ參つて居る樣子。

◎　それにてお湯がいつもより、お長い仔細が分りました。

玄番　どうかいたして彼の美婦を、手に入れたいと思ひ居るが、よい手立はござるまいか。

○　いやかやうな事は尋常に掛合ひましては埒明かず、醉に紛らし手短に當つて御覽なされませ。

△ 手前が愚案か存ぜねど、何れ風呂から座敷へ歸る通路は是れなる緣側傳ひ、何か粗相を取りこしらへ、われ〳〵四人が立腹いたすを、先生がお扱ひにて座敷へ引き入れ酌をさせ、それから段々お手に入れるお手續きとは如何でござらう。

□ 何さまそれは妙計々々、最早これを通らうから、廊下に於て待ち受け召され。

○ 四人一度に廊下へ出て、騷いで居るのがよくござらう。

△ 幸ひ奥の囃子を借り、

□ 思ひ〳〵の當振りにて、

◎ 陽氣に騷いで居るといたさう。

ト是れより下座の騷ぎ唄になり、門弟四人緣側へ出て踊つて居る、よき程に下手の橋を渡り、前幕の八重梅、湯上り浴衣扱帶なりにて手拭を持ち出來り、此體を見て跡へ歸らうとするを、○下手へ行き態と立ち塞がつて踊る、八重梅これに困り上手へ來る、△同じく立ち塞がつて踊り、トヾ○足を踏まれしこなしにて、

○ あいたゝゝゝ、足を踏んだはどいつだ〳〵。

ト下に居て足を押へる、八重梅この體を見てびつくりして、

八重　どうぞお許し下さりませ。（ト言ひ捨て上手の廻り椽を通り、障子の内へはひる。）
○　それへ連れてござれ。
三人　それが肝要だ。（ト上手へ追つかけはひる。○態と上手へ聞えるやうに、）
○　あゝ痛い〳〵、足の小指の骨が折れたぞ、痛い〳〵。
ト苦しみ居る、ばた〳〵になり、上手より門弟三人八重梅を引ツ立て出る、跡より前幕の佐五平の若黨着流しにて出來り、
佐五　もし〳〵、何で手前主人を手籠めにお連れなされまする、まあ〳〵待つて下さりませ。
△　やあ、おのれが知つた事ではない。
□　默つてそつちへ引ツ込んで居れ。
◎　さあ娘、何の遺恨でわれ〳〵の、
△　遊興の邪魔をなし、
□　あれなる御仁の足を踏みしか、
◎　遺恨の次第を申してしまへ。
八重　遺恨などはござりませねど、思はぬ粗相でおみ足を、つい踏みましてござりますれば、どうぞお

許し下さりませ。
○ いや粗相とは申させぬ、身共の方で除けるのを態とそちらで足を踏み、小指の骨を潰し居つた。
佐五 何でまたお孃さまには、左樣な粗相をなされました。
八重 さあ此の廊下にて皆さんが踊りを踊つておいでゆゑ、除けて通る其はずみに、ついおみ足を踏んだのぢやわいなう。
佐五 それなれば途中三度の行違ひも同じこと、粗相はお互ひでござりますれば、どうぞ御勘辨下さりませ。
○ やあ粗相は互ひであらうなどゝは、言ひがけいたす老耄親仁。
△ 左樣な事を申されては、猶々勘辨相成らぬ。
□ 遺恨があつて遊興の、
◎ 妨げせしに相違ないわえ。（ト此時玄蕃前へ出で）
玄蕃 いや各々先々鎭まらつしやい、其御立腹はさることながら、相手は婦女子と老人のこと、又昨日より隣り座敷へ止宿いたして居るからは、逗留中は隣りづから懇意にせねばならぬ、意趣も遺恨もさつぱりと、手前に任せて勘辨あれ。

○　大先生の仰せなくば勘辨ならぬ所なれど、

△　折角のお扱ひゆゑ、

□　こりや先生にお任せ申し、

◎　差控へるで、

四人　ござりませう。

女番　先はそれにて手前も滿足、一つの安堵と申すものぢや。

佐五　それで親仁も大安心、さあ〳〵ちやつとお孃さま、あなたへお詫びをおつしやりませ。

八重　どうなる事かと存じましたに、あなたさまのお詞にて何れもさまが御勘辨下さりますとは、此やうな有難い事はござりませぬ。

女番　さう悅んで下さると手前に於ても祝着いたすが、所謂これが雨降つて地固まるとやら申すものにて、此行き違ひが御緣にて只今よりは別段の入懇を結ぶ隣り同士、門弟共も此後に意趣も遺恨もござらぬやう、今宵はこれなる座敷にて酒汲み交し其許と、さへつ押へついたしたいが、そこは端近、先々これへどうか通つて下されい。

八重　有難うはござりますれど、湯治をいたして居ります程で、少々不快でござりまするし、御酒は一

向に不調法にてそのお相手も出來ませねば、これにて御免下さりませ。

玄番　いや其の不快も鬱散をなされば却つて身の保養、嫌ひな酒も少々づゝ上がれば壽命の藥なれば、是非に一献差上げたい、さあ〳〵こつちへござれ〳〵。

ト無理に八重梅の手を取り、自分の側へ引寄せるゆゑ、佐五平これを留めて、

佐五　あゝもし、それでは手前主人が却つて迷惑いたします、どうか此儘お許し下され、座敷へお返し下さりませ。（ト氣を揉む、四人の門弟立ちかゝり、これを押し隔て、）

○　えゝ薄汚ない老耄親仁、

△　手前はそつちへ控へて居ろ。

八重　どうぞ此儘私を。（ト逃げにかゝるを、）

玄番　はてまあ、爰に居て下されい。（ト無理に引き寄せる。）

佐五　こりや、どうあつてもお孃さまを、座敷へお歸し下されぬか。

□　えゝ、酒の席へ、

◎　寄りやあがるな。（ト緣端へ突きやる。これにて佐五平ばつたり轉ぶ。）

八重　ても、荒々しい。（ト立たうとする、）

文搖　いや、そもじに手荒い、（ト引き寄せるを道具替りの知せ）事はいたさぬ。

ト此の模様さわぎ唄にて道具廻る。

（離れ座敷の場）――本舞臺眞中三間中足の二重、藁庇本緣附、正面上手三尺の床の間、續いて地袋違ひ棚、下の方腰張りの壁、内三尺茶立口の出這入り、二重の上下奥深に山組を見せし湯治場の庭、淸水の流れ筧より瀧など落ちて居る誂へ、ずつと下の方畫心に板塀此内三尺の切戸口、その外樹木敷石の形容よろしく、總て湯治場離れ座敷の體、二重に正作着流しにて座蒲團の上へ住ひ碁盤へ凭れ居る平舞臺に喜之助羽織着流しにて立ちかゝり、下手に三人の下女立ちかゝり、騷ぎ唄にて道具廻る。

喜之　この忙しいのにお前達は、爰のお座敷へばかり寄合を附けて、遊んで居ては困るではないか。

お幸　いえ私は今日はこちらのお座敷當番でござりますから、御用を伺ひに參りましたら、お橘どんお松どんが、跡から來たのでござりまする。

お橘　いえお幸どんがこちらさまの、お座敷へばかり來て居りますゆゑ。

お松　外のお座敷へ廻るやうに、搜して居つたのでござります。

お幸　あれ、よい加減なことを言はしやんせ、たつた今こちらのお座敷へ、御用を伺ひに來たのぢやわ

いなあ。

喜之　はて何であらうとこちらの座敷は、わしが御用を伺ひに來たらば、外の座敷へ行くがいゝ。

お橘　それといふのもお幸どんが、

お松　旦那さまに岡惚れゆゑ、

お幸　あれ憎らしい、そんな事を。

喜之　はて騒々しい、行きやれといふに。

お幸　ほんに岡焼には困るわいなあ、

正作　いや若い女中と申すものは、いつも賑はしいものではある。

喜之　旦那さまお聞き下さりませ、女共があなたの御用が足したいと申しまして、外の座敷は投げ遣りに、こちらへばかり參つて居つて、忌々しい奴でござりまする。

正作　碁敵の御身の外は女子に用なき此の正作、これへ參つて女中達が用が足したいと申すのは、お身が此の座敷に居つたからぢや。

喜之　いえ、左樣ではござりませぬ。旦那さまに女子共が岡惚れをして居るとやら、あつかましいものでござります。

正作 いやそれは嘘にも悦ばしい、性來無骨な身共ゆゑ、女子などには嫌はれ勝ち、朝夕川を賴むにも嘸迷惑であらうと存じ控へ目にして居る程なれど、左樣な粹興な女子があれば、是れから川が賴みよいといふものぢや。

喜之 いえあなた樣のやうなお武家さまなら、女子共が惚れまするも、こりや尤もでござりまするが、表座敷に居りまする劍術遣ひの五人連は、宮の下でも湯元でも疫病神だと恐れをなし、嫌つて居ると申すことゆゑ、あれでは一生女子共に好かれる筈はござりませぬ。

正作 して、あの五人は何れから、湯治に參つて居るものぢや。

喜之 あれは三島明神前に道場を出して居りまする久下玄番といふ劍術遣ひ、それに附添ふ門弟も自分天狗の田舍武士、ろくな奴等ぢやござりませぬ。

正作 然るべき者とあらば近附きになり、手合せをも望まんものと思ひ居つたが、左樣な名もなき亂暴者では、こりや手合せも止めにいたさう。

喜之 あゝいふ奴は負腹で、亂暴仕ようも知れませねば、それがよろしうござりまする。

ト爰へ下手の切戸口より、お淸の女房先きに、以前の佐五平出來り、

お淸 これ喜之助、わしはこれに用もあれば、そなたは帳場を氣を附けてたも。

喜之　はい〳〵畏りました、左樣なら旦那さま、又晩ほどに上ります。

正作　圍碁の勝負に來て下され。

喜之　是非今晩は旦那さまの、お相手に參りまする。（ト喜之助下手切戸口へはひる。）

お淸　さあ〳〵あなたもこちらへ來て、ともにお願ひなされませ。

佐五　それでは御免下さりませ。（ト前へ出る、正作此體を見て、）

正作　見れば當家の御內儀には、老人一人連れられて、何用あつて來られしぞ。

お淸　旦那さま、お聞きなされて下さりませ。（ト替つた合方になり、）これなるは昨日から表座敷に御逗留のお二人連のお客さま、承はれば御主人の、お娘御を連れられまして此湯治場へ御逗留中、隣り座敷のお武家方が其の娘御に無理を言ひかけ、座敷へ引入れ手籠めにも仕兼ねぬ樣子、此お方が連れ歸らうとなされても、向うは無法な劍術遣ひ、こちらは一人の御老人に打擲され突き出され、若しもの事でもある時は、御主人の親御樣へ申譯なき次第ゆゑ、どうぞ無難に取返す仕樣はないかと帳場へ來て、事を分けたるお賴みに、弟とても若年者、女主人の私ゆゑ外に仕樣もござりませず、幸ひ奧の旦那さまへ願つて見ようと連立つて、參りましたる此のお賴み。

佐五　親仁を一人助けると思召されて旦那さま、主人の娘を無難にてお取り返し下さるやう。

お清　お願ひ申し、

兩人　上げまする。（ト是れを聞き正作思入あつて、）

正作　すりやそれゆゑ參られしか、今も今とて御子息と表座敷の侍が、亂暴なること話し居りしが、それは嘸かし御難儀ならん、手前も望みのなき身なら早速承引いたしたいが、江戸表へ罷り下り深き因みの親友に、對面いたすそれまでは左樣な無道な侍と論をいたして遺恨をうけ、敵を求めて益なければ、此のお賴みは聞き難し、どうか其儀は御容赦あつて、餘人をお賴み下されい。

お清　御身分のあるお方さまゆゑ、そのお斷りも御尤も、御迷惑ではござりませうが、相成るべくは御地頭やお代官へ願つて出て、表沙汰に仕度くなく、御無理と知れど此お願ひ。

佐五　暇取るうちに主人の娘、若し手籠めにでもされましては、取つて返らぬ此の親仁、國の主人へ言譯に命を捨てねばなりませぬ。

お清　それやこれやを思召し、御迷惑でも旦那さま。

佐五　主人の娘とこの親仁を、お助けなさると思召し。

お清　願ひをお叶へ、

兩人　下さりませ。（トよろしく思入、正作氣の毒なるこなしにて、）

正作　誠に餘儀なき其の頼み、聞かぬも武士の不本意なるが、して、老人には何れの御藩、在所は何れでござるよな。

佐五　われ〳〵共は中國にて、因州の鳥取藩平井庄左衞門と申すものゝ、養女と家來でござりまする。

　　　トこれを聞き正作びつくりして、

正作　扨は平井權八どのゝ、家來と妹であつたるか。

佐五　左樣でござりまする。

正作　平井氏とは父の代より入懇を結びし仲といひ、權八どのとそれがしは契約なせし事あれば、江戸へ下つて對面なさんと望む此旅中。

佐五　それでは今度の一條を、御存じあつてゞござりまするか。

正作　囚人となり江戸表へ、差立てられしも疾くより承知、さては御身達主從にもそれゆゑ江戸へ下るゝか。

佐五　只今申した娘御は權八さまと許嫁の御養女でござりますゆゑ、跡を慕つて江戸表へ參る旅中で此災難、それゆゑどうぞ旦那さま、お助けなされて下さりませ。

正作　知らぬうちすら不本意と思ひし程の手前ゆゑ、如何にも頼みは承知いたした。

佐五　すりや御承引下さりますとな、えゝ有難うござりまする。
お清　やれ〳〵それで私も、安心いたしてござります。
正作　誠に四海兄弟とて、何處にどういふ知るものゝ、
佐五　あるかは知れぬ世の中も、此上もない旦那さまに、
お清　お目に掛るも是れもまた、忠義をあはれむ神の告げ、
正作　然らば早速。（ト立ち上るを道具替りの知せ。）支度いたさう。
　　ト此の模樣さわぎ唄にて、道具廻る。

（元の場）――本舞臺元の表座敷の道具、爰に以前の玄蕃八重梅を引寄せ、門弟四人取卷き酒盛りなして居る、此の見得やはり騷ぎ唄にて道具留る。

玄蕃　これさ、左樣におど〳〵と、何も案じることはない。
○　邪魔な親仁はわれ〳〵が、手荒くいたして遠ざけれど。
△　いはゞそもじは先生の、お目に止つた思ひもの、
□　是れから舐めたりかわかしたりなされる程愛せられ、

◎　必ず悪くはならぬから、酒でも飲んで浮くがよいわさ。
八重　いえ私は此中から旅の疲れで氣合が悪く、かやうなお席へ出ましては、頭痛がいたしてなりませねば、座敷へ歸つて自由ながら、臥せりたうござりまする。
女蕃　なに、臥せりたいと申したな。
○　扨は所謂床いそぎ。
△　女子の方から寢たいと申すは、
□　こりや先生に先方でも、
◎　夏の牡丹餅と見えまする。
八重　いえ〳〵、さうぢやござりませぬわいなあ。
女蕃　何であらうと臥せりたいとは此方にても望む所、今女子共に申し附け、是れへ床をば延べさせれば、隨意にそれへ寐るがよい。
八重　いえ私はかやうな所へ、臥せりたうはござりませぬ。
○　何さまこれはわれ〳〵が、同席ゆゑに先生と初見參では何とやら。
△　恥かしがるはこりや尤も、然らば隣りのあの座敷を、御寢所としてこちらへ借り込み。

□　今宵一夜は先生と、比翼の床の新枕。

◎　こりやわれ〳〵も今晩は、女に散財せずばなるまい。

玄蕃　もうかうなれば隣り座敷は、こちらへ借りたも同じ事ぢや。

八重　いえ〳〵あちらは私共の、借りた座敷でござります。

玄蕃　はて、他人行儀は言はぬものぢや。

ト捨ゼリフにて盛酒りよろしく、よき程に上手の橋を渡り、以前の佐五平案内して、正作羽織着流し大小にて出來り、眞中の緣端へ出て下に居て、

正作　あいや御免下されい、拙者は當家の奥座敷に逗留いたし罷り居る五百原正作と申す者、御雷名を聞き及び、久下先生にお近附に推參いたしてござりまする。（トこれにて玄蕃思入あつて、）

玄蕃　それはよくこそお出でありしぞ、如何にも手前は神影流の劍道指南をいたし居る、久下玄蕃と申す者、そこは端近これへ〳〵。

正作　然らば何れも、御免下されい。

ト會釋をしてよろしく住ふ、八重梅此體を見て嬉しきこなし、佐五平下手の障子の蔭より顏を出す、八重梅これを見て、扨はといふこなし、門弟皆々これに心附かず、

○　お名前とては知らざりしが、
△　一つ家にて逗留なせば、
□　風呂場でお顔は存ぜしわれ〳〵。
◎　以後は入懇に、
四人　お頼み申す。
正作　そりや此方より願ふ所、先生始め各々方以後はお見知り下されい。
玄蕃　幸ひ酒宴を開き居れば、早速ながら五百原氏どうか一献お受け下され。（ト杯をさす。）
正作　それは千萬忝けなし、頂戴いたすでござりませうが、お杯の外拙者めが申し受けたき品あつて實は推參いたしました。
玄蕃　杯の外御無心とは、旅中の金子に差支へ、合力受けに參られしか。
正作　いや左樣ではござらぬが、お側に置かるゝ其の娘、手前へお渡し下さるやう、其御無心に參りました。
玄蕃　何と言はるゝ。（トきつといふを留めて、）
正作　御遊興のお席へ參り、かやうな儀をば申し出すは心なしとは存ずれど、それなる娘の家來なる者

只今拙者の座敷へ參り、お隣り座敷の各々へ何か粗相のある由にて主人の娘を引き揚げられ、其儘置かば病中ゆゑ一命にも拘はらんと案じ過せし親仁の心配、何卒拙者にお詫びをなし、主人を無事に取戻しくれるやうにと餘儀なき賴み、拙者もかやうなお掛合は馴れぬ事ゆゑ再應は迷惑な儀と斷りしが、段々身許を承はれば父の代より國許にて、入懇を結びし親友の息女なること相分り、如何な次第か存ぜねどお詫びいたして其娘、お引き渡しを願はんと、推參いたしてござりまする。

○　何事なるかと存ぜしに、

△　次第も知らず横合より、

□　それは入らざるお扱ひ、

◎　引き渡すこと、

四人　なり申さぬ。(トきつといふを留めて、)

女將　いや各々、御立腹ゆゑさう言はれるも尤もながら、詫びを爲さんと先方より餘人を入れて參りしを、只一向きに斷りなば亂暴なりと言はれんも、後日の聞え恥かしゝ、先々手前に任されよ。(トよろしくあつてこちらへ向ひ、)いやなに正作どのとやら、それは近頃御苦勞千萬、親父の代より御

入懇の中と相知れお掛合に頼まれ是れへ來られしならんが、御身が町人百姓なら相手に取るも大人氣なく、高が女の粗相より起りし事と勘辨いたし、引き渡しても歸さんが、二腰帶せば武士の端くれ、其扱ひに怖ぢ恐れ勘辨せしと言はるれば、伊豆相模の兩國へ跨がる山の箱根にも劣らぬ身共の姓名が、向後すたつて劍學の穢れの基と相なれば、只この儘には渡されぬ、娘を連れて行かれるなら此庭前にて試合をなし、門弟始め此玄番に勝ち得る手練がござるなら閉口いたして引き渡さん、さもなきうちはお手前が如何程お詫びを入れられても、娘はお渡し申されぬ、それが返事の極意でござる。

正作　それは元より拙者めも、望む所のお手合せ、勝負の程はわからねどお望みならばお相手に、なるまいものでもござらねど、申さば遊里も同樣な保養の場所の塔の澤、聳つ岩の角立つて試合の勝負をなす時は、湯よりも客のわき返り當家の迷惑いかばかり、其混雜を思はれなば只何事も谷川の水に流され拙者めに、娘をお渡し下さるやう、只管願ひ上げまする。

玄番　いや口賢く申し脫け、試合の勝負をのがれんといたすは臆病腰拔け武士、假令何程言はるゝとも試合をなせし上ならでは、引き渡す事相成らぬ。

正作　すりや多人數の相客が、他見をいたす其中にて、是非に試合を望まるゝか。

玄番　おゝ他見があれば猶以て、試合の晴れの腕試し、尻込み召されず支度さつしやれ。

正作　そりやはや拙者も劍學を、修行の爲に西國より東へ下る旅の者、試合に參りし儀でござらば、木太刀なりとも携へんが、お詫びに參りし扱ひゆゑ、別に支度は入り申さぬ。

○　支度がなければわれ〳〵も、

△　日頃たしなむ柔術を、

□　試すは爰の晴勝負、

◎　如何なる手並か、ちよつと斯うして。

ト正作へ組附く、正作ちよつと立廻つて、二重より見事に投げる、□此體を見て不意に組付く、正作同じく見事に投げる。

○△　もう此上は。（ト兩人立ちかゝる、正作きつとなつて、）

正作　お望みならばどなたでも、相手は嫌はぬ斯くの通り、これでも試合になりませうかな。

トきつと言ふ、此時下手より佐五平思はず出て、

佐五　お出來しなされた、お手柄々々。（ト褒める、□◎起き上り）

□　うぬ、老耄め。

◎　そこに居つたか。（ト立ちかゝるを留めて）
玄蕃　いや各には先づ待たれよ、今の手並を見る所、少しは覺えのある樣子、筋骨あつて面白い、
○　それゆゑわれ〳〵、
○△　兩人にて、
玄蕃　いや御兩所の手練では、いやさ、酒氣を帶びたる御兩所では、不覺の恥辱を取らんも知れず、今度は身共が立合はん。
○　すりや先生が、
四人　お手をおろされ、
玄蕃　如何にも手前が御兩所の、今の恥辱を雪ぐであらう。
正作　劍道ならで柔術の、試合で勝負をお望みなら、未熟ながらもお相手いたさん。
佐五　どうぞ今度も旦那さま、お勝ちなされて下さりませ。
○　えゝ老耄め、
四人　すつ込んで居れ。（ト此うち玄蕃正作二重より下りて身支度なし、）
玄蕃　いざ、

正作　いざ、

兩人　いざ〳〵。

　　トこれより下座の合方になり、兩人本手柔術の立廻りあつて、トヾ正作立番を組伏せきつとなる。

佐五　よウ〳〵、又もやお手柄々々。

〇　えゝ、さりとては、

四人　殘念千萬。

正作　如何でござる玄蕃どの、これで娘をお渡しあらうな。（ト捻ぢ伏せ居る。）

玄蕃　御念に及ばぬ、參つた〳〵。

　　トこれにて正作玄蕃を引き起し、砂を拂つて遣る、此内佐五平は清水の流れにて手拭をしぼつて來り、

佐五　さあ旦那さま、お足をお拭きなされませ。

正作　おゝ心附け忝けない。（ト足を拭ひ二重へ上る、玄蕃も同じく二重へ上り、）

玄蕃　酩酊いたし居りしゆゑ、それがしまでが思はぬ不覺、誠に面目次第もない。

正作　いやも御大醉にてござらずば、拙者如きが及ばぬ所、然し折よく勝利を得て、こちらにいなやござらねば、八重梅どのと言はるゝ娘御、手前と同道いたされよ。

八重　思ひ掛けないお扱ひのあなたさまのお蔭にて、危い難儀をのがれました、有難い事でござります
る。
佐五　どうぞあなたは旦那さまのお座敷へお出で下さりませ、踟蹰のないうち私は座敷の道具を取り纏
め、直ぐお跡から參ります。
正作　然らば久下氏、各々方、お暇いたすがようござるか。
玄蕃　それはそちらの御勝手次第。
四人〇　とはいへ、此儘、
玄蕃　はて、何事も默つてござれ。
八重　ても、氣味のよい。（ト言ふを冠せ、）
正作　あいや、思はぬ失禮、御免下され。
ト唄により、正作は八重梅を連れて下手の橋を渡りはひる。佐五平はよい氣味だといふこなしあつて
上手へはひる。敵役皆々無念のこなしよろしくあつて、
〇　して、先生の御所存は、
△　此上如何、

四人　なされるな。

女番　深き手段もござれども、他聞の多き此家では、迂濶に發言いたされぬ。

○　然らば一旦お歸りあつて、

△　その御所在をわれ〳〵に、

□　仰せ聞けられ、

四人　下されい。

女番　どうで拂ひは借りて參れど、庭から歸るといたさうから、履物殘らず女子共に是れへ廻させ下されい。

○　承知いたした、

四人　女子共々々。（ト手を叩く、浮いた合方になり、奥より下女五人出來り）

お秀　これはお立ちで、

五人　ござりまするか。

○　手を叩いても一向に、座敷へ參らぬ女ども、

△　何と思つて一同に、打揃つて參つたのだ。

お秀　先生方のお試合を、
お幸　小蔭で拜見いたしましたゆゑ、
お若　それでお次ぎに、
五人　居りました。
○　えゝ見て居らずともよい事を、歸るから履物を殘らずこれへ持つて參れ。
お秀　それでは只今御勘定を、帳場で聞くでござりませう。
玄番　いや勘定を聞くには及ばぬ、何れ明日參ると申せ。
お秀　いえ〳〵それには、
五人　及びませぬ。
玄番　何ぢやと。
お秀　いえ御勘定の御心配には及びませぬから、わざ〳〵明日お出でに及びませぬ。
○　さう言はれると此儘に、
△　もつと居りたく、
四人　相成つた。

お秀　いえ／＼それには、
五人　及びませぬわいなあ。（ト下女五人奥へはひる。）
○　いや忌々しい、
四人　奴等なるわえ。
女番　それと申すも只今の、試合に不覺を取つたるゆゑ。
○　して又深き、
四人　御所存はな。
女番　歸る道々、お話し申さう。（ト此の模様、騷ぎ唄にて道具廻る。）

（元の離れ座敷の場）＝本舞臺元の離れ座敷の道具になる、よき所に行燈をともし、二重上手に以前の正作、下手に八重梅住ひ、本舞臺下手に佐五平控へ、合方にて道具留る。

佐五　あいらに仇をされぬやう取り散らしたる手道具を、殘らず纏めてお荷物と共に帳場へ預けてござりますれば、あれで御安心でござりまする。
正作　流石は年の功だけあつて、よくぞ心を附けられしぞ。

八重　鈴鹿山にて權八にお出逢ひありしと承はるあなたに又も私が、お出逢ひ申して身の難を、救つてお貰ひ申しまするとは、不思議な御緣にござりまする。

正作　されば手前も再會の契約なせし事あれば、召捕りとなり江戸表へ差立てとなる其節に、跡を慕つて駿府なる本陣へ名乘り出で、對面なさんと存ぜしが、囚人預かる役人が情を知らぬ者ゆゑに、空しく其節別れてござる。

佐五　それでは駿府の本陣へ、あなたもお尋ね下さりましたか。

八重　私共もあの節に對面願ひに本陣へ、參りましたれど斷られ、空しく別れてござりまする。

正作　それは何時頃なりしか、あの節御身に出逢ひなば、これへ參つて御一緒に逗留いたして居らうもの。

佐五　左樣いたせばあのやうな、惡侍に附込まれ、今日の御難はござりますまいに。

八重　どうぞ今宵は御一緒に、此の座敷へ私共を、お置きなされて下さりませ。

正作　それはお安いことながら、主ある花の八重梅どの、これへ置くのも何とやら。

佐五　それでは今宵は親仁めが、お二人さまの眞中へお邪魔に臥せるといたしませう。

八重　そなたの寢像の惡いには、あなたもお恐れなさらうわいなあ。

正作　左程に寢像が惡うござるか。

佐五　寢言を申してお孃さまに、いつでも夜中に起されまする。

ト爰へ下手の切戸口より、以前のお清出來り、

お清　皆さんお悦び下さりませ、やう／＼の事で疫病神が歸りましてござりまする。

八重　左樣な神が居ることは、少しも知らずに居りました。

正作　疫病神と申すのは、あの劍學者の事であらう。

佐五　成程あんな暴れ者は、疫病神に違ひない

お清　それと申すも柔術の試合に負けて庭口から、こそ／＼と歸つて參りましたが、旦那さまのお陰にて惡魔拂ひをいたしました。

八重　あの衆達さへ居りませねば、どちらの座敷へ臥せりましても、もう安心でござりまする。

佐五　親仁もこちらの旦那さまの、お側へ寢るは氣詰りゆゑ、外へお休みなさりませ。

正作　どうかお内儀この二人を、安心して寢る座敷へ案内をして上げて下さい。

お清　いえもう今度はあのやうな御迷惑の掛りませぬやう、私共の臥せります座敷をお貸し申しますれば、それで御勘辨下さりませ。

正作　左樣いたして下されば、身共も大きに安心いたす。
佐五　旦那さまにも嘸お疲れ、お禮を申してお孃さま、お暇いたすといたしませう。
八重　何とお禮を申さうか詞に盡せぬ此の御恩、いづれ明朝御機嫌を、伺ひまするでござりませう。
正作　さゝお構ひなく御身にも、早く休息いたされよ。
お清　どれ、御安心のお座敷へ、御案内をいたしませう。

ト八重梅と佐五平を連れ、お清下手の切戸口へはひる。跡に正作思入あつて、

正作　思はぬ事にて今日は劍道ならぬ柔術にて、首尾よく彼等を組敷いて勝利を得しとは申すものゝ、此界隈を暴れ歩く亂暴組と聞くからは、恥辱を取りしを遺恨に思ひ、品によつたら今宵にも。

ト此時後の茶立口を明け、以前の喜之助出で、

喜之　敵討に參りました。（ト聲に正作びつくりして後を見返り、）
正作　なに、敵討に參りしとは。（ト身構へをする、喜之助下に居て、）
喜之　昨夜は三番ともあなたに負けてござりますれば、今晩こそは妙手を考へ、あなたに勝たねばなりませぬ。
正作　いや折角ながら喜之助どの、碁の勝敗は今晩は休日にして貰ひたい。

喜之　それでは今宵は旦那さまには、お早くお休みでござりまするか。

正作　知つての通り今日は柔術の試合をいたしたので、何となく疲れ居れば、早く臥せりて休息をいたしたく存ずれば、碁の勝敗は明晩までどうか延ばして下されい。

喜之　私とした事が、旦那さまのお疲れも心附かずに敵討を、いたす心で出ましたが、左樣なれば明晩まで延ばしまするでござりませう。（ト正作思入あつて、）

正作　討てばうたるゝ習ひとて、碁の勝敗すら斯くの如く、まして恥辱を取りし身は。

喜之　えゝ。

正作　いや時刻も最早二更に近し、憚りながら喜之助どの、床を取らせて下されい。

喜之　へい〳〵畏りました、女子共が旦那さまのお寢間の端を穢したがり居るさうでござりますから、邪魔をして遣りませう。

正作　これはしたり喜之助どの、そりや門違ひと申すものぢや。（ト喜之助うしろへ向ひ、）

喜之　これ〳〵女共、旦那さまがお休みだ、お床を早く延べて上げぬか。

ト呼ぶ、これにて奥より以前のお幸、お橘、お松の下女夜具蒲團枕などを持つて出來り、

お幸　わたしの番のお座敷ゆゑ、必ず構うて下さんすな。

お橘　いえ〳〵、どうぞわたし達にも、
お松　手傳はせて下さんせ。
喜之　えゝ騒々しい、静かにせぬか、今夜は大分冷つくからお屛風を建てゝ上げろ。
女三人　はい〳〵、よろしうござりまする。
　ト三人床を延べ奥へはひる。此内正作寢支度することよろしくあつて、
正作　最早五月の半なれど、當所に居つては夜寒を覺え、屛風がなうてはまだ寢られぬ。
喜之　蚊の居りませぬ其替り、蚤がおうるさうござりませうが、どうか御勘辨下さりませ。
　トお幸の下女屛風を持ち出來り、
お幸　お屛風が參りました。
喜之　それでいゝから、置いて行きやれ。
お幸　お枕許へ建てませう。
喜之　はて、いゝから置いて行けといふに。
お幸　ても意地の惡い。
喜之　何だと。

お幸　いえさ、こつちの事でござりまする。（ト奥へはひる。喜之助よろしく屛風を建廻し）

喜之　左樣なら旦那さま、お早くお休みなされませ。

正作　どうか今宵は別段に、しまりをよくして寢て下さい。

喜之　いえ此邊は表から夜這などが參りますれば、しまりは用心いたしまする。

正作　然らば喜之助どの、許さつしやれ。

喜之　さゝ、お早くお休みなされませ。

ト下手切戸口のしまりをして、喜之助二重の奧へはひる。跡に正作思入あつて、

正作　旅寢の憂きも谷川の音に寢られぬ夜もすがら、故鄕を思ふ草枕、それもかやうに居馴れては筧を落つる水音や、河鹿の聲もまた樂しく、都に知らぬ寢心ぢやなあ。

ト枕許へ屛風を建廻す。これにて本釣鐘を打込み眞中の二重屋體を上手よき所まで引く、後一面奧深の庭遠見になり、誂へ凄味の合方へ水の音をあしらひ、下手塀の上へ以前の〇黑の手拭頰冠り、尻端折り、大小にて窺ひ出で、庭木を傳はり下へ飛び下り、内より切戸口を明ける、これにて以前の玄蕃外門弟三人、何れも頰冠り尻端折り、大小にて出で、

門弟四人　まんまと首尾よく。

玄蕃　あこれ。（ト押へ、皆々花道へ行き跡先きを憚るこなしあつて、）忍び入るには幸ひなる、彼れが止宿のあの離れ家、所詮名乗つて立合うては晝の手並に及ばねば、寢込みをぐつさり刺止めてくれん。

○　丁度彼れめが寢入りばな、

四人　然らば先生、

玄蕃　あゝこれ、靜かにおしやれ。

ト右合方にて皆々舞臺へ來り上手の二重へ上り、枕許の行燈を吹き消し、屏風を取りのける、うちに正作夜具を冠り寢て居る體、皆々うまいといふこなしあつて、玄蕃上へ跨がり正作を貫くこなし、

手ごたへせぬは、こりやどうだ。

○　なに、手ごたへが、

四人　ござらぬとな。（ト此時後の浴衣をかけし衣桁の蔭より、正作凛々しきこしらへに出で、）

正作　五百原正作これにあり、いで尋常に勝負いたせ。

ト玄蕃を二重より蹴落しきつと見得、これにて皆々びつくりなし、

玄蕃　扨はわれ〳〵參るのを、早くも知つて用意なし、寢床を脱けてうせ居つたか。

正作　當所へ參り亂暴なす汝等なりと聞きしゆゑ、恥辱を取りしを遺恨に思ひ、狼藉なさん事もやと疾

より覺悟いたしたり。やあ〱此家の若い者、狼藉者を打ち取る間灯しの用意いたされよ。

ト後へ向ひ呼ばゝる。

玄蕃　もう斯うなつたら破れかぶれ、各々彼れから討取らつしやい。

四人　心得申した、正作觀念。

ト拔身にて切つてかゝる、正作これを相手にちよつと立廻りきつとなる。此時ばた〱になり、上手より以前の喜之助先きに、尻端折り鉢卷にて六尺棒を持ち、跡より若い者大勢弓張提灯、六尺棒を持ち附いて出來り、

喜之　當所を荒す亂暴組、拂ひも寄越さぬ其上に、盜みにはひるは呆れた奴、捕押へるから覺悟しろ。

正作　いやお身達が手出しをして、怪我でもしては相成らぬ、彼等は手前に任せて置きやれ。

玄蕃　さういふわれから、討取りくれん。

正作　何を。

ト是れより神樂の入りし賑かな鳴物になり、若い衆大勢提灯を持ち左右を取り卷く、正作門弟を相手に立廻り刀を打ち落す、喜之助これを六尺棒にて打ちすゑ、一人々々繩を掛ける事よろしく、トヾ正作玄蕃と立廻り見事に切り下げる。此時下座にて三保神樂を打ち込む、正作思入あつて、

事に紛れて最前より、心附かずに居つたるが、あの夜神樂はいづれなるぞ。

喜之　あれは近日此山にて、荒人神の祭禮を、行ふ禰宜が神樂の稽古。

正作　何さま曾我の兄弟の、神をいさめる此月に、

喜之　惡魔を拂ふこの血祭り、

正作　よき贄で、（ト刀の血糊を拭ふを、木の頭）あつたよなあ。

ト につたり思入、跡皆々引つばりよろしく、右の鳴物にて、

ひやうし　幕

五十三驛扇宿附（終り）

武徳備老公智略軍配圖當勝鬨上味方祝宴

名に大阪の籠城も軍師眞田が百計盡き一命捨る討死に後藤も覺悟を死出の血戰譽れは高き兜の名香木村親子の一世の別れに主從三世の因みさへかひなく甲斐が介錯に久頼公が生害の供は小姓の三之助十一歳の殉死に加藤武田が切かぬる思ひは同じ清右衛門我育てたる大助に母の介抱頼まれて是非もなく〳〵脱出る城内胸に巧みも大江長柄が執持和睦を止むる水名瀬兎やせんかくと淀君の心も淀む浪花江によしあし分る宮内の局が諫を入れて冥土の魁紀念の旗に越方の昔を思ひ伊豆守が哀れはかなき首級の對面妻吏秋が袖絞る涙の雨の故郷へ靑木平子が發足に往來切手を賜りしは四海をさむる寛仁大度

大平諷英雄勢揃

茶臼山凱歌陣立

『茶臼山』は明治十三年十一月、新富座に上演された、作者六十六歳のことである。大阪夏の陣と稱せられる大阪落城を『難波戰記』によつて書いたもの、九代目團十郎が家康を演じて當りを取るに到つた第一作と言はれる。團十郎の幸村は後藤又兵衞と菖蒲酒を汲むあたり「大々的活歴にて見巧者連を悦ばせ朝暮には惜しきもの」と言はせたり。宮内の局は無類の大出來、重成との別れは感心と褒むるの外なく、家康に扮し、首實檢の時信幸に眼を注ぐ老獪なるしうち申分なかりし」といふ。左團次の左太夫、家橘の秀頼、小團次の大助、宗十郎の信之等は菊五郎の重成役と共に、適材適所何れも當時好評であつた。

書卸しの時役割は、市川團十郎(眞田幸村、宮内の局、徳川家康)、五世菊五郎(木村重成、介錯加藤彌平治)、先代市川左團次(後藤又兵衞、介錯左太夫)、中村宗十郎(逸見甲斐守、眞田信之)、岩井半四郎(淀の方、幸村の室更科)、中村仲藏(青木淸右衞門)、坂東家橘(秀賴公、本多上野)、市川小團次(眞田大助、安藤帶刀)、市川團右衞門(大野道犬、大江の局)、中村鶴藏(大野修理)、尾上菊之助(小姓高田三之助)等であつた。

挿繪にしたのは九世團十郎の宮内の局と傳へられる舞臺寫眞である。本篇は舞臺書き、ト書き等に多少の省略ある印行本に據つて收錄したことを附記しておく。

大正十五年十月初旬

校訂者



茶臼山凱歌陣立（茶臼山、宮内局──五幕）

序幕　大阪城内大廣間の場
同　眞田陣所の場

〔役名──豐臣秀賴公、眞田左衛門佐幸村、同悴大助、後藤又兵衛基次、大野道犬、同修理、眞田家臣平子源藏、大名、同朋、小姓、軍卒。幸村室更科、其他。〕

（城内大廣間の場）──本舞臺大阪城内大廣間の體。爰に同朋二人三方へ粽を載せ、控へ居る、この見得よろしく時の太鼓にて幕明く。

同一　御同役如何でござる、今日は端午の節句、それゆゑに平安なれど、又明日より合戰が始まるとのこと、どうもけんのんではござらぬか。

同二　どうも今度は當城方敗軍との噂、といふは眞田氏を始めとして、皆討死をせしとのこと。

同一　そりや又なぜでござる。

同二　肝腎の淀の方が、大野ばかりを御贔屓あそばすゆゑ、世を見限つてのことでござる。

ト奥より大名六人出來り、上下へ住ひ、

大一　坊主衆には大廣間の、御飾り附等調ひしか。

大二　最早おッつけ此所へ、君の出御に相成れど、

大三　お掃除萬端手落ちなく、調ひまして、

皆々　ござるかな。

同一　はあ、仰せの通り皐月の御嘉例、雪舟が筆の鐘馗の掛物、

同二　まつた豐國樣御着の鎧、上段の御床の間へお飾り附を、

兩人　いたしましてござります。

大四　お飾り附が出來たとあれば、詰所へ參つて休息めされ。

同一　然らば御免、

兩人　下されませう。

ト調べにに兩人下手へはひる。跡合方になり、上手襖の内より道犬、撫附鬘法眼袴一本差し、修理直垂一本差しにて出來り、上手へ住ひ、

道犬　これは〳〵何れもには、連日苦戰のお疲れなく、節句の嘉儀の總登城、

修理　御苦勞千萬に存じまする。

大一　はッ、御懇のお詞忝けなし、執權大野御父子には、最早先刻御登營ありしか。
大四　我々どもゝ端午の御祝詞、申上げんと先刻より、何れも伺候、
六人　いたしてござる。
道犬　いや、その祝日の節句ゆゑか、今日は朝より金鼓の音なく、耳を貫く砲聲も聞えざるせゐか心も落附き、御前に於て賜りし御酒さへすら〳〵咽喉を通り、聊か安堵の思ひをいたした。
修理　こりや、父上の仰せのごとく、我々どもは弘治永祿まッた元龜天正の頃に生れしものなれば、常に戰爭諸國に起り血腥いが鼻につき、鐵砲玉や矢叫びは更に心に留めねども、
道犬　男子と違ひ女童は、又もや戰爭始まりしと、山野へ走り狼狽なし、夫は最愛の妻に別れ貯へ置きし金銀すら其身に附けざる殘念さ、それらの邊を勘考し今日御嘉例の節句を幸ひ、
修理　我々父子より我君へ、篤と御異見申上げんと存じ居つたる其所へ、各々方の總出仕、
道犬　御目に掛るを幸ひに、道犬父子より各へ、篤と御異見、
兩人　申さにやならぬ。
大一　なに、我々へ、
皆々　御異見とは。

道犬　今改めて申さずとも、當大阪と關東方再び和議の破れしより、終には戰爭止む時なく、日々味方にも手負ひあれど、勝負は時の運にして左のみ懸念はいたさねど、名に負ふ駿河の家康は人望を得し老大將、大阪方の傾く御運を見限りて、裏切りなすものありと聞く、されば今度の戰爭は十が九つ味方の負け色、いかで勝利は思ひも寄らず。

修理　さあ爰が各考へ所、たとひ智者だと評判の眞田一人麾を採り、如何なる奇計を回すとも彼は一度紀の國の九度山へ閑居なし、世の形勢を計るなどゝ聖人めかす大山師、彼等が詞に迷はされ、べんべんだらりと戰爭なさば、敵は早くも運送の道を遮り海路を塞ぎ、兵糧攻めにさるゝ時は三日と籠城保ちがたし。

道犬　かゝる仕儀ゆゑ我々が意見に附いて、共々秀頼公へ和睦の儀をお勸めあつては如何でござるな。

ト思入にていふ、六人顏を見合せ、

大一　こは執權のお詞ながら、其意を得ざる御一言、そも此度の和睦を破り、

大二　關東方より手切れをなし、此の名城を陷れんと、日本過半の總がゝりにて、

大三　當城外を取卷くとも、高の知れたる集まり勢、戰は時のひやうりといひ、

大四　殊には軍師は幸村殿、たとひ名譽なればとて家康公に劣らぬ麾配、

大五　一命捨てゝ防禦なせば、我が一名の軍卒は敵百人に勝るの道理、

大六　何ぞ大軍なればとて、取るに足らざる關東勢、いかで我々降參なさうや。

大一　執權職には毎日の戰に脅えたまひしか、和睦などゝは耳の穢れ、

大四　この後左樣な未練な儀を御門外、

皆々　下さりまするな。

道犬　身不肖なれども道犬が、年の功たる御異見を、

修理　各方にはお用ひなければ、今に思ひ當るでござらう、それが如何にも氣の毒千萬。

ト思入、この時奧にて、

侍　御出座。(ト呼ぶ、これにて皆々威儀を正し、)

皆々　最早君の、御出座とな。

トこれにて皆々左右に別れ、道犬修理は上手へ住ひ平伏する。警蹕の聲時計の音になり、正面の御簾を捲き上げる、此内二重眞中へ秀頼公烏帽子直垂、好みのこしらへにて褥の上に住ひ、この左右に小姓二人控へ、後に誂への太刀を立て、この外紙臺などよろしく、上手床の間に袖無しの鎧を飾りあることよろしく、皆々平伏する。

道犬　今日端午の御嘉例によつて、御父殿下御着の鎧、まつた雪舟の筆鍾馗の掛物、大廣間の床に掛け嘉儀を祝する我々一同、

修理　今泰平の御代と違ひ、合戰の街ゆゑ武器御幟はなくとても、千成瓢の御馬印五色の御旗は風になびき、

大一　四半の指物弓鐵砲、大地を働く戰人形、

大二　敵も味方も勝敗を爭ふ勇士が菖蒲打ち、

大三　粽にあらぬ腹卷の、六具固むる我々も、

大四　數ケ所の手負暁に、降るといふなる藥の露、

大五　蓬を浸す菖蒲酒、けふの節會の身の晴れは、

大六　玄宗帝に勝りたる、君の御前に出仕なし、

道犬　尊顏拜す臣下が大慶、

修理　恐悦申し、

皆々　上げ奉つる。

秀頼　舊冬數度の合戰も和議とゝのひて東西ともやゝ平穩に至りしが、それさへ再び破れとなり又候

開く晝夜の戰、名に負ふ敵は內緣ある德川父子が指揮なせば、軍令守る關東方、互ひに勝負を爭へど、寡は衆に敵し難く日々味方に手負ありと奏者が披露にこの程より、予も心配いたし居れど實地を働く其方どもの、心痛さこそと察し居るぞ。

道犬　恐れ入つたる君の御詞、取りわけ吾等は御父殿下の御在世より御側をはなれず、君未だ御幼少なるいたいけなる其頃より、ぢいよ〳〵とお詞を下したまはる有難さ、この身に染みて恐れながら我が子に等しく存じますれば、斯かる戰爭止む時なき亂れし御世に相成れば、お顏を拜す其度に只御傷しく存じまして、落涙の外はござりませぬ。

修理　父道犬が言上なす詞の如くそれがしも、御君側をはなれねば、これをあゝせい斯うせいと親しく上意を賜はりしが、それさへ最早今日限り。

道犬　永きお別れいたさうかと、お名殘り惜しう存じまする。（ト愁ひの思入にて兩人よろしくいふ。）

秀賴　永き別れを告げるとは、何故なるぞ。

道犬　はッ、お名殘り惜しいと申上げしは餘の儀にあらず、當城も遠からずして敵勢込み入り、

修理　必ず落城いたさうかと、それのみ心掛りゆゑ、君の尊顏拜するも今日明日と存じますれば、

道犬　それゆゑ名殘りが惜しまれまする。されど德川家康は當時天下に並ぶものなく人心多く歸服なし

日本國の大小名過半は味方に屬する上老練なる名大將、殊に旗下は三河生れの剛の者、譜代に酒井榊原平岩井伊に本多なんぞ智勇を兼ねし將あれば、僅に小勢の味方にて敵たふとても及ばぬこと、

修理　これらの事を考へずみだりに戰爭なす時は、只人命を失ふのみ、所詮勝利は覺束なしと、それを苦勞に思召され既にこの程淀樣には、三度のお食もお咽喉へ通らず御心痛と承はる。

道犬　そのお心を慰むるは則ち敵へ和睦を乞ひ、戰爭の止む時は忽ち四海平穩に泰平謳ふは目の當り、さすれば第一御母公へ御孝養となるのみならず、臣下の者の一命も救ひたまふ御仁情、

修理　この儀申し上げんと日夜思ひ居つたれども、幸村始め後藤木村血氣の勇に何處までも瘦我慢を押通し、よしなき戰ひ好むゆゑ、理に叶ひたる和睦の一儀申上げんも彼等には、却つて未練と蔑なされ、

道犬　御用ひなきは必定と思へば是非なく死を極め、君のお名殘り惜しめども、淀樣始め御簾中の御歎きをも思召さば、今一度御勘考然るべきかと我々父子、この儀懇願仕ります。

秀頼　そちが諫むる和睦の聞えも一理なきにはあらねども、既に先年和議を調へ無事に兩家の納まりし折、關東より數條の難題申しかけ、予も殘念と思へども再び和睦破れなば、上は宸襟を安んじ奉

ちず下は萬民塗端に苦しみ、戸ざゝぬ御代も忽ち修羅の街となるを悲しみ、その意に任せて和交を結び無念をぢつと怺へしが、これ皆家康が計らひなること、智勇勝れし幸村が未然を察して予へ諫言、遠からずして戰爭を彼れより起すは必定と言ひしに違はず今日の有樣、最早當城の滅亡眼前に迫るとも、いかでか和睦をいたさんや、予も生害は覺悟ゆゑ此場に至り未練なる、諫めは決して用ひぬぞ。

道犬　すりや、これ程に申上げても。

秀頼　再び申すな、未練なるぞ。

道犬　是非なき次第に、

兩人　ござりまする。（トこの時花道の揚幕にて、）

侍　後藤基次出仕。（ト呼ぶ。兩人これを聞き、）

道犬　なに後藤又兵衛出仕とは、何か至急の注進なるか。

修理　お預かりの御場所を捨てゝ、只一騎にて出仕せしは、

大一　何とも以て心得がたし、

大四　凶變にてはあらざるか、

道犬　早く樣子が、

皆々　聞きたいものぢや。（ト此時向うにて、）

侍　出仕。

ト呼ぶ、誂への合方序の舞のやうな鳴物にて、花道より基次一本差し好みの鬘直垂にて出來り、花道よき所へ平伏する、秀頼これを見て、

秀頼　基次出仕いたせしか、遠慮に及ばぬ、進め〳〵。

大一　君の上意、急いで、

皆々　これへ。

基次　然らば御免下さりませう。（ト右の鳴物にて舞臺へ來り、下手よき所へ住ひ、）今日こそは五節句の内にても、いと勇ましき端午の節會、我君にもうるはしき御尊顏を拜し、恐悅申上げ奉る。

秀頼　おゝそちも堅固で目出度いなう。して、幸村は如何なせしぞ。

基次　はッ、有難き其お尋ね、幸村殿の陣所とは隔たり居れば今朝はまだ面會はいたさねど、數々書狀を往復なせば替る事なく敵勢をうち取る手段を回らし居らん、恐れながら我君にも御心安く思召し下さりませう。

道犬　あいや基次殿、君へ端午の恐悦を申上げたら世辭はいらぬ。して、貴殿には守りを捨てゝ、

修理　火急に出仕召されしは、定めて身方に裏切でもあつての事か、但し又、

大一　敵の動靜物見の注進、

大四　言上の爲、御出仕ありしか、

道犬　少しも早くこの場にて、君へ言上、

皆々　いたされよ。

基次　はて仰々しき其のお尋ね、基次出仕いたせしは左樣な不吉な儀ではござらぬ、端午の嘉儀を祝せんため御前へ伺候いたせしなり、決して大野御父子には御心配なさるゝな。

秀頼　して、今日は端午ゆゑ、定めてそちと幸村と同道いたして參るかと思ひ居つたにまだ見えぬが、後より出仕いたすであらうな。

道犬　あいや我君、そのお尋ねの幸村は、最早これへは出られますまい。

秀頼　なに、幸村が予の前へ出られぬとは、如何な譯なるぞ。

道犬　はゝ、その仔細只今申上ぐるでござらう。下ざまの街の風說は取るに足らねど、天に口なし人を以て言はしむるの譬、かねて君にも知ろし召す幸村が實の兄伊豆守信之は關東無二の旗本にて、

家康殿より內命うけ、しば〳〵彼れが陣中へ密書を送るのみならず、幸村竊に關東へ心を寄せ、機密を漏らし變心なせしと申すこと。

基次　こは執權の仰せながら、取るに足らざる道路の說、左樣でなくば敵方より間者のものに申附け、かやうな儀を申し觸らす、それぞ寄せ手の謀計ならん。

道犬　なに、謀計とは、

修理　何を以て。

基次　さればでござる。只今御父子の言はるゝは、味方に取りて無二と賴む大軍師の幸村殿、兄が緣にて關東へ內通なすと言ひ觸らし、味方に十分疑念を起させ同士討ちさせんと、敵方より間者のものに言ひ含め流言させしに相違なし、そも眞田殿の精神はそれがしとても最初より見拔き置きたる大丈夫、それらは取るに足らざること。

道犬　やあ、たとひ貴殿が幸村を、いかに最屓召されたとて、計りがたきは人心、

修理　たつて變心なさぬといふ、何ぞ證據がござるかな。

基次　おゝ其證據こそ先達て、幸村殿の伯父に當りし同姓隱岐守が、德川殿の內命にて竊に眞田の陣所へ來り、今關東へ隨身なせば恩賞として十萬石領地を與へ、一國の城主となさんと理非を說き、

屢々伯父より勸めしがいつかな變心せぬ大丈夫、明日にも討死いたすは覺悟の前と伯父に向つて大言吐き、身の潔白を立てたるは二心なき慥な證據、それに何ぞや今となり、變心なして關東へ隨ふなどゝ申し觸らすは、一命惜しむ佞人が己が心に引くらべ、御前をも憚らず噂をいたす大腰拔け、いやはや笑止千萬はゝゝゝゝ。

道犬　なに、言はせておけば過言の基次、

修理　諸侯列座の御前にて、人もなげなる無禮の一言、いよ〳〵以て我々父子が役目の瑕瑾、

兩人　言はるゝか。

基次　いかにも御身は淀どのゝ贔屓の沙汰で斯くまで立身出世はされしが、權を握る器にあらず、幸村殿は古今の名將、その德備はり人々歸服するにあらずや、それには引替へ貴殿等はやゝともいたせば關東へ、和議を結べと我君へお勸め申すは大軍に、おぢ恐れてこの臆病風、たゞ存命を願はるゝは近頃未練にあらざるか。

兩人　さあそれは、

基次　但しは拙者が過言なるか。

兩人　さあ、

基次　さあ、

三人　さあ〳〵〳〵。

基次　今となりて和を乞はゞ命惜しさと世の嘲り、死すべき時に死せざれば死に勝る恥辱がござるぞ。

トきつといふ、道犬修理詰りし思入、秀頼双方を留め、

秀頼　双方とも、暫く控へよ。

兩人　はゝ。

秀頼　今そち達が理を爭ひ諫めを入るゝは我爲を、思ひくるゝの忠義ゆゑ、予も疎略には思はねども、大野が詞を用ひし上和睦を再び結ぶとも智勇勝れし家康殿、さきに幸村が察せし如く此上如何なる難題を申掛けんも計りがたし、我が決心は父殿下卑賤よりして人臣の極官とまで昇進したまひこの日本はいふに及ばず朝鮮にまで威をふるひ、四海に其名を輝せしが傾く時節は是非もなし、今日落城いたすとも、この秀頼が不德なれば、滅亡いたす時至らば、家臣等と共に潔く、予も生害いたす所存ぢや。

基次　すりや我君にも、

皆々　御覺悟とな。

秀頼 こりや基次、汝と予とは主従の因みも未だ淺けれど、深き忠義の眞心は、忘れは置かぬ忝ないぞよ。

基次 はゝあ有難きその御上意、我一命を君に捧げ明日こそは關東勢總攻めなすは必定なれば、この基次も花々しく一戰なして討死とかねて決心いたし居れば、最早君へ御目通りも、今日限りにござります。

秀頼 おゝ予も其方と同じ事、そちに面會いたすのも、これが名殘りと相成りしか。

ト兩人愁ひの思入あつて別れを惜しむ、皆々覺悟の思入あつて、

大一 君の御覺悟聞く上は、

大二 我々とても冥土の御供、

大三 花々しく防戰なし、

大四 刀の目釘の續かんだけ、

大五 敵を惱まし其上にて、

大六 叶はぬ時は切り死なし、

大一 討死いたす、

皆々　所存でござる。
道犬　すりや我君を始めとして、各方にも討死とな。
修理　忠義一途の御諫めも、時來らねば力及ばず、是非なき次第に、
兩人　ござりまする。
秀頼　おゝ、幸ひ今日は端午の節句、門出の杯祝して行きやれ。
基次　すりや、私へ。
秀頼　誰かある。九献の用意。（ト此時下手にて、）
同朋　はゝあ。
ト誂への合方になり、同朋二人瓶子と土器を持來り下手へ控へる、秀頼飲み乾し後藤へさす。
基次　君の御心かけられし、御杯の媒介は出陣祝ふ御同朋。
秀頼　床に掛けたる鍾馗の畫は、そちが智略に見立てしぞ。
大一　赤きは血汐の血祭りに、
大四　鬼殺しとは、
皆々　よき吉兆。

基次　有難く頂戴仕る。

ト件の土器を取上げる、同朋酌をなして基次押戴き、ぐつと飲乾しこれでは足らぬといふ思入、秀頼見て、

秀頼　おゝそちは大酒と聞き及ぶ、苦しうない、瓶子のまゝ過して参れ。

基次　然らば御免。（ト瓶子を取るを、木の頭、）

秀頼　おゝ、いさぎよい奴ぢやなあ。

ト秀頼感心の思入、基次瓶子のまゝ酒を飲む。道犬修理はあきれし思入、よろしく誂へ大小入りの鳴物にて道具廻る。

（眞田陣所の場）――本舞臺すべて眞田陣屋の體、爰に〇□△◎の軍卒砂鉢へ肴を乗せ酒を飲み居る模様にて幕明く。

〇　いや又ばら〳〵と遣つて來たが、けふは五月の節句ゆゑ戰が一日休みだから、雜兵のおら達まで手足を延してのう〳〵と、怖い思ひを忘れたやうだ。

□　それに是れから御酒下されで、何處の陣所も飲めよ唄へ、烈しいこんな戰の中でも酒を飲むと氣

が浮いて、何だか節句の心持になつて來た。

△ さうだ〳〵、明日は關東勢が總攻めに掛るといふから、今日と違つて朝から忙がしいに違えねえ

殊に今度は旗本ぜりあひ、それ彈丸がけんのんだ。

◎ 命あつての物種だから、生きて居るうち酒でも飲んで、うまい物でも喰ふのが德だ、酒がおつも

りになつたら、炊出しへ行つて貰つて來ようか。

○ ついでに肴も最う一種、鰹の刺身でも貰つて來ようか。

□ 戰に鰹は延喜がいゝ、こいつは又飲めるわえ。

△ まだ飲みたがるか、最ういゝ加減にするがいゝぜ。

◎ おれは出船だ、もう一杯ついでくれ。（ト皆々酒を飲んでゐる、奥より家臣源藏出來り）

源藏 これ〳〵お前方は、何ぼ上から下さつた御酒だとて、さう飲んで皆醉つぱらつては、何の役にも

立ちはしない、大概にしてしまふがよい。

○ これは誰かと思つたら、御近習の平子殿、何もそのやうに野暮な小言はいはぬもの。

□ けふは上から御免の出たお節句の祝ひ酒、源藏殿も相手をして、

△ わし等と一緒に煮染を肴に、茶碗でぐひ〳〵やつて見たまへ、

◎、しかつめらしい酒盛りより、是れが暢氣で一番うまい、一ッお酌をいたさうか。

源藏　いや／＼わしは酒は嫌ひぢや、成程けふはお上より下されになつた御酒だから、飲むなといふではなけれども、飲んでもよいが其樣にぐでん／＼になつては、もしひよつと家康殿の計略で夜討でも掛けられたら、いざといふ御役に立つまい、お上のお目にかゝらぬうち、部屋へ行つて飲むがよいぞ。

○　成程それもそんなものかえ。

□　二合半でも軍師の家來、

△　當城内では人の手本。

◎　平子殿の異見につき、一同部屋へ引き下らう。

四人　それがいゝ／＼。

源藏　まだ飲みたければ炊出しに樽の鏡がぬいてあるから、又今に飲むがよい。

○　左樣ならば源藏樣、後程お目に。

皆々　掛りませう。（ト軍卒四人はひる。）

源藏　十人寄れば八人まで皆酒を好んで飲むが、何であんなにうまいものか、此源藏は酒と言つたら、

匂ひを嗅ぐのも嫌ひだが、其代りには下戸ゆゑに、端午の節句の柏餅、店屋で賣らぬ素人ごしらへ、大きなのを喰ひたいが戰の中ではそれさへ喰れず、兎角下戸は損なものだ。

ト片附けて居る、爰へ幸村の妻更科出來り、陣内をうかゞひ、

更科　あゝこれ、そこに居やるは源藏ではないか。

源藏　なに、わしが名を呼ぶのは、誰ぢや〳〵。

更科　おゝ、そちを呼んだはわしぢやわいなあ。

源藏　何ぢやわしぢや、そんなら人でも後に、やゝ、あなた樣は奧樣ではござりませぬか。

更科　あゝこれ。

源藏　奧樣には、どうして是れへお出でなされました。

更科　かねてそちも知つての通り、我が夫はじめ大助にも、いつぞや信濃の本國を御開城ありしより、暫くお目に掛らねど、旦那樣にも悴にもお替りはないかいなう。

源藏　それは御案じなされますな、お二人とも御壯健で、御無事にお暮しでござります。

更科　それ聞いて落附いたわいなう、何は扨おき戰の勝利、そちは大方知つてゞあらう、樣子はどうぢや、どうぢやいなう。

源藏　さ、その戰爭の勝敗は只今お話し申しませう。いつたい今度のお手切れは天下分目の戰ともいふべき烈しき戰ひゆゑ、毎日互ひに討死手負は山のやうにござりまするが、名に負ふ此方は殿樣の御軍配ゆゑ、大軍の關東勢を數度となく謀計にて泡を吹かせ、討てども盡きぬ數萬の敵勢、味方は何を申すも後詰めをいたす加勢なく、數度の勝利は得ましても乾減りのたつ大阪方、此樣子にて行きますれば、末始終には落城と、昨日今日の噂とりどり、殿樣にも若樣にもどうせ近々討死を、なされずばなりますまい。

更科　そりや、御勝利ではあるけれど、始終は夫幸村殿にも、討死遊ばす御覺悟なるか。

源藏　御思慮の深い御前樣、口にはお出しなされませぬが、昨日今日はお覺悟のお支度なるか私へも、死後の事などおつしやつて若殿樣と一間にて、何やらひそひそお物語りをなされますのも、御覺悟のお支度かと存じられます。

更科　さういふ事なら猶更に、せめてお詞交さずともお顏なりと拜したければ、どうか其方の働きで忰になりと内々で、どうか逢はしてくりやいなう。

源藏　外のお方は知らぬこと、奥樣のお頼みゆゑお安い事と申したいが、昨年お出での時でさへ、お逢ひなさらぬ大助樣、これぱかりは私がお請合は出來ませぬ。

更科　そこを其方が働きで、一目なりとも大助に、どうぞ逢はせてたもいなう。

源藏　それ程までにおつしやるなら、所詮無駄とは存じますが、折角お出でなされしゆゑこつそりお話しいたして見ませう、まあそれまでは奥樣には、御いたはしくは存じますが、暫くそれにお控へなされませ。（ト更科を介抱して源藏行かうとする、爰へ奥より大助出來り二重へ住ひ。）

大助　こりや〳〵源藏、最前より一間にて樣子を聞けば門外にて、女子の聲がいたすやうぢやが、誰人の入來なるぞ。

源藏　へい、あのお出でなされました。

大助　たゞお出でとばかりでは誰人なるか分らぬ、大奧より淀樣のお使ひにても遣はされしか。

源藏　いえ〳〵、左樣なお方ではござりませぬ。

大助　然らば誰ぢやな。

源藏　さあ、あのお方は實は紀州の九度山より、母上樣が遙々と、これへお出でなされました。

大助　え、あゝこりや源藏、そりや其方が見違ひであるぞ。

源藏　いゝえ何で見違へませう、奧樣に違ひござりませぬ。

大助　いや〳〵それはそちが間違ひ、我が母上は去年の冬當陣中へお出でありし砌すら、父上は大義を

抱へし大事の身の上、決して妻には逢はぬぞと堅く仰せ聞けられしを、よもお忘れはなさるまじ我が母上も武士の妻、愛に引かれて此所へ御未練らしう御出でがあらうや、それは大方人違ひ、源藏そちが聞違ひであらうがの。

源藏　成程若樣のおつしやる通り、御前樣が堅くお止めなされたを、それを背いてお出でがあつては、こりや奥樣がお惡いに少しも違ひはござりませぬが、折角紀州よりお出でなされた事なれば、せめてはお詞かはさずともお顏なりとも御内々で。

大助　えゝ、そちまでが何を申す、假令誠の母上なりとも父の詞は背かれぬ、殊に拙者が生みの母なら近頃御未練千萬なりと、そちより申上げてお歸し申せ。（トきつといふ。）

源藏　こりやひよんな事になつたなあ。

更科　姿を窶しはる〴〵と忍び來たる此母に、詞も最早交さぬとはそちは氣強いものぢやなあ。そも夫幸村殿、大阪方へお味方をなされし時より此母は、本國信濃へ殘されしが、夫とそなたは紀の國の九度山へ世をのがれて、長らく御籠居遊ばすうち遂に一度お目もじせず、其後これなる大阪へ御入城をばなされしと、聞いて心も心ならず、遠き信濃の隠れ家より遙々お尋ね申せしが、其中婁もなく未練者とお叱りうけ、すご〳〵と歸る道にていつそのこと生害せんとなしたるを、清右

衞門が情にて生命ながらへ九度山の、知邊を頼みて世を忍び時節を待つて居るうちに、再び關東大阪の和睦破れて戰爭と聞いて身も世もあられぬ思ひ、今も今とてそちが詞に落城は近きうちにありと言つたではないかいなう、どうかそなたが執成しで一目逢はしてくりやいなう。

源藏　さゝ御尤もでございます、暫くそれにお待ちなされ。いやなに大助樣、折角御出での奧樣へ一目なりとお逢ひなされて下さりませ。

大助　こりや源藏、そちまでが何を申す、人目に觸れては何かの妨げ、早く此場をお返し申せ。

源藏　御無理ではございませぬが、せめて一言お詞を。(ト袖を取る。)

大助　父の詞は背かれぬ。

源藏　そこを何卒。

大助　えゝ、くどいわえ。(ト奧へはひる、更科わつと泣く。)

源藏　おゝこりや御尤もでございます〳〵、お側で聞いて居ります御家來のわしでさへ、涙の留めどがございませぬ、然しこれも殿樣のお申附けなら是非なき譯、殊に眞田の陣中へ女が忍んで來たなどゝ噂がぱツと立ちましては、矢張りお爲になりませねば少しも早く思ひ切り、爰をお落ちなさりませ。

更科　おゝ、そちまでに苦勞を掛け無未練なと笑はうが、あつぱれ悴が志し感心しながら此身には、誠に本意なう思ふわいなあ。

源藏　その本意なさも戰の中、またその內に淸右衛門と相談の上お二人樣へお逢はせ申す手續きにいたす工夫もござりますから、先づそれまでは近村の田家へなりと身を忍び、時節の來るを暫しのうちお待ちなされて下さりませ。

更科　望み叶はぬ上からは、思ひ切つて歸らうわいなあ。

源藏　それがよろしうござりまする、然し此儘すご〳〵とお歸り遊ばすお心のうち、お察し申して見ますれば、お氣の毒でなりませぬ。

更科　名殘りは盡きねど、もし人に見咎められぬそのうちに。

源藏　早く御下城なされませ。

更科　そんなら源藏、

源藏　奧樣、

更科　時節の來るのを相待ち居るぞよ。（ト更科名殘を惜しみながらはひろ、奧より大助出で、）

大助　こりや源藏、母上は最早お歸りなされしか。

源藏　あなた様のお詞ゆゑ、是非なくお歸りなされました。

大助　おゝよくぞお歸りなされました。（ト向うを伏し拜み、）骨肉分けし母上の心強くもお詞背き、愛想づかしに等しき過言、不孝の罪は母上様お許しなされて下さりませ。

トよろしく詫びる、爰へ奥より幸村旗の入りし箱を抱へ出で、

幸村　こりや大助、そちは父が申附けを堅く守つて聊も、未練を殘さぬ今の計らひ、幸村感服いたせしぞ。

大助　忝けなきお褒めのお詞、父の仰せを堅く守り遙々お出でなされしを、すげなくお返し申せしは胸も張裂く思ひなれど、なまじお顔を拜しなば未練の本と其儘に、お別れ申してござりまするが、嘸や母にも不孝者めと此の大助をお恨みあらん、父上拙者が切なさを御推量下さりませ。

幸村　木石ならぬそれがしゆゑ親子の情の切なさを、存ぜぬにはあらざれど、君の爲に妻子を捨て、父兄にあらぬ別れを告ぐるのも、是れ皆武門の習ひなれば、此期に及び其方も、決して未練に歎くまいぞ。

大助　厚き御說諭辨へ居れば、決して歎きは仕りませぬ。

幸村　いやなに源藏、今日端午の慶賀ゆゑ、敵も味方も今日一日休戰の約束なれば、幸ひ城門の通路を

ゆるし出城なすに便利ならん、大儀ながら其方は我が舍兄伊豆守が陣所へ立越え、面會なして、手渡しなす一品あれば持參なし、再び歸城いたしてくりやれ。

源藏　すりや私に伊豆守樣の陣所へ行けとおつしやりまするか、それは造作もござりませぬ、承知いたしてござりまする。

大助　あいや父上、して伯父君へお贈り遊ばす一品ありと仰せらるゝは、如何なる品にござりまする。

幸村　おゝ、それぞ卽ち此箱なるぞ。

大助　やゝ、こりやこれ、當家の祖先より家に傳はるその御旗、何故あつて伯父君へ。

幸村　いかにも御旗を箱のまゝ兄信之が悴なる甥河內守へ、我が記念に贈り遺はす所存なるぞ。

源藏　御世繼ならば知らぬこと、大助樣がおいでなさるに御緣の遠い甥御樣へ、記念にお贈り遊ばすとは一圓合點が參りませぬ。

幸村　おゝ其の不審尤も至極、それなる御旗も我が手にあらば遠からずして灰燼と、ならんをいたく惜しむゆゑ。

兩人　何と仰せある。

幸村　往古よりして敵に圍まれ運盡きて一城の主人が討死なす時は、家に傳はる重器は更なり、古き

を溫ね新しきを知る引書にもなるべき記錄を、運ぶ由もなく煙りとなし、或は雜兵が分捕に空しく烏有に屬せしこと亂れし世にはまゝある習ひ、それがしこれらを憂ふれば假令一家の寶にして世に益少なき品たりとも、代々傳はるそれなる御旗、せめて一家の兄が悴河內守へ讓りなば、長く保存もいたさんかと思へば、今日伊豆守が陣所へ送り遣はさんと、只今源藏に申附けしぞ、方今天下の人々は勇には敏き性なれど文を好まぬ粗暴の振舞屢々ありし其中に、織田右府公を弑したる明智が一族左馬之助俊光ばかりは優にやさしく、坂本落城のその砌り家に傳はる重器の類ひを寄手の大將堀久太郞秀政へ贈り遣す、天晴智略の美名は今に顯然たり、さらば幸村光俊の例に習ひて、一家ながら敵へ御旗を讓るのも、是れ皆重器を惜しむが故なり。

大助 はゝ、文武に敏き父上の殘る方なき思召し、それがし感心いたしました。其方參らば伯父上にも又河內殿へも大助より、よしなに申せしと傳へくりやれ。

源藏 畏りましてござりまする。左樣なれば御前樣、お屆け申すでござりませう。

幸村 おゝ、大儀なるぞ。

源藏 はツ、どりや急いで行つて參りませう。（卜源藏箱を持つて花道へはひる。）

大助 そりや父上には討死と、お覺悟遊ばす上は、この大助も諸共に出陣がいたしたうござります。

幸村　いや、其の覺悟はあつぱれなれど、其方はこれより直に君の御前へ伺候なし、お側を去らず警護いたせ。

大助　なに、それがしに出仕せよとは。

幸村　かねてそちも知つての通り、君の御前を放れざる木村重成を始めとして、後藤、速見、薄田なんぞも必ず明日討死すべし、されば御先途見屆くべきお側に英雄あらざれば、若年ながら我が悴この幸村に成り替り、お側を去らず殉死なし、冥土のお供いたしてくりやれ。

大助　拙者が望みは父上と共に討死いたしたけれど、仰せを背くは不孝ゆゑ、如何にも是れより出仕なし、君の御先途見屆けまするでござりませう。

幸村　おゝ、それにて父も安堵せり、少しも早く登城いたせ。

大助　左樣なれば、父上樣。（ト名殘を惜しむ思入。）

幸村　おゝ、早く參れ。

大助　然らば、御免下さりませう。（ト大助奥へはひる。爰へ軍卒菖蒲酒の瓶子を持出で、）

○　はツ、申上げます、只今端午のお祝ひとして、

□　御本城より、是れなる粽と菖蒲酒を、

兩人　下されましてござりまする。

幸村　おゝそれは千萬忝ない、君より賜はる品なれば頂戴いたす、それまでは門出を祝す菖蒲酒、幸ひ一間に飾り置きたる具足へその儘供へてよからう。

兩人　畏つてござりまする。（ト是れにて障子を引き、鎧兜の前へ供へる。）

幸村　取分け端午は男子の節句、邪氣を拂ふの菖蒲酒、けふは一獻過すであらう。こりや土器をこれへ持て。

ト是れにて土器を幸村の前へ直しはひる、幸村懐中より袱紗に包みし繪圖を出し、開き見て居る、後藤基次出で花道にて、

基次　きのふまでも砲聲矢叫び耳に貫く街なりしも、それに引替へ今日は休戰ゆゑに陣所々々、幟や旗は立てあれど、兜鎧は脱ぎ捨てゝ床に飾りて神酒を供へ、打ちくつろいで酒宴をなすは、誠に端午の節句のやう、はて勇ましき事ぢやなあ。案内申す、賴まう〳〵。

幸村　案内とは、誰人なるぞ。

基次　後藤又兵衛基次でござる。

幸村　なに、後藤氏とな。幸村それに罷り在れば、御遠慮召されず、これへお通りなされたがよい。

基次 おゝ、眞田氏には御在陣召されたか、然らば許しめされ。

幸村 こは珍らしや基次殿、互ひに一ツ城内に居住いたせど軍事に暇なく、暫く面會いたさゞりしが、先は御健勝の體を拜し祝着に存ずる、何は扨おき後藤殿には、何れへお越しなされしぞ。

基次 いや何れへも參らぬが、今日は端午の節句ゆゑ、祝詞を兼ねて我君の御機嫌を伺はんと、先刻登城いたしてござる。

幸村 それはようこそ御登營ありしぞ、拙者も今朝出仕なし、御機嫌伺はんと存ぜしかども取紛れ、只今悴を名代に御前へ伺候いたさせしが、して、秀賴公にはお障りなく、御健勝にて渡らせたまふか。

基次 仰せの如く我君にはお替りなさる事はなけれど、今般手詰めの戰ゆゑ御心勞を遊ばすものから、自づと御顏色常ならず見上ぐるさへも涙の種、煩はしくも其許へ申傳へてくれよとある、上意を逐一お話し申さん。かねて貴殿も知らるゝ如く、君側を放れぬ大野父子關東よりの内命うけしか、やゝともすると和議を調へ戰を中止いたせとある、彼の佞辯に君を諫め、又は諸侯を煽動なし臆病風に取附かれしか、人もなげなる大野が振舞、なれども彼れが佞奸を君には悟りたまひしか、今日となり我が力と、賴むは眞田幸村一人、予が生死を任すとある御懇の上意、何事もよしなに

頼みくれるやう申し傳へよと、くれ〴〵の仰せでござるぞ。

幸村　はゝ、忝なきその御上意、御身も我も父殿下の御在世よりの高恩ならず、たゞ義によつてのお味方なれど、御いたはしや秀吉公御取立の大小名、過半は君の御恩を忘れ、旗色のよき徳川へ隨身なして剰へ、敵たひいたす不忠不義、憎みても猶餘りあれど、これ皆浮薄な人情に推移りたる時節到來、それに附けてもそれがしは、晝夜寢食を忘れ肺肝を碎きて防戰の計策を巡らせど、所詮勝利は思ひも寄らず、然し武門の意地なれば假令一日半時なりと、關東勢を惱まして一泡ふかせてくれんずと、貴殿がお出でなき前方、これなる畫圖を繰廣げ、地理を計り居つたるところ。

基次　こは津の國一ヶ國を巨細に記せし稀代の畫圖面。ふむ、如何いたして貴殿には、是れなる畫圖を所持ありしぞ。

幸村　その御疑ひ御尤も、此の畫圖面は在來りの世上に流布なすものにあらず、それがし未だ入城をなさゞる以前姿をやつし、此の攝津の國を殘る隈なく經歴なし、當地を寫せし我が丹精、地理の掛引兵の配分、貴殿も篤と熟覽召され。

基次　殊に孫子が祕書にも勝る又と得がたき實地の畫圖、拙者も拜見いたすでござらう。

幸村　御覽の如く大阪は千筋の川に水脈續き、安治川を經て海に入り船の通路は便なれど、土地は等し

く平坦にて兵を配るに便りなし。

基次　當城よりは東南なる四天王寺國府村毘沙門ヶ池をさぐりて、内府が陣所茶臼山の通路をさゝへ防ぎなば、援兵なくとも勝利は得べし。

幸村　いや／＼それは難かるべし、合邦が辻今宮にはかねて伏勢ありと聞く、まつた千日、難波、木津なんどの民家を燒き拂ひ、砦を築くと聞き及べば、なか／＼以て攻め入りがたし。

基次　されば北へ兵を轉じ、淀川筋へ船を浮べ伏見の新手を喰止めなば、假令勝利は得難くとも敵の難戰疑ひなし。

幸村　それぞ却つて味方に利なく敵に便利を得せしむなり、それより拙者が思ふには、城外分置の兵を纏め一手となして三ッ井戸より敵の左翼を不意に襲ひ、是れなる道を斜めに行けば、茶臼山へ達すべし。

基次　して／＼後詰の掛引は。

幸村　されば一手は高麗橋より、天滿あたりに踏止まり、安治川を漕ぎ登る通船自在ならざるやう、砲擊なさば敵兵は直ちに算を亂すべし。

基次　はゝ流石は味方の大元帥、計策一々基次もほとんと感服いたしてござる。それに附いても幸村殿

かほど貴殿が御苦心あるを、佞人大野道犬父子には、舍兄の緣に其許には關東方へ心を寄する二股武士と蔑なす詞、御前ながらも聞捨てがたくそれがし利害を說き聞かせ、一言の下に言ひ伏せたるが、思へば憎き大野父子、かやうな奴が君側にあつてはいよ〳〵敗れの基、これが殘念至極でござる。

幸村　臆病未練の大野父子等が小量なる心では、左樣思ふも無理ならず、斯かる疑惑もあらんかと早くもそれがし思慮をめぐらし、先刻悴大助に君の警固申附け、入城させしは則ち人質、彼れ等が疑ひ解かんため。

基次　すりや御子息を入城させ君の警固なさるゝとか、殘る方なき其の御配慮、これにて身共も安堵いたした、して貴殿には只今の計策もしも行はれず、畫餠とならば其時こそ、生死二ツの御決心、如何なる御見込みでござるよな。

幸村　いや其儀も篤とそれがしは、最早決心いたせしが、して、又貴殿のお見込みは。

基次　手前もそれと決心せしが、忠義は同じ貴殿とそれがし。

幸村　一つ見込みに心底が、

基次　合ふか。

幸村　合はぬか、
基次　此場にて、
幸村　互ひに明かすこの心中。はて面白き、
兩人　事でござる。（ト是れにて幸村供へある瓶子を基次の前へ直し）
基次　酒は元より大好物、先づ其許よりお始めなされ。
幸村　幸ひ端午の節句なれば、君より賜はる菖蒲酒、先づ祝うて一献汲まん。
幸村　然らばお先へ御免下され。目出度く貴殿へ。（ト土器をさす。）
基次　頂戴いたさん。（ト基次うける。）
幸村　賴みある中の酒宴かな。（ト謠を謳ふ、基次思はず土器を落し、二つに割れる。）
基次　取落したる此の土器、
幸村　これぞ卽ち二人が心底、
基次　碎けて元の、
幸村　土となる身。
基次　扨は貴殿も、

幸村　して明日の合戰は、
基次　最早明日最期の一戰。
幸村　むゝ。（ト双方顏を見合せ、氣味合あるこな木の頭。）同意でござる。
ト此の模樣下座の鳴物にてよろしく、

ひやうし　幕

二幕目

城内詰の丸出陣の場

〔役名＝木村長門守重成、重成の母宮内の局、大江の局、長柄の局、水名瀨の局、生田の局、淺澤の局、三草の局、秀頼の母堂淀の方、侍女等。〕

（奧御殿庭先の場）＝本舞臺大阪城内、奧御殿庭先の體、爰に侍女一、二、三、四の四人居並び幕明く

一　今しがたお櫓で打つたのは、六ツのお太鼓かと存じましたら七ツであつたか、東がしらみ鳥が啼いて居ります る。

二　もう夜明けでござりませうが、けふは五月六日ゆゑ穩かな時節なら女子の節句の御祝日、嘸賑か

でござりませう。

三　けふは取分け大いくさがあるとの事にて淀樣にも、昨夜はろく／＼御寢ならず、夜明け前からお櫓へお局達がお供をして、

四　關東勢の押寄せしを御覽にお出で遊ばしましたが、まだ戰が始まらぬか掛り太鼓の音もせず、繰出す樣子はござりませぬ。

一　一番掛けの御注進がまだ見えませねば、もう一日お休みになればようござんす。

二　ほんに何より氣味の惡いは、地響きのする大筒の續け打ち。

三　一昨日も長局へ、外れ丸とやらが參りまして、お柱を打割りましたわ。

四　早う戰が鎭まつてお能の催しでもあるやうに、いたしたいものでござりまする。

一　あれ／＼、噂をすれば影とやら、淀樣がお櫓よりもうお歸りになりました。

二　左樣なれば私共も、

三　お庭先にてお出迎ひ、

四　致さうではござりませぬか。

一　そんなら皆さん、どりやお迎ひをば、

四人　しませうわいな。

　　　　ト花道より淀の方、大江、長柄、水名瀨、生田、淺澤、三草の局達出來り、舞臺に住ひ、

大江　淀樣にはお櫓より只今御覽遊ばす通り、まだ戰は始まりませねど雲霞の如き關東勢、大阪市中へ陣を張り、

長柄　此の城内を取卷いて今にも總勢攻入らば、なか〳〵以て勝つことならず今日一日が生死の境、こりや今のうち淀樣には、

大江　何とか御工夫遊ばさずば、憚りながらお手遲れにならうかと、

兩人　存じまする。

淀　そりやそち達が言はいでも、妾も安き心はなく家の浮沈と思へども、何をいふにも女子の身の上善惡ともに秀賴の仰せを待つて居るわいなう。（ト烏啼く。）はて心得ぬ、未だ夜明けには間もあるに、塒をはなれて啼く烏、軒端を去らず飛びかふは凶事の知らせか吉事の告げか、心掛りの事ではある。

大江　いえ〳〵何も其樣にお氣にお掛け遊ばしまするな、定めてあれは悅び烏、今日の戰に勝利を得る吉事の告げにござりませう。

長柄　ほんに此頃御城内の、陣所々々で焚きまする篝の光りが空へ映り、丁度夜明けのあかるさゆゑ、
　それに欺されてあのやうに、啼き連れるのでござりませう。
水瀨　多くの鳥の其中にも烏は日本の名鳥にて、朝日まばゆき元朝より初烏とて持囃され、
生川　歌俳諧の題にも用ひ、吉事を告ぐる鳥とやら、
淺澤　申せば何れも御勝利の、
三草　吉兆告ぐる明烏、
水瀨　再び開く我君樣、
大江　朝日の昇る御威勢を、告ぐるので、
皆々　ござりませうわいなあ。
淀　皆の者はさう言やれど、兎にも角にも悦びの音色にあらぬあの烏、心に掛るわいなう。
大江　えゝまあ、其樣なお氣の弱いこと御意遊ばしますな、左程お氣になりますなら、
長柄　私共が烏めを追散らして、
兩人　遣りませうわいな。（ト礫を烏にうつ、烏逃げ去る。）
水瀨　あれをば御覽遊ばしませ、今あなた方が烏をば、追はうとおつしやるばかりにて、忽ち飛んで參

りました。

大江　ほんに只今逃げ失せし烏は此の場のよい知らせ、是れぞ即ち憎まれもの〻烏に等しき關東方を、

長柄　遙か虛空へあの通り、追散らすといふよい辻占。

水瀨　御運の末も又いつか、再び開く味方の勝利、これぞ誠のよい知らせ、恐悅申し、

四人　上げまする。（ト奥より宮内の局出來り、）

宮内　淀樣には今朝より戰の樣子を御覽の爲めお櫓へお出での由承はりて私は、お留守を守り居りましたゆゑ、思はぬ遲刻をいたしました、して、未明より城外を取卷き居ります敵の動靜、親しく御覽遊ばしましたか。

淀　されば、昨日は端午にて一日休戰いたせしゆゑ、心も常より落附きしが今日は朝より總攻めに關東勢が押寄せると、大野修理より妾へ注進、聞いて心も心ならねば、せめて敵の樣子を見んと、これなる大江を始めとして腰元どもを召連れて櫓に登り見下せど、朝靄深く曉の雲におほはれ定かに見えねど數萬人の聲喧しく、追々大手の塀際へ繰出す樣子に見受けしが、これに附けても味方の勝利心許なう思ふわいなう。

宮内　仰せの通り一旦の和議も再び破れしからは、互ひの戰は運定め、申さば天下分目ゆゑ、只一擧に

して當城を陥れんと家康公自ら軍配取らるゝと、承はればこれさへも味方に取つての一大事殊に數萬の大敵を僅か五萬に足らざる兵にて、交戰なすは及ばぬこと、十が九ツ御當家の御勝利にはなるまじと、疾より察し居りますれば、恐れながら淀樣にも、最早お覺悟遊ばしますやう、願はしう存じまする。

淀　なに、妾に覺悟いたせと言やるか。

宮内　さ、其お覺悟を遊ばせと申上げるは外ならず、いで落城の其時はあなた樣にも御未練なく、御生害遊ばしませ。

淀　すりや、妾に生害せよと言やるのか。

宮内　御いたはしくは存じまするが、武家にかしづく女子のたしなみ、其時こそは此宮内が恐れながら御介錯を、いたす覺悟にござりまする。

淀　そりやいよ〳〵落城も今日に迫ると言やるのか、關東勢よりの命に隨ひ妾を人質同樣に徳川の手に渡しなば事平穩に納まりしを、血氣にはやる者どもが戰を好む心より、終に再び手切れとなり、今日につゞまる家の滅亡、思へば口惜しきことであつたわいなう。

大江　ほんにあなたの仰せの通り、今となつては六日の菖蒲、十日の菊になりましたが、いつぞや夫よ

りお諫め申せしその通り。
長柄　假令手おくれになつたとて、是れより德川殿へ使者を以て仰せを傳へ、あなた樣を人質に渡しましたら此儘に、
大江　仁を施す家康公、何でいなやを申しませう。
長柄　こりや御思案を遊ばして、今より和睦を結ぶやう、お計ひ遊ばしませ。
水瀨　いえ〳〵それは大江樣のお詞とも存じませぬ、假令お命全うして御存命遊ばすとも、名に負ふ君は名家の御末、
生田　和睦をなさば德川の、旗下へ附かねばなりませぬ。
淺澤　さうなる時は死にまさる、恥辱を受くる殘念さ。
三草　宮內殿の申さるゝ、御生害こそ私共も、
生田　共々お勸め申しますが、御恩報じのこれ一つ。
淺澤　こりや大江殿のお詞でも、默つて聞いては居られまいな。
水瀨　それともあなたお二人がお命惜しく思召さば、此の儘直に下城なし敵へ降參なさりませ、但し討死召さるゝか。

皆々　さあ〳〵。
大江　假令命を捨てるとも、一旦お諫め申したからは、
長柄　是非とも和睦を淀樣へ、お勸め申さにやならぬわいな。
生川　さうおつしやれば、是非に及ばぬ。（ト身構へする。）
淀　双方共に此の爭ひ、何れも我が身の爲を思ひ、言うてくれるは忝いが、只此上は生死の二ッは
妾に思ふ所存あれば、まあ〳〵暫く待つたがよいぞ。
水瀬　そりや此のお返事は、生死とも、
大江　御所存あるとの御意なれば、
長柄　今日につゞまる事ながら、
宮内　御意に背くも恐れあれば、是非なき事にござりまする。（ト花道より侍女出來り、）
侍女　はッ、申上げまする。
水瀬　あわたゞしい、何事でござりまするな。
侍女　只今木村長門守、宮内樣へ直々に、御面會がいたしたいと願ひ出でられましてござりまする。
宮内　思ひも寄らぬ悴の入來、何か火急の、（ト思入あつて、）我が預かりの詰の丸、男子はみだりに入る

事を禁ぜらるゝの掟あれば、私事には逢ひ難しと立歸るやう長門守に、申し傳へて下さりませ。

淀　あゝこりや宮內、外ならぬ長門が入來、親子なれば男子とて遠慮いたすに及ばねば、是れにて對面いたすがよいぞ。

宮內　冥加に餘るそのお詞有難うは存じまするが、假令眞身の忰なりとも、御條目を犯しましては。

淀　いやそれも妾が許せば、心置きなく此處へ。（ト大江、長柄それが幸ひだといふ思入。）

大江　苦しうない、是れへと申せ。

侍女　はッ。（トはひる。）

宮內　すりや奧向の掟なるを、早速お許し下さりまする段、有難く御禮申上げまする。

淀　外ならぬそちが願ひ、何の遠慮に及ばうや、殊に長門は久々にて母へ對面なすとあらば、定めて何か密事もあらん、妾は暫く退席いたせば、跡でゆつくり面會いたしたがよいぞ。

宮內　はあゝ。

大江　はてそれが勝手、いや勝手に面會いたせとある、淀樣の御意なれば、

水瀨　宮內殿には重成樣と、

生田　久々にてのお物語り。

水瀬　御ゆつくりと、
皆々　なされませいなあ。
淀　先づそれまでは奥殿にて、物見の注進待たうわいなう。
ト皆々奥へはひる。宮内殘り、これより淨瑠璃になり。
〽折柄こゝへ入來るは、甲冑出立ち勇ましく、威の絲も紫の裾濃き色の星兜、あたりを拂ふ若武者は、木村長門守重成、悠々として歩み來る。（ト重成花道より出來り）
重成　母人これにおはせしか、長門守重成でござります。
宮内　珍らしや悴重成、淀樣のお許しなれば、遠慮に及ばぬ、さゝ是れへ／＼。
重成　然らば御免下さりませう。
〽一禮なして重成は、兜片手に草鞋を解き、靜々として座に通り、
宮内　扨一別以來母上に御面會もいたさゞりしが、暫くお目見得いたさぬうち、御苦勞遊ばすゆゑなるか、御髮に見ゆるその白髮、お察し申し上げまする。
宮内　そちも達者で重疊々々、わらはとてもそちとても奥お表と隔つるのみ、一ツ御殿へ出仕の身の上明暮れ機嫌の善悪は人の便りに聞き及ぶが、親しく面會いたせしは最早一年あまりとなれば、殊

更母も懐かしく、そなたの無事な顔を見てどうやら安堵いたせしが、して今日母へ對面を、願ひし譯は如何なることか、少しも早う申し聞けよ。

重成　仰せの如くそれがしも同じ城中にありながら、御機嫌伺ふことさへも書翰の外には便りなく、君命重しと私の恩愛捨てゝ忠勤なせど、思ひに餘りし此度の兵亂、今日こそはと思ひしゆゑ、我が存念も打明し、名殘を惜しむ所存でござりまする。

宮内　そりや其方も今日こそ、最早落城と推察なし、母へ名殘を惜しむと言やるか。

重成　いかにも母上、わが存念の一通りお聞き下され。そも此度の戰ひは難題を申掛け、名もない戰に名を負はせ天下の爲と大阪の威勢を碎き枝葉を枯らし、太閤殿下取立の大小名に德川の威權を示す計策にて、只一通りの合戰ならねば追々味方討死なし、防戰なすの兵なければ今日こそは城外へ只一騎にて打つて出で、花々しく一戰なし名を後世に傳へんと、かねて決心いたしてござる。

〽放つ詞も潔く、覺悟の體に母親も、さてはと察し進み寄り。

宮内　天晴なるその心底、君のお爲に討つて出で一戰なしてその譽れを、後世武士の鑑となし、名を惜しむの心掛け母も感心いたせしが、そちも木村常陸が悴豐太閤の御恩を思はゞ、假令雜兵端武者たりとも敵一人も多く討ち、人に勝れし手柄をなし、父の家名を汚さぬやう、心掛けるが肝要な

るぞ。

重成　仰せまでも候はず、敵と目指すは德川御父子、所詮及ばぬ事ながら運強くして一方を、安々と切拔け行く手に支へる敵のあらざれば、茶臼山の陣所へ忍び、家康殿の白髮首うつて恨みを晴らさんと、それのみ心に忘れねど、こは容易のことにあらず、只運命を天に任せ再び歸城なしたる上にて目覺しき儀を母上へ、お話し申す所存にござりまする。

〽流石名殘と言兼ねて、包む心も母親に氣を落させじと重成が、歸城を約す詞の艶、母は扨はと思へども互ひに言はぬ胸の内、宮内の局はそれと悟り。

宮内　こりや重成、そちが今の詞では、烈しき戰場切拔けて、再び歸城すると言やるか。

重成　仰せの通り敵を討取り、再び戻りて母上に、お目に掛る所存でござりまする。

宮内　知らぬと思ふかこれ重成、肉身分けし此母に、なぜ其方は僞りいふぞ。

重成　何とおつしやる。

宮内　最前そちが來りし時、ぱつと薫りし名香は扨こそそなたは討死なす、かねての所存にありつるかと心を附けしに、名香薫りて黑髮に香を止めしは、其方今日晴れの戰場にて、討死いたす所存であらうが。

〽星を指したる一言に、重成はつと口籠る身の僞りにはゝはッと、母に見拔かれ、何と詞もなかりしが。

重成　流石は母上、それがしが兼ねて討死いたさんと、思ふ心の機密をば、よくぞ推量なされしぞ。

宮內　知らいでならうかそちが母、死する覺悟と聞く上は我が身も同じ心の割符、しつくり合しは武士が恩に報ゆる忠義の二字、よくも守つてくりやつたなう。

〽嬉しいぞやと母親が、膝に引寄せ重成が健氣を褒める肉身の、因みは深き海と山、高き惠みに重成も暫し淚に咽びしが、思ひ出すは主命に過ぎし和睦の物語り。

重成　既に昨年關東と和睦を結びし其折に、取替せたる誓約の血判、其見屆けにそれがしが君命うけて出張なし、德川殿が側近く臆する色なく進みしが、我は最早古稀に近く根氣も疎く血汐さへにじみて薄くと言はれしが、それぞ再び誓ひを破り又もや戰爭起さんと思ふ心のある故ならん、兎にも角にも大軍にて城內を取圍み、今日の一擧に滅亡させんと敵兵既に濠際まで迫ると聞けばそれがしも、花々しく擊つて出でんとかねて覺悟いたせしが、此儀包まず申上げなば定めて母上の御歎き如何あらんと存ぜしゆゑ、態と再び歸城なしお目通りをいたさんと、暫しも母を僞りし不孝の罪は幾重にも、お許しなされて下さりませ。

〽不孝の罪を詫び入れば、母は倅の健氣さに、落附く胸を撫でおろし。

宮内　何の〳〵その詫びに及ばうぞ、そも我が夫常陸殿は秀頼公のお守り役にて、御幼少より御側に勤め品行正しく行末は、御名將とも仰がれたまひ人の歸服が專一と、朝暮心を用ひしゆゑ父君の官位を襲ひ、一度二代の我君と天下を知ろし召されしが、其甲斐もなく御謀叛の企てありと父殿下の御不興うけて紀州の國高野山にて御謹愼、夫も君の御供せしが其後君は御いたましや死を賜ひたる悲しさに、常陸殿にも冥土の供奉と殉死なして果てられしが、その頃母はそなたを產み乳の餘りしが身の幸ひ、夫の罪を御赦免あつて秀頼公の乳母となり、今日までも宮内の局と長く御殿に勤めしは此身に餘る御尊慮、恐れ多き事ながらそちと君とは乳兄弟、假令所は替るとも、御生害の時刻を覺らば、天晴木村重成は殉死したりと人々に褒めらるゝやう討死するが、臣下の忠義と存ずれば愛ぞ御恩の送りどころ、必ず敵に後を見せず討死をしてたもいなう。

〽立派にいへど心には、これが別れとないじやくり、涙吞みこみ母親が、君の御恩に報いよと、我が子に諭す眞實心。

重成　はゝ有難き其のお諭し、いかで忘却仕らうや、たゞ此上は母人には淀殿の御先途見屆け、冥土のお供下さるべし。

宮内　それは少しも氣遣ひいたすな、御いたはしくも此母が、おすゝめ申さにや置かぬわいなう。

重成　その思召しを承はれば最早此世に餘念なし、それに附けても母人には先刻それとお察しありし我が着馴れたる此兜へ、拜領なせし蘭奢待を炷きこめ置きしも髻へ、薰りを止めん所存でござりまする。

〽着馴れし兜手に取りあげ、容を正し母の前、薰りをそれと親と子が傳ふ心は哀別の、歎きは胸にせき上ぐれど、熱き涙を一滴もこぼさぬ思ひ武士が、義心の切なき別れなり。

宮内　昔より名將多きその中に、吉野の帝へ勤王の志しを全うせし正成殿の一子たる、正行殿はまだ年若く、丁度そなたと似合の年頃。

重成　いかにも忠義は今の世まで傳へし程の豪傑ゆゑ、なか〳〵以て我などの及ぶ所にあらざれど、我が名の文字の成といふ訓は、卽ち正成のシゲに通へば離れぬ因緣。

宮内　その楠にたくらぶる幸村殿の敎へを受け、兵法學びしそちなれば、勤王ならねど我君へ盡す忠義は侉らじと、

重成　かね〴〵思へど梓弓、お年寄られし母上を跡に見なして死を急ぎ、

宮内　亡き數に入る人相の、鐘諸共に消えて行く、

重成　名をば止めん其場所は、

宮內　四條繩手にあらずして、

重成　不落と稱せし名城の、

宮內　奧と表と替れども、

重成　君のお供の死出三途、

宮內　あの世の道は諸共に、

重成　はやお別れと相成りしか、母上、

宮內　悴、思へば果敢なき、

兩人　身の上ぢやなあ。

〽これが別れと母親は我が子の顏を打守り、取附く膝にはら〳〵と落る淚も此世の名殘り、流石剛勇勝れたる重成なれど暫くは、前後不覺の悲しみに、わつとばかりに泣き沈む、折から聞ゆる金鼓の音、重成向ふをきつと見て、

重成　俄に聞ゆる貝鉦太鼓、はや合戰の知らせなるか。

宮內　名殘りは盡きぬ、片時も早く。

重成　母上おさらば。

〽さらば〳〵と重成は、身繕ひして立ちあがる、鎧の袖に母親が暫しと止むる恩愛も、はや戰場の金鼓の響き、かくては果てじと振拂ひ、縁より下へ飛び下りて向ふの方へ。

宮内　あこれ、忰。

重成　はツ。

宮内　冥土で逢ふぞよ。

重成　はツ。

〽はツとばかりに母の顏、見交すこなたも行く道を引戻さるゝ愛別に、又振返る重成が姿もこれが見納めと、宮内の局は延びあがり、これなう暫し重成と止むる詞も口の内、言ひ出しかねて招く手も、子故に迷ふ皐月闇、庭を傳うて、

ト双方別れを惜しむことよろしく、三重にて

幕

三幕目

城外眞田陣所の場
大和口平野川の場
追手口小松原の場

〔役名──眞田左衞門佐幸村、後藤又兵衞基次、逸見甲斐守、木村長門守重成、幸村の臣大塚慶藏、同青木清右衞門、西尾仁右衞門、兵糧方米四郎實は小栗丹作、幸村の臣、關東方の軍勢等。〕

（眞田出丸陣所の場）──本舞臺高二重上下落間、上手に人の登る松の木あり、總て城外眞田の出丸陣所の體。爰に米四郎兵糧方にて鑑札をさげ居る、これを幸村の臣六人取卷きゐる、どん〳〵にて幕明く。

米四　こりや、わしを何とさつしやります。
一　やあ何とするとは知れたこと、
二　最前よりして陣中を、
三　うろ〳〵いたす怪しき奴、
四　正しくわれは關東より、
五　この大阪へ入込み居る、

六　敵の間者に相違なし、
一　捕縛いたして、
皆々　詮議なさん。
米四　これは又とんだ疑ひ、怪しい者でないといふ證據は腰に提げたる、この鑑札が何より面晴れ、兵糧方へ雇はれました、人夫に相違ござりませぬ。
一　いゝや人夫に渡してある、
二　その鑑札を取調べ、
三　日毎に引換へ遣はせば、
四　汝が腰へ提げたるは、
五　證據にならぬ古鑑札、
六　それゆゑ詮議をいたすのだ。
米四　もうこの上は。（ト逃げに掛るを立廻り米四郎へ繩をかける。此時後より清右衛門出來り）
清右　かしましい、何事なるぞ。
一　只今出丸の陣中へ、

二　敵の間者が姿をやつし、
三　入込みましてござりますゆゑ、
四　我々共が引捕へ、
五　詮議いたして君前へ、
六　引立てまする所でござる。
清右　そやつの面體改めくれん。
一　間者め、面を上げい。（ト米四郎顔を上げる。）
清右　何樣姿は下賤なれど一癖ありげな面體、して、其方は關東にて何れの家來で、如何なる奴か、有體に白狀いたせ。
米四　いや間者などゝ、左樣な者ではござりませぬ、私事は兵庫坂の水呑百姓でござりますが、元より身貧な暮しの上に、昨年からの戰爭に植附さへも出來ませねば、命の危い戰場へ人夫に雇はれ參りまして、日雇を取るも慾と道連れ、兵糧方の陣所から受取る錢がござりますから、二三日病氣で在所へ參り今方歸つて參りましたから、古鑑札は提げては居れど怪しい者ではござりませぬ。お見受け申せば幕の御紋が六文錢でござりますから、御勘定方と思ひまして、うろ〳〵いたして

居りました。

清右　いや／＼さうは抜けさせぬ、只今あれより見受けしところ、是れなる多勢を相手になし、脱けつ潜りつ逃げ廻り、なか／＼匹夫なりとは言はせて置かぬ、誠を白狀いたしてしまへ。

米四　如何やうにおつしやつても、間者などではござりませぬ。

一　やあ、飽くまで言張るのぶとい奴め。

清右　こりや尋常では白狀せまい、それ、彼奴めを拷問いたせ。

六人　心得ました、さあ申上げろ／＼。（ト打ちすゑる。清右衞門懷中へ目を附け、）

清右　見ればそやつは懷中に、何やら所持をいたす樣子、それ懷中を改めい。

六人　心得ました。（ト米四郎の懷中より短筒を出し、）

一　扨こそ斯樣な飛び道具が。

米四　南無三、それを。（ト米四郎立掛るを引きすゑ、短筒を取り清右衞門の前へ出す。）

清右　これぞ噂に聞き及ぶ、南蠻國より渡來の銃器。

二　かやうな品を所持なせば、

三　いよ／＼われは怪しい奴、

四　のがれぬ所とあきらめて、
五　包み隠さず有體に、
六　これにて白狀してしまへ。
米四　もう斯うなつたら是非がない、如何にも我れは關東の內命うけて此の出丸へ入込む敵の廻し者だ。
清右　然らばこれなる短筒にて、主人を打ちに忍び入りしか。
米四　如何にも眞田幸村を只一擊と忍び入り、出馬の時刻を計つたも、百萬からの大軍が大阪城を取圍み、去年の冬から攻め立つれど、只戰爭の度每に味方の兵を減らすのみ、容易に落城いたさねば眞田の陣所へ忍び入り、彼れを覘つて飛道具で首尾よく討取るものはなきかと、鐵砲組へ御沙汰ゆゑ空飛ぶ鳥も一打に、覘ひ違はず打つが自慢の我が手練、多勢の中からたつた一人選り出された身の出世、まんまと首尾よく仕果せれば槍一筋の主となる一足飛びの立身と、その種ケ島を懷中なし昨夜のうちに此陣所へ忍び込んだが幸村の、寐てゐる場所が知れぬゆゑ、是非なく今朝まで期を延し、出馬を待つて居たのだが、斯う見出された上からは決して未練は言はぬから、一打にして下せえ。
一　いや、天下無双と呼ばれたる、我が御主君を一擊に、

二　致さうなどゝはのぶとい奴、幸ひ今日は敵方を、
三　皆殺しになす前祝ひ、弄り殺しにいたしてくれん。
淸右　あいや暫く待ちやれ、のがれぬ所と觀念なし白狀せしは健氣な奴、身共がそッ首落してくれん。
一　すりや此奴を靑木氏が、
淸右　武士の情に討取りくれん。
米四　それは何より忝けなし、いざすつぱりとお遣り下さい。
淸右　どれ、息の根を止めてくれん。（ト此時上手にて、）
幸村　待て〳〵。（ト幸村へ士卒二人附添ひ出る。）
淸右　君を討たんと陣中へ忍び入つたるこれなる曲者、首を打たんといたせしを、何故お止めなされました。
幸村　されば斯くいふ幸村を覘ひ討てよと言附けし、その者にこそ罪あれども、彼れには罪のあらざるなり、まつた彼れめが幸村を討たんとせしは慾情のみ、恨みを含む謂れなし、小者ながらも一命に替へて敵地へ忍び入り、我れを討たんと覘ひしは末頼もしき心底なり、命替りに銃器を取上げその儘許し遣はすべし。

清右　いや仰せではござりますれど、敵の枝葉は根を斷つて葉を枯らせよと故哲の名言、小者たりとも油斷大敵、篤と御賢慮遊ばされ、然るべきかと存じられます。

幸村　いや〳〵左程に心を勞する手ごはき者とも見えざる奴、たとひ一命助けしとて味方の害にならざれば、一命斷つは無益なり、其儘許し遣はすべし。

米四　いや、幸村殿は凡人の及ばぬ器量と聞きましたが、今といふ今思ひ當り驚き入つた御賢察、仰せの如く城方を遺恨に思ふ者でもなく、鐵砲組の足輕からやう〳〵經上る侍分、慾に目がくれ大阪の大元帥と呼ばれたるお方を覘つて討たうなどゝ、思ひ込んだは盲蛇物に怯ぢざる性分も今日からしては怖氣がつき、決して手出しはしませぬから、助かるものなら助けて下せえ。

幸村　縛解いて助け遣はせ。

六人　はツ。（ト米四郎の繩を解き、）

清右　既にその首刎ねんとせし九死をのがれ一生を、得たるは正に御主君の厚き惠みによるところ、お禮を申して早く立て。

米四　いや、命拾ひをいたした代りに、それなる小筒と彈藥は御禮にそちらへ差上げます、これに軍中早附木も彈丸も一式ござります、取りも直さず此品は命の敵でござります。

幸村　その品これへ。

清右　はッ。(ト短筒を幸村の前へ出す。)

幸村　これぞ永祿天正の頃南蠻國より渡來せし、我が日の本に稀なる銃器、彈藥共に預かり置かん。そ奴を追放いたせ。

六人　はッ、きり／＼立たう。

米四　敵も味方も賞讃なし、世の人望を得る人は又行き方の違つたもの、敵の間者を助けるにも覘つた罪を鐵砲に、見做した所が面白い、これでなければ名將と、人に賞美はされぬわえ。

一　やあ、きり／＼と歩み居らぬか。

米四　ほい、後で聞いて居つたか。(ト米四郎士卒六人ついて花道へはひる。)

清右　何は格別今日は、總攻めなりと承はれば、防禦の備へも一方ならず、手配りいたすでござりませう。

幸村　その儀に附いて幸村が、汝に頼む用事あり、其方どもは遠慮いたせ。

士卒二人　はッ。(ト附添の士卒二人上手へはひる。)

清右　して、拙者めにお頼みとは、如何なる御用にござります。

幸村　清右衛門近う、頼みといふは別儀にあらず、かねてそちには我が底意を申合せて置きたる如く、秀頼公を守護なす爲め忰大助を入城さすると昨日御殿へ遣はせしは、佞奸邪智の大野等が疑惑の念を避けんが爲め、然るに今日未明より平場の陣所へ出張なす、木村後藤が我が出丸へ參りし樣子を見るところ、着せし兜に蘭奢を焚きこめ忍びの緒まで切りたるは、戰死の覺悟と覺えたり、元より我も今日は寄手の大軍總攻めと、昨夜知らせを聞きしより討死いたす所存。薄田、塙を始め頼みに思ふ勇將は我に續いて討死なさん、さある時には城内でもかねて約せし儀もあれば、近臣逸見甲斐殿が秀頼公へ自殺を勸め、附添ふ小姓も切腹なし殉死いたして相果てなん、その節忰大助儀も秀頼公の御供なし、切腹いたし相果てよと申附けては置きしかど、何を申すも若年ゆゑなまじ其場で死を延はり、未練な最期をなす時は末代まで御家の瑕瑾、泉下に於て幸村が臍を噛むとも甲斐あるまじ、それゆゑ汝は只今より入城なして忰に附添ひ、その期に至らば大助に自殺をすゝめ潔よく介錯なしてくれよ、それが一ツの頼みなるぞ。

清右　そは拙者めに折入つて事を分けたるお頼みながら、御幼少より若殿の衆に越えたる御秀才は、お側に居つて存じ居れば御未練などは思ひも寄らず、拙者がお勸め申さぬとて御自殺あるに相違なし、今日殿が御討死とお覺悟ありし上からは、大助樣の御介錯は餘人に仰せ附けられて、拙者は

何卒戰場にて、殉死をお許し下されませ。

幸村　いや〳〵、それは許し難し、恩愛に溺れると定めてそちは思ふであらうが、我が戰死の供をいたすは其方のみに限らぬこと、倅が末期の介錯は汝に限る役目ゆゑ、それ故そちは入城してくりやれ。

清右　いえ、何樣に仰せあるとも所謂腰拔役、老後の思ひ出拙者めはお供いたして潔く、殉死がしたうござります。

幸村　すりや、何程に賴んでも、そちは承引いたしくれぬか。

清右　かやう申せば拙者めが、主君に背くやうなれど、疊の上にて果てまするは勇士の常に好まぬ所、何卒不便と思し召され、お供にお連れ下さるやう、偏に願ひ上げまする。

幸村　いやそれゆゑに否むのを、無理に賴むは我が不覺、然らば餘人に申附けんが、父とはいへど壯年より我れは軍務に心を委ね、倅の世話も屆かざりしが、そちは當家の譜代にて倅を愛しくれたるゆゑ、小兒の折よりそちに馴染、いつぞや信濃を退城なし紀州に閑居いたす節も汝を慕ひし倅なれば、嘸や末期の際までも逢度く思ひ居りつらん、武門の家に生れ來て倅の愛に溺るゝは近頃女女しき事ながら、遙々逢ひに參つたる母に對面いたすさへ、許さぬ程の幸村が一世の賴み、清右

衞門、情があらば聞濟みくりやれ。

清右　こは勿體なきそのお賴み、仰せの如く若樣は御幼少より此のぢいが、お抱き申してお馴染深く、ぢいよく〳〵と身に餘る有難涙にかきくれて御介錯いたす手も慄へ、辛き思ひと存じまして飽くまで御辭退申せしが、一世のお賴みと仰せあれば是非に及ばずお賴みを、承引いたすでございませう。

幸村　すりや、我が賴みを承引なし、入城いたしてくれるとか。

清右　是非に及ばず若殿のお側へ參るでござります、思へばこれが御主君に今生にてのお暇乞。

幸村　そちも堅固と申したいが、やがて冥府で出逢ふ身に、

清右　三世の御緣盡きざれば、あの世に於て又候や、

幸村　深き因みを結ぶであらう。

清右　然らばこれにて我君樣。

幸村　忰の介錯賴み置くぞ。

清右　承知いたしてござります。（ト清右衞門花道へはひる。直に軍卒一人出來り）

軍卒　はッ、御主君へ申上げます、只今陣所へ御城内より逸見甲斐守樣御入來に相成り、御面會の儀を

願はれますが、如何取り計らひませう。

幸村　そは城内に何事か凶事ありしと覺えたり、直にこれへお通し申せ。

軍卒　はッ。（ト引返してはひる。爰へ大塚慶藏出來り、）

慶藏　君命により青木氏の在所を尋ね居つたる所、只今我君お出逢遊ばし御用の次第も整ふ上は、何卒拙者をお討死のお供にお連れ下さりませ。

幸村　只今これへ城内より逸見氏が參らるゝは、心得難き事どもゆゑ、仔細を尋ねし其上にて汝に申す一儀あり、次へ參つて控へ居よ。

慶藏　委細承知仕りました。（トこれより淨瑠璃になり、）

〽案内に連れて陣中へ入來る逸見甲斐守、出陣近き幸村も床几を設け出迎へ、

ト甲斐守花道より出來り、

幸村　これは〳〵逸見氏、思ひ掛けなき此の御入來、無禮はお互ひ、床几へお掛け下され。

甲斐　然らば御免下され。

〽然らば御免と甲斐守、悠々として座に附けば、幸村は威儀を正し。

幸村　して御入來の趣きは、如何なる仔細か心得ず、早速仰せ聞かせられい。

甲斐　今朝未明に城内より、木村長門守が出陣いたす樣子を見屆け、我れに告げたる者ありて逐一承知仕るに、何れも兜に蘭奢を焚き込め忍びの緒を切り出陣せしは、はや今日の戰ひに平野へ出て討死なす覺悟と見えて詰の丸の、宮内の局へ暇を告げ出陣せしと聞き及び、我れも今日討死なさんと存ぜしに、長門守に出し拔かれ殘念なりと思ふ折柄、眞田氏にも今日は早討死の御覺悟なりと再び告げ來る者ありて驚き入りし我が不念、斯かる御覺悟なきうちに貴殿へ密意を申入れ、お含み願ひ置かざるが不覺の至りと存ぜしゆゑ、馬上でこれへ驅附けしが未だ出張あらざりしは、未だ武運に盡きざるところ、御討死の儀は思ひ止まり下さるべし。

幸村　すりや、それゆゑにそこ許には御入來ありしとか。そも舊年の初冬より又今年の夏に至り關東勢を再び引受け、これまで防禦いたせしかど名に負ふ扶桑六十餘州、敵となしたる戰爭ゆゑ所詮籠城なし難く、はや今日が總攻めと昨夜相知れ候上は、死を極め各武運を天に任せ戰ふの外あらざれば、木村を始め手前まで死すると覺悟を極めてござる。

甲斐　御尤もなる其お覺悟、昨年よりして今年まで數度の御防禦にその許が毎度勝利を得られしも、敵はます／＼大軍にて新手を入替へ攻め寄すれば、如何なる軍慮の其許でも百計盡きて一計をも施す甲斐はござるまいが、爰に一つの策あるは聊か貴殿にそれがしの面差似たるを幸ひに、その甲冑

を申受け今日平野の戰場に幸村なりと名乘り出で、それがし討死いたしなば、攻めずして落城なさんと敵方にも圍みを開く色見えん、其虚をはかつて一方の血路をのがれ其許には、秀頼公のお供をなし九州薩摩を志し竊に落ち延び下さらば、仁義を守る島津殿かくまひくるゝに疑ひなし幸ひなるかなそれがしが兵庫の湊に船積を業となす緣者あれば、彼方へ頼みの一封を認め送り申しなば船路の手支へよもあるまじ、短才淺智のそれがしが軍慮に富みたる其許にかやうな機密を申し入るゝも近頃粗忽の至りながら、兎にも角にも豐臣殿下の御家を此儘に、滅亡さするが遺憾ゆゑ、存意の程を申し延べお頼み申す此の一儀、御批判いかに承はりたし。

幸村　いや其賢慮天晴ながら、最早手前の影武者も數度に及び、其計策を施したりとも甲斐なからん。

甲斐　すりや、其甲斐がござらぬとな。

幸村　然れば城中一和なし居城を守る戰爭なれば、殿下の舊恩を蒙りし諸侯は勿論西國は、民家の者に至るまで力を盡す儀もあらんが、恐れ入つたる事ながら心よからぬ大野等を淀殿深く愛したまひ、忠義を盡す者共の諫めをお用ひなされねば、舊年よりして今日まで僅か半年たゝざれど、秀頼公の御人望今は大いに失へば、天下の諸侯を始めとして下萬民に至るまで、皆關東の德に泥み旣に城地の八方は敵國となる世の形勢、それゆゑ兵庫の湊まで僅か十里の行程ながら容易に落ち延び

行き難し、途中に於て取圍まれ、空しく御最期ある時は、泉下にまします殿下にまで滅後の恥辱を與ふる道理、爰に至つて滅亡の時來りしはこれ天命、誠に是非なき次第ゆゑ既に同盟英士の者共今日こそは討死と覺悟を決し候なり、斯くまで貴殿が肺肝をお碎きありし一計を施さゞるも不本意ながら、最早その機を失ひ居れば思ひ止まり下されて、かねて御依賴申せし如く主君の御守護をなし下され、我々今日討死せしと御城内にてお聞きあらば、秀賴公に御覺悟を何卒おすゝめ下さるやう、それのみ願ひ奉る。

〽天命歸する今日と、未然を察す武士が諭しの詞に、甲斐守も思案を極め。

甲斐　はて是非もなき其お諭し、貴殿が左程まで御決心ある上は、愚昧の拙者が遮つて拙き策をめぐらすとも、など圖に當り申すべき、思ひ止まるの外はなし。

幸村　只この上は御未練なく、流石は殿下の御胤なりと末世の鑑に相成るやう、潔き死をお側にて何卒お勸め下されたし。

甲斐　其儀は承知いたしてござる、其期に臨み佞臣たる大野父子等が臆病に未練なことを申さうとも、一期の大事遠慮なく妨げなさば切捨ても、秀賴公には潔き御生害をおさせ申せば、其儀は御安意下さるべし。

幸村　就ては愚息大助儀も冥府の御供いたすやう、先刻家臣清右衞門に介錯の儀を申附け入城いたさせ候へども、彼れは忰に馴染深く愛に溺るゝ事あらば一期の瑕瑾この上なし、それらの邊もそこ許の御配慮願ひ奉る。

甲斐　いや其儀は決してお案じあるな、御若年にはござれども大人も及ばぬ御令息、十六歳を一期となしあの世のお供をさするかと、席に列なる面々が數萬の敵を前に受け勇氣滿々たる氣も撓み、いつか愁ひに打濕り落涙いたさぬものもなく、他人ですらもまッその如く、肉身分けし其許がお聞きあつたら嘸かしと、手前も感涙流してござる。

幸村　扨は忰は我君へ、天下の治亂心學のお話しなどを申し上げましたか。

甲斐　如何にも我君を慰めまする者とては只の一人もあらざりしに、大助殿には其御器量の凡ならず、最早昨日今生の名殘りもいたし參りし上は、別に用事はござらぬと、涙一滴こぼさゞる實に天晴なる御令息、手前も舌を卷いてござる。

幸村　すりや、其許に忰めが立派なお答へいたせしとか、誠に以て悅ばしゝ、よくぞ觀念いたせしぞ。それと申すも淀殿が大野を重く用ひたまひ、忠臣無二の市之正を退城させしは、今日申して詮なき事、多くは最期の際に臨み臆病未練の大野父子、自殺を止め申さんがそれを拒むは木村の母、

宮内の局が淀殿へ附添ひ居れば、お側より最期を勸め奉らん、若し大野等が妨げなし、未練の御樣子相見えなば、何卒城内詰の丸へ放火召されて下さるべし。

甲斐　其儀も委細承知いたすが、返す〴〵も海外まで威を轟かせし豐臣の權を其儘關東へ奪ひながら、我々が其恨みをも報ぜずして生害なすが殘念なり、死して冥府の鬼となつても、やがて恨みを晴らさでおかうか。

幸村　ほゝ左程に思ふ御心中承はつて幸村が、末期に施す一計を示し置かぬも不本意なり、今ぞ祕密をお明し申さん。

甲斐　なに、御末期に一計あるとは。

幸村　臣下の者へ漏らさぬ機密。

甲斐　して、其密意と仰せあるは。

ト幸村軍扇にて書いて見せる、此以前よきほどに松の木へ米四郎登り窺ひ居る、幸村手早く短筒へ火をうつし米四郎を擊留める、米四郎松の木より飛び下り血を吐き苦しむ。

甲斐　此者は。

幸村　機密を探る敵の間者、(ト此の時遠寄せを打込む)はや出陣の巳の上刻。

甲斐　然らば手前は城内へ。
幸村　我は是れより戰場へ。
甲斐　おさらば。
幸村　さらば。
〽出て行く勇者、殘る義者、修羅の街も焦熱の、苦戰と覺ゆる兩人が惜しき名殘りぞ。
　トよろしく三重にて道具廻る。

（大和口小松原の場）――本舞臺平舞臺、總て大和口小松原の體、どん〳〵にて道具納まる、と直ぐに淨瑠璃になり、
〽ゆゝしける敵も味方も入亂れ、討ちつうたれつ討死も手負も人の大和口、血に染む槍を突立て突立て、荒れにあれたる木村重成。
　ト此の淨瑠璃にて上手より關東方大勢逃げ出來り、これを重成追て出來り、ちよつと立廻つて大勢を花道へ追ひ込む。
重成　敵は朝日の昇るが如く勢ひ鋭き關東勢、味方は武運傾きしか死を決したる大阪方、我れも數ケ所

の手疵を負ひ進退自由ならざれば、早運命も是れまでなり。いで、花々しく最期を遂げん。

〽最期を死出の山ならで、落來る清水に重成が、咽喉を潤すこなたより、槍引提げて關東勢、
不意を討たんと突つかくれば。

ト爰へ關東勢○△□◎の四人槍を持つて出來り、重成に突いてかゝる。

やあ名乘りも掛けず後より、槍を附けるは卑怯至極。

○　おゝ、名を聞きたくば名乘り聞かせん、我々共は大手口の持場を固むる先手の將、庵原助右衞門厚連、

□　其山仁平太友成、

△　深井杢四郎照遠、

◎　中窪兵衞延好、

○　汝も名乘つて勝負なせ。

重成　よくぞ其名を名乘りしよな、斯くいふ我は豐臣の譜代の臣に隱れなき、木村長門守重成なるわ。

○　壯年ながら敵方の大將分と認めしが、

□　扨は大手の大將たる、長門守にてありしよな。

△敵に取つては不足なき、望むところのよき相手。

◎地の理も平野の小松原、いでや是れにて勝負なさん。

〽いざと四人が繰出す穂先鋭く血の雨も、卯の花下しはら〳〵、流しつ受けつ虚々實々。

ト立廻り十分あつて〇△手を負ひどうとなる、□◎重成を追つて花道へ行く、

〽四方を見渡しにつこと笑み、

重成　名ある相手を四人まで、此期に及び切り伏せしは末期の思ひ出心地よし、いで潔よく最期を遂げん。

〽小楯の松へ切附けし太刀を取らんとなす後より、よろほひ〳〵組付く手負、此奴も共にと振り解けば、死物狂ひの羽がひじめ、もうこれまでと折槍を咽喉へぐつと突立て。

ト此以前手負〇△起き上り重成に掛る、重成槍の折を取つて咽喉へ突き立てるが道具替りの知せ、

〽清き覺悟ぞ。（ト三重どんちやんにて道具廻る。）

（城外平野川の場）――本舞臺平舞臺、大阪城外大和口平野川の體、どんちやんにて道具納まる。と花道より關東方六人逃げて出來る、跡より後藤基次六人を追つて出來り立廻りあつて、

一　關東方の總攻めに、防禦の手當も成りかねしか、
二　平野へ出張りの小勢にて、四方を取卷く大軍へ、
三　恐れげもなく備へを立て、當る必死の猪武者、
四　鋒を交へても追々に、名ある奴ばら討死なし、
五　今は鎗のおどしも切れ、猪首に着なす鍬形も、
六　首も廻らぬ所から、打つて出でたる大將分、
一　そも先づわれは何奴なるぞ。
基次　おゝ、聞き度くば名乘つて聞かせん、城方七手の大將にさる者ありと呼ばれたる、後藤又兵衛基次なるわ、汝等如き木の葉武者たとひ何萬取卷くとも物の數とも思はぬが、茂る青葉に血の雨を降らす時節か五月雨に、啼く音血を吐く鳥の名の時に取りたる名殘りさへ、天下分目の晴軍、いでや勝負をいたしてくれん。（ト基次六人を相手によろしく立廻り、爰へ關東方十人出來り、）
大勢　いづれも加勢いたすでござらう。
基次　左いふわいらは撫で切りだぞ。
ト立廻り基次大勢を切倒し、無手の立廻りなどよろしくあつて、此の時本鐵砲をつゞいて二發放して

基次うたれし思入にてどうとなり、爰へ下手より關東勢四人鐵砲を持ち出來り、此の體を見て、

四人 いでや首級を、討取りくれん。

ト關東方側へ寄らうとする、基次立身のまゝ馬手差を拔き、我が手に首へ掛け尻邊にどうとなるを木の頭、基次件の白刃を引廻す見得にて、

幕

四幕目

城中奧御殿の場

同表御殿の場

同表詰所の場

〔役名――宮内の局、武田左太夫、青木清右衛門、右大臣秀頼、幸村悴大助、大江の局、長柄の局、小姓高田三之助、逸見甲斐守、加藤彌平治。秀頼母淀の方、水無瀨の局、生田の局、淺澤の局、三草の局、侍女春雨、同夏草、同秋雨、同冬野、小姓等。〕

(城内詰の丸の場)――本舞臺平舞臺、正面銀地に上品なる模樣の唐紙、上手書院窓のある屋體、下手廊下の心、奧殿の中遠見、大欄間をおろし舞臺花道とも一面に高麗緣の薄緣を敷詰め、下手上手杉戸

と羽川、大阪城内詰の丸の體、爰に大江の局、長柄の局、水無瀨の局、生田の局、淺澤の局、三草の局、其外侍女居並び、琴唄に法螺の音を冠せてよろしく幕明く。と大江の局こなしあつて、

大江　これ長柄殿、今方お表へ德川家から上使が來たが、趣意をお聞きなされたか。

長柄　いえ〳〵それは聞きませぬが、如何なる譯かお聞かせなされて下さりませ。

大江　今お奧へお表からお屆けのあつたを、お襖越しに聞きましたが、趣意といへば戰爭を長くすれば人命がすたるゆゑ、和睦して此お城を明渡し淀の方樣を關東へ、人質代りにお下し申せば、大和の國一ヶ國を御領地として秀賴樣を、お移し申すといふ事ぢや。

長柄　それでは戰はこれ限り止めにして此お城を明渡し、淀の方樣が關東へお下りあれば穩かに、秀賴樣は大和にて、御無事においでなされるとか。

大江　何と結構な事ではないか、此和睦が調へば御同然に命が助かり、こんな嬉しいことはござらぬ。

長柄　嬉しいどころではない、今にも城を攻められなば淀の方樣を始めとして、皆一統に死なねばならぬ、其命が助かるとは、德川殿のよいお捌き。

大江　諸人の爲めゆゑ關東へ、お勸め申して、お下し申さうではござりませぬか。

ト兩人思入にていふ、此時水無瀨の局こなしあつて、

水瀬　大江殿のお詞ながら容易ならぬ此の和睦、いくらお奥で兎やかうと思ふとてもお表で、御承知なければ出來ぬこと、先づ私の考へでは調ひますまいかと存じます。

生川　おつしやる通り調ひますまい、殿下御他界ありし折は御幼年ゆゑ御後見を、お頼みありし其儘に六十餘州に威をふるひ、天下の主人にならん巧み。

淺澤　その古の御恩を忘れ、名に負ふ殿下の御胤を、僅か大和一ヶ國を御領地などゝは何事ぞ。

三草　餘りと申せば我君を蔑しろにする德川殿、此の和睦はお表でお取上げはござりますまい。

ト この四人の局こなしにて言ふ。

大江　あるか無いかはお上のお心、お前方の知つた事ではない、今總攻めに此城を攻められても仕方がないのを、敵から和睦をいうて來たのは、此上もない味方の仕合せ。

長柄　それを話しの先を折り、調はぬの何のかのとお前方は二つとない、命は惜しくござりませぬか。

水瀬　數ならねども私共は、皆譜代の武士の娘、

生川　數代御恩を蒙りし君の爲に死するのは、

淺澤　豫て覺悟にござりますれば、

三草　惜しいことはござりませぬ。

大江　お前方は御譜代の立派な衆の娘ゆゑ、死ぬは覺悟でござりませうが、一季半季の奉公人では悦ぶ者はござりませぬ。
長柄　これに列なるそなた衆は、死ぬのはいやであらうがの。（トこなしにていふ。）
春雨　いえ〳〵左樣ではござりませぬ、私共は輕い身分でござりまするが、
夏草　御恩に高下はござりませねば、
秋雨　君のお供とござりますれば、
冬野　決して厭ひはいたしませぬ。（ト是れにて大江の局長柄の局憎いといふ思入あつて氣を替へ。）
水瀨　すりやそなた衆も一統に、
春雨　死するは覺悟にござりまする。
大江　あゝ命のいらぬ人達ぢやの。
ト此の時正面の襖を明け、侍女東雲淀の方の褥を持ち出來り、上手よき所へ敷きて、
東雲　皆樣お靜に遊ばしませ、淀樣が入らせられまする。（ト是れにて皆々ちよつと思入あつて。）
水瀨　すりや淀樣が、
皆々　此所へ。

ト淀の方好みのこしらへにて正面襖の内より靜々と出來る、女小姓二人附添出來りて、よろしく後へ控へる。

大江　早合戰もけふかあすかと、申す噂に心もそゞろ。

長柄　つい高らかに物を申し、

大江　あなた樣のお耳に達し、恐れ、

皆々　入りまする。（トよろしく皆々頭を下げる、淀の方こなしあつて、）

淀　昨日よりして今日までも櫛の齒を挽く注進も、心に掛ることのみゆゑ、兎やせんかくやと思ふので、何も耳へは入らぬわいなう。

水瀬　斯かる折とは申しながら、只何事もその儘に、

生田　お聞き濟み下さりまして、

淺澤　有難う存じまする。

大江　唯今お噂承はりましたが、關東より和睦の御使者、

長柄　あなたは如何に思召します。

淀　今奥向の締りをなす宮内の局に相談なし、所詮及ばぬ戰ゆゑ申越したる關東の其意に隨ひ和睦な

し、望みの通り此城を明渡し、君を大和へ移し置き、わらはは東へ下りなば、籠城なせし者共の
一命助かることゆゑに、恥を忍びて徳川の詞に隨ふ心なるぞ。

大江　それは結構な思召し、此の和睦が調はねば直に明日總攻めに攻め入られたら急ち落城、さすれば
老若男女の者が、命を捨てねばなりませぬ。

長柄　それをお助けなされます事は、どのくらゐの御功徳か陰徳あれば陽報ありと、必ず報いがござり
まする。

水瀬　すりや淀様には關東の、詞に隨ひ和睦を結び、

生田　殿下樣のお築きなされし、此の名城を明渡し、

淺澤　恐れ多くも我君には、大和の國へ移らせたまひ、

三草　淀君樣には關東へ、申さば人質同樣に、

水瀬　お下り遊ばし、

生淺三　まするとか。

淀　多くの者の助かることゆゑ右大臣にも申諭し、一先づ大和へ赴かせ、又自らも關東へ、人の爲め
ゆゑ下る心。

大江　家來の命が助けたいとて、人質同樣關東へお下りなされまするとは、ても有難い思召し。
長柄　然し下世話の譬にも、負けるは勝と申しまするに、此上もなき思召し。
水瀨　よい思召しか存じませぬが、私共はよろしからずと、憚りながら、
外三人　存じまする。
大江　下を憐れむ思召しを、
長柄　惡いとお前方のおつしやるは。
水瀨　既に昨年和睦の折、深き巧みのあることを眞田殿には疾く知りて、遠からず破れんと言ひし詞に相違なく、未だ一年も經たぬうち忽ち破れて再度の合戰、今また爰に和睦を結び、君を大和へ移しまゐらせ、あなたの御身を關東へ人質に取り、其上にて御家を失ふ深き巧み、人命厭ひたまふのは厚き惠みにござりまするが、殿下樣に數年來受けし御恩を報ずるは今此時でござりまする。和睦は思ひ止まりたまひ、敵を引受け一戰なし、及ばぬ時は潔よう御生害を遊ばしませ。
生田　去年といひ今年といひ、僞り表裏の德川殿、恨み重なる關東と、和睦を結び隨ふは、
淺澤　物數ならぬ私共さへ、口惜しう存じまする。
三草　命を惜しむお方は兎もあれ、是れに列なる者共は、

春雨　君の御恩を存じますれば、命を惜しみはいたしませぬ。

夏草　何れも方と諸共に、冥土の御供、

皆々　いたしまする。（ト大江、長柄餘計なことを云ふものぢやといふ思入、淀の方こなしあつて、）

淀　皆の者の諫めをば用ひぬにてはあらざれど、和睦を結び關東へわらはが行けば亂れたる、世も鎭まりて籠城なせし、老幼婦女の命助かり其悦びはいかばかりか、快からぬ和睦をなすも此者どもが不便ゆゑ。

水瀬　すりや何樣に私共が、お諫め申しましても。

淀　わらはは和睦なす心。

大江　ても結構な思召し。（ト大江、長柄もうまいといふ思入にて、）

水瀬　是非なきことで、

外皆々　ござりますなあ。

淀　わらはは心を定むれど、

大江　君のお側に逸見が居れば、

長柄　和睦の邪魔をせねばよいが。

水瀨　兎にもかくにも奧向の、

生田　締りをいたす宮内殿へ、

淀　いなやの相談いたすであらう。

ト淀の方こなし、敵役の局、立役の局心々のこなし、引張りの見得にて此の道具廻る。

（大阪城殿中の場）――本舞臺平舞臺正面一面に金襖、これに五七の桐の紋散らし、房附の引手を附け、上手下手とも矢張り金襖の紋散らし、舞臺花道とも高麗緣の薄緣を敷き詰め、總て大阪城殿中の模樣よろしく、矢張り五七の紋散らしの大欄間をおろし、上手に秀賴下手に逸見甲斐守、此後に小姓三之助外に小姓六人、皆々鎧を脫ぎ控へて居る見得、誂への合方どんちやんに法螺の音を入れ、よろしく道具納まる。

秀賴　こりや甲斐守、又もや我れを欺かんと詞を巧みに關東より、和睦の使者を遣はせしは、思へば憎きことなるぞ。

甲斐　城に殘りし者共は皆死を極め居りますゆゑ、これへ向つて戰へば必ず兵を失はんと早くも察して和睦を結び、戰はなしに此城を乘取る巧みにござります。

秀頼　使者に參りし其者も、卽ち敵の一人なり、歸すに及ばぬ討つてしまへ。

甲斐　御諚ではござりまするが、和睦を申入れしは家康、使者が存じた事でなければ彼れを討つは不仁の至り、使者は其儘お歸しあるが、然るべきかと存じまする。

秀頼　成程その方が申す通り、使者を討たんと存ぜしは、我が若氣の誤りなり、申入れたる和睦を斷り使者は其儘歸すであらう。

甲斐　それがよろしうござりまする。

秀頼　我が運命も是れまでなるか、力と賴みし眞田を始め、後藤木村その餘の勇士も皆討死をなしたさうぢやな。

甲斐　御意の如く木村後藤も討死なし、眞田は大將家康の本陣へ切り入らんと强兵引き連れ攻め掛り、合戰數刻に及びし後、討死せしと申すこと、殘念至極にござりまする。

秀頼　軍師を失ふ上からは、早籠城も今明日、この上は花々しく敵を引受け一戰なさうか、但しは此儘生害なさうか、如何いたせしものなるぞ。

甲斐　和睦を斷る上からは必ず一時に攻め來らん、寡は衆に敵し難し、たゞ尋常の御最期がよろしからうと存じまする。

秀頼　おゝ我も左樣に思ふぞよ、父上御他界ありし折は我れ未だ幼年ゆゑ、十五歳に至るまで其頃故老の家康を後見となし百般の、天下の政事を執らせしに年を重ねて權を揮ひ、終に四海を握らんと深き巧みに大阪へ種々の難題申し掛け、殘念ながら其意に隨ひ、憂き年月を送りしが忍び難なく止むを得ず、去年戰ひを開きしも、手段と知らず和睦せしに、又もや破れて再度の戰ひ傾く運に利あらずして、既に今日生害なす此の秀頼が口惜しさ、心中推量いたしてくれよ。

ト思入にていふ、甲斐守も少し愁ひのこなしあつて、

甲斐　御尤もなる其仰せ嘸御殘念にござりませう、豐太閤御在世には高恩受けし諸侯すら皆關東へ靡きしは、頼み甲斐なきことにこそ、是れを思ひ彼れを思へば幸村殿は御譜代の、御家來にてはあらざれど、一度君へお味方なせば他を顧みぬ誠の勇士、人は斯くこそありたきものでござりまする。

秀頼　其方が申す如く類ひ稀なる眞田幸村、我れ世にあらば高祿を與へんものを殘念な、今は冥土の鬼となり、やがて彼の世で再會なし恩義を厚く謝すであらう、それに附けても小姓共、生先き長き者なれば、一統暇を遣はすほどに片時も早く城を脱け出で、何れへなりと知邊を便り、其身を全ういたすべし。（トこれを聞き大勢の小姓こなしあつて、）

小一　私共の後年を思召して、お暇を下し置かれまするは、

二　冥加にあまる仰せゆゑ、有難う存じまするが、
三　年は行かねど私共も、御扶助を蒙る臣下の端、
四　壯年の身にござりますれば、戰場へ出で人々と、
五　共に討死なすべきに、まだ幼年に何事も、
六　物の役に立たざるゆゑ、空しくお城に殘りましたが、
三之　只今我君御生害とござりますれば共々に、私共も殉死いたし、
一　冥土のお供を、
小姓皆々　いたしまする。（ト小姓皆々禮儀正しくこなしにて云ふ。）
甲斐　すりや殉死なし、冥土のお供をいたすと申すか、幼年なれど勇士の悴甲斐守感心いたす、わけて中にも幼年の三之助にも殉死なすか。
三之　私とても同じ御小姓、殉死いたすでござりまする。
甲斐　それは一入感心なるぞ、して、其方は何歳なるぞ。
三之　はい、十一歳になりまする。
甲斐　おゝ十一歳になるとか、殉死すると申すが、切腹なすを存じ居るか。

甲斐　其儀はお氣遣ひなされまするな、男子も及ばぬ木村が母、お側に附添ひ居りますれば、必ず如在はござりませぬ。
秀頼　甲斐守、其方は我が介錯をいたせし後、母上へも御生害を、よくお勸め申してくれよ。
甲斐　そなたの父は故實者ゆゑ、さうあらう〳〵。
三之　よく存じ居りまする。
秀頼　小姓共も此世の別れ、城内に居る母姉妹へ、暇乞をいたせよ。
甲斐　はッ、君の御意にてお許し出し上からは、暇乞をいたされよ。
一　はッ、有難うはござりまするが、對面いたさば母兄弟に、
二　餘計な歎きを掛けますゆゑ、
三　却つて不孝になりますれば、
四　對面いたさず此儘に、
五　君のお供をいたしまして、
六　死する覺悟に、
皆々　ござりまする。（トこなしにて云ふ。甲斐守感心のこなしにて、）

甲斐　おゝ尤も、三之助も同様なるか。
三之　いえ私は詰の丸の、伯母に逢ひ度うございますゆゑ、暫時お暇下さりませ。
甲斐　おゝ伯母と申すは木村が母か。
三之　左様にございまする。
秀頼　苦しうない、逢うて参れ。
三之　有難う存じまする。
秀頼　小姓共の介錯人、又生害の用意萬端、疾々申し附けい。
甲斐　委細畏つてございまする。
秀頼　今主従の因みを以て我れと諸共小姓共が殉死いたす志し、天晴なる事ながら未だ十五歳未満の者、花の盛りの時を待たず、蕾の儘に散らすのは、近頃残念至極なるぞ。
甲斐　仰せの如く幼年ながら武門の道を失はず、殉死いたす小姓衆、成人なさば一廉のお役に立つべきに、惜しきことにございまする。
一　はッ、有難きそのお詞、我君この世にましまして、
二　私共も成長なし、

三　然して君の御馬前にて、
四　衆に勝れし働きなし、
五　御感状を賜はるより、
六　遙にまさる其のお詞、
三之　心嬉しく我君の、冥土のお供をいたしまする。
秀頼　年に似合はぬ健氣者、我も嬉しう思ふぞよ。
甲斐　我君にも御用意よくば、さあ御小姓衆、最期の用意いたしてよからう。
三之 皆々　畏つてござりまする。
秀頼　我れも殿下の御位牌へ、お暇乞ひをいたすであらう。
三之 一　左様なれば、
皆々　我君様。
秀頼　心靜に用意いたせ。
皆々　はッ。
甲斐　いざ、介錯申し附けん。（ト皆々よろしきこなしにて此の道具廻る。）

（眞田大助遺言の場）――本舞臺大阪城内殿中諸士詰の丸の模樣、爰に眞田幸村の悴大助住ひ、下手に青木清右衛門床几に掛り、時の太鼓にて道具納まる。

大助　これ清右衛門、誰に聞いても知らぬと申すが、父には討死なされたらうな。

清右　城中の衆に承はりましたが、後藤木村の御兩所は討死なされたさうなが、大殿樣の御樣子はとんと樣子が分りませぬ。

大助　それはそなたが隱すのぢや、今日戰ひのあらぬのは父上討死なされしゆゑ、豫て覺悟の事なれば、包まず我れに言うて聞かせよ。

清右　決して隱しはいたしませぬ、昨日戰ひのあつた所へ參つて樣子を聞きたいにも、出る事ならぬ御城内討死なされましたなら、今に御沙汰がござりませう、暫くお待ちなされませ。

大助　いや／＼待つて居ることならぬ、自身に參つて問ひたゞさん。（ト行かうとするを清右衛門留めて、）

清右　御尤もでござりまするが、今に御沙汰がござりませう、先々お待ちなされませ。

ト此時武田左太夫、好みのこしらへにて花道より出來り、直に舞臺へ來て、

左太　それにござるは大助殿か、嘸御氣鬱でござらうな。

大助　さいふは武田左吉殿、よい所でお目にかゝつた、ちとお尋ね申したいことがござる。

左太　なに、手前に尋ねることがあるとは。
大助　お尋ね申すは外でもござらぬ、昨日味方の敗軍に、父幸村は討死いたしてござらうな。
左太　それをお尋ねなさるゝのか。
清右　あなたは御存じござりませうな。
左太　さあそれは。（ト言ひにくさうにする。）
大助　定めて御存じでござらうがな。
左太　さあそれは。
清右　どうぞ是れは存ぜぬと、いやさ、あなたは御存じない筈だ。
大助　いや〱御存じに相違ない。（ト左太夫こなしあつて、）
左太　むゝ、後藤木村の御兩所は、討死あつたに相違ないが、眞田殿の御最期は。
清右　めつたに、それを。（ト清右衞門氣遣ふ思入、大助こなしあつて、）
大助　えゝ口出しせずと控へて居らう。さあお隱しあらばお恨み申す、戰場に於て討死なすは是れ武士の習ひゆゑ、決して歎きは仕らぬ、隱さずお聞かせ下さりませ。
ト左太夫是非ないといふこなしにて、

左太　言ふなと止める御家來は、歎きを掛けまい爲めなれど、いつがいつまで此事を包みおはせる譯ならねば、包まずお話し申すでござらう。（ト誂への合方になつて、）御親父眞田幸村殿は茶臼山の本陣目掛け、四天王寺の門前にて關東勢の陣所へ切り入り、阿修羅王の荒れたる如く比類なき働きなし、見事な討死なされましたぞ。

大助　すりや、我が父には四天王寺の門前に於て討死ありしか。（トこれにて清右衞門こなしあつて、）

清右　今朝早く此事を承りましてござりまするが、なるたけ遲くお耳に入れんと、包み隱しましたのもお歎きかけまい爲ゆゑに、お許しなされて下さりませ。

大助　惡い心にあらざれど、豫て覺悟の事なれば、なぜ聞いたらば其時に、早く知らせてくれざるぞ。

清右　御最期ありしと聞いてより心も心ならざるゆゑ、思はぬ粗相をいたしました。

大助　武田氏には父が最期を、お知らせ下され忝ない。して貴殿には是れより何れへお出でなさるぞ。

左太　只今逸見甲斐守殿より我君御生害遊ばすにつき、殉死する者の介錯を仰せ附けられましてござりまする。

大助　おゝ、我君には御生害とな。

左太　眞田殿を始めとして名ある勇士の討死に、所詮當城保ち難く敵押寄せぬ其内に御生害遊ばす由、

何と殘念な儀ではござらぬか。

大助　誠に胸の裂くるほど口惜しく思へども、斯く成行くも御運の末、是非もなければ殉死なし、冥土のお供仕らん。

左太　すりや貴殿にも殉死召さるか、まだ十代の若木の花散らすといふは、(トちよつと愁ひの思入あつて)身共哀れを感ずる性にて、武士に似合ず涙脆く、誠に面目次第もない。

大助　かねて父よりの申附け、御生害の其時は、お供いたす覺悟でござる。

清右　其の御介錯に私は御城內へ參りましたが、顚倒なして手もふるえ、御介錯が出來ればよいが。

左太　何はともあれ火急のお召し、拙者はこれにてお暇いたす。

大助　左樣ならば武田氏。

左太　後刻お目に掛るでござる。(ト左太夫は上手へはひる。)

大助　君御生害とあるからは、我も冥土の御供に、殉死いたす其前方、そちに頼むことがあるぞ。

清右　何御用か存じませぬが、拙者へ頼みとおつしやりまするは。

大助　我れ幼年の折よりして母よりもそちの手に育ち其の恩愛も深きゆゑ、開運の時來りなば家老となして高祿を與へんものと父上にも常に仰せ置れしが、運盡きぬれば其恩の百分の一も報ぜずして

死ぬが今際の心殘り。

清右　無骨者の清右衛門、させる御奉公もいたさぬのに左樣に仰せ下されては、實に恐入りまする。

大助　又改めて頼みといふは、今それがしが殉死いたさば直に其方介錯なし、かねて逸見甲斐守殿へ頼み置きしことなれば、竊に城を脫出て。

清右　いやお詞の中ながら竊に城を脫出でとは、そりや何事でござりまする、御親子御最期なされし後何樂しみに存命せん、私ことも追腹切り死出のお供をいたす心、如何なる御用か存じませぬが城を脫出る御用なら、御免なされて下さりませ。

大助　すりや大助が一世の頼みを、其方聞いてはくれぬか。

清右　えゝ聞きませぬ〳〵。

大助　どうあつても、聞かぬと申すか。

清右　聞きませぬ〳〵。

大助　頼みを聞かねば、もう是れまで。（ト大助切腹仕ようとするを清右衛門びつくりしてこれを留める。）

清右　あいや、早まつた事なされますな。

大助　然らば頼みを聞いてくれるか。

清右　さあそれは、
大助　腹切らうか、
清右　さあそれは、
大助　さあ、
清右　さあ、
兩人　さあ〳〵。（トこれにて清右衞門是非なく。）
清右　あゝ是非がござりませぬ。聞きまするが、秀頼公の御生害を見屆けた其上で、御切腹をなさるべきになぜ早まつた事なされまする。
大助　今切腹仕ようとしたは、耳を押へたそちが手を、放させよう爲なるぞ。
清右　それでは一杯喰ひましたか。そもお生れなされてより十六年が其間、終にあなたの仰せをば背いたことはござりませぬに、今日に限るお賴みを聞かぬといふも譬にいふ、百日の說法ゆゑお聞き申しまするでござりまするが、して、城を落ちよとおつしやりまするは、如何なるお賴みでござりまする。
大助　其賴みは信州より去年の冬、遙々尋ねてお出でなされし母上、父の仰せにお目にも掛らず紀州の

知邊へ身を寄せてお忍びなさる其内に此の大助をお案じあつて、當月五日に陣中へ又々お出でなされしを、すげなくお返し申せしが、二人の死をばお聞きなされ憂ひに迫つてお心亂れ、路頭にさまよひたまひなば、あれ見よ眞田幸村の妻は、路頭に迷ひ居るぞ、死後の外聞思はぬは、立派に討死なしたれど覺悟の死とは思はれずと、世間の口に掛りなば、亡父の恥辱になることゆゑ、城を脱出で紀州へ至り、我が母上を信州へ御供なして一生の、御介抱をいたしてくりやれ。これ此通り其方へ、兩手を突いて頼むぞよ。（ト兩手を突いてこなしにていふ。）

清右　あゝ勿體ない御主人様に、お手をお上げ下さりませ。（ト清右衞門大助の手を取って、）今更返らぬ愚癡ながらまだ當歳の時分よりお抱へ申して守りをなし、四ツ五ツの頃からは、ぢいよ／＼とおつしやるゆゑ　毎日背負つて山へ登り、お相手したる若様が、天王寺にて比類なきお働きをなさる程に立派におなりなされたを、悦ぶ甲斐も情なや、今日御生害なさるゝゆゑ冥土のお供と存じましたが、事を分けたるお頼みに、死を止まりて奥様のお供をいたしまするから、必ず御案じなされまするな。

大助　すりや、我が頼みを聞いてくれるか。

清右　聞かいで何といたしませう。

大助　ちえゝ、忝い。

清右　斯くまで忠孝勝れたる、世にも稀なる若樣を、

大助　十六年を一期となし、

清右　長き浮世に主從の、

大助　三世の縁も今日限り、

清右　結ぶ甲斐なき短夜に、

大助　誠に夢の、

兩人　世の中ぢやなあ。（トよろしく手を取交し、これより淨瑠璃になり）

〽是非も涙に。（トよろしく三重の送りにて此道具廻る。）

（宮内局回向の場）＝＝本舞臺平舞臺、正面小模樣の襖、上手に床の間、違ひ棚、地袋よろしく飾附け、上下障子屋體、爰に宮内の局經机を控へ、白木の位牌を載せ香爐香包など置き、回向して居る模樣。床の三重にて道具納まる。

〽亡き人へ手向の花も紫の、法の華なる菖蒲草、花は枯れても二度咲きの又の榮えのあるも

のを、行きて返らぬ我子をばかこち涙に回向文。（ト宮内の局よろして回向をして居る。）

宮内　俗名木村長門守重成、一心破火宅發菩提心、南無阿彌陀佛々々、（トよろしく回向をしまひ、）誓ひし詞に違はずして、天晴ゆゝしき覺悟の由、母も嬉しう思ふぞよ。

〽手向くる香の薫りより、譽れは高き討死の跡を弔ふ奥殿へ、三之助は尋ね來て。

トこれを誂への合方になり、三之助好みのこしらへにて、花道より出來り花道にて、

三之　幸ひ尋ねる伯母様は、向うにおいでなされまするか、早うお目に掛りませう。

〽靜と通つて手をつかへ。

トこの淨瑠璃にて三之助舞臺へ來て、こなしあつて宮内の局の前に住ひ、手を支へて、

伯母様、これにお出でなされましたか。

宮内　おゝ誰かと思へば三之助、遠慮はいらぬ是れへ〳〵。（ト三之助前へ進みて、）此程は久しく逢はぬが、御前のお側に居ましたか。

三之　はい、お小姓衆と諸共に、お側で御用をいたしまする。

宮内　それは何よりよい事ぢや、大事に御用を勤めませうぞ。

三之　昨日は御用が多いので參ることが出來ませねば、重成様の御悼みをまだ申上げませぬが、嘸伯母

上樣にはお力なく、御愁傷にござりませう。

宮内　六ツ七ツの頃まではよう惡戲をしやつたが、とんとそれには引替へて、逢ふ毎度におとなしう、

〽聞いて局は打ちうなづき、

伯母も感心しますわいなう。

三之　私などは兄弟がござりませぬゆゑ便りなく、重成樣を兄上と思うて力にいたせしゆゑ、誠に本意なうござりまする。然しながら武士は討死いたすが身の譽れ、末の世までもお名が殘りますでござりませう。

宮内　五年あとにみまかりしわが身の母はわらはが妹、存命なして此樣な人と成つたを見やつたら、嘸悅ぶであらうわいの。

〽蓮の若葉に雨もつて、ほろりとこぼす一雫。

三之　その母上にも、追附けお目に掛りまする。

宮内　合點の行かぬわが身の詞、あの世の母に逢ひまするとは。

三之　今日生害いたしまする。

宮内　えゝ、何ゆゑ生害しやるのぢや。

三之　今日お表で我君にも、御生害遊ばしまする。
宮内　すりやお上にも、御生害とな。
三之　それゆゑ小姓一統が、殉死いたして我君の、冥土の御供いたしまする。
宮内　はや落城とお覺悟あつて、御生害遊ばしまするか、はあゝゝゝゝ。
〽はつとばかりに泣き伏せば、三之助は手をつかえ、
三之　それに附けて伯母上樣へ、お願ひがござりまするが、お聞きなされて下さりまするか。
宮内　一人の甥が今際の賴み、何なりとも聞きませう。
三之　外の事でもござりませぬが、切腹のいたしやうを、まだ辨へて居りませぬが、
〽武士の家に產れし身が、知らぬといふは恥辱ゆゑ。
禮儀亂さず切腹なし、流石は高田の悴ぢやと、父の譽れを末の世まで殘したうござりますれば、
お教へなされて下さりませ。
〽詞に局は摺り寄つて、
宮内　よう言うた、出來したわいなう、幼けれども忠孝の道を貫き亡父まで、美名を末世に殘さんとは親に勝りし志し、さはさりながらわが身ほど世に薄命の者はない、母は五年前にみまかりしに

父は舊冬討死なし、便りなき身を上樣が御不便に思召され、まだ十一歳の三之助に家督を仰せ附けられし其の御高恩を忘却せず、冥府のお供いたさんとは誠に侍の。

〽功ぞや。

それに引替へ大江、長柄は命を惜しみ關東の和睦を強ひてお勸め申すも、大野父子へ日頃より心を寄する不忠不義、お情ないは淀君樣、讒者のみをお用ひ遊ばし、片桐殿を先達て遠ざけられしが御運の末、眞田殿を始めとして多くの勇士討死なし、此の大阪の沒落も早今日に迫りしか、是非もなき世の有樣ぢやなあ。

〽無念の涙保ち兼ね、齒を喰縛り忍び泣き、威儀を改め打向ひ。

返らぬことに不覺の涙、切腹なして相果つるわが身の手前面目ない。

三之　其切腹のいたしやう、お教へなされて下さりますか。

宮内　女の身にて嗚呼がましけれど常々夫が物語り聞き傳へしまゝ教へませう。それ合戰の習ひ運極り勢盡きて刃に伏し、或ひは縊れて自ら死する例少なからず、抑々腹切ることは義家朝臣の頃よりして猛き武士の最期に臨み、人の手に死せんことを恥ぢ、死を潔うするに起り、其法式は足利の頃に至つて定まりたり、先づ短刀を馬手に取り、左の脇腹へ突立て、馬手の方へ引廻す、一刀に

死なんは言ひ甲斐なし、引拔き鳩首へ突立て十文字に切り下げまする、幼きとて見苦しき振舞せず、粗相のないやうしませうぞ。

三之　はい、天晴木村が甥なりと、立派に最期遂げまする。

宮内　おゝ。

〽我子ならねど伯母甥に手を取添へて、引寄せつ、淚に暮るゝ其折柄、お次の間より侍女の夏草。（ト花道より腰元夏草出來りて、）

夏草　はッ、お局樣へ申上げまする、只今これへお表より、加藤彌平次殿がお出でになりましてござりまする。

宮内　何御用か存ぜねど、直にこれへお通し申せ。

夏草　はッ。

〽はッとばかりに立つて行く。（ト夏草花道へはひる。）

〽程もあらせずお表より、君命蒙る加藤彌平次、威儀を正して打ち通れば。

ト彌平次花道より出て、上手へ通る。

宮内　加藤氏にはお表より、お使の趣きなるが、御苦勞に存じまする。

彌平　只今上より火急のお召し、取るものも取りあへずお表へ出しところ、誠に思ひ掛けざることにて君には今日御生害、お側に附添ふ小姓衆も殘らず殉死いたすにつき、其の介錯を仰せ附けられ暫く控へ居つたる所、宮内殿には御幼年より乳人を勤められしゆゑ、仰せ置かるゝ事でもあるかお逢ひなされたいとの事にて、其由申し達せよと、上意を蒙り參つてござる。
宮内　御生害の趣きは只今是れなる三之助より、承はりましてござりまするゆゑ、御一生の御別れに御尊顏を拜し度く存じましたる所ゆゑ、君のお召しは何より有難う存じまする。
彌平　それに居らるゝは高田の子息三之助、御身も小姓の內なるに、何故これに居らるゝぞ。
三之　木村の伯母に用事あつて、暫時のお暇たまはつて、是れへ參つてござりまする。
彌平　御身も殉死いたさるゝか。
三之　はい、殉死いたして我君の、冥土の御供いたしまする。
彌平　それは感心な事なるぞ。
宮內　加藤氏へ折入つて、お願ひがござりまする。
彌平　如何なる儀か存ぜぬが、身に叶ひしことなれば。
宮內　外の事でもござりませぬが、此三之助は幼年ゆゑ案じられて成りませぬが、何卒甥の介錯をお願

ひ申し度うござりまする。

彌平　委細承知仕る、死去いたされし高田殿とは水魚の交りなせし仲、他人のやうには思はねば萬端身共が介錯いたし、他の小姓に負けぬやう立派に切腹いたさせまする、必ずお案じなさるゝな。

宮内　其お詞を承はり、安堵いたしてござりまする。これ、そなたもお願ひ申しやいなう。

三之　萬事よろしうお引廻しを、お願ひ申しまする。

彌平　頼まずとて懇意な中、決して惡くはいたさぬが、切腹いたすにも作法のあるもの、心得あるかな。

三之　只今それは伯母樣に。

宮内　あゝこれ、伯母とは何を言やるのぢや、御前のお側で聞いたであらうがな。

三之　左樣にござりまする。

彌平　心得居らば、其の順を。

三之　只今お話し申しませう。

〽おめず臆せず座を進み、

抑々切腹をいたしまするは、義家朝臣の頃よりして猛き勇士の最期の時、人手に死せんことを恥ぢ我が手に死すると申すこと。

彌平　むゝ、其式法は足利の頃に至りて定まりしと、武家の古實に記しあり。
三之　先づ其席に臨みなば、心靜かに座を占めて、
彌平　呼吸の息を落附け、用意の短刀拔き放し、
三之　馬手に握つて弓手の脇腹、ぐさと突立て引廻す。
彌平　すりや一刀に最期を遂げるか。
三之　それは言ひ甲斐ない事ゆゑ、短刀引拔き鳩尾に突立て、
彌平　して〳〵、鳩尾へ突立て、
三之　十文字に切り下げまする。
彌平　いや、十一歳の此小兒に高田殿にはかほどまで、よくも敎へられたるぞ、彌平次感心いたしてござる。
〽感にたえしが心附き、
三之　いや、餘談に時を移せしが、遲刻いたさば上への恐れ。
三之　私とても同じこと、暫しのお暇願ひし身の上。
彌平　最早御前へ上るでござる。

宮内　加藤氏には御役目御苦勞。
彌平　又もや後刻面會いたさん。
三之　左様なれば御上使様。
彌平　同道いたすでござる。
〽いざ同道と促され、今死する身も勇ましく、打連れてこそ立歸る。
ト兩人宮内の局へ辭儀をしてはひる。
〽局は跡を見送りて、
宮内　上様御生害遊ばしますれば、御見送り申し上げ、淀様へも御自害を是非ともお勧め申し上げ、其上にて御承引なき時は是非に及ばずお家のお爲。（ト此時後へ大江、長柄窺ひ出で、）
大江　何かに邪魔な宮内の局、
長柄　命は貰うた、
兩人　覺悟しや。（ト懐劒をぬいて切つて掛る、此模様よろしく道具廻る。）
（秀頼生害の場）——本舞臺總て殿中の道具に戻る、二重白布の上に秀頼住ひ、前の白木の三方に九寸

五分を截せあり、上手に甲斐守太刀を持ち、よろしく道具留ろ。

甲斐　仰せ置かるゝ事あらば、御遺言下さりませう。

〽はや日も西へ傾きて、知死期に近き刻限に、甲斐守は手をつかへ。

秀頼　この期に及び跡々へ申し残すことはなきが、我れ柔弱にして智慮淺く天下を治むる器にあらねば六十餘州の主人たる威を關東へ奪はれて、昨日は味方に賴みたる諸侯も今日は敵となり、眞田を始め勇士等も皆戰場に討死なし、父上の築きたまひたる要害堅固の當城も、彼の莫耶の劍にて我が微力にては保ち難く、遂に落城の時至り、斯く生害に及ぶのも、皆秀賴が不德にして、恨む所はあらざれど、冥府へ至りて父上へ申譯があらざるぞ。

〽跡言ひさして御聲も、淚にくもるいたはしさ、さこそと甲斐も推量なし。

甲斐　盛衰榮枯は時運にして、君御一人の事にあらず、忠臣片桐市正は關東方へ隨身せしと大野父子が讒言をお用ひありしが御運の末、今日爰に片桐あらば斯くまでに成るまじきかと、愚昧の拙者は存じまする。

秀頼　其方の申す如く卦上が大野を用ひたまひ、忠臣無二の片桐に罪を負はして遠ざけしは、是れ我が智の足らざる所、今日爰に生害なすは此身に來る自業自得、誠に是非もない事なり、只是れまで

の戰ひに數多の家來に討死させ、可惜一命捨てさせしも、此秀頼が愚ゆゑ思へば不便の至りなり。

甲斐　臣下の者が君の爲め討死いたすは武士の常、既に小姓が殉死を願ふも冥土の御供なす心、まして討死なせし者は死を顧みぬ一個の勇士、君へ盡す忠義ゆゑ必ずお悔みなされますな。かほど臣下を憫みたまふ御仁愛を知らぬ者は、太閤殿下が積年の其の大業を水となし、天下無比の名城も保ち難く堙滅なすは、是れ愚將なりと蔑せられんが口惜しく、誠に君が御不徳と歎かはしく存じまする。

〽君の不徳を悔みつゝ、かこち涙にくれける所へ。（ト花道より、兵士一人出來り、）

兵士　はッ、御召しに依りて宮内の局、參上いたしてござりまする。

甲斐　案内に及ばず、是れへと申せ。

兵士　はッ。（ト引返してはひる。）

〽程もあらせず宮内の局、君の御召しは今生の別れに足も進みかね靜々來るを見るよりも、

ト花道より宮内の局出來る。

甲斐　宮内殿にはお待ちかね、急いでこれへ進まれよ。

宮内　はッ。

〽召しに應じて御座近く、進み寄れば秀頼公。

秀頼　宮内の局、定めて委細は聞いたであらうな。

宮内　御生害の趣きは、承はりましてござりまする。

秀頼　幼年より其方が乳にて人となりしゆゑ、我が產みの母より厚き世話になりし宮内、今生の暇乞に逢ひ度く思ひ居つたる所、誠に嬉しう思ふぞよ。

宮内　私ことも御存生中にお顏を拜しまして有難うござりまする。逸見樣にはお側にて萬端のお取扱ひ、御苦勞に存じ上げまする。

甲斐　扨宮内殿、今日は又御子息重成殿の御生害嘸かしの御愁傷、心中の程お察し申す。

宮内　悴が死去をお悼み下され有難う存じまする。若年ゆゑに如何やと案じましてござりますが、先は勇士の數に入りまして、安堵いたしましてござりまするゆゑ、左のみ悲しくござりませぬが、御幼年よりお乳を上げお育て申せし上樣が御生害遊ばしますは、只涙のみ先立ちまして忍び難なうござりまする。

〽男勝りの局さへ、育てし君の生害に、忍びがたなくひれ伏せば、襖隔てゝこなたにも、わ

つと一聲泣きながら、一間を出る介錯人。（ト下手より彌平次左太夫出來り）

秀頼　あの者共は、

甲斐　殉死の者の介錯を、申附けたる二人の者。

彌平　御召しに依て最前よりお次に控へ居りましたが、恐れ多くもお襖越しに、一部始終を承はり落淚いたしてござりまする。

左太　力自慢に日頃から鬼にも負けぬ心なれど、物の哀れに直ぐ感じ淚脆い產れゆゑ、聞くお話しに、胸迫り、思はず聲を上げましたは、お許しなされて下さりませ。

彌平　如何に性質なればとて、御前に於て失禮千萬嗜み召され。

甲斐　斯かる折ゆゑ制すに及ばぬ、勝手にそれにて泣きくれよ。

左太　はッ、有難うござりまする。

宮內　最早御生害に間もなければ、母上樣へ御別れに御對面遊ばしませぬか。

秀頼　今生のお別れゆゑ御對面もいたしたけれど、必ず御歎きあるであらう、さすれば時刻も移るのみならず、我が生害の妨げゆゑ、最早お目にかゝらねば左樣お傳へ申してくれよ。

宮內　畏りましてござりまする。

秀賴　我に續いて母上にも直に御生害なさるゝやう、其方お勸め申してくれよ、若し御未練の事あらば跡の恥辱にならう程に。

宮內　必ずお案じ遊ばしまするな、何樣仰せにござりませうとも御生害をお勸め申し、冥土の御供は私が勤めまするでござりまする。

彌平　女でさへもお主の爲め、命惜しまず殉死なすとは、それでこそ武士の娘。

左太　然しながら十代の者まで、冥土の御供をいたさるゝとは、あゝお情ない事ぢやなあ。

へ又も淚に咽び來る、折柄小姓は服改め、行儀正しく座に附いて、

ト奧より三之助先きに、小姓六人出て居並び、

三之　恐れながら先刻より、我々お次に控へ居りまする。

一　最早我君御生害に、

二　程なき由と承はり、

三　小姓一統死を極め、

三之　冥土の御供、

皆々　仕りまする。

佐太　や、こりや小姓衆にも殉死あるとか。
彌平　何れも十五歳未滿の年齢、中にも一人年下の十一歳の三之助殿、共に君の御供するとは感心な事ではないか。
左太　いや感心だ、此小姓衆が死ぬと聞いては、又もや涙の種でござる。
甲斐　我君の御介錯は拙者が勤むる、殉死いたす小姓衆は、二人で介錯いたされよ。
彌平　委細承知仕つてござります。
左太　すりや小姓衆の介錯をいたすのでござりまするか、是れは御免蒙りまする。
甲斐　なぜ其方はいたさぬのぢや。
左太　僅な年で君の爲め死ぬると思ふと胸一杯、どうして是れが討たれませう。御免なされて下さりませ。
〽いふも涙のすゝり聲、尻込みなしてぞ入りにける。(ト左太夫下手へ逃げ込む。)
甲斐　人には一つの癖あつて、勇士の聞え高き左太夫が、涙にくれて逃げなば誰ぞ代りを申し附けん。
彌平　其代りには及びませぬ、小姓衆の介錯は拙者一人で勤めまする。
甲斐　先刻より時刻移れば、お覺悟あつて然るべし。

秀頼　今際のきはに對面なし、母上のこと頼み置けば、最早そちに用はない、詰の丸へ立歸れ。
宮内　仰せではござりまするが、今生の御別れに御先途見屆け、淀樣へ御生害お勸め申すよすがとなれば、是れにお置き下さりませ。
秀頼　隨意にいたせ。
宮内　はッ。
三之　もウし伯母樣、私の追腹を、お見屆けなされて下さりませ。
宮内　何れも方と諸共に、必ずおくれを取るまいぞ。
三之　はッ。
秀頼　今日秀頼生害なす、時も皐月の初めにて、
宮内　その卯の花の袖垣も、濕り勝ちなる五月雨に。
甲斐　經讀む鳥は音を入れて、又來る春の初音をば、
彌平　人に待たるゝことありと、是れはそれに引替へて、
秀頼　身を觀ずれば無常をば、
宮内　告ぐる冥土の鳥に等しく、

甲斐　けふを限りに啼き盡し、

彌平　血を啼き死する時鳥、

三之　死出の田長と、

小姓
皆々　諸共に、

秀頼　いで生害をいたすであらう。

〽いで生害と秀頼が九寸五分を取上ぐれば、並居る小姓が一統に諸肌脱いで覺悟の體、後へ廻る甲斐守天下の主人を勿體なやと涙拭へば彌平次も、共に涙に暮れにける、局は右に育君左に甥の三之助、不便の者やと言ひたさを、怺ゆる袖に五月雨れて雨か涙の時鳥、啼く音血を吐く思ひなれ。（ト皆々よろしく腹へ突立てる。）

宮内　只御尋常のお覺悟を、願ひたう存じまする。

〽實にもゆゝしく。

ト皆々引廻す。太刀取り後にて振上げる見得よろしく、此道具廻る。

（大助殉死の場）——本舞臺總て詰の丸の道具に戻る。爰に大助短刀を前へ置き、下手へ左太夫行きか

ゝるを清右衞門留めて居る體にて道具留る。

清右　もウし、武田樣、お見掛け申してお前樣へ、お願ひがござりまする。

左太　なに、身共に願ひとは。

清右　外の儀ではござりませぬ。拙者主人の命を受け殉死召さるゝ若殿の介錯に參りましたが、お小さいよりお抱き守り申してお育て申した若樣ゆゑ、殉死なされるがお愛しく、御介錯が出來ぬからどうかお前樣が成り代り、御介錯なされて下さりませ。

左太　折角の頼みだが、そればかりは許してくれ、今日加藤彌平次と殉死の者の介錯に上意を受けて御殿へ出たが、十五を頭に十一まで見るも哀れな小姓衆、君恩思うて殉死する其の心根が痛ましく物を感じる性分に胸一杯に目に涙、餘儀なく御免を蒙つて、今爰へ逃げて來たのだ。介錯ばかりは許してくれ。

清右　ではござりませうが差當り、外に頼む者もなければ、是非介錯を。

左太　たとひ何と言はるゝとも才智勝れた大助殿、どうまあ刄が當てられう。殉死なすのがいとしうておれは涙の止め度がない。

清右　こりや頼むにも頼まれぬか。

大助　こりや清右衞門、何をそちはあわてるのぢや、父より介錯いたせといふ命を受けて參りながら、餘人へ頼むなどゝは日頃に似合ぬ未練千萬。介錯出來ずばいたすに及ばぬ、我れ一人にて切腹なす、其方それに見物いたせ。

清右　あれあの樣に言はれるから、どうぞ介錯して下され。

左太　何というてもおれには討たれぬ、まだ十六か十七で人に勝れし手柄もなく天晴健氣な大助殿、どうまあ是れが討たれよう、惜しうて／＼ならぬわい。

〽又も涙にくれける折柄。（ト花道より兵士一人出來り）

兵士　只今君には御生害、お側に附添ふ小姓一統、殉死いたされてござりまする。（ト上手へはひる。）

大助　最早御生害ありしとか、いでや跡より追附き申さん。

〽諸肌脱いで大助が、死ぬる覺悟に是非なく／＼。

清右　是非に及ばず此親仁が、

左太　幸村殿の頼みとあらば、

清右　心を鬼に、

大助　介錯いたせ。

清右　はッ。

〽弱る足許踏みしめて、後へ立てば大助が、ぐつと突込む最期の切腹、わつとばかりに泣き出す左太夫、見るも哀れに。（ト切腹の模様よろしくあつて道具廻る。）

（詰の丸の場）＝本舞臺總て詰の丸の道具に戻る、爰に淀の方住ひて、宮内の局三方へ九寸五分を載せたるを差附け、下手に水名瀬、生田、淺澤、三草、腰元皆々懷劍を差し控へ居る見得にて道具留る。

水瀬　宮内殿を始めとして、お側に附添ふ私共皆一統に自殺なし、

生田　死出三途の御供を、

淺澤　いたしまする覺悟ゆゑ、

三草　御尋常の御生害を願はしう、

皆々　存じまする。

淀　關東よりの詞に隨ひ和睦なして自らが東へ下ると申せしに、はや生害をいたせしか。

宮内　御召に依て今生の御暇乞に出し所、母上にも潔よう御生害をお勸め申せと、此宮内へ御遺言。

淀　そなたも側に居りながら、一目なりとも自らになぜ逢はしてはくれざりしぞ、如何なる果報拙なき事か、六十餘州の主人ともなるべき身にて果敢なくも、生害なして死するとは、ても情ない事なるぞ。

宮内　申上げるも詮なけれど、片桐殿を遠ざけたまひ、大野等父子を淀樣がお用ひありしが御運の末、其節わらはがお諫めを申上げれどお用ひなく、既に再度の戰に及び、早落城とお覺悟まし〳〵、恐れ多くも君樣には、今日無慙の御生害。

水瀨　關東よりの和睦の使者は深き巧みにござりますれば、假令大江、長柄などが何樣お勸め申しまするとも、

生田　お跡の恥辱になりますれば、其御念をばお斷ちなされ、

淺澤　御生害遊ばすが、

三草　憚りながらよろしいかと、

四人　私共は存じまする。

宮内　さあ其の御遺言をお用ひありて、御生害遊ばしますか。

淀　さあそれは。

宮内　御承引はござりませぬか。
淀　さあ、
宮内　さあ、
兩人　さあ〳〵。
宮内　疾々お覺悟遊ばしますやう、一統願ひ上げまする。
淀　遺言とあらば、是れにて生害しませうわいの。
宮内　すりや、御生害遊ばしまするか。
淀　秀頼初め皆の者の命を助け遣はしたく、東へ下ると申せしが、秀頼生害いたす上は自らとても潔よう生害なして相果てん。
宮内　御生害とござりますれば、是れにて君の御意も立ち、安堵いたしてござりまする。
ト爰へ下手より大江、長柄縛られしまゝ逃げて來り、是れを左太夫追駈け出で引据ゑる。
水瀬　こりや大江長柄の兩人を、
宮内　縛め置きしに此體は。
左太　繩附の儘逃げ行くは、何か仔細のあることゝ引捉へて參りしが、此兩人の者共は。

大江 傾く運と見たゆゑに、かねて關東へ知邊を求め、有ること無いこと知らせしが、早くも覺りし宮内の局。

長柄 巧みの邪魔ゆゑ討果さんと思ひの外に縛められ、隙を窺ひ逃げ出したが、捉へられたる上は、

大江 どうで助けて置くまいから、二人が首を切つてくりやれ。

左太 わいらが首を切つたとて、感じの涙の出やうがないから、縛り首にして遣らう。

大江 どうとも勝手にしたがよい。(ト此時七つの時計鳴る。)

宮内 はや夕陽に程近し、お覺悟にござりますれば、冥土の旅の道知るべ、御先途いたしまする、はやおさらば。

ト宮内懐劍を乳の下へ突立てる。此内左太夫、大江、長柄の首を討落すと一緒に遠攻めを打込む。

淀 あの貝鐘は、

左太 慥に寄せ來る關東勢、

淀 服改めて最期を遂げん。

宮内 疾々御用意なされませう。

ト宮内苦痛の内に最期を勸むるこなし、此の見得よろしく、

ひやうし　幕

大詰

眞田信久陣所の場
徳川家康本陣の場

〔役名――徳川家康、幸村の臣青木淸右衞門、同平子源藏、本多上野、安藤帶刀、西尾仁右衞門、伊藤七郎、眞田伊豆守信之、徳川家臣大勢、信行家臣大勢。〕

（信之陣所の場）――本舞臺總て寺の書院を陣營にしたる體、爰に○△□◎士卒四人、辨當を控へ、徳利筒茶碗にて酒を飲み居る、此の見得にて幕明く。

○　さて城攻めも平定と相成り、我々共も晝夜の時を違へず食事が出來、斯様に酒の一杯づゝも汲み交されるやうになりしは、誠に大慶至極でござる。

△　言はるゝ如く戰ひも、味方勝利と相成りしは、大慶至極と申しながら、此の陣所では大びらに悦び酒の飲まれぬのは、主人の心を推量るゆゑ。

□　一昨日の戰ひに、さしもの木村後藤を始め、名ある勇士は討死なし、先づ城方の大元帥幸村様にも討死を、なされたといふ噂なれば。

◎敵味方とは申しながら、主君の爲には實の御舍弟、嘸かし内實御愁傷と、推察いたせば表向きにて悦び酒は飲めぬといふもの。

○又昨日は城内にて、秀頼公を始めとして小姓の面々自殺なし、

△奥殿にては淀君はじめ、局同士は刺違へ、共に自殺をいたせし由、

□其上城へ火を掛けて屍の跡を隱せしは、潔よいとは申しながら、

◎主君の御舍弟幸村樣まで討死をして果てられしは、無慙至極な儀でござる。

ト上手より源藏出來り、後に聞き居て、

源藏 すりや御主君には、一昨日、最早討死したまひしか。

○御身は此程城方より、

△此陣中へ内密にて、

□使者に來られし源藏殿、

◎扨は樣子をお聞きありしか。

源藏 我が主君にも討死と御覺悟ありしゆゑなるか、御家重代の六文錢の御旗を當家の御嫡子河内守樣へ紀念の印と御贈りありし、其御使にそれがしが内命うけて參りし所、又御當家の御主人には正

路を守る御氣質に、其儘手前を留め置かれ、德川殿の本陣へ訴へられしそれゆゑに、沙汰のあるまで城內へ手前は歸る事ならず捕虜同然陣中に、留め置かれたる其爲に、主君の先途も見屆けず、敵の陣所で城內の凶事を聞き知る殘念さ、各方にもお察し下され。

○ いや其討死をなされし事も、只風說に聞いたばかり。

△ 未だ事實とても聞き糺したる譯でもなく、

□ いづれ否やが相分り、何れの手にて討取りしと、

◎ 申すことまで審に、知れねば事實は分りません。

源藏 どうか實地の確證を、片時も早く得たいものぢや。(ト爰へ下手より伊藤七郎出來り、)

七郎 各方にも今日は祝ひの酒宴開かれしか。

○ 七郎殿に見られては、面目もなき此の酒盛、

△ 知らるゝ如く御主君へ、御遠慮申す儀もあれば、

□ 菜を下物に一献づゝ晝飯前の小酒盛、

◎ 酒をしまつて中食に、取掛りまする所でござる。

七郎 言はるゝ如く當陣所は主君へ憚る所もあれど、御本陣より歸りがけ何れの陣所へ寄りましても、

昨日にかはる鎭靜の無事を悅ぶ祝ひ酒に、鏡を拔いて兵士等が柄杓へ汲んで飮むもあれば、大杯にて瀧飮みに酒のいくさをいたすもあり、實に勝軍の陣中ほど、陽氣なものはござらぬて。

源藏 承はれば其許には御本陣よりお歸りとやら、して、城方にて我が主人幸村樣にも討死と申す噂がござりまするが、それは誠でござるかな。

七郎 御身は先日城方より使ひに來られし平子氏、近頃以て氣の毒ながら御身の御主人幸村樣には一昨日の總攻めに、越前の手へ切つて入り西尾仁右衛門と申す者が首級をあげしと申すこと、右の次第を越前家より只今君へ屆け出で、今日大御所家康公には首實檢を遊ばす由承はつて參つてござる。

源藏 すりや、あのいよ〳〵御主君には。

○ いや〳〵それも實檢が相濟まざれば分かるまじ。

△ 先頃なども影武者を討死させし計略に、

□ 味方も恥辱を重ねたれば、

◎ なか〳〵油斷相成らぬ。

源藏 其確證を聞く上は。(ト刀の柄へ手を掛ける。)

七郎　平子氏には如何なさるゝ。
源藏　主君の討死せし上は、手前も殉死いたさにやならぬ。
七郎　はて、只今もお聞きの通り首實檢の濟まざる内は、しかと事實も分らねば、先づ短慮を止まり召され。
源藏　それぢやと申して。
七郎　いや、先づ〳〵お待ちなされといふに。
○　何は格別この由を、
△　我が御主人へ申し上げん。（ト此時正面襖の内にて）
信之　知らせに及ばぬ、聞いた〳〵。
源藏　あの聲は、
七郎　御主人樣。（ト奥より伊豆守信之出來り、二重へ住ふ。）未だ事實分りませねど、御本陣にて承はれば、幸村樣には御討死の由。
○　敵味方とは申しながら、
△　御同胞たる御兄弟、

「御愁傷のほど嘆かしと、

◎御悔み申し上げまする。

信之　弟なれども幸村は智勇はるかに我に勝り、昨日まで城方の鋒先き鋭く守りしは、皆弟の軍法に依る所、たとひ幸村討死なすとも天命なりと諦め居れば聊か悔む所なし、使者に參りし源藏も未だ役目も終らぬ内殉死いたすは粗忽なり、短慮は思ひ止つてよからう。

源藏　其仰せではござりますれど、主人が存命いたしてこそ役目を仕果せ歸城なし、使ひ仕遂ぐる儀もあれど仕へる主人に先立たれ、跡に殘つてをめ／＼と、命を延はり居られませうや。

七郎　さゝ、それも事實を聞きし上殉死なすとも遲かるまじ、先づ／＼短慮は止まり召され。

ト此時花道より軍兵一人出來り、

軍兵　はッ、申し上げまする、只今陣所の門先へ幸村樣の御家臣たる、青木淸右衛門殿といへる御仁、御對顏が願ひたしと參られましてござりますが、此儀如何取計らひませうや、お伺ひ申し上げまする。

信之　なに、淸右衛門が參りしとな。

七郎　君には御存じでござりまするか。

信之　青木淸右衞門といへる者は、眞田の家の譜代の臣、戰場にても昨年より毎度武功を揚げしと聞く久方面會いたさねば、定めて年も寄りつらん。苦しうない是れへと申せ。

軍兵　はッ。（ト引返してはひろ。）

信之　四人の者は次へ參り、隨意に休息いたしてよからう。

○　左樣ござれば仰せに隨ひ、

△　失禮御免、

四人　下さりませう。（ト四人は銘々割籠を持ち上手へはひろ。是れより淨瑠璃になる。）

〽落城の跡は空さへさみだれて、梅の浪花に花もなく、顏に靑葉の影うつる、寺院の庭へしをく\と入來る青木淸右衞門。（ト此内花道より淸右衞門に以前の軍兵附いて出來ろ。）

信之　珍らしや淸右衞門、過ぎつる昔木國にて、別れし後は逢はざりしが、久々にての此の對面そちも老衰いたせしかど、思ひの外なる此の骨柄、身も滿足に思ひ居るぞ。

〽仰せにはッとひれ伏して、

淸右　有難きそのお詞、同じ御家に仕へし身も東西御不和の身となりて、御舍弟樣と諸共に紀の路へ赴き其後は、長の年月あなた樣の御尊顏をも拜しませぬが、昔に變らぬうるはしき其御面を拜しまし

て、大慶至極にござります。

源藏　早速ながら青木氏、主君の存亡如何なるか、何卒お聞かせ下されい。

清右　其儀について態々と、當御陣所へ參つたのぢや、委細は只今お話し申す。

（憚る樣子を見て取つて、

七郎　案內いたせば用事はない、汝は陣所の固めをいたせ。

軍兵　はッ。（ト引返して花道へはひる。）

信之　こりや清右衞門、承はれば幸村には當月六日の合戰に、討死せしと申す事ぢやが、忠臣無二の其方が殉死もなさず存命なし、斯かる姿で我が陣所へ態々尋ね參りしは、遺言にても承はり、我れに傳へに參りしか。

（尋ねに青木は淚を浮め。

清右　仰せの如く御舍弟樣が一昨六日の合戰に御討死なされし上は、年老いましたる清右衞門殉死いたして潔よく、相果てまする筈なるを、生き甲斐もなく今日まで、存命いたして居りまするは、若殿樣の御遺言承はつて御陣所へ、尋ね參つてござりまする。

信之　扨は幸村ばかりでなく、大助ことも父諸共討死して相果てしか。

清右　いえ御嫡子の大助様には、秀頼公の御供なし幸村様が御討死の明る七日に城内にて、拙者に介錯仰せ附られ、見事に御自殺なされました。

源藏　すりや御主君には御親子とも、

七郎　いよ〳〵落命なされしとな。

信之　是れなる者は我が腹心、遠慮いたさず申し聞けよ。

清右　只今言上いたしまする、此度の合戰には早討死の御覺悟ゆゑ、拙者もお供いたさんと殉死の願ひ上げし所、そちは昨日入城せし悴の許へ立越えて未練なきやう計らひくれと、お賴みに依り是非なく入城なして程もなく、寄手の大軍總攻めにて、味方の討死數知れずと櫛の齒をひく注進に其日は暮れて七日の朝、早落城と事極り臆病未練な大野等は、關東方へ降參あれと秀頼公へ勸めしかど、老臣逸見甲斐守殿がお諫め申して秀頼公御生害あり、お供をなして隨ふ面々一同に殉死いたして果てられしは、哀れといふも愚にてむざんなことでござりました。

〽跡言ひさして清右衛門、浮む涙を押し拭へば、聞く信之も理と愁ひ催すばかりなり。

信之　して、大助の遺言とは、如何なる仔細か申し聞かせよ。

清右　其の御遺言と申しまするは、大助様が御覺悟の時に臨んでこの親仁へ仰せ置かれしお賴みは、昨

年來國信濃より遙々お尋ね下されし我が母上に對面せず、一先づ紀州九度山の由緣の方へ身を隱し此地の便りを待たれよと本意なくお返し申せしは、不孝の罪此上なし、せめてはお詫びの一つには我々父子の亡き跡に路傍にさまよひ御難儀なされぬやうにいたしたく、母を伴ひ信州の故鄉へ送りくれるのが死に勝りたる忠義なりと、あつぱれ健氣なお詞に力なく〳〵承引し、殉死を止まり信濃路までお送り申すも老の身の心許なく思ふゆゑ、御身を誘ひに參りしは力を借りて奧樣の、御無事を計らん爲めばかり、是非に賴みを聞いて下され。

源藏　お案じあるな青木氏、幸ひなるかな拙者めは、御家の御旗を持參なし此陣中に生き殘り、斯く存命にて罷り居れば倶々御身に力を添へ、きつと若殿大助樣の御遺言をば貫くやうに、いたせし上にて潔よく腹かき切つて相果てん、何卒拙者はこの儘にお暇下し置かるゝやう、偏に願ひ奉りまする。

〽死する命を延はるも、忠義の爲を願ふにぞ、心に褒むる信之も守る義心の捨てられず。

信之　そは尤もなる賴みながら、他の家來なら身に替へても此儘暇遣はさんが、弟の家來の兩人ゆゑ、只此儘には許されぬ。

淸右　すりや、御一家の家臣ゆゑ。

源藏　此儘お許し、

兩人　下されぬとな。

信之　凡慮ならざる大御所ゆゑ間者を附置き我が陣所へ、汝が忍び參りしを御存じあらんも計られず、さすれば信之今日まで、正路を守り二心なき身の潔白を立てたるも、晝餅と相成る大事の際、それゆゑ御不審あらぬうち此方よりして有體に屆けをなして許容を受け、安々紀州へ兩人を遣はすやうに計らはん、暫く陣所に止まり居よ。

清右　すりや伺ひし上ならでは、

源藏　立退くことは相成りませぬか。

信之　事有體に本多殿まで、屆けをなして參るがよい。

七郎　然らば手前が卽刻に、屆けをいたして參りませう。

清右　左樣ござれば御苦勞ながら、

源藏　何卒よしなに願ひまする。

七郎　暫時陣所に控へ居られよ。

〽本陣さして出て行く、跡に靑木と源藏は、主人が覺悟打悔み。

清右　あゝ、言うて返らぬことながら、そも信州を退城なし紀州へ赴くあの砌り、關東方に屬しなば、

源藏　御親子諸共御無難にて、高祿賜はり末長く、御家の榮えとならうもの。

清右　軍法智略は古への楠殿にも劣りなき、我が御主君にてありながら、

源藏　如何なればこそ城方にて、無慙の御最期遂げたまひ、武運も末と相成りしか。

清右　是れを思へば智者よりも、

源藏　仁者がましと、

兩人　見ゆるわえ。

信之　今そち達が言やる如く、三德備はる名將も智勇に秀で仁薄く、德と武運に叶はねば天下を握ること難し。そも／＼我朝の名將と呼ばれし程の義經は、兄賴朝の德に及ばず、和田の智勇も北條の逆意に對して滅亡なす、又中頃に至りては楠公程の軍師も不正にはびこる足利の大軍に當り討死なし、末世に美名は殘れども僅か二代で滅亡せり、さらば殿下の御威勢も一代にして德川の武德に歸する期を覺り、兄は關東大御所へ隨身なして家を立て、弟は智勇勝れしゆゑ大阪方へ隨ひしも、豐太閤への恩報じ、然りといへど大御所には弟が智勇を惜しみたまひ旗下になさんと再度まで親族を以て勸めたまへど、義を金鐵の幸村ゆゑ秀賴公の御賴みにて大阪方の軍師となり一度

入城せし上は、假令何樣高祿にお取立を蒙るとも、隨從いたす所存なしと、兩度が兩度同じ斷り義強き故に家を捨て命を捨て城方にて無慙の討死いたすとも、無難に家を全うなす兄に勝りて末の世に美名を殘す身の譽れ、悔むところは聊かない、そち達二人も譽れなるぞ。

清右　仰せの通り御主君には、戰場にての御討死に美名もお殘しなされませうが、おいたはしいは若殿樣城内にての御生害。

源藏　それと申すも父君の仰せをお守りなされしゆゑ、嘸や戰場で花々しく武勇を顯はしお討死が、なされたかつたらうと我々すら、

清右　其お心をおし量り、

源藏　殘念至極に、

兩人　ござりまする。

信之　今々思へばあの旗を陣所へ送り越したるは、早明日は討死と覺悟極めしゆゑならん。何れ首實檢の期に臨まば、其節君へ願ひ出で、存生中に逢はざりし弟に對面いたすであらう。

清右　相成るべくは其お首が、僞物なれば我々の、

源藏　その悅びはいかばかり。

信之　いや僞物ではよもあるまじ、左はさりながら長の年敵と味方に隔たりて、別れ程經し兄弟が久々にての對面に存命にてもある事か、窶れ果てたる死首に家康公の御前にて對面なすは我とても、快いとは思はぬわえ。

〽弟が心おし量り、いとゞ涙に打沈む折柄奏者一人走り出で。〔ト花道より八郎出來り。〕

八郎　伊豆守殿それに居られしか、御本陣よりのお召しでござる。

信之　これは〳〵、八郎殿の御使者の御役目御苦勞至極、先づ〳〵是れへお通り下され。

八郎　あいや急御召しゆゑ、是れより申さん、只今御家臣七郎殿を以てお屆けに及ばれたる、青木清右衞門を御同道にて、片時も早く御本陣へ御出張これあるやう、君のお召しにござります。

信之　只今出張仕れば、御前よしなに仰せ下され。

八郎　然らば其由申し上げん。

信之　至急の御使者御苦勞千萬。

八郎　これにてお暇仕る。〔ト引返して花道へはひる。〕

清右　拙者を伴ひ急速に、出張せよとのお使ひは、

源藏　死刑の沙汰に及ぶといふ、嚴命にてはあらざるか。

信之　いや其吉凶も御賢慮を、伺ひ見ざれば相知れねど、多分は助命の御沙汰にて御許容に相違なし。

清右　然し忍びの此なりでは、

源藏　靑木と名乘るも何とやら。

信之　はて、有りのまゝにて同道いたせ。

〽二人を伴ひ信之は、服改めて出仕なす。（トよろしく道具廻る。）

（家康本陣の場）——本舞臺總て住吉本陣の體、平舞臺に士卒六人床几に掛り居る、此見得にて道具納まる。

〽空澄み渡る住吉の浦に輝く御陣營、固めの役も嚴かに、皆庭前に控へ居る。

一　いやなに、各々、火急に何やらお糺しの事でもあつてか、我々警固仰せ附けられしは、如何なる仔細か御存じなきや。

二　されば手前もその仔細は如何なる事か存ぜねど、先刻眞田の陣中より六郎殿が使者に參り、本多樣との御密談。

三　それより火急に我々へ警固を仰せ附けられたれば、多分は敵の殘黨が此本陣を附覘ひ、油斷のな

らぬゆゑでござらう。

四　毎度これまで幸村に不意を打たれて茶臼山にて、狼狽いたした事もござれば、假令落城いたしたとて、なかなか油斷相成らぬ。

五　又幸村が討死せしと、申せどどうやらあぶないもの、十人眞田の影武者では、いつも手懲りをした我々。

六　此度ばかりは眞物の眞田幸村討取りしと、味方安心いたし居れど、まだまだ滅多に安心ならず。

一　きつと警固を、

六人　いたすでござらう。（ト爰へ上手の障子を明け本多上野、安藤帶刀出來る。）

上野　警固を申附けたる仔細、帶刀それへ參つて申し聞けん。

一　如何なる仔細か我々に、

二　仰せ聞けられ、

六人　下さりませう。

上野　仔細と申すは別儀でない、先刻眞田伊豆守の陣所よりして屆け出しは、かねて英士の聞えある幸村の臣青木清右衞門、主人大助の遺言に依り死を延はりて紀の國の九度山村まで立越えんと姿を

やつして、陣所へ忍び來りし由。

帶刀　家康公へ申上げしに、强勇なりと聞き及ぶ譜代の臣淸右衞門、主人の覺悟を餘所に見て假令遺言なればとて、存命なして態々と敵の陣所へ來る筈なし、不審の廉を問ひ糺し次第によつては其儘に、許し遣はさんと伊豆守に、青木を同道いたすやう、只今お使者を遣はされたれば。

上野　やがて兩人此所へ來るは必定其節に、警固の者の居らざるは、臣たる者の怠りゆゑ、

帶刀　火急に警固を申附くれど、別に仔細のあらざる儀ゆゑ、必ずいたすまいぞ。

一　如何なる儀かと我々も、

二　內實心配いたし居りしが、

三　承はつて一つの安堵、

四　左樣な儀なら、青木めに、

五　味方の武威を見せつけて、

六　恐怖いたさせ、

六人　遣りませう。

上野　あいや權威を以て脅すとも、大膽不敵な青木と聞けば、容易に恐怖はいたすまじ。

帶刀　只今非常の事あらば、家康公に過ちなきやう、其方どもは警固いたせ。

一　委細承知、

六人　仕りまする。（トこれより淨瑠璃になり、）

〽警蹕の聲かけまくも、武威いと深き奥の間より、賢き君の御出座と敬ふ臣は徳川の、今ぞ治世に大阪の鎭靜をこそ祝しける。

ト正面の襖を引拔くと、爰に徳川家康、其外近臣四人附添ひ出で、家康眞中に住ひゐる。

上野　はゝはッ、最早程なく伊豆守にも、お召しに應じて參上なさん。

帶刀　お待ち久しう入らせられんが、暫時御猶豫遊ばされませう。

ト茲へ花道より八郎出來り、

八郎　はッ、お召しに依て眞田伊豆守、青木淸右衛門召連れまして、參上いたしてござりまする。

上野　我が君疾くよりお待ちかね、

帶刀　早々是れへと申されよ。

八郎　はッ。（ト引返してはひる。）

〽程なく入り來る伊豆守、陣中ながら禮服にて、御前はるかに控へける。

ト此うち花道より伊豆守出來る。

上野　我君にもお待ちかね、遠慮召されず信之殿。

帶刀　いざ〳〵是れへお通りめされ。

信之　然らば、御免下さりませう。

〽御前へこそは打通る。

家康　して、同道を申し附けし、清右衛門は如何せしぞ。

信之　はッ、敵地の族にござりますれば、御本陣まで同道いたせど、家來を差添へ御陣内へ、差控へ置きましてござりまする。

家康　おゝ左樣か、一昨日城方なる幸村より、その陣所へ眞田家代々傳來なす重器の旗を送りし由、即刻屆けに及びしと上野より承はりしが、予も城攻めの際に臨み混雜いたし居つたるゆゑ、意外に其沙汰延引せり。して、其旗は城方より、如何なる者が持參せしぞ。

信之　其儀は弟幸村の臣平子源藏と申す者、持參いたしてござります。

家康　すりや聞き及ぶ譜代の臣、平子源藏が持參せしか。

信之　送り越したる右の旗は、我が祖父眞田彈正忠一德齋より傳來し、家の寶に祕藏いたせば、悴河内

へ讓ると申し、記念の心か幸村より送りしかど假令兄弟なればとて、只今にては敵味方君へ敵對ふ幸村より送りし旗を屆けもなく受納なしては濟まざる儀と、早速これなる本多殿までお屆けに及びし所、追て御沙汰これあるまで使ひの者を留め置けとの御內意に依り今日まで使者に參りし源藏をも、陣所へ留め置いてござりまする。

家康　扨は今度の合戰に幸村ことも覺悟極めしそれゆゑに、足下の嫡子河內守へ讓ると申して祕藏なす家の重器を送りしか、夫の左馬之助が阪本にて寄手へ重器を與へたる例に倣ふ大器量、河內も伯父の幸村にあやかりくれゝば予も滿足、遠慮に及ばず只今より、家の寶にいたしてよからう。

信之　すりや御許容下さりますとな、御懇の御意を申し聞けなば、悴河內は申すに及ばず、泉下に於て幸村が悅ぶことでござりませう」

家康　まつた、先刻幸村の、家臣の內にて英名高き、青木清右衞門といへる者これへと申せ。

信之　君の御許し蒙むる上は、御門のうちに控へ居れば、是れへと仰せ下さるべし。

一　委細承知仕る。それに控へし眞田の御家來召し連れられし清右衞門を、急いで是れへ引出し召されい」（ト揚幕のうちにて、）

三人　はあゝ。（ト辭して青木清右衞門、士卒三人附いて出來る。）

〽威風輝く君前も敵と思へば清右衛門、恐れ氣もなく打通るを、家康公は泰然と見遣りたまへば伺候なす、臣下の面々きつと目を附け。

上野　何樣彼れは昨年より是れまで數度の合戰に、城方よりして突いて出で、力戰なせし老練武者。

帶刀　見覺えあれど緣なくして、一騎掛けにて戰はねば、其姓名も知らざりしが、彼れが青木清右衛門よな。

一　關東勢の我々を、

二　毎度惱ます古狸、

三　假令君命なればとて、

四　面縛もせず此所へ、

五　召連れられしは其意を得ず、

六　こりや伊豆殿にもお似合ひなさらぬ、

一　近頃不念の、

六人　至りでござる。

信之　すりや清右衛門を縛さゞるを、手前の不念と仰せあるか。

一　いかにも不念。
六人　至極でござる。
　　へ詰ればツッと座を進め、
信之　そりやはや、あれなる清右衞門が我が陣中へ參りしを、お屆けもせず置いてこそ不念にも相成らんが、旣にお屆けなせし上、上意によつて君前へ只今呼出す淸右衞門、假令彼れめが戰場にて各方を惱ませしともそれを科とは申し難し、面縛せざるをお咎めある各方が僻言なり。
一　なに、我々が、
六人　僻言とは。
信之　さ、御存じなくば申し述べん、君の御前も憚らず申すも恐れ少なからねど、凡て軍は將たるものの不和より起る合戰ゆゑ、旗下に隨ふ兵士等はその下知を受け、討ちもすれ討たれもいたす修羅道に、鎬を削るが職務にして親子兄弟立ち別れ、鉾を交へて戰ふも武門の習ひ是非なきこと、然るに其將亡ぶか、又は和睦に相成る時は、誰か一人目途もなき軍を好んで戰はん、されば彼れめも戰場の鎧出立に引替へて賤しき者の姿となり、我が陣中へ來りしゆゑ面縛もせず其儘に、家來を前後に取圍ませ、君の御前へ召連れしは非常の大事を思ふゆゑ、各方には幸村の家臣の彼れ

故いたはりしと思召しての御懸念ならん、二心があれば我君へ屆けもなさず其儘に、竊に見のがし遣はせど、陣所へ止め置き屆けをなし君慮を伺ふこの信之、それを面縛せざるとて、手前の不念と仰せあるか。

六人　さ、それは。

信之　よも、不念とは言はれますまい。

上野　信之殿が清右衛門に繩を打たぬも罪なきゆゑ、其爲すところ誤りならず、まつた警固の面々が面縛せざるを咎めしも、名に負ふ眞田幸村の家臣に英名轟きし、清右衛門ゆゑ氣遣ひなし、非常を守る役目の表。

帶刀　それを立腹召さるゝも、身の潔白を不念なりと言はれしゆゑ君前にて、議論をお立てなされしも是れぞ二心なき證據、是非を論じて爭ふも君の御身を大切に思ふが故の事なれば、君にも惡しく聞し召されず、お聞き流しに遊ばすやう。

上野　偏に願ひ、

兩人　奉ります。

家康　警固の者の過言の段、信之遺恨に思ふまいぞ。

信之　はッ、恐入つたる其上意、身の潔白さへ立ちますれば、いかで遺恨に思ひませうや。

一　我々共も過言の段、

二　平に御容赦、

六人　下されい。

〽はや打解ける味方同士、名君詞を和らげたまひ、

家康　こりや靖右衛門、汝に家康問ふことあり、もそつと是れへ進んでよからう。

靖右　何事なるか御用とあらば、御前へ進むでござりませう。

〽悪びれもせず縁先へ、進んで席を構ゆれば。

家康　先刻これなる伊豆守より、上野之助へ届けしゆゑ、今般そちが城を脱け出で、主人の嫡子大助の遺言に依り母なる者を、信州諏訪の故郷へ送り届けるそれまでは助命なし度き願ひの由、豫め承知いたすが忠義の心底感じ入る、それに相違のあらざれば助命を得させ遣はさん、さゝ有體に申し聞かせよ。

〽仰せにはツと頭を下げ、敵と思ひし我も折れて悦び涙押し拭ひ、

靖右　武運に盡きし城方の旗下に隨ふ靖右衛門、仰せの如く一命を惜しむ所存はあらざれど、討死すべ

き期を延ばしてをめ〳〵出城いたせしも、主人の一子大助殿十六歳の若年ながら天性備はる孝子にして過ぎつる秋に信濃路より母なる者が大阪へ、遙々尋ね來られまして親子の對面望まれましても、主人幸村堅く戒しめ九度山村へ追ひ退け、落城いたす際までも對面の儀を許しませねば、切腹いたす期に至り拙者へ母御の身の上を、頼まれましてござりますれば、生恥さらす老の身も命延はり斯くの仕儀、面目次第もござりませぬ。

家康　して、又何ゆゑ伊豆守の陣所へ態々參りしや、是れにも仔細あるか。

清右　其儀は先日城内より主人の命にて使ひをせし平子源藏と申すもの、其儘陣所へ留め置かれ多分は存命いたし居らうと、母御の介抱諸共に頼む相手と志し、態々尋ね參つてござる。

ト事明白に述べければ、大將不便に思召され。

家康　むゝ、流石名譽の眞田幸村、そも入城のその日より父子の一命秀頼へ捧ぐる所存と聞きつるが其身ばかりか我が子にまで母の對面許さゞるは天晴義膽の武士なり、又大助も若年にて父の戒しめよく守り、逢はざる母を打案じ最期の際に遺言を殘して生害いたせしは、健氣といふも餘りあり其忠孝の厚きに免じ、助命は聞き濟み得さする間、心任せに信濃路へ主人を伴ひ立越えよ。

清右　すりや、御仁免下されて、助命をお叶へ下さるとや。

信之　寛仁大度の御許容うけ、拙者に於ても有難く御禮申し、
兩人　上げまする。
〽仁慈に重き頭さへ、いつか下りてひれ伏せば。
家康　帶刀近う。
帶刀　はッ。
〽何か安藤帶刀へ囁きたまへば心得て、御前を下り立つて行く。
トこれにて帶刀奥へはひる。花道より士卒一人走り出來り。
士卒　はッ、申し上げます。
上野　何事なるか。
士卒　越前家の御家臣西尾仁右衛門殿、眞田左衛門佐幸村の首級、御實檢を願ふと申し持參仕つてござります。
上野　是れへ通せ。
士卒　はッ。（ト花道へ引返してはひる。）
〽待つ間ほどなく本陣へ入來る西尾仁右衛門は、鬼の腕の心地なす首級を抱へ鼻高々御前遙

に頭を下げ。（ト花道より西尾仁右衞門軍兵二人附添ひ出來り。）

仁右　はゝツ、大阪方の大軍師眞田左衞門佐幸村の首級、持參仕つてござりまする。

上野　我君疾よりお待兼ね、急いで持參。

家來皆々　いたされよ。

〽家來と共に庭前へ席を設けて持參なす、首級の器差出せば、大將西尾に打ち向ひ。

家康　こりや仁右衞門、して其方はこの首級何れに於て討取りしか、事の仔細を言ひ聞かせよ。

仁右　はゝはつ、其仔細申し上げん。かねて君命下りし如く一昨日は正午より味方一度に總攻めと號令うけし關東勢、雲霞の如く八方より大阪城を取圍み、中にも主人越前家は眞田の丸へ攻寄せて、必死を極め戰ひしが、寄手の鋒先鋭くして防禦も今はこれまでと、敵も覺悟に及びしか城門左右へ押し開き、撃つて出たる猪武者、寄手も俄に崩れ立ち右往左往に散亂なし、四天王寺の門前まで餘儀なく勢を引揚げしに、落馬いたせし敵將一人自殺をいたす覺悟にや鎧を脱し門前なる、井筒のもとへ立寄つて水を喫して居つたるを槍をひつさけ渡り合ひ、名乘る暇なく戰ひしが手前の武運や强かりけん首級を討取り候へども、何者なるか相知れず殘念なりと思ふ折柄、眞田の陣へ豫てより間者に入りし鹿倉民部、其所へ通りかゝり、それぞ誠に幸村の首級に相違是れな

しと言はれて知つたる其の首級、影武者多き幸村ゆゑ僞首なるか但し又誠の首級にござりまするや、それに信之殿お出であらば、篤と御檢分下さるべし。

〽詞飾らず仁右衛門が、其日の次第を言ひ上ぐれば、

家康　伊豆守目利きいたせ。

信之　はゝはツ。

〽はツとばかりに座を進めば、眞僞如何と德川公、本多西尾も窺ひ居る、首桶引寄せ信之が若し僞首にあらざるかと、見れば骨肉同胞の紛ふ方なき弟の首級。

ト清右衛門寄るを信之留め、

やあ、君の御前を憚らず、假令主人の首級にせよ陪臣の身を顧みず、お許しなきに立寄りて無禮なるぞ控へ居よ。

清右　ぢやと申して。

信之　えゝ控へいと申すに、控へ居らぬか。

清右　はツ。

信之　篤と檢分仕りしが、是れぞ眞田幸村の首級に相違ござりませぬ。

家康　同胞の其方目利きいたせば相違なし、家來清右衛門、定めて名殘り惜しからん、それにて首級を見せよ。

信之　畏つてござりまする。こりや清右衛門お許し出でし上からは、そちもそれより名殘りを惜しめ。

〽あなたへ向つて緣端へ差出す首級を清右衛門、見上ぐる目には血の淚、口には言はねど主從と血筋の名殘り目前に、見るも哀れや入梅の雨、あたりも濕るばかりなり。

上野　今清右衛門が一目見るより、落淚せしは幸村が、首級に相違あらざる證據。

家康　諸葛臥龍が軍法にもをさ〳〵劣らぬ幸村も、討死せしは百計盡きしか、あたら軍師を殘念なるぞ。

信之　君へ敵對ふ幸村を、惜しませたまふ其の御諚、同胞たる拙者は元より冥加至極に。

兩人　ござりまする。

〽言ふも淚の曇り聲、始終を聞いて仁右衛門は、喜悅の眉を押し隱し。

仁右　亂軍中一方の血路を開き幸村には、秀頼公の御供なし、薩摩へ落ちしと下民らが街の風說いたすゆゑ、影武者なるかと存ぜしが御舍弟始め家來まで、誠の首級と言はるゝからは是れぞ拙者が大手柄。

上野　誠の幸村亡びし上は、是れにて四海泰平に納まる御代の時來り、君にも嘸かし御滿悅。

一　恐悦申し、

六人　上げまする。

家康　〽家康御機嫌斜めならず。

一旦我に敵たひし幸村なれど、斯くの如く討死なせし上からは、罪を憎んで其人を憎まぬ聖の敎へに習ひ、檢分なせし功に愛で、是れなる首級は伊豆守、汝に與へ遣はすぞ。

信之　はゝッ、御仁慈餘る其の御諚、これぞ凱歌を謳ひし後、故鄕へ歸るよき土産、有難く頂戴仕つてござりまする。

〽有難涙にかきくれて、賜はる弟の首級を見て、過ぎ越し方を思ひ出で。

今更甲斐なき事ながら先頃君にも其方が、智勇を深く惜しみたまひ、伯父隱岐守が内命うけ十萬石の領地を下され召抱へんとあつたるを、秀頼殿より頼まれて一度荷擔せし上は、再び他へは隨はぬと武門の意地を立て通し、遂に戰場にて討死なし四天王寺の松原にて露と消えたる其身の果て、屍を道路に晒すのみか斯くあさましき首級に逢ふは兄の身にて快からず、何故あつて其方は君の召しに應ぜざりしぞ、返す〴〵も信之は誠に殘念至極なるぞ。

〽流石眞身の兄弟に愼み深き信之も、君の御前を打忘れ悲歎に迫る恩愛を、見る人々も涙な

り信之はッと心附き。
はッ、君の御前も顧みず、幸村が君のお召しに應ぜぬは其身の不覺と思ふの餘り、益なき述懐思ひ出で恐入つてござりまする、何卒御宥免下さりませう。

仁右　何は格別討取りし首級が誠と極まらば、拙者に於ても安堵の思ひ、いざ〳〵お暇仕る。

家康　大阪方の大元帥左衞門佐幸村を、討ちし功は拔群ゆゑ、やがて賞與の沙汰に及ばん。

仁右　有難う存じ奉りまする。（ト此時幕の蔭より帶刀二品を持ち出來る。）

家康　こりや帶刀、二人の者にそれなる品與へ遣はせ。

帶刀　はッ、君より賜はる此の二品、有難く頂戴召され。

〽恩賜のたまもの與ふれば、青木ははッと押戴き、包みの中を開き見て。

淸右　やゝ、こりやこれお金と本國の、信濃へ赴く往來切手。

信之　はゝッ、殘る方なき御計らひ、有難く存じ奉ります。

上野　君の御武德四海に溢れ、

帶刀　小島に茂る草も木も、

仁右　靡く天下に、

皆々　治世の悦び。
家康　實にさゞんざの松ならで、
信之　爰も浪花の名所に、
上野　岸邊の松も色かへず、
帶刀　さしもに遠き海原は、
仁右　松の中と夕汐や、
清右　照り添ふ空は曇りなく、
信之　四民安々、
士卒　住吉浦、
皆々
家康　はて心地よき吉兆ぢやなあ。
ト皆々よろしくあつて

幕

茶臼山（終り）

音聞淺間幻燈畫

昔で言はゞ白柄組青山掛けて赤坂で人の恐るゝ黒鍬組猪飼が黄金の無心をばきかぬ氣性の權八は情もありて孝心の娘を形に作兵衛の賴みに惠む五十兩それを路用に牛窪馬淵が追掛け行きし追分宿噴火の爲に此の世から地獄に等しき苦しみの次第を書きし讀賣を見れば死せしと親嘉兵衛女房おちよも共々に淚にくれて送り火の門へ歸りし初藏が心にもなき愛想づかし死ぬと覺悟を信善へ身の言譯の腹切をとゞむる師匠の戶澤が說諭母のおちゑが發狂も娘が無事に納まれど納まり兼ねしは惡者の丈五郞が助けしゆゑ此のとりもどしに重內が眞劍勝負のはたしあひその夜おみのが繩を解き逃せしおなつが計らずも佐七にめぐり大切に趣向の新淨瑠璃

是萬代談柄

「淺間山噴火」は明治二十一年十月、中村座に上演された、作者七十三歳の時のことである。淺間山の大噴火を當てこんだ際物であつたせゐか、さして後々まで評判にはならなかつた。金本の權八といふ九代目の演じた赤坂の店頭役は、作者と親交のあつた金田の金八さんといふ貸元をモデルにしたもので、黑鍬組の話なども、金八さんの實話に依つたものだと傳へられてゐる。金八は卷頭の尺牘の中へ出て來る人物である。

書卸しの時の役割は、五世尾上菊五郞（道中師伊豆屋初藏、御家人猪飼丈五郞）、市川團十郞（店頭金本屋權八）、高砂屋中村福助（戸澤重内）、坂東家橘（手代佐七）、坂東秀調（初藏女房お千代）、尾上松助（御家人馬淵鄕藏）、尾上芙雀（信善の女房おちゑ）、岩井繁松（信善の乳母おしづ）、岩井松之助（信善の娘お夏）等であつた。

口繪にしたのは國周筆の錦繪であり、挿繪にしたのは上演と同時に歌舞伎新報社から發行された四六版型の活版本で、國周の錦繪を表紙とした上下二册本の體裁を示したものである。

大正十五年十月初旬

校訂者



手一間襖の押入戸棚其中一間段戸出這入り下手一間正面立派な神棚下手欄間へ紋附の提灯箱を並べて掛ケ上の所門ト口下の方九尺一間障子戸所口三尺の戸袋用水桶門たいに角行燈を掛け赤坂田町道中飾付蔵内夜ろの体裁にり親仁の拵へお千代前垂掛ケ世話女房の拵へ五兵衛六右衛門へ茶を出しなぞして居る下手に半次傳八の親分甚源し三これを両人持遊びと出し遊して居る此見得道中の修行者達

しれ世間の噂しに聞たより大きな事でムりますな（六右衛）まだ初蔵さんの所から何ンの便りもムりませぬか（お千代）度々お尋ね下さいまして有難うムりまそ一所に仕事に参りました此衆達は命が助り夕べ歸つて參りましたが初蔵からは今以て何ンの便りもムりませぬ（甚兵衛）助りました事ならば内へ兎もかれ便りをするまへおしらせすさにや成りませぬがけふ迄便りがムりませぬは多分死ンだでムりませう（五）道中筋も所により泥水を押出して往来が出来ねと聞ば飛脚の便りも常よりはいくらか遅くなりませう（六）一ツ宿屋にムつたらうが儘おまへ方は難を逃れ首尾よく歸つて來なそつたの（半次）運よく二人りが助りましたはお女中連ゆゑ道中も暮ぬ内に早く泊り湯へは入ッせ夜食を喰ひ寐るよもそこし早過ぎますからぶら／＼宿をひやかしに二人り迄で出かけましたが頃より好な酒が呑度立場酒屋で片足わげいつぱいやつて居る内に俄に淺間の山が鳴出し（傳八）ばら／＼石がふつて來るゆゑそりや大變と表へ欠出し向ふの寺の森の中へ逃こんだのが二人りが仕合せ二ッ三ッ抱へもある大石が淺間山から飛んで來るので軒を並べて家はつぶれ押に打れて死んだものはどの位だか知れませぬ（五）それはまア二人り共危ひ所を遁れたが（六）それからどうして歸らしやつた（半）夜の明るのを待兼て泊つた宿屋へ歸つて見れば家は殘らず潰れて仕舞お嬶さんや親方を尋ねましたが一向しれぬ飯を喰度く思つても其近邊に買人はなしつぶれ殘つた百姓家でおがむやうに結びを貰ひ（傳）それでやう／＼腹を拵らへ一ト先ヅ江戸へ歸らうと思つた所が十里四方二三尺灰

音聞淺間幻燈畫（淺間山噴火――五幕）

序幕

板橋宿立場櫻屋の場
赤坂桐畑小川屋の場

〔役名――道中師伊豆屋初藏、御家人猪飼丈五郎、劍術指南戸澤重內、信濃屋手代佐七、御家人馬淵鄉藏、信濃屋善兵衞、猪飼の下部作兵衞、御家人畑六、駕籠舁じぶくり勘太、同半次、同傳八、同多七、同萬藏、戸澤門弟中野與四郎、金本屋の若い者喜介、金貸與九兵衞、店頭金本權八。信濃屋女房おちゑ、作兵衞娘おみの、乳母おしづ、小川屋の下女おせん、櫻屋の下女おなか、同おむら、信濃屋娘おなつ等。〕

（板橋立場茶屋の場）――本舞臺四間の間上の方一間の出格子、此の下さゝらこの板羽目、この外後へ下げて下手へ折り返し三尺通り落間のある常足の二重、此の下の方藁葺內の庭の入口、扉を明け此の內庭の模樣よろしく、二重の正面に葭戸を建て切り、軒口に講中の札、納め手拭を大分に出し、庇へ張出しの暖簾を掛け、是れへ好みの暖簾をかけ、下手の柱へ御料理櫻屋と記せし掛行燈、よき所へ幅廣の床几を二脚出し、總て板橋宿立場茶屋の體、爰にあんぽつの駕籠を二挺おろし、半次、傳八、多

七、萬藏・江戸の駕籠舁の拵へにて汗を拭ひ立ちかゝり、おなか、おむらの茶屋女、盆へ茶碗を載せ駕籠屋へ茶を出して居る。此の見得馬士唄の合方へ富士講の鈴の音を冠せて幕明く。

なか　若い衆さん、お茶をお上んなさい。

むら　嘸お暑うござんしたらう。

半次　暑いの候の權八さんのと、土用明けになつてからめつぽふけえの此の暑さだ。

傳八　それに巣鴨から瀧の川あたりは日蔭なしと來てゐるから、背中がじり〳〵こげるやうだ。

多七　なんぼ半次にくりからがあつても、不動さまを見るやうに、火を背負つちやあたまらねえ。

萬藏　なんの事はねえ。瀧のやうな汗がだら〳〵落ちるのは、大山へでも登つたやうだ。

なか　今汲み立ての水を上げますから、手拭を絞つてお拭きなさい。

半次　板橋だけに愛嬌は、愛染さまから請賣りと見え、

傳八　こつちの姉えの世辭のいゝのと、手當のいゝのは感心だ。

むら　不動さまのお話しに、又背高が引合ひに出されますかと、ぞつとしました。

半次　おれもそこへ氣が付いたから、愛染さまへ飛ばしたのだ。

傳八　大山から板橋まで、滅法早く飛ばしたものだ。

多七　大山まで行かねえでも、
萬藏　瀧不動なら王子にある。
半次　これさ、禁句の話しは、緣切榎だ。

ト此の内おなかは手水盥の水を汲んで出る。駕籠屋皆々手拭を絞り、身體の汗を拭いてゐる。爰へ勘太土地の駕籠屋の拵へにて、上手より出來り、半次を見て、

勘太　こウ赤坂の半次ぢやあねえか。
半次　誰れだと思つたらじぶくり勘太か、それぢやあ手前はこつちに居るのか。
勘太　土地を喰ひ詰めよんどころなく、此宿へ來てくすぶつて居るが、手前はやつぱり赤坂か。
半次　去年手前が帆をかけてから、おらあ榎戸の方へ行つて遊んで居たが、やう〳〵不義理の目鼻が明き、つい此の間土地へ歸つた。
勘太　そいつアなんにしろ羨ましい。(ト床几へかける。)
傳八　此の宿などは江戸の內、悔む所はねえけれど、
多七　もう一宿も踏み出すと、がらり樣子が變るから、
萬藏　江戸に不義理な借りでもなけりやあ、迚も長くは居られめえ。(ト勘太思入あつて、)

勘太　ときに半次、爰で手前に逢つたを幸ひ、野暮な催促もしたくねえが、おれも此節大御難で相も變らず藥罐の蛸だが、手前が足を出した時、救つてやつた五貫の錢、耳を揃へてと云ひてえが、懷都合もあらうから、三貫ばかり返してくれ。

半次　イヤ折角だがそいつァ聞けねえ、いくら手前が御難でも、そりやあ過ぎ去つた盆の上の借だ、又返してやる場ぎやうもあらうが、おれもこれから旅へ出る、云はゞ口切りの初ッぱなから手前に出逢つて一貫でも、胸ぐらの錢を取られちやあなんだか氣持に障るから、けふの所は料簡しろ。

勘太　なんだ氣持に障る、此の野郎はおつな事を言やあがる。出づらであらうが歸りであらうが、互えに御難を救ひ合ふのが友達づくの附合ひだ、盆の上だからと云つて、爰だと云つて貸した錢に不思議はあるめえ。殘らず返せと云やあしめえし、五貫の所を三貫で負けてやるから返せと云ふのに、それが手前に分らねえか。

半次　さういふ手前が分らねえのだ。

勘太　なんでおれが分らねえ。

半次　出がけに下駄の鼻緒を切りやあネタがあつてもその晩は、出直しにするてつかの常で、何十里といふ旅をかけ、大事な客の供をする、出掛けに幾らか取られちやあけちがつくから斷るのだ。

勘太　此の野郎は、恥をかくのを救つてやつた恩人を、下駄と一緒にしやあがつたな。
半次　一緒にする譯ぢやあねえが、譬だから云つて聞かすのだ。
勘太　いや人を踏みつけにしやあがるのだ、けちがつくから斷るたア誰れに向つて云やあがるのだ。
　　　ト きつとなつて立ちかゝるを留めて、
傳八　これさ勘太、そんなに斷るな、出掛けでなけりやあ、おらッちが中へへひつて返してやるが、
多七　みんな出がけの旅先だ。
萬藏　歸りにきつと返させるから、
三人　けふは料簡しろ〳〵。
勘太　いやだ〳〵、待たれねえ。うぬがけちを棚に上げて、けちが附くと云はれちやあ、腕づくでも取らにやあならねえ。
半次　分らねえ事を云やあがるな。
勘太　どつちが分らねえか、問屋場へ來い。
傳八　これさ、盆の上の貸借だ。
三人　靜かにしろ〳〵。（ト留める。）

勘太　エヽ邪魔をするな。（ト三人をつき退け、）さあ野郎、來やあがれ。

ト半次の胸ぐらを取るを振拂ひ、

半次　なにをしやあがる。（トはり附ける。）

勘太　うぬ、おれを打ちやあがつたな。

ト半次へむしやぶりつく。これにて駕籠舁三人はよろしく留める、ごつちやの立廻り、爰へ上手より土地の雲助、大勢息杖を持ち出來り、此體を見て、

雲助大勢　相手は勘太だ、どうした／＼。

勘太　ぶたれたから、加勢をしろ。

大勢　合點だ。

ト馬士唄の合方きつぱりとなり、双方息杖にて打合ふ立廻り、茶屋女二人はびつくりして奥へ逃げ込む。よき程に後ろの庭口より初藏、好みのかつら、着流し尻端折り、脚絆、草履、銀拵への脇差し、道中師小ざしの拵へにて出來り、此の中へ割つてはひり、双方を留めて、

初藏　これさ、どういふ間違えか知らねえが、喧嘩はおれが預かつた。まあ／＼靜かにしろ／＼。

トこれにて江戸の駕籠屋四人はびつくりして、

四人　親分だ〳〵。（ト後へさがる。）

勘太　いや親分でも兄イでも、預ける事はならねえのだ。さあ野郎出やあがれ。（ト立懸るを留めて、）

初藏　預ける事が出來なけりやあ、あいつらに替つておれが相手だ。（トきつといふ。）

勘太　やあ。（ト後へさがる。誂への合方になり、）

初藏　土地の駕籠屋が通し駕籠の手代りにしてくれろといふのは、いつも極つた云草だが、あひの宿なら知らねえ事、中仙道の親宿で、おれの雇つた人足へ文句を附けて云ひがゝるは、此頃ふえた蚊とんぼか、くもなら目先きの見えねえやつ、相手になるからそれへ出ろ。

ト此の内大勢の雲助の内にて、初藏の顔を知つてゐるこなしにて、

大勢　おゝ、伊豆屋の親分だ〳〵。

ト跡へさがる、勘太も心附いて面目なきこなしにて下に居て、

勘太　親分眞平御免なさい、ツイ魂と睾丸が腦天まで上つたので、どなたが留めたか目がくらみ、濟まねえ事を申しましたが、去年まで赤坂に居て子分の衆の御贔屓うけ、毎度御厄介になりました駕籠屋の勘太でござります。

初藏　おれも見たやうだと思つたが、元赤坂に居たものか。何の遺恨で先棒になり、あいらに喧嘩をし

かけたのだ。

勘太　遺恨もなにもございませんが、去年赤坂に居た時分、半次の野郎に盆の上で五貫の錢を貸しましたから、爰で逢つたを幸ひに、三貫ばかり返してくれと頼むを聞かねえ所から、こんな間違ひになりました。（ト勘太前へ出て、）

半次　そりやあ親分かうでございます。盆の上で借りた錢を旅へ出がけに催促され、爰であいつに返しますのも、なんだか氣持に障りますから、歸りに返すと云ひましたを聞かねえ所から此の間違ひ、お前さんのお耳へはひつて、濟まないことでござります。

初藏　盆の上の借りにもしろ、貸は貸、借は借だ、旅へ出がけで氣に障ると云つて返さねえのは手前が惡い。中へはひつた不肖だから、おれが借は返してやる。

半次　いえ、それぢやあどうも濟みません。（ト初藏財布より金を三兩出して、）

初藏　さあ是をやるから、みんなにも笑つて一ぺい飲ましてくれ。（ト勘太こは〴〵取つて、）

勘太　親分こんなには入りません、あいつに貸したのは、五貫でござります。

初藏　五貫でも三貫でも、後はみんなに酒の錢だ。

勘太　これぢやあどうも濟みません、實の所は赤坂に嚊が預けてござりますから、半次に貸した錢でも

取り、尋ねてやりたく思ひました。これ〳〵みんな、お禮を申さうぜ〳〵。(トよろしく禮を云ふ。)

大勢　親分有難うございります。

半次　五貫の所へ三兩ぢやあ、

傳八　四貫相場にしたところが、

多七　胴を取つてもまだあまる。

傳八　仲直りなら一緒に行かうか。

初藏　エヽ、又下司ばるか、控へて居ろ。

勘太　それぢやあ親分御免なせえ。さあ〳〵、みんな來い〳〵。

ト右の合方にて、勘太先に雲助大勢上手へはひる。

半次　とんだ奴に出ッくはし、餘計な御散財をかけまして、親分どうも濟みません。

初藏　三兩ばかりやあどうでもいゝが、江戸と違つて旅へ出たら、是から先きを氣をつけてくれ。

ト此時馬士唄の合方きつばりとなり、上手より重内好みの鬘、ぶつさき羽織、大小にて袴をはしをり脚絆草履にて鐵扇を持ち、劍術遣ひの拵へ、後より與四郎の門弟着流し、大小、尻はしをり脚絆わらぢにて、割がけの荷物と木劍を肩へかけ出來り、

重内　初藏、いづれへ參る。（ト聲をかける。初藏重内を見てびつくりして、）
初藏　是は戸澤先生、どちらへいらつしやいました。
重内　同流の者が蕨宿へ、今度道場を開きしゆゑ、招かれ參つた歸りがけ、思ひがけなき所で逢つた。
初藏　それは御遠方を御苦勞さま、まづ〳〵是へお掛け下さい。
重内　然らば許しやれ。（ト床几へかける、初藏も同じく下手の床几へかけ、）
初藏　中野さまにも、御苦勞でござります。
與四　只今向うの茶店にて、お扱ひぶりを遠見いたし、先生にも御感心でござつた。
初藏　それでは今の喧嘩の騷ぎを、遠くで御覽なすつたか。
重内　雲助共の今の爭論、いかなる大事に至るかと遠見いたしをりしに、一人の町人扱ひに入り、事なく濟ませし扱ひぶりは、あつぱれなりと立寄り見れば、わが門弟の其方ゆゑ、師匠の身に取り悅ばしい。
初藏　かねての御異見守りまして、腕だてなぞは容易には、いたさぬつもりでござりまする。
ト爰へ奥より以前のおなか、おむら出來り、
なか　お若い衆さんのお支度は、

なら　これへ出してもよろしうございますか。
勘太　庭の縁側がよからうから、あつちへ出してやつて下さい。
なか　それでは、皆さん。
なら　あちらへお出でなされませ。（ト奥へはひる。）
半次　これは親分、
四人　御馳走でございます。（ト駕籠屋四人も奥へはひる。跡替つた合方になり、）
重内　して初藏には何用にて、いづれへ旅行をおしやるのぢや。
初藏　あなたもかねて御懇意の、田町の質屋信善さんの娘御を送りまして、信州小諸の御本家へ供をいたして參ります。
重内　それは初めて承はるが、定めて母か善兵衞殿が、同道いたして參られやうな。
初藏　いえ道中はあのお子に乳母が附いて參るばかり、それゆゑ弟が御恩になるお禮かたがた私が、宰領役について行きます。
重内　足弱づれの道中では、さぞかしお身も心遣ひ、いかなる譯で信州へあの息女をやらるゝか、是には仔細のある事ならん。

初藏　深い仔細もございますが、爰ではお話し申されぬ、丁度親御の御夫婦も王子の稲荷へ參詣ながら送つてお出でございますから、御迷惑でもお逢ひなすつて、委細をお聞き下さりませ。

重内　すりや兩親も、參りをるとか。

初藏　奧へ參つてをりまする。

與四　王子稲荷へ參詣と云はるゝも、亦意味ある事、親子の情と見えまする。

重内　いかなる次第か存ぜねど、小諸といへば江戸よりは行程凡そ四十一里。

初藏　それも平地と事かはり、碓氷三里の難所道。

重内　案じ過して兩親が、子を見送るも世間を兼ね、

與四　王子稲荷へけふの參詣、

初藏　子の可愛さは戸澤さま、又格別な、（ト床几を離れ立上るを道具替りの知せ、）ものと見えます。

ト此の模様馬士唄の合方、富士講の鈴の音にて、道具廻る。

（櫻屋小座敷の場）――本舞臺眞中二間中足の二重、本庇本縁、下手へ折廻し、廊下つゞきの心、上の方九尺廁の前面、此の前に石の手水鉢、下草のあしらひ、下の方後へ下げて九尺の小座敷、前面葭

戸の建てきり、二重の正面上手三尺の床の間、下の方腰張りの茶壁、平舞臺上下庭石樹木の好みよろしく、總て田舍の料理屋小座敷の體、爰におなつ娘島田髷、旅なりにて泣伏し居る。是をおしづの乳母、同じく旅なりにてなだめて居る。此の見得、合方にて道具留る。

しづ　もしお孃さま、どうしたものでござります、そりやもう淋しい田舍なぞへお出でなさるはお厭な筈、御尤もではござりますが、あなたのお身をお案じなされて、當分の內信州の御本家さまへお頼みになり、お預けなさるのでござりますれば、長いことではござりませぬ、たとひ御兩親がお出でなうても、御幼少よりお育て申した乳母が御一緒にをりますればお心丈夫に思召して、泣顏なぞを親御さまにお見せなされましてはなりませぬ。さゝあちらのお座敷へお出でなされて、御兩親へ御機嫌ようお暇乞ひをなされませ、さもない時は親御さまが、只さへ案じておいでの所、御心配を增させましては、第一御不孝になりまする。（トこれにておなつ顏を上げ、）

なつ　そりやもう乳母が一緒に居やれば淋しい事はあるまいが、とゝさまや母さまが案じられてならぬゆゑ、そなたと二人で信州の小諸とやらへ行く事は、どうぞおやめにしたいわいなう。

しづ　いえ、あなたより親御さまがたつた一人のお子樣を手放して遠い田舍へ、お遣はしになりますのは、どの樣だか知れませぬが、江戸のお內へおく時は、大間違ひが出來るであらうと、お案じ過

しに御本家へお預けになるのでござりますれば、その親御さまへ又一倍、御苦勞かけては濟みませぬ。

なつ　ならう事なら家中が一緒に行つて御本家と、入かはりにならるゝやう、どうか工風はあるまいかいなう。

しづ　田地田畑澤山に御持ち傳へと聞きまする御本家さまと、なんとして入かはりなどになられませう。

なつ　それがならずばもう一人、連れて行きたいものがあれど。

しづ　仲よしのお友達の、お春さんでござりまするか。

なつ　いえ、あのお子ではないわいなう。

しづ　どなたか、云うて御覽じませ。

なつ　云つた所が無駄ぢやわいなう。

しづ　お無駄なら、おつしやりますな。

なつ　えゝもう、じれつたい。

しづ　えゝ。

なつ　どうでも江戸に居たいわいなう。（ト又泣伏す。）

しづ　こりやまあ、困つたものぢやなあ。

ト爰へ下手の緣傳ひに、佐七の手代着流しにて出來り、此の體を見て、

佐七　お孃さま、是にお出でござりますか。

しづ　それ〳〵、佐七どのが、お迎ひに參りました。

佐七　あまりお手水がお長いから、見て來いとおつしやいました。

しづ　今方あちらのお座敷へ、どなたかお出でになつたぢやないか。

佐七　戸澤先生が劍術の道場開きの歸りがけだと、今お立寄りになりました。

しづ　それでは定めて御用があらう。さあお孃さま、いらつしやい。

なつ　わたしや淚がとまらぬゆゑ、そなた一人先へ行き、そこをよいやうに賴むわいなう。

しづ　あなたを一人爰へおき、參るわけにはなりませぬ。

佐七　それではわしがおなだめ申して、直お跡からお連れ申さう。

しづ　お氣に入り故お前なら。

佐七　えゝ。

しづ　いえ、お氣にとつくり落入る樣、よくお前から賴みまする。

佐七　早く行つてあげて下さい。
しづ　それでは佐七どの、頼みまする。
　　トおしづ思入あつて緣傳ひに下手へはひる。おなつこなしあつて、
なつ　これ佐七、わしやどうあつてもそなたに別れ、小諸とやらへは行かれぬから、行かぬ樣にしてたもるとも、連いて退いてたもるとも、よい智慧出してたもいなう。
　　ト膝に縋る。佐七あたりへこなしあつて、
佐七　是はしたりお孃さま、行かぬ樣にの、連れて退けのと、勿體ない事おつしやりますな。（ト合方かはつて、）親御さまにはお前樣が、黑鍬谷の丈五郎に無法な事でもされる時は、娘一人を捨てねばならぬと御心配をなされまして、御本家さまへ今度のお賴み、それをいやだとおつしやつて逃げ隱れでもなさる時は、罰があたつてそれこそはどんな憂目に逢はうも知れず、私とてもお前樣と言ひ替してはをりますが、お主の爲めにはかへられず、別れて時節を待ちますから、あなたもどうぞ御本家へ、お出でなされて時節の來るを、お待ちなされて下さりませ。
　　ト始終あたりを憚つて云ふ。
なつ　いやわしが居ぬその時は、言ひ替したを反故にして、そなたは好いた女を拵へ、勝手な事をする

であらうが、わしや見ず知らずの田舍へ行き、乳母と二人で江戸の空を眺めてくよ〳〵案じるより、いつそ死んでしまひたいわいなう。

佐七　いえそれとてもわづかな內、丈五郞さへ諦めてあなたを思ひ切りますれば、直にも江戸へお呼び申し、親御さまにも御安心、私とてもあなたといふ身分に過ぎたお孃さまと、云ひ交した身で餘所外の女子に心が移りませう、死なうなどゝの無分別は、假にもお出しなされまするな。

なつ　そんならきつと辛抱して、時節を待つてたもるとか。

佐七　あなたと夫婦になられますを、祈つて時節を待ちまする。

なつ　それが眞實誠なら、なんぞ證據を見せやいなう。

佐七　起請を書いて此の間、取りかはしたではござりませぬか。

なつ　起請はあれどわしの事を、お孃さまのあなたのと差向ひでも云うてゐやるが、わしや水臭うてならぬわいなう。

佐七　つい云ひ馴れて居りますので、口にはあなたと申しますが、心の內はおなつどの。

なつ　あれ、まだどのだけ多いわいなう。

佐七　それでは、おなつ。

なつ　旦那さま。（ト嬉しさうに傍へよる。）

佐七　あもし、誰ぞ來ると、（トしやんと居直るを道具替りの知せ）ぢき、悟られます。

トあたりへこなし、此の模樣なまめいた合方にて、道具廻る。

（櫻屋奥座敷廣間の場）――本舞臺四間通し中足の二重、本庇本緣附き、中石の沓ぬぎ、正面一間古風な床の間、つゞいて地袋違ひ棚、下の方襖の出はひり、二重の上手緣側つゞきの心にて折廻しの本緣此の上手建仁寺の垣根にて見切り、下の方板塀の後ろを見せ、よき所に柴垣、その外石燈籠松の木のあしらひよろしく、總て奥座敷廣間の體、上手に以前の重內住ひ、眞中に善兵衞、更けたる質屋の主人、羽織着流しにて住ひ、此の傍におちゑの女房丸髷着流しにて住ひ、下手に以前の初藏住ひ、能きところに酒肴の道具を取りちらし、おしづ前へ出て重內へ酒を勸めて居る。平舞臺の緣先に以前のおなか、おむら立ちかゝり、誂へ物の肴を運び居る。此の模樣田舍めきたる、賑やかな合方にて道具留る。

なか　こちらさまのお誂へは、それでよろしうござりまするか。

ちゑ　こちらは是でよろしいから、先生のお弟子の方を、よく氣を附けて上げておくれ。

むら　お銚子は如何でござりまする。
ちゑ　まだあるが、跡を賴むよ。
なか
むら　畏りました。（ト下手へはひる。）
善兵　思ひがけなく先生が、是へお立寄りになりますとは、是もなんぞの深い御緣、斯樣に悅ばしい事はござりませぬ。
重內　手前も計らず初藏に逢ひ、御愛女の御旅行と聞き、なんとやらお名殘り惜しく、送別の席へ列なりましたが、シテいかなる次第で御息女を、信州の御本家方へ當分お預けに相成るか、それを承知いたしておきたい。
善兵　それでは初藏どの、まだ先生へお話し申さつしやらぬか。
初藏　何も氣遣ひはござりませぬが、あまり端近でござりますから、旦那さまからお聞きになるやう、先生へ申上げました。
ちゑ　おしづ、お肴を取つてお上げ。
しづ　はい〳〵。（ト小皿へ肴を取分け居る、合方かはつて、）
善兵　娘を本家へ預けまする次第と申すは先生にも、かねてお目を附けられまする黑鍬谷の丈五郎が、

娘をくれとの無理所望、すげなく斷るその時はどんな仇をされるも知れずと體よく申して斷りしを、向うは弱身へ附け入りしか、組下とかいふ惡者が日々參つて種々の强談、それをきつぱり斷れば、手籠めに連れて參るまいとも申されませぬ亂暴者に、ほとんと當惑いたしまして望まれまする娘さへ、内にをらずば仕方なく、泣き止みませうと當分の間惡者等には極内で、預けますのでござりまする。

ト此の内下手の柴垣の蔭より以前の勘太、顏を出し窺ひ居る、皆々是れに心附かず、

重内　さりとてはお氣の弱い、高の知れたる御家人どもが、いか程强談いたさうともなんの恐るゝ事がござらう。然し後日の難を思はれ、竊に他國へお預けあるとは無事を計りし御遠察、よき御分別に相違なけれど四十里からある御遠方へ、わざ／＼お預けなされずとも江戸の内にて人知れず、預ける所がありさうなものぢや。

ちゑ　生憎と又是ぞといふ親類緣者もござりませぬゆゑ、いつそ遠くへ離れました本家へやるがよからうと、取極めましてござりまする。

初藏　ならう事なら旦那さまか、御新造さまが御一緒で御道中をお送りなら、お孃さまもお仕合せといろ／＼お勸め申しましたが、御用多にてお二人共御旅行がなり兼ねますから、おしづどんと私が

引受けましてござりまする。

重內　イヤ御兩親が一緒でなくとも、當時小差しで指折の此の初藏が附いて參れば、道中筋は大丈夫、劍術なぞも壯年より餘程學んで心得居れば、よいお見立でござつたわえ。

善兵　それでは戸澤先生の、初藏どのはお弟子でありしか。

初藏　いえお弟子と申すもおこがましい、生兵法ゆゑどなたにも、申したことはござりませぬ。

　ト此の內上手の椽傳ひに以前の佐七、おなつ出て、佐七はおなつに先へ座敷へ行けといふ思入をして上手へはひる。おなつ是非なくこちらへ來り、下手へ佇む。

なつ　戸澤さま、ようお立寄り下さいました。（ト辭儀をする。）

重內　おなつどのにも親御に別れ、知らぬ他國へ行かるゝは、嘸便りなく思ふであらうが、其の身の難を避けん爲め、當分の儀と承れば、必ず心配せぬがよい。

なつ　信州へ參りまするは是非ないことでござりまするが、又あと〱にて親達が、どんな難儀をいたしませうかと、それが苦勞でござりまする。

初藏　いやそのお案じには及びませぬ。お跡の事は先生が、萬端御承知下されたれば、黑鍬組がお見世へでもあばれこんで亂暴いたせば、此の先生が早速に懲らして下さるお約束、お跡は案じはござ

りませぬ。

重内　山の手邊をあばれ歩き、市中へ害をなすやから、折がなあらば打据ゑて懲らしやらんと思ひをれば、善兵衛殿のお見世へでも參りし節は何時でも、手前が參つて引受けまする。

善兵　さうお請合ひ下されば、大安心でござりまする。

ちゑ　召上るものもござりませねど、せめて御酒なと澤山に、お上りなされて下さりませ。

しづ　お燗がさめてござりますれば、お熱いのを申し附けませう。

重内　いや〳〵それは御無用に下さい。もはや十分過してござれば、是で御納杯にして下されい。

善兵　お相手のない御酒宴ゆゑ、嘸御迷惑にござりませう。

初藏　不斷ならば私がお相位はいたしまするが、此の旅行中は禁酒ゆゑ、失禮御免下さりませ。

重内　いや手前なぞは獨酌で、きこんに飲むが勝手の方ぢや。

ト奚へ下手より以前の與四郎、荷物と木刀を持ち出て來り、

與四　お寄り道もござりますれば、お立ちがよろしうござりませう。

重内　如何さま、もはやお暇いたさう。

善兵　まだよろしいではござりませぬか。

重内　大塚邊へ一二軒寄つて參る所もあれば、是にてお暇いたしたい。

なつ　それではどうぞあと〳〵を、よろしうお願ひ申しまする。

重内　其の儀は安堵いたしてござれ。

與四　馳走になつてござりますれば、よろしうお禮を願ひまする。

重内　供の者まで御馳走に預かり、御配慮千萬忝うござる。

善兵　お禮で痛み入りまする。

ちゑ　せめて門まで先生を。（ト立たうとするを。）

初藏　惣名代に私が、お送り申すでござりませう。

重内　然らば御夫婦、おいとま申す。

なつ　ようこそお寄り下さりました。

重内　道中お身を大事にめされ。

初藏　門までお送り申しませう。

ト唄になり、重内先に與四郎、跡より初藏附いて下手へはひる。是にて時の鐘になり、

善兵　あの鐘はもう七つ、そちも出立せずばなるまい。

ちゑ　それはさうと最前から、佐七が見えぬがどうしたか。（ト爰へ上手より以前の佐七出て、）

佐七　お客さまゆゑ次の間に、差し控へてをりました。

なつ　もう先生がお歸りゆゑ、

しづ　その遠慮には及びませぬ。

ト下手より以前の初藏先に、駕籠屋四人駕籠を舁き出來り、

初藏　時刻がよろしうござりますから、そろ〳〵お支度なされませ。

善兵　それでは娘、隨分達者で。

ちゑ　煩はぬやうにしやいなう。（ト愁ひのこなし。）

なつ　もうお別れでござりまするか。

ト本意なきこなしにて、佐七の方を見る。佐七これを紛らす思入にて、

佐七　やがて目出度くお歸りを、お待ち申すでござりまする。

ト此の時下手の柴垣の蔭より、以前の勘太頰冠りをして顏を隱し出て、下手へ逃げてはひろ。おしづ是を見て、

しづ　誰やら樣子を。（ト駕籠屋四人きつとなつて、）

四人　どれ、引とらへて。（ト追ひかけて行かうとするを）

初藏　はて、土地のやつらだ。（ト四人を留めるを道具替りの知せ）捨てゝおきやれ。

ト駕籠屋四人は駕籠の戸を明ける、おなつおしづ平舞臺へ下りる。善兵衞おちゑ佐七愁ひのこなしにて是を見送る模樣、合方にて道具廻る。

（赤坂桐畑、料理茶屋二階の場）――本舞臺一面の平舞臺、上の方畫心に腰張りの茶壁、正面二階の手摺、此の向うへ山王の山を見たる夜の遠見、下手のつま同じく茶壁、此の裾掃き出しまど、此の脇階子の上り口、下の方綺心に同じく二階の手摺附き、此の向う遠見の書割、平家の屋根など切出し、總て赤坂桐畑の料理茶屋二階の體、よきところへ燭臺を燈し、上手に鄕藏畑六の浪人、着流しにて住ひ前に酒肴を取散らし、おせんの茶屋女酌をしてゐる。下手に女郎屋の若い者、詫びに來て居る。此の見得古風なはやり唄にて道具留る。

若者　誠にはやお氣の毒さまでございます。何とも申し譯がございませんが、一口召上つて御機嫌をお直しなすつて下さりませ。

鄕藏　飮んで機嫌が直したけりやあ、貴樣達の差圖は受けねえ、たゞで遊ばうと云やあしめえし、天下

一般通用の錢を拂つて遊ばうといふのに、客にならねえとはどういふわけか、その因緣から聞かうぢやあねえか。

若者　いえ別に因緣もござりませんがあなた方に限りませず、どなたさまでも御近邊のお方と知れてはお客にせぬのはいつたいの事でござりますから、どうか御勘辨下さりませ。

畑六　近邊の者が客にならざア、江戸四里四方は天下の膝許、一人も客にやあならねえ譯だ、どこの奴だか今夜の客を、一軒殘らず取調べて、引擦りおろすからさう思へ。

若者　いえ實の所はあなた方に女郎衆を出しましては、外のお客に不勤めをされますから、それでお斷り申します。

せん　藤助どんのお云ひ通り、女郎衆が浮氣になつては抱へ主が困りますので、お客にしないのでござりますから、まあ御機嫌をお直しなすつて、一ト口お上りなさいまし。

鄕藏　おつウ油をかけやあがるが、そんな瞞しに乘るやうな、我々だと思やあがるか、これこんな肴ぢやあ飲まれねえ、活きた人間の喰ひさうな鯉のあらひでも持つて來い。

せん　お生憎と今晩は、あらひは皆になりました。

鄕藏　なに、ねえ事があるものか、内になけりやあ廣い江戸だ、どこへでも行つて捜して來い。

せん　下へ參つて聞いて見ませう。（トおせん梯子の口へはひる。）

畑六　麥飯といふ位だから、此の赤坂の女郎の客は田舍でなけりやあならねえ筈だ、一人でも江戸の客が上げてあつたら承知しねえぞ。どれ、行つて引擦りおろしてやらう。（ト立上るを留め、）

若者　まあ〳〵お待ち下さりませ、左樣な事のないやうに、かうして一ト口差上げてお詫びをするのでござりますから、どうぞ御勘辨下さりませ。

鄕藏　いやいくら手前が誤つても、客にならねえと突出された、恥は生涯すゝげねえから、手前の内へ押込んで、それだけの禮をするのだ。

若者　いえお斷りは申しましたが、突出すなどゝ手荒い事をいたした覺えはござりません。

鄕藏　突出さなけりやあ客にしろ。

若者　お客には出來ませんから、お斷り申します。

鄕者　客に出來ざあ突出したのだ。

若者　いえ、左樣な譯ぢやあござりません。

ト困つて居る、はやり唄きつばりとなり、下手梯子の口より丈五郎、好みの鬘着流し、大小浪人組の拵へにて出來り、

丈五　御兩所、いかゞ召されたのだ。
鄕藏　猪飼氏、よくござつた。
畑六　不埒な次第を聞いて下さい。（ト丈五郎上手へ住ふ。若い者はうんざりせし思入にて）
若者　こりやあ驚いた。
畑六　なんだと。
若者　いえ、お揃ひになりましたら、猪飼の旦那さまにお執成しを願ひます。
丈五　わりやあ金本の若い者、なにか彼れが御兩所に、無禮でも働いたのか。
鄕藏　猪飼氏お聞き下さい、今夜我々が久々にて金本屋へ押上り、浩然の氣を養はんとせしに、客にならぬと引卸され、遊所において武士たる者が、恥辱を取つては勘辨ならぬ。
畑六　なにか彼れより聞くところ、近所のものは客にせぬのが仲間一般の規定とやら、さすれば天下の膝許の江戸四里四方は皆近邊。
鄕藏　これより參つて金本屋の、家を調べたその上にて、他境のものなら勘辨いたせど、
畑六　市中のものと見る時は、引擦りおろして我々が、恥辱の返報いたす所存。
鄕藏　なんと無理では、

兩人 ございますまいがな。

丈五 成程それは御尤もだが米搗きばつた同然な、若い者に談じた所が、その理合も分るまいから、金本屋から店頭の權八を呼び、彼を談じて趣意の立つ樣なさるがよからう。

若者 いえその主人の名代に、お詫に私が參りました。

丈五 いや蟲けらでは分らぬから、權八に來いとさう申せ。

若者 それではどうも、私が。

丈五 えゝ、ぐづ／＼するとぶつたぎるぞ。

若者 へえい。（ト是非なく梯子の口へ下りて行く、跡を見送つて）

鄕藏 どうでござる。丈五郎殿、此の酒肴は向う持ちにて、お腹の痛めぬ酒宴でござれば、どん／＼とお上りなされい。

丈五 向ふ持ちとは何者が、此の酒肴を出したのだな。

鄕藏 どこぞで一杯傾けんにも囊中殆んど逼迫ゆゑ、客にならぬを元より承知で金本屋へ押し上り、ごたつきましたその擧句が、爰の帳場をもたせるといふ反間苦肉の策でござる。

丈五 とても帳場を持たせるなら、藝者を呼びあげ酌でもさせ、十分遊興いたしたければ、面のよいの

を二三人、口を掛けてはどうでござるな。

鄕藏　それは所詮無駄な話し、當時盛んの赤坂藝者が、此の界隈で顏の惡い、我々共の居る座敷へ口を掛けても出る筈なし、それより爰の下女を呼び、酌でもさせて十分に飮んで歸るが無事でござらう。

畑六　イヤ赤坂にはかはりものが大分をるとの評判ゆゑ、又御家人の凄味な所に思ひ附いたやつがあらうも知れぬ。

丈五　あれば狂人でござらう。

鄕藏
畑六　イヤ、狂人とは御挨拶だ。

ト三人酒を飮み居る。合方きつばりとなり、下手梯子の口よりおみの、島田髷、着流し小間遣ひの拵へにて出來り、下手へ手をつかへ。

みの　旦那さま、是にお出でござりましたか。

丈五　出さきを捜して何しに來た。

みの　與九兵衞殿がお留守へ參り、是非今日は旦那さまに御面談がいたしたいと、座つてをつて歸りませぬゆゑ、お出での先を捜しまして、お連れ申してござります。

丈五　なんだ與九兵衞を連れて來た、イヤ氣の利かぬ事をするやつだ、居ねえと云へ〳〵。

みの　それでも下でお聲が聞え、おいでの事を知つてをります。

丈五　下で聞いて居やうとも、當人が居ないといへば、これ程慥な事はない。

　　ト爰へ梯子の口より與九兵衞、羽織着流し金貸の拵へにて出で、

與九　居ないと云へもないものだ、けふばかりは猪飼さま、もう日延べは聞かれませんよ。

　　ト腹の立つ思入、丈五郎わざと面目なきこなしにて、

丈五　いやこいつは、一番閉口々々。（ト天窓を押へて差し俯く、與九兵衞前へ出て）

與九　短氣は損氣で金貸が腹を立つのはまだ若いと、年の功だけ氣を長くけふまで我慢をして居たが、二階に居ながら居ないと云へとは、あんまり馬鹿にした仕方だ、腰辨當で留守へ行き日の暮れるまで待つたからは、もう片時も待たれない、三月しばりに二十兩一分で貸した金、元利揃へてたつた今、耳を揃へて返さつしやい、太いと云はうかづるいと云はうか、呆れ返つてものが云はれぬ。（ト叩き立て云ふ、これにて丈五郎顏を上げ、）

丈五　もう云草は、それぎりか。

與九　なんだと。

丈五　借りがあるから素町人に、誤つてをればよいかと思ひ、よくも斯樣な席へ來り、身共に恥辱を與へたな。

與九　恥をかくのが悔しくば、借りを綺麗に返すがよい。

丈五　ヲヽ今返すから待つてをれ。(ト刀を拔いて、)それ、延金で返してやる。

ト目先へ突きつける。これにて與九兵衞びつくりして、後へひつくり返り、

與九　エヽ、何をするのだ〳〵。(トぶる〳〵顫えて居る、丈五郎つけ入りきつとなつて、)

丈五　これよく聞け、無利息ならば知らねえ事、高利を取つて金を貸せば、云はゞこつちが御得意さまだ。その身共に恥辱を與へ、只でも金を掠めたやうに、朋輩達の居る前で惡口されては料簡ならぬ。サア延金を請取らぬか。

與九　貸した金の催促に來て、手打にされてたまるものか。

ト下へ逃げて行かうとするを、丈五郎兩人へ目配せする、兩人呑み込み、

鄕藏　與九兵衞とやら、まあ待ちやれ。

與九　へイ、何御用でござりますか。

鄕藏　借があるゆゑ猪飼氏は、無念をこらへて歸すか知らぬが、席に列なる我々は、只此の儘には歸さ

れぬ。

畑六　身共も只今かやつめに云分ありと思ふ所、なぜ一言の挨拶なく、づか〳〵是へ押上り酒宴の席を妨げた。

郷藏　云譯なければ無禮打、

與九　さあ、それは。

畑六　生けては歸さぬ覺悟しろ。(ト兩人刀を持つて立ちかゝる。)

與九　あゝもし〳〵待つて下さい〳〵、居て居ないといふ聲を聞き、つい腹が立つて云ひ過ぎましたが傍においでのあなた方に挨拶せぬと云はれましては、一言もござりませぬ、そこの所はお目こぼしで、どうぞ御料簡下さりませ。

丈五　命が惜しくば御兩所へ、不承金でも置いて行け。

與九　催促に來て不承金を、置いて行くのはばか〳〵しい。

郷藏　イヤ、金なぞは望みでない。

畑六　そのそツ首が入用だ。(ト又立ちかゝるを、)

與九　いえ少々なら出しますす〳〵、出すから命はお助け下さい。

丈五　首代なれば定法の七兩二分とも申すのだが、身共も手前に借りがあれば、中へはひつて取扱ひ、五兩出したら負けてやらうわ。

與九　堪忍五兩負けて三兩、そこの所を三兩位で。

郷藏　いや値切るならよしにしろ。

畑兵　そんな首でも、五兩は安いわ。

與九　あゝ仕方がない、それ五兩。（ト金を出す。）

丈五　金を置いたら早く歸れ。

與九　これでは所詮貸した金も。

三人　なんだと。

與九　いえ、あしたお宅へ上ります。（トそこ〳〵に梯子の口へはひる。跡に三人顏見合せ刀を鞘へ納め、）

丈五　いやはや、たはけた奴もあるものだ。（ト笑つて居る。おみの是を見て呆れしこなしにて前へ出て、）

みの　お宅へ御用はござりませぬか。

丈五　いや歸るには及ばぬから、爰に居て酌をしろ。

みの　親父が外へ出ましたので、お宅に誰も居りませねば、

丈五　イヤ明つ放しにしておいても、安心といふあの浪宅、目ぼしい物は一つもない。
郷藏　只目ぼしいのは此のおみの、譜代親仁の作兵衛の娘にしてはとんびが鷹だ。
畑六　その金箱が爰に居れば、成程これは御安心だ。
丈五　娘と云へば信善の、返事はなんと云ひました。
郷藏　いや今朝程も兩人にて、强談に出かけましたが、内中出拂ひ今日は、王子へ行つたと申す事。
畑六　所詮あれでは緣談も、まづ九分九厘無駄でござれば、あのおなつよりお手許の金箱へ手をおつけなされい。
郷藏　そりや我々が云はずとも、元より素早い御大將、疾くに親仁を說きつけて、もうない／＼で出來て居ませう。
畑六　これおみの、旦那のお腰を毎晩擦るであらうな。
みの　えゝもう、左樣な事は存じませぬわいな。（トつんとする。）
丈五　いやこれはとんだ御嫌疑だが、こんな子供がどうなりませうぞ。
郷藏　お手が附いても附かいでも、お古を承知で手前が申受けたいものでござる。
畑六　いやお手前では可愛さうだ。丁度似合ひの夫婦なれば、手前が妻に申し受けたい。

郷藏　可愛さうとは御挨拶、年は上でも手前の方が、まだ雁首がふめるつもりだ。
畑六　踏めるか踏めぬか當人に踏ませて見るが一番早い。これおみのぼう、どつちがよいな。
みの　その樣な事をおつしやいますと、私はもう歸りますわいなあ。（ト立たうとするを。）
丈五　これさ、あれは常談だ、もういやな事は云はぬから、爰に居て酌をしろ。
みの　はい。（ト德利をとり上げ見て、）お熱くして參りませう。
郷藏　いや、ぬるくば呼んで直させる。（ト手を叩く、梯子の口より以前のおせん出來り、）
せん　あらひを見せに遣しましたが、いまだに戻つて參りません。
畑六　肴はどうでも燗がぬるい、早く熱くして持つて來い。
せん　はい、お直しでございますか。（ト德利をとつて、）只今下へ猪飼さまに、お目にかゝりたいと申しまして、駕籠屋が尋ねて參りました。
丈五　駕籠屋が尋ねて來たとは、覺えはないが逢つてやらう。
郷藏　それぢやあ二階へ通してくれ。
せん　はい〳〵畏りました。（ト德利を持ち梯子の口へはひる。）
畑六　駕籠屋とはおつなものが、下へ尋ねて來たものだ。

丈五　又借りのある奴なら、おどしていくらか取つてやらう。
郷藏　ときに五兩の不承金は、どういふ割になりますな。
丈五　いづれ五兩は三ツ割もの、手前が慥に預かつておきます。
郷藏
畑六　いや三ツ割とは忝い。（ト爰へ梯子の口より、以前の勘太出來り、）
勘太　黒鍬谷の旦那さま、御機嫌ようございますか。（ト下手へ佇ふ、丈五郎見て、）
丈五　誰かと思やあじぶくり勘太、下へ來たのは手前であつたか。
勘太　へい、わたくしでござります。
郷藏　去年貴さまは不義理だらけで、近在の方へ行つたと聞いたが、
畑六　もうほとぼりのさめた時分と、又赤坂へ歸つて來たか。
勘太　おつしやる通り足だらけで、江戸に居られず板橋で雲助をしてをりましたが、旦那に内々お知らせ申して、褒美がお貰ひ申したく、それでわざ〳〵出て來ました。
丈五　内々おれに知らせたいとは、どんな話しか早く云やれ。
勘太　お差合ひはござりませんか。
丈五　手前の知つた朋友と跡は譜代の家來の娘だ、遠慮はないから早く申せ。

勘太　それぢやあお話し申しますが、けふ此の田町の信善の娘が、信州小諸にある本家へ當分預けられると、櫻屋といふ板橋の茶屋の奥にて立ち振舞、どういふ譯かと探つて見ると、猪飼といふ御家人が娘をくれと强談に、內へおいては面倒ゆゑ、遠い田舍へ預けると、聞き出しましたは金のつる、旦那に知らせて御褒美に預かりませうと出て來ました。

トこれにて三人さてはといふ思入あつて、

鄕藏　そんなら內中連れ立つて、王子へ行つたと申したは、

畑六　夫婦揃つて旅へ立つ娘を送つて參つたのか。

丈五　こいつア一番信善の、狸親仁に計られたか。よく敎へてくれた、忝い。（ト以前の金を一兩出し、）こりやア少ねえが、けふの褒美だ。（ト勘太金を取つて、）

勘太　有難うござります、ちよつとお知らせ申したばかりで、一兩の金にありつくとは、骨折らずにうまい仕事だ。

鄕藏　聞けば手前の女房は、長屋に稼いでゐるとの事だ。

畑六　久しぶりに顏を見せ、今夜は泊つて行くがいゝ。

勘太　嚊は兎もあれ二三軒、不義理な所へ顏を出し、お蔭で土地へ歸られます。

丈五　女房が安心するやうに、ちつとも早く行つてやれ。
勘太　それぢやあ旦那、お二人さん、これでお暇いたします。
　　ト梯子の口へはひる。入違つて下より、以前のおせん出來り、
せん　作兵衛さんといふお方が、お娘子に逢ひたいと、下へおいでゞござりまする。
みの　旦那さま、ちよつと行つて參ります。
丈五　大方迎ひに來たのであらう、なんの用か聞いて來い。
みの　姉さん御苦勞でござんした。（トおみの、おせん梯子の口へはひる。跡三人思入あつて）
鄕藏　いやなに丈五郎どの、向ふでこつちを計つたら、こつちも向ふの裾を搔き、途中で娘を捲上げる
　　といふ、うまい趣向はござらぬか。
丈五　その趣向も思ひ附きだが、先きへ立つのは路用の金、五十兩ばかり欲しいものだ。
　　ト此の時梯子の口より權八好みの鬘、羽織着流し、店頭のこしらへにて出來り、
權八　早速お詫に出ます筈を、用達しに出て今歸り、大きに遲くなりました。
　　ト下手へ住ふ。丈五郞丁度よいといふ思入にて、
丈五　おゝ權八どんか、よく來た、ずつとこつちへ進みなせえ。（ト是より替つた合方になり）

權八　何か先刻若い者がお見それ申した御立腹に、あるじを寄越せと此の二階でお待ちの事を聞きまして、内へ歸ると其の儘に早速出ましてござりますが、黑鍬谷で以前から、お馴染深いお三人さまどう云ふ事の行違ひか、粗相の所は權八めに負けてやつたと思召し、御勘辨下さりませ。

丈五　男を賣る權八が膝を抱いての其の挨拶、それ程までに賴むなら顏に免じて我々も、勘辨しまいものでもねえが、そのかはり又こつちにも、賴みがあるが聞いてくれるか。

權八　そのお賴みとおつしやるは、どんな事かは存じませんが、次第によつたらお顏づく、聞かれぬ事もござりませんから、おつしやつて御覽じませ。

丈五　外でもねえが此の三人、急に信州、いや、駿州府中まで出向いて行かねばならぬので、路用の金にさし支へ、たんとの事は入らねえが、行つて來る迄五十兩ばかり用達てはくれまいか。

權八　折角のお賴みゆゑお三人さまのお賴みを立て、御用立てたうござりますが、ぴか〳〵光る眞鍮の金具は棚に飾つても、餘計な金は一兩でも内に遊んでをりませねば、金錢づくのお賴みなら、まあお斷り申します。

丈五　いや表を張れば内證の苦しい事も知つて居るが、三田の三角音羽にも勝ツてはやる赤坂で、一と呼ばるゝ店頭、五十や百は算段の出來ねえ顏でもなからうと、男を見込んで賴むのだが、金の無

權八　心は聞かれねえとか。

男と見込んでお賴みなら御相談にも乘りませうが、弱い家業の女郎屋へあげぬを承知で押上り、ごたつくかはりに金を貸せと云はぬばかりのこのお賴み、御家人衆のこわもてに、恐れて無心を聞きましては、同役火消三河町の渡り中間金毘羅行き、又はさし賣遊び人と、數限りのねえ錢貰ひで、貧乏しにやあなりません、それらの妨ぎをする爲めに、盆暮二季の側を打ち、めりを見込みの開場所も御免の二字はないにもせよ、隱し賣女はしませんから名のない金は出されません。

丈五　貸されなけりやあ貸せねえと、只斷りやあ濟む事を、同役火消やさし賣の錢貰ひ同樣だと、ぬかしてわりやあ斷つたな。御家人なれど黑鍬の組でも由緒の此の三人、場所もあらうに茶屋小屋の二階でけちを附けられちやあ、此の儘跡へは引かれねえ、取るに足らねえ麥飯の切盛をする手前如きを、相手にするも不承知だが、武士に生れたこれも意地、金が貸せざあ十軒の見世は勿論長屋まで、取り潰しにて赤坂の土に仭寄つた血の雨を降らせて恥を雪ぐから、首を洗つて待つてゐろ。

權八　泥水家業はしてゐますが、朝晩二度づゝ湯へはひり、洗はねえでも淸い首、お待ち申してをりますから、いつでも取りにお出でなせえ。

丈五　溜池近く掘抜きも濁つた水で洗つた首、泥ッくせえを不承して、ひやつく氷の切味で刀の錆にしてやらうわ。

權八　然し刃物の切先が、わしの身體へ芥子程も、觸つた日にやあ此の土地で、子分も多い金本屋、容易に首は取れますめえ。（ト立たうとするを、）

鄕藏　これ〳〵そこが思案ものだ、貴さまも首を取られるより、命がはりの五十兩、貸しせえすれば濟む事だ。

畑六　是が二本と三本と纏めた金なら四の五のと意地張る事もあらうけれど、命にかはりやあ安い金だ。

權八　いやおどされて金を出したと、此の後世間で云はれちやあ、頭と云はれる甲斐がねえ。その扱ひはお斷りだ。（ト云ひ捨て立つて行くを、）

丈八　權八待て。

權八　まだ御用でござりますか。

丈五　子分を賴みに此の二階を、逃げて用心する氣だらうが、手前一人の强情から人騷がせをしようより、望みかゝつた其の首を、爰で取るからおいて行きやれ。

權八　成程それもよからうか。（ト元の座へ直る、合方きつぱりとなり、）先頃氷川へ出來上つた神樂堂なら

丈五 丁度いゝが劍の舞を茶屋小屋の、二階でさせるも氣の毒と實は遠慮をして居たが、お望みならば眞劍の、勝負は試合の面入らず、てんてこ舞ひでもおやんなせえ。

丈五 捨てる命のふてくされ、口は立派にたゝいても、どうで活洲のかこひ鯉、利根から河岸へ廻つて來る本場の魚とは行くめえが、腕に覺えの庖刀で急所を知つた活作り、客に文句を云はれぬ樣、料つてやるからそれへ出ろ。

權八 一と口に云ふ山の手の鯉のあらひも活物に、泥ッくせえと思ふか知らぬが、利根につゞいた市川に、本家本元正眞の看板打つた金本屋、尾鰭はけちでも腸に腐れのねえが江戸自慢、さあすつぱりとやつて下せえ。(トぢつと思入。)

丈五 その肚胸なら手料理も、こたへがあつて面白い。どれ、切味を見せてやらうか。

ト刀を持つて立ちかゝる、梯子の口より作兵衞、中間の親仁にて以前のおみのを連れて出で來り、

作兵 あゝもし旦那さま、しばらくお待ち下さりませ。

丈五 いや、そちなぞの知らぬ事、いらぬ留めだて控へてをれ。

作兵 いえ控へてはをられません、あなたが爰で店頭をお切りなされば騷ぎになり、傍に居合はすお二人まで、よもあんかんでは居られますまい。元のおこりは五十兩の金さへあれば濟みます事、旦

那樣へ私が調達致してあげますから、切るのはお止めになされませ。

郷藏　譜代親仁の作兵衞が、どうして金の工面をするか。

畑六　五十兩といふまとめた金、調達するとは覺束ない。

作兵　さあ出來るか出來ぬか此親仁に、どうかお任せ下さりませ。

丈五　然らばそちに任せるから、金の工面をして見やれ。

作兵　まづ〳〵お控へ下さりませ。（ト丈五郎上手へ控へる、作兵衞思入あつて、おみのを連れ權八の側へ行き、）もし權八どの、お見かけ申して親仁めが、ちとお願ひがござりまする。

權八　わしを見かけて頼みがあるとは。

作兵　貸されぬといふ五十兩を、わしに貸しては下さりませぬか。

權八　なんと言ひなさる。（ト合方になり。）

作兵　さゝ見るかげもない此の親仁に、五十兩といふ大金を只ではお貸し下さるまいが、ふつゝかながら此の娘、年一ぱいに賣りましたら三十兩や四十兩の値打はあらうと思ひますから、娘を形にお取りなすつて、御不承なれど五十兩、わしに貸しては下さりませぬか。

丈五　いえその相談はよしにしやれ、家來の娘を形にあづけ、金を借りては武士が立たぬ。

作兵　いえ、それゆゑ直談に權八どのへわしが賴み、あなたのお身を案じまして、娘が健氣な心根をお察しなされて旦那さま、聞かぬふりして下さりませ。みのとゝさん諸共長の年、御恩になりし御主人樣へ御恩返しが致したさ、どうぞお許し下さりませ。

トよろしく思入、權八感心のこなしにて、

權八　いやその料簡が感心だ、いかにも賴みを聞きませう。

作兵　すりや、お聞濟み下さりますか。

權八　あぢにからんだこわもての、無心は只の五兩でも聞くわけにやあいかねえが、主人へ御恩を返す爲娘を預けて五十兩、かせとあるなら分かつた話、丁度わきから奉公人の言ひ込みあつて見に行かうと、持ち合してゐる五十兩、それぢやこんたに廻しませう。

ト五十兩出して作兵衞の前へおく。

作兵　これは早速御承知で、直ぐに金子をお渡しとは有難うござります。よろしい樣に證文をお書きなすつて此娘を、お預かり下さりませ。

權八　いや證文もいらなけりやあ、こんたの娘を金の形に預けるにも及ばない。

作兵　それどはどうも私が。

權八　はて、たとひ命を取られるとも、御家人衆におどされて金を出したと言はれては、世間へ對して顏が立たぬが、忠臣孝子の頼みを聞き、金を出すのは立派でいゝ、貸すといふのも遣つた心だ。

作兵　どう致しまして大金を、お貰ひ申しては濟みませぬ。お借り申して御不承でも娘をお預け申さねば、親仁の心がすみませぬ。

權八　はて、その遠慮には及ばぬといふに。

ト きつといふ、これにて丈五郎、郷藏、畑六顏見合せ感心の思入あつて、

丈五　いやあつぱれなその俠氣、身共も武士の意氣張に、血を見ぬうちはと思つたが、事のわかつた料簡を聞いちやあ刃は當てられぬ。

郷藏　又作兵衞の忠義といひ、娘おみのゝ孝心を、汲みわけみれば不便なもの。

畑六　こりや此儘にすませねば、こちらも武士の名折れになります。

ト 作兵衞件の金を、丈五郎の前へ持ち行き、

作兵　さあ御入用の五十兩、お請けとり下さりませ。

丈五　氣の毒だが折角の、そちが親切納めておかう。

權八　それで浪風治まつたら、こつちは直に出船と仕よう。

作兵 それでは娘も證文も、
みの あなたはいらぬと、
兩人 おつしやりますか。
權八 二人にやつた五十兩、その心配にやあ及ばねえ。
丑五 權八無禮はゆるしてくれ。
權八 いえ、こちらも失禮御免下さい。（ト唄になり、權八下手梯子の口へはひろ。）
鄕藏 それ、送つてやれ〳〵。
作兵
みの はい〳〵、左樣いたしませう。（ト作兵衞おみの同じく梯子の口へはひろ。跡に三人思入あつて、）
鄕藏 おつな筋から五十兩、まづは首尾よくお手に入り。
畑六 猪飼氏、御安心と申すものだ。（ト丈五郞件の金を取り上げ思入あつて、）
丈五 おどしかけたら五十兩、望み通りに出さずとも二十か三十取れようと、山でかゝつたこわもてでも向うがてつかで手に乘らず、實は困つてゐた所譜代親仁の作兵衞が、扱ひに入り此金が、手には
ひるとは悅ばしい。
鄕藏 かうして見るとけれんで行く、あぶないはしの近道より、

畑六　どこがどこ迄通りのいゝ、本街道を行くに限る。
丈五　さう極つたら三挺の、駕籠で急がせ跡追かけ、
鄕藏　半日おくれも足弱の、連れに向ふは手間取りがち、
畑六　こつちは酒手のめりを出し、ぬかせる杖も金次第、
丈五　あしたあたりは熊谷の、四里の丁場で引とらへ、
鄕藏　いや應なしに此の江戶へ、つれて歸るか左もなくば、
畑六　泊りへ連れ込みおどしつけ、跡はどうとも御勝手だ。
丈五　それぢやあ直ぐに出かけよう。
鄕藏　ついでに駕籠も帳場持ち。
畑六　下へ言ひつけ、乘つてまゐらう。
丈五　駕籠に丁場は、（トにつこり笑ふた木のかしら、）こいつも緣だ。

ト立上つて身支度をする。此模樣騷ぎ唄にて、

幕

二幕目

信州淺間山噴火の場

〔役名――道中師伊豆屋初藏、在所女房お民、百姓長作、同六兵衞、同八右衞門、同七藏。長作女房お牛、武藏屋女房お秋、同娘おつゆ、お民娘おつる、同悴梅太、同竹次、同お龜、同おきく等。〕

（淺間山噴火跡の場）――本舞臺淺間山の灰の降りし心にて、一面の鼠幕、舞臺の花道共同じく鼠の布を敷き詰め、舞臺上下に四尺程の張物の石二つ三つ、その他小さき石あたまを置き、總て淺間山噴火跡、飛び飛りし石灰の積りし體よろしく、誂へ山の崩れし音にて幕明く。と右の鳴物にて上手より思ひ〳〵の仕出し、包みを背負ひ、又老人子供を背負ひ、病人を肩へかけなどせし者行違ひ、上手へはひる、○△□の三人跡へ殘りて、

○　淺間山も其以前燃え拔けた事があつたさうだが、久しく煙りの出るばかりで、こんな事はあるまいと思ひの外の今度の大變。

△　これ見さつしやい、十人でもかつぐ事の出來ない、こんな石が降るのだから、家も藏もたまりやあしない。

□　軒を並べてぐわら〳〵と、家が潰れてしまつた上、これ此の通り灰の降るので、向うがさつぱり

わからない。

○ 時々火勢の光りがあるので、向うが少し見えるのだ。

△ 何しろ二三里も先へ、逃げて行かねば安心ならねえ。

□ 又吹き出すと石が降るから、降らねえ内に逃げませう。

○△ それがいゝ〳〵。

ト右の鳴物にて、三人荷を持ち下手へはひろ。よき程に鳴物打上げ、大薩摩になる。

〽それ信州に名の高き淺間ヶ嶽は上野の、國の境にまたがりて、常に山中火氣多く絕えぬ煙りを敷島の大和歌にも詠むとかや。

〽時しも七月六日の夜、空に電光輝きて、俄に鳴動なせしかば、こはたゞ事にあらずとて人々驚くひまもなく百千の雷一時に、落ちしが如き音なして噴火と共と山崩れ、忽ち人家を押潰し老若男女の叫ぶ聲、天地も崩るゝばかりにて、實に萬代の話草、すさまじくも又恐ろしゝ。

ト大薩摩の切れ、知らせに附き、鼠幕を切つて落す。

（淺間下追分宿、旅籠屋の場）――本舞臺一面に家の潰れし誂への道具、上下に枝の折れし樹木、向う切出しに人家の潰れし中遠見、此の後ろに油畫風に淺間山煙の中に見ゆる遠見、所々に大石を多く置き、總て淺間下追分宿の旅籠屋、大石にて潰れし體、はげしき鳴物にて道具納まる。と右の鳴物にて、上手より百姓六兵衞、七藏、八右衞門、何れもやつしなり鍋、釜、摺鉢を冠り、逃げて出來り、

六兵　やれ〳〵恐ろしや〳〵、すんでの事で家が倒れ、押しに打たれて死ぬ所、危い命を助かつた。

七藏　三人共運のいゝのは九右衞門どんが大病で、明神樣へお百度を上げにいつたが仕合せだつた。

八右　内に居たなら地獄落しの、鼠同樣潰されて、今頃は六道の辻に迷つて居たであらう。

六兵　何んにしろおれなぞは、厄介のねえ一人者だが、二人の衆は女房があるから嘸心配な事だらう。

七藏　所がおれも仕合せと近頃内の都合がわるく、二三日跡に女房を江戸へ奉公に出しましたから、きやつは案じて居りませう。

八右　そりやあよい事をさつしやりました。三人の内女房持はわしばかりだが潰されて、死んでしまへば仕合せだ。

六兵　なに、仕合せとは。

八右　ろくでもねえつらをして、年中間男をしやあがつて、亭主に恥をかゝせるから、今潰されゝばわ

しの罰だ。

七藏　そんなに間男をしたのかね。

八右　貴樣などもくさい方だ。

七藏　馬鹿な事をいはつせえ。

ト右の鳴物ばた〳〵にて、上手より長作百姓やつしなり、はだしにて手拭で目を押へ駈け出來り、

長作　あゝ恐ろしや〳〵、何の因果で此樣な恐ろしい目にあふのだろう。（トおい〳〵泣くを三人見て、）

六兵　や誰かと思つたら、新田の長作か。

七藏　よう貴樣は助かつたな。

八右　何をそんなに泣かつしやるのだ。

長作　おれは寐酒を飮まうと思つて、酒を買ひに出掛けたばかりに、潰されずにしまうだが、大事の女房を潰しました。

六兵　おゝお半女郎を潰したのか。

七藏　やれ〳〵それは氣の毒な事だ。

八右　嘸力落しだらう。

長作　力落しの何んのと云つて、お半ばかりでも悲しいのに先月の犬の日に五月の岩田帶をさせた大事の大事のわしの胤、一粒物の腹の子を産まれもせずに殺したが、悲しくてなりませぬ。

六兵　それは〳〵悲しからうが、こなたさへ助かれば、又新しいのを持つたがいゝ。

七藏　子供は直に出來るから。

八右　そんなに泣くにやあ及ばねえ。

長作　いや〳〵お半に死なれゝば再び女房は持ちましねえ、菩提の爲に坊主になつて、諸國へ修業に出掛けます。

六兵　それはえらい思ひきりだ。

七藏　しかしお半女郎も外へ出て、

八右　助かつたかもしれねえぜ。

長作　どうぞ助かつてくれゝばよいが。（ト長作泣く、此時上手にて）

お半　長作どのいなう〳〵。

長作　や、長作どのと呼ぶ聲は、慥かにあれは、

三人　お半女郎だ。

ト上手より、お半田舍娘腹の大きい拵へ、もゝ色木綿のねまきを出し、裾をはしをり泣き乍ら出て、

お半　や、長作どのか。（ト長作に縋りつき、）

長作　おゝお半か、よう助かつた〱。

お半　お前も無事で、嬉しい〱。

三人　嘸まあ嬉しい事だらう。

長作　どうしておぬしは助かつた。

お半　納戶の方がすこし殘り、匐ひ出るすきがあつたから、そこからもぐつて出ましたが、でつかい腹とおいどがつかへ、やつとの事で出ましたが、潰れた家の上を歩き下ッ腹がすじばつて、あるく事が出來ませぬ。

長作　おゝ歩けぬならばおぶつてやるから、案じるな〱。

六兵　丁度二人はお半長作、桂川の淨瑠璃もどきで、

七藏　こりやあおぶつて行くがいゝ。

長作　さあ〱、早くおぶされ〱。（ト背中を出す。）

お半　あい〱。（トおぶさらうとして、）あいたゝゝゝ。

長作　どうした〳〵。（トお牛をおろす。）

お牛　でつかい腹を押したらば、中の子がつぶれますべい。

長作　子が潰れたら大變だ、こりやあどうしたらよかんべい。

八右　千手觀音におぶはつせえ。

長作　成程それがよかんべい。（ト長作お牛を背中合せに背負ひ、立上る。）

お牛　灰が目へはひつてならねえ。

長作　目をねむつて居たがいゝ。（ト長作重さうに花道へはひる。）

六兵　長作もおのが名に似て、鼻の下の長いやつだ。

七藏　それはさうと一里四方大がい家が潰れたから、何處へいつたらよからうな。

八右　何處といふ當もなければ、まづ夜のあけるのを爰で待たう。

　　トやはり前の鳴物にて、上手よりお民在所女房の拵へ、抱子を背負ひ、おきくやつしなり女の子の拵へ、梅太若衆かづら、竹次奴かづら、お龜銀杏髷、何れもやつしなり、お民手拭を持ち、これより段段につながり出來る。

お民　助けて下され〳〵。

五人　助けて下されく。
六兵　隣村のお民どん、助かつたか。
三人　やれく、仕合せだつた。
お民　明神樣へおまゐりに子供を連れて行つたので、わしらは助かりましたけれど、この厄介を喰はしてくれる亭主が内で潰されました。あすから喰はしてくれてがない、どうしたらようござりませう。
六兵　勘助どのは潰されたか。久しい馴染であつたッけが、やれく氣の毒なこんだ。
七藏　さうして爰へ連れて來たのは、みんなおめえが生んだ子か。
八右　大そうな子供だな。
お民　まだ此他に親類へ、呉れてやつた子が三人、里にやつた子が二人。
六兵　それはなかく大勢だが、惣じて子供は幾人あるのだ。
お民　内に六人他に五人、十二人こしらへようと、骨を折つたが一人たりない。
八右　勘助どのはひよわいが、ようそんなに拵へたな。
お民　中にはまじりのたねもあります。

八右　大方そんな事だらう。
つる　これかゝさん、内は潰れてしまつたが、是から何處へ行くのぢやえ。
お民　何處もかしこも潰れたから、行かうといふ當がないから、野宿をするより仕樣はない。
梅太　とゝさんと一緒なら、外へ寐てもこはくないが、
竹次　かゝさんばかりでは、さつきのやうな猪が出たら、
かめ　姉さん初めわたしらも、みんな喰はれてしまひませう。
きく　早くとゝさんの所へ行きたい。
つる　いくら行きたいといつたとて、とゝさんは山が崩れ、
梅太　死んでおしまひなされたから、
竹次　もう歸つてお出でゞない。
かめ　おとなしくして居やいの。
きく　いやだ〳〵、とゝさんの所へ行きたい。
つる　とゝさんは死んだといふに。
きく　とゝさんが死んだらば、おいらも死にたい。（トおきく泣く。）

お民　おゝ尤もだ〳〵、そなたばかりか此母も、どのやうに骨を折つたとて高の知れた女の業、赤を入れて六人の子供は育てられぬから、わしから先きに死にたいわいの。
つる　かゝさんが死ぬならば、
梅太　みんなも一緒に、
五人　死にたいわいの。
お民　年端も行かぬそち達を殘して行けば黄泉のさはり、死ぬと覺悟をした上は、六人一緒に死なうわいの。（トお民おきくを抱きしめ泣く。）
つる　お前がそんなに泣かしやると、
竹次　みんなも悲しく、
皆々　なりまする。（トみな〳〵泣く。百姓三人も貰ひ泣きして、）
六兵　これ〳〵お民どの、お前がそんなに泣いてはいけぬ。勘助どのが死んだ上は、是から亭主になりかはり、
七藏　田畑の仕事は言ふに及ばず、二人前の稼ぎをして、此の子供らの足手をのばし、
八右　村でも古い家だから、位牌所の絕えぬやう、氣をしつかりと持たねばいけぬ。

お民　それでも女の手一つで、いくらわしが稼いだとて、所詮其日が送られねば、育てる事がなりませぬ。

六兵　そんなにくよ〳〵云はつしやるな、女やもめに花が咲くと、又いゝ事が必ずあらう。

七藏　就いては子供もそれ〴〵に、手内職でもしたならば、

八右　少しは内の足しになり、暮して行かれぬ事もあるまい、

つる　是からわたしら四人も、

梅太　畑仕事に雇はれたり、

竹次　又は草履や草鞋を造り、

かめ　お前の手助けしませうから、

つる　どうぞ死なずに、

五人　下さりませ。

お民　お前達がさういふなら、死ぬのは思ひ止らうわいの。

三人　おゝそれがよい〳〵。（ト床の淨瑠璃になり、）

〽時しもはげしき震動に、人々あはやと打ちおどろき。（ト誂への震動の音になり。）

六兵　やあ又震動がして來たから、
七藏　何處へ吹き出すことか知れねえ。
八右　なんでも早く逃げるが勝だ。
お民　かういふ時には足手まとひ、
つるかゝさん早く、
五人　逃げませう。
お民　はぐれぬ樣に早う來い。
〽又も砂石の降り來れば怪我せぬ内に早逃げよと、右往左往に一生懸命、こけつまろびつ逃げ行きけり。
ト是へはげしき鳴物を冠せ、誂への石を降らす、皆々あわて逃げまはり、ごつちやになつて上手へ逃げてはひる。
〽降り來る灰に朦朧と日ざしもしれぬ空中に、噴火の光りきら〳〵と、實に電光の如くにて、いと物凄き折こそあれ、潰れし家の家根裏を、打こはして初藏が、屋根へ這ひ出で吐息をつき。

トやはり石の鳴物、電氣の光りを見せ、能き程に正面の屋根をこはし、初藏亂れし鬘鉢巻諸所へ疵を受けし心にて、油紅をつけ、屋根へ這ひ出で、ほつと思入あつて、

初藏　やれ嬉しや、空が見えた。

ト詠への合方、かすめて震動の音、初藏ほつと思入あつて、

淺間山は燒け山にて昔燃え出た事があつたと、かねて話に聞いてゐたが、思ひがけねえ昨夜の災難、淺間山が燃え出したといふ聲諸共ぐわら／＼と、天地も崩るゝ音がして忽ち家が潰れてしまひ、はつと思つて起き上れば、運よく風呂場の脇が殘り、危ふく命は助かつたが、預かつて來たお孃樣は、ばゝあどんが連れ出して呉れゝばいゝがさもなければ、所詮お命はむづかしいと、心も空にこゝかしこ潰れた家の下をくゞり、聲を限りにお名を呼んだが、返事のない故もし外かと屋根をこはして這ひ出て見れば西も東も潰れた家のみ、どんな事でも恐れねえ此の初藏もあつけにとられ、實に途方に暮れたわえ。

〽流石豪氣の初藏も途方にくれて思はずも、尻邊にどうとなる山音、諸方に人の名を呼ぶは物凄くこそ聞えける。

ト屋根の上へどうと下に居て、途方に暮れし思入、此の時上下にて、人の名を呼ぶ聲する。

諸方で人の名を呼ぶは、見えねえ者があると見える。ばゝあどんが氣をきかして、連れ出してくれゝばいゝが、何にしろ脇の方をおれも是から呼んで見よう。（ト立上りあちこちを見て、）お孃様お孃様、お夏さま〳〵。

ト是より床二挺の合方へ震動を冠せ、初藏呼び乍らあるく、上手よりおつゆ江戸風の娘の拵へ、はだしにて走り出で來り、

つゆ　どうぞ助けて下さりませ。

初藏　や嬉しや、お夏様か。（ト初藏間違へて傍へ行きいたはる。）

つゆ　いえ〳〵、わたしやおつゆでござります。（ト初藏おつゆを見て、）

初藏　お夏さまと思つたが、お前は一つ宿屋へ泊り、宵に廊下で見かけた娘御、よう助かりなすつたな。

つゆ　早く庭へ出ましたので、危い所を助かりました。

ト初藏思入あつて、

初藏　此の子が助かる所を見れば、お夏様も庭へ出て、御別條がないかも知れぬ。聲を限りに呼んで見よう。お孃様々々、お夏さま〳〵。（ト上手へ行きかける、おつゆ留めて、）

つゆ　もしどちらへ行つてよい事か、江戸から來たれば道が知れぬ。どうぞ家のある所迄、お連れなされて下さりませ。

初藏　連れて行つてあげたいが、わたしが江戸から預かつて來た、お孃樣が見えなくなつたから、連れて行つて上げられねえ。

つゆ　そりやさうでもござりませうが、そこをお慈悲にわたしをば。（ト初藏に縋る。）

初藏　お氣の毒だがこつちが大事、お前を連れては行かれねえ。（トふり拂ふ。）

つゆ　そんならどうでも。

初藏　人に構つちやあ居られねえ。（トおつゆを突きのけ上手へ行き、）お孃樣々々。（ト呼ぶ。）

つゆ　えゝ悲しい事ぢやなあ、母樣いなう〳〵。

〽呼び乍ら行く後姿、不便と見やる目の先へ年も行かざるおとゞひが、手を引きつれて母を呼びさまよふさまに胸迫り、ためらふ所へ尋ね來る、よそじあまりの女房が、

ト呼びながらおつゆだらしなきなりにて向うへはひる。初藏これを見て不便だといふ思入、爰へお龜おきくの手を引き出來り、

かめ　かゝさん〳〵。

ト泣き乍ら下手へはひろ。上手よりおあきすこしふけし商人の女房のこしらへ、はだしにて、娘やアいと呼び乍ら出來り、

あき　もし、十六七の娘をば、お見掛けなされませぬか。

初藏　そりや江戸の娘御かえ。

あき　はい、左樣でござりまする。

初藏　それなればたつた今、向うの方へ行きなすつた。

あき　有難うござりまする、あいたゝゝゝゝ。（ト下に居る。）

初藏　おかみさん、どうしなすつた。

あき　氣をもんだので、癪がおこり、あいたゝゝゝゝ。

初藏　そりやあ此中で、お困りだらう。

あき　誠に申兼ねましたが、娘の所迄私を、お連れなされて下さりませ。

初藏　連れて行つて上げたいが、わたしも大事の娘御の行方が知れず搜して居るから、連れて行つて上げられねえ。

あき　さういふ事では無理にもと、お願ひ申されませぬわいな。（ト初藏こはれし垣根の竹をとつて、）

初藏　苦しからうがこれをついて、追つかけて行きなせえ。

あきえ　有難うござりまする。（トおあき杖に縋り花道へ行き、）娘やアい〳〵。

ト呼びながら花道へはひる。下手より竹次梅太うろ〳〵と出來り、

竹次　おつかアやァい。

梅田　姉えやアい。（ト呼びながら上手へはひると、家の後ろよりおつる出で、）

つる　弟やアい、妹やアい。（ト呼びながらおつる花道へはひる。初藏これを見て、）

初藏　いづれを見てもあはれな有樣、此の世からなる地獄だなあ。

〽親は子を呼び子は親を、呼ぶも哀れなありさまに、思はず知らずばら〳〵と、露の雫に袖濡らす折からはげしき山風に、砂石を飛ばす山蔭より、駈け來る猪に初藏は牙にかけられころ〳〵〳〵、かけ行く跡を見送りて、命拾ひに吐息つくこなたをさして子を失ひ、十羅刹女の如くなる氣も半亂の女房が。

ト初藏うれひの思入、此時風の音はげしく、早笛になり上手より屋根の上へ誂への猪飛んで出て、初藏牙にかけられ、ころ〳〵と落ちる。猪は花道へはひる。初藏跡を見送りちつと思入、上手より以前のお民子を失ひ、うろ〳〵と出來り、初藏を見て、

お民　もし、五人連れの子供をば、お見掛けはなされませぬか。
初藏　慥かに今の女中は猪に、
お民　え、猪に喰はれましたかえ。
初藏　出逢つたからは、命はあるめえ。
お民　それは悲しい事だなあ。
初藏　思へばふびんな、（ト下に居るな木の頭。）ことだなア。
お民　どうしますべい〳〵。
トお民泣き心々の思入よろしく、山おろしカケリにて、ことだなア。
ひやうし幕

三幕目

赤坂田町初藏内の場
同新町專壽寺前の場

〔役名〕――道中師伊豆屋初藏、劍術指南戸澤重内、信濃屋手代佐七、初藏父嘉兵衞、駕籠舁くりから牛治、同猪の熊傳八、專壽寺の住職了善、令長屋長兵衞、同六右衞門。初藏女房お千代、信濃屋女房

おちゑ、初藏一子峰松等。〕

（赤坂田町初藏内の場）――本舞臺三間の間平舞臺、上手欅鏡板の押入、戸棚眞中一間葭戸の出這入り、下手一間茶壁の出入り、屋敷の帳面を掛け、正面立派な神棚、下手欄間紋附きの提灯箱を並べて掛け、上の方一間折廻し葭戸、いつもの所門口、下手の方九尺一間腰障子、臺所口、三尺の戸袋、用水桶、門口に岐阜提灯を提げ、平舞臺に角行燈を置き、總て赤坂田町道中師初藏内夜の體。爰に嘉兵衛白髪かづらやつしなり、親仁の拵へ、お千代前垂掛け世話女房の拵へ、五兵衛六右衛門の合長屋見舞に來てゐる。是へ茶を出しなどしてゐる、下手に半次、傳八の駕籠舁着流し、三尺帶にて峰松やつしなりの忰、これを兩人持遊びを出し遊ばして居る。此見得、盆中の修行者題目太鼓木魚の音にて、幕明く。

五兵　淺間山の燃え出したは、世間の話しに聞いたより、大きな事でござりますな。

六右　最早十日になりますが、まだ初藏さんの所から、何の便りもござりませぬが。

千代　度々お尋ね下さいまして有難うござります、一緒に仕事に參りました此の衆達は命が助かり、昨夜歸つて參りましたが、初藏からは今以て何んの便りもござりませぬ。

嘉兵　助かりました事ならば、内は兎もあれ信善さまへお知らせ申さにやなりませぬが、けふまで便り

がございませぬは、多分死んだでございませう。

五兵　道中筋も所により、泥水を押出して往來が出來ぬと聞けば、飛脚の便りも常よりは、いくらか遲くなりませう。

六右　一つ宿屋にござつたらうが、よくおまへ方は難を脫れ、首尾よく歸つて來なすつたの。

半次　運よく二人が助かりましたは、お女中連れゆゑ道中も、暮れぬ内に早く泊り湯にはひつて夜食を喰ひ、寐るにもすこし早過ぎますから、ぶら〳〵宿をひやかしに二人連で出かけましたが、飯より好きな酒が飮みたく、立場酒屋で片足あけ、一杯やつて居る内に、俄に淺間の山が鳴り出し、

傳八　ばら〳〵石が降つて來るゆゑ、そりや大變と表へ駈け出し、向ふの寺の森の中へ逃げこんだのが二人が仕合せ、二抱へもある大石が淺間山から飛んで來るので、軒を並べて家は潰れ、押に打たれて死んだものは、どの位だか知れませぬ。

五兵　それはまあ二人共、危ふい所を脫れたが。

六右　それからどうして歸らしやつた。

半次　夜の明けるのを待ち兼ねて、泊つた宿屋へ歸つて見れば、家は殘らず潰れてしまひ、お孃さんや親分を尋ねましたが一向知れず、飯を喰ひたく思つても、其近邊に賣人はなし、つぶれ殘つた百

姓やで、拜むやうに握飯を貰ひ。

傳八　それでやう／＼腹を拵へ、一先づ江戸へ歸らうと、思つた所が十里四方、二三尺灰がつもり足の達者な駕籠舁も、なか／＼容易に歩かれず、やつとの思ひで歸りました。

五兵　何にしろおまへ方は、宿屋に居ぬのが仕合せで、命拾ひをしなすつたのだ。

六右　それにつけても初藏どのが、内へ歸つてござらぬのは、もしや怪我でもさつしやりはせまいか。

嘉兵　隨分物に素早い初藏、逃げられるほどの間があらば、必ず怪我は致しますまいが、淺間山が崩れてから、けふで十日になりますに、内へ便りを致しませぬは、多分死んだでござりませう。

五兵　日數は十日立つにもせよ、昨夜此衆が歸つたとあれば。

六右　今夜にも初藏さんが、歸られまいものでもない。

半次　御二人さんのおつしやる通り、お孃さまをお連れ申せば。

傳八　わたしらよりも二三日は、日數が遲くなりませう。

千代　たとひ二三日遲くとも、無事で歸つてくれゝばよいが、もしもの事でもあつたらば、悴といふてもまだ子供、どうしたらようござりませう。

嘉兵　どうといつてそのやうな、憂目を見るも約束事、悔んだとて仕方がない。

五兵　此家の衆も心配して、無事に内へ歸られるやう。
六右　けふ是から氷川さまへ、お百度を上げるつもり。
嘉兵　イヤ、お百度を上げて下さりますとか、それは有難うござります。
千代　御苦勞さまでござりますが、何分お願ひ申しまする。
五兵　いづれ後方打揃ひ、
六右　御札をもつて參ります。（ト右の鳴物にて兩人上手へはひる、お千代思入あつて、）
千代　もしおとつさん、まだお前に言はなんだが、さつきお店の弟がお醫者樣へ行きがけに、ちよつと門から寄りましたが、お孃さんのお便りがない處から御新造さまが、おのぼせなされて二三日跡から、取りとまらぬ事をおつしやつて、氣違ひにでもならねばよいと夜るもろ〳〵およらずに、御心配をなさるさうだが、お氣の毒でござります。
嘉兵　おれも湯屋でその噂を、さつきちらりと聞いて來たが、その御病氣の元といふはお孃さまを初藏がお預かり申して信州へ、お供を致して行つた故、無事にお歸りなさればよいが、もしお命でもない事なら、實に申譯のない事だ。（ト兩人心配の思入、峰松はきり〳〵す籠を持つて居て、）
峰松　おつかさん、きり〳〵すの足がもげたから、見附前へ行つて買つておくれな。

千代　お盆だから蟲などは、買はずと早く逃がしておやり。
峰松　そんな事いはないで、きり／＼すを買つておくれよ。
千代　なんぼ頑是がないといつて、おぢいさんでおつかさんでも、それどこではありやあしない。
峰松　それでもおいらは欲しいもの。
半次　今にぢいやあがおんぶして、見附前へ行きますから。
傳八　おとなしくしておいでなさい。

ト盆中修行者の鐃鉢の音、合方にて、花道よりおちゑ序幕の女房着流しの拵へ、取りのぼせしこなしにて出來り、跡より佐七着流し、紺の前垂手代の拵へにて附添ひ出で來り、花道にて、

佐七　もしおかみさま、あなたはどちらへお出でなさいます。
ちゑ　わたしや是から信州の、淺間山へ行くのぢやわいの。
佐七　淺間山へお出でなさいますなら、お駕籠を申附けますから、一先づお内へお歸りなすつて、それからお出でなされませ。
ちゑ　いや／＼駕籠も何も入りはせぬ、わたしや足が丈夫だから、一人で歩いて行くわいの。
佐七　どうして歩いて參られませう、先づ兎も角も初藏の處へお出でなさりませ。

ト無理に勸めて舞臺へ來り、門口から

姉さん、おかみさまがお出でなさいました。

千代　これは御店の御新造さま、ようお出でなされました。

嘉兵　むさくるしうはござりますが、これへお通り下さりませ。

ト上手へ花茣蓙を敷く、おちゑは挨拶もせず、きよろ〳〵とあたりを見廻しながら、

ちゑ　わたしは爰へ、何しに來たのぢやな。

佐七　信州へお出でなさいますとおつしやいます故、お駕籠を申附けます間、私の兄初藏の宅へお連れ申しましてござりまする。（トおちゑ思入あつて、）

ちゑ　おゝさうぢや〳〵、初藏どのが信州から、お夏を連れて歸つたさうぢやの。

嘉兵　誰があなたへ左樣な事を、申しましたか存じませぬが、初藏はまだ歸りませぬ。

トおちゑ嘉兵衞の顏を見て、

ちゑ　さういふおまへは、何處の人ぢや。

嘉兵　へい、私は初藏の親、嘉兵衞にござりまする。

ちゑ　初藏の親ならば、お夏を早う渡してくりや。

千代　お供を致して歸りますれば、直にお連れ申しますが、まだ信州から歸りませぬ。

ちゑ　いや／＼歸つたに違ひない、なぜお前方は隱すのぢや。サアお夏を早く歸してくりや／＼。

ト　お千代の前へ詰め寄る。佐七是を止めて、

佐七　もしおかみさま、御祕藏のお孃さまゆゑ、そのやうに思召すのは御尤もでござりますが、まだお歸りではござりませぬ。

ちゑ　なに、歸らぬ事があるものか、それ、そこに居るではないか。（ト　お千代へ思入あつて、）なぜそなたはだまつて居るのぢや。

佐七　あれに居るは初藏の女房、千代でござります。お夏さまではござりませぬ。

ちゑ　それではお夏は死んだのか。ハア、、、、。（ト泣く／＼顏をあげ思入あつて、）たつた一人の娘のお夏、もう此暮には聟を取り、初孫が出來たらば守りをするのは婆の役。

ト　有合ふ持遊びの獅子を取つて抱き。

〽ねんねころ／＼ねんねこせい、ねんねが守りは何處へいた、山を越えて里へいた。

ト　子守りの思入。

峰松　やあ、此のをばさんは、をかしいな。

千代　あゝこれ、だまつて居ぬかいの。

峰松　それでもおいらはをかしいもの。

ちゑ　おゝをかしい〳〵、をかしいならば笑ふがよい。お夏が死んだら何樂しみ、直に死んで共々に、冥土へ一緒に行かうわいの。（ト嘉兵衛お千代是を見て思入）

嘉兵　人並勝れた御新造さまが、おのぼせ故とは言ひながら、取り留めもない事おつしやつて、あゝおいとしい事だなア。

千代　もし御新造さま、今に初藏がお孃さまを、お連れ申して歸ります。

ちゑ　なに、今に初藏が連れて歸る。（トお千代の顏をぢつと見て）はゝゝゝ、こりや嬉しい〳〵いよ〳〵それに違ひはないか。

半次　行きにお供を致しました、私共が何より證人、今に親方初藏が、お供をいたして歸ります。

傳八　お内へお出でなさいまして、お孃さまのお歸りを、お待ちなさるがよろしうござります。

嘉兵　おゝちやうど幸ひ、こなた衆は、駕籠を一挺持つて來て、お乘せ申してくれ。

半傳　畏りました。（ト兩人下手へはひる。）

佐七　今お聞きなさいます通り、お孃さまを初藏がお連れ申して歸りますから、お内でお待ちなされま

せ。

ちゑ　なに、お夏が内へ歸つたと、それは嬉しい〳〵、さあ〳〵内へ歸りませう。

トずつと立つて、門口へ行くを、佐七留めて、

佐七　まだお歸りではござりませぬから、只今お駕籠がまゐる迄、暫くお待ちなされませ。

ちゑ　それでは内へ歸らぬとか、おゝ歸るまい〳〵、おなつは淺間の麓にて家がつぶれて死んだであらう、なぜ初藏殿が助けてくれぬ、頼んでやりし甲斐もなく、お夏を殺してしまふとは、ても恨めしい初藏どの、あゝ口惜しい〳〵、はあゝゝゝ。

トよろしく狂人の思入あつて泣きふす、佐七これを見て、

佐七　たつた一人のお孃さま故、此のお歎きは御尤もだが、兄貴が無事に信州からお連れ申して歸ればよいが、はかない御最期なされた事が知れたらいよ〳〵氣違ひに、おなりなさるに違ひない、家がつぶれる騷ぎだから、仕方もないがどうかしたら、お助け申して歸られうに、いまだ生死がわからぬが、便りのないのが樂しみだ。

嘉兵　運よく無事に助かつたか、但しは死んだしらせがあるかと、明暮れ待ちに待つてゐるが、

千代　なんで便りのない事か、神や佛のお惠みで、早う歸つてくれればよいが。

　　ト おちゑむつくと起上り、

ちゑ　ほゝゝゝ娘が無事で歸つた。これは〱、やれ〱嬉しや〱、直に内へ歸りませう。

千代　只今お駕籠がまゐりますから、

佐七　暫くお待ちなされませ。

ちゑ　いや〱、娘が歸つては、もうかうしては居られない。

　　ト行かうとするを、三人にて留める。下手より半次、傳八あんぼつの駕籠をかつぎ出て、

半次　はい、お駕籠を持つてまゐりました。

嘉兵　おゝ御苦勞々々、さあこれへお召しなされませ。

ちゑ　早く娘の顏が見たい。（ト駕籠へ逆に乘る。）

傳八　もし、後ろ前でござります。

佐七　何でもいゝから、急いでくれ。

兩人　畏りました。（トかつぎあげる。）

千代　よう氣をつけて下さんせ。

佐七　わたしが居れば、案じなさんな。

ト唄になり、佐七駕籠に附添ひ花道へはひる。お千代跡を見送り。

千代　あの御様子ではお夏さまが、いよ〳〵はかない事になつたら、猶々お募りなされるばかりで所詮お治りなさるまい、困つた事になりましたな。

嘉兵　おれが以前の御主人で大恩受けた信濃屋さま、何ともかとも言譯の致しやうのない事だ。多分は死んだと思へども、ひよつと歸つて來ようかと、いまだに心が迷つてならぬ。

千代　それと言ふのもおみくじを諸所で取つたが大がい凶、不動さまのが末の吉故、どうぞ助かつてくれゝばよいが。

ト此内峰松きり〴〵す籠を持遊びにして居て、

峰松　や、きり〴〵すが死んでしまつた。

千代　えゝいまはしい、死んだなどゝ。

峰松　足も手ももげてしまつた。

千代　まだそんな事をいふか。

嘉兵　多分はそれが前表だらう。

千代　あゝ、心に掛る事ばかり。

嘉兵　取込ゐに忘れてゐたが、けふは盆の十六日、

千代　おゝ送り火をば焚くのであつた。

嘉兵　ドレお念佛でも唱へようか。

ト時の鐘、合方にて、嘉兵衞奥へはひる。跡時の鐘、床の淨瑠璃になる。

〽秋の日もまだ十餘りたちまちに、涼しき風の身に染みて、袖に涙の雨催ひ、小暗き門に惠や角と心も細き苧殼さへ、しめり勝なる送り火の影もあはれに初藏が、思案にくれてしよんぼりと彳む姿、子は見つけ。

ト此内りんの音、鈴蟲の聲をあしらひ、お千代炮碌へ苧殼を入れ、是を門口へ出し、火打石で箱で火を打ち送り火を焚き、悴と兩人手を合せ拜む。よき程に花道より初藏、序幕のなり着流し一本ざし、草履やつれたる拵へにて出で來り、下手へ彳む。峰松目早く見付けて、

峰松　や、おとつさんか。

千代　え、おとつさんとは。(ト初藏を見てびつくりなし。)おゝ、内の人か。

初藏　これ、靜かにしろ。(トあたりへ思入。)

千代　お前は達者でござんしたか。

〽消えかゝりたる提灯の、火影にもしや亡き人かと、姿をとくと見廻せば、こなたは内を窺ひて、

ト お千代もし幽靈かと疑ふ思入。初藏は内を窺ひ。

初藏 お千代、とつさんは内か。

千代 あい、奥でお勤めをしてゐなさいます。

峰松 おとつさん、早く内へおはひりよ。

初藏 今はひるから。待つてゐろ

〽塵打拂ひ座に着けば、お千代は嬉しくいそ〳〵と、送り火消して内へ入り、

ト 初藏手拭で塵を拂ひ内へはひり眞中へ住ふ。千代松傍へ來て縋り居る。お千代は送り火へ水をかけ、内へはひり嬉しき思入にて、

千代 淺間山が崩れたので、上州迄も石が降り、輕井澤から追分邊殘る所なく家がつぶれ、大した死人と聞いたゆゑ、大方お前も亡き人と思ひの外に怪我もなく、無事に歸つて下さんしたか。

初藏 今云ふ通り石が降り、その夜泊つた追分の宿屋が微塵に潰れたゆゑ、すんでの事死ぬところ、やう〳〵の事で助かつた。

千代　どうか〳〵と今の今迄、案じ過してゐたお前の、思ひがけない顔を見て、嬉し涙がこぼれるわいな。
峰松　おとつさん、どこへももうお出でゞないよ。
初藏　もう是からはどこへも行かず、内にゐるから案じるな。
峰松　うれしい〳〵。
千代　何より先へ聞きたいは、お孃様もお命助かり、御別條はございませぬか。
初藏　さあ、そのお孃様は。
千代　一緒にお連れ申したのかえ。
初藏　いゝや、お連れ申さない。
千代　えゝゝゝ、すりやお行方が知れませぬか。
初藏　つぶれた家を人夫を頼み引くりかへして尋ねたが、何を云ふにも石と灰が五尺も積つてゐる事ゆゑ、なか〳〵三日や五日の日で下の下迄捜されず、それとも危急なその場所で、知らぬ人に助けられ、お内へお歸りなさりはせぬかと、その御様子を窺はんと、一先づ江戸へ歸つて來たのだ。
千代　いえ〳〵お歸りなされぬのみか、なんの便りもないゆゑに旦那様が一方ならず、御心配をなされ

ますが、男の事故別段にお替りはござりませぬが、御新造様はおのぼせなされて、つじつまの合はぬ事のみおつしやり、心がお狂ひなされし御様子、ひよんな事でもなければよいと、お案じ申してをりまする。

初藏　すりやお夏さまのお行方が、知れぬゆゑに御新造さまは、お心が狂ひしとか。

千代　それゆゑどうぞお替りのない事を申したいが、むつかしうござりませうか。

初藏　多分はつぶれたその下で、はかない御最期なされたらう。

千代　エヽ、情ない事でござりますなあ。（トお千代泣く。峰松見て、）

峰松　おつかさん、おまへは何で泣くのぢやえ。

千代　是が泣かずに居られうか。

〽涙に暮るれば初藏が、妻にも心奥の間より、父の嘉兵衛が立出でゝ、

トお千代初藏ちつと思入、奥より以前の嘉兵衛出で、

嘉兵　初藏、歸つたか。

初藏　はい、只今歸りました。

嘉兵　ようのめ〳〵と歸つたな。

初藏　なんとおつしやる。

〽見かへる傍へどつかと座し、（ト嘉兵衞初藏の傍へ住ひ、合方になり）

嘉兵　これ手前を目當に旦那樣が、お預けなすつたお夏樣、淺間山の石が降り泊つた宿屋の潰れたは、いはゞ天災仕方もないが、大恩のある旦那樣のたつた一人のお孃樣、お行方のしれぬのに、ようものめ〳〵歸つて來た、どの面下げて言譯する氣だ。

初藏　其の言譯の種にもと、潰れし跡を人夫を賴み、掘返して搜しましたが、更にお行方がしれませぬゆゑ、もしも誰ぞの助けを得て江戸へお歸りなされしかと、其御樣子を承りに、心ならずも唯一人立歸つてござりまする。

嘉兵　して旦那樣へその方は、なんと言譯する積りだ。

初藏　サア、それは。

嘉兵　此の言譯のならぬといふは、もとこのおれが信濃屋に御奉公を致せしも、旦那樣のお目がねで、中働きのおせつどのを女房に持つて程もなく、そなたが出來て三年目に又もや出來たが弟の佐七、其度毎に產着からしめしの切れ迄御新造樣が下さりました厚いお惠み、そち達二人が手足を延ばし、一人前になつたのもみんなお店の御蔭ゆゑ、此の大恩ある信濃屋樣へ御難儀かけて濟ま

うと思ふか、なぜ申譯に命を捨てぬ。

千代　今更いうても詮ないけれど、どうかしたならお孃樣一人位はお前の手でお助け申されさうなもの。

嘉兵　それといふのが命を惜しみ、おのればかり逃げ出たからだ。

初藏　決して逃げは致しませぬが、あいにくその折お孃樣と放れてをつたばつかりに、お行方さへも知れませぬ。

千代　それはどういふ譯あつて、仔細を聞して下さりませ。

初藏　是非なき次第を話して聞さう。

〽初藏は進み寄り、

その日は七月六日にて、追分宿へ泊りし折小差し仲間に出合うて、思はぬ酒を勸められ湯へはひるのが遲くなり、夜食の後に一ッ風呂湯へはひつて上りし其時に、淺間の方で俄の震動、こは只事であるまいと、おもふ折柄百千の雷が一度に落たる如く、山の拔けたる烈しき音におもはずそこへ倒れ臥す、時しも飛び來る大石に家は潰れてひた〳〵〳〵、燈火消えし闇がりに、女子供のさけぶ聲。

〽黑闇地獄の苦しみも、かくやと思ふ大變に、何れが何れか途を失ひ、かすかの明りを目當となし、屋根をこはして出て見れば、弓手も馬手も潰れ家にて脫れて出て逃げる人は、

何れも多少の疵を負ひ、流るゝ血汐も厭はずに、或ひは手を折り足を折りこけつまろびつ逃げ行く哀れさ、我も共々その中をどうがなしてお孃樣を無事にお助け申さんと、潰れし家を刎ね返し聲を限りに呼びさけべど、なんの答へもあらざれば、是非も涙にその夜を明かし、早くも近所の人を賴み積りし灰を掘り返し、尋ね捜せどお行方知れず、それゆゑもしやとおもふ故、すご〳〵江戸へ歸つて來たのだ。

〽噴火の次第を物語れば、さてはさうかと女房が、夫の無事を悅べど、昔堅氣の親仁はいらだち、

ト初藏よろしく思入。お千代はよく助かりしといふこなし、嘉兵衞きつとなり。

嘉兵　これが唯の人ならば命を惜しむも尤もだが、男を磨く道中師元は主人の娘御を、預かつていつて殺して濟むか、たとひ火の中水の中でも、命惜しまず飛び込んで助けられずば共々に、命を捨てて言譯せぬ。さうしたならば死んだ跡でも流石は男を賣るだけあつて、あつぱれけなげな料簡と後々迄も名が殘る、手前を殺せば老の身で困るは知れてるけれど、御主人初め世間の人へ、此顏が合されぬ。命を惜しんで言譯なさば、惡くいふのは知れた事、人の噂を聞くのが悔しい。

〽老の一徹こぶしを握り、ない齒をかみて悔し泣き、聞く初藏はさしうつむき、暫し詞もな

かりしが、顏を上げてせゝら笑ひ。

ト嘉兵衞きつと思入。此の内初藏うつ向きゐて、能き程に顏をあげ思入あつて、

初藏　よう死ね〳〵といひなさるがお前は最早六十餘、垣根の外へ出て居るから、命も惜しくあるめえが、おらあこれから盛りの體、そんなに安くは死なれねえ。たとひどんな恩があるとも、かう云ふ不時の災難で死んだ者は仕方がねえ、それを旦那へ濟まねえと命を捨てるは昔の事、今時そんな馬鹿はねえ、いくら蔭で惡くいふとも、人の噂も七十五日、四十九日や百ヶ日、配りものは仕たくねえ。

嘉兵　そんな未練な根性に親は產まぬがさりとては、見下げ果てた意氣地なし、親子の者が數年來受けた御恩を思はぬか。人の皮着たおのれは畜生、けふから親子の緣を切るから、命が惜しくば何處へなりと勝手な所へ出てうせろ。親でもなけりやア子でもねえぞ。

初藏　何ぞといふと理屈張り、時世に合はねえ小言をいふが、親でねえ子でねえとは、此の上もねえおれが仕合せ、邪魔でも親と云ふ一字に、まさかに捨てる譯にもゆかず、厄介者に背負つて居たがそつちで緣を切るといふのは、こんな嬉しい事はねえ。(トお千代傍へ詰め寄り、)

千代　これ初藏どの、よくもお前はその樣な愛想づかしを言ひなさんす。藁の上から育てられ、人とな

つたも親のお蔭、孝行せねばならぬとて、常から大事にしなさんすに、けふに限つてその樣な不幸な事をいひなさんすと、お前に罰が當るぞえ。

初藏　おゝ言はねえでどうするものだ、追分宿で信濃屋の娘が死んだは約束事、それに命を捨てろなどと、くだらぬ事を云ふとつさん、緣を切つたは何より嬉しい。

千代　夫婦となれば一生涯女房は夫に附かねばならぬが、現在實のとゝさんへそんな曲つた事をいつてそれではお前に附かれぬわいなあ。

初藏　附かないとは丁度いゝ、とうから愛想のつきた女房、折があつたら捨てようと思つた所へ幸ひだ手前も夫婦の緣を切つたぞ。

千代　エヽそんなら疾から愛想がつき、緣を切る氣でござんすか。

初藏　おゝ女房と疊は新しく、取替るのが何よりだ。（トお千代詰め寄り）

千代　元より足らはぬわたし故、愛想が盡きたかしらぬけれど、お前の胤の此の峰松、此子も可愛うござんせぬか。

（峰松をつきつくれば、（トお千代忰を突きつける。）

峰松　おとつさん、坊は可愛いね。

初藏　むゝッ（ト忰をぢっと見て、）愛想がつきた女房が、産んだと思へば可愛くねえ。

〽襟がみとつて突き倒せば。（ト初藏思入あつて忰をつき倒す。）

千代　すりや此子迄可愛くないとか。（トお千代忰を抱き泣く。嘉兵衞思入あつて、）

嘉兵　エヽ最前からだまつて居れば、見下げ果てた人でなし。何科もない女房を捨て、此の峯松迄可愛くないとは、おのれはいかなる鬼か蛇か、とつとゝ內を出てうせろ。

〽有合ふ箒おつとつて、打つてかゝれば引とらへ、

ト嘉兵衞有合ふ箒で打つてかゝるを、初藏とらへ、

初藏　居ろといつたつて、ゐるものかえ。

〽箒をつけばたぢ／＼と、尻邊にどうと倒るゝ親仁。

ト初藏箒をつく、これにて嘉兵衞どうと尻もちをつく、

千代　えゝ、親に手向ひしなさんすか。

初藏　緣を切つたと云ふからは、親子でなけりやあ構ふものか。

〽見返りもせず立ち出る門口、始終を窺ふ弟佐七。

ト初藏脇差をさし門口へ出る。此の以前より以前の佐七出で門口にて內の樣子を窺ひ居る。

佐七　や、佐七か。

佐七　兄さん、話があるから待ちなせえ。

〽胸ぐらとつて下へ引きすゑ。（ト初藏出ようとするを佐七引きすゑる。）

お孃さんがしれぬので、おかみさんは氣が違ひ、取りとめぬ事をおつしやるが、お前も氣でも違つたのか。

初藏　何で氣が違ふものか。すこしも替らねおらア正氣だ。

佐七　いゝや違つてゐるに違ひない。大恩のある親仁を始め、此の貞節な姉さんを愛想が盡きて捨てるといひ、峰松迄が可愛くないとは、よもや正氣の業ではあるまい。大方好きな酒を飮み、醉つての上のことだらう。わたしが詫びをしようから、いひ過ぎたのをあやまりなさい。

初藏　誰が親仁や女房にあやまるやつがあるものか。親仁の方から緣を切るといふから向ふの望み通り親子の緣を切つたのだ。又女房は亭主につかず親につくとぬかすから、これも緣を切つたのだ。とても事に佐七手前も、兄弟の緣を切つてしまへ。

佐七　これが正氣とあるからは見下げ果てたこなたの料簡、藁の上から兩親が人となす迄長年のその養育はいかばかり、此の大恩を送らねば子の役が立ちませぬ。是れ程道理の分らないお前でもな

かつたが、切るとあるなら兄弟の、わたしも縁を切りませう。
初藏　それぢやあ今日から他人だぞ。
佐七　そりやあ言はずとしれた事だ。
初藏　これでおれも厄介拂ひだ。
〽親女房を見返りて、何か心に有磯海、深きを知らで弟が、流石眞身に詞をかへ。
ト初藏嘉兵衛お千代へ別れを惜しむ思入。佐七はどうしてかういふ心になりしかといふ思入にて、
佐七　これ兄さん、お前は正氣といひなさるが淺間山の噴火から大方のぼせてゐなさるだらう、是まで親子夫婦兄弟ついに一度物言ひをした事のないお前だのに、どういふ事で二人とない親兄弟や女房と縁を切つてしまふやうな、邪險な心になつたのだ。どうもわたしにやあ合點が行かない。
〽涙ながらに弟が、心をつくす一言に、こなたも涙のみ込みて、
ト佐七よろしく思入にて云ふ。初藏もせつなき思入にて、
初藏　これといふのも。
佐七　え。
初藏　いや是から意氣な女房を持ち、新世帯でくらすが樂しみ。

千代　え、それでは他に。
初藏　疾から馴染の女があるのだ。
千代　そんなら疾から馴染の女子が。
初藏　それを知らぬは、手前が馬鹿だ。
千代　ても情ない。（ト傍へ寄るを突き倒す。）
峰松　こりやおつかさんを。
初藏　エヽやかましい。（ト天窓を打つ。）
峰松　ハアヽヽヽ。（ト泣く。）
嘉兵　うぬ、言はして置けば。
〽箒をとつて立ちかゝれば、佐七はこれを押しとゞめ、
ト嘉兵衛箒をとつて、初藏を打たうとする。佐七是を留めて、
佐七　おまへに疵でも附けた日には、縁を切つても私事、表向では磔に兄を掛けねばなりませぬ。
嘉兵　それだといつて。
佐七　はてまあ、捨てゝお置きなさい。

嘉兵　かへす〴〵も憎いやつだ。

初藏　これでおれもさば〳〵した。どれ、爰の内を出て行かうか。

ト脇差さして立ち上れば、峰松裾に取りついて。

峰松　おとつさん、内に居ておくれよ。

初藏　むゝ、（ト思入あつて、）けふから内に居ねえから、手前はお母あばかりだぞ。

峰松　いやだ〳〵、お母さんよりお父さんがいゝ。

初藏　えゝ、小うるせえ、どかねえか。（ト悴を足で突きのけるを。）

千代　お前をしたふ此の峰松、それ程憎うござんすか。

初藏　女房がいやになつたらば、がき迄おらあいやになつた。

千代　すりや、それ程迄に。

初藏　再びうぬらの面は見ねえぞ。

ト門の戸明けて立ち出る初藏、あまりと云へばと立ちかゝる、親を止むる弟の佐七、流石女房は二世の縁、心残りて見送れど振向きもせず初藏は、顔をそむけて出て行く。

ト此内初藏門口へ出る、嘉兵衛箒を持ち立かゝるを、佐七留めて、お千代悴を抱き乍ら跡を見送る。

初藏ふり返らうとして、向ふを見込み、よろしく花道へはひる。

嘉兵　扨も〳〵憎いやつ、佐七が留めずばなぐり倒し、腹を癒ようと思つたに。

佐七　お腹の立つは御尤もだが、大きにのぼせてをりますからひよつとあなたへ手向ひ致し、疵でもつければ礫に、兄を掛けねばなりませぬ。

嘉兵　あんなやつは礫に、掛けるが人の見せしめだ。

佐七　ではござりませうがあなたの恥、まあ〳〵御料簡なされませ。（ト留める、嘉兵衛下に居て）

嘉兵　それにつけても氣の毒なは、何科もないお千代を去り、さぞ腹が立つたであらうが、賴みにならぬあの初藏、ない者ぢやとあきらめよ。

千代　全くこれがお孃さまの、お行方がしれぬので、のぼせたせゐでござりませう。

嘉兵　日頃のあれの氣性では必ず生きては歸るまい、死んで言譯するであらうと、思ひの外にのめ〳〵と、歸つて來たは本氣であるまい。

佐七　何にしろ此のよしを、お店へ申さずばなりますまい。

嘉兵　いかにも申さにやならぬけれど、よい年をして此のおれが、どの顏さげて行かれうぞ。

千代　わたくしとても同じ事、申上げにくうござりまする。

嘉兵　言ひにくからうが佐七から、旦那へお話し申してくれ。

佐七　私とても兄弟ゆゑ、申し憎うござります。

嘉兵　親兄弟や女房に、

佐七　かゝる難儀を掛けるといふも、

千代　初藏殿より起りし事。

嘉兵　思へば憎いやつだなあ。

〽親子三人が顏見合せ、吐息つきてぞ。

ト三人歎息なせし思入、時の鐘、三重にて此の道具廻る。

（專壽寺門前の場）――本舞臺上手二間、一段石を敷き、此の上に冠木門、二枚開き、上下三尺の袖附是に潛りの出入りあり、是より下手一面に練塀、門の脇に流れ灌頂、手桶に柄杓附けあり、よき所に柳の立木、總て專壽寺門前夜るの體、三重にて道具留る。と直に淨瑠璃になる。

〽亥の刻もいつしか過ぎて往來の人もとだえし寺門前、ゆうべの雨に蒸暑き南も北に吹き替り肌につめたき秋の夜の、風におくれて初藏が、道の邊りに彳みて、

ト本釣鐘を打込み、花道より以前の初藏、思案の思入にて出來り、花道よき所に立留り、

初藏　今更思へば信濃で死に、身の言譯の書置を江戸へ出したらよかつたに、もしもその夜お孃樣が誰ぞに命を救はれて、江戸へお歸りなされしかと立歸つたばつかりに、親父に餘計苦勞をかけ、おもへば濟まねえ事をした。就いては女房や弟に心にもねえ愛想づかしを、いつたも歎きをかけまい爲め、けふ三人に餘所乍ら暇乞もした上は、我菩提所の墓場へ行き命を捨てゝ言譯なさん。

〽覺悟極めて菩提所の、門の扉を打叩き、

ト初藏思入あつて、舞臺へ來り、門の潛り戸をたゝき、

權兵衛どん〳〵、田町の伊豆屋の初藏だ。ちよつと門を明けて下さい、權兵衛どん〳〵。

ト返事のないゆゑ思入あつて、

こんなに門を叩いても返事のないは外でもねえ、此頃死人のしらせのやうに門を叩いて強盜が諸方の寺へはひるさうだ。それで門を明けぬと見える。墓場へ行つてと思つたが、門を明けねば仕方がねえ。此の門前で腹を切り、御恩になつた旦那樣へ、身の言譯をせねばならぬ。（トあたりへ思入あつて、）日が暮れてから物騒に、人の往來のないこそ幸ひ、見とがめられぬ其内に、すこしも早く、むゝさうだ。

〽雨氣の空も雲切れて、洩れ出る月を便となし、露けき石の門前へ脇差を置き死支度、以前の峰松走り出で、（ト初藏死支度をする、ばた〳〵にて以前の峰松走り出で、）

峰松　や、おとつさん。

〽縋りつかれてびつくりなし。

ト峰松初藏に縋りつく、初藏びつくりなし、木魚の入りし誂への合方になり。

初藏　どうして手前は爰へ來た。

峰松　お前と一緒に行きたいから、跡から附いて爰へ來ました。

初藏　そんなら内を出た時から、

峰松　おつかさんは叱るから、おとつさんの方がおいらはいゝ。

初藏　それで跡からついて來たのか。

峰松　あい一緒につれて行つておくれ。

初藏　近い所ならつれて行くが、西方といふ遠い所ゆゑ、手前は連れて行かれない。

峰松　どんな遠い所でも、おんぶをせずに歩いて行きます。

初藏　手前にまご〳〵歩かれては、邪魔になるから歸つてくれ。

峰松　いえ〳〵一緒に行かねばならぬ。
初藏　えゝ聞分けのない事を云つて、生業用の邪魔をすれば、ひどい目に合はせるぞ。
峰松　ひどい目に合つてもいゝから、一緒に行きたい。
〽縋り附かれて恩愛の、きづなに引かれためらひしが、心弱くて叶はじと、
ト峰松初藏に縋る。初藏振放し難き思入あつて、
初藏　うぬ、いふ事を聞かなければ。
〽かたへの流れ灌頂の手頃の竹を引拔いて、おどしの爲に打つしもと、
ト流れ灌頂の竹を拔き思入あつて峰松をうつ、
峰松　アイタヽヽヽ。堪忍して下され。
初藏　おゝ堪忍してやるから、早く歸れ。
峰松　いえ〳〵わたしや歸りませぬ。
初藏　うぬ、歸らぬならば。（ト又打つ。）
峰松　アイタヽヽヽ。
初藏　さあ、内へ歸るか。

峰松　あい／＼内へ歸るから、お前も内へ歸つて下され。

初藏　おれは遠い所へ行くから、手前ばかり先へ歸れ。（ト竹をつく。）

峰松　あい／＼。（ト立兼ねるを、）

初藏　ぐづ／＼すると、叩き殺すぞ。

ト持つたる竹を振り上げれば、峰松は身を擦り附け。

峰松　早く殺して下され。

初藏　なに殺してくれと。

峰松　お前と一緒に死にたいわいの。

初藏　エヽそれぢやあおれが死ぬるを。

峰松　後ろで聞いて居ましたわいの。

初藏　むゝ聞いたとあれば隱しはせぬ、大恩うけた信濃屋のお孃さまを信州で家が潰れてお行方知れず、それゆゑおれは命を捨て、その言譯をせねばならぬ、そちはこれからおとなしく成人なして二代目の初藏といふ名を賣つて、おれが恥辱をすゝいでくれ。

峰松　いえ／＼父さんと一緒に死にたい、どうぞ早く殺して下され。

初藏　いや／＼手前は殺さぬから、早く內へ歸れ。

峰松　いやぢや／＼。

初藏　いやだといへば、是非がねえ。

ト解捨て置きし腹卷の白布とつて峰松を、かたへの柳へ縛り附け、人の妨げなき內と、肌押脫いで死支度、見るに悴は身をもみあせり。

ト此の內初藏腹卷の白布で悴を柳の木へ結び附け、肌をぬぎ脇差をぬき、死なうといふ思入、峰松は氣をもみ、

峰松　あれおとつさんが死にます、誰ぞ來て下され／＼。

ト聲を限りに呼はれば、

初藏　人の來ぬ間に、すこしも早く。

ト脇ざし逆手に取直す、折から馳せ來る戸澤重內。

ト初藏脇差を手拭で卷き、死なうといふ思入、峰松は始終呼んでゐる。ばた／＼にて、上手より重內羽織袴大小草履、劍術家の拵へにて急ぎ出來り、月明りに初藏を見て、

重內　や、初藏ではないか。

初藏　南無三。

〽左りの腹へ突立てるを、やれ早まるなとその手を捕へ、

ト初藏慌てゝ脇腹へ突立てる。その手を重内とゞめ、

重内　何ゆゑあつてか、まづ〳〵待て。

初藏　死なねばならぬ譯あれば、どうぞ見脱し下さりませ。

重内　いや〳〵、仔細を聞かぬその内は、見脱すことは相成らぬ。

初藏　そこをお慈悲に。

重内　やあ、師の詞を用ひぬか。

〽持つたる脇差もぎ取りて峰松結へし白布を、是幸ひと解きほどき、疵口しつかと結ゆれば

ト重内初藏の脇差をもぎとり、疵口を何で結へようといふ思入あつて、忰を結へし白布を見て、幸ひといふ思入にて、是を解き疵口をぐつと結へる。初藏うんと思入、峰松縋り附き、

峰松　あれ、おとつさんが死にまする。

重内　親仁は身共が助けしぞ。

峰松　有難うござります。

重内　これ初藏、其方が死なんとなすは、定めて仔細のあることならん。仔細を申せ〳〵。

〽云ふに手負は一息つき、（ト竹笛入りの合方になり、初藏思入あつて、）

初藏　いつぞやあなたに板橋で、お目にかゝつて信州へお夏さまの供をして追分宿へ泊りし夜、淺間山が燃え出し五尺餘りの大石が、雨の如くに降るゆゑに、忽ち家は潰れてしまひ。

〽押しに打たれて死ぬ者は何千人か數知れず、運よく少しの隙があり、明りを知るべに屋根を潰し、はひ出て見れば四方とも灰の降るのであいろは分らず、聲を限りに呼んだれど、震動つよく聞えねば、夜明けを待つて人夫を雇ひ、

爰ぞと思ふ所をば、石を取り除け灰を掻き、捜して見たれど影もなく、詮方つきてもしや江戸へお歸りなされしかと、おめ〳〵歸つて樣子を聞けば、なんの便りもない上に、御新造さまが氣違ひにおなりなされしと聞いたゆゑ、元より命を捨てる覺悟に、態と親仁や女房に愛想づかしを云つた上、我が菩提所の爰へ來て、信濃屋さまへの申譯に、只今腹を切る初藏、どうぞ留めずに下さりませ。

〽苦しき息を吐きあへず、始終の樣子物語れば、

重内　男を磨く伊豆屋の初藏、我が預かりし娘をば、失ひしゆゑ言譯に死ぬといふのは俠客の命を惜し

まぬ跡先見ず、預かり行きしその娘の、死骸を篤と見屆けしか。

初藏　爰らと思ひし家の下石を取り除け搜しましたが、死骸はついに見當りませぬ。

重内　さすれば死生は分明ならず、娘が死せしとならば命を捨ての言譯はあつぱれなりと云はれもせんが、萬一運よくお夏どのが危難を脱れて存命で居つたらほんの犬死にて、早まつた事いたせしと世間の人に笑はれん、氣を靜めて思案せよ、急く所ではあらざるぞ。

初藏　ではござりますがもう日數も、十日になれば江戸表へ、便りがなくてはなりませぬ。それゆゑ一とまづ歸りましたが、けふまで便りがござりませねば、慥にはかない御最期を、なされたに違ひござりませぬ。

重内　信濃屋殿とも懇意なれば、初藏そちが言譯に命を捨てる心中は、手前が詳しく申聞けん、さすれば必ず善兵衛殿も死を止めしを悅ばれん、只今疵所を見たる所、さのみ深手にあらざれば、療養いたさば平癒なさん、我意に付いて暫く待て。

初藏　有難うはござりますが、どうあつても私が命をすてねば信濃屋さまへ、顏向けがなりませぬ。

重内　道中家業をなす者は、俠客氣がある故に、死んで言譯なすなぞと申すは一途な料簡なり、お夏どのが信州で運よく危急の難を脱れ、無事に江戸へ歸り來り、我身の爲めに初藏が死んだと聞いた

事ならば、その悲しみはいかばかり、娘の事ゆゑ此の樣な一途の心はあるまいが、もしもその方同樣なら、親父や妻へ言譯にお夏どのが命を捨てん。さすれば信濃屋兩親があの初藏が命を捨てずば、娘も死にはせまいものと、言譯なせしそちを恨まん、いよ〳〵娘が追分で死んだと證據があつたらば、其の時こそは潔く、立派に死んで言譯せよ、先づそれまでは師匠たる此の重內に命を預けよ。

初藏　段々との御異見は肝に答へましたれど、どうも死なねば言譯が、

重內　まだ〳〵左樣な事を申す、師匠の詞を用ひぬか。

初藏　さあ、それは、

重內　急く所ではあらざるぞ。

〽道理をわけて重內が、止むる異見に是非なくも。

ト重內よろしく思入にていふ、初藏思入あつて、

初藏　左樣なればお詞に、隨ひますでござります。

重內　おゝ、よくぞ詞を用ひくれしぞ。

峰松　おとつさん、どうぞ死んでおくれでない。

初藏　もう死なぬから、案じるな。

〽苦しき中にも親子の情、すがる我子をいたはる折から、門を開いて住僧立出で、

ト此の折門の潛りを明け住僧了善衣なり、庭下駄を履き出來り。

了善　戸澤殿、よくぞお止め下さりました。

重内　これはお住持、了善殿。

了善　なにか門前が騷がしくと、下男が知らせに是へ參り、樣子を聞けば檀中の初藏どのが切腹なすを、貴殿がお止め下されて、段々との御說諭にて死するを思ひ止まつて、此の上もない事でござる厚くお禮を申しまする。

重内　すりや御門内にて委細の儀を、お聞き屆け下されしとか。

了善　貴殿がお止め下されずば、あたら一命失ふ所、さぞ親族が悅びませう。

重内　いやその親族へ此の事を、貴僧よりしてお知らせ下され。

了善　その儀は只今裏門より、下男を遣はしましてござる。

重内　それは千萬忝い。

了善　程なく是へ參るでござらう。

〽詞終らぬその所へ、下男を先に親女房息つきあへず、駈け來り。

ト早めたる木魚ばた〳〵にて花道より下男尻はしをり、草履にて先に立ち、跡より以前の嘉兵衛お千代駈り來り、直に舞臺下手へ來て、

嘉兵　シテ初藏は、いづれに居ります。

千代　早う逢はして下さりませ。

重内　嘉兵衛どの、參られしか。

嘉兵　忰は最早や相果てましたか。

重内　いや氣遣ひいたすなそれがしが、折よく爰へ參り合せ、引廻す手を止めしゆゑ、危ふき一命助けしぞ。

千代　えゝ有難うござりまする。(ト重内を拜む。)

峰松　お母さん。(トお千代に縋る。)

千代　ヲヽ、峰松、そちは居たか。

〽親女房は右左り、手負の傍へさし寄つて、(トお千代嘉兵衛初藏の傍へ來て、)

嘉兵　最前二人へ愛想づかし、合點行かぬと思つたが、

千代　扨はお店へ言譯に、お前は死ぬ氣でござんしたか。

初藏　死ぬのは元より覺悟なれど、内で死んだら一倍に歎きをかけねばならぬから、わざと愛想づかしを云つて、菩提所ゆゑに爰へ來て、身の言譯に死ぬ心。

重内　一足手前が遲かつたら、引廻して相果てん、まことに危ふいことであつた。

嘉兵　思はぬ命の助かりましたは。

千代　旦那さまのお蔭ゆゑ、

重内　良醫を賴んで療治なさば、必ず平癒疑ひなし。

嘉兵　返す〲も御恩のほど、

千代
嘉兵　有難うござりまする。

〽悅ぶ所へ信濃屋より、手代佐七が駈け來り。（トばた〲にて、以前の佐七駈け來り、）

佐七　これ兄貴、お行方知れぬお孃さまが、お無事でおいでなさいますぞ。

皆々　えゝ。

嘉兵　すりやお孃さまは御別條なく。

千代　して何者が助けました。

佐七　何者なるか分からねど、只今無事に信州から江戸へお連れ申せしと、手紙が一通參りましたが、いづれ明日參上いたし、委細をお話し可申としらせの手紙にござりまする。

初藏　すりやお孃さまは御無事なりしか、えゝ有難い。（トうれしき思入。）

重内　是ゆゑ手前が止めしが、犬死なさで大慶なるぞ。

嘉兵　御恩は言葉に、

千代　盡くされませぬ。

初藏　あゝ命の親で、（ト重内を拜むを、木のかしら、）ござりまする。

ト皆々悦ぶ思入。本釣鐘の寺鐘にて、よろしく

ひやうし　幕

四幕目

表傳馬町信濃屋の場

黑鍬谷猪飼住居の場

〔役名――猪飼丈五郎、戸澤重内、信善手代佐七、馬淵鄕藏、信濃尾善兵衞、猪飼の下男作兵衞、牛窪畑六、駕籠舁じぶくり勘太、酒屋の御用、信濃屋手代。初藏女房お千代、信濃屋女房おちゑ、作兵

同娘おみの、初藏一子峰松、信濃屋娘おなつ等。」

（信濃屋店先の場）――本舞臺一面の平舞臺、上手一間中敷居上まひら戸下帳面かけ、帳場格子、次に一間大阪格子の出這入り、此の下一間の附屋體、一面の落間板庇附き、軒に信濃屋と記せし紺の長暖簾、いつもの所見切の出格子、ずつと下手黑塀、町名を記せし天水桶、總て赤坂表傳馬町質見世の體、爰に前幕の佐七、濱流し前垂○△の若い者住ひ、ずつと下手に前幕のお千代、息子の峰松を連れ、丁稚是へ茶を出して居る。豐川稻荷の神樂、鈴の音をあしらひし合方にて幕明く。

丁稚　おかみさん、お茶をお上りなさりませ。

千代　是はお構ひ下さりますな。

佐七　姉さん、けふはどちらへお出でなさいました。

千代　こちらへお禮ながらと豐川樣へ日參で、是を連れて來ましたわいな。

佐七　内でも疵所が昨今は、大分よいと聞きましたが、私も安心いたしました。

○　佐七どん、おかみさんがお出でのことを奧へ申上げようか。

佐七　ちよつと申上げて下さい。

○　はい／＼。（ト奧へはひる。）

千代　御新造様の御病氣は、少しはお落附きなさいましたか。

佐七　お孃樣に御別條がないといふ知せがあつたので、お落附きになりましたが、無名の手紙で先が知れず、けふで三日になるけれど、何の沙汰もないゆゑに、又候御心配をなされてぢや。

千代　その御心配をかけるのも、元はと云へば初藏ゆゑ、濟まぬ事ぢやと思ひますと、穴へでもはひりたうござりまする。

△　成程おかみさんの前で孃さんの事を云はれたら、面目なうござりませう。

佐七　つい口癖になつていひますが、氣にかけて下さりますな。

ト合方きつぱりとなり、奥より前幕の亭主善兵衛肴流し前垂にて出來り、上手へ住ひ、

善兵　ヲヽ、お千代さん、よく來なすつた、坊も一緒かの。

千代　ちよつとお禮に出ます筈を、つい手がござりませぬので、大きに延引いたしましたが、此程は澤山にお見舞下さりまして、有難うござりまする。

善兵　さうして初藏どのゝ疵所は、どういふ樣子でゐなさるな。

千代　お孃樣の御別條のないといふを承り、大きによろしうござりましたが、まだお歸りなされませぬので、又心配をいたしますゆゑ、早く直ればよろしうござります。

善兵　別條のない手紙は來たが、誰といふ名前がなければ、いたづらにでもしたことか、娘の行方の知れぬのは是は時節で仕方がない、又初藏どのゝ助かつたも自殺の場所へ戸澤樣がお出でになつたが當人の仕合せ、決して娘の事を思はず、早く治つて下さいと、よくこなたから言うて下され。

佐七　旦那樣があのやうにおつしやつて下さるのは、涙の出る程有難い、姉さん歸つたら安心するやうに言つて下さい。

千代　實は私も豐川樣へ日參をして居りますが、けふ御みくじを取りませうと存じまして上りました。

善兵　手紙で知らしてよこしたが、誠の事であつたらば、娘も歸つて來ようから、さう心配をしなさらぬがよい。（ト奥へ向ひ、）おい、坊に菓子を持つて來てくれ。

○　へい〳〵。（ト若い者紙に包みし菓子を持ち出來り、）峰さん、お上りなさい。

峰松　是れは有難うございまする。

善兵　おゝ、よく御禮が出來ましたの。
ト合方神樂の鳴物になり、花道より前幕の鄉藏、着流し大小雪駄履きにて出來り、

鄉藏　頼まう。

○　へい、いらつしやいまし。

郷藏　黑鍬谷の猪飼丈五郎方から參つた。
○　へい〳〵、ちよつとお待ち下さりませ。（トあわてゝこちらへ來り、）もし、大變な奴が參りました。
善兵　どなたがござつたのぢや。
○　黑鍬谷の丈五郎さんの所よりお孃さんを貰ひたいと、度々使ひに參りました、郷藏といふわるでございます。
丁稚　あいつは惡い御家人だよ。
善兵　これ。默つてゐろ。よい〳〵、御用を伺つて見た上で、大抵のことなら留守だと申せ。
○　へい〳〵。（ト門口へ出て、）何御用でございますか、私が承りませう。
郷藏　そちでは分らんが、何しろ當家の娘が信州から歸つたのだ。
○　えゝ、ちよつとお待ち下さりませ。（トあわてゝこちらへ來り、）よいことでございまして、お孃さんがお歸りなさいました。
善兵　えゝ、（ト是にて皆々あわてゝ、門口へ出迎へ、）おゝ、よう歸つて來やつたの。
ト郷藏を見やり、びつくりして氣をかへ、
是は、ようゐらつしやいました。（ト皆々辭儀をする。）

鄉藏　善兵衞どの、久しく逢ひませぬな。

善兵　是は馬淵様でござりますか、先づこちらへお通り下さりませ。

鄉藏　許しやれ。

　　ト合方きつぱりとなり、鄉藏上手へ通り丁稚茶を出す。此の内佐七お千代表を見やり、居ぬゆゑ不審の思入、善兵衞きよろ〳〵なし、

善兵　只今取次ぎの申すには、娘の事でお出でになりましたと承つてござりますが。

鄉藏　いかにも。當家の娘御が淺間山噴火の節、既に一命危かりしを、我組頭猪飼丈五郎どのが、必死となつて助けられ、昨夜宅へ到着したれば、ちよつとお知らせ申しに參つた、

善兵　それではもしや一昨日、御手紙を下さりましたは。

鄉藏　一刻も早く知らせんと、旅からよこした狀でござる。

善兵　思ひがけなき猪飼様に助けられて歸るとは、ほんに夢のやうでござりまする。これ〳〵、早く家内に知らせてやつてくれ。

△　へい〳〵。（ト若い者奥へはひる。）

佐七　それではやつぱり旦那様も、御湯治にでもいらつしやいましたかな。

郷藏　いかにも、信州淺間の麓、菱の湯へ參られる所噴火騷ぎに出逢つて、當家の娘御お夏どのと丈五郎どのは命拾ひ、人間は運でござるの。

　　卜合方きつぱりとなり、奥より前幕のおちゑ病ひ鉢卷、前帶にて、△の若い者附添ひ出來り、

ちゑ　只今承りましたが、娘が歸つて參りましたか。

善兵　此の旦那の御組頭、猪飼樣が信州で、お助けなされて下すつたのだ。

ちゑ　えゝ、そりやほんまの事でござりましたか、それはどうも有難うござりまする。

千代　御新造樣、是であなたの御病氣も、さつぱりなされましたらうな。

ちゑ　治る所ではござりませぬ、なんだか夢のさめたやうな、涼しい心持になりました。

郷藏　御内室は御病氣でござるかな。

善兵　斯うして居ると知れませぬが、實は淺間の噴火の事を、提賣などが呼んで參ると、その度毎にむらむらとして表へ飛出し、娘の行方を搜しますので、實に困り居りましたが、お蔭でさつぱりいたしませう。

ちゑ　たく〳〵娘が案じられ、くわつと逆上するその度毎、信州へ行く氣になり隣り近所へ御厄介をかけましたのが安心して、やう〳〵心が落着きましたが、早うあれに逢ひたうござります。

善兵　是れと申すも猪飼様が、お助け下さいましたゆゑ、直に只今御禮ながら娘の迎ひに上りまする。

鄕藏　いや／＼、連れに御出でなさるに及ばぬ、實はその御相談に參つてござる。

善兵　へえ、連れに來るに及ばぬとは。

鄕藏　娘御を嫁にお貰ひ申したい。丈五郎は獨身故、お娘御を執心いたし、嫁に御貰ひ申したく、度々手前が參つたが、いつも同じお斷り、是非なくそのまゝ打過ぎしが、幸ひ今度の噴火にて、お助け申して歸宅せしは結ぶの神の引合せ、是非とも嫁に御遣はし下され。

ト是にて皆々顏見合せ、當惑のこなしにて、

善兵　御尤もにはござりますれど、あれは宅の一粒もので、元より他へは出しませぬゆゑ、是はお斷り申し上げまする。

鄕藏　いかさまそれは御尤も、一人娘でござるなら强ひてとは申すまい、その替り丈五郎を聟に取つて貰ひたい。

善兵　えゝ。（此の內佐七心遣ひのこなし、）

鄕藏　甚だ失禮な申分だが、當家は高が町家の商人、又猪飼氏は天下の御家人、御親類方へ御相談あつても、褒めこそいたせ恥でもござらぬ。なう御內室。

ちゑ　はい。

鄕藏　それとも御夫婦御返答なきは、先方が御不足かな。

善兵　いえ、どういたしまして。

鄕藏　さうでなければ速かに、御挨拶が承りたい。

佐七　あゝもし〳〵、暫くお待ち下さりませ、差出たやうでござりますが、外の事とも違ひますれば、先兎も角もおなつさまを一旦お戻し下さりまして、それから御返事に上りませうから、どうぞさうなすつて下さりませ。

鄕藏　馬鹿を申せ、嫁にもやれず聟にも取れぬと返事の出來ぬにその娘を、うか〳〵當家へ返して見ろ、なにを種に掛合ひが出來る。餘計な口を利きやあがるな。

ト佐七びつくりして跡へ戻る。

さ御主人、どうとも返事をして下せえ。（トきつと云ふ。此の時お千代前へ出て、）

千代　もし猪飼樣の御使ひさま、只今樣子を見受けますところ、旦那樣が御遠慮なされて申上げ兼ねてお出なさるゆゑ、私から申しますが、あの孃さんには聟になる、相手が極つて居りまする。

鄕藏　なに相手が極つて居る。むゝ、してその聟はいづれのものだ。

千代　はい、そのお聟は。
郷藏　どこのどいつだ。
　　ト是にてお千代おこつくな、おちゑ佐七へ指をさす、これにて呑み込み、
千代　實は是なる佐七にござりまする。
佐七　あゝもし／＼、何で私が。
千代　はてお前は知るまいが旦那樣が此の間、私へ内々お話しあつて、もう疾うに極つてゐるわいの。
　　ト呑み込ませる。
郷藏　ハヽそんならこいつが聟になるのか、道理こそ止めた筈だ。
千代　これは私が身内にて、子飼より御當家へ御奉公に上げまして、實體に勤めしゆゑ、斯ういふ出世
になりました。
郷藏　むゝ、よく承知いたした、主ある花を手折るとて、心を勞すも無益な事歸宅いたして申さうが、
こつちも武士ゆゑ云ひ出した事、此の儘跡へは引かれぬから、娘は當分預り置くぞ。
　　ト立上るをおちゑびつくりして、郷藏の袖に縋り、
ちゑ　あゝもし、そんなら娘は、あなたの方へ。

鄕藏　當家に於いて斷られ、この儘指は啣へて歸れぬ。

善兵　それではあんまり、御無體ゆゑ。

鄕藏　來る筋をもつて、（ト振り拂ひ、）掛け合ひに來い。（ト門口へ出て、）イヤ聟になる靑二才、覺えて居ろ。

ト矢張り出の合方、鈴の音になり、鄕藏花道へはひる。佐七善兵衞跡を見送り居て、こちらへ來り、

千代　旦那さま、ひよんな事になりましたなあ。

善兵　佐七を聟にするといふて、云譯は附けたものゝ、黑鍬谷の猪飼といつては、疫病神と仇名の御家人、容易なことではゆかぬわえ。

千代　初藏が達者で居れば、御恩返しに黑鍬谷へ、取戻しに參りませうもの。

ちゑ　町內の頭は大山よりまだ歸らず、誰を賴んでよからうやら。

佐七　こんな困つた事はござりませぬな。

ト皆々ぢつと思入。

峰松　おつかさん、おとつさんが寢返りをするに內にゐないといけないから、早く歸つてお上げよ。

善兵　おゝさうぢや。お千代さん爰に構はず少しも早く、內へ行つて看病しなさい。

千代　始終お孃さまの事ばかり、氣に掛けてをりますから、早速知らせました上、よく相談をいたしませう。

佐七　又身體に障るも惡いから、今のごた〳〵は默つてゐなさい。

千代　左樣なら私は、もうお暇いたしまする。

善兵　初藏どのに。

ちゑ　よろしく云つて下さい。

善兵　有難うござりまする。

千代　ト合方、鐘の音になり、お千代峰松辭儀なして下手へはひる。

ちゑ　もし旦那、此の掛合ひに參る者は、誰を頼んだらようござりませう。

佐七　所謂相手が相手ゆゑ、只のものではいけませぬ。

善兵　それにはよいお方がある。

ちゑ　よいお方がござりますとは。

善兵　いつぞや戸澤の先生に板橋でお目にかゝつたその時に、もし丈五郎が兎やかう申さば、早速人を寄越すがよい、取りつくらうてやらうからと、おつしやつて下すつたから、是は先生をお頼み申

さう。

ちゑ　ほんにさつぱり忘れてゐたが、劍術勝れた大先生、あなたが行つて下すつたら、屆かぬ事はござりますまい。

佐七　そんなら是から先生を、

○　お迎へ申して、

○佐七　參りませうか。

善兵　いや善は急げぢや。（ト立上るを道具替りの知せ、）羽織を出してくれ。

ト此の模樣、合方神樂の鳴物にて道具廻る。

（赤坂黑鍬谷御家人住居の場）――本舞臺三間の間常足の二重、上手一間襖二枚の押入、眞中一間床の間、此の次鼠壁、上手後へ下げて一間の障子屋體、折廻し本椽附、下手一間の玄關式臺附、いつもの所ひぢかけ窓の見切、惣體雨染みのある道具、平舞臺の下手玉椿の生垣、總て赤坂黑鍬谷御家人住居の體、あたりに一升德利茶碗あり、爰に序幕のお夏の娘、同おみつの娘住ひ、此の見得稽古唄にて道具納まる　ト合方彈きながしにて、

みの　もしお夏さん、女子は女子同士ゆゑ、私はお前さんがおいとしうござります。

なつ　ほんにお前は年も行かぬが、よく優しくして下さんす。知つての通り信州の淺間山で死ぬ所を丈五郎殿に助けられ、命の親故只ならば有難い事であるけれど、女房になれと毎日々々わたしをお口説きなさいますが、實に辛うございます。此の御返事のならぬのも云ふに言はれぬ譯あつて。

ト跡を云ひさす。

みの　それも人の話しにて承つて居りますが、毎日々々責められて、嘸おうるさうござりませう。

なつ　此の悲しみをする位なら、いつそ淺間で押に打たれ、死んだがましであつたわいな。

みの　子供の癖にませた事をと思召すでござりませうが、淺間山でお死になされたら御兩親のお歎きはどのやうでござりませう、決して死なうなぞといふ、心をお出しなされますな。

なつ　それでもかうしてゐる内に、恥しいめに逢はうかと、思へば夜の目も寢られぬわいな。

みの　その御案じは御尤も、旦那樣は兎も角も惡い御方が立入れば、どんな事をいたさうか實にそれは知れませせぬ。

なつ　それを思ふと兩親へ、濟まぬ事ではあるけれど、早う死にたうござりまする。（ト泣く。）

みより　左程に思召すならば、旦那樣がおよつたゆゑ、此の間にお逃げなされませ。

なつ　その志しは嬉しいが、私が逃げたらあと〳〵で、お前に難儀がかゝらうから、それを思ふと逃げられぬわいな。（ト此の時奥にて、）

丈五　おみの〳〵。

みの　あの聲は旦那樣、こりやもうお逃がし申されぬ。

ト合方にて、奥より丈五郎着流しにて、伸びをしながら出來り、

丈五　毎晩ろく〳〵寢ねえから、つい一寢入り寢過した。（トよい所へ住ひ、）勘太はどこへ行つた。

みの　只今お湯へ參りました。

ト此の内下手より、駕籠舁勘太出來り、直に内へはひり、

勘太　大きに長湯をいたしました。

丈五　おれも思はず長寢をした。

勘太　扨は昨夜のお勞れで。

丈五　まださういふ譯にやあいかねえ。

勘太　いえ孃さんの顏附ぢやあ、內祝言がありましたらう。

なつ　その樣な事は、わたしや知らぬわいなあ。（ト退かうとするを、丈五郎手を取り、）

丈五　これさ、其の知らねえのは教へてやるから、さういやがらずと、言ふ事を聞きねえ。
勘太　ぜんたい厭がるといふのが分らねえ。孃さん、此の旦那は命の親だぜ。
なつ　其の御恩は忘れませぬが、云ふ事聞けのなんのとは、そりや御無體でござりまする。
みの　其の樣な無理をおつしやらずと、早く歸してお上げなさいまし。
丈五　なにを娘の肩を持つのだ。文句を云はずと酌をしろ。（トおみの餘儀なく酌をして）
みの　もうおつもりでござります。
丈五　なに酒がねえ、不見識な事を云やあがるな。さうして親仁はどこへ行つた。
みの　今日は大旦那樣の御命日故、圓通寺へお寺參りに行きました。
丈五　けふは七月十八日、違えねえ親仁の日だ、いや年寄りといふものは佛の事などを忘れぬものだが
おらあすつぱり忘れてゐた。命日ならもう一杯飲まう、おみの酒屋へ行つて來い。
みの　はい、參りますが、おあしを下さいまし。
丈五　馬鹿を云へ錢を持つて行くのなら、勘太を酒屋へ使ひにやるが、錢持たずだから手前を遣るのだ。
勘太　え、錢持たずで、直ぐ酒屋から持つて來るかえ。
丈五　そこは名代の黑鍬組、錢などをやつてたまるものか。

勘太　じぶくり勘太と綽名にとり、方々の酒屋を借り倒すわるゝと異名の駕籠舁だが、旦那の手際にやあ叶はねえ。

ト甚句の合方になり、花道より序幕の畑六、着流し大小、雪駄にて酒屋の御用一升樽を持ち附添ひ出來り、歩きながら、

畑六　御用、手前の内は不器用な内だの。

酒屋　何が不器用でござりますな。

畑六　酒を賣るならとてもの事に、なぜ肴も賣らねえのだ。

酒屋　御常談をおつしやりますな、肴屋は淨土寺の表に立派な家がござります。

畑六　そりやあ云はずと知つてゐるが、一軒で借りるより一軒で一緒に借る方が世話がねえからよ。

（ト此の内舞臺へ來り、）さ、樽をこつちへ寄越せ。

酒屋　あもし、代はよろしうござりませうね。

畑六　よくなくつてどうするものだ。（ト件の樽を提げて奥へ來り、）紀の國屋から一升提げて來ました。

丈五　おゝ丁度いゝ所だつた、おみの直ぐ燗をしてくれ。

みの　はい〳〵。（ト樽を持ち屋體の内へはひる。）

酒屋　もし、まだ御勘定は下さりませぬか。（ト畑六是に構けず、）
畑六　おいおむす、又泣いてゐるのか、いゝ加減にしねえ、よくべそ／＼泣くぢやあねえか。
勘太　なあにもう、七ツ下りだから日が暮れて、旦那と泣く下稽古をして居りますのさ。
畑六　畜生め、そいつアいゝ手廻しだな。
酒屋　もし、御勘定をお早く願ひたうござりまする。
勘太　何か玄關で言つてゐるぜ。
畑六　もう直き日が暮れるから、大方蚊が出て來たのだらう。
酒屋　なんだ蚊が出て來た、とんでもねえ事を云つて居る。もし、御勘定をお願ひ申します。
丈五　まだ燗が附かねえか、お銚子のおつもりだ、早く爰へ持つて來てくれ。
　　　トおみの上手の障子を明け、
みの　まだ、今入れたばかりでございます。
丈五　いやぬるくつてもいゝ、持つて來い。
みの　はい。（ト燗徳利を持ち出來り、丈五郎に酌をする。）
丈五　ムヽ、紀の國屋は、滅法いゝ飲み口だ。

酒屋　もう酒を飲んでゐるのか、いゝ氣なものだな。へい、御勘定をお願ひ申します。
畑六　馬淵はまだ歸つて來ませぬかな。
丈五　信濃屋へ使にやつたが、大分手間がとれるわ、婚禮の日取などを取極めて居るかも知れねえ。
なつ　婚禮の日と申しますのは、
丈五　お前と杯をする日の事よ。
なつ　えゝ

トびつくりしてどうとなる、おみの介抱する。三人は酒盛なして居る、賑かな合方になり、花道より以前の郷藏出來り、直ぐ玄關へ上りながら、

郷藏　只今戻りました。
丈五　おゝ待つて居た／＼、さあこつちへ來て飲むがいゝ。
郷藏　眞平御免なせえ。
丈五　して信善の返事はどうだつた。
郷藏　いや呆れ返つた分らずやで、何んにも云はずに病人のかゝあと亭主が袖に縋り、返して／＼と半分氣違ひのやうでござりました。

丈五　それからなんと掛合つたな。
郷藏　嫁に貰へずば聟に行かうと、さん〴〵掛合ひ詰めたところ、許嫁があるとぬかしやあがるから、相手を聞いたら内にゐる佐七といふ手代だと、やう〳〵本音を吹きました。
丈五　なに、佐七と許嫁だ、それぢやあ内の青二才か。
なつ　そんなら佐七を内の聟に、てもまあ嬉しい。
丈五　え。
なつ　どうか早う歸して下さりませ。（ト氣を替へていふ。）
丈五　イヽヤ歸さねえ、佐七と聞いてにつこりと、くぼんだゑくぼの樣子ぢやあ、小癪に觸つて歸されねえ。
なつ　そんなら歸しては下さりませぬか。
丈五　めそ〳〵娘に泣かれるので、なんだか酒が理に落ちた。宮下の藤屋へでもいつて、荒え所を燒かして來てくれ。
畑六　酒は一升引いて來ても、あんまり肴がかんせいいだ。馬淵と二人で藤屋へ出かけようか。
郷藏　行く位なら田町へ出て、梅本で三ツ物でも誂へ込まう。

勘太　ちつと見習ふ爲に、一緒に行かうかね。
郷藏　貴さまは内に殘つてゐて、酒の相手をするがいゝ。
畑六　それぢやあ直いつて持つて來ますぜ。（ト兩人玄關へ出る。畑六を酒屋の御用抑へて、）
酒屋　もし、いつまで待たしてお置きなさいます。
畑六　誰も頼みもしねえのに、手前が勝手で待つて居たのだ。（ト兩人花道へ行くを、）
酒屋　いえ、勝手ぢやござりませぬ、御勘定を下さいまし。
郷藏　なんだ一升や二升ばかり、けち〳〵するな、おれが立替へてやらう。
酒屋　そりやあ有難うござります。どうぞお願ひ申します。
郷藏　其の立替は、それ、是だ。（トいきなり酒屋の横面を打つ。）
酒屋　あいたゝゝゝゝ、なんでお前さん、お打ちなさいます。
郷藏　勘定の替りになぐつてやるのだ。
酒屋　そりやアあんまりひどうござります。
畑六　えゝ、うるせえ。
郷藏　どこまでも附いて來い。

ト酒屋額を押へ附いて行くを、兩人づゝ〳〵しく花道へはひる。此の内舞臺は酒盛をしてゐる。勘太段々醉がまはり、

勘太　旦那、肴の來る迄暫くの間、お床入とはどうでござりますえ。

丈五　それは大極上々吉だが、娘が得心しねえ内は、痩せても枯れてもおれも武士だ、まさか強淫も出來ねえからよ。

勘太　成程こいつも尤もだが、酒ばかりぢやアあんまり閑靜、内に肴はありませんか。

丈五　おみの、獻産屋から來た雲丹があるだらう、あれと香々でも切つて來い。

みの　はい〳〵。

勘太　おれも手傳つて出してやらう。（ト兩人上手屋體へはひる。）

丈五　コウお夏、さう泣いてばかりゐても分らねえ、まあおれの云ふ事を聞くがいゝ。（ト合方替つて丈五郎思入あつて、）今は斯ういふ身持で居るが、是でも以前は五萬石取るある大名の家老の忰で、榮耀榮華に育つたものだが、ふとした事より暫時の內、身の紀明に黑鍬谷でしばしの内の侘住ひ、あすにも歸參の叶ふ時は、打つて替りし我身分、それゆゑ嫁に參つたとて、出世にこそなれ恥にはならぬが、なぜそれに返事をいたさぬ。

なつ　はい。（ト泣きゐる。）
丈五　聞けば店の佐七とやらと、許嫁と申す事ぢやが、そりやもうそちの心一つで、身共が方へ嫁す氣なら、どうでもこつちで斷るが、お夏此の返事はどうであらうな。
なつ　どうしてまあ、そのやうな事が。
丈五　ならぬと申すのか。（ト爰へ勘太盆へ雲丹の箱を載せ、持ち出來り、）
勘太　旦那献産屋のお使ひものが、大層積んでございますね。
丈五　どうだ見たか、あれでは以前が知れるだらうの。（トほらを吹く、勘太調子を合せ、）
勘太　いや知れますとも／＼、此の雲丹の箱などは山程積んでございましたが、いくら嘗めても嘗め切れませんな。
丈五　まだ／＼本家へ行つて見な、なんでもいふ目が出放題、先づ春は花見夏は涼み秋は月見に冬の雪見、その外歌舞伎あやつりは替り目に見られる自由な身の上、これでもそちは嫁すのがいやか。
（ト物やはらかに云ふ。）
なつ　それでもどうも、あの佐七に。
丈五　なんだ、佐七だ。（トきつとなつて、勘太酌をなし酒を飲みながら、）ムヽ、それぢやあうぬは青二才

と、疾より出來てゐたのだな。

なつ　どうしてまあ、其の樣な事が。

丈五　世間知らずの懷子でも、佐七と出來てゐるからは、子供といふ譯でもねえから、よく考へて返事をしろ。信州から長い内地の氣の短い丈五郎が、氣長におぬしを口說くのは、世間へ恥を知らすめえ爲め、得心させて表向き女房に貰つて抱いて寐る氣だ、たつて佐七に心が殘りおれを嫌つて返事をしにやあ、縛つて置いても丈五郎が惚れた思ひを晴らすのだ、强淫されたと云はれたら、一生涯の身の恥だ、そこを思つて返事をしろ。

なつ　さあ、其のお返事は。

丈五　ならざあ縛つて思ひを晴らし、からだへ疵を附けようか。

なつ　さあ、それは。

丈五　もういゝ加減に往生しねえ。

なつ　はあゝ。(ト泣伏す。)

勘太　又泣くのか、いやこいつアよつぽど泣蟲だねえ。

丈五　いや、この泣く所を見ると、おぼこの生娘。こいつあ猶々氣が惡いわえ。

ト引寄せる。右の合方にて花道より郷藏、畑六以前の佐七を引立て出來り、

佐七　あゝもし、どこへお連れなされまする、私は何もあなた方へ失禮をいたした覺えはござりませぬ。

郷藏　どこへ連れて行くものか、どうせおれ達の居る所だから、

畑六　黑鍬谷の組屋敷だ、突ッかゝつたしらちを附けろ。さあ、行きやあがれ。

佐七　どうぞそれは、御免なされて下さりませ。

ト舞臺へ來り、玄關より佐七の手を取り、下手へ連れて來り、

郷藏　いゝ肴を引いて來ました。

郷藏　なあに、此の野郎でござります。（ト佐七を前へ突出す、此の時思はずおなつと顏見合せ、）

なつ　おゝ、佐七か。

佐七　お孃樣。

丈五　むゝ面を見たら思ひ出した、こいつァ質見世にゐるやつだが、此の青二才が娘の聟か。

畑六　肴を引きに出かけた道で、此の野郎があつちこつちとまご〱するのは此の娘を、てつきり浚ひに來たと察し、ふんづかめえて來ましたのさ。

丈五　むゝ、こいつア何よりいゝ肴だ。（ト合方になり、）やい二才、うぬが居るので此の娘がいくら口説いても返事をしねえが、爰へ來たのは幸ひだ、さつぱり爰で緣を切れ。

佐七　どういたして其の樣な事は、身に覺えはござりませぬ

郷藏　よしんばねえにした所が、娘の聟になると聞いては、此の儘にはしておけねえ。

畑六　幸ひ爰で突合せ、緣が切れたと云つてしまへ。

佐七　それぢやと云うて、どうも爰では。

郷藏　返事をしねえは此の娘と、うぬは緣を切らねえのか。

佐七　全くもつて、

勘太　表傳馬に居たおれが證人だぞ。

佐七　えゝ。

丈五　それ、なぐれ〳〵。

勘太　合點だ。

ト　ひよろ〳〵しながら佐七の襟上をとつて引出すを、お夏たまり兼ね、つか〳〵と行つて是をとめ、

なつ　まあ〳〵待つて下さりませ、佐七はなにも覺えのない事、わし故責苦に逢ひましては、どうも親

に濟みませぬ。

丈五　何だえ、おつウ男を庇やあがる、こいつもついでになぐり附けろ。

鄕藏　いや、こりや面白くなつて來たわえ。さあおむす、色をして居ると有體に言つてしまへ。

佐七　いえ〳〵決して左樣な事は。

畑六　しねえと云へば引ッぱたいて、痛いめ見せて云はせるぞ。

佐七　さあ、それは。

鄕藏　さあ、有體に、

兩人　云はねえか〳〵。（ト薪で佐七を打つ。）

なつ　あもし、どうぞ佐七をば。

丈五　えゝ庇ひ立てをしやあがるな。

佐七　私はどうなつても、お構ひ下さりまするな。

兩人　さあ云へ〳〵。

ト佐七を打すゑる、お夏氣を揉むを丈五郞引附け居る。兩人お夏に見ろといふ思入して打つ。ばたばたにて奧より序幕の作兵衞おみの出來り、作兵衞は佐七、おみのはお夏の中へはひり、

作兵　まあ〳〵、お待ち下さりませ。

郷藏　親仁はもう歸つて來たのか。

作兵　お寺參りより臺所へ歸つて樣子を聞きました。もし馬淵さま、おい駕籠屋さん、二人に疵でも附ける時は、こなたはなんと言譯さつしやる。

郷藏　べらばうめ、茶屋小屋酒屋切見世で、人を打つのは不斷の事、指のさしてもありやあしねえ。

作兵　いや〳〵さうでござりませぬ、留むるも人の爲ならず、皆あなた方の後難を思つてお留め申しますから、打つのはお待ち下さりませ。

畑六　後の事を思つて人が毆れるものか、構やあしねえやツつけろ。

勘太　合點だ。

ト止める作兵衞を畑六引附け、勘太薪にて佐七を打つ、お夏留めようとするを郷藏押へる、是へおみのからみよろしくこなし、此の內合方になり、花道より序幕の重內、羽織袴大小雪駄にて、八丈の笠を冠り出來り、直ぐ玄關へ來て、

重內　頼まう。

作兵　どうれ。（ト是にて皆々ためらふ。此の內作兵衞、式臺へ出て手をつかへ、）どなた樣でござりまする。

重内　戸澤重内でござる、御取次ぎ下されい。

作兵　ハッ。（ト奥へ來り、）もし／＼、劍術の大先生戸澤重内樣がお出でになりました。

丈五　なに、戸澤が來た。コウ勘太、臺所へ連れて行つて、ふん縛つて戸棚へ入れて置け。

勘太　畏りました。さ、行きなせえ。

なつ　いえ／＼、わたしや爰に居ります。

みの　あゝもし打たれるとなりませぬから、まあ／＼お出でなされませ。

ト是にておみの介抱しながら、お夏へ勘太附いて上手屋體へはいる。

丈五　さ、こつちへ通すがいゝ。

ト是にて丈五郎、鄕藏、畑六形を改めて住ひ、作兵衞は玄關へ行き、

作兵　さ、こちらへお通り下さりませ。

重内　御免下され。（ト此の內笠をぬぎ、二重下手へ通りよろしく住ひ、丈五郎侍の心になり、）

丈五　是は戸澤氏でござつたか、始めて御意得申すでござる。

鄕藏　手前は同組の馬淵鄕藏と申す者。

畑六　又手前は牛窪畑六と申しまする。

丈五　以後お見知り置かれ下されい。
重内　かねて貴名は承知いたすが、今日始めての御面會、手前は戸澤重內、自今御別懇に願ひまする。
ト此の內作兵衞茶を出す。
丈五　只今ちと目出たいことがござつて、かやうに杯盤を取散らし、失禮御免下されい。
重內　さて今日罷り出でたは、貴殿へ御禮に出ましてござる。
丈五　はゝあ、禮に出たと仰せあるは。（ト誂への合方になり。）
重內　かねて手前が親戚同樣別懇にいたす、傳馬町の信濃屋善兵衞が娘夏を、淺間山噴火の節一命お助け下されて、ともぐ\お連れ下されし由、お使を以つて承り兩親の悅びいかばかり、早速御禮に上るべき所、折惡しく病氣にて出兼ねます故、取敢へず善兵衞の名代に、手前御禮に參つてござる。
丈五　それは御苦勞千萬にござる。
重內　何か整へ御禮に持參いたすべき所なれど、火急の事故失禮ながら、此の一封は御禮の印、何卒御受納下されい。
ト懷中より袱紗包みを出し、水引を掛けし金包みを扇へのせて出す。丈五郎じろりと見て、

丈五　いや、其の御禮では痛み入る。是れは金子でござるな。
重内　いかにも、甚だ些少ながら、御笑納下さらば大慶に存じまする。
丈五　此の御禮は受取られぬ。
重内　なに、受取られぬとは。
丈五　丈五郎は天下の御家人、金子の禮は受けませぬ。
重内　なにか品物と存ぜしが、火急の事故金子をば御禮に持參いたしたが、御受納は下されぬか。
丈五　御禮とあらば丈五郎、外に望みの品がござる。
重内　はゝあ、そりや何品をお望みなるや。
丈五　申し受けるは手前方へ、預かり置いたるおなつどのを。
重内　なんと仰せらるゝ。（ト合方きつぱりとなり、）
丈五　仔細と申すは外ならず、先月下旬暑を避けに、信州淺間の麓なる温泉宿へ趣く途中、追分宿へ泊りし夜。五ツ半とも覺しき頃、不意に淺間の震動なし、たゞ事ならずと思ふ間に吹き出す音の凄まじく、崩れし山の大石が雨霰と降りし故、忽ち家は潰れてしまひ、押に打たれて死んだものは何千人か數知れず、手前は外へ駈け出して、運よく危難は脱れたが、燒灰の爲め闇夜の如く、盲

さぐりに明るき方へ潰れし家の上を歩けば、屋根の下にて助けくれよといふ哀れなる女の泣聲、不便に思ひ苦痛も忘れ、屋根をめくり土を掘り、必死となつて出せしは善兵衛殿の卽ち御息女、元より氣絶いたしをれば、やう〳〵水ある所迄連れ參つて介抱なし、樣子を聞けば連れの者はいづれへ行きしか行方知れずと、聞くも哀れな物語り、素より手前が執心のお夏どのを助けしは、誠に深き奇緣故、同道なして連れ歸り先達より申入れしが、猶改めて馬淵を以つて妻にお貰ひ申したく、先刻申し入れてござる。

重内　淺間の噴火は前代未聞、旣に死亡の其の人數は何千人か數知れずと専ら街の風說なり、其の萬死の内を出て一生を得たりしは、偏に貴殿の御蔭故、命の親共言ふべき恩人にはござれども、其の當人は申すに及ばず、父母が承引いたさゞるに、助けし事を恩にかけられ、戻さゞるは理不盡なり、一旦受けし恩を謝し、然る後に緣邊の御相談仕らん。謝す御禮は淸く受けられ、娘はと先此方へお渡しなされて下されい。(ト重内丁寧にいふ。)

丈五　いや渡されませぬな、命掛けにて助けし娘、噴火の爲めに死んだら知らず、生殘つたら萬代まで思ひを掛けし丈五郎、身を紛にしても渡しませぬな。

鄕藏　娘の事では猪飼氏も、硫黃の山も同樣に逆上せあがつた其の擧句が、手燒所か身體まで、すんで

に吹かれて死ぬまでになつて助けた今度の騒ぎ、そいつを不意に横合から山つなみで引ッ浚は、とは、こりや掘出した甲斐があるまい。

畑六　ぜんたい肚胸のよすぎるのは、危ない橋を渡つて參つた娘を外から骨折らず、松の根こぎといたさうとは、ちつと硫黄が强過ぎる。

丈五　お氣の毒だが戸澤先生、娘の事ならもう二言と、口を利いて下さるな。

ト重内の前へ金包みを置き、よろしく思入。

重内　お助け下されし御禮を致した上で娘を引取り、其の上改め緣邊の御挨拶いたすと申すに、それでも貴殿は不承知かな。

丈五　いかにも身共不承知でござる。（トきつと言ふ、重内是迄といふ思入にて、）

重内　御承引なければ是非に及ばぬ。主人に替る戸澤重内、此の儘歸宅致されぬ。

トきつぱり言ふ。是にて郷藏、畑六顏見合せ、丈五郎の前へ大小を出し自分も刀をさす。爰へ奥より勘太聞きつけ鉢卷をなし、以前の薪を持ち皆々きつと思入。佐七佐五兵衞は是を見てふるへる。丈五郎きつとなつて、

丈五　して、此のまゝに歸れぬとは。

重内　助けられたる恩義を謝し、お夏を渡しくれと申すに、押して婚儀を申入れ、得心なければ渡されぬとは、四民の上たる武士に似合はぬ近頃不當の御挨拶、町人ならば知らぬ事手前も即ち武士でござる、刀の手前其許の不當を聞いては歸られぬ。

丈五　不當を聞いて歸れぬとは、いかゞ貴殿はいたされるな。

重内　是が町家の俠客なら貰ひに來たる娘を引きとめ、不當を申して渡さずば男が立たぬと打ち合つて刀づくにて連れ歸らんが、御同然に武士なれば、其俠客の顰にならひ此場に於て勝負なさん。眞劍なり木劍なりとそれは貴殿の望みに任せ、勝負を爲したる其上にて、手前が勝たば渡し召されゝ負けたら貴殿が留め置かれよ。

丈五　すりや助けし娘の遣り取りを、勝負の上にいたすとか。

重内　いかにも。

丈五　むゝ面白い其仰せ、とてもの事に眞劍で、命の遣り取りいたすでござらう。

重内　然らば此の場で眞劍の、

丈五　勝負なしたる其上で、

重内　娘を渡すか、渡さゞるか。

丈五　勝つと負けるは時の運。
重内　いでや立合ひいたすでござらう。
ト重内刀を持ちきつと見得、丈五郎思入あつて、
丈五　いや、此の勝負はいたされぬ。
重内　や此期に及んで卑怯未練に、勝負がならぬと言はるゝは。
丈五　貴殿の恥辱を思ふ故。
重内　何んと。
ト右の肌を脱ぐ、二の腕いつぱいに白布にて結び居て重内の目の前へ出す。是にて兩人氣味合ひの思入、稽古笛誂への合方になり、是より丈五郎世話に替り。
噴火の時に灰の下の娘を助ける其爲に、折れた梁にて打ちたる疵所。
重内　そんなら貴殿は疵所の爲に。（トきつといふ。）
丈五　一刀流の達人とその名のひゞいた戸澤重内、疵さへなけりやあ神影の奧儀を極めた丈五郎、烈しき勝負もする所だが、左りの腕ぢやあ叶はねえ、それとも腕の怪我を承知で、此の丈五郎を打ち込むか、よもや名を賣る達人が此の怪我人は打ち込めめえ。

ト重内ぢつとなろ、是にて兩人も世話になり。

鄕藏　おい先生、お前が鳶の頭とか、又親分とかいふなら知らず、竹の具足で身を固め、たんぽの槍や竹刀を持つ町道場の先生で、もつれた娘の貰ひ引は、ちつと畑が違はうぜ。

畑六　それよりは猪飼氏の腕の怪我がいゝ汐時、いづれ後日の掛合と尻尾を卷いてこそ〳〵と、まあ引き取つたがよからうぜ。

重内　いゝや此の儘は立歸らぬ。理不盡なる筋を持つて、自儘に婦女を留め置くは俗に申せばかどはかし、疵所に勝負が出來ぬとあれば、居所へふみ込みつれ歸る。

丈五　何踏み込んでつれて行く、こりや瘦せても枯れても天下の御家人、黑鍬谷の丈五郎あばら簀戸の住居でも言はゞ城廓同然だ、支配の沙汰がなけりやあ通さぬ。

重内　むゝ。

丈五　それとも無沙汰に踏み込むなら　おれを殺して連れて行け。それでなけりやあ通さねえ。

ト片肌ぬいだまゝあぐらをかき、きつと思入。重内ムヽと刀へ手を掛け立上るを、佐七、作兵衞びつくりして左右より留めて、

佐七　あゝもし、どうぞ短氣をお出しなされずに。

作兵　暫くお待ち、

兩人　下さりませ。

重内　いや放せ、身共も一分立てねばならぬ。

作兵　さ、そりや御尤もではござりますが、何かは親仁が此の胸に、いやなに、胸をおこらへなさいまして、どうぞ此のまゝ。（ト娘は逃がすといふ思入あつて、）お歸りなされて下さりませ。

ト兩人にてなだめる、是にて重内呑み込み。

重内　過言に忍びず一刀に、切つて捨てんと存ぜしが、お身等がとりなしいたす故、詞に免じて歸宅いたす。

佐七　そんならお聞きずみ下さりますとか。

兩人　えゝ有難うござりまする。（ト是にて三人ほつと思入。）

重内　いやなに猪飼氏、貴殿の怪我を附けこんで立合いたす譯にも行かねば、けふは此の儘歸宅致す。

丈五　はゝあ、それぢやあ此まゝ歸りなさるか。

重内　娘はそれ迄慥かに預けた。

丈五　いや、ありやあおれの女房だ。

重內　なんと。（トきつとなるを、）
作兵　はてまあ、何もおつしやらずと、
佐七　どうぞお歸り、
兩人　下さりませ。
重內　むゝ、後して面談いたすでござる。
トつか〳〵と玄關へ出る、是にて佐七も氣味わる〳〵そこ〳〵に下手へ逃げて出る、作兵衛送り出し手を合せ重內を拜む。重內門口に立ちどまり、作兵衛へ思入あつて、
然らば老人。（ト作兵衛と氣味合ひの思入あつて、）大きに世話であつた。
ト唄になり、重內先に佐七氣味の惡き思入にて、振返り〳〵重內に附いて花道へはひる。作兵衛は式臺の上にて一人うなづき、お夏を逃がさうといふ思入。
丈五　やい、作兵衛々々。
作兵　はい〳〵。
丈五　おてうしのおつもりだ、早く後を附けて來い。
作兵　はい〳〵畏りました。（トそこ〳〵に上手屋體の內へはひる。）

鄕藏　何にしろ心掛りは、山の手切つて名の高い劍術指南の戸澤重内、病づかしてかへしたからは。

畑六　弟子も多くある達人、きつと仕返しに來ませうから、

勘太　旦那どつかへ代物を、駕籠で持つて行きませうか。

丈五　何どうされるものか、だがおれの心掛りは所詮女はむつかしいから、武士の恥を打ち捨てゝいつそ手籠めにしにやあならねえ。

鄕藏　もうかうなつたらそれに限る、善はいそげだちつとも早く。

畑六　勘太あまをしよびて來い。

勘太　畏りました。（ト上手へはひろ。是と入れ違つて作兵衛燗德利を持つて出來り）

作兵　上燗に出來てをりました。

ト是にて三人酒を飲む。ばた／＼になり、勘太出來り、

勘太　大變でござります／＼。

三人　どうしたのだ。

勘太　あまが繩を拔けて、ゐなくなりました。

三人　えゝ、そいつは大變だ。（ト鄕藏、畑六奥へはひる。）

丈五　繩拔けなどは出來ねえ筈だが、こんな不思議な事はねえ。

トばた／＼になり、鄕藏、畑六おみのを引立て出來り、前へ突き倒し。

鄕畑　もし、こいつが逃がしましてござりまする。

丈五　何んだ、手前が逃がしたのだ。

みの　旦那樣に連れられて爰へお出でのその日から、間がなすきがな泣いてばッかり、おいとしうござります故、繩を解いて私が逃がしましてござりますから、お腹が立つなら此の身をば、お打ちなされて下さりませ。

丈五　餓鬼のくせにしやらくせえ、うぬをぶつたつてどうなるものか。（ト足蹴にするを鄕藏引起し。）

鄕藏　さうして娘をどこへ逃がした。

みの　繩を解いて庭口から逃がしましてござりますから、何處へ逃げてゆかれたか、私は存じませぬわいな。

鄕藏　主人の大事の娘をば、逃がすといふは太えやつだ。

畑六　うぬ、どうするか見やあがれ。（ト兩人にておみのを打つ。作兵衞留めて、）

作兵　いえ、それは此の作兵衞が、言附けましてござりまする。

丈五　なに、手前が娘にいひつけたと。（ト作兵衞丈五郎に詰め寄り、）

作兵　旦那さま。（ト丈五郎を突き飛ばし、）えゝお前さまはなあ、もし、けふは大旦那の祥月命日、あらう事かあるまい事か、大酒をした上かどはかし同樣な事をなされまして、お前樣ゆゑ黑鍬のお組の名前がよごれますから、娘を裏から逃がしました、お腹が立つなら親子の者をどうなりとなされませ、大旦那に代つて御異見申しまする。もし、それではあなた濟みますまい。

ト詰め寄るを、丈五郎此内身支度をしてゐて、

丈五　えゝ、うぬらの意見を聞く耳はねえ、まだ遠くは行くめえから、是れから直に手分けして。

鄕藏　表と裏の傳馬町から、

畑六　見附あたりを、

三人　さがすとしませう。

丈五　むゝ、さうだ。さ支度はいゝか。

トつか〳〵と下手へ行くを、作兵衞は丈五郎、おみのは鄕藏に縋り、

作兵　えゝ、あなたをやつては。

丈五　何を邪魔をしやあがる。

ト振り拂つて蹴倒すを木の頭、丈五郎へ三人附いてつか〳〵と花道へ行く。作兵衞は脾腹を打たれ、どうとなるをおみの介抱する。時の鐘、早き合方にて、皆々花道へ走りはひる。是にてよろしく、

ひやうし幕

ト幕引附けると風の音にてつなぎ、直に引返す。

五　目

赤坂見附前仕返の場
紀伊國坂上堀端の場

（淨瑠璃）　塞がる胸の雲晴れて　振返り見る星が岡　鐘四谷御堀月影　（淸元連中）

〔役名──猪飼丈五郎、戸澤重內、信善手代佐七、馬淵鄕藏、半窪畑六、中野與四郎、熊川甚八、猿田典藏、犬淵勘六、鹿谷六助。信善娘おなつ、友達おつる、同おたけ、同おうめ、同おかめ、信善乳母おしづ、中間づぶ六、じぶくり勘太等。〕

（赤坂見附前の場）──本舞臺一面の平舞臺、上の方戸を建て揚緣を上げし床見世、下の方火の見の立梯子、稻荷の社正面赤坂見附を見たる夜の遠見、總て赤坂見附前の體、爰に前幕の鄕藏畑六大小尻端

折りにて立懸り居る。下手に熊川甚八、猿田典藏、犬淵勘六、鹿谷六助御家人の拵へ、大小着流しにて立ちかゝり居る、此の見得稽古囃子水の音にて幕明く。

甚八　馬淵牛窪御兩所が、われ〳〵四人に頼みといふは、

四人　どういふ筋でござるな。

鄕藏　頼みといふは外でもない。かねて頭が惚れた傳馬町の信濃屋の娘お夏を、首尾よく信州で、既に危ふく潰されるを、やう〳〵助けて連れ歸り表向き貰ひに行つたが、元より呉れぬは承知だが、無理往生に貰はうと娘を引上げ置いたところ、

畑六　唯の者では行かぬと思つて、此頃こゝらで評判の劍術遣ひの戸澤重內、彼が娘を返してくれと、親父に代つて參つたが、種々掛合ひに及んだ上、勝負を仕ようと申したを、右の腕が利かないと頭がさそくで期を延ばし、其場は無事に歸したが、

鄕藏　きやつらに幅を利かされては、黑鍬組の顏にかゝはる、それ故皆の力を借り、

畑六　今夜戸澤をたゝきしめ、面目なくて此の土地に居られぬやうにしてやりたいのだ。

甚八　それはわれ〳〵も望む所、四五日跡に達摩煙草で、わづかな借の催促するから、武士に恥辱をあたへたと坐り込んでごもく〳〵を附き、

郷藏　酒でも買はしてやらうと思ひ、いやがらせを云つて居る所へ内から賴みに行つたと見え、きやつがのこ〳〵やつて來て、どういふ筋と聞いて見ると、

甚八　元よりこつちが惡筋故、云ひじらけにして歸つて來た。

六助　手前もをとゝひ有馬屋で酒を二升引かうと思ひ、此の犬淵と出かけて行つたが、貸せ貸さないの爭ひから、亭主を切つてしまふと脅し、手のこつぽうをすらしたが、

勘六　とゞのしまひに戸澤が來て、御料簡がなりませずば、亭主に代つてお相手になりませうと云はれたので、腕に恐れて歸つて來た。

甚八　馬淵氏の言はるゝ通り、あゝいふ者の鼻ッ柱を、折らないければ武士が立たねえ。

六助　して猪飼氏には何れにござる。

郷藏　今も話した信濃屋の娘を奥へ縛つて置いたを、譜代親父の作兵衞と娘のおみのが繩を解き、裏からこつそり逃がしたゆゑ、

畑六　頭を初めわれ〳〵も娘の行方を搜しに出たが、知れない時は見附前で出合ふ積りの約束だ。

郷藏　逃げた娘も戸澤が宅へ逃げ込んだかも知れぬから、じぶくり勘太を見せにやつたが、鑑定通り彼處にをれば、

畑六　各々方の力を借り、戸澤が宅へ踏み込んで、娘をこつちへ取戻し、叩きしめてやりてえのだ。

ト ばた〳〵にて花道より前幕の勘太駈け出て、直に舞臺へ來り、

勘太　內の樣子を窺ひましたが、娘は逃げて參らぬ樣子、それ故こちらへ取つて返す、途中で戸澤に逢ひました。

鄕藏　じぶくり勘太、待つてをつた。

鄕藏　なに重內に出ツくはした。

勘太　あれ〳〵向うへ見えまする。

畑六　爰へ來たるは丁度幸ひ、

甚八　小蔭に忍んでしめし合せ、

典藏　どうで向うは腕利きゆゑ、

勘太　聲を掛けずにだしぬけに、

六助　打つてかゝるが上策だ。

鄕藏　何れも、忍ばッせえ。

五人　合點だ。

ト時の鐘にて、皆々社の後へはひる。誂への合方になり花道より序幕の與四郎、袴大小草履內弟子の拵へ、手丸の提灯を持ち出て來る。跡より前幕の重內出來り、花道へ留り、

重內　先刻信濃屋の賴みにより、お夏殿を取り戻しに黑鍬組の頭といふ猪飼の宅へ參つたが、なか〳〵惡い性根のやつにて兎や角と申せしゆゑ、勝負をなさんと申せしが、右の腕に疵所あつて刀が持てぬと申すにつき、是非なく一先立歸つたが、跡にて下男親子の者がおなつ殿を、裏口から逃がせしを御家人共が跡を追つかけて尋ねるよし、それゆゑ手前も宅を出で、御家人共の惡行を懲らしやらんと參つたり。

與四　此の赤坂の商人は何商賣に拘らず、黑鍬組の者どもが亂暴なすに困るよし、頭と云はるゝ丈五郎を懲らしてお遣りなすつたら、嘸悅ぶでござりませう。

重內　右の腕の利かぬといふは正しく彼が僞りなれば、篤と實否を糺した上、勝負をなして討つて捨て土地の愁ひを拂うてくれん。

與四　實は疫病神同樣に人の恐るゝ丈五郎、かれが居らずば市中一般、嘸悅ぶでござりませう。

重內　先づ見附け前より裏通りを、傳馬町へ赴かん。（ト右の鳴物にて舞臺へ來り。）今宵は宵のばら〳〵降りに、常より往來が少い樣だ。

與四　後には一降りかゝりませう、お傘を取つて參りませうか。
重内　いや〳〵、それには及ばぬわえ。
　　ト　あたりへ思入、出の時鄕藏先に、以前の五人、勘太脇差しを借り皆々出て、
鄕藏　それ。
五人　はツ。
　　ト　水の音早き合方にて皆々拔きつれ切つて掛る。重内身をかはし、鐵扇であしらふ。此の内與四郞は下緖を襷にかけ股立を取り、
與四　聲をも掛けぬ理不盡者、拙者にお任せ下さりませ。
重内　我を目掛けし御家人共、取るに足らざる族なれど、相手になせば其方は後學のため見物いたせ。
與四　ではござりませうが、拙者めに、
重内　詞を返すな、控へ居らう。
與四　はツ。（ト後へ下る。）
鄕藏　やあ、取るに足らざる族とは、人を人とも思はぬ雜言。
畑六　其鼻ツぱしらを、

皆々　折つてくれん。

ト誂への鳴物になり、七人打つて掛る。重内鐵扇にて烈しき立廻り、七人寄附けぬ思入、此の立廻りの内鐵扇で刀を打落す。與四郎是を拾ひ、後の塀へはふり込む。とゞ郷藏、畑六兩人掛り、立廻つて兩人の刀を打落す。是を取らうとするを鐵扇にて打つ、これに恐れ刀を棄て皆々下手へ逃げてはひる。與四郎落しある刀を後ろの塀へ打込む、重内跡を見送り、

重内　こりや其の方は番屋へ參り、此よしを屆け置け。

與四　畏つてござりまする。（ト與四郎上手へはひる。重内思入あつて、）

重内　御家人共を市中では猛虎の如く恐るゝが、取るに足らざる鼠輩のみ、兩三度も懲らしたらば、所の愁ひを拂ふであらう。

ト鐵扇をさし、袴の塵を拂ひ、向ふへ行きかゝる。上手より前幕の丈五郎、着流し大小にて出來り、

丈五　戸澤氏、待たつせえ。

重内　手前を待てと止めしは、

丈五　猪飼丈五郎でござる。

重内　猪飼氏か。

丈五　いかにも、

重內　むゝ、（ト思入、誂への合方になり、重內跡へ戻り、）待てとは手前の事でござるか。

丈五　外の事でもござらぬが、唯今是にて承れば御家人共は取るに足らぬ鼠輩と貴殿が云はれたが、窮鼠却つて猫を喰むたとへもござれば重內殿、餘り大言を吐かるゝな。

重內　鼠輩と手前が申せしがお氣に障つたか存ぜぬが、今の族は六人とも猫に追はれた鼠同然、チウと音も出ず身を縮め、こそ／＼と逃げたゆゑ、鼠輩と手前が申せしぞ。

丈五　斯くいふ飼猪も鼠の一人、尻尾を振つて逃げる方だが、猫に恐れぬ南京鼠、小さなりだが膽が大きい、廿日鼠のはたちごろから、喧嘩は元より引酒押し借、いたづら者と云はれたゞけ手管の落しにかゝらにやあ、銀山などの手盛りは喰はねえ。ちとおこがましいが惡事なら數年の功を經た窮鼠、地獄落しの揚り屋でくせえ飯を食つて來た穢れた身體のどぶ鼠、茲で一地喰ひ合ふ氣でこなたをおれが呼んだのだ。

重內　むゝそれぢやあ疵があるといふ、右の腕がつかへるか。

丈五　疵を受けたと云ふのは噓だ、淺間山で疵を受けたと娘をくれぬ其の時に言ひがゝる氣で巧んだ仕事、玉を逃した上からは、破れかぶれの丈五郎、おのれを殺して腹をいるのだ。

重内　右の腕がつかへるなら、望みの通り眞劍の此の場で汝と勝負をなさん、然しよしなき殺生ながら此の赤坂から新宿かけ、遊所は元より諸商人に難儀を掛ける丈五郎、巧みも根强くはびこりて、枝葉のふえるならず者、幹と稱へる其の方を討つたら根を斷つ道理にて、枝葉は自然と枯れ失せん、樹木を倒す秋風にひとしき戸澤が太刀風を、受けられるなら受けて見よ。

丈五　其廣言は後での事、

重内　いでや、この場で、

兩人　勝負なさん。

ト風の音、早き合方にて兩人拔合せて立廻り、よき見得より誂への鳴物になり、兩人面白き立廻りあつて、ばた／＼になり、上手より與四郎、下手より甚八出て、

甚八　や、重内と丈五郎殿、

與四　扨は眞劍の勝負なるか。

甚八　頭の助太刀、

與四　師匠の助太刀。（ト與四郎は刀、甚八は脇差を拔き立掛るを、）

丈五　やあ、一騎打ちの眞劍勝負。

重内　助太刀ならぬぞ。

兩人　控へをらう。

ト鳴物替つて、丈五郎重内立廻つて、此の中へ與四郎甚八からんで四人立廻りあつて、甚八下手へ逃げてはひるを、與四郎追ひかけはひる。跡丈五郎重内立廻つて丈五郎を一太刀切る。

丈五　や、こりや手を負つたか。

重内　最早叶はぬ、覺悟なせ。

丈五　何をこしやくな。

ト又立廻つて、引張りの見得、水音、早き合方にて、此の道具廻る。

(紀伊國坂上の場)――本舞臺一面の平舞臺、上の方松の立木、下の方柵矢來、向ふはすに紀州侯の物見より表門を見たる夜の遠見、總て紀伊國坂上夜の體、よろしく時の鐘、水音にて道具留る。と時の鐘打上げしらせに附き、下手柵矢來を打返す。茲に清元連中居並び、直に淨瑠璃になる。

〽夕日さす茜が岡も暮れ果てゝ、雨氣に月の影もなく、雲間に二ツ三ツ四ツ谷、星が岡をばこえて來る夜風涼しき御堀端、

ト合方、水音、枝蛙の聲を冠せ、花道りよ前幕の佐七尻端折り、草履にて出來り、花道へ留り、

〽佐七は心とツかはと紀伊國坂に吐息つき、おなつが身をば案じ詫び、行方いづくと白露を結ぶ小草を踏み分けて、土手のこなたへ歩み來て、

トよろしく思入あつて、舞臺へ來り合方になり、

佐七　お夏樣を取り戻しに、先刻戸澤の先生がお出でなすつて下されたが、黑鍬組の惡者ゆゑ、とやかう云うて渡さぬ內、譜代親父の作兵衛と娘のおみのが繩を解き、裏から逃がしてくれたと聞いたが、內へお歸りなされぬのは、何處へお出でなされしか、但しは猪飼にとらへられ、引戻されし事なるか、言ひかはしたる仲ゆゑに、心にかゝる事ぢやなあ。

〽途方に暮れて茫然と、暫しイむ向ふより、

ト双盤入り賑かな鳴物になり、友達娘お鶴、お竹、お梅、お龜いづれも小娘の拵へにて出來り、佐七は後へ隱れる。

四人　盆々盆はけふあすばかり、あしたは嫁のしほれ草〳〵。

〽盆唄謳ふ小娘が、油斷のならぬ小袋の譬に洩れしおてんばに、誰も色氣は荒木町、四ツ谷へ歸る後ろより一杯機嫌の中間が、酒氣に顏さへ赤坂の局歸りの浮かれ足、逃げるを追うて

來りける。

ト娘四人振りあつて、花道よりづぶ六、紺看板の中間生醉の思入にて出來り、四人を相手に振りあつて、四人逃げるを追ひ廻し舞臺へ來り、

づぶ　どれも〳〵美しい姉え達、何處へ行くのだ。

お鶴　あい、わたしどもは四ツ谷の者、

お竹　赤坂の氷川さまへ、

お梅　お參りに行つて遊びすぎ、

お龜　急いで内へ歸るのぢやわいな。

づぶ　お堀端は夜路は物騷、おれが内まで送つてやらう。

お鶴　いえ〳〵それには、

四人　及ばぬわいな。

づぶ　いや〳〵及ばぬ事はない、是から先へ化物が出る。

お竹　なに、化物が、

四人　出ますとえ。

づぶ　それ、盆唄にもある通り、大鍋小鍋化けて出る。
〽それ出たやれ出た、お化が出た〳〵、嘘ぢやないぞえ、本所の一ツ目小僧、二ツ目のないは白子ののつぺらぼう、三ツ目入道、白首の四ツ目、夜鷹のうまず女に五ツ目羅漢の大坊主それ出たやれ出た、ぐる〳〵廻るさゞえ堂、
ト四人を相手に振あつて四人手を取り、ぐる〳〵廻つて突放す、目が廻りし思入にてばつたり倒れる。
〽ぐる〳〵廻して突放し、我家をさして急ぎ行く。
ト四人は上手へ急ぎはひる。づぶ六起上り、
〽夜風に酒も鮫が橋、是からきやつの所へ行き、芝の歸りを待ちうけて天王さまぢやなけれども、御輿を据ゑて飲みあかし、末はヨイ〳〵ヨイヤサ、
〽道も左りの屋敷町、舌打ちなして急ぎ行く。
トづぶ六上手へはひる。佐七前へ出て、
佐七　今謳うた盆唄に、けふあすばかりと云ふのみか、あしたは嫁のしほれ草と心にかゝる事のみに、ハテ忌はしいと思つたが、末はヨイ〳〵ヨイヤサと時にとつてのよき辻占、是から跡へ取つて返して、溜池邊を捜しませう。

〽身拵へする其の所へ、駈け來る娘が行き當り、

ト佐七身拵へする。ばた／＼になり、花道より前幕のお夏駈けて出來り、佐七に行當り、

なつ　ちつと心のせきます者、御免なされて下さりませ。

佐七　や、さうおつしやるは。

なつ　そなたは佐七か。

佐七　お孃さまか。

なつ　逢ひたかつたわいの。

〽逢ひたかつたと取縋れば、男は背を撫でさすり。（トお夏佐七に縋り、泣く。）

佐七　あなたのお行方氣づかはしく、諸所方々と尋ねましたが、よい所でお目にかゝりました。

なつ　人に人鬼はないとやら、作兵衞どのや娘御の情で脫れはしたけれど、わたしが生きて居る時は、丈五郎に連れて行かれ恥しい目に逢ふは必定、それゆゑ身を投げ死ぬ覺悟、內へもよらず逃げて來たから、そなたはどうぞ兩親へ不孝のお詫をしてくりやいの。

佐七　えゝ滅相な事をおつしやりませ、虎口をお脫れなされたは氷川樣のお助けゆゑ、死なうなどゝは惡いお心、お目にかゝらにや仕方もなけれど、かうしてお目にかゝつた上は、どうしてあなたを

殺されませう。

なつ　親の許しで末々は、そなたと女夫になられるゆゑ、死にたい事はなけれども、生きて此の世にゐる時は、どんな憂目に逢はうもしれず、それのみならず兩親や、そなたも共に憂目に逢はん、わたしが死んだ事ならば、跡へ難儀がかゝるまいから、どうぞ留めずにくりやいの。

佐七　親御さまや數ならぬ、私の身をお案じ下され、あなたが死なうとおつしやるは有難うはござりますれど、あなたに左樣な事があつたら親御さまのお歎きはどのやうでござりませう、分けておほせなされました御新造樣の御病氣が、猶々お募りなされませう、御孝行を思召さばお止まり下さりませ。

なつ　いえ〳〵なんと言やつても、死ぬると覺悟極めたは、親に難儀をかけまい爲。（トくどきになり）

〽あかぬ別れに赤坂の里を放れて身を捨つる、水際すごき外濠の深き御恩も送らずに歎きをかけるも坂の名の、女夫となるを樂しみに思ひし甲斐もあらざれば、死ぬと覺悟を信濃町、名殘り忍原悲しやと、縋り歎くぞいとほしや、

トおたつ佐七をとらへ、口說きの振りよろしくあつて、

佐七　御兩親へ御難儀を掛けまい爲めとおつしやるは、其は一途な御料簡、死ぬのはいつでも死なれま

すから、一先是から麹町の伊勢屋様へお出でなすつて、とくと御思案なされませ。

なつ　いや／＼なんと言やつても、死ぬと覺悟を極めしからは、

佐七　死んで再び生きられませねば、せく所ではござりませぬ。

なつ　それぢやと云うて。

佐七　はてまあ、お出でなされませ。

〽おなつの手をとりせり立つる、折しも荒き一吹の風もろともに月影も雲間へ入りしこなたより、

ト佐七お夏の手を取りせり立て、上手へ行かうとする、此の時以前の六人出て、

郷藏　やあ見附けた／＼、逃したおなつが爰に居たぞ。

六人　しめた／＼。

なつ　こりやもういつそ。（ト身を投げようとするを）

佐七　早まつた事なされますな。

畑六　えゝ、面倒な、引ッかつけ。

四人　合點だ。

〽暫しの闇を幸ひに、惡者どもはお夏をば、手どり足どり引き擔ぎ、坂下さして、

ト水音烈しく、四人おなつを引擔ぎ行く。佐七留めるを郷藏、畑六蹴倒し、向うへ行きかける、ばたばたにて花道より以前の重内先に、與四郎提灯を提げ出來り、花道にて留める、皆々跡へ戻る。此の内三重にて太夫座を消す。

佐七　や、戸澤樣でござりますか。

重内　身共が參れば氣遣ひいたすな。

佐七　えゝ有難うござります。

重内　それなる娘を手前に渡せ。

郷藏 畑六　うぬ、さうぬかせば。（ト刀の柄へ手を掛ける。）

重内　手向ひなさば打果すぞ。

四人　こいつはたまらぬ、逃げろ〳〵。（ト四人はお夏をおろし、下手へ逃げてはひる。）

郷藏 畑六　邪魔立てなさば。

ト切つてかゝるを突廻し、刀をもぎ取り、重内は郷藏、與四郎は畑六を引附ける、此の時ばた〳〵になり下手より序幕のおしづ、ぶら提灯を持ち出來り、お夏を見て、

しづ　お孃さま、あなたも御無事でござりましたか。

なつ　おゝそんならしづもあの時に、別條はなかつたかいな。

しづ　あなたのお行方知れぬゆゑ、力なく〳〵江戸へ歸り、もうお目にかゝれぬかと思ひの外に御無事とは、こんな嬉しい事はない。

佐七　返す〴〵もあなたのお蔭、

なつ　お禮は詞に盡されませぬ。

重内　猪飼丈五郎は眞劍の勝負を我に望みしゆゑ、旣に立合ひに及びし所、其の組頭たる正道殿、かゝる者の組にありては其組の恥辱ゆゑ、科を訴へ仕置をなせば、渡しくれよと申されて、彼に繩かけ連れられたり。

佐七　すりや丈五郎は、組頭へ、

なつ　召取られて行きましたか。

鄕藏
畑六　其相ずりは眞平だ。

ト此の時下手より黑羽織、大小の御家人二人捕繩を持ち出來り、

一　猪飼へ荷擔の二人のもの、引立て參れと頭の云ひ附け、

二　異議に及ばゞ繩かくるぞ。（ト取卷く。）

郷藏 畑六　ゑゝ忌々しい。

重内　悪人罰を蒙る上はやがて、二人は目出度く婚禮。

佐七 なつ　ゑゝ有難うございます。（ト頭取出て、）

頭取　先づ今日はこれぎり。

ト目出度く打ち出し。

淺間山噴火（終り）

金看板侠客本店

第二番目の世話物は古きを溫ねて新橋に今も故老の話に殘る甚五郎が一世の義心繩拔をせし囚人が賴みに罪を引受けて入牢なしたる情により淚の雨の故郷へ逢ひに木崎の久藏が母は眼病に我子の顏見えぬ哀れな此世の別れ妹お米が引止る袖を拂つて歸り路に戶田の川原で助けたる散行くお花房次郞は妻のおみちへ義理立に死ぬる覺悟の無分別心の駒の狂ひより馬術指南の荒川が三百兩の金轡欲には長き熊鷹のお爪がゆするお蝶の素性聞けば脫れぬ續合血で血を洗ふ助藏と目玉の十が喧嘩から此仕返しを待駒に子分突出す香車の竹槍を覗ふ相手の大五郞と白刄合していどみあふ中へ飛込む向ふ疵が命を捨てのあつかひに山さへ笑ふ仲直り是その頃に名の高き富士と筑波の一對に紫紐は出入りの問屋

『金看板』は明治十六年四月新富座に上演された、作者六十八歳のことである。講談に原材を仰いだものである。然し一篇の中心である木崎久藏の老母に別れるの件の老母は九世團十郎の扮したものであつたが、同優の眼玉は大きいので有名であるが、愁嘆の際それが邪魔をしてはといふので、盲目の母としたのは作者の工夫であつたといふことが傳へられてゐる。左團次の久藏、九世團十郎の金看板甚五郎何れも好評であつた。

書卸しの時の役割は、市川團十郎(金看板甚五郎、久藏母お稲)、市川左團次(木崎の久藏)、中村芝翫(紫紐の大五郎)、中村仲藏(熊鷹お爪)、坂東しうか(房次郎女房おみち)、尾上多賀之丞(金看板女房おとわ)、坂東家橘(堺屋の房次郎)、大谷門藏(木崎の百姓與次兵衛)、市川團右衛門(荒川運平)等であつた。

挿繪にしたのは書卸し當時の繪番附の一部分二幕目、三幕目(原作では二幕目返し)の二場の分である。

大正十五年十月初旬　　　　校訂者


二番目 上かん木綿出家の場 返し 角田川景道行の場
福助

金看板侠客本店（金看板甚五郎――四幕）

序幕

本町三臓圓見世の場
數寄屋河岸堀端の場
金看板甚五郎内の場

〔役名――金看板の甚五郎、紫紐の大五郎、木崎の久藏、堺屋房次郎、荒川運平、甚五郎子分十吉、大五郎子分助藏、箱屋宗吉、久藏伯父與次兵衞。甚五郎女房おてふ、堺屋女房おみち、金春藝者お花、お花の母お爪、其他。〕

〔三臓圓店の場〕――本舞臺眞中本町四丁目の三臓圓店、塗家造り、常足の二重、白の日除け、大暖簾をかけ、正面に土藏の入口、臺附きの看板を置き、上手藥棚、下手普請場の板圍ひ、木遣りの聲にて幕明く、と爰に雀のお百慶庵婆のなり、伊八、六兵衞、八十吉、仁介いづれも町人の仕出しにて立ちかゝり居る。三吉、長吉三臓圓の丁稚にて、店先きに練藥を包みゐる。

伊八　この本町に藥種屋も多くあるけれど、此の家の樣な立派な看板は外にござらぬ。

六兵　わしは上の者ぢやが、本店は大阪鰻谷にあるが、こないに立派ではござらぬ。

八十　これが今度新規に出來た、三臟圓の金看板だ。

仁介　實にこれは、聞いたより立派な物、こんな看板は江戸中捜してもありはしまい。

慶庵　いえ〳〵、此の金看板も江戸一だが、又當時新ばしの丸屋町で、甚五郎親分といふ顏を賣るきほひがあるがこれも江戸一で誰續く者はない。それ故誰言ふとなく金看板の親分と言ひますわえ。

伊八　さう〳〵、盛り場はどこへ行つても、金看板の親分の話しが出ますわえ。

六兵　わしは甚五郎さんの事を、金看板といふ名かと思つてゐたが。

八十　それよ、この看板も金で立派、甚五郎さんはおのれのきほひで人を助けるから、金看板と綽名されるのだ。

仁介　わしは又、甚五郎親分がこの看板を彫つたゆゑ、それで金看板といふかと思つた。

慶庵　今江戸で、どちらも二つとない名物でありませう。

伊八　わしは丁度、藥を一つ買つて行きませう。

六兵　わしも一包み買ひませう。

トめい〳〵捨ゼリフにて三臟圓を買ふこと、丁稚捨ゼリフにて練藥の包を出し渡す事。木やりの聲、合方生殺しにて、上手より宗吉箱屋なりにて出て、慶庵を見て、

宗吉　おゝ、お前は土橋の、慶庵のおつかあぢやァねえか。

慶庵　ほんに、おまへは横町の箱屋の宗吉さん、遠出でお供かえ。

宗吉　いゝえサ、そんないきな事ぢやァねえ、一昨日加納屋のお花さんがお客と一緒に木挽町の芝居へ行つたきり、どこへ行つたか行方知れず、それ故毎日々々心當りを捜してゐるが、どうも足が付かねえ。

慶庵　さうして、どこのお客と出たのだえ。

宗吉　さあ、お花さんの客といふは、お前も知つてゐるであらうが、芝口の藥種問屋堺屋の一人息子の房次郎さん、いつも汐留の山崎で呼びなさるが、お花さんも首ッたけゆゑ大方どこぞへ逃げたのだらうが、お花さんのお袋は藝者家の內では慾の深い、評判の熊鷹お爪と名をとつた人、何んでも客の內へふり込んで、掛け合を附けると言つてゐるので困りきります。

慶庵　さうして房次郎さんも捜し、近所も捜したのかえ。

宗吉　そりやァ箱屋の掛り合だから、さつそくに捜したのさ。

慶庵　おまへ、かん附所が違ふだらうぜ。

宗吉　むゝ、さうしておめえのかんといふのは、何處だへ。

慶庵　私のかんといふのは、堺屋さんと懇意にしなさる、丸屋町のねえ、金看板親分の内だ、（ト近く招き、小聲にて言ふ事あつて、）おまへも燈臺元暗しだねえ。

宗吉　さつぱり氣が附かなんだ。それぢやァこれから、甚五郎さんの所を當つて見よう。

トこなしあつて行きかける。

慶庵　おい〳〵、さうしてもし私の鑑定通り當つたら、禮はよからうね。

宗吉　そりやあおれが胸にある。

慶庵　溜飲ぢやァあるまいし。

宗吉　おつかあ、おめえも歸るだらう、一緒に行かう。

慶庵　なに、私や奉公人を待合して、爰に居なけりやァならないから、行かれないわえ。

宗吉　それぢやあ直に行つて、突留めてやらう。

慶庵　早くお出でよ。

ト木やりにて宗吉下手へはひろ。鳴物生ころしにて、花道より與次兵衞、木綿手織縞やつし、脚絆、草鞋旅なり、風呂敷包みを背負ひ、團扇二三本、淺草海苔、土產物などをさげて出ろ、後より巾着切橋助、やつし、羽織、職人體のなりにて附き出來り、花道にて、

橘助　もし、あなた様はお泊りではござりませぬか。

與次　これ　勧めさつしやるな、わしは馬喰町の幸手屋が定宿で止宿してをりやす。今日は用達しに出張つて參りやした。

橘助　それぢやあ、お荷物でもござりやすかな。

與次　何さ、ちよつと許り持參したのさ。

ト與次兵衞かまはず舞臺へ來る。橘助後より附いて來り、看板を見てこなしあつて、

やあ〳〵、人參三臓圓、やあ〳〵爰だ〳〵、國で話しがあつたが成程立派だわえ、ピカ〳〵ひかるはひかるわ。

橘助　もし是が名代の看板でござります。よく彫物を見てごらうじませ。

與次　こちらの方かな。

橘助　もつとその裏の、彫物を御らうじませ。

ト捨セリフを言ひ乍ら見る事あつて、此内橘助傍へより敎へる心にて、隙を見て紙入を拔き入れ替へる。是を與次兵衞さとり懐中を見て、

與次　これ、何さつしやる、紙入よこさつしやい。

ト引とらへこなし、橘助の手をとらへる。仕出し四人、口入婆立掛り、

橘助　何をしやあがる、泥坊々々々々。

皆々　何だ／＼。

トごつらやになる。橘助振拂つて與次兵衛を突飛ばし、上手へ逃げてはひろ。與次兵衛も風呂敷を置き、駈けて上手へ追ひかけはひろ、仕出し寄りこそり、

慶庵　あゝ二人共に、泥坊々々と追駈けて行つたが、油斷のならぬことだ。

伊八　あゝ／＼、もう一人雲霞と逃げたやつがある。

仁介　あぶねえ／＼。

六兵　おゝ一人歸つて來たぜ。

ト上手を見送り、こんな事を言つて居る内、與次兵衛取亂したるなりにて上手より出來り、本意なきこなし、

四人　これ／＼、歸つて來さしつたか。

八十　ぜんたい今泥坊といつたのは、どつちが泥坊だえ。

與次　何をおらあ取るべい、おらァ上州木崎のものだ。

慶庵　それぢやあ、今の若いやつは掏摸であつたか。
八十　さうして、何をとられなすつた。
與次　今此の看板を見てゐた内に、紙入を拔かれやした。
伊八　定めて紙入の中には、金が澤山はひつて居たであらう。
與次　何さ、金はわづか三兩でござりますが。
慶庵　外になんぞ拔かれなすつたか。
與次　さあ、外に持合せはなし、上州木崎へ歸る路銀に差支へ、途方に暮れますわえ。
皆々　なんにしても、お氣の毒なことだなあ。

　　ト木遣、角兵衛の鳴物にて、花道よりおてふ女房の拵へ、後より竹藏子分にて、兩手に傘、小包を持ち供をして出來り、此の體を見て、

てふ　向ふに大層人立がしてゐるのは、間違ひでもあつたのか。
升藏　なに、最中の當物へ田舍者でも引かゝつたのでありませう。（ト宜しくあつて舞臺へ來り、）
慶庵　おゝ、丸屋町のおかみさん、どちらへお出でになりました。
てふ　おゝ、土橋のおッかあ、何か間違ひでもありましたかえ。

慶庵　なに、今此人が掏摸に三兩はひつてゐた紙入をとられて、田舍へ歸る事が出來ないと、當惑をしてゐなさるのであります。

てふ　それはまあ不用心な事。もしおまへさん、お氣の毒な、嘸お困りでござりませう。さうしておまへさんは、どこのお人でありますえ。

與次　へい、私は上州木崎在の百姓與次兵衛といふ者でござりますが、身寄りの者が博奕場で喧嘩をし相手の者を三人切つたので繩目に逢ひ江戸へ差立になり、それを見舞に江戸へ出ましたが、とんだ災難に逢ひました。

トしをく\として言ふ。おてふ思入あつて、巾着より三兩出し、

てふ　實にそれはお困りでせう。そのお金は私がおまへにあげませう。斯うしてお目に掛るのも、是も何んぞの縁あつてゞござりませう。是に三兩ありますが、路銀になすつて紙入はあきらめ、早くお歸りなされませ。（ト紙に捻り遣る、與次兵衛取つて、）

與次　大まい三兩、わたくしに。

升藏　なにも遠慮には及ばぬ。貧窮人や困る人に施して遣るおかみさん、何もびつくりするにやあ及ばねえ。

與次　誠に見ず知らずのあなたに、此の金を貰ひましては濟みませぬが、折角の御親切、さやうなら在所へ歸るには三兩は入りませぬ、一兩あれば澤山ゆゑ後はお返し申します。
てふ　おまへもまあ、正直な、折角私がおまへに志して出した物、引返す譯にも行かぬ、又買物もござんせう、どうぞ取つて置いておくれ。
慶庵　これさ、そんな強情をいはずと、おかみさんの詞に附いて、お貰ひ申しておきな。
與次　へい、左樣ならお受け申すでござります。有難うござります。此の御恩は忘れませぬ、さうしてあなたさまのお宅はいづれで。
てふ　あれさ、禮にお出でなくつてよいよ。
升藏　さ、參りませう。
てふ　そんならをばさん、先へ歸るよ。
慶庵　お歸りでござりますか。（ト捨ぜりフにておてふは升藏を連れ上手へはひる。）
八十　なか／＼氣前のいゝおかみさんだ。
仁介　氣前もいゝが女も小意氣だ。
三人　さうよの。

伊八　もう歸らうぢやねえか。

丁稚　さやうなら。（ト大きく言ふ。皆々びつくりして皆々捨ゼリフにて下手へはひる。）

與次　今のお方は、お内を聞き申したが、禮に來るには及ばぬとおつしやつたが、お慈悲深いお方ぢやな。

慶庵　あのお方は丸屋町の金看板と異名を取つた、甚五郎親分のおかみさんさ。

與次　えゝ、上州迄名の響いた甚五郎親分の。（ト件の金包を持ち、見送り感心のこなし。）

慶庵　油斷をすると。

ト持ちし紙包みを引く、與次兵衞びつくりして袂へ引込ませるを、木の頭。右の鳴物にて道具廻る。

（堀端の場）＝＝本舞臺向う一面高き石垣、此の上草土手、見越しの松、下手竹矢來、普請小屋、棒杭の見切り、裾通り川端、地がすり、御堀の波布を張り、人の飛込む事あり、松の釣枝、上手は髮結床、見世を仕舞ひし體、總て夜の體、波の音にて道具納まる。と上手より以前の橘助走り出で、息の切れし思入あつて、懷中より紙入を出し、

橘助　あゝ、爰迄來りやあもう大丈夫だ。（トふつと紙入の中を見る事あつて、）何んの事だ、本町で拔いた

紙入は、見かけ倒しでたつた三兩、身なりを拵へようと思つたが、これんばかりぢやあ羽織迄は屆かねえ、薄汚ねえこんな紙入。

ト件の紙入を溝りへ投げ捨てる。跫音するゆゑ思入あつて花道へ走りはひる。直に說敎樣の合方になり、上手より久藏、手織縞着附の上へ、淺黃のおしきせ、本繩にかゝりて先に立ち、後よりそぼろやつしの乙十、皮草履尻端折り、生醉、是な牛吉そぼろなる非人にて、繩のはしを持ち、生醉の乙十な片手にて肩へ擔ぎ、聲をかけ乍ら出て來る。

乙十　やい〳〵、靜かに步け〳〵。

久藏　へい、道でつめを願ひましたので、外の囚人はよッ程先へ行きました。

乙十　おくれたつて、急がずといゝわえ。

牛吉　きまりをやつて、いつの間にそんなにづぶ六、喰ひよつたのだ。

乙十　今方囚人が途中でつめを願つた時、丁度其前にやたいちの店があつた、のどがグビ〳〵したから又三ばいあほつて、いゝ心持に醉つたのだ、ヱヽイ。

牛吉　おゝ、手前は醉つていゝ心持であらうが、おれは酒くせへ香をかぐ度每に、むねが惡くてならねえ。

乙十　飲みたくもねえが、役で出るから仕方ねえが、品川の溜迄すき腹ぢやあこたへるからやつたのだ、手前の腹が痛みやあしねえわ。

半吉　こウ困らせるぜ、囚人を引いて生酔の守りと兩方は恐れるぜ。第一日が暮れちあ、品川迄暮方迄のが、時が切れるだらうぢやねえか。

乙十　酒は飲んでも飲まいでも、勤める所はだ。な、そんな事を言ふな、友達のよしみだァ、ぜんたい囚人手前が悪い。

久藏　わつちが濟みません、今にお禮をいたします。

乙十　うまく言やあがるぜ。

皆々　泥坊々々々々。

ト花道にて皆々言ふ。波の音バタ〳〵にて以前の橘助逃げて出て來る。此後を幕明きの仕出し大勢追かけて出來り、舞臺の久藏、乙十、半吉に行當る。是にて兩人よろめく。橘助は其儘上手へ逃げてはひる。仕出しは久藏、非人の中へはひりごつちやになり、紙入をうばひ合ひ落す事。

仕出　それ〳〵、そいつが泥坊だ、つかめえろ。

ト仕出しは繩取の半吉に打つて掛り、取押へる。

牛吉　おれぢやあねえ、違つた〳〵。（ト乙十是を見て、したりと思入。）
乙十　御用だぞ、そいつをつかめえて酒にしろ〳〵。
仕出　やあ、こいつは違つたか、逃げろ〳〵。（ト皆々上手へ逃げてはひる。）
乙十　それ、逃すな、つかめえて酒にでもしろ。
牛吉　承知だ。（ト皆々の後を牛吉追つて上手へはひる。後波の音、久藏見送つて、）
久藏　もし、小づめに行きたうござります。どうぞおぶつておくんなせえ。
乙十　小づめか、そこへしよぐれ。（ト繩を解きにかゝる。）
久藏　有難うござります。

ト乙十繩のはしを持ち居る。久藏堀端へ行き、後向になり前をまくり、あたりへ目配せのこなしある。乙十ヒヨロ〳〵してゐる。久藏身をかはすと、乙十よろめき過まつて堀へ落ちる。久藏きつと見得、本釣鐘、波の音にて久藏つか〳〵と花道ぎはへ行き、向うへこなし。繩を切らんと竹矢來へ後手をすり附け、小手をゆるめ、是非なく繩をたぐり花道へつか〳〵と行く。此の以前より上手へ紫紐の大五郎御召縞一本さし雪駄にて出て、此時つか〳〵と前へ出て、

大五　おい〳〵、ちよつと待ちねえ。

久藏　待てとは、わつちの事でごぜえやすかえ。

大五　外に人が居ねえからおめえだ。其繩の儘で逃げる氣か。（ト久藏びつくりこなし。）繩附の儘ぢやあむづかしからう、その繩を切つてやらうと思つてさ。

久藏　なに、切つてやる。（トつか／＼と舞臺へ來る。）

大五　靜かにしろ。

ト久藏思入あつて、大五郎の前へ體をすり付けるこなし、大五郎一腰を拔放し、久藏の前へ突付けて、

手めえ、逃げるなら、肚胸を据ゑろ。

久藏　なに、肚胸を据ゑろとは。

大五　繩は切つて遣るが、手前逃げる肚胸か。

久藏　今繩取を川へ蹴込み、逃げようとした幸先に、拔身を目先へ突付けられてびつくりしたが、こつちも逃げる氣故、早く繩を切つてくんなせえ。

大五　おゝ、切つてやらう。（ト思入あつて大五郎繩をずばと切つて遣る。久藏嬉しきこなしにて、）

久藏　どこのお人だが見知らぬに、助けてくれた御恩は忘れぬ。きつと御恩は返します。

大五　禮にやあ及ばぬ、ちつとも早く行くがいゝ。

久藏　さうして、お前さまの家はえ。

大五　何の、そんな事はいゝ、早く行け。

久藏　こりや紙入が。

ト久藏行きかけ、下手に以前の紙入落ちてゐるを踏付け、取上げ、手早く見る事あつて、

中に三兩はひつてゐました。

大五　それは掏摸でも落したのだらう。丁度いゝ、それを持つて早く行け。

ト久藏行かうとする、以前の乙十堀からはひ上り、

乙十　やゝ、繩を抜けたな。

ト久藏へかゝるを突飛ばし花道へ行く。大五郎引戻し立廻つて、大五郎手拭を抛つてやる。

大五　是で面を隱して。

ト久藏手拭をとり、頰冠りをするを、木の頭、逸散に花道へはひる。大五郎乙十を引付け、向ふを見送るこなし、この模樣よろしく此の道具廻る。

（甚五郎内の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面納戸口、此の上手延喜棚、是れにいろ〳〵の物を張り、

續いて押入、上手折廻しの障子屋體下手鼠壁、いつもの處に入口、下手は荒き格子、總て丸屋町金看板甚五郎住居の體、爰に堺屋房次郎息子なり、お花藝者の拵へにてなり、よろしく道具納まる。

房次　なんでそなたは、わしに苦情を言ふのぢや。

お花　言ひませいでかいなあ、こちらの家へ預けたまゝ、二日も三日も歸らずにそれで濟むかいなあ。大方私がいやになつたのでござんせう、それ故今日はめつたに外出はさゝぬぞえ。

房次　わしかて行きたうはなけれども、つい身の上に拘はる事故、毎日出歩くのぢや、何のそなたに愛想がつきるものか。

お花　いえ〳〵、わたしやそんな事は聞きませぬ。お前に愛想を盡かされたら、母さんは義理ある仲、淵川へ身を投げて死にますぞえ。

房次　おまへをかしなことを言ふな。

お花　言ひますとも〳〵、私や言はねば氣が濟まぬわいなあ。（ト煙管を投げる。）

房次　これ、男に投打ちしてそれで濟むか。

お花　濟むも濟まぬもあるものかいなあ、私や腹が立つわいなあ。

ト此時納戸口より十吉・竹藏、勘八子分の拵へにて出來り、

十吉　こウ〳〵、おめえさん達、そんなに店の端で喧嘩をなすつてはいけません。
升藏　第一人目にかゝらば悪い御身分、早う奥へお出でなさりませ。
房次
お花　それぢやといふて。
勘八　まあ、お出でなさりませといふに。（ト是にて兩人はひる。）
十吉　何とまあ、若い内といふものは、氣樂なものぢやなあ。然しいつもの柔術はどうだ。
升藏
勘八　さうだ、今の内にやらかさう。

ト十吉あぐらをかき、升藏、勘八柔術のけいこして組合ふ。

十吉　もつと詰めろ〳〵、隙があるぞ〳〵。
升藏　どつこい、さうは行かぬぞ。
勘八　あゝ、參つた〳〵。（ト宜しくあつて組伏せる。）
十吉　今の手ぢや無法だ、晩に又おれが敎へてやる。
兩人　兄貴、二人がゝりで降參させるぜ。
十吉　弱蟲のくせに。（トおてふ女房の拵へにて出來り、）
てふ　おまへ方どうしたのだ、まア靜にしておくれな、埃が立つて奥にやあ居られやあしないわね。

てふ　おめえもいゝ加減にしねえな、それ程稽古がしたけりやあ、裏の空店へでも行つて、天井拔にするがいゝ。

勘八　爰につくねんともして居られやせんから、今兄貴に教はつて居るのでありますわえ。

升藏　をり〳〵喧嘩の時、負けねえやうに、

十吉　何んだ、人聞きの惡い、おれを頭に出して、手前達蟲がいゝぢやあねえか。

てふ　さうして日が暮れかゝつてゐるに、神棚へ御燈明でも上げねえか。

十吉　それ、言はねえ事ぢやあねえ。

兩人　うまく兄貴ごまかすぜ。

ト合方にて勘八、升藏花道へはひる。入替つて花道よりおしげ先に、下女なりにて、菓子折の入りし包みを持ち片手にぶら提灯を持ち後よりおみち、堺屋女房にて出來り、おしげ先に門口を明け、

しげ　御免下さりませ。

十吉　あい、誰だおはひりなせえ。

みち　はい、御免下さりませ、此間は御無沙汰いたしましてござりまする。

てふ　是はまあ〳〵、どなた樣かと存じましたら、堺屋のおかみさんでござりますか、まあ〳〵こちら

へ〱。

みち　決しておかまひ下さいますな、親分様は御内でござりますか。

てふ　宿では人様の事で内に居ることは稀でござりますが、まあ〱御ゆつくりとお話しなされませ。

しげ　此間より内のおかみさんも、湯屋では折々お目にかゝりましたが、しみ〲とお話しに上りたいと存じましても、つい〱御無沙汰になりましてござりまする。（ト件の菓子折を出し、）是はほんの印のみ、粗末でござりまするがお土産でござります。お納めなされて下さりませ。

てふ　是は何んでござりますねえ、御無用になされればよいに、却つて御心配をかけまして、しかし折角の御土産、受納いたすでござりまする。

みつ　御禮でいたみ入りまする。つきましては。

ト此内おてふ茶、煙草盆など出すことあつて、十吉思入あつて、

十吉　どれ、おれは今の内に飯をたべてしまはう。

てふ　おまへ勝手へ行くなら、是れを奥へ持つて行つて置いておくれ。

十吉　あい〱。お話しなさいまし。（ト十吉奥へはひる。）

てふ　あなた、宿に御用なら、丁合差度はござりませぬ」私におつしやつてよい事なら、どうぞお話

しなされて下さりませ。

みつ　お詞にあまへ申上げますが、お聞きなされて下さりませ。去年の春頃よりして房次郎儀に付きまして、始めは月に一チ二度位他出いたしてござりまするが、ついには三日目四日目と今では内より餘所が多く、夜泊りのみにて内へは更に歸らず、何處にどうして居りますかと案じ過しは女子の道、殊には主人が内へ歸らねば奉公人の手前もあり、店の締りになりませねば心を痛める此の私、是といふも田舍育ちの足らはぬ生れ、お氣に入らぬは尤もなれど御存じの通り、子迄もうけし夫婦中故、里方へ歸らうと思ふ事は度々あれど、行くに行かれぬ我が子の鎹ひ、女子の淺い心からとつおいつ心で心を痛め居りますが當惑して居りまする。お察しなされて下さりませ。

しげ　私もお側に居りまして、おかみさんの御心配を見るに附け、お氣の毒の事ゆゑに是はいつその事丸屋町の親分さんに御迷惑さまながら、知らぬ者さへお世話好きゆゑお願ひ申して御覽じろと、私がおすゝめ申して參りました。御子樣迄もある仲故、御夫婦仲の納まりが付きますやう、御無沙汰乍ら出ましたのでござりまする。

みつ　それに付き、是れ迄姑の手前氣兼ねをしてをりましたが、それさへ心に濟まぬ故、此の納まりをば親分さんに相談して見ようと思ひ、わざ〳〵忍んで參りました。此上は私の身の落着をおてふ

様、御相談なされて下さりませ。

てふ　いや、お詞ではござりますが、それは陰乍らも疾うより聞き込んで居りまして、嘸御心配と思ひますが、女子は女子同士とやら父御相談にも乗りませうが、若旦那のお馴染の其の藝者を、あなたは御存じでござりまするか。

みつ　いや、それは人より聞きましたが、お花さんとやらいふ新橋の藝者衆、田舍育ちの私とは、競べものにはならぬ故、決して悋氣はいたしませぬ。女房にさへしてくれませねば妾てかけはまゝある習ひ、どうぞ其のお花さんを身儘にして、内へなりと又よそへなりと一緒にして上げる心。姑の手前もあれば晴れて出されぬ身拔の金、それは私が里方からそつと取寄せて身儘にさせる法もあり、何卒無事に若旦那が内へお歸りなさるやう、お前樣のお力で御異見なされて下さりませ。

ト愁ひの模樣にて賴むこなし。おてふ聞いてじゆつなきこなしにて、

てふ　お聞き申せばいちいちに、御尤もなる御心中、お察し申上げまする。御子さまがござりましては、切つても切れぬ御夫婦中、及ばず乍ら私がお聞き申す上からは、宿が歸りました事ならば一部始終を話した上、あなたのお氣の休まるやう、取り計らひもござりませう。必ずお案じなされまするな。

みつ　ほんにそれ程に御請合ひ下さつて、心丈夫に思ひまする。
しげ　親分さんのおかみさんがお聞き下され、親分様が諸事お扱ひ下されば、おかみさんは元よりお花殿の身の上も、つゞまる所は若旦那の御爲になる事、惡しくはなりますまい。それをお力にもうお歸りなされませ、坊さまがお待ちなされて居りませう。
みつ　ほんに私に取りまぎれ、坊の待つのも打忘れ、長話しをいたしました。もうお暇いたしませう。
てふ　まあ、宜しいではござりませぬか。
みつ　有難うござりまする。買物に出ると申し宅を出ました故、余程ひまどりましたれば、又重ねて參りまする。しかし只今願ひましたる一儀をば、お歸りあらばくれ〴〵も。
てふ　それは承知いたしました。然したま〳〵お出でなされたのにお粗末な、
しげ　私迄がお邪魔に參り、
てふ　なんのおまへ、そんな事が、その內晝間表向き、坊ちやんもお連れなすつてお話しに、
みつ　其內參るでござりまする。
てふ　左様ならば、おかみさん、
みつ　親分さまへ、

しげ　宜しうおつしやつて下さりませ。

ト宜しく暇乞して兩人門口へ出る。合方生殺しにて花道へはひる。

てふ　始めて逢つた嫁御さん、少しも悋氣の樣子も無く結構過ぎたお人故どうでもなれど、お花さんの親御は熊鷹お爪と名の高い惡い親、どうで話が纏まるまい。こりや内の人と相談せねばならぬわえ。

ト井出の玉川の唄になり、花道より甚五郎、結城荒縞の着流し、駒下駄にて出來る。後より助藏紫紐の子分のなりにて附いて出來り、

助藏　やい〱待ちやあがれ。なんで突當りやあがつて、挨拶も無く行きやあがるのだ。

甚五　突當つたのは手前が先きだ。挨拶ならそつちでしろ。

助藏　なに、挨拶しろ、しやれた事をぬかしやあがる。

甚五　言つたがどうした。

助藏　かうしてやるわえ。

ト助藏甚五郎の胸倉を締上げる。甚五郎そのまゝ駒下駄をとり、

甚五　なんだ、こつぱ野郎め。

ト駒下駄にて助藏のあたまをくらはす。助藏頭を押へて、

助藏　あいたゝゝ、こいつめ割りやあがつたな。手前のつらあ覺えてゐるぞ。今に見やあがれ。

ト助藏引返してはひる。

甚五　あいつはたしか久保町の紫紐が子分の奴等。なんでもおれに喧嘩をば、仕掛ける積りと見える。

ト舞臺へ來り内へはひる。奥より十吉出來り、

てふ十吉　お歸りなすつたか。（ト甚五郎こちらへ通り、）

甚五　いや、酒飮み手合につき合つて居たので、大きにひまどつた。（ト此の内座蒲團の上へ住ふ。）さうして留守に、誰れぞ來やあしねえか。（トおてふ盆を出し、湯飮みへ茶を出し、）

てふ　別に用の人は。さう〳〵今しがた、芝口の堺屋の嫁さんがお出でなすつた。

甚五　それならてつきり、一件の用だらう。

てふ　始めて逢つた人なれど、しとやかなお方、苦しい胸を打明けて何卒若旦那とお花さんが飛んだ間違ひを仕出かさぬ樣、金で身拔けがなる事なら、妾にして添はさうと、結構過ぎた今のお頼み、こりやどうかお前、仕末を付けてあげずばなりますまいぜ。

甚五　さう向ふで腹を極めて居るならば、どうでも話しが付け易い。（ト此時五ツの鐘鳴る。）

十吉　姉さん、もう五ッだ、金比羅樣へ參つて來ませう。

てふ　親分がお歸んなすつたから、十公一緒に行つておくれ。

十吉　承知しやした。

甚五　行くなら何ぼ近所でも屋敷町、氣を附けて行くがいゝ。

十吉　あい、心得てゐやす。

てふ　それぢやあ親分、留守を賴みますよ。

ト井出の玉川の唄になり、十吉長提灯をつけ、おてふ兩人にて花道へはひる。

甚五　今久保町の年廻りで、一と言つて二と下らぬ紫紐、兎角おれを目の敵に、今も子分に言ひ附けて喧嘩をしかけたに違ひない、是れといふのも御濱の衆と、汐留の若い衆が、喧嘩の時に仲人にはひり、目黑の橋和屋で仲直りをした時、杯の遣り取りからしまひに縺れた遺恨の根差し。又江戸中の厄介になるのもいやな話しだから、蟲を怺へて居るが、いつか一度は雨降つて固まらにやあ、果しは付くめえ。

トぢつとこなし。此時早足にて以前の久藏、酒席を引かけ窺ひ〳〵内へはひる。

久藏　へい、御免下さいまし。

甚五　誰だ〳〵。（ト久藏上り口へかゞみ、）
久藏　親分、お久し振りでござります。木崎の久藏でござります。
甚五　おゝ、向ふ疵の久藏か。まあ〳〵こつちへ來ねえ〳〵。
久藏　へい、御免下さいまし。
甚五　よく訪ねて來てくれた。久しく逢はぬが何時お前に、逢つたつけ。
久藏　左樣さ、もうかぞへて見れば三年位に。
甚五　成程、伊香保歸りに高崎で、役手合に引留められ、
久藏　然も其晩銀張の、賭場で始めてお目にかゝつたが、名に負ふ江戸で噂のある金看板の親分と、子分子分へそれ〴〵に、行渡りよく行屆き、擧句が金張り高張りでさかつた賭場に人達が、いまだに日本一の親分と噂をいたして居ります。
甚五　さうして、何時江戸へ出て來た。
久藏　それぢやあ親分は、まだわつちがお手當になつたことを御存じありませんか。
甚五　さうして種は是れか博奕か。
久藏　さあ、元はと言へば去年の暮、熊谷の賭場で大博奕が出來た時、向ふの奴と喧嘩をして其の三人

の中一人死に、言はゞ下手人同様に上の御手に逢ひ、今では江戸へ送られて入牢して居ります。

甚五　それはちつとも知らなんだ。早く知つたら見舞物でも入れてやつたものを、さうして當時は。

久藏　體が惡く品川の、溜りに下つて居ります。

甚五　どうして今夜出て來たのだ。

久藏　實は、繩拔けをして來ました。

甚五　大方そんな事だらうと思つた。して是れから先きは、どうする心だ。

久藏　今夜直に上州の、木崎の内へ行く積りで。

甚五　それは惡い料簡だ。

久藏　なに、惡いとは。

甚五　是から何處へ逃げようとも、五街道の口々へ直に御手が廻つて、二日とたゝず御用になるに違えねえ。こりやあ止した方がよからうぜ。

久藏　さあ、それも承知で居りますが、止せねえ譯がありますゆゑ、男と見かけて親分に、頼みがあつて忍んで來ました。

甚五　なに、頼みとは。

久藏　今日御奉行へ呼出され品川溜りへ歸りがけ、數寄屋河岸で繩取りをお堀の中へ突落し、繩を拔けようとする所へ、知らぬ人が來て繩を切つてくれたので、逃げるはずみに拾つた紙入、中を見れば手紙があり、讀んで見れば木崎の百姓與次兵衛といふ伯父の所へ、内から送りし迎ひの手紙、三年後から眼の見えぬ私の實のお袋が大病故一日も、早く歸つてくれとの文意、是ぞ神のお告と思ひ、九死一生のお袋が病氣と聞いて、矢も楯もたまらなく逢ひ度くなり、せめて不孝の詫びをして別れを告げて來ようと思ひ、それにわしが今度の罪は切られるかも知れねえ兇條、親子の別れに木崎へ行き度く、それ故親分を男と見かけ無理な頼み、在所へ行かれる樣に取計らつて下さりませ。

ト愁ひのこなしにて頼む、甚五郎思入あつて、

甚五　そりやあいゝ料簡だ。不孝をしたお袋が病氣に改心して、國へ歸つて暇乞ひがしてえと言ふのか。

久藏　こんな事を言ふものゝ、人にも知れねえこの久藏、親分に熱湯を飲ませてその儘逃げでもするかとお疑ひがあるめえものでもねえが、決してそんな心はない。親の恥を言ふ樣だが是でも元は武士の果、高崎の家中で親仁は賄役を勤め、安樂に暮らした悴でござります。

ト甚五郎是を聞き、思入あつて、

甚五　なゝ、高崎藩で賄役を勤めたと聞いては、ちつとこつちに心當りがあるが、親御の名は。

久藏　何を隱さう、富田久之進と申します。

甚五　それぢやあおめえは富田樣の、（トびつくりこなしあつて、）おめえの賴み聞き届けた、心置きなく行つて來なせえ。

久藏　そんなら後を引受けて、木崎へ遣つて下さるとか。

甚五　親の死目に逢ひてえとは感心だ。殊に富田の子息と聞いては、なほ／＼おれが引受けにやあならねえわけ。

久藏　どういふ譯で。

甚五　おれが親仁が道中師で高崎を通つた時、酒に醉つた中間に疵を附け、それが元で屋敷へ連れて行かれた時、すでに命を取られるところ、手前の親御の富田樣がおだやかなお捌きにて命が助かつたと親仁の話し、今も覺えて恩人と思つて居るに不思議にも、そなたの賴みを引受けて、その恩返しをするといふも、是も定まる因縁づくだ。

久藏　それぢやあ親仁に恩があつたか。こつちは少しも知らなんだ。是から急いで行つたなら、遲くも五日の晩迄には、きつと歸つて訴へて出ます。

甚五　後から追手のかゝらぬ樣に、おれがするからゆつくりと逢つて來るがいゝ。
久藏　追手のかゝらぬ樣にとは。
甚五　是から直に番所へかけ込み、そなたが歸る迄おれが替りに入牢する。
久藏　そんならわしの其のために。
甚五　放蕩無頼の心を改め、親の死目に逢ひに行くのは孝行故、それを感じて代りに行く氣だ。
久藏　えゝ有難うございます。

ト甚五郎思入あつて、押入より包みある半合羽、山付きの脚絆を出してやり、

甚五　さあ、此の中に合羽や脚絆がある。お仕着は爰へ置いて是れを着て行け。
久藏　えゝ、地獄で佛とはこの事だ。

ト捨ゼリフを言ひ乍ら是迄のお仕着を脱ぎ、下着の縞の着付の上へ合羽を着け、脚絆をはく。此内甚五郎鬱金の長財布より捻りあるばら金を十兩かぞへ、紙に捻り久藏の傍へおき、

甚五　さあ少しばかりだが、爰に十兩ある。是をお前にやるから早く行きねえ。
久藏　どうして〳〵、三兩持つて居りやすから澤山あります。
甚五　いや〳〵、その三兩は今話した人の金、落し主へ返してやるがいゝ。

久藏 成程なあ、親分は親分だけに氣性が違つたものだ。それぢや是の金を貰つて置きますぜ。

甚五 そりやさうと夜に入つて、不斷なら泊めて早立ちとさしてえが。

久藏 なに、今から夜通し行きやす。

甚五 腹はいゝかえ。

久藏 さつき、もつさうでようごぜえす。

甚五 あすこにある笠はおめえのか。

久藏 いゝえ、持つちやあ來ません。

甚五 だれんでもいゝ、冠つて行きねえ。

久藏 こんなに親切に、有難えく。（ト下手の板の間へ辭儀をして泣き入る。）

甚五 えゝ、旅立ちだ、しつかりしろ。

久藏 それぢやあ行つて參ります。

甚五 おれが替りだ。安心して行つて來ねえ。

久藏 行つて參ります。

ト古き笠を冠り、格子を明け邊りを見て、花道へ逸散に駈けて久藏はひろ。

甚五　縁といふ物は分らねえものだなあ。是を證に名乘つて出て、今夜の内にさうだ〳〵。

ト　お仕着を合羽のおりし風呂敷へ入れてこなし。けいこ唄になり、花道より以前の宗吉先に、熊鷹お爪、絞の着附、女羽織、駒下駄銀杏髷にて、褄をとり出で、

お爪　おめえ見留めたとあれば、強もてぢやあ行けねえから、私が向ふの腹へはひつてうまく持ちあげて、向ふから言はせて見せるが、おめえ證人に居ておくれよ。

宗吉　そりや私が立聞きして、慥に突留めました。隱してあるに違ひございません。（ト兩人舞臺へ來て、宗吉門口を明け）へい、御免なさい。

甚五　誰だ。

お爪　親分、今晩は。

ト兩人づつと内へ入り、お爪は火鉢の傍へ寄る。宗吉は上手へ控へる。

甚五　宗公も一緒か、よく來なすつた。

お爪　親分、疾うからお尋ね申すのだが、手前にかまけてつい〳〵御無沙汰をいたしました。さうして姉さんはお内かえ。

甚五　あれは今、金比羅樣へお參りに行きやした。

お爪　おやまあ、御信心なことでござりますねえ。
甚五　あれに何ぞ用でもあんなさるのか。
お爪　なに、外ぢやァありませんが疾からちよつと御禮に、あの子が御世話になるから來よう〳〵と思つて居て、何だかだと手前にかまけ、長々と娘が御内の御厄介になつて有難うござります。爰に居る箱屋の宗どんが知らしてくれたから、今日は迎ひに上りましたよ。
宗吉　此の間中からお袋さんが尋ねて居るし、此の箱屋も掛り合、まあこちらに居るので安心して、二人で參りました。
甚五　なに、娘とは何の事だ。
宗吉　こちらの内にお花さんと、堺屋の若旦那が居る事、さつき房次郎さんが爰の内へはひるのを附けて來て、見屆けて參りました。
甚五　そりやあ何かの間違ひだらうぜ。
お爪　もし親分、なにもそんなに隱すには及びませんわね。爰に居る宗どんが慥に居るのを見屆けて、謡人迄連れて來た。しらばくれないで出しておくんなさいな。
宗吉　私も此の一件に付いちやあ、お花さんに掛り合で當惑致して居ります。房次郎さんとお花さん(ノ)

聲迄慥に聞き込んで、お袋さんと同道で上りました。じらさずに出して下さりませ。

甚五　何を證據に言ひなさるか知らねえが、二人はこの江戸にやあ居やあしねえ。

お爪　え。なに、江戸に居ないえ。（ト大びつくりのこなしある。）

甚五　なにもそんなにびつくりするにやあ及ばねえ。まさか唐天竺へ行きやあしめえ。

お爪　さうして、何處へ行きましたえ。

甚五　かうだ。此の間房次郎さんが居なすつた所へお花が見えて、木挽町の芝居へ見物に行きなすつて鎌倉山の狂言を見て、それからの思付き、江の島鎌倉を見たことがないから、行かうと言つて二人で出かけたのだ、長くもあるめえ。（トちよつと久藏の歸る日取りを考へて。）さうさ、四日五日で歸つて來るだらう。まあ、それ迄待つて居るがいゝ。

お爪　それぢやあ娘は若旦那と島見物に行きましたか。そりやまあ御親切によくやつて下さいましたが娘は毎日遊山をして、うまい物も喰ひ次第で居られませうが、藝者稼業に出錢も多く、内では地獄の火の車、廻りも早い質の利に、毎日遣り繰り算段も、針の山の上げ下げから、やれ花會だの店開きと、肉を削られる責道具に、血の池地獄の血を吐く苦しみ、業の秤りで量つたら、取るのが三分で出錢が七分、八寒地獄のうつりかへに首も廻らぬ苦患をするも、羅生門の鬼ぢやあねえ

が、片腕にする一人娘、無生業では此の顎が干上ります。はい、餓鬼道の飯は喰へませんから佛になつちやあ居られません。爰を親分お察しなすつて、嘘か誠か淨玻璃の鏡にかけて下さりませ。（トこなしあつてきつと言ふ。）

甚五　そりやあ金があり餘つて、娘を藝者にする者は一人もねえ。そんなに氣をもまずと四五日だ、待つがいゝ。

お爪　日本橋から新橋切つて、二とは下らぬ三臓圓金看板の親分と噂のある親分の受合で、顔を立てゝ上げたいが、どうも待つては居られませぬ。

宗吉　江の島へ行つたといふはみんな嘘だ、慥に奥に居るに違えねえ。

お爪　奥を家搜ししておくれ。

宗吉　おれが行つてお花さんを。（ト宗吉立ちかゝり奥へ行きかけるを、甚五郎居乍らこなしあつて、）

甚五　搜すなら搜して見ろ。もし奥に居ねえ時はその足ツ骨を叩き折るからさう思へ。（トきつと言ふ。）

宗吉　こいつア考へものだわえ。（ト下に居る。）

甚五　かうおつかあ、一日幾らといふ玉を拂つて、別に幾らか祝儀を付け、歸つて來る迄立派におめえに遣つたらよからう。それともおめえ不承知か。

お爪　あの娘に御執心で、現金に三百兩で引かした上、月々親にも娘にも何不足なく仕送るといふ、立派なお客がありますから、掛けのお客はお斷り、是非々々それで連れて行かねばなりません。
甚五　そんならお花を引かせる客が。
お爪　宗どん、もうお見えなすつたらう、表をちよつと見ておくれな。
宗吉　へいく、ちよつと見て參りませう。
　ト思入あつて立つて外へ行きかゝる。此の以前、下手より荒川運平、羽織馬乘り袴、大小雪駄にて門口に窺ひ居て此の時、
運平　參るには及ばぬ、とくより是に。
宗吉　おゝ旦那、お出でなすつたか。（トずつと内へ入り上手へ通り、座る。）
運平　身共は馬術指南をいたす荒川運平、只今是にて花が事を申して居つたが、身共執心にて引かせる所存、三百兩金子を遣はさんと所持いたした。
お爪　もし此の通り、現在旦那を證據にお連れ申すから、嘘ではありませんよ。
甚五　成程、かうして見りやあ是も尤もだが、お花と若旦那の仲を無理に引き割けば、言はずと知れたとゞの詰りは無分別、もしもの事があつた日にやあ蛇も取らず蜂も取らず、先生にはお氣の毒だ

が、おれがお花を引かせよう、さう思つてくんなせえ。

お爪　一人娘にさう兩方から買手が付いちやあ、此の節流行の古着市の樣だが、さあ幾ら〳〵と高値へ落すが賣手の相場、親分の方は金が右から左りは承知だらうね。

甚五　そりやあ今は出來ねえ、長くとは言はねえ、鎌倉から歸る迄待つてくんねえ。

運平　此の運平は三百兩、此の懷中に持參して參つたのに、受取らぬとは不都合千萬。

お爪　こつちの望む通り、金が爰へ出ればよし、左もない時はまとまりが。

宗吉　どちらにしても山吹の、金が出れば極まる話しだ。

運平　江戸で一二の男を賣る、金看板と人も噂の親分が、卑怯な事も言はれまい。

ト甚五郎當惑の思入あつて、

甚五　そつちは兎も角も、おらが方は鎌倉から當人が歸つた上、引替へに金を渡して遣らう。

お爪　そりやあ親分、現金なら知らぬ事、こつちからはお斷りさ。

宗吉　それがいつちよささうだ。

お爪　左なくば金を今くんなさるか。さあ〳〵、思召しは有難いが、今でなくちやあいけませんよ。

子分の拵へにて長提灯を持ち出る、大五郎縞の糸織、一本ざしにて、後より以前の助藏頭へ白布にて疵を卷き出て來り、トきつと斷る。甚五郎むゝと思入。派手なる唄になり、花道より銀次先に、

甚五　誰だ、内に居る。こつちへへひんなせえ。(ト是にて大五郎先に入り、)おゝ、久保町か、よく來なすつた、まあこつちへ。

銀次　御免ない、親分はおいでなさるか。

ト此の内銀次、助藏下手へ控へる。大五郎は上手へ通り住ふ。

お爪　おや、紫紐の親分、大層おそくお揃ひで。

大五　急に甚五郎に、逢はなくちやあならねえ事があつて來たのだ。

甚五　何の用で來なすつたのだ。

大五　こなたに少し頼みがあつて來たのだ。

甚五　なに、頼みとは。

大五　さつき、子分の頭を割つた、しらちを付けて下せえな。

甚五　なに、頭を割つたとは。

大五　宵にこつちの門口で、此の野郎がぶたれたと、内へ歸つて話しをした。

銀次　知らばつくれるな甚五郎、さつき子分の此の野郎の、無法に頭を打ち割つて付けた疵。

甚五　いゝや、それはそつちから除けて通るを突當り、喧嘩を買つた此の男。（トちよつと見る。）

大五　いつか目黒の橋和屋で、仲直りの折供に連れて行つた故、見覺えがあらうのにおれの子分と知り乍ら、よく疵を付けてくれたなあ。

甚五　さう言へば見たやうでもあるが、此の野郎をおれが割つたが、どうする積りだ。

大五　おゝ、久保町の原迄出て貰はう。

甚五　どうしたと。

大五　其の意趣返しは今夜久保町の原で、命の遣り取りしようと思つて。

銀次　金看板とか紺看板とか、汚れ腐つた親分とかに、ぶたれた儘ぢやあこつちにも、數多の子分に面目ねえ、眼には一前下つても、根性骨は下らねえ銀次だ。

助藏　おれは名もねえ子分だが、そつちは名に負ふ金看板でも、おれが親分にやあかなふめえ。尻尾を卷かずと原へ出ろ。

甚五　木ッ葉野郎の子分の事で、大の男が二人して來たからは、逃げも隱れもしないから、出入りは立派に引き受けたが、今夜はちつとおれが方にも込み入つた、都合の悪い事がある。今夜はどうも

行かれねえ、あしたから五日待つてくれ。

お爪　こつちの話しの其の中へ、横槍がはひつたのでわからなくなつた。こつちの話しはどうするのだえ。

甚五　さあそれも今言ふ通り、おつかあの頼み通りにしようから、五日だけ待つてくれ。

お爪　どうでも五日はふり切れねえが、さうして久保町の親分わえ。

大五　男が達つてと頼むなら、待つてやるめえものでもねえが、一つの趣意を立つてくれろ。

甚五　そりやあ待つてくれさへするなら、どんな趣意でも立てようぢやねえか。

大五　おゝ、その趣意は、かうして待つてやる。

ト煙管を持つたまゝ立上り、甚五郎の額を割る、甚五郎はつとこなしあつて、

甚五　や、こりやあ男のしやッ額へ。

大五　おゝ、間違はぬといふ慥かな證だ。それで五日の日延べを待つてやらう。

お爪　親分がさうして待つてやんなさるなら、御長家の附合でまさか厭とも言はれまい。私も待つてやりませう。

運平　日本橋から新橋で金看板と名の賣れた、いかに立派な男でも、金が無けりやあたゞの野郎だ。

宗吉　旦那が折角金を持つて來ても、相手に金が無ければむだ物、ある所にはあるけれども、

銀次　子分へ疵を付けたから、立派に出入りをしようと話しに來たが、尻尾を巻いて五日の日延べと極つたら、もうそろ〳〵と、親分お歸んなさいまし。

大五　何時迄爰にも居られまい、もし運平さん、

運平　身共同道致さうか。

お爪　五日の日延べと極つたら、不承ながらも歸つてやりませう。

ト皆々立上り、入りかゝる。

大五　これ甚五郎、今の詞を違へるな。

甚五　忘れはしねえ、きつと覺えてゐらあ。

お爪　親分、おやかましう。

ト運平、大五郎、お爪先きに、銀次、助蔵長提灯を持ち、月が啼いたか時鳥の唄になり、花道へかゝる。

運平　流石は大五郎、なか〳〵立派であつた。

大五　取るに足らぬけちな野郎だ。

お爪　人の噂と違つて、弱いやつでありました。

三人　はゝゝゝゝ。

ト捨ゼリフにて皆々花道へはひる。甚五郎遅くなりしといふ思入あつて奥へはひる。少し早き合方にて花道より以前の十吉提灯を持ち、おてふ後より出來り、直に内へはひり、

十吉　親分、今歸つて來ました。

てふ　親分え〳〵。(ト奥にて、)

甚五　あい〳〵、今そこへ行く。

ト結城の着附、博多の帶にて出來り上手へ住ひ。財布の金を打ちまけ、半紙四つ折の内へ金を入れる以前のお仕着の風呂敷包みを傍へ取り、この内下手の兩人の言ふ事を聞いて居る。

てふ　備前町の半次の處へよつたので、大きに手間取りました。嘸一人で不自由でござんしたらう。

甚五　なに、却つて留守の方がよかつた。

てふ　え。

ト甚五郎と顏見合せて不審の思入、

や、お前の額の疵は。(トおてふ、十吉兩人不審の思入。)

甚五　なに、こりやあ今、鼠が神棚の燈明皿を落したのが、下に居たから額へ當つたのだ。（トまぎらす。）

てふ　いえ／＼、さうではござりますまい、是には何んぞ樣子がござりませう。

十吉　譯を聞かして下さりませ。

甚五　そりやあ。（ト口籠る。此の時奥より房次郎、お花つか／＼と出て、）

房次　其譯は私が言ひませう。今奥に隱れて聞いて居れば、子分の意趣から久保町の、紫紬が爰へ來て、今夜久保町の原へ出て互ひに出入をしようと、子分を連れてしかけて來たを、內の親分が五日の日延べをした處、趣意を付けろの切羽から、五日の日延べの證據だと、額へ煙管で打疵を付けて、今歸つて行きました。是といふのもお花が事より、親分に迷惑をかけた故の事、實に私は氣の毒でなりません。夫婦の衆勘辨して下され。

ト此の中十吉思入あつて、鳶を持ち行きかけるを、甚五郎こなし、

甚五　これ／＼、手めえ血相してどこへ行くのだ。

十吉　親分の仕返しに

甚五　其の仕返しを今出來る位なら、むざ／＼手籠めになりやあしねえ。やる事はならねえぞ。

トきつとこなし、十吉ちつと下にゐる。

てふ　おまへはなんで今夜に限り、仕返しが。

甚五　さあ、その仕返しの出來ぬ譯といふは、最前久藏といふ上州木崎の遊び人、喧嘩の出入で入牢になつて居る者が、今夜繩拔けをして爰へ來て、國にゐる一人の母親が大病故、是が別れで逢へぬから、逢つて來たいが、男と見かけて取扱つてくれとおれへの頼み、話しの內に元の身許をたゞせば、おれが親父が恩人富田久之進樣の息子故、打捨ておかれず、その久藏の替りに是から直に奉行所へ、此の久藏のお仕着を證據に名乘つて出、久藏の歸る迄入牢なし、後へ追手のかゝらぬ樣にしてやるのが恩返し、それ故紫紐に打たれても、お爪婆あへの挨拶も、再び娑婆へ出て來る迄は、五日の日延べを頼んだのだ。

てふ　そんなら、その久藏とやらの替りに、

十吉　親分、牢へ行きなさるのか。

てふ　よしない事を、お前はまあ。（ト愁ひのこなし）

甚五　男を磨くこの生業、是非名乘つて出ずばならぬわ。（トきつと兩人を叱り付ける。五つの鐘鳴る。）ありや、切通しのもう五つ。折角頼まれた久藏が、途中で追手にかゝられては。是から直に。

ト件の包みを持ち立上る。

てふ　すりや奉行所へ、是から直に、
十吉　訴へて出なさるのか。
甚五　おてふ、後を頼んだぞ。（ト行きかける、おてふ甚五郎の袖にすがり、愁ひの思入。）えゝ、五日か六日だ、未練に涙をこぼすな、不吉だ。
てふ　もしや、このまゝ。
甚五　向うも大の悪黨だ、まさか熱湯を飲ませもしめえ。
房次　親分達者で、
てふ　ござんせえ。
甚五　門出に泣くのは、不吉だ。

ト入りかはつて甚五郎、包みを持ち門口へ出、花道へ行きかける。おてふ鎌と石を持つて、つか〱と門口へ見送りこなし、

てふ　あ、もし〱ちよつと。（ト花道際にて振返る。）
甚五　歸つてから清めてくれ。

ト包みを掻い込み、片尻からげるを木の頭、太撥の時の太鼓にて、

幕

二幕目　木崎在久藏內の場

〔役名＝木崎の久藏、久藏伯父與次兵衞、山ぜげん狸の金八、山かゞしの多九郎、百姓太郎作、同作兵衞。久藏の母お麻、久藏妹お米等。〕

（久藏內の場）＝本舞臺三間の間、常足の二重、栗丸太の續きを見せし蹴込み、上手一間反故張り障子屋體、正面は三尺の中仕切、佛檀、古風なる位牌佛具を並べ、その下に三尺の交張り開きの張物左右は破れた鼠壁、づつと下の横棲は壁破れ、小舞竹にて窓大きくある。是より下手に在所の遠見いつもの所、藁葺竹の簀戸、續いて裏竹にて庭の垣根出來てあり、雜木二三本植込み、總て木崎在藁屋の體、在鄕唄にて幕明く。爰に太郎作、作兵衞股引、襦袢、三尺、わらぢにて農業歸りの體、鋤鍬を傍へ置き、竹椽の上へ人參五六本、午蒡二本、つとの內へ里芋五合程入れ置き、二重へ腰を掛け居る是をお米、木綿やつし染紅の野暮なる帶、島田髷、小娘にて挨拶して居る。やはり右の合方にて、

お米　これは〳〵、太郎作さんに作兵衞さん、ようお出でなさいました。

太郎 此の間から尋ねるのであつたが、畑仕事で來られなんだ。爰の内のお袋もどつと床に附いて眼病が、づない惡いと聞いた故。

作兵 それに日外、爰の久藏も博奕の堵場で喧嘩をしたで、熊谷宿で召捕られて、江戶へさし立になり今では江戶の牢に居るとの事。

太郎 後に殘つたは妹のお米坊と只二人、それに長の眼病で、嘸まあ心細い事であんべい。

作兵 わしらも氣の毒に、今野良から歸りぢやが、是れは口に合ふか合はぬか知らぬが、畑の御手前ものぢや。お袋に煮て進ぜてやらつしやれ。

太郎 取り分け今日は那須颪で寒いぢや、此の玉子を進ぜて精分付けて、溫めてやらつしやれ。

お米 これはまあ、御銘々に、どれも〳〵かゝさんの好きの物ばかり、御見舞に下され有難うございります。今すや〳〵と奥に寐て居りますが、拵へて置きまして起きましたら喰べさせませう。

作兵 それに付けても兄貴久藏、入牢してから三月越し、まだ赦免になる沙汰も江戶からないか。

お米 左樣でござりまする、御存じの伯父さんがその事に付き、江戶へ出て、兄さんの樣子を聞きに行きましたが、もう二三日の中には伯父さんが歸つて來るとか、沙汰がありました。

太郎 久藏が科は、たかゞ博奕から起つた喧嘩、なにも盜賊をしたといふ譯ではなし。

作兵　これ、かういふ時には信心するが肝腎ぢや。神佛を精出して願はつしやれ。
お米　はい、私も一人の兄さんの事故、不動樣や帝釋樣へ、鹽斷ちをしてお願ひ申して居りまする。
太郎　其の殊勝な心が屆いて、御利益で今に歸つて來るであらう。
作兵　來るといへば長話しで、歸るのを忘れた、もうお暇しませう。
太郎　ほんにさうぢや。これお米坊や、隨分とお袋を寒いによつて、寒からぬ樣、介抱してやらつしやれ。
お米　御親切に御見舞下され、有難うござりまする。ろく〳〵おかまひ申さず御免下さりませ。
作兵　何の〳〵、其の心配には及ばぬこつちや。
太郎　これ、孝行してやらつしやれ。
作兵　眼が醒めたら、よう言うて下され。
太郎　（同じ）
お米　よう見舞つて下さりました。

ト在鄕唄になり、太郎作、作兵衞暇を告げ、外へ出る。お米見送る、兩人は下手へはひる、お米見送りて、

お米　他人と言へど賴もしい、村の衆が替る〴〵に母樣や私を哀れみ、何やかやと下さるので、貧しい

中にも其の日に困らず、かうして居るのも天のお惠み、有難い事ぢやなあ。

ト よろしくこなし、此の時追分節樣の合方になり、花道より多九郎、どてら三尺なり道樂者、後より金八、半合羽縞の脊付け、道中差し山ぜげんなりにて出來り、

多九 これ、道々も話す通り、金になる目算といふは向ふの内のあの久藏、熊谷の賭場で喧嘩が元で、今江戸へさし立になつてる留守中を附込んで、あの久藏に博奕の貸が、二十兩三十兩宛三四度貸して百兩程あると振込んで、掛り合ひを付けるのだ。今も言ふあのお袋が武家出だけ、どんな事があつても驚かぬ氣丈だけ、得心させるのがこつぱい仕事だ。

金八 さあ、おれも此節はいゝ仕事が掛らぬので、甲州からこつちの方へ出かけて來て、お前に逢つてその話し、どうか首尾よくその久藏の妹を捲き上げて、宿場ではいけねえから、江戸吉原へはめ込めば、百兩にやあ踏める代物だ。うまくおどし込んで引上げてえものだ。

多九 おれが強もてに出掛けるから、おめえはうまく、納め方へ廻つてくんねえ。

金八 何んにしろ、急がうぢやあねえか。

多九 さあ、あすこだ。

ト 花道にて言合せあつて舞臺へ來り、簀戸を明け内へつかつかとはひり、

多九　はい、御免なさい。お袋に逢ひに來た。姉えお袋を呼んでくんな。

お米　はい、あなたはついにお目に掛つた事の無いお方、長い事母さんは目が惡くて、奥に寢て居りまするが、何の御用か私に、おつしやつて下さりませ。

金八　はい、わしは青梅在の金八といふ旅商人でござるが、是非今日はおつかあに逢はなくてはならねえ用があつて參りました。

多九　これ、奥に寢て居るなら、ちよつと起して貰ひてえ。

お米　それでは左樣申しませう。（ト立ちかゝりこなしある。此の時奥にて、）

お麻　どなたか知らぬがそれへ行き、お目にかゝりませう。

ト是れにて金八、多九郎二重へ住ふ。合方にて奥よりお麻、切り繼、ふくさ帶にて、眼病の體にて手さぐりに出る。お米介抱なしよき所へ住はせ、上より行火へ小蒲團かけしを、お麻の前へやる。

お米　かゝさん、風を引かぬ樣に、是れを着て下さりませ。（ト我が着て居る半纏をお麻に着せる。）

金八　おつかあは先頃から、眼が惡いさうだが、嘸不自由な事でござらう。

お麻　さうおつしやるはどなたか、久しう眼を煩らひまして、見る事が叶ひませぬ。

金八　わしは木崎に居る古狸の金八といふ、飯盛女の判人でござります。

多九　わしは又、此の上州の問屋場をごろついて居る、山かゞしの多九郎といふ、久藏とは遊び友達、

お廐　金八さんは久藏の内に居る時、お出での事もあつたが、多九郎さんといふお方は今日お名前を聞くが始めて、お近附きでもござりませぬ。

金八　それもこれも込み入つた話しがあつての事、譯を聞けばわかる事、まあお聞きなせえ。

お廐　私へ話しとはどういふ事でござります。（ト替つた合方になり、多九郎思入あつて、）

多九　さあ、三月後の事、爰の内の久藏と熊谷の直爺の所へ博奕を打ちに行つた時、少しの喧嘩から相手の人へ大疵を負はせ、其の科で熊谷の御陣屋からお泊りの八州樣が出役で、喧嘩の相手方はみんな宿預けなれど、疵を付けた科で久藏は江戸へさし立、今では傳馬町へ入牢中との事、それはそれでそつちの事、馬鹿を見たのはこの多九郎、其の時久藏が側中へ三兩五兩の口が十許り、五十兩が大口で足を出し、おれが其場で仲へ入つて受合つた、その催促が毎日私が所へ來るが、是非無い爰の内の息子故、お前の所へ此の話に來ましたのさ。

金八　さあおれも久藏とは友達の事故、當人が居ない事故歸る迄待つてやつてくれと賴んでも、根が長脇差の亂暴者、返さなけりやあ手でも足でも切つて腹癒せすると、無法な事を言ひがゝり、今多九郎との悶着を見ても居られず氣の毒と、わしが仲裁にはひつたが、これ婆さん、臍繰りがある

なら臍繰りを出して、返してやつて濟まして下され。

ト兩人思入あつて言ふ。

お麻　何んの事かと思ひましたら、悴が借りた其金を、わしに返せとおつしやりますか。世間の親御は兎も角も、悴の借を私が償ふ事はなりませぬ。

多九　子の借を、現在親が返せねえと言ふのか。

お麻　さあ、貯への金がござりますれば償うてもやりませうが、久藏めは身持不埒、貯へ置きし金は元より、衣類道具も賣り盡し、お恥しいが御覽の通り、家に疊が敷いてあるのみにて、目ぼしい品はない貧家、償ふことは出來ませぬ。

金八　これ、さう木で鼻をくゝつた樣に言はずとも、どうでも話し合で待たぬとは言はねえ、色氣を付けて返事をしなせえな。

お麻　ぜんたい、その借り高は何程あるのでござりまする。

多九　さあ、その高は直爺が五十兩、はたの借りが三兩の口が五つ、三十兩が一と口、四十五兩に日なしの利息を加へて百兩あるのさ。

お麻　えゝ、あの百兩。

多九　おめえが眼病を表にして、悴が借りを言ひのがれても、こんな草深え所でも御領主もあれば、御代官お庄屋もある事だ。不正な金ぢやあねえ、仲裁にはひつて恩のある金だァ。

お麻　おつしやる通り悪い奴でも、我が子の事故、ありさへすれば、御厄介は掛けませぬが、無い袖は振られませぬ、所持の品を賣拂つてやう〳〵に、其の日をかすかに送る身の上、お氣の毒でござりますが、お斷りを申さにやなりませぬ。

多九　さうお前に言はれると、そつちが尤もでおれが立つ目がねえ。もうやけだ、百兩の代に編笠一盃だ。

金八　おれが迷惑をする故に、都合をして賴むのに、さう愛想なく斷るなら、もうこれ迄だ、なう多九郎。

多九　腹癒せに夜具蒲團から疊みまで、二束三文でも、がらくたを持つて行く。

ト兩人きつとなる。お米これを留め、お麻はさぐり乍ら留めて、

お米　まあ〳〵お腹立ちは御尤も、口の不自由なかゝさん始め、お詫び申して居ります。まあ〳〵待つて下さりませ。（ト双方より兩人を留める。）

お麻　たとひ悴が借にもせよ、夜具蒲團から諸道具を、持つて行くとは情ない。どうぞ悴の歸り迄待つ

て下され。

お米　兄さんももう長い事もござりますまい、近い内には歸りませう。どうぞ待つて下さりませ。

ト多九郎と金八にすがり頼むこと。

多九　そりやあ二人の頼みなら、久藏が歸るなら待ちもしようが、どうせ娑婆へは出られぬ體、もう待つ事は出來ねえわえ。

お米　なに、兄さんが歸られぬとは。

多九　さあ、喧嘩の相手二人は久藏が切つた深手から、それが元で死んだからは、首にならにやあ歸られねえわ。

お米　すりや、内の兄さんは、歸る事は出來ませぬか。

お麻　すりや悴が切つた其の疵から、相手の者が死んだので、人殺しの御仕置になりまするのか。

お米　えゝ、情ない事になりましたなあ。（ト兩人愁ひのこなし宜しくあつて、）

多九　そつちの言ふ事ばかりを聞いちやあ居られねえ。氣の毒乍ら屋財家財を引浚つて、持つて行くのだ。（ト又きつとなるを、金八留めて、）

金八　まあ／＼待て／＼、手前も人間なら人情といふ事も少しは辨へろ。久藏は心がらで首を切られて

親兄弟に歎きを掛ける奴だが、此の年寄りや年の行かぬ者の心の中を察してやれ。大きな聲をするなへ。（ト多九郎をなだめ、下手へ引き据ゑ、）これお袋、此の男の言ふ事を、決して氣にかけ此の上煩つちやいけねえぜ、氣をしつかり持つてよく暖まるがいゝ、決して夜具蒲團や道具なんぞをおれが持つて行かせやしねえ。これお袋、乘り掛つた舟でおれも脱れられねえが、おれに手段があるが、此の手段に乘る氣はねえか。

お麻　折角のお口添へ、百兩といふ其の金を調へまする手段が無ければ、どうも仕様がござりませぬ。

金八　さあ、そこが膝とも談合、脊に腹は替えられねえ、よく考へたら手段が付くとおいらは思ふが。

お麻　其の手段が出來ますれば、御迷惑はかけませぬ。して、その手段とおつしやるのは。

金八　さ、さつきも言ふ通り、此の金を返さぬ時は亂暴者の向ふ見ず、もしや此の内へ押しかけて、どんな無法を働らくか知れねえ故、此の金は返す方がいゝ。それとも目途が無ければ、さあ爰が手段だ。何と娘を、屋敷へ御奉公に出す氣はないか。

お麻　そりやもう年頃故、私の目さへよい事なら、御奉公にも出したいが、御覧の通り目が不自由故、片時傍を放されませぬ。

金八　それでは無宿の亂暴者が、今にも爰へ暴れ込んでもかまはねえか。

お麻　それも此の身の罪障と、あきらめますでござりまする。

ト兩人扱はとこなしある。此の時花道より與次兵衛序幕の旅なりにて、すた／＼と出て來り、内へはひらうとして雑木の蔭にて内の様子を窺ひ居る。

多九　そんなに强情ばれば、いよ／＼無法者を内へ飛び込ませ、諸道具は申すに及ばず娘迄も、一緒に引浚つて行くだらうぜ。（トおどす、お米怖きこなしあつて、）

お米　そりや、私迄連れて行くとは、ほんまの事でござりまするか。

お麻　力に思ふ與次兵衛は江戸へ行つてまだ歸らず、困つた事ではあるけれど、庄屋殿へ此の事を話したならどうにかなりませう、案じるには及ばぬ。

お米　今の話しを聞きましては、片時外へは出られませぬ。母樣どうしたらようござりませう。

金八　それだからわしが親切に言ふ通り、お米坊を奉公にさへ出せば、御屋敷から支度金が下る。それをこちらへ返せば皆濟が出來るといふもの。今にもお前さんが承知なら、乘物で物見遊山、日に三度々々肴でお飯を喰べさせ、御湯は内にちやんと立つ、御化粧部屋でけい／＼をして朝夕共にぴか／＼光つた着物を着て、樂々と月日を送つて行かれる。お袋に用があるなら御年寄へ願へば乘物で逢ひに來れるわ、こんないゝ口は又とありやあしねえわ。

お米　其のお話しの様子では、よいお邸と思はれまするが、どなた様のお邸で。

金八　あのそれは、えゝ、吉原御殿と言つて、見返り播摩守様の下邸よ。

お米　それでは私が行きさへすれば、御支度金を下され、母様も御無事でござりまするか。

金八　それでこそ親孝行だ。

お米　母様、わしを世話して下さる御方があれば、親の爲故御奉公に出ましてもようござりまするか。

多九　お娘が得心とあるからは、

金八　さあ、早く一緒に行かう。（ト兩人お米の手を持ち、連れ行かうとするを、お麻お米を捕へて）

お麻　いや、そりやならぬ。

金八　娘が得心で奉公して、金調へようと言ふのを、何んで妨げ、

多九　しなさるだ。

お麻　いや私も元は屋敷育ち、奥奉公も勤めた者ぢやが、お妾ならば知らぬ事、常の者に支度金を下さるといふ事はない。今お前の言ひなさるは江戸で名高き吉原へ、勤めにやるのでござりませう。渇しても盜泉の水を飮まぬが武士の常、今に人の門に立ち合力を受ける身となるとも、娘に肌はけがさせぬ、目は見えねども久藏に借りがある無いの事ぐらゐに、娘を遊女に賣らうといふ巧み

は初手から見えて居れど、女ばかりに憎まれてもよしない事と最前から、程よく言へば附上り、おのが勝手を言ひたいがい。山家なれども此の村にも、庄屋もあれば地頭もあり、出る所へ出て訴へたらおまへ方の難儀にならう、そこを思つて何にも言はぬ。もうよい加減に歸つて下され。

ト双方へきつと言ふ。兩人詰る。

金八　爲を思つたこつちの親切。

多九　いやでも無理に、

兩人　連れて行くのだ。

お麻　目こそ見えねどおのれ等に、大事の娘を渡さうか。

兩人　えゝ面倒な、連れて行かう。

お米　あれ母樣、此の人が私を連れて行きまする。

お麻　滅多にわい等に渡さうか。

兩人　え、どう盲目め、

多九　あまはこつちへ。

お米　あれえ、誰ぞ來て下され、あれえ〳〵。

ト お米を引立てるを、お麻兩人に遣らじと纏ひ付き、お米を引き戻す。お米はお麻にすがる。兩人はお米を引立てる。此の時窺つてゐた與次兵衛、つかつかと内へ入り、金八、多九郎を突きのけ、お米に逃げろと退ける。皆々與次兵衛を見て、

與次 姉さん、今歸りました。

お麻 おゝ、さういふは與次兵衛か、

お米 よい所へ歸つて下さんした。

與次 こりや、どうした事でござりまする。

兩人 とんだ所へ歸つて來たな。

ト 金八、多九郎工合のあしきこなし、もぢもぢと二重より下りる。

與次 誰かと思へば、ならず者の山かゞしの多九郎に、古狸の金八か、何で手籠めにそなた衆はお米を連れて行かつしやるのだ。(ト兩人はもぢもぢし、逃足に門口の方へ來り)

多九 久藏に金の貸しがあるからだ。

金八 言譯すればよい事を、憎まれ口を利くからだ。

與次 金のかたとは、どういふ譯か話しなせえ。

多九　言つた所が手前ぢやあ、

金八　唐變木でわからねえ。

多九　不承をして、歸つてやるわえ。

與次　そんなにこそ〳〵逃げ出さずと、譯を話して歸んなせえ。

ト多九郎、金八そこ〳〵に内の門の外へ出て、

金八　日暮れだ、足許の明るい内に歸るのだ。

多九　今度來て話さうわえ。

トそこ〳〵に花道の方へ兩人行き、捨ゼリフあつてぼやき〳〵花道へはひる。後をお米見送り、

お米　伯父さんが歸つてござんしたので、私も母さんも氣丈になりました。

與次　ならず者のあの二人が、何を言つて參りましたか。

お麻　久藏が熊谷で、賭事をしたその時に、貸元とやらが五十兩、又外の者が三兩五兩宛、都合百兩貸した金の口添へをした多九郎が、子分の者が大勢來て催促されて困るから、親のわしからそれを返せと、藪に馬鍬な言ひがゝり。

お米　その百兩の金の代りに、私を女郎に賣らうといふ二人が企みにて、手籠めに連れて行かれる處、

伯父さん、お前がござんしたので、危ない難を脱れました。

與次　それはよい所へ歸つて來た、是からおれが付いて居れば、決してあいらが手籠めにはさせぬ。

お米　やれ〳〵、是れで安心をいたしました。

ト此の内與次兵衛、包みや土產物をおろし、草鞋を取り二重へ住ふ。お麻考へ手探りにこなしあつて

お麻　これ〳〵お米、伯父さんにお茶なと拵へて進ぜたか。

お米　まだ上げませぬ。

與次　いや〳〵、かまやるな〳〵。（トきぬた入りの合方になり）

お麻　早速乍ら聞きたいのは、久藏は達者で居りますかな。

與次　おゝ、久藏は達者で居ります。

お麻　それは嬉しい事ぢやわえ。御牢内は火の氣もなく、寒い所と聞いた故、もし煩つてゞもゐはせぬかと、不孝に不孝を重ねたる、憎い奴でも血を分けた悴故案じられ、そなたに行つて貰うたが、達者と聞いて安堵しました。

與次　土地と違つて江戸の牢屋の樣子をば薩張り知らぬ故、以前泊つて馴染故、馬喰町の幸手屋に宿を取つて、御亭主に委しく牢屋の事を聞き、萬事を賴んで久藏へ見舞物を送りましたが、誠に達者

で居りますとの事でござります。
お米　どうぞお達者でお出なさる樣、神樣や佛樣へ朝夕お願ひ申しましたが、蟻の思ひも天とやらで、お守りなされて下さりましたか、あゝ有難い〳〵。
お麻　兄はさのみ思はねど、妹は兄を敬ひて、入牢してよりこの方は、三度々々陰膳据ゑ、無事に出牢しますやうにと、よく信心をします故、褒めてやつて下さりませ。
與次　それは〳〵感心な事だ。日頃素直な心だてを、噂して褒めて居ります。
お米　さうして兄さんは、何時頃歸つて來られまするえ。
與次　さあ、久藏が歸るのは、
お米　まだひまが入りますかえ。
與次　さあ、ちつと吟味が面倒故、急な事には行くまいわえ。
お麻　所詮生きては戻られまい。
お米　それではどうでも兄さんは。
與次　それをどうして。
お麻　むゝ、その事は爰へ來たならず者が、下手人故死罪になると言つたので、助からぬ事を知つて居

ります。
お米　もう兄さんには、逢はれませぬか。
お厖　世になき者と思やいの。
與次　さうお前が知つてなら、包まず言ひますが、宿屋の亭主に段々と樣子を聞いて見ましたが、切つた相手が死んだからは、言はゞ下手人同樣故、多分死罪になるであらうが、それもお上のお慈悲にて切られる命が助かつても、三宅島か八丈島へ、島流しになるとの事、所詮無事に此の內へ歸つて來る事はない。
お厖　其身のなした科なれば、是非もない事なれど、此世の別れに只一度久藏に逢ひたいが、逢ふ事は出來まいか。
お米　兄さんが歸られねば、私一人で母樣をお過し申す事がならねば、こりやどうしたらようござりませう。(ト泣き入る。)
與次　これ〳〵、それは決して案じるな。及ばず乍らおれが居れば惡い樣にはせぬ、久藏とても死んだといふではなし。死罪ならば逢はれぬが、もし遠島になる時は、船に乘る前方に身寄りが逢へば逢はれます、江戶へ行つて逢つたがよい。

お麻　此の身が達者なからだなら、江戸へ行つて逢ふけれど、此の病氣では遠島の時に、所詮行く事叶はねば、もう此の世では逢はれぬわえ。

お米　神々樣や佛樣へ、あれ程お願ひ申したに、何故助けては下さりませぬ。

與次　かう成り行くも前世の因緣、仕方が無いと諦めたがよい。

お麻　わしはこの身の罪障と、疾うから諦めて居るわいの。

與次　然し、正直の頭に神宿ると、神の惠みで思ひがけなく逢はれまいものでもない。わし等も正直のお蔭で、此の間本町で路用の金を入れて置いた紙入を掏り取られ、どうしようと思つた所、金看板甚五郎といふ江戸で名高い顔役の、おかみさんがそこへ通りかゝり、それは困るであらうと、三兩わしに吳れたので、無事に國へ歸つて來ました。

お麻　それは幸ひであつたが、さういふお方に逢つたのは、日頃から正直な故ぢや。

與次　神のお惠みあるならば、逢はれることもあらうから、氣を長く持つたがよい。まだいろ〳〵話すこともあるが、今日も十五六里歩いたので、がつかり草臥れたから風呂へはひつて又後に、出直して來て話さう。（ト風呂敷包みを持ち立ちかゝる。お米こなしあつて、）

お麻　嘸、草臥れたであらうから、今夜は來ずとも又明日、ゆつくり話しに來て下され。

お米　さつきに來た惡者が、來まいものでもござりませぬ。伯父さん後に來て下され。

與次　おゝ、怖くば今夜出直して來て、泊つてやらう。

お麻　いや〳〵、嘸、草臥れたであらうから、今夜は來ずとも又あした、ゆつくり話しに來て下され。

お米　そんなら伯父さん。

お麻　大きに御苦勞であつた。

與次　これお米、締りをしておきやれ。

ト合方になり、互ひに愁ひのこなしあつて、與次兵衞は花道へはひろ。暮六つの鐘鳴る。お麻氣分の惡しきこなし、風の音をあしらひ、

お麻　あゝ、あの鐘は暮六つ、お米、行燈を點きや。

お米　あい、今點ける所でござりまする。

ト お米は下の開きから、行燈を出し火打箱を出して燈火を點ける。お麻は癪の差込む思入。

母樣、惡うござりまするか。

お麻　今の話しを聞いたので、又きや〳〵と差込むわいなう。

お米　私が押へて上げませう。

お麻　いや〳〵、それには及ばぬわいの。

ト お麻の後ろへ廻り、お米背中をさすり介抱する。

お米　今伯父さんの話では、もう兄さんには逢はれませぬか。

お麻　相手が死んで下手人なれば、死罪になる事故身寄りの者も逢はれぬが、それはお上のお慈悲にてよしや流罪になればとて、何時赦免になるも知れぬが、そなたは知らず此の母は、息ある中に逢はれぬわいの。

お米　悲しい事でござりまするな。（ト床の淨るりになる。）

〽娘は母に取り縋り、涙にくれる春の夜の空も朧ろに影くらき、其身を忍ぶ久藏が、そよぐ柳も追手かと邊り見廻し立留り。

ト 風の音をあしらひ、花道より久藏序幕のなり、酒菰を引きかけ出來り、花道にて、

久藏　金看板の親分が請合つてくれた故、大丈夫とは思つて居れど、疵持つ足に後が見られ、間道傳ひに來た故に、思ひの外に遲くなつたが、首尾よく爰迄來たのは仕合せ、煩らつて居るお袋に少しも早く行つて逢はう。

〽我家の門へさし足なし、内の樣子を窺ひて、

お米〳〵。

お米　私を呼ぶのは、誰でござんす。

久藏　誰でもねえ、久藏だ。

〽後を見廻し門の戸閉め、わらぢ解く間も妹が、

お米　兄さんでござんすか。

ト此の間お米及び腰に見てびつくりする、久藏窺ひ〳〵内へはひり、簀戸を立切り掛金をかけ、引きかけし菰をかけ二重へ來る、お米こなしあつて、

久藏　これ、靜かにしろ。

お米　母さん、兄さんが歸つて來ました〳〵。

お麻　なに、兄が歸つたと。

久藏　おつかあ、とんだ苦勞をかけたなあ。

お麻　おゝ、逢ひたかつた〳〵。

お米　よくまあ、歸つて下さんしたなあ。

〽思ひがけなく母親が、這ひ出て探る手先を取り、

お麻　おゝ久藏、どうしてそなたは歸つて來た。逢はれぬ事と思つて居たに、こりやまあ、夢ではないかいな。

久藏　此の間熊谷から送られて行くその時に、二人に逢ひたく思つたが、逢ふ事ならぬ科人に、其の儘江戸へ引かれた故、どうぞ一度逢ひたいと思つた念が屆いたか、不思議な事で拔けて來た。なには兎もあれ案じてゐた、おつかあお前の病氣はどうだね。

お麻　此の間迄少しは見えた目も段々に見えなくなり、癪氣の病ひも日に增し募り、所詮長くは生きられぬわいの。

久藏　その煩ひの元はといへば、みんな此の身の不埒から、年取つた身に苦勞をかけ、濟まねえ事でござります。（ト傍へ寄りこなし、床の合方になり、）

お麻　今更言つても愚癡ながら、そなたの父は高崎の家中にて、人に用ひられ御賄を勤めしが、お上の御首尾のよい故に、朋輩衆にそねまれて、遂に讒者の其の爲に、無實の罪で長のお暇、浪人なして弟を便り此の木崎の在方へ、假に住居なす內に、夫は病氣で果敢ない最期、一周忌から三年の法事をせぬ間にそなたの放埒、貯へ金は言ふに及ばず衣類道具も賣却なし、七年忌の法事迄に見る影もない姿になり、只昔に替らぬは御先祖よりの位牌のみ、世の盛衰と言ひ乍ら生き甲斐のな

き今の身の上、わしは元より此のお米も惡い心は持たねども、いかなる過去の因果にや、三年此方眼病にかてゝ加へて癪の病ひ、是も苦勞を重ねる故、つむりも白く年老いて、腰は次第に曲れども、杖と頼みしそなたの不身持、よからぬ賭事なす故に、果は繩目の恥を受け大事の家名に疵を附け、人に譏られ笑はれるが、わしや悔しうてならぬわい。

久藏　其のお歎きは御尤も、人間並みに生れ付き、養育なされて下すつた恩を忘れて身を持ち崩し、酒と博奕と女郎買、仕てへざんまいした故に、貯へ金は言ふに及ばず衣類諸道具賣盡し、長年苦勞をかけた上、到頭果てが喧嘩をし、相手の者を切つた科で唐丸駕籠で江戸へ送られ、入牢してから三月越し、好きな酒さへ飲む事ならず、寒さに夜も寐られぬので、是迄親に不孝をしたも、此の身の先非を後悔なし、濟まねえ事と氣が付いても、今更仕樣もない囚人、せめての事の言譯にどうぞ一度逢ひたいと、朝夕心に願つて居たが、やう〳〵神のお助けで、あちらを拔けて參りました。

〽後悔なせし久藏が、詞に母も膝立て直し、

お麻　拔けて來たと言やるからは、それでは未だ入牢中か。

久藏　如何にも入牢して居りますが、逢ひ度く思ふ一心で、繩拔けをいたしました。

お麻
お米　えゝ。

お麻　すりや繩抜けをいたせしか、えゝ。

〽驚く母を押止め、

久藏　いや、決して案じるには及びませぬ。町奉行迄お調べ受け品川溜りへ歸る途中、數寄屋河岸の堀端で巾着切りが追ひかけられ、どさくさ紛れに繩取りが堀へ落ちたその後へ、通りかゝつた或る人が繩を切つてくれたので思はず知らず逃げ果せ、その晩江戸で一人といふ金看板甚五郎と言ふ家へ行つて次第を話し、在所へ行つてお袋に逢つて來る内助けてくれと、男と見かけて頼んだ所、金看板の親方は内の親父に縁あつて、さういふ事なら逢ひに行け、五日が間そなたに替り、おれが入牢してやるから在所へ行つて逢つて來いと、男を磨く程あつて、二言と言はず後を引き受け、此の身なりから路用の金迄、殘る所なくしてくれたので、思ひがけなく故郷へ、かうして逢ひに參りました。

お麻　むゝ、それでは江戸で名の高い金看板に助けられ、そなたは爰へ歸りしか。

久藏　金看板のお蔭にて、逢はれぬお前に逢はれます。

お麻　不孝者故憎い奴と、口では言へど心では、最早餘命のないわし故、疾うから逢はうと思つて居た

に、よく逢ひに來てくれた。

久藏　わしもお前に逢へたので、心殘りがござりませぬ。

お米　母さんも兄さんも、嘸嬉しうござりませう。

お麻　お米、そなたも嬉しからう。

お米　こんな嬉しい事はござりませぬ。

ト親子兄弟縋り付き、しんは泣きより打ち悦び、久藏にお麻探り寄り、お米も取り付きこなしあつて、

お麻　言つて詮ない事なれば、言ふまいとは思へども、老の身の越し方を思ひ出して愚癡を言ふ、育て甲斐ない久藏故、日に增し募る我が病ひ、所詮長くは生きられねば、死ぬる覺悟はして居れど、黄泉の障りは此のお米、親無き後は兄が親、そなたが世話をせねばならぬに、賴みにならぬ今の身の上、死んだら弟の與次兵衞が世話してくれることであらうが、連れ添ふ女房が他人故、嘸や苦勞をするであらう。それがいかにも不便でならぬ、是迄親に不孝をかけし不孝者のそなたでさへ賭場の喧嘩にて入牢せしと聞いた日より、心にかゝつて夜の目も合はず、今年はわけて餘寒も強く、春になつても度々の大雪故に薄着では、凌ぎ兼ねる事でもあらう、どうぞ煩はぬ樣にして

やりたいと、
〽逆ながら神佛へ、お願ひ申すも親の慈悲、ましてお米はそなたと違ひ、年はいかねど甲斐々々しく、煮焚の世話からすゝぎ洗濯、少しの間さへ手をあかさず、撫でさすりをしてくれる、世にも稀なる孝行者、わしや可愛うてならぬ故、死ぬる命は惜しまねど是が不便で死にともないが、もう長くは生きられぬ。本意ない事であるわいの。
〽我が身をかこち母親が、泣き伏す見れば介抱なす、妹の孝に引き替へて、不孝をなせし久藏が、胸を割かるゝ思ひにて、
久藏、そなたに褒めさせたいは、入牢したその日より此のお米が三度々々江戸へ向つて缺かさずに、蔭膳を据ゑた故、褒めてやつてくりやいの。
久藏　それは奇特によくしてくれた。道理で入牢して居る内も饑じい事の無かつたは、おぬしが蔭膳してくれたそのお蔭であつたと見える。是迄長年苦勞をさせた人でなしの此の兄を、憎いとも思はずに、よく蔭膳を据ゑてくれた。此の恩返しをしてえにも、心に任せぬ我が身の果。
〽後言ひさして久藏が、胸さへ曇る春雨に、ほろりと膝へ一雫、落す涙を見咎めて、
お米　兄さん、おまへは、何を泣かしやんす。

久藏　さあ、おれが泣くのは今日限り、再び二人に逢はれぬから。
お麻　再び二人に、
お麻
お米　逢はれぬとは。
久藏　〽言ふに久藏打ちしをれ、
喧嘩をした時切つた相手が、三日の中に死んだ故、おれが殺した同然に、兇状極つて下手人になれば死罪御仕置だ、首を切られにやなりませぬ、萬に一つお上のお慈悲で命が助かり遠島に、なつても三宅か八丈島、何十里と言ふ波濤を越せば、親子兄弟生き別れ、いつ逢はれるか知れぬ故此の世の名殘りに一目逢ひ度く、道ならぬとは知り乍ら、途中で繩の切れたは天の御許しと、手前勝手に道理を付け、故鄕へ歸つて來ました久藏、是れ迄長年御苦勞かけ、不孝に不孝を重ねた罪、どうぞ許して下さりませ。
〽兩手を突いて母親へ、詫びる姿は見えねども、詞に誠を察しやり、探り乍らに佛檀の位牌取り出し、かたへに置き、
ト お麻探りながら佛檀より、立派な位牌を取出し、千代紙張りの箱の上へ置く。
お麻　今佛檀でお前樣もお聞きなされたでござりませう。改心なして是迄の不孝の罪を詫びますれば、

お許しなされて下さりませ。

と箱の上の位牌へこなし。

久藏　親仁樣へ對しましては申譯なき身の不埒、家名へ疵を付けたのみか、死罪を受けたる此の久藏、お詫びの仕樣がござりませぬ。

お米　人の言ふのは當にならぬと思つて居たが現在の、兄さんおまへが言ふからは、誠の事でござりませう。

お麻　父御へ詫びをせし上は、わしも許してやりませう。實は最前與次兵衛から罪の次第を聞いた故、逢ひ度く思つて居た所、死罪にならば猶の事、もし又命が助かつて遠い島へ行くにせよ、赦免になつて歸る迄、所詮命の無いこの母、明日をも知れぬ身の上なれば、是が此の世の逢ひ納めで最早や逢はれぬ。

久藏　切つた者が下手人になれば首を切られるか、御慈悲で命が助かつても遠い島へ行かねばならぬ。暑さ寒さや入替りで、赦免にならぬその内に島の土にならうも知れぬ、十が九つ世にない體、年端も行かぬに可愛相だが、どうぞお袋の世話をして不孝な兄と二人前、そなたが孝行してくりやれ。

お米　私の心の屆くだけは孝行をしますけれど、何を言ふにも女子の悲しさ、思ふ樣には出來ませぬ。

お麻　お米に苦勞をかけるのも、もう長い事ではない。近い内に冥土へ行く身、思ひがけなく久藏に、今夜逢つたが今生の親子一世の別れ故、せめて一晩泊めたいにも、泊める事のならぬ身の上、此のまゝ本意なく別れねばならぬ事故只一と目、そなたの顏が見たいにも見ることならぬ此の眼病如何なる因果なことなるか。

〽空を探りて振り仰ぎ、見れども見えぬ眼病に、我が身をかこち母親が、是非も涙にくれければ、（ト三人愁ひのこなしあつて、）

久藏　おゝ、尤もだ〳〵、わしが滿足な體なら、こんな苦勞をかけまいに、今の心が早く出たらお前に樂をさせようもの、孝行し度くも一と晩と傍に居られぬ天下の囚人。

お麻　かゝる苦勞を子にさせるも、なまじ存へ居ればこそ、

お米　朝夕お傍に居る私は、年が行かねば役に立たず、

久藏　それも是も久藏が、身の不埒より起りし事、

お米　あれ程、神や佛樣へ、

お麻　願ひし甲斐も情ない、

久藏　不孝に不孝重なりて、

お米　憂き事積る身となりしも、

お麻　皆前生の約束事、

久藏　宿世の縁で親となり、

お米　また子となりて此のやうに、

お麻　辛苦をなすも、

久藏　身の因果、

お麻　思へば果敢ない、

三人　事ぢやなあ。

〽手に手を取りて親と子が、悲歎に迫る眞身の涙、落ちて流れて谷川の、水もいや増す如くなり、（ト三人手を取り、愁ひのこなし。此の時四つの鐘を打ち込む。）

久藏　あの鐘はもう四つか、長くかうして居られぬ體、今夜の内に途中まで、踏み出しておかねばならぬ。

お麻　そなたに替つて入牢せし、甚五郎殿を一時でも餘計に苦勞をさせては濟まぬ。少しも早く江戸へ

久藏　歸り、其の身へ元の繩を受け、恩ある人を出したがよい。

與次兵衛どのも此間江戸へ來て、見舞を入れてくれたから、逢つて禮を言ひたいが世間を憚る日陰の身、後で尋ねて來た事をよく話して下され、それに付けても與次兵衛殿が江戸で拔かれた紙入を、其の日計らずわしが拾ひ、お前が病氣の重つた事を、與次兵衛殿へ知らせて來た伯母の文で詳しく知り、たゞさへ逢ひたく思つた折故間道傳ひに參りました。また紙入の中にあつた三兩の金もそつくりと、包んだまゝにありますから、是れを屆けて下さりませ。

ト言ひつゝかたへの小包みより、紙入取つてさし出す。

お米　母樣、新家の伯父樣を迎ひに行つて來ませうか。

お麻　與次兵衛にも逢はせたいが、隣りといへど三町たらず、さつきのやうな惡者が途中に居まいものでもない。そなたは迎ひにやられぬわいの。

久藏　いや、お前さんにさへお目にかゝれば、是で明日が日切られても、思ひ置く事はござりませぬ、うかうか爰に長居をして、見咎められては身の大事、少しも早く出かけませう。

お麻　今しがた與次兵衛が江戸から歸つて、路用を入れし紙入を取られし事の話をしたが、そなたが今夜助けられし、金看板の內儀に出逢ひ、思ひがけなく三兩の惠みを受けて歸りましたと聞いて感

心しましたが、如何なる縁で甚五郎殿の、かく迄世話になる事か、不思議な事であるわいなう。
お米　さつき伯父さんが歸る時、後に來ると言はしやんしたが、早うお出でになればよい。
お麻　いや〳〵、あれも今夜は草臥れて、今夜はその儘寐たであらう。
〽老母は前へ這出て、惜しむ名殘の淚をば、胸に飮み込み笑顏を作り。
折角態々逢ひに來たに、口を濡らさず歸すも氣がゝり、お米何にもなかつたか。
お米　さつき村の太郞作さんが、玉子を持つて來て下さいました。あれを煮てあげませう。
ト以前の百姓が藁苞へ入れて來りし玉子を出す。
お麻　おゝ、それがよい〳〵。是から直に歸ると言へば何はなくとも腹塞ぎ、支度をして行くがよい。
久藏　有難うござりまするが、ゆつくり支度もして居られねば、玉子があるならお貰ひ申して飮んで參りませう。
お米　そんなら此の儘上げませう。
久藏　是さへあれば夜通し今夜、道を急いでも體の勞れる事はない。追々暖かになりますれば、今に病ひも治りますから、大事になすつて下さりませ。
お麻　たとひ是から暖かに、花咲く時節にならうとも、所詮直らぬ我が病ひ、もうそなたには逢はれぬ

ぞ。

久藏　そりやわしとても同じ事、是から歸れば遠からず、死罪になつて死ぬ體

お米　母さんといひ、兄さんといひ、さういふ事になりましたら、私やどうせう、どうしませう。

〽後を考へ妹がはッとばかりに泣きければ、

久藏　おゝ泣くな〳〵。おれも多分は助かるだらうし、又おつかあもきつと死ぬと必ず極つちやあるねえ。よく看病してくれるから、おぬしが盡す孝行でも天の助けがあらうから、お目出度があれば歸られるのだ。泣かずとどうか笑つてくれ。

お麻　成程、そなたの言ふ通り、死ぬと極つたものでもなければ、助かるまいものでもない。さあわしは目出度く笑ふから、兄も笑へ、妹も笑へ。

久藏　はい、笑ひまするで、

お米　ござりまする。

お麻　目出度う笑や、ほゝはゝゝゝゝ。

久藏　はゝゝゝゝゝ、

お米　ほゝほはゝゝゝゝ、

お麻　はゝゝゝ、
久藏　ひゝゝほゝはゝゝゝ、
久藏　ほゝはゝむゝはゝゝゝ。左樣なれば、御機嫌宜しう。
お麻　急いで行きや。
久藏　はい。
　〽涙を隱し久藏が、笑ひを片手に出て行くを、暫しと妹が縋り留め、
　ト此の仕組にて花道へ行きかけ、愁ひの仕組よろしく、
お米　もし兄さん、待つて下さんせ。
久藏　おれに待てとは。
お米　母樣のあの御病氣、二三日後にお醫者樣が、もう長い事はないとおつしやりました。
久藏　それぢやあお醫者は頭を振つたか。
お米　悲しい事になりました。
久藏　はて、是非も無い事だなあ。
　ト此の內支度をそこ〳〵にして、久藏門口へ行き兼れる。お米も愁ひの仕組、捨ゼリフ互ひにある。

お米　まだそこに居なさんすか。
お麻　お米〳〵、久藏はもう歸つたか。
お米　まだ爰に居なさんす。
お麻　居るならちよつと歸つてくりや。
お米　もし、兄さん。
久藏　何んぞ用でもござりまするか。
お麻　何にも別に用はない。
〽見えぬ乍らも今生の、別れを惜しみ母親が、延上り見るいぢらしさ、
久藏　むゝ、心がせけば御免下され。
ト久藏は花道中程、お米も花道へ行き別れを惜しむ。お麻は二重のはしへ、片足おりかけて探るこなし。
お麻　たつた一と目、顏が見たい。
お米　兄さん、待つて下さんせ。
〽縋る袂を振り拂ひ、かけ行く裾にまつはる妹。

久藏　えゝ。歸れといふのに。

〽涙と共に久藏が、ふた足三足歩みしが、是が此の世の別れかと、又振返る顏と顏、名殘り惜しげに見送るを、心弱くて叶はじと、後をも見ずして急ぎ行く。

トお米愁ひのこなしにて久藏を引き留めるを振拂ひ、風の音にて逸散に花道へ走りはひる。是非なくお米戻り來る。門口のお麻愁ひのこなしあつて、

お麻　久藏はもう行きやつたか。

お米　私が留めるを振切つて、後をも見ずに宿場の方へ。

お麻　宿場の方へ行つたとか、何處かに兄の影が見えるか。

お米　もう闇うて、影さへ見えませぬ。

お麻　影さへ見えぬか。

〽門にすがりて母親が、今逢つたのが今生の、親子一世の別れぞと、目は見えねども心で見送り。（ト門の丸木柱へもたれ見送る。）

もう此の世では、逢はれぬかいの。

〽折から告ぐる山寺の、鐘も哀れに、

ト寺鐘、風の音をかすめ、門口にておこつくを、お米抱き留め介抱する。此の仕組三重にてよろしく。

幕

三幕目

中仙道戸田河原の場

（浄瑠璃）　故郷へ歸る雁金に　散行く花の二人連　意駒異見一諷（常磐津連中）

〔役名〕――座頭杢市、木崎の久藏、堺屋房次郎、堺屋女房おみち、同下女おしげ、藝者お花、房次郎一子房松等。〕

（戸田河原の場）――本舞臺一面の平舞臺、下手にいつもの土手浄るり臺、樹木の張物、上手畫心に辻堂樹木の見切、柳の立木同じく釣枝、向ふ戸田河原の渡し場、榜示杭、舞臺前菜種の花、諸所に土手板。川越唄、水の音にて幕明く。と直に雲助二人息杖を擔ぎ出で來り、

雲一　けふ高田の長持を擔いで板橋まで行つたが、雪が度々降つたので途中で困つたよ。

雲二　そりやあ廻り合せが悪かつたな、おらあ仕合せと其の雪で、供をした旦那が宿へ泊ると言ふからおらが馴染のあまの所へ案内して行き、酒手を貰つた上あまに逢つて來た。

雲一　そいつァいゝ事をした。これ、おらがあまは何とか言はなんだか。

雲二　何とも言はなかつたが、手紙を銘々にやるのだが、書き込んでやるからよく言つてくれといつてよこした。（トかます烟草入より淨瑠璃觸を出し、）

雲一　どれ〳〵、讀んで見るからよこしやあな。

ト手紙を取り上げ、淨瑠璃名題、太夫役人觸を讀む事あつて、

こりや、あまの文だと思つたら、違つたやうだ。

雲二　おゝ思ひ出した事がある。劇場の狂言方が、手紙の代理を認めたから、芝居の淨瑠璃觸と間違つたのだ。

雲一　樂しみにして讀んだが、何の事だ。

雲二　こウ、途中で愚圖々々言つてもいけねえ。都合して行くとしよう。

ト兩人捨ゼリフにて上手へはひる。知せに付き、下手の淨瑠璃臺を打返す、こゝに常磐津連中ゐて直に淨瑠璃になる。

〽春の夜の、月も朧に芽柳の、影さへ闇き戸田河原下板橋の驛路を、後に志村の板越えて、道に惱みし二人連れ、

ト堺屋房次郎結城縞の着附、尻からげ、一本ざし、お花お召の着附、蛇の目を相合傘に差し、水

の音にて出で、花道にて振りあつて、直に舞臺へ來り、

へ雨持つ東風に散る櫻、落ちて行方は野に崩る、蕨の在に末一里、爰には駕籠も荒川の、水音早くとつかはと、往來の人目、堤村、森の木陰へたどり來て、

お花 もし房次郎さん、爰は何といふ所でござんすえ。

房次 爰は戸田の渡し場手前、中仙道の往還で、角田川の川上ぢや。

お花 さうしておまへの叔父さんの、お内は遠うござりまするか。

房次 もう爰からはさのみはない。川の向ふの蕨在だが、歩み付けねえ道故に、嘸おぬしは草臥れたであらう。

お花 いゝえ草臥れたのなんのといふは不斷の事、かうして逃げて來たからは、少しも草臥れはいたしませぬ。

房次 何にいたせ往來の、人の途切れは丁度幸ひ、爰で少し休んで行きませう。

お花 今方降るかと思つた雨雲も吹き晴れて、

房次 朧に霞む春の月、

お花 芽出し柳もそよ〳〵と、

房次　風にそよぐも追手かと、
お花　後ろ見らるゝ落人の、
房次　心ならざる、
兩人　事ぢやなあ。
〽わが身の上の辻占を、聞く葭蘆も角がくし、川邊に誓いし憂事を水に流してやすらひぬ、
房次　今更言ふも愚癡乍ら、運平に身を委したら、そなたもかうした憂目をば見まいもの。
お花　いえ〳〵どんな苦勞をしても厭はぬが、お前さんこそ私故、又二つには繼しき母さんが、常さへ邪險に責めせつちやう、此の儘歸らばどの樣な目に逢はうも知れず。
房次　是と言ふのも金看板の内に居れば、たとひそなたのお袋が、何と言つても安心なれど、甚五郎殿は、久藏が賴み故替りに入牢した故に、居るに居られぬ仕儀、一とまづ叔父を使る積りで此の在所へ。
お花　ほんに思へば御新造さんが、嘸私をば恨んでゞござんせう。
〽しかも目黒のお參りが、二人が緣の橋和屋で、思ひざしにと常談に、言はれてはつと恥かしく、赤らむ顏の夕紅葉、心で是が祝言の、三々九度と嬉しさの、〽亂れかゝりし萩の露、

つい轉び寐に濡染めて、思ひ増す穗の糸芒。（トお花クドキのふりあつて。）

〽それから深く成田行き、旅の泊りに氣兼ねなく、交す枕の船橋や、思はぬ雨に二夜迄、眞間に歸りは鴻の臺、遊びくらして身の果は、憂き事を知る旅の空、

ト房次郎からんでクドキあつて、

〽死ぬる覺悟にしよんぼりと、手を取交し兩人が、身の果敢なさをかこち泣く、折しも來かかる人音に。

ト兩人ふりよろしくあつて、向うを見て、

お花　あれ、人が參ります。見附けられては、

房次　道を知らねば向ふから、駕籠が來るあれを待ち受け辻堂で、

お花　そんなら暫し此の内にて、

房次　おぢや。

ト土手の辻堂の内へ房次郎、お花はひる。

〽手を引き連れて辻堂へ、二人は忍び入りにける。

〽折から空に音を啼きて古巣へ歸る雁ならで、在所へ急ぐ夜の駕籠、

ト風の音にて月隱れる。水の音、合方にて花道より、あんぽつの垂をおろせし駕籠、芝口初音屋の提灯をつけ、駕籠舁二人にて是を擔ぎ出來る。後よりおしげ前幕の下女なり、郡内の小風呂敷包と手遊び四つを持ち、駒下駄にて出來り直に舞臺へ來り、

駕一　もしお客さま、わらぢの鼻緒が切れましたが、直ぐ向ふの店へ行つて買つて參りますから、少しお待ち下さりませ。

駕二　手前行くならおれはまだ飯を喰べなんだ。一緒に行つて入れて參りますから、少しのお暇をお願ひ申します。

しげ　さうでござんすか、そんなら早うして下さんせ。

兩人　なに、直に行つて參ります。

ト捨ゼリフにて兩人下手へはひる。おしげ思入あつて。

〽望む深山の雪解けて水はぬるめど肌寒く、夜風をいとふ駕籠の内、

しげ　もしおかみさん、夜ではござりますが、此のまあ外の景色を御覽なされませ。

トおしげ駕籠の桐油をよき所へ敷き、駕籠提灯を見せる。駕籠の内よりおみち、堺屋女房の拵へ房丸木屋の一子にて、着流し羽織にて駕籠より出で、桐油の上に住ふ。

みち　ほんに、駕籠の內はのぼせました。さあ坊も爰で、氣晴らをしたがよい。

しげ　さあ〳〵、是へお出でなさりませ。

房丸　坊の內かと思つたら、まだお駕籠であつたか、早う內へ行つてねんねがしたい。

みち　何んの頑是なき此の子を連れ、里へ行くのも旦那樣がお內にお出でなさらず、父さんの言はるゝにも、夫の心のそれるのも、女房の機嫌の取り樣が惡い故と、叱言ばかりおつしやるので、店の者の手前面目なく。

しげ　そりや御尤もでござりますが、遂に一度燒餅らしい事もおつしやらぬあなた樣、それをお嫌ひ遊ばすのは、おいたはしい事でござりまする。

房丸　よそのおとつさんは內にござるのに、坊の內のおとつさんは、何故坊の傍にはおいでなされぬのぢや。

みち　おゝ尤もぢや。恨むも道理、これ坊や。

〽なに頑是ない子心にも、親を恨むも片言の、廻らぬ舌のいじらしさ。始終漏れ聞き辻堂に
不便の者やと忍び泣き、母は引き寄せ抱きしめ、
始のうちはをり〳〵お出でなされても、宵にはお歸りなされたが、日泊りなされる樣になり。

〽田舍育ちのむくつけな、私に愛想が盡きたので、内にお出でなさらぬ故、可愛やそなたを振捨て、邪險なお氣になつたのも、
お氣に入らぬは無理ではない。
〽きらはれし身に幾度か、里へ行かうと思ふのも、子迄まうけし仲故に、別れともなく今日迄も、針の莚に辛抱して、我が身を恥ぢて口に袖、涙を忍ぶ心根を、おいたはしやと共々に泣くや田の面の初蛙。

トおみち房丸を相手に愁ひのこなしよろしく、振りある、おしげも絡んで、

しげ　其のお歎きは御尤もでござりまするが、暫くお里にお出で遊ばす内、甚五郎樣が仲へ御はひりなさるれば、惡い樣には計らひますまい。往來でかやうな事を。今の人達はいつ迄待たす事ぢやなあ。

トおしげ、おみつを慰める。此の内下手から以前の駕籠屋歸り來り。

駕一　これはお待遠でござりました。
しげ　もし、待つて居りました。
みや　雨の降らぬその内に、

しげ　少しも早う渡し場を、

兩人　是から一息に、急いで參りまする。

〽肌に冷き川風に、雲足早く急ぎ行く。

ト此内おみち、房丸駕籠の中へはひる。右の桐油をかける、おしげは手遊び、菓子袋を包の内へ入れ立上る。水の音にて皆々上手へはひる。

〽後見送りて辻堂より、二人は立ち出で手を合せ、（ト以前の房次郎、お花出て見送り。）

房次　委細は此の辻堂で聞いて居ました。これおみち、是迄のおれが不身持、堪忍してくれ、可愛い子迄に案じさせ。

お花　あんな可愛らしい子迄ある夫婦仲で、愛想づかしをさせるのも、お店の不首尾をましましたも、みんな私が惡い故、なまじ私が居る故に申譯には此の身を爰で、

〽後言ひさして身を投げんと、駈け行くお花を抱き留めて、

房次　こりやお花、何をするのぢや。

お花　おみち樣へ濟まぬ故、私は身を投げ死にまする。

房次　そなたが死なうと覺悟するなら、わしも一緒に死なうから、まあ〳〵待ちや。

お花　今おみち様のおつしやるお詞、私を恨むお心なく、お子さん迄ある仲を、里へ歸るとおつしやるのは、どうでも濟まぬ義理、

房次　是も定まる二人が惡緣、そなたと二人蕨なる伯父の所へ行つたとて、子迄あるおみちを捨て、夫婦になれとも言ふまいから、いつその事に二人一緒に、

お花　すりや死んで下さんすか。

房次　おいなう。

〽又も覺悟の向ふより、（ト兩人こなしある。此の時花道の揚幕にて、）

座頭　まあ〳〵、みんな早く來い〳〵。

お花　又もや爰へ來る樣子。

房次　いや〳〵氣遣ひない、盲人ぢや。

お花　それで少しは落着きました。（ト安心の思入にて、向うへこなし。）

〽咲いた櫻になぜ駒繫ぐ、駒が勇めば花が散る。一ぱい機嫌も浮れあし、何んの苦もなく中仙道、下駄で木曾路の旅稼ぎ、がつくりそつくり山道で、轉ばぬ爲に瓢簞の、吸筒下げてぶら〳〵と遅れし連れを松の蔭、

ト誂への鳴物になり、花道より座頭黒紬の着附、袴、厚歯の下駄、玉の付きし杖を突き、頭巾を冠り袋入りの三絃を背負ひ出て花道にて振りあつて、

座頭　大分遅れた。（ト呼ぶ思入。）

〽呼ばれてとつかは小按摩が、萌え出し野邊の道草に、すみれたんぽゝ鼓草、杖で拍子をとりどりに、打連れてこそ來りける。

ト此の内後より小按摩八人、尻からげ旅なりにて出て、花道にて振りあつて皆々舞臺へ來る。

小一　もウしお師匠樣、さつきから餘程の道、

小二　大勢連れとはいひ乍ら、

小三　息もつかずに參りました。

小四　草臥れたと見えまして、

小五　足がすくんで、歩かれませぬ。

座頭　みんながさう言ふなら、月夜ではあるし、一服して行きませう。

小六　お師匠さん、休むなら鬼ごつこをして遊ばう。

座頭　えゝ、日が暮れたのに、そんな事がなるものか。

小七　目が見えませねば、夜も晝も同じ事。

小八　あなたはそれで見えますかえ。

座頭　よう又師匠をやり込めをつたな。（ト房次郎、お花皆々の此の體を見てこなし。）

房次　幸ひの座頭さん、私が爰で死ぬ事を、蕨在の伯父さんへ。

お花　あ、これ。（ト押へる。座頭聞き付けて、）

座頭　あゝこれ、そこにござるは若いお方とかぎ付けましたが、さうして何處へ行かれるのだな。

房次　あい、わし等は蕨在まで、用達しに行く者でござります。

お花　さうして座頭さんは、何れへお出でなされますか。

座頭　わし共は江戸でござりまするが、旅稼ぎに善光寺へ弟子供を連れて參じます。さうしておまへさん達は、二人連れでどこへござらつしやるな。

房次　さあ、私共は添ふに添はれぬ譯あつて、西へ行かねばなりませぬ。

座頭　あゝこれ〳〵、惡いぞえ〳〵、添ふに添はれぬと言はつしやるからは、死んで未來で添はうと言ふ樣な事でござりますか。

房次　そんな者ではござりませぬ。

座頭 いや〳〵、隱さつしやるな、目で見る事の叶はぬ代り、人の語音で喜怒哀樂、直に知れるが盲人の德、そんな事はありますまいが若い時は後先見ず、此の世で添はれぬ事なれば、あの世へ行つて暮さうものと、あぶない蓮のうてなを頼みに、よく心中をいたしますが、此の位世の中に馬鹿けた事はござりませぬ。此頃江戸で流行ります小唄が丁度よい異見、ちよつとお聞き下さりませ。

ト思入あつて背負ひし三絃を出し、こなしあつて前へ出て三絃を彈き出す。

〽廣い世界を色故死ぬは、狹い心ぢやないかいなあ。ありや〳〵〳〵死んで花實は咲かぬ事ぢやよ。〽調子に乘つて三絃を、置いて座頭が浮れ立ち。〽まづ色戀で死ぬ者は、第一親に不孝故、さしづめ地獄へ落人の、罪は曇らぬ淨玻璃の、鏡にうつる輕重を、業の秤りに掛けられて、〽くわつと見開く閻魔王の、眼玉にぞつと肌薄の寒さと強さにぶる〳〵〳〵。〽かう言ふ事なら死なぬにと、後悔先きに立番の、鬼がくらはす鐵棒にて、打たるゝ數を算ふれば、一百三十六地獄。

ト座頭此の內仕拔よろしくあつて、小按摩を呼び出し紙を一枚宛やる。是にて按摩後へはひろことあつて、

〽つらい憂目に大釜の、蓋の明く日を樂しみに、飮めや唄への盂蘭盆會、〽爰に哀れを止め

しは瘦せやつれたる我鬼道の、亡者が足もひよろ〳〵と、しわがれ聲を張り上げて、

ト此の内八人の小按摩、兩肌を脫ぎ、こなしあつて亡者の思入にて双方へ出て、ふりあつて、

〽蓮の葉を冠りて婆の迎ひ火に、苧殼の杖をつく〳〵〳〵と、我身を返り鼠尾草の、露か雫か、雫か露か、袖に淚のしめりがち、

ト座頭仕ぬきよろしくあつて、八人の小按摩、皆肌脫ぎ、杖を持ち各々二人づゝに別れ、擊劍の思入にて、

〽むらがる亡者の其中に一際艷めく女郎花、燎心盆とて竹の根を掘る、其の罪科は手練手管の嘘を机、先生めかせし辻講釋師が舌を拔かれて修羅場の戰ひ、タヽヽタヽヽチヽヽチヽヽヽ何んだかわからず、無性に手眞似でのん〳〵のんきな、〽叩き合ひ。

ト振りよろしくあつて、提灯の振りあつて、トヾ座頭を双方より杖にて打つ事ある。

座頭　あゝいたい〳〵。許してくれ〳〵〳〵。

小一　やあ〳〵、どうやら聲の樣子では、

同二　目當が違つて、

同三　お師匠様、

八人　御免なされて下さりませ。

ト此の内頭巾をとる。瘤八つ出來てゐるかづらになる、ふりにて皆々やまる事。

座頭　師匠をひどい目に逢はせたな。然し若いお方、今私が申した事聞かしやれたら、必ず無分別を出さつしやるな。

小一　もしお師匠樣、誰も爰には居ぬ樣でござりまする。

座頭　はゝあ、扨はれきではあるまいか。（ト狐ではないかとこなしあつて、）

小二　あゝ、よしない事にて暇取りました。

小三　お師匠さん、もう參りませう。

座頭　さあ／＼、はぐれぬやうに、繋がつて來い／＼。

八人　さあ／＼、參りませう。

〽三絃背負ひて先きへ立つ、後に子座頭繋がりて、打連れてこそ、

ト座頭先きに小按摩八人付いて上手へはひる。本釣鐘、波の音になり、

〽後は次第に更け渡り、蛇籠に當る川水の、せかるゝ音の物凄く、小蔭を出る兩人が、

ト後より以前の房次郎、お花愁ひの體にて出て、あたりへこなし。

房次　今親切に盲人が、物にたとへて二人へ異見。
お花　それも義理に絡まれて、生きて居られぬ二人の身の上。
房次　是が此の世の、
お花　お顏の見納め。
〽是が名殘りと手を取りて、暫しは顏を見合せしが、かくては果てじと兩人が、小石を拾ひ袂へ入れ、水の深みへ、
ト兩人名殘りを惜しむ事あつて石を拾ふ、此の內上手より前幕の久藏、以前のなりへ合羽草鞋にて、籠へ玉子を入れしを下げ窺ひ居る。兩人既に川へ飛び入る所へ久藏つか〳〵と行きて引き留め、
久藏　これ待つた、二人の衆。
房次　死なねばならぬ、
お花　どうぞ放して。
久藏　かう目にかゝつて留めたからは、どう見殺しになるものか。
房次　そこをお慈悲に、
お花　見のがして。

久藏　はて、惡い事は言はねえ。（ト兩人を引き留め、無理に下手へ引き据ゑて、誂へ合方になり）立入つたら深い譯もあらうが、死なうとは無分別、どうか話しがならうから譯を聞かしてくんなせえ。

房次　何をお隱し申しませう、私は芝口の堺屋といふ藥種屋にて、房次郎と申す者。

お花　又私は花と申し、新橋に居ります、しがない藝者でござります。

房次　連添ふ女房もござりますが、不圖した男の意氣張りから、引くに引かれぬ二人共、家を出まして此の頃迄、丸屋町に名の高い金看板の世話になり、二階に忍んで居りましたが、久藏といふ其の人の替りに入牢いたせし故、是なる花が繼母お爪が嚴しい掛合に、內儀が一人困るのを、見兼ねて昨夜ひそかに拔け出し、蕨在に居ります伯父を使つて參らうと存じましたが、不圖したことより死なうと覺悟いたしました。

お花　最前爰の辻堂で、暫し休んで居る內に、房次郎さんのお上さんが、お小さいのをお連れなされ、浦和のお里へお出での處、駕籠やがわらぢの紐を切り、買ひに參つた其の後で、お小さいのと女中を相手に、夫に捨てられ里方へ歸るが辛いとおつしやるは、御尤もな事故に、私は聞いて生きて居られず、

房次　此の房次郎も不義理が重なり、互ひに語る身の上に、あの世を當に此の川へ、二人一緒に身を投

けて、
お花　死なうと覺悟いたしましたも、内へ歸れば繼母の、辛い憂目に逢ひます故、
房次　母へ不孝の言譯に、死ぬると覺悟せし上は、
お花　どうぞ此の儘見のがして、
房次　身を投げさして下さりませ。
お花　もし、お願ひでござりまする。
久藏　通り掛つていづれの二人か、助けましたが樣子を聞けば、金看板親分とのがれぬ仲とあるからは
なほ〳〵助けにやなりませぬ。
房次　そりや又、何故に。
お花
久藏　今おつしやつた金看板が、罪を脊負つてくれました、わしは木崎の久藏と申す者でござります。
房次　すりや、あのお前が、
お花　久藏さんでござんしたか。
久藏　當時江戸で一二と言はれ、近國へ迄名の響く金看板、俠氣に此身の罪を引受けて、替りに入牢し
てくれたので、木崎へ行つてお袋に二度と逢はれぬ今生の別れをなして歸りがけ、計らず爰でお

二人が、身を投げるのをお留め申すも、是も前世の深い御縁、一足おそくて死なれたら、一度内へ預かつた金看板がお宅へ對して、共に命を捨てなけりやあ申譯がござりますまい。私が江戸へ立歸り直に番所へかけ込めば、替りに行つた親分は赦免になるは知れた事、内へ歸ればお二人に、身の納りの附くは必定。死ぬ所ではござりませぬ。大恩受けた金看板へ此の久藏が恩返しに、此の上もない土産故、死ぬのを思ひ止まつて、わしと一緒に新橋へ、どうぞ歸つて下さりませ。

房次　成程、二人が死んだらば、一旦内で預かつた、

お花　甚五郎さんが、もしひよつと、

房次　死にでもしては相濟まぬ。

お花　こりや、久藏さんの詞に附き、

房次　死ぬのを思ひ、

兩人　止りませう。（ト双方よろしくこなしあつて）

久藏　よく思ひ止まつて下すつた。金看板は言ふに及ばず、親御樣のお悦びはどの樣でござりませう。御得心の上からは、善は急げ板橋から、駕籠で飛ばして夜通しに、丸屋町へ歸りませう。

房次　さういふ事なら最前の、

お花　拾つた石も爰へ捨て、
久藏　目出度くお供いたしませう。（ト本釣鐘、風の音をかすめ、灯入りの月出る。）
房次　涙の雨も雲晴れて、
お花　空に照り添ふ廿日月、
久藏　夜明けと思つてなく烏の、
房次　森を放れて、
お花　塒へ早く。
久藏　どれ、江戸入りと、
ト菅笠を肩へ掛けるを、木の頭。
しませうか。
ト本釣鐘、馬士唄、波の音、兩人は身支度する。三人よろしく、
ひやうし　幕

四幕目

丸屋町金看板内の場
久保町原喧嘩の場

〔役名――金看板の甚五郎、紫紐の大五郎、木崎の久藏、堺屋房次郎、久藏伯父與次兵衞、大家杢兵衞、荒川逕平、子分十吉、同助藏。甚五郎女房おてふ、久藏妹お米、藝者お花、熊鷹お爪等。〕

(甚五郎内の場)――本舞臺一面の平舞臺、序幕の返し甚五郎内の場の道具。爰に甚五郎の子分四人○◎△□酒肴を前にして酒盛をしてゐる見得、鳴物にて幕明く。

○ 調子の合はねえのは仕方のねえもので、屋臺囃子の太鼓を聞いて、酒を飲むはいゝ心持だが、無性矢鱈に餓鬼共が、どこ〳〵叩く稲荷祭り、太鼓の音ぢやあ酒は飲めねえ。

◎ そりや手前の言ふ通り、騒々しいばかりで頭痛持はのぼせ返ると小言を言ふが、子供の氣儘に叩かせるのが、稲荷様のお好みとやらで、どこの裏でもあの通り。

△ 何にしろ稲荷様は、狐の親方だといふが、初午だの二の午だのと午の日には祭りをして、子供に太鼓を叩かせるのは、馬が腹太鼓を叩く事から祭が始まつたのか。

□ まさかさうでもあるめえが、兎角神様といふものは罪のねえもの、子供を集めて遊ばせるのが

○　好きだ。見ねえ十二座のひよつとこなども、子供に見せて悦ばせるみんな趣向に出來たものだ。

○　又こつちの内の親分は、子分の者に酒を飲ませ、悦ばせようといふ氣と見えて、繩抜けをした囚人の代りに牢へ行きなすつて、今度出牢したので子分の者は酒びたし。

◎　それといふのも親分のお蔭で、親に逢ひに行つた久藏といふ繩抜けが、上州から返つて來て直に番所へかけ込んだので、親分が赦免になつたその祝ひに諸方から、酒や肴を貰つたのだ。

△　それでなくつても不斷から、振舞好きの親分だから、鏡を抜いてたんと飲めと、言渡されちやるけれど、酒と違つて生肴は内へ長く置かれぬから、近所隣りへいふに及ばず、出入の者へ遣るけれど。

◎　後から〳〵貰ふので、鯛やひらめは鼻につきだした。さう近所へも遣られねえが、慾張り大屋の李兵衛さんに、遣つたら貰つて行くだらうが、それも今がた遣つたばかり。

ト此の内大屋窺ひ居て、

李兵　お察しの通りいくらでも、貰つて行くから案じさつしやるな。

○　そんなら大家さん、聞いて居なすつたか。

李兵　いや、わしの内は小勢故、さう貰つても仕方がないが、店子の内の難儀な者へ施してやるその時

は、直ぐこつちの親分の名前も賣れて高くなれば、此の李兵衛の鼻が高い。決して遠慮はいらぬからいくらでもわしの内へ、餘けいな物は運んで下せえ。

◎　それぢやあ今方持たせてやつた、二升の酒と肴も、店子へ施してくれたのか。

李兵　施したとも〳〵。一軒前に二合宛に、鯛の切身を一切宛割渡してやりました。

△　いや、さううまく行けばいゝが、肴屋へ下にやつて、鹽物と取替えやあしねえか。

李兵　どうして〳〵、町役人がそんな野暮な事をするものか。

□　なんにしても來合せたから、まあ一杯。

李兵　酒はづれは近附きが悪い。それぢやあ一杯馳走にならう。

ト酒盛りになる。奥より女房おてふ出て、香の物丼などを持ち出る。

てふ　肴に飽きたといふ事だから、香の物でも喰べておくれ。

△　これは姉御、御心配、

○　さうお氣が付かれては、

四人　いたみ入ります。

李兵　いや、厩につれる蓬とやら、これだから、子分の衆が親分〳〵と言ふのだ。

てふ　どなたかと思ひましたら、大家さんでござりましたか、ようお出でなさいました。

李兵　いやもう、案じるより產むが安いと、十日以前に甚五郎殿が入牢した其の時は、こなたやわしも心配したが、無事に歸つてござつたのでこなたも安心、それに付けても諸方から祝つてよこす酒肴、近所隣りは言ふに及ばず、裏長屋の者迄大ばん振舞をさつしやるとは、流石に江戸で金看板と噂をされる親分、此の李兵衛の才槌頭も、是れでは一倍大きくなります。

てふ　四五日後までお前さんにも、御心配をかけましたが、思ひがけなく内の人が、無事に戻つて來ましたので、大安心を致し、御苦勞かけた御禮にお酒や肴を澤山にお上げ申したうござりますから御入川なら御遠慮なく、お持ちなされて下さいまし。

李兵　それは何より有難い。さつきは店子へやつたから、どうか今度はわしの分を、一升ばかり貰つて行きたい。

てふ　後ろの樽にござりますから、よい程お持ち下さりませ。

李兵　それでは此の二升樽へ、直についで行きませう。

○　どれ〳〵、わつちがついでやる。

李兵　どうか量りをよくついで。

ト酒をつぐ事。唄になり、花道より甚五郎、羽織駒下駄にて出來り、直に門口へ來て内へはひる。

四人 親分、お歸んなさいまし。

甚五 是は大家さん、よくおいでゞございます。

杢兵 奥にござると思つたら、それではどこぞへ。

甚五 四五日此方、あちこち禮廻りに歩きまして、やう〳〵今日であらかた終ひ故、内へ歸つて參りました。

てふ お前の留守の内、又二三軒祝ひものが、目錄で參りました。

甚五 それぢやあ又あした、挨拶に行かずばなるまい。

杢兵 いや、酒や肴を貰つて、ごまをするのぢやあござりませぬが、元より名高い甚五郎殿、人の惡事を身に引き受け入牢したといふ事が、ぱつと世間へ噂になり、金看板は豪氣な者だと、あれが誠の金箔付きの大親分だと、江戸中で評判をしてゐると聞き、此の家主も芋虫同樣ころ〳〵として悅んで居ります。

甚五 いや、さう言はれると面目ないが、陰德あれば陽報と人を救へば必ずともに、その報いはある。思ひがけなく此の間、尋ねて見えた繩脫けは、わしが親父がその以前、恩になつた出入場の息子

と知れて、人殺しをした兇條で入牢をしたのを母親が、氣病みに病んで居ると聞き、此の世の別れにたゞ一と目、逢つて來たいと言ひますから、代りにわしが牢へ行き、親の在所へ逢ひにやつた報いといふは繩脱の、その久藏が親に逢ひ江戸へ歸つて來る途中で、戸田の川原で心中を留めた二人は内に居た、房次郎さんとお花、異見を加へて久藏が、連れて戻つて呉れたのでこつちも大助かり、親旦那への詫も叶ひ、やう／＼今方若旦那を送り屆けて人知れず、相手の藝者は脇へ預け、惡い浮名の立たぬやう、言ひ聞かして來ましたが、何んでも人は相持で、人を救へば救はれます。

杢兵　はあ、それではそなたの内に居た房次郎さんは詫が叶ひ、首尾よく實家へ戻りましたか。

○　親分の言ふ通り、お花さんから段々聞けば、三つの時にお袋が、拾つたとやら買つたとやら、

◎　取り留めのねえ事を言つて、あの子を騙して置くさうだが、熊鷹お爪といふ程な、あくたれ者のあの婆あ。

△　なんでもどこでかあの娘、惡法書いて引浚つて、喰物にする料簡で養育したに違えねえ。

□　さういふ腹でもねえ日にやあ、どうして／＼あの婆ァが今日迄默つて居るものか。

杢兵　いや、誰言ふとなく其の噂は、杢兵衞も聞いてゐるが、それはさうと甚五郎殿は、紫紐とのごた

ごたは仲人でもはひつたかな。

甚五 いえ、紫紐との出入は、今言ふ惡人の久藏の罪を此身に引き受け、かけ込む矢先であつたから、よんどころなく四五日の、日延べを賴んで置きましたが、約束通り六日目に赦免になつて歸つた時、餘事を捨て置き久保町へ、十吉を使ひにやり、出牢すれば何時でも出入をすると早速沙汰をしたが、生憎向ふが風を引き、病氣であるから五日程、待つてくれとの挨拶に、それを否とも言えぬのは、こつちも牢へ行く時に、五日の間大五郎へ日延べを賴んだ事もあり、賴み通りに又五日、今度はこつちで待ちまする。丁度今日が日切れ故、今にも迎ひに來れば、直に出入の場所へ行き、命のやりとり付けにやあならねえ。

杢兵 それぢやあいまだに仲人の扱ひもなく、今日にも命のやり取りを。金看板にやあ叶はねえ、早く向ふで仲人を入れ、和睦をすればいゝ。

甚五 いや、向ふも名高い紫紐だから仲人などを賴んでは、名折れになるから入れますまい。

杢兵 よく惡口に家主は、家内安全町内騷動、店子に事があればよいと祈つてゐるといふけれど、騷動はやめにして、酒や肴を貰ひ込み、いやさ、酒でも飲んで笑つて居たいわ。

てふ 此の間から五日の日延べを賴んで、向ふでは十二分支度をした上で繰り出す積りでございませう

それに引きかへこちらでは、一心の外味方はない、子分も大勢ありますのに、何の用意もさせぬのは譬にも言ふ油斷大敵、それが苦勞でなりませぬ。

○　なに、姉御、お案じなさるな、こつちで日延べを頼んだのは、入牢の矢先で親分が脱れぬ譯があつての事。

◎　向ふで今度日延べしたは、病氣といふ名目で、子分を集め無駄評議を、してゐやあがるに違えねえ。

△　なんでも向ふは怖氣が附き、五日の日延べをしてゐる中、いづれは先から和睦が入り、

□　とゞの詰りは仲人の、扱ひまかせに仲直りと、なるであらうと意氣地なしが、震へてゐることであらう。

甚五　いや、向ふも名に負ふ紫紐、今に何とか言つて來やう、まあ一杯飲むがいゝ。

てふ　どれ、支度をして來ませうか。

李兵　どうか無難でくれゝばいゝ。（ト案じる。お爪花道より來り、花道にて、）

お爪　春になると何處の猫でもさかりがついて困るものだが、あのお花めも早くさかりがついて内をかけ出し、こんな世話のやけた事はねえ。なんでも今日は居催促で、金でも取つてやらにやあなら

ねえ。（ト内を覗ひて、）はい、御免なさい。

四人　それ、どら猫が來やあがつた。（ト冠せて言ふ。）

甚五　あゝこれ、手めえ達は引込んでゐろ。（ト言ふを。）

お爪　親分、内でございましたね。

甚五　留守へ度々お出でださうだが、此の間から禮廻りで内に片時居ないから、無駄足をさせてお氣の毒。

お爪　さあ、留守なら御留守の樣に、おかみさんへ言置でもわかる事でございますに、今日も留守だ、昨日も留守だと、六十越した年寄りに、百度參りをおさせなさるとは、親分さんにもお似合ひなさらぬ事と思つて居りましたが、それもこれもお約束通り、下さる物さへ下されば、こつちに言分はございませぬ。

甚五　さうして約束とは、どんな事を言ひましたえ。

お爪　へえ、それぢやあ親分には、お忘れなさいましたか。

甚五　知つての通り人の替りに、番所へかけ込む矢先といひ、久保町の紫紐が出入を持込んでの混雜、どんな約束をして置いたか、實はさつぱり忘れてしまつた。

お爪　もし親分、とぼけちやあいけませんよ。（ト合方になり）娘のお花が堺屋の息子と逃げてこつちの内に、隠してあるのを突留めて取戻しに來た其の時に、右から左三百兩の金を出さうといふ客の先を斷りその金を、こなたが出さうと言ひなさるから、江戸で一人の金看板、人入れ稼業の親分のまさかに顏も潰されず、五日の間待つて上げたが、牢から歸つて又五日、酢の蒟蒻のと言ひ延ばし、留守を使つたその擧句に、たま／＼内に居なさりやあ、しらばつくれたその挨拶、三百兩の金が出來ずば娘を直に渡しなさい、それも今日迄こけにされたこつちの損は少ねえが、此の埋くさは堺屋から、取るとでもして負けておかうよ。

甚五　成程あの時そんな事を、約束した覺えもあるが、おれが入牢をしてゐる内、厄介かけて氣の毒だと思つたと見え二人連れで、後先見ずに内を駈出し、すんでの事に戸田川へ、身を投げようとしたところ、やう／＼それも助けられ、脇に隠れて居る事を、さつきちらりと聞き出したが、心中をして死なうと迄覺悟してゐるあのお花、今更そなたに引き渡してやつた所が無益な穿鑿、一先づおれが娘に貰つて、相手の男を元々へ歸した上で兎も角も、惡い様にはしめえから、お花はおれにくんなせえ。

お爪　そりや、くれろとお言ひなら、隨分上げもしませうが、三百兩といふ金は、耳を揃へて出るだら

うね。
甚五　約束をした事もあつては、そりやあ遣るめえものでもねえが、おれが娘に貰ふからは、素性をちやんと糺さにやあ、纏まつた金もやられぬ譯だ。おめえの養女といふ事だが、どこの誰から貰つたか、それから先へ聞かせてくんなせえ。

ト是にてお爪詰り。

お爪　何だか、おつに言ひなさるが、何處から娘を貰はうとこつちの勝手、三つの時さる所から貰つたのだ。素性が知れずば止すがいゝ。こつちも遣らねえだけの事だ。
甚五　いや、素性が知れぬ其の内は、滅多に金は渡されぬ。（ト此の内奥よりおてふ出て）
てふ　もしお爪さん、あの子の素性を話したとて、何も仔細はなからうに、それぢやおまへ、小屋者からでも貰つたのかえ。
お爪　そんなに人を見下げなさんな。あいつの素性は歴とした、何んの某と、武家の名を言ふのは雑作もねえけれど、隠し子だから親の名と、素性は滅多に言はれぬのだ。
李兵　それより、やつぱりぶちまけて、勾引したと言つてしまふがよからう。
お爪　何だ勾引したと。（トきつとなる。大屋びつくりして）

李兵　何さ、こりやあよその話しさ。（ト言ひ紛らかす。お爪腹立の思入）

お爪　素性が知れずば三百兩の、手切れの金が渡されぬと、いふなら無理にくれとは言はぬ。くれる人から三百兩、貰つて娘をやる氣だから、お花を早く渡しなせえ。心中しようが逃げようが、紫紐の親分を證人に立てこつちの内へ、預けて行つた娘のお花、渡されぬとは言はれめえ。

甚五　いや、渡さねえとは言はねえが、一旦娘に貰つたと言出すからは、どこ迄もおれの方へ貰ふからまあさう思つてくんなせえ。

お爪　いや金看板の金箔のと、男を磨くに似合はねえ理屈の分らねえ人だ。かゝり娘を引き上げて、手切れもくれず當人も、兎や角う言つて渡さぬは、こりや體のいゝ勾引しだ。出る所へ出て願ひ立て、取戻すからさう思へ。

甚五　おい婆さん、それぢやあおめえ、訴へる氣か。

お爪　訴へなくてどうするものか。

甚五　それを言はさうばつかりに、こつちも無理を言つたのだ。

お爪　え。

甚五　此の甚五郎を勾引しと、おめえが願つて出たならば、砂利の上にてあのお花の、素性を洗ひお調

べを、なされたことならそつちが勾引し。

お爪　や。

甚五　それが厭なら有體に、娘の素性を言つて聞かせろ。

お爪　さあ、

甚五　但しはおれを勾引しと、お月番へ訴へるか。

お爪　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

甚五　幸ひ爰に大屋さんも來てゐるから、おい婆さん、早く返事を聞かしなせえ。

ト お爪ぢつとこなし、

お爪　いや、願つて出るのは止めにしよう。出る所へ出て爭つても、相手は男の金看板、こつちは弱身な藝者のお袋、どういふ語音の言ひ廻しで、引手になるめえものでもねえ、それより娘が渡されずば今日からこつちの姑様、惡たれ放題惡たれるから、まあその積りで置いたがいゝ。

てふ　え、それぢやあ此の儘此處に居て、

○　厄介になる、

四人　積りだとは。（トあきれる。）

お爪　太く短く三百兩貰つた所が考へりやあ、男と違つて葭町や山谷通ひも出來ねえから、三つぼの賽の喰ひ廻し、つまみの胴でも取つた上、好きな酒の一升宛も、飲んで御託を言ふより外、樂しみのねえ婆さんだ、人間僅か五十年、二十五年は寢て暮す、壽命も延びし六十を越したからにやあとッ百年活きる氣でゐる果報者が、三百兩や四百兩で仕切られるのも氣が利かねえ、何年活きるか知らねえが、三度の飯を据膳で、一升酒を飲ました上、日に一兩宛小遣ひをくれる事なら掛り人で、不承知ながら居てやるから、其の氣で內へ置くがいゝ。さんざ運んだ此の足が、棒になつたも因緣だ。どれ、樂々と腰を延ばし、昔の夢でも見るとしよう。

トのう〱して手枕にて寢轉ぶ。杢兵衞氣のもめるこなし、

杢兵　こりやどうあつても砂利の上へ、引きずり出さずばなるまいわえ。（ト立ちかゝる。）

甚五　いや大家さん、お待ちなさい。どうせ年中居候の絕えぬ稼業のわしの內、一人や二人の喰ひ潰しが、居ても邪魔にはならねえから、まあその儘において下せえ。

てふ　ほんに、子分の男ばかりごろ〱として居る此の內、出替り前に暇くれて、女に困つて居た所、しがない方の伯母さんには、丁度いゝかと思ひます。

◯ 酒は澤山貰つてあるから、樽底ぐらゐは飲ませてやる。
⊙ 誰がこんな惡たれ婆に、据膳などをするものか。
△ 洗ひ流しのおあまりに、ひね澤庵の尻尾でも、
□ 喰はせてやるから幾らでも、居るなら勝手に居やあがれ。（トお爪寢て居ながら目を開き、）
お爪 そんなに粗末にしやあがると、惡たれ放題あばれ散し、うぬ等に始末をさせてやるぞ。
四人 うぬ、その口を。（ト立ちかゝるを留めて、）
甚五 えゝ、おれが承知だ、控へて居ろ。
四人 おい。（トぜひなく控へ、）
お爪 おい、姑御さんが寢るのだから、綺麗な枕を貸してくんな。（トおてふ知らぬ振りをしてゐる。）おや此の姉御は、つんぼださうだ、聞えなけりやあ仕方がねえ。

ト有合ふ煙草盆を枕にする。

てふ とう／＼爰へ寢てしまつたが、どうかしやうはあるまいか。
○ 胴上げにして、汐留の、
◎ 河岸から川へ叩き込み、

△　そこひになつた泥水を、
□　思入れ飲ましてやるとしよう。
甚五　いや、こんな奴でも人一人、まさかにさうもなるめえから、まあそつくりと寝かして置け。
てふ　それでも爰へ寝られては。
甚五　はて、氣狂ひ婆あだ、打ッちやつとけ。（ト四人控へる。杢兵衞お爪の様子を見て、）
杢兵　そのくせ、醉つてもゐぬやうだが、寝るとその儘高いびき、さりとはあきれた婆さんだ。

ト　おてふ皿の肴を出し、

てふ　殘り物ではございますが、あがられるならお肴に、持つて行つて下さいまし。
杢兵　何だ、肴を下さるとか、それは何より有難う、御遠慮なしに貰つてまゐらう。
甚五　えゝ、そんな喰ひ荒しが遣られるものか。
杢兵　はて、骨迄しやぶつて明日の朝、皿は返して進ぜるから、此の儘そつくり貸して下さい。
○　明日になつたら喰物の、
◎　又、掃除に來て、
四人　おくんなせえ。

李兵　掃除は大家の役徳だ。

ト以前の鳴物になり、樽と肴を持ち門口へ出る。此の時花道より與次兵衞、旅なり、お米後より出來り、李兵衞を見て、

與次　もし旦那樣、ちよつと物をお尋ねいたしたうござります。

李兵　はい〳〵、何御用だ。

與次　此の近所に、金看板とおつしやる親分のお内は、どれでござります。

李兵　その内は爰だから、何の用かいらつしやい。

お米　そんなら爰でござりますか。

李兵　どうやら田舍の、

與次　えゝ。

李兵　いゝやなに、煮肴。

ト下手へはひる。與次兵衞お米門口にて、

與次　御免下さりませ。御慮外乍ら、御案内を頼みます。

甚五　誰か表へ來た。（ト子分出て、）

○案内頼むと言つたのは、
與次　金看板の甚五郎親分は、こちらでござりますか。
○金看板はこつちだが、どこからお前來なすつた。
與次　私は上州木崎在から參りました、親分樣が御在宅なら、お目にかゝりたうござります。
○少し待つてゐなせえ。親分にお目にかゝりたいと、四十ばかりの旅の男が、十六七の娘を連れて門口に待つて居ります。（トおてふ氣のもめるこなし。）
てふ　十六七の娘とは、又お前さんが意地ぎたなの、祟りぢやァありませんか。
甚五　馬鹿な事を言やあがれ。まあ〳〵こつちへはひるがいゝ。（ト子分出て、）
○さあ、親分が内に居ますから、内へおはひりなさいまし。
與次　さやうなら、御免なされませ。
ト二人は内へはひる。お米恥かしく下手に居る。おてふもしやといふこなし。
てふ　ても愛らしい娘さん、よもや是では。
甚五　えゝ、そこで何を言つてゐる。（ト與次兵衛おてふを見て、）
與次　おかみさま、其の節は有難うござりました。

てふ　さう言へばおまへさんは、どこやらで見たお人、
與次　へい、先だつて本町で、お惠みを受けました、田舍者でございます。
○　おゝ、違えねえ、あの時の、
てふ　田舍のお人であつたか。
甚五　それぢやあ、みんな知つた人か。（ト與次兵衞、甚五郎を見て思入）
與次　左樣ならあなた樣は、金看板の甚五郎樣でございますか。
甚五　はて、わしが甚五郎でございますが、始めてのおまへさん、どこからお出でなすつた。
與次　私は上州木崎在にて與次兵衞と申す百姓でございますが、是に連れました娘はあなた樣の御厚情で、在所の母に先達て逢ひに戻つて參つた、久藏と申す者の實の妹でござります。
○　はゝあ、そんならその子は、
四人　久藏さんの、
甚五　道理でどこか面差が、似て居るやうだと思つたが、久藏殿の妹が。
與次　さあお米、親方さんやおかみさんに、よく御禮を言はつしやい。（トお米もぢ〳〵と前へ出）
お米　私は米と申す不束者でござります。承ればあなた樣が兄さんの身替りに、牢へおはひり下されし、

故思ひがけなく兄さんが、在所へ戻つて參りまして、所詮逢はれぬ母に逢ひ、臨終の際に一生の別れをいたしてござります。それと申すもあなた樣のみんなお蔭でござりますと、母も大層悦んでをりました。お目にかゝつて私から、宜しうお禮を申上げろと言ひ付かつてござりまする。

與次　又私は母方の緣につながるこれの伯父、御禮旁々久藏の妹を連れて田舍から、お賴り申して參りましたも、不思議な御緣で先達て、此處にお出でのおかみさまが、三兩といふお金を見ず知らずの私へ、途中でお惠み下されし故、巾着切りに拔かれまして失ひました紙入迄、又も無難で戻りました。譯と申すは久藏が繩拔けをした其の時に、數寄屋河岸といふ所で、此の紙入を計らず拾ひ、中にあつた手紙にて、在所の母の大病が知れてあなたへお縋り申し、所詮逢はれぬ親に逢ひ、在所へ歸りし折しかも三兩入りし儘、此の紙入を私へ屆けてくれと申しまして、置いて歸りました故無事で手許へ戻りました。(ト懷より以前の紙入を出す。)是れと申すもこちら樣の御夫婦のお蔭故、あの節お惠み受けました三兩の金、元へ御返濟がいたし度く、それやこれやの御禮を兼ね、參りましてござりまする。

てふ　それは何にしろよかつたが、一旦惠んだお金故、お返しなさるには及びませせぬ。

與次　いえ、どういたしまして此の金を、あなた樣へお返し申しませんでは、こちらの心が濟まぬ。

ト紙入を出し、

どうぞ是れを、そちらへ納めて下さい。

甚五　道理であの時久藏が、そんな話をしました故、心が濟まぬといふならば、まあ納めて置くがいゝ。

てふ　田舍のお人といふものは、義理がたいものでござんす。（ト金を受け取る、子分茶を出し、）

○　さあ、お茶をお上んなせえ。

與次　これは憚り樣、お手で下さりませ、お米坊お茶をよばれさつしやい。

ト兩人茶を呑む、甚五郎こなしあつて、

甚五　僅かな恩義を厚く思ひ、はる〴〵遠い上州から、かうして二人連立つて、禮に出て來て下すつては、却てこつちが痛み入ります。樣子を言はにやあ譯が分らぬが、久藏さんの實の父には、わしの親父がその以前、お世話になつた其の好みで、替りに牢へ五日程、はひつて上げたゞけのことさうして聞けば母御さんは、眼を煩らつて居ると聞いたが、少しは病氣はいゝ方か、かうして江戸へ娘ッ子が、出て來る樣では追々に、快いと見えますな。

お米　はい。（ト愁ひのこなしあつてうつむく。）

てふ　返事を仕兼ね此のお子が、涙ぐんでおいでのは、もしや病氣の母御さんが。

與次　はい、そのお袋が果敢なくなりましてござりますから、是を連れて力なく江戸へ出ましてござります。（ト甚五郎おてふびつくりして、）

甚五　えゝ、それぢやあ此の世を去つたとか。

てふ　でも、飛んだ事でござんしたなあ。（トあきれし思入、合方きつぱりとなり、）

お米　三年此の方眼病にて、田舎ながらもお醫者樣も、何人となくお頼み申し、藥もいろ／＼呑ませましたが、少しも驗が見えませず、其のうち餘病の氣積とやらが、起りましたと申す事で、食事も進まぬ樣になり、其の上折々差し込むので、難儀を致し居りましたが、身持の惡い兄さんが、賭事をして喧嘩をし出し、人をあやめた其の科で、江戸へ引かれて入牢なし、再び此の世へ出られぬと、人の噂を聞く度に段々病ひが重くなり、どうぞ息ある其の中に、一と目なりとも久藏に、逢ひ度いものと明け暮れに、言ひ暮して居りましたれど、逢ふ事ならぬお上の囚人、とても望みは叶はぬと、泣き明かして居りました。それが思はず親方樣のお蔭で戻つて參りまして、母に名殘りをしましたので、苦痛も忘れ病人が嬉し涙にくれましたが、兄が別れて又江戸へ歸つた晩に母さんは、是で望みも叶つたと言ふが此の世の名殘りにて、俄に樣子が變りまして、果敢なくなつてござります。

與次　以前を御存じござりましては、申す迄もござりませぬが、元が武家出に女乍らも到つて氣丈の生れにて、死ぬ前方わしを呼び後の仕末を賴みまして、定業故か苦痛もなく往生いたしてござります。

甚五　やれ〳〵、それは本意ない事だつた。然し逢ひ度く思つて居た久藏に、逢つたがまだしも母御の思ひ出だ、時のはずみと言ひながら、喧嘩の相手が死んだと聞けば、十が九つ久藏殿も斬られる事であらうから、後から冥土へ追ひ付いて、母御に詫をするであらう。

てふ　それではまだ、二七日と經たない筈でござんすが、江戸へはる〴〵お出向きは、何んぞさしたる御用でもあつての事でござんすか。

與次　それに付いて親方樣へ、お願ひがござりまして、不幸の內も取散し、上りましてござります。

甚五　なに、わしへ願ひがある事とは。

ト與次兵衞懷中より手紙を出し、

與次　死ぬと知つてか病人が、是なる娘に筆を取らせ、親分樣へ賴み狀を書かせましたと申す事、御迷惑でも一通り、お讀みなされて下さりませ。（ト手紙を出す。）

てふ　そんならそれを、母御さんが。

お米　にじみ書き故親分樣、お讀みにくうはございませうが、お判じなされて下さりませ。

ト甚五郎是にて開き見る。

甚五　これおてふ、灯を付けてくれ。

てふ　はい。

ト燭臺へ蠟燭を付けて出す。此の内子分四人奥へはひり、行燈を灯し出て眞中へおく事。派手な合方になり、

甚五　「未だ御目もじ致さず候へ共、忰久藏より承り、海山にたとへ難き厚き御恩の程は、筆に盡し兼ね候儘、借筆を以て御禮申上候、扨とや御情のお蔭にて、冥路の障りと存じ居り候忰に一度逢はれ候上は、病中の望みも叶ひ、もはや冥土より迎ひの參るを待つのみに御座候へ共、只不便に存じ候は久藏の妹事外に便る可き身寄りとてもなく、遠緣の伯父與次兵衛と申す者、深切に致し呉れ候故、此の仁へ何事も賴み置き候通り、何分無職稼業の若者多き土地柄と申し、年頃の娘と見受け候へば、女郎に賣れと勸むる者多く、親無き後は如何なる惡者の巧みにかゝり、身を沈めんやも計り難く厚き御恩に預かりし上、又御無理を願ひ上げ候うて、心なき者と御腹立も顧ず候へ共、久藏事も所詮命の無き者と存じ候故、妹事は御勝手許のお水仕ともな

し下され、末々は細くも富田の位牌所の相立ち候樣、御計らひ下され候へば、草葉の陰にて安堵いたし、又いつの世にか御恩報じも致す可くと存じ居り候、申殘したき事はかず〳〵御座候へ共眼病の上氣積と申す病ひにかゝり、今晩にも知れぬ命に胸迫り、願事のみ書き殘しまゐらせ候勿々」

ト讀み終ろ。是にて皆々愁ひの思入よろしく。

てふ　聞けば聞く程哀れな手紙、是で樣子が分かりし上は、此の子は私が引受けて、どこがどこ迄世話をして遣り度く思つて居りますから、お前さんもその積りで挨拶をして上げて下さんせ。

甚五　手前がさういふ心なら、大きに安心だ。こんな手紙が來ねえでも、男と見かけ頼まれゝば、後へは引かぬおれの氣性、必ず惡くはしねえから、附いてござつた伯父御とやらも、心配せずに居て下せえ。

○　姉御を始め親分が、

◎　かう受け合つたら大丈夫。

△　まあゆつくりと足手を延ばし、

□　伯父御も泊つて行きなせえ。

與次　そんならお聞き濟み相成りましてござりますか。

甚五　おれの親父がその以前、お世話になつたそのお人の、忘れ形身のことだもの。聞濟まねえでどうするものか。
與次　やれ〳〵、安心しました。これお米、お禮を申せ。
お米　何と御禮を申しませうか、嘸お母さんも冥土から悦んで居りませう。有難うございます。
てふ　まあ何にしろ二人とも、嘸草臥れたでござんせうから、奧へ行つてお休みなさい。

ト是にて與次兵衛、風呂敷より誂への厨子を出し、

與次　附きましては、親分樣にも以前の事は御存じとおつしやりますれば、改めて申しますにも及びませぬが、これの親父と申しますは元高崎の藩中にて、富田久之進といふ賄ひ役、それ相應に暮してゐたも、盈れば缺くる世の習ひにて同藩中の嫉みを受け、浪人の身となりまして間もなく親の久之進は、病死して此の世を去り、後に殘つた惣領のあの久藏は身持ちが惡く、博奕で其の身を果す程、箸にも棒にもかゝりませぬ故、手當り次第に親の物を持ち出しましては賣り拂ひ、母が死んでも後々へ殘る筐もござりませぬが、たゞ先祖より傳はりし本尊ばかりは久藏も、賣り殘してござりましたを、取り出し見れば眞黑に燻つてはをりますが、黃金だとか申す事、此の觀世音をおまへ樣へ、上げてくれとの賴み故、娘に添へて母親の形身の印に差上げます、お邪魔乍ら

も親分様、お納めなされて下さりませ。(ト出す。甚五郎思入あつて。)

甚五　正観世音は日頃から信仰をして居るけれど、黄金仏の本尊では、金目な物故此の儘に、貰ふ訳にもなりませぬが、娘に添へた形見とあれば、此の子が成人しますまで、まあ預かつて置きませう。

トおてふ聞いて思入あつて、

てふ　そんなら此の子の親御といふは、元高崎の藩中にて、富田久之進様でござんしたか。

甚五　おてふ、手前も知つてゐるか。

てふ　さあ、長年音信不通にて、是れ迄便りも聞かぬ故、ついぞ噂もしませぬが、此の子の母御の里方は、しかも高崎本町で、木谷與兵衛と名の高い、穀屋稼業でござんせうが。

お米　え〻、どうしてそれを、おまへ様が、

てふ　知らいでならうか私の母は、お前の母御の姪御にて、子供の折に此の江戸へ、貰はれて來たその先は、爰から近い木挽町の松屋といひし人入れ稼業、家の娘も同様に養育受けて聟を取り、私を産んで成人させ、此の家の嫁になりし後詳しく話して聞かせた故、それで覺えてゐる身の素性。

甚五　さうして見れば此の子とは、脱れぬ仲の從姉妹同士。

與次　わしは木谷の別家にて、與兵衛の甥の與次兵衛。

お米　それで樣子が分りました。話しに聞いた母さんの里といふは血筋が絕え、今は他人の代となりて、緣者といふは伯父さんの、與次兵衞さんの外はないが、江戸に一人の姪があると、おつしやつたのはあなたであつたか。

てふ　盡きぬ緣とて今日爰で、名乘り合ふのも皆導き。

○　どこにどうして血筋があるか、

□　知れぬものとは言ひながら、

△　かうして見るとお互ひに、

□　仲よくするも何ぞの緣。

お米　さうした緣でござりますから、どうぞ此末私の、お世話をお賴み申しまする。

てふ　血筋と知らぬその內さへ、世話をしようと思つた私、實の同胞同樣に、互ひに力になりませう。

甚五　それでなほ〳〵おれも安心。與次兵衞さんにも安心して、此の子を預けて歸んなせえ。

與次　いやもう、かやうに御緣と知れまして、大安心をいたしました。

ト此の時お爪起上り、目をこすり伸びをして、

お爪　いゝ心持に寐て居るものを、耳の端でがや〳〵と喧しくッて寐られねえ。どれ、湯へはひつて來

ようか。

○　はひつて來るにやあ及ばぬから、

◎　湯灌でもしてぶく／＼と、

△　風呂で往生した方が、

□　諸人のためになるだらう。

お爪　えゝ、延喜でもねえ、止してくれ。おい姉さん、湯錢と糠の殘りをくんな。

てふ　ても、づう／＼しい。

甚五　あゝこれ、言ふ通りに出してやれ。（ト是にて紙にひねつて出して、）

てふ　さあ、持つてお出で。

お爪　持つて行かなくツてどうするものか。今日から大事なお袋さんだあ。

ト門口へ出かける、子分奥より鹽笊を持つて出で、お爪にかける、

えゝ、何をしやあがる。（ト拂ひのける。）

○　をとゝひ來やあがれ。

お爪　えゝ、けじ／＼ぢやアあるめえし。（ト悠々と花道へ行き、氣をかへ、）思ひがけない。寐起きのせる

か、寒くなつた。（ト足早に花道へはひる。）

與次　さうして、今のお母さんは、どちらのお方でござりまする。

甚五　是には譯があつて、わざと惡たれて居やあがるのだ。

てふ　まあ何にしろ、ゆつくり話しがしたうござんすから、此の子と一緒に伯父さんも、奥へ行つてお
くんなさい。

與次　左樣なればお詞に從ひ、奥へ參るでござりませう。

お米　わたしやあ安心しましたから、がつかりとくたびれました。

甚五　おゝ尤もだ。その筈だ。奥へ行つて休め。

てふ　そんなら奥で、

與次　皆さん、御免下さりませ。

ト　おてふ先に與次兵衛お米奥へはひる、甚五郎こなしあつて、

甚五　そりやさうと十吉は、さつきから見えねえが、何處へ行つたか。

〇　十吉兄いは愛宕下迄、行つて來ると言ひましたが、

◎　又神明の矢場へでも、引かゝつて居ると見える。

△ いまだに歸つて來ません。
□ 用なら搜して連れて來ませう。
甚五 いや、搜すにも及ばぬ。喧嘩の矢先へあいつから、事を起しちやあならねえから、それで出先を聞いたのだ。
○ 何にしろ久保町から、
◎ 今以て沙汰のねえのは、
△ こいつァ、矢張り怖氣が付いたか。
□ 人のはひるのを待つのだらう。
甚五 いや、日も暮れたからそのうちに、沙汰があるだらう。ちつとそこらを片附けて置け。
四人 あい／＼。（ト邊りを片附ける。ばた／＼と花道より紫紐の子分出來り）
子分 久保町から參りましたが、甚五郎親分は御內でござりますか。（ト門口の外から言ひ入れる。）
甚五 甚五郎は內に居る。何用で來なすつた。
子分 お日延べを願ひました今日が五日の日切れ故、御苦勞乍ら久保町の原迄、お出向き下さるやうと、大五郎も出向きましてお待ち申して居ります。

○　なに、久保町が待つてゐる。

甚五　これ、靜かにしろ。（ト制してこちらへ來て。）使の趣き承知したと、大五郎殿へさう言つて下せえ。

子分　どうか、お早うお出で下さりませ。（ト引かへしてはひる。）

○　それぢやあ、みんな呼び集め、

◎　人數を揃へて久保町まで、

△　親分一緒に、

四人　繰り出しませう、

甚五　いや、大勢で押して行き、喧嘩で世間を騷がせちやあ、お上へ對しておれが濟まねえ。目指す相手は一人と一人、さア立つ事はならねえ。

○　それでも向ふが大勢なら、

◎　こつちも殘らず、

四人　行かにやあならねえ。

甚五　はて、たとひ何人居やうとも、取るに足らねえ木ッ葉野郎、此方は一人で澤山だ。

四人　それだと言つて。

甚五　えゝ、おれの言ふ事が聞かれねえのか。
四人　おゝい。（ト是非なく下に居ろ。此の時又ばた〱にて花道より子分十吉出て、）
十吉　おゝ親分、内に居なすつたか。もう勘辨が出來ねえから、わつちを先へやつて下せえ。
甚五　見りやあ眉間へ疵を受け、扨は手前が魁けしたな。
十吉　向うの沙汰のある迄は、決して手出しをするなといふ親分の言付け故、こつちで喧嘩は賣らねえが、今久保町を通りかゝり、紫紐の子分の奴等に出合つて喧嘩をしかけられ、二言三言言ふ中に、向うで投げた石がわつちの額へ當つて此の通り、もう勘辨が出來ねえ。沙汰は無くとも十吉を、喧嘩にやつてくんなせえ。
〇　さういふ譯なら丁度いゝ、
◎　みんなも一緒に、
四人　出かけよう。
甚五　えゝ、又しても出しや張るか、手めえ達は引込んで居ろ。
十吉　さうして親分、向ふからいまだに沙汰はありませんか。
甚五　今向うから久保町の原迄おれに出張つてくれと、子分の者が迎ひに來た。丁度手前の仕返しも、

おれが一緒にしてやるから、手前達は内に居ろ。

十吉　それぢやあ、どうか十吉も、一緒に連れておくんなせえ。

甚五　いや、おれが死んだと聞いたなら、手前を初め出るもいゝが、喧嘩の相手は一人と一人、勝負が附く迄内に居て、必ず出ちやあならねえぞ。

十吉　いや〳〵、どうかわつちばかりは、一緒に連れておくんなせえ。

甚五　えゝ、手前が後へ殘らにやあ、音頭を取らせる者がねえ。まあ騷がずと内に居ろ。

ト奧よりおてふ、脇差を持ち、派手な着付を持ち出で、

てふ　なにもそんなにみんなして、騷ぐには及ばぬから、まあ靜かにして居ておくれ。

十吉　それぢやあ姉御も、

皆々　聞きなすつたか。

てふ　樣子は奧で聞きました。男を磨く稼業では、かういふ事はありうち故、私は疾うから覺悟してるから、此の脇差で潔く、勝負を附けてお出でなさい。（ト甚五郎受取り、）

甚五　流石は女房よく言つた。血の氣の多い若者が、後から來ちやあならねえから、お前がさとして留めてくれ。

てふ　後は私が引き受けますが、門出を祝つて杯の支度をするから待つて下さい。

甚五　それぢやあ早く持つて來い。

てふ　あい〳〵。（ト奥へはひる。十吉はもぢ〳〵こなし、）

十吉　もし親分、どうぞ今日から十吉を、親分子分の縁を切り、一本立ちにして下せえ。

甚五　一本立ちになつた上、向ふへ振り込み意趣返しを、する氣であらうがそりやあならねえ、おれが命を取られたら、いやでも手前がみんなを連れて、骨を拾ひに行かにやあならねえ。それともそれが嫌なので、一本立ちになりてえのか。

十吉　何でそんな卑怯な事を、

甚五　なけりやあ、内で待つて居ろ。

十吉　えゝ、どうでも我慢をしにやあならねえか。

○　腕がぶん〳〵、

四人　唸つてならねえ。

ト甚五郎着物を着換へ、身支度して居る。奥よりおてふ水杯の道具を持ち出る。お米、與次兵衛付いて出來り、前へ出て、

與次　承れば親分さんには、喧嘩にお出でなさるとやら、次第によつてはお命にも、かゝはる事でござりませうが、ならう事ならお見合せなさる譯には行きますまいか。

お米　折角はる〴〵田舍から、お便り申した甲斐もなく、若しもの事でもござりましては、又も途方に暮れまする。

甚五　いや〳〵、決して案じなさんな。かういふ稼業をして居れば、喧嘩は常に半生業、是を恐れて居た日にやあ、おれの顏にかゝはるから、たとひ命を捨てればとて、五分でも後へは退かれねえ。

てふ　又内の人が萬が一、命を取られて死ねばとて、私や子分が大勢居れば、お前が途方に暮れる樣な苦勞は決してさせないから、まあ機嫌よくしてゐておくれ。

十吉　それぢやあ親分、お前さんの詞に從ひ、わつちらは內へ殘つて居りますぜ。

○　その替りには杯を、

◎　祝つていつて、

四人　おくんなせえ。

甚五　十吉始めみんな共、水杯をして行くから、おれの詞を守つてくれ。

てふ　是が名殘りに。（トほろりとこなし。）

甚九　や。（ト告める、おてふ氣が替へて、）

てふ　いえなに、名の殘る樣立派におやんなさい。

ト顏をそむけ杯を出す。甚五郎皆々と水杯をする事あつて、此の時ばた〳〵にて花道より、以前の杢兵衛兩手に下駄を持ち、素足にて走り出て、直に門口へ出て下駄にて格子を叩き、

杢兵　早く〳〵、爰を開けた〳〵。

ト十吉開ける。杢兵衛内へ轉け込む。

十吉　え、びつくりした。大家さんぢやあねえか、

四人　おゝ大家だ〳〵。（ト引き起す。）

杢兵　大家だ〳〵。あわてなさんな。

十吉　こつちは少しもあわてないが、何でこなたはあわてるのだ。

杢兵　息が切れて物が言へねえ。水を一ぱい飲ませてくれ。

十吉　おい〳〵、丁度爰に。（ト水を飲ませる事よろしく、）

杢兵　今久保町迄川があつて、行つた歸りに原を通ると、紫紐の子分の者が何百人だか數知れず、白鉢卷に縄だすきで、見ても身の毛がよだつ樣な、竹槍を持寄つて集まり、今にも爰へ金看板がやつ

て來たらば突殺すと、手ぐすね引いて居る樣子、うつかりとして行かしやつたら、横ツ腹へ穴が開くから、宙を飛んで知らせに來た。やれ恐ろしや〳〵。(ト汗を拭ひふるへ居る。)

與次　そんなら相手は大勢で、手ぐすね引いて居りましたとか。

お米　さう聞いては尙もつて、案じられてなりませぬ。

甚五　紫紐も此の江戸で、男を磨く親分株、そんな卑怯はあるめえと思つて居たが大勢の、子分を頼みにするといふは、さりとはけちな根性骨だ。

十吉　向ふが子分を頼みにして、支度をすりやあこつちも又、

○　是から子分の人數を集め、

◎　双方原へ押し出して、

△　たとひ近所を騒がすとも、

□　立派に喧嘩を、

五人　しにやあならぬ。

甚五　いや、向ふが何人居やうとも、相手は一人の此の喧嘩、子分を大勢引き連れて、近所の者を騒がせては、お上へ對しておれが濟まねえ。十吉初め一人でも、出ることはならねえぞ。

ト門口の方へ行かうとするを、杢兵衛留めて、

杢兵　これ〳〵親分待たつせえ。こなたが死んでは杢兵衛の才槌頭が凹むから、短慮を出さず此の喧嘩は、止めにしてくんなせえ。

甚五　いや、何百人居やうとも、恐れぬ氣性の金看板、留めずとやつておくんなせえ。

杢兵　其處を是非とも、留めねばならぬ。

甚五　はてまあ内に。（ト門口の外へ出て杢兵衛を内へ突き入れ、）居て下せえ。（ト外より門口を立切る。）

十吉四人　こりやどうあつても、（ト立ちかゝる。此の内奥よりおてふ鎌と石を持ち出で、）

てふ　あれ、聞き分けのない。（ト皆々を距て門口を開け、）ちよつと待つて下さんせ。

甚五　何ぞ用か。

てふ　清めて上げます。

ト後から切火を打つ。

甚五　どれ、一勝負。

ト宜しく思入。舞臺の皆々は門口の外へ出ようとするを、おてふ門口を閉めて出さぬこなし。誂への唄になり、甚五郎は悠々と花道へはひる。是と一緒に此の道具廻る。

（久保町の原の場）――本舞臺一面の平舞臺、向ふ堀端の書割、上手に六尺程出しかけの竹矢來、幸橋御門普請小屋、と記せし杭、下手の方に虎の門見ゆる事、總て久保町の原の體。運平、助藏、大五郎の三人、房次郎お花を眞中にして立ちかゝりゐる見得、水の音にて道具納まる。

運平　稻荷祭りの晩だけあつて、穴に隱れた野狐に、等しい奴も尻尾を捕まり、引きずり出されていゝ態だ。然し飽迄逃げおほせた、お花は勿論野郎迄、よく引立てゝ來てくれた。

助藏　そこが綽名が目下りでも、目角の强いわつちだから、お花が宵に堺屋から、此の房次郎を呼び出して、眞暗闇の新道で、ひそ〳〵話しをしてゐるを、ちらりと見かけ後を付け、先づ野郎から引擔いで、旦那の前へ連れようと仲間の者と言ひ合せ、爰迄背負つて來ましたを、お花が後を慕つて來て、二人一緒になりましたは、いゝ都合でござんせう。

大五　そりやあ大きに御苦勞だつた。後は運平樣のお心任せになされまして、二人に緣を切らせた上、お花に得心おさせなすつて、首尾よくお手にお入れなせえ。

運平　所がなか〳〵しぶとい奴、身共の手際に行かぬから、助藏貴樣も手傳つて、二人の緣を切らせてくれん。

助藏　そりやあわつちが憎まれ役に、うんと言はせて見せますから、首尾よく行つたら運平樣、しつか

り御禮をなさるだらうね。

運平　言ふ迄もねえその禮は、後で十分渡すから、お花に得心させてくれ。

助藏　先づかう根〆を極めておいて、是から談判しにやあならねえ。（ト房次郎の首筋を取り引出し）やい房次郎、長へ短へ言ふにやあ及ばぬ、お花をすつぱり思ひ切り、運平樣へ差上げると、綺麗に此處で言つてしまへ。

房次　いえ、そればかりは私の口から、どうも言はれませぬ。

助藏　なんで、手前が言はれぬとは。

房次　さあ、此の世に於て添はれずば、死んであの世で添はうと迄、約束をした二人が仲、今更となり私から思ひ切れとは言はれませぬ。

助藏　えゝのめ〳〵と、惚けやあがるな。（ト平手で横面を毆る。）

お花　あゝもし、そんなに若旦那を、手荒くして下さいますな。慾に目がくれおつかさんが、荒川さんの御詞に、從ひましたか知りませんが、たとひ死んでも若旦那と切れる譯には參りません。いつそ私を若旦那の替りに殺して下さいまし。

助藏　えゝ、又しても房次郎のかばひ立てをしやあがるな。おれも一旦運平旦那に、男と見かけ頼まれ

て、今更後へ引けねえから、別れる事が出來なけりやあ、望みの通り殺してやるぞ。

ト是を聞き運平、氣の揉めるこなしあつて、

運平　これ〳〵助藏、先づ待ちやれ。殺してしまふも不便だから、身共がお花を悟して見よう。（トこちらへ來てお花を捕へ）こりやお花、これへ來い。はて、何も恐れる事はない。先づ〳〵あれへ來るがよい。（ト嫌がるお花を、無理に上手へ連れて來て）さて〳〵手前は片意地な、料簡違ひな者ぢやぞよ。命を捨てゝも切れる事が出來ぬといふ房次郎には、歴といたした女房もあり、子迄あると申す事ぢや。それに引きかへ此の身共は、獨身者にて姑もなく、當時馬術の指南では一二と呼ばるゝ大先生、その御新造と仰がれゝば、素町人たる房次郎の妾になつて氣を揉むより、遙にまさる身の出世ぢや。（ト優しく言ふ。）

お花　いや、折角の思召しでも、かぼそい體であなたの樣な、肥つたお方の自由になり、此の身をお任せ申しますのは、死んでも嫌でござります。

運平　やあ。

お花　何ぞといふと二言目には大坪流の達人の、大先生のとおつしやれど、お馬の稽古で勘がよい、駒を靜める手管とは、譯の違つた忍び駒、三の絃より二世かけて、結んだ緣は一生涯、切れる心は

ござりませんから、いつか調子も替らうかと、お思ひなされず三味線の、根締を聞いて運平さま何にも言つて下さいますな。(トずつけり言ふ、運平あきれしこなし。大五郎煙草を喫み乍ら、)

大五　これ助藏、音締の極つた挨拶に、運平樣も指を喰へ、引き込む譯にも行くめえから、どうか撥を附けて上げろ。

助藏　それと言ふのも爰に居る、野郎が未練を吐かすから、女の方でも義理詰で運平樣へかれこれと、愛想盡かしを言ふのであらう。野郎め、早くあのお花と緣を切ると言つてしまはねえと、お花の前でわれが命を取つてやるぞ。

房次　おゝ、殺すなら殺して下さい。紫紐の親分と人に言はれる身を持つて、頼まれたとは言ひながら非道な事をし、何科もなき房次郎を、戀の遺恨で殺したと此の後人に言はれたら、立派な男になられませう。

助藏　えゝ、そのいけ口を、かう〳〵、生ぎゝな事を吐かしやあがるな。

ト握り拳にて、房次郎をくらはす。お花是を見て、

お花　さあ、打つなら私を打ちなさんせ。(ト房次郎の傍へ行かうとする。)

運平　どつこい、おめえは打たされぬ。野郎の苦痛が助けたくば、うんと言つて返事をしやれ。

房次　これ〳〵お花、案じるな。元より女房や子のある身で、言交したる二人が仲、こんな憂目は愚かな事、たとひ切られて死ぬとても、未來は一蓮托生だから、どちらが先へ行かうとも、三途の川で待つて居るぞ。

お花　嬉しうござんす若旦那、心中をして死ぬ所を、今日迄生きたとあきらめれば、少しも思ひは殘りません。とてもかうなる上からは、一緒に死んで下さんせ。

房次　おゝ、とても死ぬなら潔よく、一緒に殺して貰はうわえ。

運平　えゝ、舌たるい其の言草、二人一緒に殺したら、そつちの勝手はよからうが、さううまくは、まあならねえ。

助藏　お花が義理を立て通す、野郎を先へぶち殺し、それから得心させましたら、旦那もその氣でお出でなせえ。

お花　どちらが先へ死なうとも、未來は一緒で、ござりますぞえ。

房次　おゝ、三途の川で待ち合すから、其の氣で後から來るがよい。

大五　いや、かうも互ひに惚れ合つて、放れ難ねえものなるか、聞くのも何だか癪に障る。

運平　その息の根を留めるやうに、先づ野郎からやッつけろ。

助藏 それぢやあ、みんな手傳つてくれ。
子分 どれ、責め殺して、
皆々 やらうかえ。（ト立ちかゝる。此の時バタバタにて花道より、子分一人出來り、）
○ 親分、油斷なさいますな。迎ひにやつた金看板が、一人で出かけてめえりました。
大五 土橋へ見張りの若い者、よく早速に知らせてくれた。
運平 然らば、定めて向ふでも、子分の者が大勢で、
助藏 身支度をして獲物を持ち、後から押して來るだらうな。
○ いえ、子分も何も連れませんで、一人で悠々とやつて來ました。
大五 なに、一人で爰へ出て來たとか。
子分 それぢやあ向ふで、扱ひでも、
○ 入れる積りで、
皆々 來やあしねえか。
運平 喧嘩になれば此の二人を、爰へ置くのも何とやら。
助藏 向ふの樣子聞く迄は、見せ物小屋へ連れて行き、棒縛りにでもして置かう。

いでおけ。
大五　詫びて來たなら甚五郎に、緣を切らせて運平樣へ、取り持たせるといふ手もあれば、命を暫時つ
運平　いかさま、それもよい分別。
助藏　さあ、きり〳〵とうしあがれ。
房次　いや、それよりは二人とも、
お花　早く殺して下さんせ。
運平　えゝ、きり〳〵と、
運平
助藏　うしやあがれ。
ト運平、助藏にてお花房次郎を引立て、上手へはひる。後に子分皆々前へ出て、
一　然し親方、相手は名に負ふ素早い金看板、
二　油斷をさせて、近寄つて、どんな手段があるかも知れず。
三　手盛りを喰はねえ用心に、わつち等四人が出迎へて、
四　じたばた手出しの出來ぬやう、おつとり卷いて連れて來よう。
大五　高の知れたる金看板、そんなに恐れる事もねえが、迎ひに行くなら行つて來い。

一　それぢやあ、爰へ、
四人　連れて來ませう。
大五　おれが詞をかける迄は、手出しをしちやあならねえぞ。
一　合點で、
四人　ごぎんす。（ト子分四人竹槍を持ち、花道へはひる。後に大五郎思入あつて）
大五　喧嘩に枝葉が咲く時は、世間へ濟まぬと思ふから、防ぎのための手配りも、向ふが一人で出て來ちやあ、支度をしたゞけ餘計だから、手前達は小蔭へ行き、合圖をする迄隱れて居ろ。
子分　それでも、親分一人では、
大五　いや、向ふが一人で出て來りやあ、こつちも一人で居にやあらねえ。
子分　それぢやあ親分、待つて居ます。
大五　いゝから小蔭へ隱れてゐろ。
子分　おゝいゝ。（ト上手矢來の蔭へはひる。）
大五　こつちの樣子も聞いたらうに、一人で悠々出て來るとは、よつほど肚胸のいゝ奴だ。
ト床几へかけ煙草を呑み居る。此の時尺八の入りし唄になり、花道より甚五郎出て來る。前後を以前

の子分四人、竹槍を持ち圍つて出て、甚五郎花道へ留る。大五郎を見て、

そこへ來たのは新橋の、金看板と見受けたが、約束違へず甚五郎どん、よく〳〵出向いて來てくれた。

甚五　沙汰のあるのを日暮から、待つのは長い春の夜に軒端の雨かばら〳〵と、取卷く迎ひは大仰だが怖氣付いて臆病の防ぎとあらば見のがして、張り殺さずに通らうか。

大五　それは子分の馳走振り、血の氣の多い若者が、無法な事でもする時は、仲間の名折れにならうかと、それを防ぎのためばかり、前後左右は取り卷いても、おれが指圖をせぬ內は、決して手出しはしねえから、びく〳〵せずと爰へ來なせえ。

甚五　其の防ぎならこつちでも、子分の奴等に言ひ付けて、竹槍位は持たせるが、笹に囀る小雀の、騷ぎ立つのも一聲の鶴が靜めて大空へ、翼を伸して出て來たが、吹けば飛び去る蚊とんぼの、しめしが一つ出來ねえとは、久保町きつての名の高い、大親分は違つたものだ。

一　何、おら達を、

四人　蚊とんぼだと。

大五　あこれ、何を言ふとも籠の鳥、其の儘爰へ連れて來やれ。

甚五　どれ、兎も角もそこへ行き、喧嘩の勝負を付けようか。

ト矢張り右の唄にて、甚五郎舞臺へ來り、子分四人も付いて來て、矢張り取り卷いてゐる。

大五　手前達は控へてゐろ。

四人　おい。（ト後へ下る。誂への合方になり、大五郎床几を離れる。）

大五　勝負を付ける前方に、言つて置かにやあならねえのは、こなたが牢から歸つて來て、知らせた時に折惡しく、病氣で居た故五日程、日延べを賴み引張つたが、臆病風に誘はれて、まさか日延べもしねえから、まあさう思つてくんなせえ。

甚五　そりやあこつちも同じ事、よんどころなく賴まれて、人の替りに牢へ行く矢先へかゝつて五日程日延べを賴んだ事もあれば、待たせた詫は五分と五分、一寸先きは闇の世に、敷居をまたぎやあ七人の敵を求める男だから、どんな遺恨で命迄やり取りするか知れねえが、奧齒へ物の挾つた仕打ちで喧嘩を賣られちやあ、こつちも胸に落ちぬわけ、何が遺恨で甚五郎にこんたは喧嘩をしかけたか、それから先へ聞かせなせえ。（ト爰へ以前の助藏上手より出て、）

助藏　おゝ、その譯は親分に、代つておれが聞かせよう。

甚五　誰かと思やあ助藏どん、そんならお前が知つて居るか。

助藏　おゝ此のおれが知つてゐるが、遺恨の元は此の正月、お濱の衆と汐留の若い衆との喧嘩の時、日本橋から芝迄の諸組の組元顏役が、仲へはひつて笑ひになり、しかも目黑の橋和屋で、仲直りをした其折に、こつちでさゝねえ杯に、そつちで猪口をさしたのは、小癪に障る仕方だが、其の場で事を起しては、仲人衆へ濟まねえと、流石大きな親分だけ、蟲を怺へて歸つたも、折があつたらどこぞでか、喧嘩をしようといふ矢先きへ、子分の者が此の間、途中でぶたれて歸つたを幸ひにして出て行つた、門で樣子を聞いて見りやあ、日頃懇意で出入りする、馬術の師匠が執心の、藝者と逃げた房次郎の、尻を押さうとするのだと知れ、重なる遺恨に親方が爰で命のやり取りを、しなさる心になつたのだ。

甚五　それで樣子が分つたが、子分を打つた意趣返しに、おれの眉間を此の間、打つて別れた紫紐、そんな色氣の出入迄、絡んで持ち込む綾の糸、解いた所が無駄な事、外の色にやあ染まらぬが、その無駄よりはもう一倍、無駄を知らねえ色事で、氣を揉む馬の先生の、尻馬に乘つた彌次馬は、刎ねた仲間の向ふ見ず、お花が嫌つて逃げ歩くも、無理でねえから惚れ合つた、息子と一緒にしてやらうと、おれが萬事を引き受けて世話をするのを橫合から、邪魔に入つて杯の、遺恨の喧嘩をしかけるは、筋違ひだからよしなせえ。

大五　いや、その筋違へは元より承知、善であらうが悪であらうが、男と見かけて頼まれりやあ、後へは引かぬ大五郎、手前が萬事を引き受けて、一緒にしようといふ二人も、おれの手許へ捲き上げて、否應なしに手を切らせ、運平さんへ取持たうと今も強談最中だ。

ト甚五郎びつくりこなしあつて、

甚五　そんならおれが堺屋へ送り込んだる若旦那と、脇へ預けたお花迄。

助藏　おゝ、おれが今方引浚ひ、夜は空店同様な見世物小屋へ連れて行き、運平さんと三つがなわで女に好かれる野郎でも、力づくでは叶はぬか、めそ〱泣いて苦しがり、お花を綺麗に上げませうと、もう今頃は吐かしたらう。

甚五　それを聞いちやあもう是迄、横紙破りの紫紐、手前を生かしちやあおかれねえ。

大五　そりやあ言はずと知れた事、爰迄出向いて來たからは、元より命は捨てたもの、手前を殺すかおれが死ぬか、二つ一つのやりとりだ。

助藏　親分が手をおろさずとも、子分が寄つてたゞ一と突、田楽刺しにしにやあならねえ。

甚五　へゝ、木偶人形も同様な足腰のねえ手前達に、突かれるものなら突いて見ろ、まご〱すると睨み殺すぞ。

皆々　うぬ、さうぬかしやあ。
甚五　どうしたと、
皆々　どうもしねえ。
　　トびく／＼ふるへて後へ下る。助藏此の體を見て、
助藏　さあ、みんな出て行つてやッつけろ。（ト呼ぶ。）
大勢　どれ一突きに。（ト立ちかゝる。）
大五　これ、手前達は控へて居ろ。
大勢　おゝい。（ト後へ下る。）
助藏　親分、何んで留めるのだ。
大五　相手が一人で來たからは、こつちも一人で立合はにやあ、紫紐の名がすたる。みんなは後で見物しろ。
皆々　所をみんなが。
大五　えゝ、見ッともねえ。控へて居ろ。（トきつと言ふ。）さあ甚五郎。丁度今夜は二の午に、金藏立てる身上の金看板を投げ出すか、稻荷の宮の紫に戸帳を引いて取られるか、勝負は時の運次第。

甚五　おゝ、太鼓の廻りへ寄つて來る、餓鬼に等しい野郎を退け、われと二人で相打ちとは、鳥居の數も越した仲間、音色の冴える打方は、腕に覺えの撥一本、さらば調子を試さうか。

大五　さあ甚五郎、われから打てゝ

甚五　いゝや、われから打つて見ろ。

大五　双方一緒に、

兩人　打ちならさうか。（ト兩人刀を拔く、是より鳴物になり、）

助藏　それ、やッつけろ。

子分　合點だ。（ト大五郎受太刀になる。）

大五　おれの勝負が付かねえ內は、手出しをしちやあならねえぞ。

ト助藏始め大勢猶豫をする。甚五郎是を聞き感心のこなし。

甚五　その遠慮には及ばねえ。

大五　何を。

ト又立廻り、とゞ双方鍔ぜり合になり、よき程に花道より久藏、縞物の單衣物草履にて、つか〳〵と、舞臺へ來て留め、

久藏　双方共に、待つて下せえ。

大五　やあ、邪魔な所へ若い者。

甚五　留めずとそつちへのいて居ろ。

久藏　所を是非共、留めにやあならぬ、

大五　え、退けといふに。

ト鳴物になり、兩人立廻るを、久藏後の長床几を持ち、是を引分け白刃を押へ、

久藏　兩親分とも此のわしを、よも見忘れはなさりますまい。（トきつと言ふ。大五郎月明りにて久藏を見て

大五　や、さういふお前は數寄屋河岸で、いつぞや出合つた囚人だ。

甚五　思ひがけねえ木崎の久藏、どうして爰へ出て來たか。

久藏　まあその譯を申しますから、暫く待つて下せえまし。（ト思入あつて、）親の光りは七光り、お上はお慈悲といふ事を、知つて居乍ら悪事を働き、暗へ所へ行きましたも親に逢ひたく繩抜けなし、一旦逃げた重罪も、再び自訴してかけ込んだ親孝心の其の廉で、罪を減らして下さると、お上に御慈悲のある所へ、殺した相手の身寄りから、命乞ひをしてくれたので、思ひがけなく赦免になり、明るい體になりました。元はと言へば此の間紫紐の親分が、繩脱けをする其の時に切りほ

どきをして下すつたを、金看板の親分がわしに替つて入牢しておくんなすつたお陰故、何は差し置きお二人へ、禮に出ようと暮れ合ひに、お尋ね申して様子を聞き、どつちに怪我があらうとも、受けた恩義の兩親分、こいつあ命を投げ出しても、留めにやあならぬと闇雲に、駈け付けました此の久藏、どうか預けて下せえと言ふのは立派な親分株、どうしてどうしてわしの様な、見るかげもねえ遊び人に、預ける譯にやあ行きますめえが、拔いた白刃の納まりは、わしを殺してお二人とも、笑つて別れて下せえまし。

ト思入にて言ふ、甚五郎、大五郎扱はと思入あつて、

大五　一旦受けた恩義を思ひ、其の身の命を投げ出しても、爰を無難に納めてえとは、若いにしちやあ見上げた料簡。

甚五　爰は一番達引に、負けて遣らうと言ひてえが、何科もねえ仲人を、殺して濟ませる譯もなし。ちつとこつちに込み入つた、譯があるから此の出入り、預ける譯にはなりにくい。

久藏　それぢやあ命を投げ出しても、出入りを預けて下さらぬか。

大五　一旦助けた手前をば、なんで命が取れるものか。

甚五　それより手前はおれの内へ、さつき預かつた妹に力を添へてお袋の、問弔ひでもするがいゝ。

久藏　いえ、お袋の死んだ事も、今方お內へ寄りまして、妹に殘らず聞きました。

大五　そんなら手前は甚五郎に、矢張りかゝりのある者か。

助藏　さう聞く上は此の出入は、こりやあ滅多に、

大勢　預けられねえ。

甚五　おゝ、こつちも預ける心はねえ、久藏そこを退いてゐろ。

　　トきつとなる、此時下手よりお爪出て、後にて樣子を聞いてゐて、

お爪　その久藏に預けられずば、わしに預けておくんなさい。（ト出る。）

大五　お花の親のお爪どん、

助藏　なんで預けて、

大勢　くれろとは。

お爪　さあ、慾に絡んで三百兩、手切れの金を取りたさに、荒川さんや親分に、出入りをお賴み申したが、さつき思はず寢たふりで、素性を聞いて驚いたは、何を隱さうこのわしは爰に居る久藏殿の伯母でござりまする。（ト久藏是にてよく〳〵見て、）

久藏　おゝ、違えねえ伯母さんだ。

お爪　久藏、わしを知つて居たか。

久藏　四五年後に高崎へ無心に來た時覺えのある、お前は江戸の伯母御であつた。

甚五　それぢやあさつきおれの內で、寢て居る時に女房や、此の久藏の妹が素性の話しをした時に、其の場を外して湯へ行くと、出て行つたのも譯あつて。

お爪　名乘り逢ふのも面目なき、此の身の素性を兩親分、御迷惑でも聞いて下さい。わしも以前は高崎で賄ひ役を勤めて居た、此の久藏の實の親久之進の妹だが、兄に似たのかろくでなし、十六の時男を拵へ屋敷を後に先きの男と、勝手な眞似をしてゐる內、同じ家中の穗坂といふ、重役の子を三つの時、山かゞしの九郎藏めが、惡法かいてかどはかし、古狸の金八といふ山女衒の手へ賣り渡し、女郎にしようといふ所を、おどし文句で金八に三兩やつて買つたのが、今は藝者のあのお花、それからこつちも金箱を拾つた積りで育てたが、夫婦氣取りで居た男も、女房子もある道中師に添ひ遂げるといふ見當もなく別れ話になつたので、わしはそれから江戸へ出て、娘一人を喰物に今日迄命を生き延びたが、巡り廻つて兄嫁や甥が御恩になる人に、難儀をかけて居ると知れ改心する氣になりました。一旦賴んだ親分の顏が立たぬとおつしやるなら、わしを殺して此の喧嘩は、どうぞ預けて下さりませ。（ト是を聞いて大五郎思入あつて）

大五　これお袋、もしやそなたが言交した、男といふは高崎の、道中出入りの小差しにて、大阪清次と言やあしねえか。

お爪　どうしてその名を知つてござるの。

大五　何を隠さう此のおれは、大阪清次の忘れ形身だ。

お爪　そんならあの頃本妻に、子供が一人あると聞いたが、お前さんでござりましたか。

久藏　互ひに隠す身の素性、名乘つて見ればつながる縁。

お爪　それ故どうか此の喧嘩は、お爪婆あと久藏に、預けてやつておくんなさい。

甚五　つながる縁と聞いて見りやあ。

大五　今更喧嘩も出來ぬ譯。

助藏　爰は一番大まけに、

子分　親分、預けて、

大勢　おやんなせえ。

甚五　そつちで預ける料簡なら、

大五　喧嘩は此の儘外濠の、

甚五　水に流して、
大五　笑ふとしよう、（ト此の前より十吉出て、後で聞いてゐて、）
十吉　その仲直りは十吉が、不承知だから待つて下せえ。
甚五　折角濟んだ此の出入り、なんで手前が不承知だ。
十吉　さあ、先き頃内の親分が、向ふの子分を打つたので、仕返しに來た大五郎どんが、子分の替りに親分の、眉間を打つて歸つたから、それで出入は五分と五分、所へおれがさつき又、途中で受けた額の疵、此の納まりはどうしてくれる。
助藏　成程、是は尤もだ。さつきこんたへ石ころを、投げた相手は此のおれだ。額へ疵を付けてくれ。
大五　いや、子分が疵を受けたのを、仕返しに行き甚五郎の、眉間を打つた上からは。
ト有合ふ小石を拾ひとり、
向ふの子分の代りには、おれの額を此の通り。（トおのが手に額を打ち、油紅を付ける。）
甚五　いや、紫紺感心した。
久藏　是で双方五分と五分。
お爪　もう不承知はありますまい。

十吉　不承知どころか、かうされちやあ。
助藏　此の末仲よく、
大勢　しにやあならねえ。

　ト爰へ下手より以前のおてふ先に、厨子を持ち、お米、與次兵衞出來り、

てふ　どうぞ無難に濟む樣に、此の尊像を祈つたお蔭、
お米　親分さんにお怪我もなく、
與次　まづ、御目出度うござります。（ト前へ出て、甚五郎思入あつて。）
甚五　おゝ、いゝ所へその尊像、さつき形見に讓られた、黄金佛は富田の傳來、改心をしたお爪どんへ金の代りに預けるから、お花はわしにくんなせえ。
お爪　上げませうとも／＼、元はと言へば三兩で、買つた娘のあのお花は、もう慾德にはかゝはりませぬ。
大五　何は兎もあれさつきの二人、怪我のねえ内連れて來て、引き渡さずばなるめえが。
助藏　もうかうなつたら、こつちも無慾だ、どうか無難でくれりやあいゝが。

　ト此の時バタ／＼になり、上手より房次郎、お花を連れて逃げて出る、運平後を追ひかけ出來り、

運平　うぬ、逃げるとて逃がさぬぞ。

ト　こちらへ來るを、甚五郎へだてゝきつとなる。房次郎、お花は甚五郎を見て、

房次　おゝ、よい所へ甚五郎殿。

お花　どうぞ助けて下さりませ。

甚五　お案じなさるな若旦那、あなたはお店へお歸りなすつて、一旦お里へ歸したる御本妻をば呼び戻し、仲睦じくなさいまし、その內お花は甚五郎が親許になり大旦那へ、願つてあれば表向き、妾に上げて添はせます。

運平　いや、さううまくは身共がさせぬ。これ／＼親分、お爪婆さん、何故知らぬ顏をして居るのだ。

大五　男と見かけ賴まれた出入りもよく／＼考へりやあ、その顏付きであのお花を、手活にしようといふのが無理。

お爪　三百兩の大金を、むざ／＼捨てゝしまふより、外の藝者を其の金で、當つて御覽なされませ。

運平　扨は、今更愛想盡かしか。

助藏　是といふのも親分に、つながる緣のつゞき合。

十吉　素性を聞けばお爪さんは、富田の家の實の娘。

久藏　わしのためには伯母甥なら、
おて　わたしのためにも伯父と姪。
お米　けふ迄知らずに居りましたも、
與次　名乘つて見れば親類中、
房次　それ故、敵も味方となり。
お花　お情あまるお計らひ、
運平　して、大五郎の緣合は、
大五　わしやあ、お爪の義理ある悴だ。
久藏　さて物事が納まつたら、
お爪　邪魔のはひらぬその內に、
甚五　目出度く笑つてし

ト大五郎、甚五郎顏見合せて、につこり笑ふを木の頭、皆々引ばりよろしく、賑やかな鳴物にて、

ひやうし　幕

金看板甚五郎（終り）

ほとゐやまそがのはつかめ

「箱根山曾我の初夢」は明治二十五年一月、作者七十二歳の時、歌舞伎座に書きおろされた。鹽原多助が通し狂言として初めて上演された時で、その中幕として、一月ではあり、曾我の對面を輕井澤の八幡屋にあつて、小佛小平が夢に見るといふ趣向にしたもの。口上茶番風に、趣向を凝らしたものであつた。本集に採錄したものゝ中、前半對面の件は、稿下當時の印行本に載せられた所のものを川ひたから、卜書きは體を異にしたものになつてゐる。

書きおろしの時の役割は五世尾上菊五郎（工藤左衞門祐經、道連れ小平）、坂東彥十郎（梶原平三景時）、中村翫太郎（同平次景高）、尾上菊四郎（土肥彌五郎遠平）、尾上音五郎（愛甲三郎季重）、尾上梅助（安西彌七郎友貫）、尾上松助（近江小藤太成家）、尾上菊之助（八幡三郎行氏）、市川八百藏（鬼王新左衞門）、中村歌女之丞（奥女中宇佐美）、坂東秀也（同久須美）、尾上梅枝（同梅ヶ枝）、坂東あやめ（同初音）、尾上榮三郎（八幡屋の女郎お朝）、尾上きく（箱王丸）等であつた。

挿繪にしたのは書きおろし當時の繪番附である。

大正十五年十月初旬　　校訂者



中幕

箱根權現

對面の場

工藤左衛門祐經　尾上菊五郎

曾我五郎時致　坂東彦三郎

同 十郎祐成　中村芝翫

土肥弥太郎遠平　尾上栄三郎

梶原平三景時　尾上貞次郎

安西弥七景益　尾上[illegible]

近江小藤太成家　坂東[illegible]

八幡三郎行氏　尾上菊[illegible]

鬼王新左衛門　市川八百蔵

奥女中　[illegible]

同　[illegible]　坂東秀世

同　梅ヶ枝　[illegible]

同　初音　坂東[illegible]

[illegible]　坂東[illegible]

同　[illegible]　坂東[illegible]

小林[illegible]　尾上[illegible]

箱根山曾我初夢（二幕）

箱根權現對面の場
輕井澤女郎屋の場

〔役名──工藤左衞門祐經、近江の小藤太、八幡の三郎、梶原平三景時、同平治景高、土肥彌二郎遠平、愛甲三郎季重、安西彌七友貫、石田三郎爲久、竹下孫左衞門長正、別當行實阿闍梨、同侍左司馬、鬼王新左衞門、曾我の箱王丸。奥女中、宇佐美、同、久須美、腰元大勢。〕

（箱根權現對面之場）──舞臺の道具建は、總て箱根權現内陣の體、朱塗りの丸柱、欄間には花鳥の彫物、總て金銀珠玉を鏤め、一面に翠簾を下したるなど、其の壯嚴言はん方なし、能き所に河津、股野、角力の畫ある衝立をたてあり、こゝに奥女中宇佐美、久須美、其外腰元四人、三方へ供物箱を載せたるを脇へ置き控へ居り、下手には、別當所の侍左司馬、一同に打向ひ、ねぎらひて、

左司　これは〳〵皆々樣には、鎌倉表より遠路の所、當權現へ御參詣、御苦勞千萬にござりまする。

宇佐　御臺所の御名代に、不束ながら仰せを蒙り、御武運長久御祈念の爲、御參詣致せし私は、宇佐美と申します者。

久須　また私は久須美と申します者、お見知り置かれ、

兩人　下さりませう。(ト叮嚀に辭儀をなせば、左司馬は腰元共に打向ひ)
左司　御女中方には嶮岨の山道、嘸御難儀にござりませう。
腰元　鎌倉よりは十里餘り、餘程の里程にござりまする。
△　昨夜は小田原へ泊りまして、今朝駕籠にて登りし故、
□　常に見慣れぬ山々の、景色を眺めまするので、
△　少しも難儀にはござりませず、却て保養でござりました。
宇佐　シテ先刻より御參詣ありし、お表よりの御名代、工藤樣を始めとして、
久須　梶原御親子諸侯方には、未だ御本社でござりますか。
左司　はツ、將軍樣、御公達樣、御武運長久御家御繁昌の御祈念、未だ半にござりまする。
宇佐　さういふ事でござりますなら、工藤樣のお歸りなき內、
久須　湖水の景色を見物なし、お鳥居前よりお馬に乘り、
○　急いで麓へ、
四人　參りませう。
ト久須美、宇佐美は、腰元どもと打連れ立つて暇を乞ひて歸り行く。左司馬は跡を見送り、辭儀をな

し居る、折しも曾我の臣鬼王新左衞門入來りしが、それと見て恭しく手を仕へ、

鬼王　幸ひ向ふに左司馬殿、あれへ參つて師の御坊へ、お取次をお頼み申さん。

ト左司馬の傍へ來り、手を仕へる。左司馬心づき打見やりて、

左司　これは曾我の鬼王殿、よくお出でなされしぞ。

鬼王　御免下され。（ト座を進ませ、）舊冬歲末の御祝儀に參上致す心得なりしも、無人故に御無沙汰に、打過ぎましたる申譯に、歲末御年始かねまして、參上致してござりまする。

左司　何方にても歲末は、用事の多きものなれば、其御心配には及びませぬ。

鬼王　シテ御師匠樣には、お替りはござりませぬか。

左司　御老體にはござれども、至極御健勝にあらせられゝば、御安心下さりませ、また箱王殿もお壯健ゆゑ、これ又御安心なされませ。

鬼王　さぞ、惡戯に成りまして、お世話な事でござりませう。

左司　兎角出家を厭ひ朋友等の、稚兒を相手に劍道の、まねびをなして、惡る擧動が過ぎまするので、師の御坊のお目にとまり、お叱りを受けまする。

鬼王　御遠慮なくお叱りあつて、末々出家になられますやう、御教示お願ひ申しまする。

左司　其儀は兼々お賴み故、御承知でござりまする。

ト此の談話の內、鬼王は提へ來りし、袱紗包を明け、中より金包と扇一對を取出し、金子は扇子の上へ載せ、是を左司馬が前へ直し、恭しく手を仕へ、

鬼王　此の一包は歳末の御禮、扇子は年始の御年玉、御師匠樣へ此の二品、お取次ぎ下さりませ。

左司　委細承知致してござる。

ト禮を言ひ、二品を受納める、此の時襖を明け、僧侶一人出來り、手を仕へて、

僧　ハッ、最早御祈念相濟んで、工藤樣諸侯方には、只今お立ちでござりまする。

ト言ひ捨て、引返してはひる。鬼王は奧の方を見て、こゝに居っては惡かりなんと心づき、

鬼王　スリヤ、工藤樣には御參詣とな。

左司　將軍家の御名代にて、御參詣あらせられ、只今お歸りにござりまする。

鬼王　諸侯方のお出でとあれば、陪臣の身の拙者めは、

左司　箱王殿のお部屋にて、

鬼王　控へ居りまするでござります。

左司　イザ、御案內いたしませう。

ト鬼王は、左司馬が案内に連れて、箱王丸が部屋へと座を立つ。時しも奥にて、「工藤様お歸り」と呼はる聲と諸共に、翠簾を上げると、内に工藤左衛門を始めとして梶原親子、土肥、愛甲なんど、鎌倉の諸大名綺羅星の如くに居ならんでゐる。行實阿闍梨は方々を見送らんとて出來り、下手へ住ひ一禮なし、

行實　將軍家の御名代たる、工藤左衛門祐經殿を初め、諸侯方には遠路の所、御苦勞至極に存じまする。
祐經　今日將軍家御名代の大役を蒙りたる、工藤左衛門祐經、
景時　まツた差添として、梶原平三景時、
平治　御名代供奉の爲めに、梶原平治景高、
土肥　土肥彌太郎遠平、
愛甲　愛甲三郎季重、
安西　安西彌七友貫、
石田　石田三郎爲久、
竹下　竹の下孫左衛門長正、
平治　何れも參詣、

六人　致してござる。
行實　今日は空澄み渡り、梢を鳴らす風もなく、湖水に波の立たざるは、御代泰平のしるしにて、大慶至極に存じまする。
祐經　當社箱根權現は、關東鎭護の御神にて、武運長久祈念の爲め、則ち參詣いたしてござるが、先刻より萬事の饗應、何れも滿足いたしてござる。
行實　御接遇も心に任せず、左樣の仰せを蒙りては、行實恐縮いたしてござる。
祐經　シテ、行實殿に承はり度きは、伊東入道祐親が孫、當山にありと聞きつるが、いづれの坊にござるよな。
行實　其の御尋ねの祐親の孫と申すは、箱王丸とて愚僧の弟子にござりまする。
祐經　スリヤ、行實殿のお弟子とな。
行實　是へ呼び出し、御覽に入れん。

ト此時、物騷がしく人の跫音したりしが、下手にありし衝立の蔭より、箱王丸は紅葉に鹿の模樣の縫を爲たる振袖、刺貫にて走り出來り、工藤を目がけ飛びかゝらんとする勢に、新左衞門は、跡追ひ來り箱王を留める、箱王は振拂ひ、又駈行くを新左衞門は、腰のあたりを押へ、兩人ともきつとなり、

行實　アヽコレ、立騒いで尾籠な振舞、

鬼王　ぢつとお控へなされませ。

ト俺まで息込む箱王を宥める。祐經は最前より此場の様子を見てありしが一目ちろりと見やりて、

祐經　只今それへ出でたるは、河津殿の忘れ筐、箱王丸にはあらざるか。

箱王　ムヽ。

鬼王　斯くお目立ちまする上からは何をか包み申すべき、河津の三郎祐康の忘れ筐の兄弟にて、曾我祐信の養子となり、兄は一萬丸、これは次男の箱王丸、今日はからず參り合はせし拙者は、曾我の家臣にて鬼王新左衞門と申す者、陪臣の身も顧みず、無禮は御免下さりませ。

景時　扨は河津の忘れがたみ、曾我の太郎方へ養子となりし兄弟なるか。

平治　何と、各々御覽じろ。見るからなりも、そが〳〵と、

土肥　貧乏者の、曾我の養子、

安西　春と云へども未だ寒く、

石田　去年の儘なる古布子に、

竹下　寒いか、がた〳〵慄へるのは、

平治　不便な事ではござらぬか。

六人　ムヽハヽヽヽ。

ト諸大名は、散々に冷笑へば、箱王は益々憤り、無念の體にて、意氣込むを押止め、

鬼王　アコレ、急く所ではござりませぬぞ。

祐經　我推量に少しも違はずして、曾我祐信の養子たる箱王丸にてありつるか。

ト祐經は箱王の面體をつく〴〵見て、

祐絕　ア似たわ〳〵河津殿の面影あり、親は無くとも子は育つと、ハテ健なる箱王丸。コリヤ知らざる者の馴々しく申すは不審に思はれんが、おことが父の河津殿とは、一家の因みある工藤左衛門祐經なり。

箱王　扨こそ祐經、父の敵。（ト又立ち掛るを止め、）

鬼王　お急きなさるは尤もなれど、工藤殿は大切なる將軍家の御名代、無禮があつては濟みませぬ。ちつとお控へなされませ。

箱王　チエヽ。（ト無念には思へども、鬼王が達ての言葉に、是非なくも控へをる。）

祐經　勇氣面に顯はれし、箱王丸がけなげな振舞、聞けば世上の取沙汰に、河津を討ちしは祐經などゝ

箱王　さん候。中す者もある由なるが、それは跡方もなき僞りごと、誠と思はゞ子心にも嘸や無念に思すらん。

祐經　口惜しいか。

箱王　さん候。

祐經　然もさうず、然もありなん。

鬼王　五ツや三ツの頃よりして、父を撃たれし其の無念、忘れもやらぬ御兄弟、憚りながら心根を、御推量下さりませ。（ト是にて、近江は八幡に打向ひ、箱王主從を尻目にかけ、）

近江　行氏お見やれ、一家の因みと御主人の、其の言葉につけ上り、行儀の悪い立振舞、

八幡　何さま、貴殿の言はるゝ通り、兩の眼に淚を持ち、世上の風聞一途に思ひ、

近江　主人を敵と覘へばとて、お傍に從ふ近江の小藤太、

八幡　八幡の三郎なくば知らず、

近江　慮外がありやア、

八幡　どつこい、

近江　そつこい、

兩人　やりやァしねえわ。（ト兩人高聲にて罵れば、工藤は暫しと押止め、）
祐經　兩人控へい。
兩人　ハツ。
祐經　幼けれども我一家、無禮の雜言嗜みをらう。
兩人　ハヽハツ、（ト恐れ入つて控ゆれば、祐經は座を正し、箱王丸に打ち向ひ、）
祐經　箱王丸には世上の噂、必らずまことゝ思はれな。
箱王　何と。
祐經　畫面は則ち赤澤山、思ひぞ出る其時は、安元二年神無月、十日餘りの事なりしが、伊豆と相模の若殿輩、赤澤山の晴角力。
景時　股野は聞ゆる力強、二十一番勝に乘り、廣言吐きしを憎しと、祐康土俵へ飛入つて、股野を投げし河津がけ、
祐經　あつぱれ力者の祐康が、勝ち誇つたる歸り足、然も其日の出立は、
鬼王　秋野の摺つたる狩衣に、
箱王　栴檀籐の弓携へ、

鬼王　竹笠さつと木枯しに吹きそらし、村雨月毛の駿足に、しんず〳〵と歩ませたり。

近江　待ちまうけたる此方には、柏ヶ崎の南尾崎、椎の木三本小楯にとり、

八幡　一のまぶし、二のまぶし、切つて放せばあやまたず、

祐經　河津が乘つたる駿足の、鞍の山形射削つて、行縢の差添より前へすつぱと射通したり。

景時　萬夫不當の祐康も、馬よりどうと遠近の、

鬼王　赤澤山の露霜と、消えて果敢なき無念の御最期。

箱王　思へば〳〵。（トきつとなる。）

祐經　今物語りし如くにて、河津を擊ちしは股野景久、人違ひして笑はれな、親しき一家の祐經が、今日箱王に對面なすは、兼ねて心得居る事なり。近江、八幡、持參の品をこれへ。

近江　畏つてござりまする。

ト八幡三郎は、恭しく袋入の短刀を出して、祐經へ差出せば受取り、袋の中より出して見て、

祐經　工藤武者祐繼より、代々傳へた赤木の短刀、我家祕藏の業物ながら、和殿へ贈る一家の因み、受納おしやれ箱王丸。（ト短刀を出せば、箱王丸は無念の齒嚙をなす、鬼王は見て宥め、）

鬼王　御厚志の、この賜、とく〳〵お受けなされませ。

ト是にて、箱王は祐經が座近くへにじり寄る、鬼王は、若しや大事を惹起しはせぬかと種々心配なし居る、箱王は短刀を受取り、

箱王　箱王、頂戴いたしてござる。（ト此時八つの時計鳴ひゞけば、）

景時　只今打ちしは未の刻、是より下りと申せども、名におふ嶮岨の箱根山。

平治　平地と違ひ、道はかゆかねば、

近江　片時も早く麓まで、

祐經　いかにも、下山致すでござらう。

行實　最早お立ちにござりまするか。

祐經　行實老にも心配大儀。

行實　ハツ。

祐經　左樣ござれば、梶原殿。

景時　イザ、御同伴、

皆々　致すでござらう。（ト一同に立上がれば、祐經箱王丸に打向ひて、）

祐經　箱王丸には、やがて本意を。

箱王　ヤヽ（ト祐經は氣をかへ、素知らぬ振にて、）

祐經　近江、八幡、供いたせ。

兩人　ハツ。

ト祐經先に、近江、八幡、附添ひはひれば、跡、梶原を初めとして、諸大名の面々は一人つゝはひりゆく。行實も共に見送りとして座を去れば、跡に箱王丸は怒りの眼に朱をそゝぎ、

箱王　父の敵、跡おつかけ。（ト行かうとすれば、鬼王あわてゝ袖を引止め、）

鬼王　おせきなさるな箱王樣、御本意遂ぐるは兄たる、一萬樣と諸共に。

箱王　でも、見逃すは。

鬼王　ぢつと辛抱なされませ。

ト箱王を抱き留める、此の見得ドロ〳〵早めの合方になり、兩人をせり下げる。と知せにて道具居所替りになる。

（輕井澤女郎屋部屋の場）――本舞臺三間の間平舞臺、向ふ鼠壁、誂への樂書きあり、下手襖板羽目、柱に火の用心八幡屋といふ掛行燈、總て信州輕井澤女郎屋二階の體。酒道具を並べ、此蔭に道連小平半

纏着流しにて酒に醉ひたる體にて寢てゐる。ドロ〳〵にてせり上ると、追分節になり下手より宿場女郎おあさ、結び髮卷帶縞物の仕掛を羽おり出來り、

あさ　ちよいと行つて來ると言つたに、もう醉ひ倒れてしまつたのかえ。怖い夢でも見て居るのか、大そううなされてゐなさるよ、小平さん〳〵、目をさましておくれ。

ト ゆり起す、これにて小平伸をしながら起上り、

小平　それぢやあ今のは夢だつたか。面白え所を起されて見殘したのが殘念だ。

あさ　面白い夢と言ひなさるのは、お兼さんの所へでも行つた夢かえ。（ト小平をつねる。）

小平　あゝ痛え、馬鹿をするなえ、そんな浮氣な夢ぢやあねえ。

あさ　どんな夢だか話してお聞かせな。

小平　手前が廻しで行つてしまひ、遊んでゐた子が一人行き二人行き、取殘されたはおれ一人、相手がねえから茶碗で引掛け、睡氣が附いて寢た所、夢に見たのは箱根權現賴朝公の御名代に工藤左衞門祐經に梶原親子諸大名が、祈念が濟んで歸る所へ出たのは曾我の箱王丸、附添ふ家來の鬼王が留めるを聞かず親の敵と立ちかゝるを、並んでをつた近江八幡や大名が紋切形の憎まれ口、所で工藤が衝立の赤澤山の角力の畫から、河津を討つたは股野の五郎と角力の話でごまかして、赤木

とやらの短刀を箱王丸へ口塞けに、遣つて歸るを追つかけようとする所を起されて、惜しい夢を見殘した。

あさ　そんなお前とつけもない、夢を何で見なすつたのだ。

小平　昨日まゐつた碓氷峠の權現樣が夢の種、然も所は箱根の權現、後ろの壁のむだ書きの大頭が頼朝公、先達大工藤左衞門の大をのくれば工藤左衞門、一萬講が一萬丸。（ト傍にある煙草箱を取つて、）此の煙草箱が箱王丸、チトこじつけだが引出しに、地主權現の紅葉に鹿、（ト引出してから紅葉に鹿の花札を見せ、）赤澤山で河津が取つた角力膏もござりませう。（ト竹の皮に包みし角力膏を出す。）

あさ　えゝ、そんなものをお出しでない。（ト煙草箱を引取る。）

小平　臺の肴は源五郎鮒に、こいつが近江に緣あれば、こつちの家が八幡屋、此の白鳥は地酒の王、頭へ上り鬼殺しは鬼王でもござりませう。

あさ　もう茶番はおしまひかえ。

小平　いや、まだ／＼おれが着物が大名縞に、襖の模樣が紋盡し。

あさ　あれえ。（ト飛びのく。）

小平　どうしたのだ。

あさ　又降るかしてげぢ〳〵が出た。
小平　其のげぢ〳〵が梶原だ。
あさ　おふざけでないよ。（ト小平の肩を突く、此時懐中より白鞘を落す。）おや、その短刀は。
小平　これが赤木の短刀よ。（ト懐中へ入れる。）
あさ　赤木赤城の山風より、身にぞつとする其の短刀、無理心中は御免だよ。
小平　何より命は惜しいから、そんな無分別は出やあしねえ。（ト本釣鐘を打込み、兩人ちつと思入。）さつきの夢の祐經も命惜しさに敵と名乘らず、股野へ罪をなすつたが、しまひは壁に樂書きの、
あさ　富士の裾野で兄弟に、
小平　討たれし其夜は二十八日、
あさ　然も篠つく皐月雨。（ト此時サツと雨の音になる。）おや、今のげぢで降つて來たよ。
小平　こいつア明日は歸られねえか。
あさ　天氣になるまで流しておいでな。
小平　此の節曾我の貧的だから、
あさ　五兩あるから、これをお使ひ。（ト掛守りから紙包みの金を渡す。）

小平　こりやあ狩場の切手より、
あさ　通用のいゝ其の小判。（ト小平開いて見て、）
小平　これぢやあ工藤も。
あさ　どうしたとえ。
小平　ムヽ。（トうなづくを木の頭。）殺されらア。
ト此の模様にてよろしく。

幕

曾我の初夢（終り）

絲

幻

『錣引』は文久元年九月、作者四十六歳の時市村座に上演せられた。『鬼一法眼三略卷』の四立目として、源平の世界に因んで、この錣引が附け加へられた所大好評で、それ以來、獨立して屢々繰返されてゐる。荒事風のダンマリの標本として見るに足るものである。幕切れに近く、諸を用ひてあるのは、比較的新らしい趣向であるが、そのまゝにしておいた。

書きおろしの時の役割は、中村芝翫(三保の谷四郎國俊)、河原崎權十郎(惡七兵衞景清)といふのであつた。

挿繪にしたのは河原崎權十郎卽ち後の九代目團十郎が先代左團次と共に明治座で再演した時の錦繪である。

大正十五年十月初旬　　　　校訂者


明治座
新狂言 錣引
景清 市川團十郎
三保谷 市川左團治

攝州摩耶山の場

〔役名――非人七兵衛實は惡七兵衛景淸、虛無僧次郎藏實は三保谷四郎國俊、同宿頓念、同雲念、番場忠太、軍兵行列大勢、長谷三郎、忠光妹伏屋等。〕

（攝州摩耶山の場）――本舞臺三間の間、上下山の張物、正面山幕、日覆より松の釣枝、下手に石の寶塔、此傍に攝州摩耶山と記せし榜示杭を建て、山おろし谺にて幕明く。と直に靜かなる禪の勤めになり、花道より同宿一人、手に松明を持ち、後ろより頓念、雲念同宿の拵へ、墨衣のつゆを取り、三方に供物を載せ、持つて出來り、

頓念　これ〳〵雲念、何とまあ此の夜夜半迄此のやうに、麓の坊から觀音堂迄、思出したやうに供物を運ぶは、こりや何としたことであらうぞ。

雲念　はてさて、わごりよも是を知らずにか、きのふ平家の陣から、竊に此山へ御内意があつて、何やら平家の重寶、蛭卷の長刀とやらを、納めに今宵御代參が見えらるゝとの事、まだ其上に平家の武運祈りの爲、今宵から七夜の通夜をなさるげな。

頓念　はゝあ、それで寺中は大取込み、様子がぐわらりと分つたわえ。さういふ事なりや愚僧のやうな安坊主は、供御を捧げるのが役目。
同宿　もう、おッつけ九つにもなりませう。
雲念　それ〳〵、夜の更けぬ内。
兩人　どれ御供へ申して來ようか。（ト此時奥にて）
忠太　いや、その品供へさせることは叶はぬぞ。
ト山おろし烈しく、塔の後ろより番場忠太、山樵の拵へ、山刀を差し、ほくそ頭巾を冠り出來るを、
頓念　やあ待て〳〵、深夜に及んで山間から、異形な出立ち。
雲念　神か人か、
三人　何奴だえゝ。
忠太　やかましいわえ、わりや山樵ゆゑ何時と限らず、夜山に出るは我が生業。
頓念　そんならこなたは山樵か、その山樵が何んでまた。
雲念　供へる供御を留めに出たのだ。こりや此の供へ物こそ、忝くも平家より捧ぐる品々。
頓念　過ちあらば身の上だぞ。

忠太　いゝや、さう見たゆゑに留めに出た。平家よりの供へ物なら、先づ彼よりはわいらが身の上、こりや、今迄榮華に時めきし、平家はおッつけ傾く運、いくら武運を祈つたとて、叶はぬ譯は世の盛衰、源氏は今を盛んにて、關東には右幕下賴朝、又は都には範賴義經、平家は殘らず都をひらき、一の谷には籠れども、日蔭待つ間の朝顏同然、今に萎むは知れたこと、もしや始終を考へて平家の陣を脱るゝ者もあらんかと、それを捉ゆるかくし目附、我こそ梶原が郎等番場の忠太といふ者だわ。

皆々　よウ／＼／＼。

忠太　わいらも平家に力を合せ、武運の祈りするが最後忽ち死罪、きり／＼その品麓へ下げろ。

皆々　でも、師の坊の仰せなれば。

忠太　こま言拔かさば、わいらは寂滅。（ト山刀へ手をかける。）

皆々　あゝもし／＼、お待ちなされて下さりませ。

忠太　すりや、その品を取り捨てるか。

頓念　はい／＼成程捨てまする。七尺去つて影踏まぬのたとへ、師匠の言附けでも、

雲念　命に替へることはござりませぬ。

兩人　南無觀世音、お許しなされて下さりませ。（ト言ひながら、三方の供物を捨てる。）
忠太　おゝ、ういやつ〳〵。その心底を見るからは、それ。（ト金を銘々に遣る。皆々とつてびつくりなし、）
皆々　これは。
忠太　それこそ今宵の骨折しろ。
皆々　とは又何故でござりまする。
忠太　されば、最前其方共が話を聞けば、家重代の長刀を持ち來たるとの噂は幸ひ、何を隱さん此忠太木曾義仲の亡びて後、都にて日々の軍評議、そのつれ〴〵を慰めんと、若氣の至り島原へ、通ひ詰めたが身の越度、主人の御勘氣蒙つて、野山に潜む此の忠太、歸參を願ふは一つの功と、思ふに幸ひ今宵の上首尾、彼の長刀を奪ひ取りて、御主人へ渡すが卽ち勘氣の詫び、こりや首尾よく行けばわいらも共々、取立てゝ一ヶ寺をあて行ふわ。それ樂しみに、隨分ぬかるな。
皆々　心得ました。
忠太　あれ〳〵、麓の方にあまたの人音、正しく代參の同勢ならん。
皆々　それと見たなら、奉公初め。
忠太　こりや忍べ。

皆々　はッ。

ト是にて皆々上手の山間へはひる。行列三重禪の勤めになり、花道より同宿二人、松明を持ち後ろより軍兵長刀を持ち、長谷三郎羽織野袴、伏屋襠裲端折り、是を警固して出來り、舞臺へ來て、

長谷　ソレ者共、隨分竊に四邊へ心を。

皆々　はッ。（トあたりへこなし。）

長谷　かゝる深夜の御代參も、晝は敵陣を憚るゆゑ、竊に閑道を廻りし摩耶山、よも敵方にて心は付くまじ。伏屋殿、是にて御安心なされませ。

伏屋　三郎殿を始めとして、皆も大儀、兄五郎兵衞忠光殿には、軍議に暇なきゆゑに、不束ながら妾が名代、さりながら晝さへ猿の聲物憂く、いと物凄き深山なるに、殊更夜陰の風荒く、松柏枝を並べし有樣。

長谷　かゝる物憂き山中へ、御代參を立てられしその仔細は、如何なる事で、

皆々　ござりまする。

伏屋　成程御不審あるも御尤も、生田の森の砦を放れ、夜陰に竊の參詣も、此程より我君には御心地常ならず、尼公の御歎き曲侍の局の仰せに依り、諸寺諸山へ祈りの奉幣、何れ愚かはなけれども、

都には關東の討手籟頼義經ある故に、その事も心に任せず、とは言へ重らせ給はぬやうと內々御評議の上、幸ひなるかな當山の觀世音は尼公深く信仰ましませば、則ち御家の重寶蛭卷の長刀を奉納し、武運長久祈りの爲、今宵竊に御代參。

長谷　何さま當山の觀世音は、靈驗あらたなる事に聞及ぶ。惡七兵衞景淸殿も淸水寺と當山に步みを運びし觀音の信者、日頃祈念致す事、皆人よツく存ずる所、殊には尼公の御信仰とあるからは、感應なくては叶ふまじ。（ト此時九つの鐘になる。）あの鐘は最早子の刻。

伏屋　左樣なれば、三郞殿。

長谷　伏屋殿。

伏屋　御同道いたしませう。

ト此時後ろの山蔭より、以前の同宿三人窺ひ出で、長刀を奪はんとする。三郞伏屋きつとなり、

長谷　扨こそ狼藉。

伏屋　油斷めさるな。

皆々　心得ました。

ト禪の勤めにてごつちやの立廻りになり、トゞ同宿三人を相手に三郞刀を拔き、上手へ追つてはひる。

伏屋に附き來りし供はちり〴〵に下手へ逃げてはひる。伏屋件の長刀を持ち、上手へ行くを、忠太さ
さへ立廻つて、きつと見得。

伏屋　此長刀に心を懸けるは、扨はそちも荷擔人よなァ。

忠太　いゝや、荷擔人ではねえ。我こそ梶原が股肱の臣の番場の忠太、勘當詫びの種にするその一品、きり〳〵身共に渡してしまへ。

伏屋　やあ、すりや源氏の侍にねじけ人の名をとめし、梶原が家來よな。しのぎを削る戰場には非ずして、女を相手に此の狼藉、主が主なら家來迄、臆病者のなまくら武士、女でこそあれ忠光が妹伏屋、滅多に此の品渡さうや。

忠太　小癪な事を。

ト宜しく扱合ひ切結び、立廻りながら上手へはひる。知らせに附き山の張物。榜示杭を引いてとり、山おろしを打上げ、大薩摩になる。

〽それ計策を帷幕の内にめぐらすは、將たる人の上とかや、又是につぐは武勇の臣、爰に豪傑並びなき惡七兵衛景淸と三保の谷四郎國俊が、その名も高き錣引、八島を爰に寫し給や。

ト山幕を切つて落す。

（摩耶山の場）＝本舞臺一面に諸所松の古木、日覆より一杯に釣枝、誂への通りかざり、宜しく道具納まる。と急に羽音して種々の鳥の聲する、上の方に惡七兵衞景清、誂へ非人の拵へ、身に莚を纒ひ、破れたる手拭を冠り、下手に三保の谷四郎國俊好みの旅虛無僧の拵へにて天蓋を冠り、岩に腰かけ、眞中に焚火、此傍に一升德利おいてある事。兩人空を見上げし見得にてせり上る。

三保　はて心得ぬ、古漢の武帝の時世蘇武が使のそれならで、春もやうやく半ばなるに、かゝる深山と言ひ、夜陰に及び、諸鳥騒立つあの有樣。

景清　五日の風も物荒く、雨土くれを動かせば、伏勢ならぬ野伏りも、膽にこたえる鐘の音を、算へてみれば子の上刻、鳥も塒にゐる筈を、梢放れて中空に、

三保　聲を亂して群れ飛ぶは、かく幽谷の此の摩耶山、

景清　峯の嵐に驚きしか、

三保　もし惡鳥に追はれしか、

景清　耳かしましき、

兩人　事だなあ。

ト景清は手拭を、三保の谷は天蓋をとりのけ、きつと空を見上げる。風の音はげしく鳥飛び去る。兩

人は顏を見合せて、

景清　梵論字殿には、今の羽音にどうやらびつくりさしつた樣子、えて深山幽谷には、こんな事よりまだ／＼不氣味な事があるやつさ。

三保　いや私よりはこなたこそ、大分羽音に驚いた樣子ぢやが、落人なら譬の通り薄の穗にも怖ぢるの習ひ、それに引替へ見ればこんたは。

景清　されば私が住居は青天井、浮世を非に見た非人の境界、どうで骸は野へ出した死人同然、何恐しい事がごんせう。私も今でこそ、こんな樣になれ、その昔は大の信者で觀音の札所を巡つた七兵衞と言ふ者さ。

三保　はゝ、すりやこなたには其以前、大きな功德を積んだお人。わしも修行二つには、後世を願ひの旅はゞき、次郎藏といふ者さ。

景清　そいつァ豪氣に話せるわえ。そんならこなたも後世のため、

三保　札所を巡つた七兵衞殿、

景清　梵論字の次郎藏殿。

三保　思ひも寄らず行暮れて、

景清　火の無心から奥底なく、
三保　袖振り合ふも、
景清　他生の奇緣、
三保　折りよく爰で、
兩人　逢ひましたなあ。（ト谺の入りたる合方になり、景清火を焚きながら）
景清　さあ〳〵とてもの事に、今夜は夜と共焚火の許で話をせうかい。
三保　そりやもう此方から望む所、こなたも私も諸國を巡つた身の上なれば、世の雜談はさま〴〵なれど、先づ話といふ内にも、聞き度きはこなたの身の上、西國の札所を巡つて功德を積む、巡禮の身で、むさくろしいその姿にはどうしてなつた。
景清　わしがこんな姿になつたは、丁度去年の春であつたが、四國をしまつて西國から、遙々爰へ紀三井寺、那智の麓で持病が起り、それから續いて半年餘り、藥のために路銀は費す、詮方なさの此境界、お餘りを貰つて世を送るも、今鎌倉にゐさつしやる朝頼樣のみんなお蔭。聞けば義經といふ御大將が、都へ攻めてござるとあれば、今に平家は皆散り〴〵。
三保　いや〳〵又平家方にも神佛があるからは、さうちよつと源氏の世にもなるまいて。

景清　とは又なぜ〳〵。
三保　さればさ、今鎌倉で頼朝が、大きな顔して駄味噌を上ぐるは誰が蔭、皆池の禪尼樣の情といふもの。あの時、命助けられずば、頼朝殿の大頭は、ころりと落ちて平家は今に榮華の春、何とそんな物ではござらぬか。
景清　いや、そりや無理だ〳〵。
三保　無理とはなぜに。
景清　はて、無理の證據を言つて聞かさう。待賢門の戰ひに平家の勝ちしは時の運、それはそれにしてやらうが、現在敵の義朝が、妻子を引込み剩へ、操正しき常磐に懸想し、口說き落して閨の伽、その又愛に溺るゝなら、子供は殘らず助ける筈を、皆それ〳〵に罪を被せ、殺さうとした清盛殿、威勢に任せて恩愛の情を知らぬ非道な仕方、それを見兼ねて命乞ひをした池の禪尼は、浮世の人情、又命助かり伊豆の伊東へ流罪になつた頼朝殿は、天より許す時の運、あながち平家の恩義といふでもござんすまいかい。
三保　いや〳〵、そりやあ源氏の手前勝手、たとひ賤しい町人でも、一旦の義理は義理、まして頼朝殿は今武將の身の上、なりや天下の鑑、以前の恩を思はゞ、一旦は辭退するが世の人情さ。

景清　はてさてこたなもしつこい事を、天下のためなら親でも討つのが誠の武士だわ。
三保　いや〳〵それが此節世間で言ふ、判官贔屓の片意地張りとはそこの事、人として恩を思はぬは獣にも劣るとやら、頼朝もまッその如くの人でなし、天道様の憎しみがかゝれば、どうして〳〵、今度の戰に勝つ事は覺束ないわ。
景清　むゝ、さつきにから青筋張つて頼朝樣を惡く言ふは、平家に由縁でもあるのかえ。
三保　いゝや由縁かゝりはなけれども、私は平家がきつい贔屓さ。
景清　そんなら、こなたはぞつこん平家が。
三保　大の贔屓さ、然し又私よりは非人に似合はず始めから、こなたが源氏の肩を持つは。
景清　私は源氏がきつい贔屓さ。
三保　こなたは源氏、わしは平家、時に取つての敵味方、詞戰ひ終りなば、
景清　打物よりは手短かに、錣にあらぬ襟上を、力に任せて引ッつかみ、
三保　引かんとすればこつちもまた、振りほどかんと前へ引く、磯打つ波音力足、
景清　沖の鷗と諸共に、群れ高松の朝嵐、
三保　こなたの腕をひんもぎるか、

景淸　こなたの首を捻ぢ切るか。

三保　腕の強さよ。

景淸　首の強さよ。

三保　むゝ。

景淸　むゝ。

兩人　はゝゝゝゝ。

ト此時風の音烈しく、ぱつたり音して正面の杉の梢より、以前の鏡落ちる。兩人びつくり飛退く。此時上手より忠太蛭卷の長刀を搔込み、下手より伏屋刀を拔き、何れも鏡を搜す心にて出て、忠太は景淸へ行き當る。伏屋は三保の谷へ當り切つてかゝるゆゑ、景淸長刀を取り忠太を、三保の谷は伏屋の刀をとりて、双方を切倒し、兩人思入、景淸焚火を總と消して、

景淸　重ね〴〵不氣味なことだ。折角樂しみに思つた德利の酒はぶつくら返し、焚火は消える、夜はだん〳〵更けて來る。こんな寒い所に夜も明かされぬわえ。どれ、そろ〳〵と有馬の町へお餘り貰ひに出かけようか。

〽唄　我が名を何と夕浪の引くやもしほも朝倉や、木の丸殿に

ト鳴物になり、景清花道へかゝる。三保の谷こなしあつて、

三保　景清待て。いやさ、惡七兵衛景清、まあ〳〵待ちやれ。

景清　や。（ト思入。）

三保　斯う呼びかけられては、よもや後ろは見せられまい。

景清　非人の私が梵論字殿へ、何の後ろを見せたとて、

三保　いゝや、梵論字ならば兎も角も、敵に取つては不足なき三保の谷の四郎。（ト引きぬき、）國俊なるわ。

景清　何と。

三保　鬼神と呼ばるゝ景清が、後ろを見せては恥辱であらうが。

景清　知つたる上は包んで詮なし。如何にも我は平家方にて鬼神をも取り挫ぐ、さるものありと言はれたる、惡七兵衛景清、間近く寄つて面相拜み（ト景清引ぬき、）奉れえゝ。（トきつと見得。）

三保　さてこそな。

景清　姿やつすは病の大敵、鋭き義經うたんがため、それと察せし四郎國俊、先づ手初めに汝が首を。

三保　こしやくなことを。

ト是にて三保の谷引きぬき縫鑞になる。

諸〽其時平家の方よりも詞戦ひ事起り、兵船一艘漕ぎ寄せて、浪打際におり立ちて、陸の敵をば待ちかけしに、

ト山おろし烈しく、景清舞臺へ來り、長刀にて切つてかゝる、三保の谷も刀にて受留める、兩人ちよつと立廻つてきつと見得。鳴物になり畫面の見得あつて、三保の谷の持ちたる刀折れる。此立廻りの内景清の懐中より鏡落ちる。此鏡三保の谷の手へはひる。此時後ろより忠太よろぼひかゝるを景清長刀にて見事に切りさげる。忠太立ずくみに成る、これを見て、

景清　ム、、

三保　へ、、

ト忠太を蹴返す、忠太見事にかへる。此途端後ろの山間より日の出を出す。兩人見合つて木の頭、

兩人　ハ、、、、。

ト笑ふ。此仕組、山おろしカケリにて、　ひやうし　幕

錣引（終り）

商人の與作が馬追姿

刀指の鷲塚が船頭拵へ

契情の重井が乳母形

染分千鳥江戸褄

『傾城重の井』は慶應四年（明治元年）二月、作者五十三歳の時、守田座に書きおろされた『染分手綱』の趣向を江戶の吉原へ持込んだものであつた。此の作の名題の上には、「娘形澤村田之助病氣全快仕候間初日より罷出相勤申候」と附記してあつた通り、三代目田之助並に澤村訥升（後の助高屋高助）を中心とした、作者としては比較的分量の少ない二番目物であつた。作中に重の井のセリフを借りて田之助が病氣全快の口上もあり、兄訥升の役である與作の對話にも、病中の心細さを兄弟して語るといふ場あたりの部分もある。

書きおろしの時の役割は澤村田之助（花菱屋の抱へ重の井）、澤村訥升（伊達の與作、與作兄座頭慶政）、中村芝翫（鷲塚左內）、坂東太郎（山形屋義兵衞）、尾上菊次郎（花菱屋の女房おつな）、澤村其答（井筒屋女房およし）、中村翫太郎（やりておなべ）、市川九藏（鷲塚八平治）等であつた。

插繪にしたのは後年現中村歌右衞門によつて復演せられた時の錦繪である。

大正十五年十月初旬　　校訂者



染分千鳥江戸褄（傾城重の井――三幕）

序幕

吉原花菱屋の一場

淨瑠璃　田字梅後着重縫　（淸元連中）

〔役名――鷲塚官太夫、伊達の與作、座頭慶政實は與作兄與八郎、鷲塚八平治、山形屋義兵衛、若い者喜助、同伊助。傾城重の井實は由留木の腰元重の井、花菱屋女房おつな實は八藏妹小萬、井筒屋女房お山、富岡屋の下女おます、遣手おなべ、じれんじよのおさん、新造重芝、同重川、同重花、禿しげり等。〕

（花菱屋格子先の場）――本舞臺三間の間朱塗りの大格子、上手一間入口、花菱屋と記せし柿暖簾下手一間千本格子、此前駒寄せ、爰に義兵衛縞物の羽織着流し、重芝新造の拵へにて義兵衛の手を取り、重川、重花同じく新造にて、傍に子役の禿、喜助、伊助女郎屋の若い者にて立掛り居る、すがゝき通り神樂にて幕明く。

新造皆々　サアく、二階へござんせいなア。

義兵　これさ〳〵外聞が惡い、どうぞあやまるから、堪忍してくれ〳〵。
重芝　イエ〳〵堪忍なりんせん、お前の樣な高箒は、廓の法で仕置でござんす。サア早うお連れ申して下さんせ。
重川
重花　早うござんせいなア。（ト義兵衞を引張る、義兵衞少しむつとしたるこなしにて、）
義兵　斯うなつちやァおれも山形屋義兵衞だ、逃げやあしねえ、高が賣物買物だから、どこへでも上らないでどうするものだ、何も言分はない筈だ。
重芝　髮さへ切らせなさんすりや、言分はござんせぬ、サア早うござんせいなア。
義兵　これさ〳〵モウ逃げやァしないから、そんなに引張らずとも行くよ、こウ〳〵貴公達も見て居ることはない、何とか云つてくれねえか。
喜助　そこは私共も内幕の事、性惡をしなすつたお前さんが惡いのだから、どう口出しが出來ますものか。
伊助　かれこれ云ふだけ見世先で、見ッともなうござります。兎も角二階へいらつしやつてのお話になされませ。
皆々　サア〳〵お出でなさいまし〳〵。

ト皆々捨ゼリフで義兵衛を引張る、義兵衛行くまいとし、此爭ひに皆々わや〳〵云ふ。始終右の鳴物にて暖簾口よりおなべ遣手にて、後よりおさん田舍娘にて附き出で來り、

なべ　これさ〳〵、お前方は見世先で外聞の惡い、どうしたものだね。おや、どなたかと思つたら、義兵衛さんぢやござりませぬか。

義兵　あゝお鍋か、いゝ所へ來てくれた、聞いてくれ斯ういう譯で、御祝儀は濟んだが今日お禮廻りの歸りで仲間の者に誘はれて、ほんの附合で仕方なく釻菊へ上つたからの此の始末だ、どうかそちが口を利いて、今日の所は歸る樣にしちやあくれめえか。

重芝　イエ〳〵おなべどん、あゝ云はしやんすは皆嘘でござんす、疾うから釻菊へお馴染が出來て、それゆゑ私の方へおみあしの遠いといふ事は、よう知つて居るわいなア。

重川　其上お茶屋迄來るといふのは、あまりと云へば憎い仕方。

重花　朋輩だけに私等も、腹が立つてならないから、此のしげりに呼出しをかけさせ、やつとの事でお連れ申したのぢやわいな。

義兵　ホンニこの餓鬼めが覺えてうしやあがれ。

三人　ヤイ、だましてやつた〳〵。（ト指さして笑ふ。）

なべ　コレサ何の眞似だよ、靜にしねえか。まア何にしてもさう聞いて見ると、此儘お返し申すといふ譯にも行かないから、兎も角も二階へお連れ申すがよい。
義兵　そんならどうあつても、二階へ行かねばならぬのか。
喜助　知れたことさ、遣手衆があゝいふからは、大びらだ。
伊助　いやだと云やあ私共が、かつぎ上げますぜ。（ト是にて義兵衞是非なきこなし。）
義兵　アヽ戀は諸道の妨げぢやなア。
喜助　エヽ何を云ひなさる。（ト突きとばす。）
伊助
なべ　ソレ、早くお連れ申せ。
新造　サア、ござんせいなア〳〵。
ト始終右の鳴物にて重芝、重川、義兵衞を連れ、禿附き暖簾へはひる。おさん跡を見送り、
さん　やアをぢさんは姉さんに、ててを引かれて行つた、ホウヤラホヤラ〳〵。（トはやす。）
なべ　こう〳〵、此子はまた表へ出てからに、二階へ上つて居ねえのか。（トきつと云ふ。）
さん　それでも外へ出たければ出てもよいから、遠くへ行かず門口に遊んで居よと、內證とやらのをばさんが云うたわいなア。

喜助　イヤ内證のをばさんは有難いな。

伊助　なべ　そんな事もよく云ひ付けにやアならねえけれど、何をいふにも年は行かず、おまけに江戸玉ちやなし、伊勢あたりの産れだかち行儀は知らず、たゞの旅にしちやあ垢ぬけて居るのに、利口なのが取得だ。

喜助　又どつか取得がなけりやあ、あの女衒の忠藏だもの、伊勢街道くんだりから、えつちらおつちら買つちや來めえが、聞きやあ兩親がねえのださうだね。

なべ　どうせ女郎に賣られる位な、因果者だもの。

伊助　然し內證のおかみさんが、大層可愛がんなさるから、仕合せな子だ。

なべ　イヤモ、あまやかしほうだいサ、其上に子供の嫌ひな花魁に遣はせるのは、可愛さうだと云つてどうぞ重の井に抱へさせてくれろといふので、まづあの花魁の厄介さ。

さん　ヤア、おいらアあの重の井さんの、傍にゐるのが嬉しい〳〵。（ト悅ぶ。）

なべ　コレ〳〵また重の井さんが可愛がらしやると云つて、我儘を云ふと、あの花魁のそばへは置かないよ。コレおさん〳〵。（トくどく呼ぶ、おさん少しぢれしこなしにて、）

さん　あいよウ。

なべ　エヽモ、そんな返事があるものか、今に禿らしい名が付くから、其名を呼んだら、アイと返事をしなよ。

さん　アイ。

なべ　モット長く。

さん　アイ――。

喜助伊助　イヤ、うまい〳〵。

なべ　サア内證へ行つておかみさんの前で、其通りやつて見せな。

さん　アイ――。

なべ　さうだ〳〵。そんなら喜助どん伊助どん、見世を氣を付けなよ。

さん　アイ――。

喜助伊助　こいつア大笑ひだ〳〵

なべ　ホンニをかしい子だなう。

ト流行唄通り神樂になり、おなべさんを連れ暖簾口へはひる。矢張り右の唄にて、花道より八平治中月代羽織着流し、大小置手拭にて、表付きの駒下駄をはき、後よりお升引手茶屋の下女、前垂掛にて箱

ぶらを疊んで持ち、白鳥の徳利を片手に提げて出來り、花道にて、

八平 吉原といふ所は夜に限らず晝間でも、何となく賑やかで氣が浮々といゝ所だ。そりやあさうとおやま、重の井の座敷は、明いて居ようかな。

ます 左樣でござります、流行ッ子の重の井さん、殊に丸一年も御病氣で、見世を引いてござんして、此春初めての御出勤でござりますから、定めしお客は落合ひませうし、多分名代座敷でござりませうよ。

八平 何でもいゝが、晝遊びにきたねえ座敷は恐れるから、そこはおぬしが働いてくりやれ。

ます 兎も角も承つて見ませうわいな。

ト矢張り右の鳴物にて、花道にて入替り、おます先に立ち舞臺へ來り、

モシ、重の井さんはお客かえ。

喜助 あゝ富岡屋のおやまどんか、お前にも似合はねえ、重の井さんに明きのないのは知れたことだ。

伊助 多いお客の其上へ鷲樣の揚詰めで、名代衆は粉になるやうさ。

ます ヲヤまア鷲樣とは、酉の町より今迄居續けのお客かえ。

兩人 何さ、分らねえことを云ふのだ。(ト此内八平治前へ出て、)

八平　こりや〳〵おやま、客を待たせて何をぐづ〳〵いたし居る。コリヤ若い者、身は重の井を買つて見たいのぢやが、名代は合點なれど、どうかよい座敷の明いて居る所はあるまいか。
喜助　左樣でござります、二階の事は遣手の掛りゆゑ、ちよつと呼んで承つて見ませう。
兩人　おなべどん〳〵。（ト呼立てる。）
なべ　アイ〳〵。（ト暖簾口より出來り、）私を呼んだは何だえ。
喜助　お客樣が重の井さんをお名ざしで、名代も御承知でどうかお座敷のきれいな所とおつしやるのだが、どつか明いて居ようかね。
なべ　お馴染かえ。
ます　イエお初會でござんすが、どうかお前働いて上げて下さんせいナ。
なべ　名代さへ御承知なら、どうかしませうわいなア。
ます　左樣なら、旦那、お上りなされませ。
八平　座敷はよいな。
なべ　私が呑込んで居りますれば、サアお出でなされませ。
喜作　お客だよ。（ト奧にて。）

大勢 アイ――。

トすがゞきにて八平治先に、此の人數先に暖簾口へはひる。後靜かなる兩吟の唄になり、花道より、與作着流し一本ざし雪駄にて、後よりお由茶屋の女房の拵へにて風呂敷を抱へ出來り花道にて、

よし モシ〳〵そこへお出でなさるのは、與作樣ではござりませぬか。

與作 あゝこれ誰かと思うたれば、井筒屋の御内儀、久しう逢ひませぬが、いつも替りがなうてようござる。

よし お前樣にも御機嫌よろしう、そして今日は大方重の井さんの所へでござりませうな。

與作 サア聞いて下され、知つての通り二階をせかれてゐるわしが身の上、それゆゑ去年中あれが病氣の其内も、只陰で案じるばかり、やう〳〵此春になつて見世へ出たと文の知らせはあつたれど、どうも顏を見ねば落着かれぬゆゑ、ちよつと、格子で逢はうと思ひ、火ともしを待兼ねて久しぶりで來ましたわいな。

よし それはまアよう來て上げなさんした、丁度私も花菱屋の二階迄、お客を迎ひに行く所ゆゑ、花魁へ其事をそつとお知らせ申しませうわいなア。

與作 そんならお前を頼む程に、よき樣に首尾をして下さりませ。

よし　そこは呑込んで居りますから、まァお出でなされませ。

　ト又唄になり、與作およし舞臺へ來る、此の時暖簾の内にて、

重芝　ちよつと仲の町迄行つて來る程に、義兵衛さんを逃さぬやうにして下さんせ。

よし　おゝあの聲は、重芝さん。

與作　丁度よい所であつた。（ト暖簾口より以前の重芝出て、花道の方へ行かうとする。）

よし　重芝さん〳〵。

重芝　どなたでござんす。

よし　私ぢやわいなァ。

重芝　ヲヽお前は井筒屋のおかみさん、何ぞ御用でござんすかえ。

よし　サアお前にちよつと。（ト重芝に囁く。）

重芝　そんなら與作様が。

よし　アヽモシ。（ト兩人あたりへ思入、與作前へ出て、）

與作　重芝殿、久しう逢ひませぬなう。

重芝　ホンニお前は與作様、ようまァお出でなされましたなァ。

與作　サアわしも疾から來る筈なれど、知つての通りの譯ゆゑに、人目を憚り來なんだが、さうして重の井はわしが事を、何ぞ云うて居りますか。

重芝　あなたもまア云うて居るの居ないのと、ホンにもう烏の啼ぬ日はあれど、あなたのお噂の出ないことはござんせぬ、いつそモウ逢ひたい〳〵と、其事ばかりおつしやつてぢやわいなア。

與作　其逢ひたいはわしも同じことなれど、逢ふことならぬ今の身の上、アヽ此の苦勞をしようより、いつそ死んだがましであらうか。（ト投首して思入。）

よし　これはしたり、嘘にも其樣ないまはしい事、おつしやるものではござりませぬ、おツつけお二人世間晴れ、逢はれる時節もござんせう、それに又今夜の所も、重芝さんがござんすりや、どうか首尾してお逢はせ申すでござんせうわいなア。

與作　それでは重芝殿、お前逢はして下さるか。

重芝　サアどうかお逢はせ申さうとは思つて居れど、内證のお上さんは、あゝいふよいお方ゆゑ、見て見ぬふりもなさらうが、あの意地惡のおなべどんにでも見付られでもした時は、なほお二人の爲にならねば、私も困つてゐる所なれど、二階の所はどうなりと私が首尾をする程に、お座敷へお連れ申すそれ迄を、お茶屋の口だけお上さん、氣を付けて下さんせいなア。

よし　ほんに困つたものでござんすが、三人寄れば文珠の智慧とやら、中でもあなたは男の事、よい思ひ付をなされませいなア。

與作　其思ひ付なら、かうしたらどうであらう、そこいらへ來る按摩に鳥目を取らせ、身廻りをそつくり借り、按摩になつて上がるとはどうであらう。

重芝　イエ〳〵此方の二階へは、御存じの慶政さんの外は、どの按摩さんでも上げないから、それは直に化の皮ぢやわいなア。

與作　それは困つたものぢやなア。

ト此内およし思入あつて、

よし　おゝよい思ひ附きがあります〳〵、凝つては思案に能はずとやら、丁度私がお客の着替を持つて來たこそ時の幸ひ、是を着かへて頭巾をお冠せ申し、私がお付き申したら、づッと御客で通れようがな。

重芝　ホンニ、こりや思ひ付でござんす。

與作　それでは出來合のお客になるのかな。

兩人　何であらうと、早うお着替なされませ〳〵。（ト兩人捨ゼリフにて與作に着物を着替へさせ、帯をしめ

頭巾を冠せ、)ようお似合ひなされましたわいなア。

與作　ヤットお客になりすました。

よし　そんなら重芝さんは、二階の首尾を。

重芝　合點でござんす、サア與作さん。

與作　アコレ。

重芝　ではない、お客樣。

與作　せかれた與作とは、見えまいな。

よし　どこへ出してもお大盡、

兩人　樣ぢやわいなア。

與作　そりや有難い。

ト立上る、此時後ろにて下足札の音する、與作びつくりして床几の上へへたるを、道具替りの知せ

びつくりさせをつた。

ト思入。およし重芝笑つて思入、此の模樣すがゞき、鈴の音にて此の道具廻る。

(重の井部屋の場)――本舞臺正面次の間、向ふ黒塗眞鍮金物の簞笥・此の上夜具棚・下の方長持。茶

碗棚の書割、よき所に衣桁に打掛をかけ、上手九尺床の間違ひ棚、づッと上の方三尺の襖の出這入あり、下手よき所に手摺附二階の上り口、いつもの所次の間、よき所に重の井傾城打掛好みの拵へにて傍に料紙を置き、卷紙を持ち文を書いて居る、下手に以前のおさん、寢はらばひになり、道中双六を見て居る。總て重の井部屋の模樣よろしく、誂への端唄にて道具留る、と重の井文を書きしまひ思入あつて、

重井　鷲さんの寐た間を幸ひ、ぬしの所へ便りの此文、それにつけても此頃は何ぼ二階をせかれても、問ひ音信のないは氣掛り、モシ煩ひでもなされてかと、案じる儘に占やさん、叉辻占の惡くないは、お替りなさんす事もないかと、思へば狹い女子の心、どうぞ早うお顏を見て、落着きたい物ぢやなア。（トしんきなるこなし、ぢつと思入、おさん見て、）

さん　花魁おあんばひが惡ければ、おさすりして上げようかえ。

重井　イヤどこも惡うはない。ヲヽホンニさう云やるのは、何ぞほしうなりやつたかや。

さん　イエ／＼さつきおかみさんに、こんなよい物貰うたから、何もほしうはござりませぬ。

ト双六を見せる。

重井　おゝそりや道中双六、よい物を貰うたの、今に賭ける物をやる程にしげりやたよりと双六して遊

びや。

さん　アイ〳〵。（ト流行唄になり、階子の上り口より以前のおよし出來り）

よし　花魁今日は。

重井　おや、井筒屋のおかみさん、ようござんした。

よし　いつでもお爲にならないお客ばかりお連れ申して、さぞ御迷惑でござんせう。

重井　何のまア、毎度有難うござんす、いつもながらお前さんのお内も、御繁昌でようござんすなア。

よし　どういたしましてまだ新店の事、それにつきいつぞやはお願ひ申さうと存じて居りましたは、去年の暮に此のお江戸へ參りまして、どうやらかうやら、見世開きはいたしましたれど、何を申すもお近付は少なし、どうか花魁へお願ひ申し、お客樣を引付けてお貰ひ申さうと存じて居りましたれど、其の頃は御病氣ゆゑ御遠慮申して居りましたが、今度は丁度よい折柄、どうぞあなたから憚り乍ら、よろしうお願ひ申しますよ。

重井　そりやまァ折角のお頼み乍ら、私とても去年の春ぎり、久しく見世を引いて居て、やうやく病ひもなほつたゆゑ、見世へ出たれど本當に、お客の勤めのならない私、人さんの事よりも、私が身をば何れも樣へ、お願ひ申さにやならぬわいなア。

よし　そりやさうでもござんせうが、御贔屓の多い花魁ゆゑ、別にお願ひなさらずとも、お前さんはよいけれど、お馴染もない私はたゞ花魁が力ゆゑ、さうおつしやらずと皆様へ、お贔屓なされて下さるやうお願ひなされて下さんせいなア。

重井　其様に云はしやんすなら、脱れぬ中のお前ゆゑ、出過ぎたやつと皆様に、お叱りを受けるとも、お願ひ申して上げるわいなア。

よし　どうぞお願ひなされて下さりませいなア。（ト是にて兩人見物へ向ひ、辭儀をなし、）只今お聞き遊ばす通り、久しい病ひに本當の勤めも出來ぬ此の重の井　先づ我身から何れも樣へお願ひ申さにやならぬのを、よんどころなく頼まれまして、茶屋の內儀がいたします、其　杯の引付を、女郎がいたすも逆乍らお願ひ申す井筒屋のおかみさんは、脱れぬ中の內緣にて、昨年中上方から江戸表へ私を、頼つて參りましたゆゑ、取敢ず此町內で見世開きをいたしました所、仕合せとお取立でお茶屋の數にも入りまして、此樣な有難い事はござりませぬ、猶此末とも私同樣御贔屓を持ちまして、いつ〳〵迄も御當所で、井筒屋のおかみさんと云はれますやうお取立を、偏にお願ひ申しまする。（ト兩人よろしく辭儀をなし、）とんだお前の引付で、思はぬ汗になつたわいなア。

よし　誠に花魁有難うござりました、是で安心いたしましたわいな。此のお禮にはよい事を、お聞かせ申しませうわいな。

重井　なに、よい事とはえ。

よし　ちよつとお耳を。（ト重の井のそばへ行き、ちよつと囁く。）

重井　えゝ、そんならぬしは新座敷の、あの戸棚の內に。

よし　お忍ばせ申しておきましたが、今の內は人目もあれば、後にこつそりとお逢ひなされませいなあ。

重井　たまさか逢ふに人目を憚り、逢はれぬといふ互ひの因果、どうぞ早う身儘になり、今の苦げんを昔し語りに、ぬしと添ひたうござんすわいなア。

よし　ヲヽ、尤もでござんす、道理でござんす。

ト泣入る重の井を介抱する、此時上手の襖を明け、官太夫ゑんで鬘、羽織衣裳にて出來り、樣子を窺ひ居て、

官太　身共が身儘にいたしてやらう。（ト云ひ乍ら前へ出る。）

よし　や、あなたは鷲さん。

重井　そんなら、今の樣子をば。

宮太　委しい譯は知らねども、身儘になりたいそちが願ひ、後の所は兎も角も、一旦それがしが身請をなせば、武士の一分立つといふもの、そちがおゝとさへ云ふならば、後とも言はず身請の相談偽りならぬ其證據は、手付の百兩それがしが此如く、所持して居る。

ト懷中より縞の財布に入りし百兩を出して見せる、是をおさんぢつと見て居る、宮太夫こなしあつて財布を懷中なし、

何と、これでも得心せぬか。

重井　サア、どう思ひ直して見ても。

宮太　身共が身請不承知か。

重井　どうぞ堪忍して下さんせいなア。

トきせるを杖にぢつとさしうつむく、宮太夫むつとせしこなしにて立掛り、又氣をかへて思入、誂への合方になり、

宮太　そりやつれないぞえこりや重の井、今更申すも愚なれど、そちが屋敷に居る内より、あの與作と譯ある事、それがし知つても知らぬ顏、人の風說をかげになり日向となつて防ぎしも、心に深き

所存はあれど、與作をいさゝか憎しとも思はぬ證據は彼れが親、與三兵衛が横死の後國遠なせし與作に代り、三回忌の法事迄勤めてやりし身が親切、其恩あるそれがしへそちが身を任せたとて與作がかれこれ申しもせまい、又おぬしとて身を賣れば、枕の替る流れの勤め、誰に義理も遠慮も入らぬ、そこらこゝらを考へて、氣よく身請をされてくりやれ。

重井　御親切は嬉しいが、初手から知れし私の心、お前が初めにござんした時さしをついたは爰の事、由留木のお家の奥勤め、それには引かへ今の身は君傾城に成り下り、お目に掛るも恥かしければお斷り申せしを、それを達てとおつしやつて座敷ばかりとあるゆゑに、與作さんにも恩のある、お前の事とあきらめて、恥を捨て今日が日迄つき合うては居りましたが、ぬしも知つて居やしやんす通り、與作さんとは深い中、それゆゑどうも身請の事は堪忍して下さんせいなア。

宮太　與作が事も存じ居るから身請をするのだ、所詮廓では張とやら意氣地とやらで返事もなるまい、まアよく物を考へて見やれ、與作に掛つて七八年苦勞の上の此の勤め、湯錢から何やかやおぬしの世話と知つて居るから、樂にさそうと思ふ料簡、傾城の貧乏もあんまり出來た事でもないぞよ。

重井　太夫と云はるゝ身を以て、男ゆゑなら難艱辛苦、苦勞が結句たのしみに、なるが廓の習ひぢやも

の、朋輩衆に笑はれても、ちつとも恥と思はねば、何を聞いても空吹く風、こんな樂な事はござんせぬわいなア。
官太　スリヤ身請の相談は、
重井　お斷りでござんす。（ト脇を向いて言ふ、官太夫きつと思入あつて、）
官太　むゝ、思ひ切らう。
重井　えゝ。
官太　おれも身請の事は思ひ切るから、おぬしも又思ひきりやれ。
重井　與作樣の事かえ。
官太　イヽヤ、敵を。
重井　何と云はしやんす。（ト詰寄つて思入、替つた合方になり、）
官太　サア八九年尋ねても、今に知れぬ敵の行方、知つて居るはそれがしばかり、何で知れよう其の敵、こりや思ひ切る方がよからう。
重井　ほんに知つて居やしやんすか。
官太　イヽヤ、知らぬ。

重井　何のことでござんすぞいなア。
宮太　敵を知つて居ると云へば、今迄傍へもよらぬ重の井、俄にそばへよる樣子、そんな淺はかな料簡で何の敵が知れるものか、友朋輩も多い中、別段懇意の與三兵衛なれば、おれも敵がうたせてやりたさ、云はゞ與作が身の爲と、思つておれが身請の相談、
重井　お心ありげな私の身請、そんならお前に身を任せば、敵の在所實名を、
宮太　敎へてもやる、討してもやる。
重井　きつと私の身請の事も、
宮太　請出さいで何といたさう。

　トゆつたりと思入あつて、重の井を引寄せる、此内下手屋體の障子を明け、八平治窺ひ居て、

八平　イヤ、其の身請は身共がいたす。
宮太　何と。（ト思入。合方になり、八平治前へ出る、重の井見て、）
重井　ヤ、お前は。
宮太　ほんにそちは八平治、何故あつて身請の邪魔を。
八平　致す心もなかつたが、名指で初會に上りし二階、引附もせずまじ〳〵と廻し座敷に床の番、おこゝ

りやあ野暮とか甚助とか、ふてうの附くのが口惜しさに、やせ我慢をして居て見たが、退屈過ぎてぶら／＼と廊下鳶に部屋の外、立聞く内のひそ／＼話し、相手は重の井身請の相談、癪にさはつて思はずも、口から出任せ飛込んだは、この身請の彌次馬さ。

重井　そんなら最前名指しにて、初會のお客と云うたのは。

八平　いかにも身共だ、相方になりやれ。

重井　お前もまア、今身請せんと云ふ口の下から、相方になれと云はしやんすは、やつぱり勤めで遊ぶ氣か、お前の樣な性惡な、お客に出るのはお斷り、第一いゝさしがござんすわいなあ。

八平　なに、いゝさしがある、其いゝさしといふのは誰だ。

官太　そのいゝさしといふのは、おれのことだ。

八平　スリヤいゝさしといふのは鷲塚どんか、そりや以前なら知らぬこと、勘當受けりやあ兄でねえ、赤の他人の浪人者、今の其名は幸崎甚内、知る人でねえ鷲とやら、いゝさしをつかれる覺えはねえ、たとひ杯いたさずとも、階子を上りやあお客のそれがし、此重の井はおれが相方、たとひいやおゝ云はうとも、高が女郎は賣物買物。

ト　きつと云ひ、重の井と顔見合せ、思入あつて、

なう花魁、そんな物ぢやござらぬか。（トくだけて思入、重の井こなしあつて、）

重井　そりやもうお前が云はないでも金で買はるゝ私の身は、知れてはあれどお斷り申さにやならぬ其譯は、お前と此鷲さんとは、今は緣がないにもせよ昔は兄の鷲さんへ、馴染となれば一夜妻、何ほいやしい傾城でも、血筋の逢はぬが女郎の意氣地、たとひ賣物買物でも、お前にばかりは出られぬわいなア。

八平　面白い、さうすつぱりと云ひ放せば浪人乍らおれも侍、そんならさうかと此座は引かぬ、一旦口外なしたる身請、斯うなるからには致さにやおかぬ。鷲塚とやら此重の井は身共へ下せえ。

官太　イヽヤならぬ、是れ迄通ひ詰めたれど、帶紐とかぬ重の井を、口說き落して身請のつば際、それを初會の其方へ、根引させるは不得心。

八平　詞を下けて賴むのも、今はともあれ以前の因みを思へばこそ、それをいなめば是非がない、戀は仕勝と云ふからは、身共が方へ身請いたす。

官太　コリヤ面白い、われがさういふ心なら、後とも云はず今爰で、

八平　主人をよんでお互ひに、身請の掛合。

官太　どちらへ札が落ちようとて。

八平　遺恨は後して、
兩人　此座に於て、それ主人を呼べ〳〵。
よし　ハイ、畏まりました。(ト およし二階の上り口より)おかみさん〳〵。(ト呼ぶ、下にて)
つな　アイ〳〵。(ト階子の口よりおつな、遊女屋女房の拵へにて出來り)けたゝましう私をよんだは、何事でござんすぞいなア。(ト八平治おつなを見て)
八平　コリヤ〳〵、そちは此家の女房か、主人は居らぬか。
つな　ハイ〳〵主人は疾うにみまかりまして、只今にては女主人の私、何ぞ御用でもござりますなら、仰せ聞けられて下さりませ。
八平　其の用事といふは別儀でない、そちが抱へ重の井へ、今宵名ざしで初會の客ぢやが、あれに居る〻鷲とやらいふ仁と、ふとした事より云ひつのり、今此座にて重の井を、我へ〳〵と身請の爭ひ、果しなければ其方を是へよびしは其の捌きを付けさせんと存ずるゆゑ。
つな　それはまアく有難う存じまする。たとひ御初會のお客でもよく〳〵に思へばこそ、大金出して身請しようとおつしやるは、願うてもないあれが仕合せ、又私も嬉しい事ゆゑ、直に御返事申したけれど、何を申すも重の井はこちの店の一枚看板、是が居らねば自然と衰微、迷惑には存じ

ますれど、そこは又よみとうた、當人さへ得心なれば何ぼ主人の私でも、成らぬとも申されませねば、どちらへなりと重の井が、おゝとさへ云ふならば。

八平　スリヤ重の井が、心任せになされて下さりませ。

つな　此方にいなやはござりませぬ。

重井　それでも私やあなた方へは。

官太　いやといふのは身共が先約、今重の井が得心なせば、是非とも身請は我方へ。

つな　そんなら我身は鷲様と。

重井　身請の約束しますわいなあ。

つな　様子ありげな其の詞、あれ程迄に鷲さんを、嫌うたそなたがどういふ譯で。

重井　サア、それも敵の。

つな　エヽ。

重井　いゝえいなあ、堅き約束せしからは、どうぞ私を鷲さんへ。

つな　行きたい事なら、そなたの氣任せ。

八平　イヽヤ、それでは身共の武士が立たぬ。

つな　テモ當人が行き度いと、申しますればそれ迄の、御縁とあなたもあきらめて、外の女郎と見立替へ、此座の事は是れぎりに、水に流して下さりませ。

八平　そりや斯うならぬ先の事、一旦武士が望み掛つた此の身請、我にならずばよそ外へ、身請さす事相成らぬ。

つな　それ程迄に仰しるもの、いなとも云はれぬ愛嬌生業、左様ならば不束乍ら、女主人の私が、お二人様のお心に濟むか濟まぬか知らねども、此の座のもつれの納まるやう、計らひますれば重の井も、私に任せて置いたがよい。（トちよつと重の井へ思入）

官太　イヤ、其扱ひも品によつては、身共がならぬぞ。

つな　ハテ私の計らひで、當の違うた其時は、又どうなりと期を延ばし。

八平　ヤ。

つな　サア、碁将棊の勝負で、身請の極りを付けるのも、どうやら太い様なれど、初春らしく何ぞ外に。

ト邊りを見廻し、おさんの持つて居る双六に目をつけ、

幸ひ爰に道中双六、是で身請の納まりを、お付けなされて下さりませ。

官太　なに、此の双六で、
兩人　納まりとは。
つな　サア身請をされる身は一つ、望むお方はお二人ゆゑ、其納まりとは爰の事、どちらへどうとも私の自由にならぬは賽の目次第、お二人樣の御運任せ、京へ上るが身請の當人、旦那方此の勝負は私が出來ましたぢやござりませぬか。
兩人　面白い。
つな　そんなら爰で身請の納まり、お二人さんのお印を。
官太　身共へ身請を。（ト重の井のさして居る銀かんを拔きとり、）松葉のかんざし。（ト出す。）
八平　所をこつちへ。（トおさんのさして居る紙細工の薄のかんざしを拔きとり、）招く穗薄。（ト出す。）
さん　おいらもはひらう。（ト立掛るをおつな留めて、）
つな　アコレ、邪魔は內證の私が、お二人さんへ媒役、千箱の玉さか逢ふ夜半を、手活の花に駿河路や三國一の聟定め。
よし　サア、双六の始まり〱。（ト誂への浮いた合方になり。）
つな　先約なれば、まづあなたから。（ト賽を官太夫の前へ出す、官太夫取上げ、）

宮太　そんなら爰で、春めかしく、
よし　居ながら道中止めさせて、
八平　日本橋からふられても、
つな　我物なれば品川あるか、
重井　どちらが勝つても、まゝの川崎、
宮太　戀かな川とあきらめて、
つな　間夫と思ふも程ケ谷あれば、
八平　燒餅坂にとつかはと、
重井　急ぐ磯邊も打過ぎて、
宮太　小田原ならぬ身請の相談、
重井　どちらへどうと二道の、
なつ　三枚橋や駕籠の鳥、嬉しい初音聞くからに、
八平　心も關を越えれば、いつか、
重井　京へ近づく此身の振分け、

官太 一つあまれば大津のたのしみ、
よし 三つあまれば、
つな かたき石部の、
八平 其の約束は、
官太 身共が方へ。

ト此内官太夫八平治替り〳〵に賽を振ること、おつなおよし兩人の印のかんざしを送り、トヾ官太夫上りしこなし、

よし ソレ、鷲さんがお上りでござんす。
つな ホンニ二つで、
重井 二人は女夫、
官太 身共がさいに。(ト重の井を引寄せ、件の賽を取り、八平治の方へ投げやる。)
八平 此方はふられて。(ト立掛るを、)
つな アモシ。(トちよつと留めるを道具替けの知せ、)お目出度う存じまする。

ト此とたん、よろしく土手の提灯の唄になり道具廻る。

〔同廻し部屋の場〕――本舞臺三間の間、上手寄りに廻し部屋、三方小形の襖、下手奥深に廊下、部屋々々を見たる片遠見よろしく、流行唄にて道具留まる。と直にばた〳〵になり、廊下の方より幕明きの義兵衞、新造の振袖を着て逃げて出て來る、以前の重芝、重川、重花、めい〳〵剃刀鋏を持ち、喜助伊助の若い者附き追つて出來り、義兵衞を捕へ、

義兵　ア、あやまつた〳〵。

重芝　なんぼあやまらしやんしても、其なりで外へ出る事はなるまいわいなア。

重花　ぬしのお蔭で、寒い思ひをして立つて居たわいなア。

重川　其意趣返しに、何でも坊さんにせにやなりませぬ。

皆々　覺悟なさんせ〳〵。（ト立掛るを支へ、）

義兵　ア、待つてくれ〳〵、おぬし達にこんななりにされたので、生憎風を引いたから、頭をいぢつては惡い。ハツクショ、此の通りだから坊主にするのは堪忍してくれ〳〵。

重芝　イエ〳〵お前のくさめは風ではない、鈌菊の女郞衆が、噂をして居るのぢやわいなア。

義兵　そりや何とも云へない。

重芝　あれ、あんなあつかましい事を云ふわいなア。

喜助　そののろけばかりでも、坊主がものはありますぜ。

伊助　かまはずにやんなせえ、私共がつかまへて居りませう。

重芝　ソレ、早う鋏ではさみなさんせ。

重川
重花　あい〳〵。

義兵　こいつはたまらぬ。（ト逃げ出す。皆々追ひかけてとらへる。よき程に幕あきのおなべ出来り）

なべ　お前さん方、ちと靜になされませぬか、子供と同じ樣になぜそんなに騷ぎなさんす。

重芝　おなべどん子供ではござんせぬ、性惡の義兵衞さんぢやわいなア。

なべ　おやまア、馬鹿らしい。

重川　そしてまア見なさんせ。ぬしは私の手を此樣に、血の出る程ひつかいたわいなア。

重花　私も袖をやぶられたれば、又お針さんにしかられますわいなア。

なべ　どうせお呼び申さない客人だから、重芝さんの御料簡通りにする迄は、もしもの事でもあつては惡うござんす。（ト皆々を鎭め、）コレ義兵衞さん、これはあなたがお惡うござんす、こちらにお馴染があるものを、外へ上つたはお前さんの心がら、ちとおたしなみなされませ。

義兵　おれがわきへ行つたのは重々惡い、どうぞ此方よい樣に詫言しておれに着物を着せてくれぬか。

なべ　そりや私も取なしをしませうが、その代り夜具でもしてお上げなさらなければ、詫言は出來ませぬが、それは御承知かえ。

義兵　なに、夜具、夜具があればこんな寒い思ひをするものか、そりやあとんだことだ、

なべ　それがならずば、（ト重芝の袖を引く。）

重芝　早く坊さんにするがよいわいなア。

皆々　それがよい〳〵。（ト立掛るを義兵衞留めて、）

義兵　アヽコレ待つてくれ〳〵、かうなつたら仕方がない、よいわ、どうするものだ、猪食つた報いだしよことがない、夜具を拵へよう。

なべ　さうばかりでは詫言にはなりません、茶屋を呼んで請合はせてゝなければ、着物を着せることはならぬぞえ。

義兵　きつと今日中にかたを付ける、茶屋を呼ぶ迄もない、今下に座頭の慶政が來て居たが、あいつに百兩程貸があるから、それで事を濟ましてくれ。

なべ　どうしてべんちやらなお前さんがさう云つたつても、慥な證文でも見なければ、お返し申す譯にはまゐりませぬ。

義兵　サア其の證文は內にある。

喜助　モシ〳〵お前さんを裸にする時、證文らしいものを落しなすつたから、拾つておいたが、これぢやござりませぬか。（ト證文の樣にしたる淨瑠璃觸を出す。）

義兵　イヤ、なにも證文は持つて來ぬ筈だ。

なべ　何しろ讀んで御覽な。

喜助　承知しました。（ト淨瑠璃觸を開き、）淨瑠璃名題――淸元延壽太夫――（ト伊助替つて讀む。）

伊助　何だ、こりや淨瑠璃觸だ。

なべ　それぢやァさつき隣から、今夜淸元の淨瑠璃があるから、聞きに來いと廻狀が來たが、それを忘つて行つたのだ。

義兵　どうか其格でおれの方も、忘れてはくれないか。

重芝　虫のいゝ事をお云ひなさいよ。おなべどん、早くどうかしておくれよ。

なべ　それぢやあ爰へ慶政さんを、呼ばうぢやござりませぬか。

義兵　おゝさうしてくりやれ、しかしおれだと云ふと來ないから、其のつもりでよんでくりやれ。

なべ　アイ〳〵。（ト下手廊下の方へ向ひ、）慶政さん〳〵。（ト呼ぶ、後ろにて、）

慶政　ハイ〳〵、只今參ります〳〵。（ト慶政廊下の方よりさぐり〳〵出來り）お呼びなすつたは、おなべどんのお聲だが、お前さんが御療治をなさるのかね。

なべ　イエ〳〵お客樣だよ、サアこつちへお出で。

トおなべ手を引き、義兵衞のそばへつれて行く、慶政捨ゼリフにて義兵衞の體をなぜて見て、

慶政　お客だと云つて、よくおだましなすつたね、こりや誰か新造衆の內だ。

義兵　アイ、山形といふ新造でありんす。

慶政　エヽ義兵衞さんかえ。（ト慶政逃げにかゝるを、）

義兵　おツと逃げまい慶政坊、定めし噂を聞いたであらう。爰の內の重芝の所へ馴染んで來たが、今日附合で京町の鈥菊へ行つたのをつかまつて、今坊主にされる所だ。

慶政　それはけしからぬ事でござります。

義兵　えいやつと、夜具で詫事が出來ました。

慶政　それはまアお仕合せな。

義兵　なに仕合せな事があるものか、安くも五六十の散財だ、それに付いて去年の春、おぬしに貸した七十兩、五月迄の約束が、だん〳〵延びにおどりと利で、丁度高も百兩ばかり、大晦日迄には必

ずと、師匠の澤田檢校が、請合ゆゑに待つた所、今日の明日のと正月迄、とう〳〵おぬしに引きずられたが、爰で逢つたは地獄で佛、今聞く通りの御難だから、今百兩返してくりやれ。

慶政　五月からだん〳〵に、延引いたした金ゆゑに、暮には是非と思つた所、冬霜がれの生業ゆゑ、つい行届かずに春になり、申譯がござりませぬから、やつとのことで調達いたし、あしたは持つて上らうと腕へ預けて置きましたゆゑ、今晩遅うなりましたら明晩、明晩御目に掛らずば明後晩、

義兵　さう延ばす位ゐなら、今催促をするものか、まアおれが此なりを見やれ。と云つた所が盲目ぢや仕方がないが、此廓でもちつとそつと顔を知られた此の義兵衞、それがこんな目に逢つちや、おれの名折れになる事だから、どうぞ今返してくれ、貸した金を取るのだけれど、コレ手を合せて拜む〳〵。

慶政　御恩になつたお前樣に、お借り申した金といひ、今差當る此の御難儀、お返し申さいで何といたしませう。どうぞ引け迄お待ちなされて下さりませ。

義兵　それ迄此なりでをられるものかな。(ト慶政當惑の思入にて、)

慶政　これおなべどん、私から今日中に義兵衞樣へ、きつと百兩返す金がござりますれば、此の慶政が請合ふから、着物を上げて下さりませ、一生のお願ひでござります。

なべ　日頃正直な慶政殿が、あの様に云はるゝからは、よもや違ひもござんすまい。
重芝　それ〳〵ぬしが請合ひなさんすなら、取上げた羽織や着物を、お着せ申すがよからうわいなア。
なべ　お前さへ其氣なら、お着せ申して上げなさんせいなア。
慶政　それはまア有難う存じまする。
喜助　そんなら慶政さん、引け迄には間違ひなく、
伊助　きつと金は出來ますね。
慶政　出來ます段か、預けてござります。
義兵　是が間違へば、たゞはすまないよ。
慶政　ハイ五丁町をとめられませう。
義兵　とめる所ぢやない、檢校殿へ屆けて阿呆拂ひだ。
なべ　そんならお前に免じて重芝さんも、料簡しなさんした程に、あとで笑はれるやうなことでもあると、私も掛り合ぢやによつて、明日から二階のしめしが出來ないよ。
慶政　必ずお案じなされまするな。
喜助　それでまア此の一件も濟んだといふものだ。しかし淨瑠璃觸の事を忘れた、いよ〳〵此所坊主も

納まり、

伊助　其の金高利で、座頭に御免じ下さりませう。

義兵　エヽ惡く洒落やアがらア。(ト兩人を突き倒し、)そんなら慶政、必ず返事を。(ト時代に云ひ、)此なりでにらまれもしまい、待つて居いんすよウ。

皆々　イヤ、あきれたものだ。

ト流行唄になり、此の人數皆々廊下へはひる。慶政殘り思入あつて、

慶政　アヽどうで返す金なれど、差當つて此場の難儀、不斷參つてお世話になる、重の井樣の手詰を見兼ね、お貸し申した金なれば、切ない事を知つて居乍ら、催促することもならず、打捨て置く内に、ふつてわいたる今夜の災難、所詮言つた所が出來はしまい、とあつて今夜に限る金の催促、

ト此時四ツの拍子木鳴るを、指折りかぞへ、

ありやモウ四つ、引け迄はモウ一時、こりや何としたら、

ト下に居るを、木の頭

よからうなア。

ト腕組をなし、思案のこなし、早き唄、やはり四つの拍子木にてよろしく

ひやうし　幕

中幕

重の井別座敷の場

〔役名――伊達の與作、山形屋重兵衞、鷺塚八平次、鷺塚官太夫、座頭慶政實は與作兄與八郎、若い者喜助、同伊助。傾城重の井實は由留木の腰元重の井、じねんじよのおさん、井筒屋女房お由、花菱屋女房おつな實ハ八藏妹小万、遣手おなべ、新造重芝、同重川、同重花等。〕

〔重の井別座敷の場〕――本舞臺三間の間向ふ床の間、違ひ棚、下手夜具棚、此の下襖、戸棚明立、上手一間の障子屋體、眞中一面に伊豫簾をおろし、雨落より手摺を出し、下手隣の二階屋、前側黑塀の張物にて隱し、總て重の井別座敷の體よろしく、時の鐘にて幕明く。と直に知らせに付き下手黑塀を打返し、爰に淸元連中居並び、兩吟の淨瑠璃になる。

〽一群の雁の音ひくき雨催ひ、空も朧に重の井が晴れぬ思ひの部屋の內、床の柳の輪に結ぶ緣しも長き流れの身、

ト此文句よき程に前側の伊豫簾を卷上げる、內に以前の重の井煙管を杖にさしうつむき居る、おさんは丸行燈の傍にて、草双紙を見て居る。

〽誰と根じめの白玉や、八千代とかけし戀仲も、せかれてぐちに落椿、

ト此内顏を上げ、よろしく思入あつて、

重井　ア、鷲さんと身請の約束はしたれども、たとひ僅のうちなりとも、いやなお方のそばに居て、顏を見るさへ思ひの種、早うだましてどうか敵の、(トあたりへ思入あつて)幸ひ今が丁度人絶、さぞぬしが窮屈で居やしやんせう。コレ我身達は、誰ぞ爰へ來はせぬか、そこらをよく見てゐてたもや。

兩人　アイ〳〵。

〽見廻す下や上草履、廊下のあゆみ重芝が、

ト此内重の井も延上り上手を窺ふ、おさんは立つて手摺へつかまり、あたりを見廻し、人の來たる思入にて、

さん　アレ、重芝さんが。

重井　ぬしなら來てもよいわいなう。

〽苦界にうきを重芝が、色の中立中の間の、障子を明けて如月や、まだ肌寒き春の風、

ト此内下手屋體の障子をあけ、以前の重芝出て、

重芝　花魁。
重井　重芝さんか。
重芝　まだぬしに逢はしやんせぬか。
重井　サアお前と井筒屋のおかみさんが、宵の內は辛抱せいと。あれ程迄に云はしやんしたゆゑ、今迄こらへて居たわいなア。
重芝　さぞ逢ひたうござんしたらう。丁度今がよい首尾ゆゑ、ゆるりとそこで。
重井　有難うござんす。
〽あたりの首尾も宵の間に、忍ぶ與作が戶棚より、雲間をもるゝ月ならで影さへうすきとりなりに、いとゞ思ひのます鏡、
ト此內重芝あたりを見廻し、下手の戶棚をそつと明ける、內に與作居る、重芝與作にちよつと囁く。與作出てもよいかといふ思入、重芝大事ないといふ仕方して、あたりを窺ひ居る、與作そろ〳〵と前へ出る、重の井見て爰へ來いといふこなし、與作そつと重の井のそばへ行く事、此文句一ばいに納まる。
久し振でようまァ來て下さんした、私やもう逢ひたうて〳〵、夢にばッかり見て居たわいなア。

與作　その逢ひたいはそなたより、わしが心にもなつて見や、去年中のそなたの煩ひ、どうか〳〵と案じるばかり、見舞ひたいにも二階はとめられ、仕方なく〳〵不斷から、信心をする金比羅樣へ、水をあびてのお百度參り、其の御利益にや全快と聞いたばかりで逢ふは初めて、ようまァ無事で居てたもつたなう。

重井　サア其の御利益にや此樣に、全快したもお馴染の、お客樣が親切に度々見舞うて下さんして、或る日の事に私の顏を、つく〴〵と御覽なされ、コレ太夫此中から見る所、たゞならぬおぬしの病氣、どうかおれが斯う云へば、力を落さすやうなれども、所詮かうして居た日には、全快するは覺束ねば、チト道は遠けれど、よい醫者があるゆゑに、まづそれへ掛つて見ろと、其詞に從うて御暇貰うて出養生、駕籠で行く其折も、もしや是れが御當地の、見納めにならうかと、思ふに付けてお前の事、逢はずに行くはよみじの障りと、其お客に打明けて、どうぞ一と目逢はしてと、頼めばそれは惡い料簡、なまなか顏を見たならば、却つて互ひに涙の種、殊に病氣の爲にならぬ思ひ切れと無理やりに、連れられて行つた私の悲しさ、推量して下さんせいなァ。

トハツと泣伏す、與作も落涙なし、

與作　實はわしも其折は、何であらうとたゞ一ト目、逢うてくれて行きそなもの、切つても切れぬ中ち

やのに、むごい心と恨んで居たも有樣は、所詮かうして逢ふ事は、出來まいと思うたは、世間の人の噂にも、所詮太夫はむづかしいこつちのものではないとの蔭言、聞くに付けても今おぬしに先立たれでもした時は。一旦うもれた家名をば、起すはわしが柔弱な一人の業では覺束なく、女乍らもわしよりは氣だても勝れたおぬしの事、二人ならば人樣の一人前には行かうかと、力に思うたそなたにでも、もし死別れた其時はどうしようぞと實の事、今更云ふは恥かしいが、わしや男泣きに泣いてばかり居たわいなう。（ト泣く、重の井も涙乍らに、）

重井　そりや私も案じぬではござんせぬ、常から甲斐性のないお前、役にも立たぬ私をば賴りにして居やしやんしたゆゑ、もし此身が死んだとでも、聞かしやんしたら力を落し、折角是迄御當地で二人がういめつらいめした、其の艱難を水にして知らぬ所へでもござんしたら、又艱難をなさんせうと思へば猶々よみじのさはり、どうぞも一度全快して、せめて一日半日でもお前と一緒にならうぞと、思うた念が屆いてやら、夢見たやうな此お目もじ、是からはお前が賴りでござんす程に必ず見捨て下さんすなえ。

與作　何の見捨てよいものぞ、今もわしが云ふ通り、是迄そなたのお蔭にて、どうやらかうやらかすかにも、暮して居たわしなれば、そこがたとへの持ちつ持たれつ、及ばず乍ら力となれば、氣を落

さずに勤めをしや。
重井　よう云うて下さんした、それで私も落着きました、アヽ何ぢややら久し振にて逢うたらば、あまりの嬉しさに持病のつかえが、アイタヽヽ。（ト癪のおこりしこなし。）
與作　それはまア折の悪い、針でもして貰うたらよからうが、おゝ針と云へば最前ちよつと見掛けたが慶政とやらいふ座頭殿、重芝さん、あれを呼んでは悪うござるかの。
重芝　アノ人ならよけれど、今夜はちつとお金の事に付いて苦労があるゆゑ、呼びにやつても參りますまいわいな。（ト是を聞き重の井思入あつて、）
重井　何と云はしやんす、慶政さんがお金の苦労とは、どういふ譯でござんすえ。
重芝　サア花魁お聞きなさいまし、私の所へ來る山形屋の義兵衞さんが、性悪をしなさんしたゆゑ、夜具でもさせようと責めたれば、あの慶政さんに百兩とやら貸があると云うて、最前きつう催促して居やしやんしたわいな。
重井　スリヤ其のお金ゆゑ、アイタヽヽヽ。
與作　アヽ、またさし込むか。
重芝　困つたものでござんすな。

ト與作重芝捨ゼリフにて重の井の介抱をする、此時下手よりおよし出來り、

よし　ヲヤ花魁、どうぞなさんしたのかいな。

重芝　サア、例のお癪で困りますわいな。

よし　それもお久し振でぬしのお顏を御覽なされたゆゑ、嬉しいあまりのお癪なら、今に納まりますわいなァ。

與作　何ぞ合藥でもないか知らぬ。（ト與作そこらをうろ〳〵さがす、おさん思入あつて、）

さん　モシ花魁、私がさつきの樣に、おさすりをして上げようかえ。

重井　イヤ、きつう痛みはせぬ程に、必ず案じてたもるな。（ト與作おさんへ思入あつて、）

與作　此子はあまり見なれぬ子ぢやが、目見得に來たのか但し又、近所から遊びにでも來て居るのか。

重井　イエ〳〵此子の國は伊勢街道、判人の手から來ましたが、それは〳〵やさしい生れ、私の用は何によらず、しげりやみどりをさしおいて、何もかもしてくりやるゆゑ、誰よりも可愛うて、私が遣はうと思ふに幸ひ、おかみさんからお賴みで、世話してくれとおつしやるゆゑ、私が遣うて居るのでござんす。

與作　それはまァ、可愛がつてやるがよい。さうしてお前は、年はいくつで、名は何と云ふえ。

さん　名はじねんじよのおさん、年はかう。（ト兩手を出して見せる。）
與作　アヽ八ツになるか、父さんや母さんもあるのであらうな。
さん　父さんも母さんも死にました。あのぢいさんも死んだよ。
與作　みなし兒か、それなればこそ此の江戸迄、賣つてよこしたのぢやなア。
重井　私が產んだやゝも達者で居たら、丁度此位でござんせうなア。
與作　成程此位でもあらうか、月足らずで生れたゆゑ、所詮あれは育ちはしまい。アヽ我子の事を思ふにつけ、可愛いさうなは此子の身の上、緣者とてもないと見え、遠い所から此の江戸の、苦界へ賣られた不仕合せ、ア僅な金であらうのに。（ト愁ひの思入、重の井思入あつて、）
重井　ホンニ思へば世の中に、金が敵といふ事は、今身に當るわしが貧苦、何を隱さう與作さん、いつぞやお前へみついで上げた、七十兩のあのお金は、慶政さんの親切で貸してくれたを今以て、戻さぬゆゑに其樣な、催促されるも私から起つた事と聞き乍ら、打捨て置かれぬ譯ゆゑに、私や身も世もあられぬわいなア。
重之　アヽモシ〳〵花魁、そんなら其のお金は、お前が遣うて居やしやんしたのか、さういふ事なら私が行て、よい樣にする程に、必ず氣遣ひしなさんすな。

重井　イエ〳〵、それはお前の身晴れになる事、また私の方も今夜の内に、ちつと心當りがござんすりや、それは其儘にして置いて下さんせいなア。

重芝　それでもどうやら。

重井　何のいなア、私の年季を入れようと、返さぬ時は重の井が、あすから見世へ出られぬわいなア。

ト此内おさん思入あつて、ついと立つて行かうとする。

アコレおさん、どこへ行きやる。

さん　慥にしけりどんが、よぶ樣ぢやゆゑ。

重井　そんなら、早う行きや。

さん　アイヽ。（ト行かうとするを、）

重芝　アコレ行くなら私も一緒に行くわいなア。最前から長居して、久し振での話のお邪魔。

ト立掛るを、

よし　ほんに私も程の悪い、ちつとお話しがあつて來たけれど、申しそびれてツイうか〳〵、隨分半間のお茶屋でござんす。

重井　何のお前は居て下さんすれば、モシおなべどんでも來た時は、ぬしを初會のお客ぢやと、云拔が

ござんすれど、重芝さんはお客もあれば、お前はあちらへ行て下さんせ。
重芝　アイ〳〵、そんなら花魁、與作さん。
重井　モシ、今の事は、必ずともに。
重芝　そりや何事も花魁任せ。
よし　モシ重芝さん、誰も爰へ來ぬやうに、氣を付けて下さんせ。
重芝　ようござんすわいな、そんならたんと、
兩人　え。
重芝　お話しなさんせいなア。
〽流石は廓の色なれて、するを通して出て行く、（ト重芝おさんよろしくあつて、下手へはひる。）
〽後に二人は若草の、霜にしをれし風情にて、（ト重の井與作しをれたる思入。）
與作　慶政殿の金ゆゑにそなたの苦勞も此身から、起りし事と思ふにつけ男と生れ女子から、やしなひ受ける不甲斐なさ、殊更親の敵さへ手掛りとてもあらざるは、よく〳〵不運な我身の上、生きて居ても詮なければ、死ぬより外の思案はない。
重井　アヽモシ、最前から其事につき、お前に云はうと思うて居たが、重芝さんが居やしやんしたゆゑ

云ひ兼ねて居た所、モシ其の敵を鷲さんが、知つて居る樣子でござんす。

與作　なに、すりやあの敵を。

重井　名はさゝねども慥に私へ。

與作　云うたはそちの色香に迷ひ、うつゝをぬかしをるこそ幸ひ、コレ重の井、どうかそなたの働きで、敵の實名聞いてはくれまいか。

重井　サアそれも最前鷲さんが、身請の羽目にうつかりと、云つた事ゆゑ私の身を、たとひ僅かな内なりとも、ぬしに任せにやならぬぞえ。

與作　そんなら鷲にそなたの身を。

重井　それもお前の頼みでござんす。

與作　とは云へどうも。

重井　あれ又愚癡な事ばつかり。

〽ほんに思へば疑ひの深い仲にもまだ深い、二人が縁であり乍ら今の勤に引かへて、心由留木のお屋敷に奥と表の御奉公、稲荷祭りにお庭にてほころぶ梅のうれしくも、顏に茜の夕霞立ちし浮名に故郷を落ちて廓のうき勤めお前の爲にする事が知れぬかいなと取付いて譯も

涙にくれゐたる、

〽ひぞろ與作も今更に、何と云ふべき詞さへ泣き入る背をなでさすり、

ト此文句の內重の井よろしくあつて泣く、與作いたはり介抱なし、

與作　アヽこれは私が惡かつた、おぬしの心を知らぬやうに、疑つたのはこつちのあやまり、堪忍してたも／＼。それに付けて、今のことも何も言はぬ程に、どうぞそなたあの鷲に、身請をされて敵の實名聞いてたも、コレ重の井、今夜はわしが頼むわいなう。

重井　お前がさういふ心なら、元よりいやな鷲さんなれど、身を任せてもお望みを、きつと叶へて上げるわいなア。

與作　そんなら聞屆けてたもるか、アヽ忝い／＼、それでわしも落着いた。

よし　モシ、もうお話しも大概になされませ、最前內證のおかみさんが、あなたの上つた事をよく御存じで、私へそつとおつしやるには、遣手の目にでも掛る時には、又後の爲に惡いによつて、早くお返し申してくれろと、私へお頼みなれど、お久し振での事と思ひ、するを通して居りましたがあまり長くなると私が、內證へ濟みませぬから、サア／＼早うお歸りなされませ。

重井　イヽエそれでも私や、まだ云ひ殘した事もあれば。

よし　アレ又花魁、そんな未練をおつしやらずと、今夜の所はお返し申すがようござんす、また私がお逢はせ申しまするわいなア。サア／＼、早うお出でなされませ。

與作　そんならどうあつても、歸らねばなりませぬか。そんなら今の事を、賴んだぞよ。

重井　それは合點でござんすが、あんまり本意ない。（ト與作へ寄るをへだてゝ）

よし　これはしたり花魁でもござんせぬ、逢ふは嬉しく別れてつらいと、都々逸やとつちりとんの文句にある通り、逢へば別れは知れた事、斯う云へばどうか素人らしく、苦界の譯を知らぬ樣でござんすが、又お茶屋はお茶屋の呼吸がござんして、しみ／＼お逢はせ申さずに、お客を歸すが後の爲、ちつとはお茶屋の心にも、なつて見て下さんせいなア。然し與作樣は此方のお客ではないものを、ほゝゝゝ。

重井　サア、後はともあれ、今夜はしばし、

よし　ハテ思ひ切りの惡い。マア、ござんせいなア。

〽後へ心も引近く田の面の蛙音をなきて、又もや曇る春の夜に別れ／＼て、

ト此內重の井與作別れを惜しむ思入、三重になり、およし與作をむりに連れてはひろ、是にて淸元連中を消す、重の井ハアツと泣伏す、後合方になり、奥よりおさん官太夫の持つて居し財布を持ち出で

來り、中より百兩包みを出し財布を懷へ入れて、重の井のそばへ來り、

さん　モシ花魁え。（ト大きくいふ、重の井びつくりなし、）

重井　ヲヽびつくりしたわいの、そなたはあの今迄、奥にゐやつたか。

さん　今お針さんの使で外へ出ましたら、コレ、こんな物を拾つて來ました。（ト百兩包みを見せる。）

重井　ドレ〱見せや。（ト取上げよく〱見て、）こりやお金。（トがた〱とふるえて、）そなたはどゝゝ

どこで拾やつた〱。

さん　糸屋の前で拾ひましたが、こんなものは私やいらぬ、ほうづきと取りかへて下さんせいなア。

重井　ヲヽやりませう〱。シタガさんや、そなたほんまに拾やつたか。

さん　アイ。

重井　それではわしが預かつておく程に、そなたのほしがるほうづきを、わしがさう云うたと云つて、

いつもの水菓子屋へ取りにやりや。

さん　アイ〱。（トおさん下手へはひる。重の井思入あつて、）

重井　道ならねども慶政さんに、戻さにやならぬ今夜の手詰、お天道様どうぞ御免なされて下さりませ。

トちよつと拜む、此時下手にて、

義兵　うしやあがれ〳〵。

ト流行唄になり、義兵衞幕明きのなりにて、慶政を引きずつて出來り、

ヤイ、モウ約束の引は疾に打たぞ、それにうぬは人をいつ迄うから〳〵と待たしておいて、二階をまご〳〵あるいてゐやアがるとは、いけツぷてえどめくらだ、アヽアこりやうぬは、おれが金をふむ氣だな。

慶政　どういたしまして、なか〳〵其樣な心は毛頭ござりませぬ。

義兵　毛頭なけりや早く返せ。

慶政　それも最前申しまする通り、よそに預けてござりまするゆゑ。

義兵　其よそといふのはどこだ、よそとばかりぢや分らねえ、所はどこで名は何と云ふかそれを云へ。

慶政　サア、それは。

義兵　どうだ云へめえ。何云へるものか、初手から嘘といふ事は、黑い目でにらんで置いたのだ、盲目のくせに目あきをば、めくらにしたぬすツと坊主め、是からうぬを檢校の前へ引ずつて行つて、白い黑いを付けにやならねえ。サアおれと一緒にうしやがれ〳〵。

慶政　どうぞ左樣におつしやらずと。

義兵　サ、ぐづ／＼ぬかさずうしやあがれ／＼。（ト引すゑに掛るを重の井こなしあつて、）

重井　アモシ義兵衛さん、ちよつと待つて下さんせ。

義兵　待てとは花魁、何ぞ用かえ。

重井　アイ其慶政さんに用があるから。

義兵　何の用か知らないが、此方も急ぎの用だから、後にして下せえ。

重井　ハテ、さう云はずと私の頼み、まア／＼待つて下さんせいなア。

義兵　花魁の頼みとありやあ、まさかいやとも云はれまい。サア慶政、早く用を聞いたがいゝ。

ト突きはなす。

慶政　重の井様、何の御用でござりまする。

重井　外の事でもござんせぬが、義兵衛さんから借りなさんした、金を返してしまひなさんせいなア。

慶政　返したうはござりますが、さし當つて其金が。

重井　さつき私へ預けなさんした、金を返しなさんせいなア。

慶政　何でお前に金なぞを。

重井　ア、コレ忘れなさんしたか、療治をするに邪魔なゆゑ、預けてくれと言はしやんして私へ預けた

此金。

　　トさぐらせて呑込ませる。

何と、覺えがござんせうな。

慶政　成程左樣でござりましたか、さつぱりと忘れました。

義兵　とんだ所から金が出たが、何でもいゝからちつとも早く。（ト取りに掛るを。）

慶政　イエ師匠が請人で、お借り申した金なれば、お氣の毒ではござりますが、山谷の師匠の宅で、お待ちなされて下さりませ、私は仕かけた療治をしまひますと、直ぐにお後から參りまして、一旦師匠に見せた上で、あなたへお渡し申ませう。

義兵　成程道を云へばそんなものだ、それぢや先へ行つて待つて居るぜ。

慶政　左樣なされて下さりませ。

義兵　そんなら花魁。

重井　モウお歸りでござんすか。

義兵　おやかましうござりました。

　　ト下手上り口へはひる。慶政あたりへ聞耳を立て思入あつて、

慶政　モシ花魁、去年の春お前樣が、お困りなさるといふ事を、お話しがござりましたから、日頃私外ならず、御贔屓にして下さりますが、せめてもの御恩報じに、お貸し申したあの金子、それはなしに今の難儀を、見兼ねてお返し下さりましたは、定めて是は御入用の、金子と存じまするから、やはり是れはあなたの方で、お遣ひなされて下さりませ。

重井　お志しは嬉しいが、是は昨夜お客樣から、思ひがけなく貰うたお金、かういふ時にお返し申さにや、返す時がござんせぬから、どうぞ持つて行て下さんせいなア。

慶政　そりやほんまのことでござりまするか。

重井　何の嘘を云はうぞいな。

慶政　左樣ならば、お貰ひ申しますでござります。

ト懐ろより木綿の財布を出し、金を中へ入れ、首へかける。

重井　慶政さん、何れお禮はしますぞえ。

慶政　どう仕りまして、とんだ事をおつしやりますわえ。左樣なら花魁、私はモウお暇いたしまする。

ト慶政下手へ行き、草履に躓きばつたり轉ぶ。

重井　アヽあぶない、怪我をさしやんせぬか。

慶政　イエ、どこも痛めはいたしませぬ。（ト足の小指の爪をはがしたる思入。）
重井　や、こりや小指の爪を。
慶政　イエサ、夜はつまりましてござりますよ。
ト唄になり、氣に掛ける思入にて、紙にて指をまき階子の口へはひる、此の以前より下手に以前の八平治出で、樣子を窺ひ居て慶政の後を付けて階子の口へはひる。重の井思入あつて、
重井　あれで少しは心の落着き、あれを落した方には濟まねど、是も何ぞの廻り合せ、思はず手に入るあの百兩。（ト此時下手におなべ窺ひ居て、）
なべ　その百兩は、どこからお貰ひなされたえ。
重井　おなべどんとしたことが、藪から棒に、どこからでもよいではござんせぬか。
なべ　イヽエ、よくはござりませんよ、僅な金なら知らぬ事、百兩といふお金、出所の知れないことはござりますまい。
重井　なぜ其樣に詮議をしなさんす。
なべ　二階で百兩なくなつたからさ。
重井　えゝ。（トびつくり思入、此時下手にて、）

喜助
伊助　うしやあがれ〳〵。

ト流行唄になり、喜助、伊助おさんを引立て出來るを、およし重芝、重川、重花、捨ゼリフにて留め乍ら出て來る、後より以前の官太夫付き出來る、重の井此體を見て、

重井　や、そなたはおさん。（トぎつくり思入。）
さん　花魁、あやまつて下さんせいなア。
なべ　おしのつよい事を言やァがる餓鬼だ。まア旦那、此方へいらつしやい。
官太　年端も行かね小さな者を、あまり手荒い事をいたすなよ。（ト言ひ乍ら上下へ仕ふ。）
さし　旦那の御挨拶だから、もう大概にして上げなさんせ。
重川
重花　私たちもあやまるわいなア。
伊助　たとひどなたが何とおつしやつても、打ちやつちやおけませぬ。
重芝　それぢやと云つて打所でも惡く、もしもの事のあつた時に濟まぬ、それにまた證據のないことぢやござんせぬかいなア。
喜助　なに、證據のねえことがありますものか、此の餓鬼の懐から萠黄羅紗の旦那の財布、これが出たのが慥な證據。（トもえぎ羅紗の財布を出して見せ、）こいつが盗んだに、

兩人　違ひございませぬ。

さん　イエ〳〵私や存じませぬわいなア。

なべ　まだそんな強情を云ふか、それ、ぶんなぐつて早く言はしな。

喜助 伊助　承知しました。（トおさんを前へ引出し）サア、ぬかしやあがれ〳〵。

　　ト兩人しておさんを折檻する、おさん聲を上げて苦しむ、重の井これを見兼ねて、

重井　アヽこれ、可愛さうに其樣に打たずとも。（ト立掛るを、官太夫留めて）

官太　これさ重の井、捨ておきやれ、おぬしが遣ふおさんとやら、かばひ立をいたしたら、却て爲になるまいぞ。

重井　それぢやと云うて。

官太　ハテ、兎やかう申しなば疑ひが、

重井　え、

官太　まア打捨ておきやれといふに。（トきつと留める。）

なべ　それ、おさんめを。

伊助 喜助　合點だ。

重井　アヽコレ、待つて下さんせいなア。
なべ　アヽ、又留めなさるか。
重井　サア留めねばならぬは其金を、盗んだ者は外にござんす。
宮太　ムヽ、外に盗みし者があるとか、シテそれは何者だ。
重井　疑ひかゝりし、私でござんす。
宮太　何と。
重井　ふとした事の出來心で、私が頼んで盗ませたのぢやわいなア。
さん　イエ〳〵さうでは。（ト寄るな目で押へ、）
重井　アヽコレ、何にも云ふには及ばぬわいの。（トぢつと留める。）
よし　そんなら花魁、
女郎皆々　お前が金を。
重井　あいなア、私が頼んで取らせたわいなア。（トぢつと留めて思入。）
なべ　モシ旦那、私の鑑定通り、あきれたものではござりませぬか。
宮太　よもやと思つた重の井が、此の盗人のお職とは、ホンに人は知れねえものだ。

なべ　しかし御損はかけませぬ、枕さがしをしたからは、モウ内では使へませぬから、住替に出しまして、あなたへお金はさしあげます、何しろ二人乍ら此儘にしておいては、二階のしめしが出來ませぬから、其の餓鬼はお前方、重の井さんは私が折檻。

よし　そんならお前が、

皆々　花魁を。

なべ　折檻するは遣手の役、かう〳〵。

トおなべ重の井を引付け、きせるにてさん〳〵に打つ、喜助伊助はおさんを打つ、重の井おさん苦しむを見て、重芝はおなべを留め、重川重花は喜助、伊助を留め、

重芝　おなべどん、もう大概にして上げて下さんせいなア。

重川　可愛さうに、もう、堪忍してやらしやんせいなア。

なべ　エヽ、お前方の知つたことぢやない。

三人　退いて居なんせ〳〵。(ト留めるを構はず折檻する、およし氣の毒なる思入。)

よし　お氣の毒なは重の井さん、心がらとて此の責苦、旦那これではよもや花魁に、

官太　イヽヤ、愛想は盡きぬ。

なべ　エヽ、そんならこれでも。(ト重の井をつき放し、)

皆々　重の井さんを。

宮太　一旦武士が云ひ出すからは、是非共身請けせにやならぬ。然し持參の手附をば。(ト思入此時奥にて)

つな　イエ其お手附の百兩は、先程お請取り申しました。

宮太　アノ聲は。

皆々　おかみさん。(ト合方になり、以前のおつな出來り、)

つな　これは〳〵旦那樣、御免なされて下さりませ。(ト眞中へ住ふ。宮太夫心得ぬ思入にて、)

宮太　いやなに内儀、重の井が身請の手附、其方が受取りしとは。

つな　あなたからのお手附と、最前茶屋から金子百兩、慥に受取りましてござりまする。

よし　イエ〳〵何も私からは。

重井　渡す譯なき其のお金、どうも合點が。

つな　ハテ女郎子供と譬に云ふ、遊女のそなたが金の入譯、何の知らう樣がない、わからぬはお茶屋のお内儀、それなさつきあれ程お前から、慥に私が受取つたを、よもや忘れはなさるまいがな。

トおよしへ呑込ませる、およし合點の行かぬこなしにて、

よし　ほんにお渡し申し乍ら、此の混雜に取りまぎれ、私はさつぱり忘れましたが、流石は花菱屋のおかみさん、ようまアそれを忘れずに、まことに感心いたしましたわいな。

つな　足らはぬ乍ら女でも、軒を並べる江戸町で、指を折らるゝ花菱屋、遊女は元より百人からの、奉公人を遣ふからは、少しはしまりもござんせうが、多くの金を取扱へど、たとひ二分の金たりとも、やりとりは忘れはしませぬ、ましてや大事の重の井が、請出さるゝ手附金、それを忘れてよいものかいなア。

なべ　サア何だか、これではどぎまぎと、さつぱり譯が分らなくなつた。

つな　何も分らぬ事はない、お客に代つて手附の金、立てかへるのはお茶屋の役、手附が濟めば花魁も奉公人とは云ひ乍ら、年の明けたも同じこと、モウ、折檻はなりませぬぞ。

喜助　それではどんな、

兩人　事があつても。

つな　ハテ、手附が濟めば旦那のもの、疵でも付けては濟まぬわいな。

なべ　へえい。（ト控へる、官太夫思入あつて、）

官太　スリヤ内儀には重の井が、手附をいよ〳〵受取つたとな。

つな　たしかにそれは私が、請取りました上からは、あなた方に御損もなし、又重の井に悪い名も付けねば抱へし私も、肩身がひろうござります、あなたもお連れなさるのに、お心宜しうござりませう。

官太　しかしそれでは心が濟まねば、百兩代りに暫く是れを。（ト袱紗包みの香合を出す。）

つな　そりや何でござりまする。

官太　世にも稀なる香合なるわ。（ト重の井是れを見て、）

重井　やゝ、それは。（ト官太夫ちやつと懷中する、おつなは重の井を留めて、）

つな　イエ、女でこそあれ此家の主人、其の御心配には及びませぬ。

重井　慥にあれは。

ト又立掛るをおつな留める。此の時時の鐘鳴る。

つな　サア慥にあればモウ大引、あまり夜も更けますれば。

官太　座敷をかへて。（ト立上る。）

つな　今夜は御ゆるり。

重井　とは云へ。（ト官太夫の方へ寄るをおつな支へ、）

つな　アヽコレ。(ト重の井を下に置くを木の頭。)おたのしみなされませいなア。

ト此の仕組、靜かなる所作の切れにてよろしく、

幕

大切　田中慶政殺の場／仲之町敵討の場

〔役名〕=鷲塚官太夫、伊達の與作、鷲塚八平治、座頭慶政、山形屋義兵衞、地廻り駕籠。傾城重の井、花菱屋女房おつな、井筒屋女房およし、じねんじよのおさん、其他。〕

(田中慶政殺しの場)=本舞臺正面玉椿の生垣、上の方石の地藏、下手柳の立木、日覆より釣枝、總て田中田圃の體、時の鐘、雨車にて幕明く。と駕籠舁兩人○△先へ提灯をさげ、四ッ手を一人かつぎ、竹笠にて戻り駕籠のなりにて、上手より出る、花道より地廻り四人、一、二、三、四ひやかしのなりにて、相合傘下駄がけにて出る、はるか後より八平治尻端折り、腕まくり、頬冠り、大小はだしにて出來り、

捨〇 此雨で下谷迄けんこに極めたのを、やう〳〵ぐづ〵いて二朱取つた。

同△ あんな店者でなけりやあ、うめえ酒がのめねえ。

一 八や、三日月長屋の雛町といふ女を見たか。

一 御大層な名をくッ附けやがつたな。

三 手前ほぞを入れたか。

四 繩を巻いて研水をやつた。

ト捨ゼリフを云ひながら、兩方へ別れてはひる。八平治舞臺へ來り、

八平 よもや降らうとは思はなんだが、雨東風に替つたので、ばら〳〵やつて來やあがつた。そりやさうとあの慶政、どこで道が間違つたか、よもや先へ行きやあしまい、あいつが金を巻上げて、重の井を身請なし、兄貴に鼻をあかせにやならねえ。アヽこれ、雨やみをする所がねえ。（ト石地藏を見て、）幸ひ〳〵、地藏が笠を冠つて居る、石のことだから濡れてもよからう、ちつとの内貸して下せえ。

ト地藏の笠を取つて是を冠り、地藏の後ろへ隱れて居る、花道より慶政傘をさし杖をつき下駄がけにてさぐり〳〵出來り、

慶政　此の田中の田圃は降ると歩かれる所ぢやない、遠くとも田町を來ればよかつたッけ、爰はモウ何處であらう。(ト杖にてさぐりなでゝ見て)石の地藏樣があるが、よもや觀音の裏ではあるまい。何しろ爰でちよつと足を休めて行かう。(ト地藏の臺座へ腰をかけ)ア、花菱屋の重の井殿は傾城に似合ぬ氣質、弟與作が丹波にてねんごろにしたのも、同家中定之進が娘重の井、同じ名に外ならず心安うなつたが、それに付けても弟與作、何處にどうして居やうやら、此兄の與八郎は目しひゆゑに十二の年に家出して師匠を取り、名も慶政と改めて、見るかげもない揉療治、人並の身であるならば、父の敵を討たねばならぬが、討つ事ならぬ因果な身の上、現在敵は同家中、官太夫といふ事は、思ひがけなく此間、其夜父の供をした中間に廻り合ひ、慥にそれと聞いたゆゑ、どうぞして弟に此の事を知らせて討たせたいが、尋ぬる事も叶はぬ目しひ、伊達與三兵衛が惣領と、生れし甲斐もない身の果、口惜しい事ではある。

ト愁ひの思入あつて、

ア、入らざる此身の問はず語り、人にもれてはならぬこと、聞いでござつたは地藏樣、モシお地藏樣、必らず今の身の上話し、人に云つて下さりますな。(ト地藏の蔭にて)

八平　おれは云はぬが、われ云ふな。

慶政　ヤア。（ト慶政びつくりして飛びのき、）こりや、地藏樣が物をおつしやつたか知らぬ。

ト八平治出て、

八平　いかにも我は賽の河原の六道能化の地藏菩薩、子供の折より目しひとなりし、世にも因果な其方ゆゑ、今浮ませてやらう程に、懷中にある百兩の金子を我へ供へなば、未來は目明きにいたしてくれん、さすれば卽ち功德にて、親與三兵衞も浮み上り、百兩出して結緣いたせ。

慶政　はてさてこはい地藏樣、微妙のお聲に引きかへて、佛にあらぬ語音の殺伐。

八平　知れたことだ、其の尊體はうぬらにやあ、至つて祕佛の敵の片破れ、元は由留木の同家中、鷲塚八平治樣だ。

慶政　ヤ、、扨はおのれは八平治よな。

八平　いかにもおれは鷲塚が次男に生れた八平治、兄の勘當受けてから、諸所方々をへめぐつて、今では江戸の鳥越に、無刀流の道場開き、化けた其名も幸崎甚內、けふ花菱屋に遊んで居てちらりと聞いた地獄耳、鬼の樣だが重の井が、我に渡した百兩の金を取らうと付いて來たのだ、今では緣も切れたゆゑ、あかの他人も同然だが、親は泣寄り兄貴に代り、二重三重積む石より、惡事を重ねた八平次が、とんだ地藏の引導で賽の河原や刀の引導、むごい仕事をしにやあならねえ。

慶政　スリヤ花菱屋で重の井殿から、受取つて來た此の金を、知つて後から付いて來たとか、エ、何で目しひとなつたるか、此目があいたら敵の片割れ、引とらへて詮議せんもの、チエ、口惜しい。

八平　まだ／＼我に八平治が云つて聞せる事がある、花菱屋の重の井は、弟與作が密通した、定之進が娘重の井だ。（ト慶政びつくりなし、）

慶政　ヤ、スリヤやつぱり重の井とか、同じ名なれば丹波と江戶、よもやと思つて聞かざりしがさすれば尋ねる弟の行方も慥に知つて居ようもの、丹波とも與作とも聞かぬは矢張り是れも因果、とくにもそれと知つたなら、與作が兄と名乘らうもの、ア、殘り多い事いたしたなア。

八平　べらぼうめ、あつちも敵を尋ぬる身で、うかつに昔を話すものか、與作は今以て以前の緣で、重の井がみつぎを受けてかすかな暮し、二階はせかれて居るけれど、けふも忍んで來た樣子だ。

慶政　スリヤ弟はやつぱり江戶にて、けふも二階へ見えしとか。さう聞く上は、とつて返して。

ト慶政ずつと立つて駈出すを、八平治いう／＼と刀をぬいて一ト太刀切る、慶政苦しみ、八平治の足に取り付き、

こりや、どうでもおれを殺すのぢやな。

八平　大事を聞いた其上に、首にかけたる百兩は、ちつと此方に入用だ。

慶政　殺さば殺せ、敵の弟の八平治、安穏で置かうか。

ト八平治の向臑に喰付く、八平治苦しみ乍ら足にて蹴る、慶政下手にどつかとなり、八平治上手に刀を振上げ、きつと見得。是より本調子、凄き合方、砧の音になり、慶政杖と傘をかせにしてめくら打に打つて廻るを、なぶり切りに切倒し、懐ろの金を取りにつたり思入、此時人音するゆゑ八平治元の地藏の蔭へかくれる。合方、時の鐘になり、花道より義兵衛、傘をすぼめて肩にかつぎ、深田と記せし銅の小田原を下げ、出來り花道にて、

義兵　いゝあんばいに雨はやんだが、あの慶政は人を待たしておき乍ら、あんまり歸りが遲いから、檢校も案じるしおれも氣が氣ぢやあねえから、迎ひに出かけて來たが、何でもまだ花菱屋に違へねえ、いめえましい坊主だ。(トつぶやき乍ら舞臺へ來り、慶政の死骸に行當り、)エヽ、びつくりした。何だ、生醉か。(ト提灯にてよく見て、)ヤヽ、こりや慶政が、切殺されて。サア／＼、こりやとんだ事が始まつた。

ト云ひ乍ら懐をさぐり見て、

ハヽア、財布のないのは、物どりだな。

ト此内八平治そろ／＼前へ出て、下へ置いたる提灯を蹴飛ばす、義兵衛びつくりしてとびのき、扨は

といふ思入にて、行掛る八平治の腰を持つて引戻す。八平治其手を拂ひのけ、双方分れてきつと見得、是より忍び三重、時の鐘になり、兩人よろしく立廻りあつて、八平治は脱れて花道迄行く、義兵衞すかし見て、

どろぼう。

ト八平治手早く石を取つて礫に打つ、義兵衞よけるはずみに、のり紅にすべつて尻餅をつく、八平治は手拭をふるふ。双方見合つて道具替りの知せ、義兵衞は腰をさすり乍ら向うを見送る、八平治は逸散に向うへはひる、此のとたんよろしく三重、時の鐘の送りにて、道具廻る。

(重の井部屋の場)――本舞臺元の重の井の部屋、爰に重の井鏡臺にもたれ居る、おさん背中をさすつて居る、時の鐘にて道具留る。と時の鐘打上げ、竹本連中の出語りになり、

〽更渡る遠寺の鐘の無常にも、あはれ二人が身の上を、思ひやるせも泣顔を隱すおさんがいたいけに、

さん　モシ花魁、まだ痛うござんすかえ。

重井　イヤ〳〵わしはさのみではなけれど、そなたこそ小さなりで、情を知らぬ人達に、あの様に打

たれたゆゑ、さぞ痛かつたであらう、堪忍しや〱。

〽背撫でさすれば涙ぐみ、

さん　わしやどの様に打たれても叩かれても大事ないから、なぜどろぼうにして下さんせぬ、それが悲しうござるわいの。

〽悲しうござると泣きければ、けなげなものと引寄せて、（ト重の井おさんを引寄せ、）

重井　オヽよう云うてたもつた〱、慶政殿の難儀な場所へ拾うたと云やつた金、譯があらうと思うたれど、こちの難儀を引受けさんした慶政殿、見るに忍びず戻したも、斯うなる事は兼ねての覺悟わしが遣うた金ぢやもの、何のそなたの科にせう、そして我身どういふ譯で、あの金を取りやつたぞ。

さん　アイさつきお前が金がほしいと、いかう苦勞にしなさるゆゑ、盗みするのは惡いと知れど、お前に金が上げたさに、それでツイ取りました。

〽幼な心のせつなさに、重の井はおろ〱涙、

重井　そんならおさんあのわが身は、わしがお金の入る事を聞いて親切に、わしにお金を遣らうとて、それで盗みをしやつたとか。まだまァ目見得に來やつてから、二三日立つか立たぬのに、わしを

親か何ぞの様に、慕ふはどうした縁なるか、可愛い事ではあるわいな。

〽可愛のものやと身に添へて、おさんが顔を打守れば、

トおさんの顔をつく〴〵見て愁ひの思入。

さん　花魁、お前を慕ふのは、わしを生んだかゝさんが、重の井と云ふのに、お前が同じ重の井ゆゑ、わしやほんのかゝさんと思ひ、誰よりお前がいとしうござる。

重井　そんならそなたの母親も、重の井と云うたとか、同じ名のわしゆゑに、子供心に慕ふのは、そりや尤もぢや〳〵わいなう。したがコレおさん、わしが頼んであの金を、取らせたといふたれば、今日はそなたの科にはならぬが、此後決してどのやうに、ほしい物があらうとも、人の物はとりやんなや。

さん　アイ〳〵、お前に上げうと思つたゆゑ、それでお金は取つたれど、何で外の物を取りませう。

重井　おゝさうぢや〳〵、そなたは利口者ゆゑ、聞きわけが早いわいの。

〽やさしき詞にしたはしく、

さん　モシ花魁、さつき戸棚にはひつて居た、與作さんといふ人は、ありやお前の何ぢやえ。

重井　おゝ、あれはわしが夫ぢやわいな。

さん　〽云ふにおさんは飛立つ嬉しさ、
さん　そんならお前は、かゝ様ぢや〳〵
重井　エ、何と言やる。
さん　かゝ様、逢ひたかつた〳〵。
〽逢ひたかつたと取付けば、心得難くおさんをつきのけ、
　　トおさん重の井へしがみ付くをふりはなし、
重井　アヽコレおさん、待ちや〳〵、成程與作殿とわしが仲に子はあつたれど月足らず、顔も見せで
別れたもの、どうして育つて居やうはない、さうしてそなたの在所といふは、伊勢街道とやらぢ
やないか。
さん　アイわしが在所は伊勢街道の、横田川といふ所、とゝさんもなしかゝさんもなし、彦兵衛といふ
人に育てられたが、五つの時其彦兵衛が、此守りが母様ぢやというて死にました。
〽覺えある名に重の井は、猶更不審晴れやらず、
重井　横田川の彦兵衛なら、以前屋敷で使うた者、與作さんと此のわしが屋敷を出た折其者の世話でや
やをば産み落し、其後二人はそこを立退き音信もせざりしが、そんならもしや。

〽もしやとおさんが掛守り、紐をとく／＼中改め、

ト おさんの御守りをとり、中より守りを取り出し見て、

安産の守り、オヽこりやわしが懷胎の其の折受けし守にて、上包みに自筆にて、安産の守りと書き、産毛を添へて入れおきしが、此守りがあるからは、どうやら我子の樣なれど、シテとゝさんの名は、何と。

さん　アイ、とゝさんの名は、由留木の御家來、伊達の與作。

〽聞くに重の井びつくりなし、

重井　オヽそれでは違はぬわしが娘、幼い折に別れたが、是程迄に成人せうとは知らなんだ／＼。コレそなたの母は、わしぢやわいの。

さん　そんならほんのかゝ樣か。

重井　娘か。

兩人　逢ひたかつた／＼。

〽互ひにひしと抱き付き八歲の別れ親と子が嬉し淚ぞ誠なる。〽おさんは泣く／＼母に向ひ

ト 兩人よろしくあつて、おさん重の井に向ひ、

さん　お前の娘に逢ひがないから、どうぞこれからとゝさんと、一緒に暮して下さりませ、わしは又爰の内で、お前の樣な花魁に成つてとゝさんかゝさんを養ひませう、早うとゝさんに逢ひたうござる、どうぞ逢はして下されいの。

重井　ヲヽ道理ぢや尤もぢや、產落したばつかりに、父も母もあり乍ら、是程成人なす迄に、ついに一度も逢はぬもの。

〽親なればこそ子なればこそ、慕はいで何とせう。

コレ、よう顏見せてたも。

〽母はこんなに產まぬのに、

何ぼみなし兒なればとて、

〽手足は山のこけ猿同然世が世の時であるならば、お乳やめのとで育てんもの。

現在娘は禿奉公、母は衣裳を着かざつて、

〽綾や錦のおきふしもつゞれに劣るうき勤め、これが由留木の御家來にて、伊達の與三兵衛樣ともいふ程な、嫁よ孫よと云はれたが、

父は流浪の其日ぐらし、母はいやしい勤め奉公、其娘迄身を賣るとは。

〽如何なる宿世の因果ぞや。
兩親共にあり乍ら、はやく盛りをあまやかさず、禿の苦勞をさせるのが、
〽いたはしやと抱きしめ〳〵、あたり憚る忍び泣き、
ト此内重の井おさんを相手によろしくある。
〽始終を一間に立聞く女房、もらひ涙に袖しぼる。
ト上手屋體の内に、おつな窺ひ居て、よろしく愁ひの思入。

つな　其苦勞はさせぬ程に、安心して居なさんせいなア。
〽云ひつゝ出る女房に、（ト上手屋體よりおつな出來り、）

重井　思ひがけないおかみさん、そんなら今の樣子をば。

つな　隣り座敷で殘らず聞き、貰ひ涙をこぼしましたわいな。（トよき所へ住ふ。）

重井　そこにお出でなさんすとも、知らずに云ひし身の素性、親夫の恥なれば、人に云うて下さりまするな。

つな　何の人に云はうぞいの、よし又これが洩れたとて恥しい事はない、人は七轉び八起きとやら浮沈みはある習ひ、そなた一人女郎になりうき勤めをするならば、恥かしくもあらうけれど、素性正

しい其人が、五丁町の其内には幾人あるか知れぬわいな。元遊女の始まりは、八島へ落ちし平家の官女が、一夜流れの勤めをせしと何かの本にありました、我田へ水を引く様だが、何も恥かしい事はない、しかし官女の流れの末は、うきふししげき川竹の夜毎に變る客の數、泣いて嬉しく笑うてつらき、苦界の苦勞をのがるゝ様、早う縁ある妙見様の開運出世の此のお守り、是を二人にやりませう。

〽内は何ともしら紙の包みし守さし出せば、重の井は開き見て、

トおつな懐から紙に包みし年季證文を出してやる、重の井開き見て、

重井 ヤ、こりやお守りと思ひの外、わたしら二人が年季證文、何ゆゑこれを。

〽不審立つれば女房が、俄に威儀を改めて、重の井が前に手をつかへ、

トおつな思入あつて、下手へ來り手をつかへ、

つな 其不審は御尤も乍ら、其の證文を上げねばならぬ此身の素性一通り、お聞きなされて下さりませ。

ト對面三重の様な合方になり、

只今お身の上の一部始終承つて見まするると、元私は御家來筋、以前あなたのお屋敷に若黨奉公勤めて居りし、沓掛が八藏の妹にて小萬と申すは私の事、若い折のいたづらから、終に此身

は飯盛奉公、勤めて居りし其内に、縁でがな此家の主人伊勢參宮の其折に酒の相手の旅枕、一ト夜が二タ夜と逗留の內に身請の相談きまり、此の江戶へ下れば間もなく夫はみまかり、それより後家を立通し、今では遊女屋の女主人、何不足はなけれども、心に掛るは兄八藏、病死の砌吳々もあなた方のお身の上、何れにお出で遊ばすやら、何處ぞお在所聞出し、以前の御恩が送りたいと身貧な內でもそれのみ苦勞と、云ひつゞけてみまかりしゆゑ、どうぞ兄に成り代り御恩報じがしたけれど、御行方知れねば詮方なう、打過ぎしに計らずも、只今聞きしお身の素性、聞いて嬉しさ又悲しさ、勿體ない今迄は神ならぬ身の露知らず、與作樣とて二階をとめ御苦勞させしのみならず、重の井のおさんのとお名さへも呼び捨に、主人の威光であなた方を、遣ひましたが身のお詫、是で御免なされて下さりませ

ト泪ながらに詫ければ一部始終を重の井が、聞いて嬉しさいぶかしさ夢に夢見し心地にて、おつな思入にて云ふ、重の井是を聞き驚きしこなしにて、

重井　何其の云譯に及ばうぞ、ほんに緣といふものは、いづくにあるやら知れぬもの、思ひがけない八藏の妹とは知らざりしが、ようまア無事で居やつたなう。

つな　あなた樣にもお變りなう。ほんにまアどうやらお初にお目もじした、心持がいたしますわいなア。

〽うつて替りし主從が話しの中に女房が、
それに付きまして承り度きは、最前鷲様が私へ何やら袱紗に包みしもの渡さうとなされしを、御覧になるとあなたには、俄に様子の替りましたは、どういふ譯でござりまする。

重井　サアあの品こそ覺えある、由留木の重寶胡蝶の香合、舅與三兵衛様お預かりの品なりしが、お討たれなされし砌より、行方の知れぬあの香合。

つな　そんならもしや、敵といふは。

重井　慥に鷲塚官太夫。

つな　アモシ壁に耳、たゞ何事もおんみつに。

〽囁く折しもあわたゞしく、やり手のおなべ走り來て、

ト下手よりおなべ出で、

なべ　ヲヽおかみさん、爰にお出でなさいましたか、何やら鷲様が急にお目に掛りたいと、おつしやつてゞござりますから、早うおいでなされませ。

つな　なに、鷲様があの私に。

なべ　サア花魁を身請の事に就いての様子、早ういて上げて下さんせ。

つな　そんならちよつと。(ト立掛る。)
重井　アコレ、必ずともに、今の事を。
つな　ハテ呑込んで居りますわいな。
重井　どうぞ此事、與作さんへも。

トおつなに知らせてやつてくれろといふ思入、おなべ思入あつて、

なべ　お知らせ申しに私がちよつと。(ト立かゝるをおつなとめて、)
つな　イヤ間夫の使ひは内證事、遣手のそなたは知らぬ顔して。

トちよつと立廻つて、おなべをきつと捉へる。

重井　そんなら私がこつそりと、
つな　サア忍んでそつと鷲さんへ、身のあかつきの談合も。
重井　間夫とよそ目に、
なべ　見せても私が、
つな　ハテ戀の邪魔せず、まアぢつとして。(トまた立廻つておなべを押へる。)
重井　ぬしの云ふまゝ。

つな　ハテ、殺し文句で、（トおなべ又立掛るを、下に置くを、木の頭）
やらしやんせいな。

ト土手の提灯の唄にて、よろしく此の道具廻る。

（仲之町敵討の場）――本舞臺正面眞中に江戸町の門向ふ奥深に、女郎屋の南側を見たる灯入りの遠見、上下にこけら葺の二階家、手摺り除をつけ、前側一面に戸を建て上緣を上げ、總て仲之町夜更の體、爰に八平治返し前のなり、四人地廻りの拵へにて立掛り、時の鐘にて道具留る。

○　モシ鳥越の先生、わつち共へ頼みとは、

四人　何でござえます。

八平　其頼みといふは外の事でもねえ、花菱屋の重の井を、おれが身請をしようと思つて、重の井が間夫の與作が兄慶政といふ座頭を殺して、百兩の金をふんだくつたが、重の井めは與作があるから所詮おれの自由にやならねえ、そこでわいらに頼みといふは、與作の野郎を喧嘩仕掛けで、打殺して貰ひてえのだ。

○　高が女の遺恨位るで、殺すのも殺生ぢやござりませぬか。

八平　イヤさうでねえ、あいつが親の與三兵衞といふ奴を、兄貴と二人して殺したから、生しておいちや寢ざめが惡い、それで實は賴むのだ。

△　さういふ譯なら承知しました、あすの晩でも見かけたら。

□　行合ひ喧嘩をふつかけて、袋叩きに叩きしめ、

◎　息の根留める前祝ひに、今先生からお貰ひ申した、あの金で、

○　はりまやで一杯やらうか。

四人　それぢやあ先生、

八平　きつと賴んだぞよ。

四人　合點でございます。

ト四人下手へはひる、八平治上の方へ行きかけるを、用水桶の蔭より返し前の與作、大小をさし、つか〳〵と出て八平治をつき廻し、

與作　親兄の敵、八平治覺悟なせ。（トきつと思入、八平治びつくりなし、）

八平　ヤ、思ひがけなき我は與作、そんなら今の樣子をば。

與作　殘らず聞いたる汝が惡事、サア尋常に勝負なせ。（ト詰寄る、八平治思入あつて、）

八平　イヤ惡の報いは早いものだ、慶政坊主が問はず語り、聞いてこつちも疵持つ足、殺して間もなく其通り、我に惡事を聞かれるとは、是も亡者のする事と觀念をして今迄の、惡事は殘らず爰で聞かせる。いかにもわれが親の與三兵衞は、兄友太夫と二人して殺したに違ひねえ、其敵の片破れゆゑ、うぬが兄の慶政を殺して取つた金を百兩、利息に返す刃金の引導、手前も一緒に冥土へやるから覺悟しろ。

與作　何をこしやくな。

　　ト八平治拔き掛けるを、與作きつと留め、双方見得、此の時上手にて、

大勢　狼藉者々々

　　ト上下より茶屋廻りの若い者五丁町と記せし臺提灯、鐵棒など持ち出來り、

　それ、ふんじばれ〳〵。（トわや〳〵云ふ。）

與作　アヽイヤ、狼藉ならぬ敵討、お手前達警固して下され。

六人　敵討なら相手の奴を、逃さぬやうに。

皆々　警固しろ〳〵。（ト三人づゝ左右へ別れ、鐵棒をついて前後を圍ふ。）

八平　なに、ちよこざいな。

ト與作に切つて掛るをつき廻し、與作も刀をぬきちよつと立廻つてきつと見得、是より二挺鼓の鳴物になり、兩人よろしく立廻りの內、與作八平治に切り立てられ危ふくなる。

皆々　ソレ、加勢しろ〳〵。

ト鐵棒にて八平治へ打つて掛る、此の立廻りよろしく、トヾ八平治與作に一刀切られ、どうとなる。

そりや切つた〳〵。

ト六人は上下へ逃げてはひる。八平治起き直つて與作へ切つて掛るをつきまはすはずみに、百兩包みを落す、與作手早く取上げ見て、

與作　ヤ、こりやこれ、御家の紛失金。

八平　何を。

ト八平治又切つて掛る、與作ちよつと立廻つて八平治を切倒し、乘掛つて止めをさし、ホツと思入、此時上手にて、

よし　鷲さん、おあぶなうござんすぞえ。

ト此聲を聞き、與作きつとなつて立上り、思入あつて刀の血糊を拭ひ鞘へ納め、用水桶の水を手にすくつて飲み窺ひ居る、靜なる合方になり、上手より官太夫駄下駄がけ、酒に醉ひたるこなしにて、お

よしの肩へ掛り出て、下の方へ行きかゝるを見て、與作ずつと出るを、

アヽモシ、まだ早い〳〵。

官太 なに、早いとは何が早い。

よし サアあの早いと申したは、ヲヽそれ〳〵、思つたよりは今夜は餘程、お早うございますわいな。

官太 それなれば、もつと重の井のそばに居ればよかつた。

よし まづ一旦私共迄入らつしやいまして、又お出戻りになされませいなア。

ト又與作出掛るを、およしかぶりをふり、

私がよい時分に、合圖をいたします程にな。

ト與作と官太夫兩方へかけて云ひ、

またお出でなされませいなア。

官太 然らば、左樣いたさうかえ。

よし アヽモシ、おあぶなうございまする、いつにないあなた大層に御酩酊でございまするが、御懐中物が心遣ひでございまするから、こちらへお出しなされませいなア。

官太 そんならそちへ預けるぞ。（ト鼻紙入をおよしへ渡す、およし思入あつて、）

よし　モシ旦那、まだ何か御懐中なされてゞはござりませぬか。

官太　エ、ホンニ大事の物があつた、是を落したら大變。（ト云ひ乍ら、件の香合を出し、）是はしつかりと預けたぞ。

よし　慥にお預かり申しました。

ト與作の方へちよつと思入、與作そつと寄つて、件の香合を受取り、官太夫へ立掛るを、

アモシ。

官太　何ぢや。

よし　とんだ忘れ物をいたしました、ちよつと取つて參ります程に、あなたそろ〳〵と入らつしやつて下さりませ。

官太　早ういつて參るがよい。

よし　直ぐでござりますわいなア。

ト提灯の灯をそつと吹消し、上手へはひる。官太夫はよろ〳〵し乍ら、

官太　月もろともに。

ト謠をうたひ乍ら、花道の方へ行きかけるを、與作先に立ちふさがり、

與作　鷲塚。

宮太　ヤ、

與作　香合慥に請取つた。

　ト宮太夫見て、

宮太　南無三、それを、

　トよろを與作きつと留め、

與作　御家の重寳胡蝶の香合、所持なす汝が惡事の一々、最前弟八平治を討取る砌りに殘らず聞いた、最早叶はぬ宮太夫、敵と名乘つて勝負せよ。

宮太　スリヤ弟八平治は、汝が爲に討たれしとな、又それがしが惡事迄、知つたとあれば云ふに及ばぬいかにも我には敵の鷲塚、しかし弟が追善に此場に於て返り討だ、覺悟なせ。

與作　何をこしやくな。

宮太　イザ、

與作　イザ、

兩人　イザ〳〵〳〵。

ト双方拔合せ、是より又二挺鼓の鳴物になり、兩人花々しき立廻りあつて、双方よろしく見得、

頭取　まづ今日は是ぎり。

ト目出度打出し。

傾城重の井（終り）

（附錄）主なる興行年表

五十三次

年時	座名	名題／役割	權八	怪猫	紫藏	正作	おしづ	宗三郎	お袖	助七
明治二十年七月	中村座	五十三驛扇宿附（つぎあふぎしゆくづけ）	尾上菊五郎	尾上菊五郎	尾上菊五郎	中村福助	中村福助	坂東家橘	嵐璃幸	坂東家橘
明治三十年二月	歌舞伎座	五十三驛扇宿附（つぎあふぎしゆくづけ）	なし	尾上菊五郎	尾上菊五郎	尾上松助	尾上榮三郎	尾上菊之助	尾上榮三郎	なし
明治三十六年七月	市村座	五十三驛旅日記（つぎたびにつき）	澤村訥子	中村政次郎	實川延三郎	中村福助	中村芝若	澤村訥升	中村芝若	中村政次郎
明治三十二年九月	東京座	東都登五十三次（あづまのぼりつぎ）	なし	實川延二郎	實川延二郎	中村成若	尾上榮次郎	片岡當丈	不明	なし
大正三年二月	本鄉座	岡崎猫（をかざきのねこ）	なし	市川段四郎	片岡仁左衞門	市川猿之助	市川門之助	市川左喜之助	中村芝琴	なし
大正九年五月	市村座	五十三驛扇宿附（つぎあふぎしゆくづけ）	大谷友右衞門	尾上梅幸	尾上菊五郎	中村吉右衞門	市川米升	坂東三津五郎	中村時藏	なし

茶臼山

年時	明治十三年十一月	明治二十八年十一月	明治四十二年五月	大正六年十一月
座名	新富座	歌舞伎座	演伎座	帝國劇場
名題／役割	茶臼山凱歌陣立（ちやうすやまがいかのぢんだて）	大坂陣諸家記錄（おほさかぢんしよけのきろく）	茶臼山凱歌陣立（ちやうすやまがいかのぢんだて）	茶臼山凱歌陣立（ちやうすやまがいかのぢんだて）
家康	市川團十郎	市川團十郎	―	―
宮内局	市川團十郎	市川團十郎	市川女寅	尾上梅幸
重成	尾上菊五郎	市川新藏	片岡十藏	澤村宗十郎
又兵衛	市川左團次	市川猿之助	片岡十藏	澤村長十郎
秀頼	坂東家橘	市川染五郎	―	―
幸村	市川團十郎	―	市川九團次	―
淀君	岩井半四郎	中村富十郎	實川延太郎	澤村宗之助
大助	市川小團次	―	市川蝠次郎	―

金看板

年時	明治十六年四月	明治二十五年三月	明治四十一年四月	大正八年一月
座名	新富座	須花座	明治座	明治座
名題／役割	金看板侠客本店（きんかんばんたてしのほんだな）	金看板侠客顏寄（きんかんばんたてしのかほよせ）	金看板侠客本店（きんかんばんたてしのほんだな）	金看板侠客本店（きんかんばんたてしのほんだな）
甚五郎	市川團十郎	片岡我當	市川小團次	市川中車
おあさ	市川團十郎	市川升若	市川莚女	市川中車
久藏	市川左團次	市川左團次	市川左團次	市川左團次
おてふ	尾上多賀之丞	市川升若	市川女寅	坂東秀調
およね	中村福助	市川米藏	市川莚若	市川松蔦
金次郎	坂東家橘	―	中村又五郎	市川壽美藏
おはな	澤村源之助	澤村源平	中村時藏	市川松蔦
大五郎	中村芝翫	中村壽三郎	中村歌六	嵐吉三郎

年時	座名	名題	景清	三保谷
文久元年九月	市村座	鬼一法眼三略巻	河原崎權十郎	中村芝翫
明治七年十月	守田座	宇都宮紅葉釣衾	坂東彦三郎	中村翫雀
明治二十八年十月	明治座	一谷嫩軍記	市川團十郎	市川左團次
明治四十年十一月	市村座	錣引	尾上榮三郎	片岡十藏
大正元年九月	市村座	錣引	尾上榮三郎	坂東三津五郎
大正三年九月	本郷座	錣引	堀越福三郎	市川左團次
大正四年十二月	帝國劇場	錣引	松本幸四郎	澤村宗之助

傾城重の井

年時	座名	名題／役割	重の井	與作	慶政	官太夫	八平治	おつな	義兵衛	おさん
明治元年二月	守田座	染分千鳥江戸褄	澤村田之助	澤村訥升	澤村訥升	中村芝翫	市川九藏	尾上菊次郎	坂東太郎	岩井松次郎
明治二十四年二月	市村座	染引花街江戸褄	中村福助	市川小團次	市川小團次	中村壽三郎	市川左團次	坂東秀調	市川荒次郎	坂東八十助

明治三十六年二月	東京座	染分千鳥江戸褄（そめわけてちどりのえどづま）	中村芝翫	市川染五郎	市川猿之助	尾上松助	片岡市藏	市川女寅	尾上幸藏	—

『淺間山噴火』及び『曾我の初夢には』再演なし。

大正十五年十月二十三日印刷
大正十五年十月二十六日發行

『默阿彌全集第二十六卷』

非賣品

著作權者印

補修　河竹糸女

校訂編纂者　河竹繁俊

發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地　和田利彦

印刷者　東京市小石川區諏訪町五十六番地　堀江關武

印刷所　東京市小石川區諏訪町五十六番地　常磐印刷所

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地　春陽堂



